

# ギフト

龍翠

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なのはたちのクラスメイトの主人公がマテリアルズと出会う。ただそれだけのお話。

特別な能力も魔力もないただの一般人がマテリアルズといちやこらするだけのお話。本当にそれだけです。伏線？ 展開？ そんなものはない。ただマテリアルズが書きただけだ！ 特にシユテルが！ シユテルと！ シユテるんと！

オリ主ものなのでその点に嫌悪感を抱く方は回れ右をしていただければと思います。また、オリ主ですがいわゆる神様転生ではなく、チート能力もありません。大人びた平凡な一般人を意識しています。意識しているだけです。ついでに、原作キャラはできるだけ性格を崩さないようにしています。崩れてしまう時もあるかもしれませんが。この

点は私の文章構成の問題です。ごめんなさい。

あと一つだけ嘘ついています。魔力はないけど特別な出自があります。

この小説の形をとった駄文は自サイトとピクシブでのマルチ投稿となっております。ちなみに自サイトでは夢小説の形式を取っていたりもします。

この作品にギアーズは出てきません。ギアーズが出てこなかったif世界だ思ってください。管理局と協力して解決して、恩返しに一時的に管理局に協力している、そんな感じに思っただけだと。

感想は泣いて喜びます。批判でも構いません。直せるところは直していきたいです。

2014/2/8 完結しました。

2014/3/3 後日談を投下開始。月一で連載できればいいなあ。

# 目次

## Chapter 0

第一話	出会い (前編)	1
第二話	出会い (後編)	17
第三話	食事	43
第四話	お弁当	70
第五話	雨のち晴れ	80
第六話	風邪	96
第七話	ヒーローショー	107
第八話	来訪	118
第九話	読書	131
第十話	縛鎖	142
第十一話	ハンバーグ	162

第十二話	なのは	173
第十三話	フェイト	184
第十四話	端午の節句	196
第十五話	はやて	208
第十六話	五月雨	220
第十七話	労働	231
第十八話	七夕	242
第十九話	里帰り	254
第二十話	真実	266
第二十一話	デパート	285
第二十二話	海	297
第二十三話	鍵	308
第二十四話	花火大会	319

第二十五話	お出かけ	331
第二十六話	花火	342
第二十七話	マテリアルズ	354
第二十八話	心	373
第二十九話	因果	380
第三十話	黄昏	394
第三十話B	黎明	410
プロトタイプ		
第一話	殲滅者	434
第二話	道	444
第三話	意思	455
第四話	残滓	468
第五話	星光	476

chapter 1	宿題	501
	第一話	511
	おはぎ	521
	第二話	532
	ユ一ノ	542
	第三話	549
	台風	561
	第四話	576
	月見	590
	第五話	602
chapter 2		
	ハロウィン	624

第一話	636
クリスマス(特別編)	648
第二話	658
日なたぼっこ	669
第三話	677
紅葉狩り	686
第四話	694
スキー	705
第五話	721
Chapter 3	
元旦	740
節分	754
バレンタイン	766

雛祭り	779
ホワイトデー	790
第一話	804
第二話	814
第三話	825
第四話	838
第五話	851
エピローグ	870
Chapter 00	
邂逅(前編)	879
邂逅(後編)	894
出立(前編)	911
出立(シユテル)	925

出立（レヴィ）	――
出立（ディアーチエ）	――
出立（後編）	――
銭湯	――
誕生日	――
模擬戦	――
妄想	――
悪夢	――
サンタクロース	――
体験入学（前編）	――
体験入学（中編）	――
体験入学（後編）	――
バリアジャケット	――

112711121095108110731059104610331008 996 974 955 941

パスト  
――  
ギフト  
――

11601134





# chapter 0

## 第一話 出会い（前編）

もしこの世界に魔法があるのなら。そんな非科学的なことを想像しない子供はいないだろう。誰もがそんな夢を見て、胸を躍らせる。夢を、希望を溢れさせた瞳で。

——くだらない。

海鳴市の裏道にある小さな書店で、少年は小さな声で毒づいた。初めて見る雑誌のその文章を読んで、鼻で笑う。

短い黒髪に黒目という、典型的な日本人の男の子だ。私立聖祥大学付属小学校に通う四年生。放課後にこの書店に立ち寄るのが少年の日課になっている。

名前は西崎秀一。親しい友人からはシユウと呼ばれている。

シユウは雑誌を閉じると、丁寧に本棚にしまった。何かおもしろい本がないかと、店の奥へと入っていく。

本棚が壁一面、それと店内に三列しかない小さな書店だ。だが地下に倉庫のようなものがあるらしく、週に一回は全ての本が何かしらの本と入れ替わっている。ほとんどが少し古い本だが、暇つぶしにはちょうどいい場所だ。

端の本棚を隅から隅までゆっくり見て、一度最奥のカウンターにたどり着く。店主の老人と目が合い、会釈する。老人は朗らかに笑うと、小さく手を振ってきた。あまり本を買うことがないのに、なぜかこの店主には気に入られている。

店主から視線を外し、次の本棚へ。しかし、シユウの視線が本棚に行くことはなかった。

「……あれ？」

どこかで見覚えのある少女がそこにいた。黒を基調とした服を着て、本棚を難しい顔をして眺めている。どこで見たかなと首を傾げて、すぐに思い当たった。

クラスメイトの高町なのはだ。だが確かに顔はうり二つだが、髪型が違う。今日学校が終わってから髪を切ったという可能性もあるが、今更短くするとは思えない。

少年の知る高町なのは、小さなツインテールのような髪型だ。対する目の前の少女は、ショートヘア。顔は同じでも別人と見た方がいいだろう。

——双子かな？ 聞いたことないけど。

別段親しいわけでもないのに気にする必要はないのだが、なぜか声をかけてみたくなった。とりあえず確かめてみよう、そう思って少女に近づき、口を開く。

「高町さん？」

返事はない。反応すらない。眉すらぴくりとも動かさず、ただただ本棚を睨み続けて

いる。

「なのはさん？」

呼び方を変えてみると、反応があつた。少女が顔をシユウに向け、しばらくシユウのことを観察する。やがて少女の口から出た言葉は、

「人違いです」

そんな短い言葉だった。だが、声色はなのはとよく似ている。もつとも、なのはの声もあまり聞いたことはないのだが。

「やっぱり違うんだね。よく似ているね。双子？」

少女が小さく首を振る。再び本棚へと視線を戻しながら、

「違います。知り合いではありませんが、ナノハと血縁関係はありません」

「へえ……。じゃあやっぱり、なのはのことは知ってるんだね」

「……………。はい」

少女の表情が少しだけ渋いものになった。シユウの質問が答えを誘導したものだとか察したらしい。

「それにしても、よく似てるね」

「……………」

返答はなし。反応すらしなくなった。どうやら警戒されてしまったらしい。シユウ

は苦笑すると、少女が見ている本棚へと視線を送る。ミステリー小説が並んでいるコーナーだ。

「何か探してるの？ よければ手伝うけど」

少女はシユウの顔を一瞥して、わずかに顔を伏せる。何かを考えていたのだろうか、すぐに顔を上げると、ではお願いしますという答えが返ってきた。

「何の本？」

「少し古い小説らしいのですが……」

そう前置きして少女が答えたタイトルは、確かに古いものだった。十年ほど前に出版されたものだ。つい先週にそのタイトルを見て、シユウ自身もここで読みつけた記憶がある。

一週間前。つまりは、すでに入れ替えられている可能性の方が高い。

「おもしろいと聞いて探していたのですが、どこの書店にもなくて。ここで見かけたという話を聞いたので、探しに来たのです」

「なるほど。でも、多分探しても見つからないと思うよ」

「そうですか。売れてしまったのなら仕方ありません。他を探します」

少女が無表情で答え、出口へときびぎすを返す。シユウはそれを慌てて呼び止めると、振り返った少女に笑いかける。

「大丈夫。多分在庫はあるから。ちよつと来て」

怪訝そうに眉をひそめる少女を連れて、シユウは店主の方へと向かう。すぐに二人に気づいた店主が、シユウと少女を見て目を丸くした。

「なんだ、知り合いだったのか。女の子の方はあまり見ない子だったから知らなかったよ」

「知り合いというか……。知り合いによく似た子つてだけなんだけど」

ふむ、と店主はシユウと少女を交互に見る。だがすぐにまあいいかと笑い飛ばした。

「で？ 何か探してるのかい？」

「うん。こつちの女の子がね。ちよつと昔の本なんだけど……」

そう言つてシユウがタイトルを告げると、ああそれかと店主は得心したようにうなずいた。待つていなさいと言つてカウンター奥の扉へと消えていく。

「……不用心ですね。盗まれたらどうするつもりでしょうか」

「さあ……。まあ僕たちを信用してくれてるってことだろうね」

そんな会話を交わしている間に、店主が戻つてきた。手には一冊の分厚い本。ハードカバーの本だ。

「ほら、嬢ちゃん。これだろう？」

店主が手渡してきた本を、しかし少女は受け取らずに表紙だけを確認する。すぐに少

女はうなずいて、言った。

「はい。間違いありません。おいくらでしようか?」

「値段? ああ、値段か……。いくらにしよう」

店主がつぶやいた言葉に、少女が小さく首を傾げた。

少女は知らないことだろうが、ここの本の値段は店主の気まぐれによって変動する。定価より高くなることはないが、店主に気に入られればかなり安く売ってくれるのだ。その代わり、取り寄せなどのサービスはなくあくまで在庫限りの販売だが。

店主から聞いた話では、この店は道楽のようなものらしい。だから別に利益を上げるつもりはないのだとか。

「よし、決めた。ただでいい」

「……は?」

店主の言葉に、少女が意味が分からないといった様子でそんな声を出した。店主は柔らかな笑みを浮かべて、言う。

「こんな裏道の寂れた書店に来るってことは、他じゃ見つからなかつたんだろう? それでも探し続けて、ここに来た。嬢ちゃんなら大事にしてくれそうだからな。ただで持つて行っていいよ」

それを聞きながら、シユウは苦笑した。この後に続く言葉も知っている。シユウも一

度言われたことがある言葉だ。

「その代わり、たまにでいいから顔を見せてくれな。本の話でもしようじゃないか」

店主はこうやって話し相手を見つけている。本当に道楽の店なんだとよく分かる。

「……ありがとうございます。ではお言葉に甘えさせていただきます」

「うん。またいつでも来てくれ。おすすめの本とかも教えてやるからな」

笑いながら手を振る店主に見送られ、二人は書店を後にした。紙袋に包まれた本を大事そうに抱え、少女はどこか満足そうだ。もつとも、表情の変化がほとんどないため、何となくそう感じるだけなのだ。

しばらく歩いて大きな道に出たところで、少女はシュウに小さく頭を下げた。

「ありがとうございます。あなたのおかげです。私でできることであれば、何かお礼をしたいのですが……」

「いや、いいよ。気まぐれみたいなものだし」

「そういうわけには……」

少女はうつむいてしばらく考える。その様子を見て、律儀だなと苦笑する。

「じゃあ……。僕はいつも放課後あの書店にいるから、たまにでいいから寄ってよ。その本の感想とかも聞きたいから」

顔を上げた少女はまだ何か言いたそうにしていたが、やがて諦めたように小さく首を

振った。

「分かりました。読み終えたら、必ず」

「うん。そうだ、僕は西崎秀一。友達からはシユウって呼ばれてる。君は？」

「名前、ですか？ シユテルです」

外人さんかな、とシユウは少し驚いた。なのはと同じ顔なため日本人だろうと思っていたのだが、どうやら違ったらしい。

「それじゃあシユテル。また、いずれ」

「はい。ありがとうございます、シユウ」

少女は頭を下げると、シユウに背を向けて歩いて行く。シユウはそれを見送りながら、

「……僕もあっち方向なんだけど。今更言えないなあ」

そんな情けないことをつぶやいて、仕方ない時間をつぶそうと書店へと戻っていった。

翌日の放課後。シユウはいつも通りに書店へと向かい、

「あ」

店主と会話を交わしているシユテルを発見した。シユテルは無表情で会話を続けているが、店主の方は楽しそうに笑っている。



すぐに店主と目が合い、店主が手を振ってきたことによってシユテルも気がついた。シユウを見て、小さく会釈をする。

シユウが二人のもとへと近づくと、シユテルが無表情のまま言った。

「お待ちしていました、シユウ」

「あ、うん……。え？　もしかして、もう読み終えたの？」

驚いてつい聞いてしまう。シユウはあの本を読み終えるのに一週間近くかかった。もちろん立ち読みなので一日二時間ほどが限界だったのだが、それにしても早すぎる。

「とてもおもしろかったので……。つい」

「すごいね……。読むの、早いんだね。うらやましい」

本心からそう言うと、シユテルは、そうですかと首を傾げただけだった。

「えっと……。立ち話もなんだし、どこか行く？」

「ナンパか」

店主が笑いかみ殺しながらそんなことを言う。シユウは慌てて、違う違うと勢いよく首を振った。

「ここで話をしていたらさすがに邪魔かと思って……」

「別に構わないけどな。まあ君自身が気を遣いそうだ」

またいつでも来なさい、と笑顔で手を振る店主に見送られ、二人は店の外へ出た。

——さて、どうしよう。

計画があつたわけではない。ゆっくり話をするなら無難に喫茶店などにでも行くべきだろうが、手持ちのお金はあまり多くない。だがシュテルが側にいるため、あまり考える時間もない。

やばいまずいどうしよう。本格的に焦り始めたところで、シュテルが言った。

「どこか公園にでも行きましようか」

「え？ あ、うん」

では、と先を歩き始めたシュテルを慌てて追う。まさか女の子に先導してもらふことになるとは思わず、助かったやら情けないやらで意気消沈してしまった。

しばらく歩き続け、たどり着いたのは池のある公園だった。大きめの池の周囲にはベンチが点在している。ただ遊具などがないためか、ひどく閑散としていた。

シュテルはベンチに腰掛ける。シュウもその隣に、少し距離をおいて座った。

——うわ、二人きりだ……。

まさか誰もいない場所に来るとは思わなかった。妙に心臓の音が高鳴ってくる。なぜか緊張してしまう。何も無いはずなのに、だ。

「シュウはよく本を読むのですか？」

しばらくして、シュテルが口を開いた。それなのに、

「う、うん」

それだけしか返答できなかった。そうですか、とシユテルは黙ってしまふ。

——何か、何か喋らないと！

わざわざ足を運んでくれたシユテルに申し訳ない。せつかく友達になれそうだと思っていただけに、余計に慌ててしまふ。しかし何を話せばいいのだろうか。

頭を抱えているシユウの隣では、シユテルが膝の上に何かを載せて手を動かしていた。それが視界に入り、シユウは首を傾げる。

——……猫？

いつの間にか黒猫がシユテルの膝の上で丸くなり、眠っていた。シユテルはその猫を優しく撫でている。表情はいつもの無表情だが、どこか柔らかいものを感じた。

「飼い猫？ シユテルを迎えに来たとか？」

自然とそんな言葉が出てきた。シユテルは首を振って否定する。

「おそらく野良猫でしょう。どうも猫に懐かれるようでした」

困ったものです、と言った言葉とは対照的に、言葉に棘がない。一人と一匹の様子を見ているだけで、心が和んでしまふ。

「かわいいね。撫ででも大丈夫かな？」

「おそらくは」

そつと猫を撫でる。毛がふわふわとしており、とてもさわり心地がいい。もしかするとどこかの飼い猫かもしれない。

「いいなあ、動物に懐かれるつて。僕はどうしてか動物に懐かれることが少なくて」「そうですか。私自身はなぜ懐かれるのかよく分からないのですが……」

「動物は人の本質を見るらしいから……。きつとシユテルはいい子だからだよ」

いい子ですか、とシユテルは小さな声でつぶやいた。なぜか自嘲するような言い方だった気もする。

猫を通してほどよく緊張がほぐれたシユウは、いつの間にか自然と言葉が出るようになっていた。

他愛のない話を続けて、何となくだがシユテルの家族構成を理解できた。

家族は四人家族で、理由は分からないが親はいないらしい。近くのマンションに部屋を借りて、姉妹四人で暮らしているそうだ。もっぱら本を読んだりなどして日々を過ごしているらしい。学校のことを聞くと、それははぐらかされた。

シユウも自分のことを話す。古いアパートで暮らしていること。学校はなのはと同じ学校だと伝えると、あの学校ですか、と理解を示していた。知り合いとは聞いていたが、どうやらそれなりに親しい間柄ではあるらしい。

そしてふと気がつくとき、すっかり太陽は沈んで辺りは暗くなっていた。

「すみません、話しすぎました」

膝の上に乗せていた猫を足下に下ろし、シユテルが立ち上がる。シユウも立ち上がって、名残惜しそうに去って行く猫を二人で見送った。

「それでは私は帰るとします。シユウ、よければお送りますが」

「え？ あ、いや！ いいよ大丈夫！」

さすがに女の子に送られるのは男として立場がない。むしろここは自分が送ると言いたかつたのだが、シユテルに言われたことにより自分は言えなくなってしまった。

そうですか、と言ったシユテルは、では、と一度だけ頭を下げて歩き始める。かなりあつさりとした別れ方だ。

「あ、待って！ シユテル！」

「何でしょうか？」

「また……会えるかな？」

シユテルはしばらく無言。緊張しながら言葉を待っていると、

「夕方なら、買い物に行つていなければここにいます」

それだけを告げると、足早に去って行った。

——それはつまり……来てもいいってこと、かな？

立ち去っていくシユテルを見送って、シユウも帰路につく。足が軽く感じた。

## Side : Stern

「ただいま戻りました」

自宅の扉を開けて中に入る。台所からの良い香りが鼻をくすぐる。きつと今頃レヴィが喜んでいることだろう。

まっすぐに台所に向かうと、鍋をかき混ぜている王と目が合った。

「む、戻ったか。もうすぐ仕上がる。すまぬが食器の準備を頼むぞ」

「はい。分かりました」

うなずき、手洗いを済ませて人数分の食器を取り出していく。カレー用の皿で、この家で最もよく使われる食器だ。取り出すついでに、炊飯器からご飯をよそっていく。

「今日はカレーなのですね。レヴィが喜びます」

「ああ。別にあやつがうるさいからカレーにしたわけではないぞ？」

「……このハンバーグは？」

「ユーリが言ったからではないぞ！」

顔を真っ赤にして叫ぶ王。分かっています、とシユテルがうなずく。

「さあ、手早く済ませてしましましょう」

「ぐぬ……。貴様、やはり我を尊敬しておらんか？」

「尊敬していますとも」

王と何度もしたやりとり。事実自分は王のことを心の底から敬愛しているのだが、相手にすっかりと伝わっているかは定かではない。

ハンバーグカレーをリビングのテーブルに持って行くと、テレビを見ていたレヴィとユーリが歓声を上げた。

「わーい！ カレーだ！ 王様大好き！」

「は、ハンバーグです！ デイアーチエ、ありがとうございます！」

「……ふん」

王はそっぽを向いたまま席に座る。その顔は真つ赤だ。シユテルはほんの少しだけ微笑を浮かべると、自分も席に座った。

「それでは、いただきますしよう」

「いただきますーす！」

レヴィが真つ先に、元気よく言ってカレーを食べ始める。この子は相変わらず元気だ。

「ところでさ、シユテルん」

カレーで口をいっぱいにしたレヴィが口を開く。シユテルがわずかに睨むと、慌ててカレーを呑み込んだ。

「ずいぶんと機嫌が良さそうだね。何かあったの？」

言われて、少し驚いた。表情に出していたつもりはなかったのだが。

「いえ、別に。友達ができただけですよ」

もつとも、相手がどう思っているかは分からないが。しっかりと会う約束をしたわけでもない。来てくれなければ、それで関係も終わりだろう。別にそれでも構わないのだが、話していて居心地良く感じていたので、それでは少し寂しくもある。

そんなことを考えていると、他の三人が目を丸くしていることに気がついた。

「……何か？」

「い、いや、何でもないぞ」

「うん、そうそう！ 何でもない何でもない！」

「何でもありません！ 本当に！」

そして三人とも慌てたようにカレーを食べ始める。

シユテルはわずかに首を傾げたが、深くは気にせずに自分も食事を再開した。



## 第二話 出会い（後編）

シユテルと出会ってから一週間。シユウは毎日のようにシユテルと会って話をしてきた。

どうでもいいような学校の話や、最近発売された小説の話。他愛のない話題ばかりだったが、それだけでとても楽しく思っていた。

一日だけシユテルが来なかった日がありその時は嫌われたのかと怖くなったものだが、翌日にはいつも通り現れて謝罪までされたものだ。お詫びにともらったクッキーはとてもおいしかった。料理はそれなりにと答えていたことがあったが、普通に上手だと思ふ。

ただそのクッキーよりも、それと一緒に渡された紙切れの方がシユウにとっては嬉しかった。

「お互いに連絡が取れないのは不便でしょう」

そんなことを言って差し出された小さな紙切れには、携帯電話の電話番号が書かれていた。当然シユテルの電話番号で、思わず、いいの？と聞き返してしまったほどだ。

それからは、帰宅後の夜も電話で話をしていたりする。

「……そんな冗談ばかり言う先生でね」

この日もシユウは夜に電話をしていた。相手はもちろんシユテルだ。電話の向こう側から水と食器の音が聞こえてくるので、洗い物をしながら相手をしてくれているのだろう。

『おもしろい先生ですね。私も一度会ってみたいものです』

「授業はおもしろいけど、私生活はかなりずぼらしいけどね。シユテルとは気が合わないと思うなあ」

『そうでしょうか』

かちやり、と食器と食器の当たる音がして、水の音が止まった。洗い物は終わったらしい。

「洗い物、してたんだよね。邪魔だったかな？」

『いえ、お気になさらずに。私も貴方との会話はなかなか楽しいので』

「そう言ってもらえると素直に嬉しいよ」

笑いながら言つて、だがその後の言葉はなかった。

シユウが怪訝そうに眉をひそめる。シユテル？と問いかけてみるが、返事はない。来客でもあったのだろうかかと電話を切らずに待っていると、

『すみません、シユウ。急用が入りました。切りますね』

「あ、うん。いつてらっしやい……って、もう切れてる」

最後に聞こえた声は、シユテルにしては珍しくどこか焦りを含んだ声音だった。普段から感情の起伏に乏しいシユテルだが、よくよく観察してみるとかすかな変化は見受けられている。今回も分かりにくかったが、シユテルの焦燥はしっかりと伝わってきた。

「何かあったのかな？ ……姉妹だけで暮らしてると話だったけど……」

以前にも一度同じことがあった。いつもの待ち合わせ場所に来なかつた日の前日だ。ベンチで座つて話していると、突然シユテルが無言になり、そして急に立ち上がったかと思うと今回と同じ言葉を発して走つて立ち去つたのだ。

その時は自分が何か怒らせるようなことを言つてしまつたのだらうと思つていたのだが、もしかすると違ふらしい。

「……ちよつと行つてみようかな」

シユウはそうつぶやくと、自宅を後にした。

シユテルの様子を見るために家を出たのはいいが、当然のごとくシユウはシユテルの家を知らない。マンションだとは聞いているが、あまりにも情報が少なすぎる。仕方なくシユウは、とりあえずはいつもの公園へと向かつた。

いつものベンチに座り、小さくため息をつく。携帯電話を取り出して、だがすぐにしてしまうという行動を何度も繰り返す。電話をかけてみればいいとは思いつつも、もし手が

離せない用事なら迷惑になるだろう。

「それにしても、ここは相変わらず人がいないなあ」

普段から人気のない場所だ。気にすることは無いと思いつつも、確かな違和感を覚える。どうしてかと首を傾げて、すぐに理由に思い至った。

音が、ない。

普段なら、かすかにだが車の音が聞こえてくる。この場所は人が少ないといっても、こここの近くの道は人が通ったりもする。だが、今晚はそれらが一切ない。ただただ無音。静寂の支配する世界。

「……………なんで？」

さすがに異常事態だとは思いますが、理由は分からない。何かしらの避難命令でもあったのだとしても、警官の姿は見るはずだ。

「……………」

さすがに不安になって立ち上がったところで、

「……………」

目の前の池の中央が、かすかに光っていることに気がついた。何だろうと思つて池に近づくと、ゆっくりと光の球体が浮かび上がってくる。淡い光を放ちながら、それは上空へと上つてゆき……………。

突然、球体が軌道を変えた。先ほどまでと違い、すさまじい速度でシユウの方向へ飛んでくる。

「……………へ？」

何が起こったのか分からず間抜けな声を出す。あまりのことに身動きがとれない。なんだこれ。何が起こってるの。どうすればいいの。

思考は一瞬。しかし肝心の行動に関するものは何一つない。

球体がシユウに迫り、ぶつかる、と思った時、

「じつとしていてください」

聞き慣れた声。そして目の前に立つのは黒い少女。

少女は持っている杖を目の前に出すと、光の壁のようなものが出現した。球体はその壁に衝突に、勢いそのままに反対方向へと吹き飛ばされる。

「ナノハ、行きましたよ」

少女の声。聞き慣れた声。

「うん！ 任せて、シユテル！」

上空から聞こえてくるのは、先ほどと似通った声だ。こちらは昼間によく聞く声。

そう思った直後、目映い光の柱が球体を直撃した。そして球体は光を失い、地面へと落下する。池の反対側だ。

「ロストロギア、封印完了！ シュテル、お疲れ様！ そっちの子は大丈夫そう？」

反対側で、目の前の少女と色違いの衣服を着た少女が叫んでくる。目の前の少女は、待つてくださいいと短く答えると、振り返った。

「すみません、巻き込んでしまいました。大丈夫でした……か……」

少女の声が尻すぼみに小さくなる。その目が大きく見開かれる。

——ああ、こんな表情もするんだな。

そんなことを思う。先ほどの異常事態よりもそちらの感想の方が強い。

「……えっと。こんばんは、シュテル」

「……………」

シュテルはゆっくりと目を閉じて、小さくため息をついた。

この世界の他にも多くの世界がある。

それらの世界には魔法と呼ばれる技術が存在している。

今回、君が巻き込まれたのはこちらのミス。申し訳ない。

そんな内容のことを聞いた気がする。半分以上聞き流したのではつきりとは覚えていないが。

現在、シユウがいるのは小さな部屋。中央に四角形のテーブルがあり、四方にいますがそれぞれ置かれている。アースラという名の船の一室らしい。

正直よく分からないが、巻き込まれただけらしい。とりあえず命は無事なので、怒るつもりもない。腹がふくれたから良しとする。

目の前のテーブルには盆に載せられた料理があった。今は空だが、なかなか美味だった。

あの後、シユウはシユテルとなのはに連れられて、アースラと呼ばれる船に入った。船らしいが、その全体を見てはいないので実感がわかない。入ってすぐに少し年上かと思われる少年が出てきて、この部屋へと通された。

「巻き込んでしまって、すまない。しっかりと説明するから……」

という言葉をかき消したのは、シユウの腹の音。少年はしばらくぼかんと呆けた後、苦笑して言った。

「何が食事でも持つてこさせよう」

そして食べながらの説明が始まる。シユウの意識は八割方が食事に割かれていたの  
で、話の内容はおぼろげにしか理解していない。

それでも、食事の後に始まったのはたちの話はしっかりと聞いていた。

ジュエルシード事件。闇の書事件。闇の欠片事件。砕け得ぬ闇事件。全てを聞き終える頃には、すでに夜も遅い時間になっていた。途中で少年が別の機会にしようかと持ちかけてきたが、大丈夫だからと一度に聞かせてもらった。

「これでこの世界に関わる事件は一通り話したことになる。ただ、くれぐれも他言は……」

「大丈夫、分かってる。無理言つて教えてもらったしね」

本来ならここまで詳細なことを教えてもらうことはできないらしい。だが事前に魔法の関係者、それもシユテルと面識があつたために話してくれたようだ。彼女のことを教えるためには、その前提として知っておくべきことだとして。

話し終えた少年は、テーブルに置かれていたコップを手に取つた。中に満たされているのはただの水だ。それを一気に飲み干し、言う。

「さて、と。もう遅い時間になっているから、今日は泊まっていくといい。ちゃんと明日の学校に間に合うように送ろう」

「いやあ、それはいいや。よく分からない場所で寝られるほど神経図太くないから」

思わず少年が苦笑する。それもそうか、と。

「それよりもさ」

「ん？」

「シユテルとちよつとお話したい」

「……………」

少年が渋い表情を浮かべる。腕を組んでしばらく考え込む。シユウは少年の言葉を、



ただじっと待った。

「……少し、相談してきても？」

「うん」

少年は立ち上がると、部屋を後にした。

一人残されたシユウは今までの出来事を振り返る。どうにも現実味がない。まるで夢を見ているような、そんな感覚だ。

——でも……夢じゃない。

目の前で起きたことを思い出し、そしてシユテルの姿を思い出し、

——格好良かったなあ……。

表情が緩む。同時に、少し情けなくもなる。魔法のことなど何一つ知らないので守ってもらうことになったのは当然なのだろうが、それでもわずかにでもある男のプライドは見事に碎け散ってしまった。

どんだんと自己嫌悪が激しくなっていく。うあー、と意味不明なうめき声を漏らしたところで、

「すまない、待たせた。……ん？」

「……あ、いや、何でもないです」

頭を抱えてもだえているところを見事に目撃されてしまった。恥ずかしさで顔が

真つ赤になる。

少年は何となく察しがついているのだろう、苦笑するだけで何も言わずに席に座ると、メモ用紙を一枚差し出してきた。書かれているのは、どこかの住所。

「なにこれ？」

「シユテルたちが今暮らしている場所だ。心配しなくても、本人たちに許可を取っている。どこで調べたかと疑われることはない」

「……それは、どうも」

個人的には驚かせてみたかったというのもあったので、それはそれで残念に思う。

とにかく、善は急げだ。シユウはメモ用紙を受け取ると、すぐに席を立った。

「お話ありがとう！ とりあえずシユテルに会ってくるよ！」

「え？ あ、ああ……。地上まで送ろう」

シユウの突然の行動に驚きつつも、少年はうなずく。すぐに少年も立ち上がって、シユウの先導を始めた。

閑静な住宅街にある、大きくも小さくもないごく普通のマンション。シユテルたちが住んでいるのはそんなマンションだった。周囲には同じような建物がいくつか並んでいる。

シユウはマンションの玄関に向かう。側の機会でクロノから聞いていた暗証番号を入力。すぐに自動ドアが開く。

ドアの奥は、少し広めのエントランスだった。目の前にエレベーターが二基あり、そのさらに横には階段がある。シユウはエレベーターに乗り込むと、住所に従って階数ボタンを押す。

すぐに目的の階に到着し、エレベーターから出てまっすぐの廊下を進む。すぐに左右に延びる長い廊下に出た。目の前は街の景色が広がっている。

廊下をさらに進み、突き当たりの部屋へ。表札を見ると、名前は何も書かれていない。

「ここ……合ってるよね……」

シユウは一度大きく深呼吸すると、震える指先でインターホンを押そうとして、

「……挙動不審ですよ、シユウ」

背後からの声に、跳び上がるほど驚いた。振り向いた先にいたのはシユテルだ。左手には近くのコンビニのレジ袋。何か買い物をして行ったらしい。

「管理局から話は聞いています。そろそろ来る頃だろうと思っていました」

「あ、えつと……。うん」

しどろもどろになっているシユウにシユテルは首を傾げる。だが何も言わずにシユウの横を通ると、右手でドアを開けた。

「どうぞ。話は中でしましょう」

通されたのは、リビングらしき部屋。中央にテーブル、その三辺にソファが置かれ、もう一辺の奥にはテレビが設置されている。壁際にはいくつかの本棚など。

シユウはシユテルに促されるまま、ソファに腰掛けた。ふかふかのソファは高級感がある。

「コーヒーとココア、どちらがいいですか？」

リビングの隣の部屋、キッチンになっている部屋からシユテルの声。

「え？ えっと……」

「オレンジジュースやミルクなどもありますが。もちろん麦茶も。あとは紅茶や……」

「ま、待つて待つて！ ……ずいぶんとたくさんあるんだね」

「そうですか？ ……そうかも知れませんか」

それなりに来客は多いので、とシユテルは淡々とつぶやいた。それはつまり管理局の人が来るということだろうか。

「じゃあ、シユテルと同じもので。来客つて、管理局の人とか？」

「ではもう夜遅い時間でもありますし、ホットミルクにしておきます。来客は管理局もそうですが、ナノハたちの方が多くでしょうね」

レンジの軽い音が聞こえてすぐに、シユテルは湯気の立つマグカップを二つ持ってきて

た。その一つをシユウの目の前に置き、もう一つを持ったままシユウの対面に座る。シユウは、いただきますと言ってからマグカップに口をつけた。

「ふう……。落ち着く……」

「いろいろと疲れたでしょう。巻き込んでしまつてすみませんでした」

シユテルが深々と頭を下げる。突然のことにシユウは反応できない。シユウの沈黙を謝罪を受け取つたと勘違いしたのか、シユテルが続ける。

「管理局から私たちの事情も聞いているかと思ひます。この先、私と関わることで先ほどよりも危険な目にあわせるかもしません」

すぐに理解する。シユテルが何を言おうとしているのかを。自分が聞きたくない言葉と言おうとしているのを。

——いやだ。

「短い間でしたが、貴方と話をしている時間はとても有意義なものでした。ありがとうございます」

——いやだ。

「きつとこれがお互いのためです。もう会わないように……」

「いやだ！」

無意識にテーブルを強く叩いて立ち上がり、叫んでいた。シユテルがわずかに目を見

開き驚いているが、知ったことではない。

「僕はシユテルとの話が楽しかった。シユテルと会うのが楽しみになってた。シユテルは、どうだったの？」

「……私も、楽しかったですよ。ですが……」

「なら、それで十分だ。僕はシユテルと会えて本当に嬉しかったんだ。それがこんな、訳のわからないことで終わるなんていやだ」

「ですが、私に関わるということは、こちらの……魔法の世界に関わるということです。今回以上に危険なことも必ず起きます」

「その時はその時だ！」

また叫ぶ。聞いたシユテルはもう驚かない。ただ、少し目を細めてシユウを見つめてくる。

「僕はシユテルと友達になりたい。これが僕の本音。……まあ確かに今夜のことは怖かったけど、シユテルのことをよく知るいい機会になった」

「そういうものですか」

「そういうものです」

胸を張って言うのと、シユテルが肩をすくめた。どうやらもう何も言うつもりはないらしい。そう察して、シユウは満足そうにうなずいた。席に座り直し、ホットミルクを一

口にする。

「この話をどう切り出そうか考えていたのがばかみたいですね」

対面で同じようにミルクをすすりながらシユテルがつぶやく。バカだね、とシユウが同意すると、はい、とシユテルは小さくうなずいた。

「シユテル。ずっと言おうと思つてて言えなかったことがあるんだけど」

「はい。何ででしょうか？」

「僕と、友達になつてよ」

満面の笑顔でそう言う。普段なら言おうと思つていても恥ずかしくて言えなかった言葉だが、今日はなぜかすんなり出てきた。そのことにシユウ自身が少なからず驚いている。

シユテルはそんなシユウの様子をしばらく観察して。

そして、薄く微笑んだ。

「物好きな方ですね……」

そうかな、とシユウがはにかみ、そうですよとシユテルが笑う。

シユテルの笑顔を初めて見たシユウは、

——笑っている顔も可愛いなあ。

そんなことを思っていた。

## Side : Stern

時間も忘れてシユウと会話をしていると、いつの間にかシユウが船をこぎ始めていた。どうやら長く引き留めすぎてしまったらしい。

「すみません、シユウ。長話が過ぎました」

「……そんなことないよお……」

「……起きていますか？」

「……起きてますよお……」

これはだめだ、とシユテルはため息。静かに立ち上がると、シユウの側へ。軽く体を押すと、シユウの体は抵抗なくごろんとソファに横になった。そのまま整った寝息を立て始める。

「……そう言えば、シユウの自宅を知りませんね」

両親に連絡しなければきつと心配するだろう。だがシユテルはシユウの自宅のことは何一つとして知らない。シユウが寝てしまった今となっては聞くこともできない。

「仕方ありませんね」

シユテルはそつと部屋を出て廊下を歩き、物置から余っている毛布を取り出す。それをリビングへと持って行き、シユウの体へそつとかけた。今晚はもう泊めるしかないだ



ろう。

「おやすみなさい、シユウ」

シユテルは小さな声で言う、明かりを消してそっとリビングを後にした。

Side: Hero

「おつはよー！」

「ぐえー！」

お腹に強烈な衝撃を受け、シユウは覚醒した。勢いよく体を起こそうとしてソファから転げ落ち、そのままうずくまる。思った以上に痛い。痛すぎる。

「何をしておるか、たわけ！ 普通に起こさぬか！」

「ごめーん！」

痛みを堪えながら視線を上げると、二人の少女が何かを話していた。二人とも知っている顔だが、雰囲気は全く違う。シユテルと同じように。

「……フェイト……じゃなくて、レヴィ？」

「お？ ボクのこと知ってるの？」

「そっちは……ダイアーチエ、だっけ。あ、王様？」

「……ダイアーチエでよい」

デイアーチェはシユウを一瞥すると、興味がなさそうに視線を外した。そのまま台所へ行くこうとして、すぐに立ち止まる。

「……朝食は米とパン、どちらが良いのだ？」

「え？ どっちも好きだけど、米派かな」

「そうか」

そしてそのまま立ち去ってしまった。なぜ今朝食の話をはじめたのだろうか。

というより、今は何時でどういう状況だ？

「ねえ、レヴィ」

シユウに構わずにテレビをつけるレヴィに声をかけると、リモコンを持ったまま顔をこちらに向けてきた。

「今は……何時？」

「六時三十分！ もうすぐ朝ご飯！」

「……そっか、ありがとう」

完全に朝だ。雀も元気よく鳴くわけだ。いつの間にか太陽が昇るわけだ。女の子の家に一泊。何をしているんだろう、自分は。

「情けない……」

つぶやき、うなだれる。そんなシユウへと、お茶の入ったコップが置かれた。

「ど、どうぞ……」

今までの三人とは違い、見たことのない女の子が立っていた。三人よりも少し小柄で、おどおどと緊張しているようだ。

「ありがとう。えつと……。ユーリ、かな？」

「あ、は、はい……。えと、その……。失礼しました！」

大慌てて台所へと逃げていく。守ってあげたくなるかわいさだ。

「……ユーリに手を出したら王様に怒られちゃうぞー」

「いや、そんなつもりはないんだけど」

思わず苦笑する。ユーリから受け取ったお茶を飲み、ほつと一息。今更後悔したところはどうすることもできない。とりあえずこのまま流れに任せよう。

とりあえずはそう決めて、シユウはレヴィと一緒にテレビを見ることにした。

七時になってリビングのテーブルに朝食が並ぶ。白ご飯にお味噌汁、焼き魚と和風なメニューだ。並べていくのはシユテル。

「おはようございます、シユウ」

「あ、うん。おはよう。ごめんね、泊まっちゃって……」

「いえ、お気になさらずに。学校には間に合いますか？」

「まあ……。多少は遅刻しちゃうけど、大丈夫」

それを聞いたシュテルは、申し訳なさそうに顔を伏せた。慌ててシュウが手を振って言う。

「いや別にシュテルが悪いわけじゃないから！　夜遅くに押しかけた僕が悪いんだし！　本当に気にしないで！」

そう言っても、シュテルの表情は晴れない。少し重たい空気になってしまい、巻き込んでしまった他の三人にも申し訳ない。そう思っていたのだが、

「レヴィ、その醤油を取れ」

「ふあい」

「口を空にせぬか」

「あ、ディアーチェ。私も使いたいです」

「うむ。では先に使うといい」

おそろくいつも通りなのだろう。何とも思わないのかと三人を眺めていると、

『うぬらの問題だ。うぬらで解決せい』

頭の中でディアーチェの声が響いた。これが念話というやつなのだろう。便利なものだ。

「シュウ」

「あ、はい」

シユテルに呼ばれ、背筋を直す。なぜかひどく緊張してしまう。

「お詫びにはなりません……。せめてご自宅までお送りします。貴方の家族には私から説明しますので。魔法のことは伏せさせてもらいますが……」

「いや、大丈夫だよ。必要ない」

「そういうわけにはいきません」

——これは納得しそうにないな。

内心で苦笑。本来に来てもらう必要性はないのだが、これを断つてもまた別の償いを探し始めるのだろう。だったら一緒に来てもらうのもいいかもしれない。自分だけがシユテルの家を知っているというのも不公平だと感じてもある。ちょうどいいだろう。

「じゃあ……お願いします」

「はい」

そこでやっとシユテルは顔を上げた。

昼食後、二人は早速シユウの家へ向かう。学校の方はすでに諦めているので急ぐこともしない。しばらく歩き続け、さらに細い道を通り、その建物は見えてきた。

「あれ」

「……あれ、ですか?」

シユテルの声に困惑の色が混ざる。それも当然だとシユウは思う。

二階建ての小さなアパート。しかも老朽化が進み、人が住んでいないことすら疑ってしまふほどだ。事実、このアパートには現在シユウともう一組しか住んでいない。

シユウはシュテルを連れて外壁の古びた階段を上がる。一歩歩くごとに甲高い金属音が小さく響く。そして上りきって廊下に入ってすぐの部屋、二〇一号室がシユウの部屋だ。鍵を開けて、中に入る。

「何もないけどどうぞぞ」

「お邪魔します」

シユウに続いて入ったシュテルが、すぐに絶句した。シユウは苦笑するしかない。

玄関からすぐに短い廊下があり、そこに流し等が備え付けられキッチン兼ねている。小さな廊下の奥には六畳一間。奥の壁は大きな窓になっていて、一応ベランダがある。部屋の中央にちやぶ台があり、隅には座布団が積まれている。押し入れもあり、そこには布団とシユウの少ない私物が収納されている。

かなり寂しい部屋だ。テレビもなければ本棚やクローゼットもない。本当に寝て起きてご飯を食べるためだけの部屋。

「書類上はここで親と二人暮らし」

「書類上、ですか？」

「うん。本当は一人暮らし。いろいろあつて捨てられたも同然だから」

衝撃的なことを何でもないことのように言う。目を見開いて固まっているシュテルに笑いかけ、気にしないでねと言う。自分自身この生活に慣れているので何とも思っていない。

シュウは押し入れから学校の荷物と制服を取り出すと、そこでシュテルの方を見る。すぐに意図を察してくれたようで、シュテルは扉の方へと向いてくれた。手早く着替えを済ませ、荷物を持つ。

「それじゃあ、行つてくるね。一緒に来てくれてありがとう」  
「いえ……」

再びシュテルを伴つて自宅を出る。しっかりと鍵を閉める。金属音でうるさい階段を下りて、シュウは笑顔で後ろのシュテルへと振り返った。

「じゃあ、行つてきます！　また放課後に」

「はい。お気をつけて」

うん、とシュウは笑顔で走り出す。そしてすぐに、待つて下さいというシュテルの声に引き留められた。

「ん？」

「今日は夕食をカレーにしようと思います。よければシュウも……ご一緒にどうですか？」

シユウは首を傾げる。なぜ誘ってくれるのか分からない。妙な同情でもされてしまったのだろうか。申し訳ない気持ちでいっぱいになるが、

「……シユテルの手作り?」

「……どこにこだわるんですか。まあ、そうですね」

シユテルがうなずくのを確認して、シユウは嬉しそうに破顔した。

「行く! 食べたい!」

「はい。では放課後に」

「うん! 楽しみにしてる!」

そう言っ走り出す。新しい楽しみができた。今日は……いや、今日も良い一日になりそうだ。

Side:Stern

「ただいま戻りました」

「シユテルんおかえりー!」

シユテルが帰宅すると、レヴィが笑顔で出迎えてくれた。戦闘衣服を着込んでいる。

「……管理局ですか?」

「うん。今日はボクが行ってくるね!」



どこか嬉しそうに言うレヴィ。この子は相変わらず双方の思惑を一切気にしない。それがいいところでもあるのだが。

「気をつけて。今日はカレーにしますよ」

「ほんとにつ？ やったー！」

嬉しそうにはしゃぐレヴィ。そしてそのまま家を出て行った。上機嫌な旗歌が聞こえてくる。

「……ただし、少し辛めのカレーになりますよ」

「いやシユテル、それは先に言っておくれ」

一部始終を見ていた王がため息をつく。シユテルは素知らぬ顔で、

「蜂蜜を用意しておきます」

「うむ。ところで、急にどうした？」

王と会話しながらシユテルはキッチンへ。材料の有無の確認をしながら、必要なものをメモ帳に書いていく。

「まあ少し。今日は夕食にシユウも来ますが、構いませんか？」

「む……。まあいいだろう」

仕方ないといった様子だが、王もシユウのことを嫌っていないことは分かっている。でなければ、わざわざ朝食をシユウに合わせるようなことはしないだろう。

「シユテルに友達と聞いて我が耳を疑ったが……。良い変化のようで何よりだ」

王のそんな言葉が小さく聞こえてきたが、シユテルは聞かなかったことにした。

シユテルはシユウの顔を思い浮かべながら、さてどんなカレーにしたものか、と考える。その表情はいつもの無表情ではあったが、どこか楽しげにも見えるものだった。

## 第三話 食事

シユテルに見送られて学校に到着した頃には、すでに二時限目が終わろうとしている時間だった。校門をくぐった時に警備員がかなり驚いた顔をして声をかけてきたものだ。

「どうしたんだ、西崎君。いつもはかなり朝早いのに……」

「いろいろありまして……」

苦笑してそう答えると、そうかがんばれ、ととても心配そうな表情をしていた。何か勘違いされているような気がするが、説明することもできないので気にせず校舎へ向かう。教室にたどり着いたのは、二時限目が終わるチャイムが鳴ってからだった。

教師がすでに退室していることを確認して、シユウは教室の扉を開けた。何人かがシユウに気づき、驚いた顔をしながらも挨拶をしてくる。それに一つ一つ丁寧に返し、シユウは窓際にある自分の席に向かった。

席について、ふう、と一息。何人かの友人から声をかけられたが、シユウは校門と同じようにいろいろあって、で全て済ませた。疲れているのを感じ取ったのか、友人たち

はすぐに離れていく。

——三限目まで寝よう……。

ソファで寝てしまったためか、体の節々が痛い。疲れが取れていない。少しでも休もうと思つて机に突つ伏したところで、

「西崎君」

声を、かけられた。

朝に聞いていた声だが、雰囲気の違い。顔を上げると、高町なのはがそこにいた。今までほとんど会話らしい会話をしたことがなかったのに、どうしたのだろう。

——ああ、考えるまでもなかった。

昨日のことだと容易に想像できる。

「あの、昨日は大丈夫だった？ ごめんね、巻き込んだやつて」

「いやいや、気にしてないよ。だから高町さんも気にしないで」

「うん……」

うなずいたものの、未だになのはの表情は晴れない。どうしたものかと考え、助けを求めてなのはの席にいるであろうなのはの友人たちを見ようとして。

周囲が静かになつて、ことに気がついた。視線が自分たちに注がれている。当然なのはの友人たちも自分たちを驚いたように見ていた。

「…………えつと…………」

ほとんど会話したことがない組み合わせ、しかもなのはが自分に申し訳なさそうに謝るといっておまけ付き。頭の中で警鐘が響く。これはまずい。

事態を打開するために口を開こうとしたところで、

「ちよつと、なのはに何をしたのよ!」

なのはの友人、アリサの怒声でシユウの頭は真っ白になる。

——だめだ、もういろいろだめだ。帰りたい、今すぐ帰りたい。

アリサを先頭にしてなのはの友人たちが集まってくる。ほとんど会話をしたことがないのだが、名前は覚えている。フェイト、すずか、はやてだ。

「アリサ、落ち着いて。事情はあとでちゃんと話すから」

そう言ったのはフェイトだ。この言葉からフェイトも魔法の関係者だったことを思い出す。

「そうだよ、アリサちゃん。ここで騒ぐと西崎君の迷惑にもなるから、ね?」

「ほら、みんな見てるよ? とりあえず戻るで?」

すずかとはやて。どうやら全員が魔法の関係者、もしくは魔法を知っていると判断しているのだろう。

「ああ、もう、分かったわよ! とりあえずこいつもお昼一緒にさせるから、二人は納得

いく説明をしなさい！」

「う、うん」

なのはが戸惑いつつもうなずく。つもりこれは、自分も一緒になのはたちと昼食を取れということなのだろう。本来なら光栄だと思うところだが、事情が事情だ。

——……帰りたい……。

心の底からそう思いつつ、

「返事は！」

「はい……了解……」

ここで嫌だと言える勇気はさすがなく、シユウは渋々うなずいた。

「なるほど、事情は分かったわ」

昼休み、校舎の屋上。そこでシユウはなのはたちと昼食をとっていた。なのはたちの昼食風景を眺めながら、自分は何をやっているんだろうと考えてしまう。

今はなのはとフェイトからアリサとすずかに事情を説明してもらっているところだ。シユウ自身は巻き込まれた自覚はあってもロストログアなどに関しては何となく知識がないため、二人に完全に任せてしまっている。

——頼りになるなあ。

そう思うと同時に、昨日から女の子に頼りっぱなしだという事実になんげ落ち込

んでしまう。どうにかしなければならぬ。どうにもならないが。

「あたしたちも魔法のことを知ったきつかけは巻き込まれたことだけど……。あんたも災難ね、西崎。そうそう滅多にないことらしいのに」

「まあそのおかげで、シユテルたちのことをよく知ることができたし、僕にとつては良いことだったよ」

「シユテル……つて、なのはちゃんによく似た子だっけ？」

そう聞いたのははずかだ。なのはがうなずく。

「うん。西崎君はシユテルと知り合いだったみたいで……。お互いにすごく驚いた顔をしてたよね。私もびつくりしちゃったけど」

「いやあ、あれは衝撃的だったね。魔法つて。友達が魔法少女つて。何のアニメだ」  
「あんたの言いたいことはよく分かるわ……」

苦笑しつつアリスがうなずく。当人であるなのはとフェイト、はやては複雑そうな表情だ。

「シユテルとはまた会う約束とかもしてるし、また魔法関係で何かあったらよろしくね。……女の子に頼るのは男として情けないけど」

「それは諦めるしかないな。リンデイさんとかに聞いて、魔法の資質でも調べてもらたうら？ もしかしたらあるかもしれへんで」

「ないってさ」

「確認済みやったか」

アースラに行った時に最初に確認されたことだ。以前民間人を巻き込んだこともあり、少し特殊なシステムを組み込んだ結界だったそうで魔力を持っていない人間は入れないはずだったとか。だが調べてみてもやはり魔力など見つからなかったため、結界の方に不備があったのだろうということになっていた。

あの時はなすがままの状態だったので言われていることも理解できていなかったが、今にして思えば本当に悔しいとも思う。少しでもあればシユテルを手伝えるかもしれない。なかつたのに。

「ないもんは仕方ないなあ……」

「そうだね……。まあ、今後ともよろしく、ということだ」

苦笑しつつなのはたちに言う。なのは、フェイト、はやての三人は笑顔でうなずいてくれた。

「魔法のことだとあたしたちはちよつと手伝えないけど、なのはたちに言いにくいことがあつたら言いなさいよ。力になってあげるから」

「うん。もう友達だしね」

アリサとすずかも笑顔で言う。どうにも一人だけの秘密だと苦しい気持ちも少しは



あったので、魔法関係以外の人と話せることができるというのはなかなか大きい。シユウは心から感謝して、よろしくとうなずいた。

「ところで……」

話が一段落したところで、なのはが口を開く。なのはの視線はシユウの手元に注がれている。

「お昼ご飯は……それだけ……?」

シユウの手には、ビニール袋に入ったパンの耳。当然ジャムやマーガリンといったものもない。揚げパンというわけでもなく、本当にただの食パンの耳だ。

「うん。知り合いのパン屋さんからもらったんだ。タダで」

シユウの自宅の側にある商店街では、なぜかシユウは有名になっている。いつの間にかなので自分でもよく分からないが。だがこうして貴重な食料を確保できるのはありがたい。

「お弁当は……? 作ってもらえないの?」

「あー……。できれば触れてほしくないかな?」

泣き笑いのような表情を浮かべるシユウ。それを見たなのはは、ただ黙つてうなずくだけだった。

放課後。シユウは学校を出て、さてどうしようかと途方に暮れた。シユテルから夕食

に誘われはしたが、いつものようにして落ち合うのか決めていない。かといって自分からシユテルの家に訪ねるのも、なんだか催促しているようで気が引けてしまう。シユテルがその程度のことを気にしないとは思いつつも、もし嫌われたらと思うと怖くて行動できない。

とりあえずシユウはまっすぐに自宅に帰る。うるさい階段を上り、自宅の扉を開けようとしたところで、

「おかえりなさい、シユウ」

廊下の奥から声をかけられ、跳び上がるほど驚いた。慌ててそちらへと視線を向けると、文庫本を片手に持ったシユテルが立っていた。シユウの姿を確認したシユテルは、文庫本を閉じてこちらへと歩いてくる。

「シユテル……。こんなところで、なにを……?」

「今日のやるべきことは終わったので、シユウを迎えに来ました。自宅を教えてください」

——いや、そういう意味じゃ……。

なおも口を開こうとして、しかしシユウは苦笑とともにため息をついた。せつかく来てくれているのに、それを責めることなどできるはずもない。

「まだ急がないよね?」

「はい」

「じゃあ良ければどうぞ」

シユウはそう言つて、自宅の扉を開けた。

ちやぶ台に麦茶が満たされたコップが二つ。一つはシユテルの前に置き、もう一つは自分の前に置く。シユテルは、いただきますと言つと少しづつ麦茶を飲んでいく。

「ごめんね、家にはそれしかなくて」

「いえ、お構いなく」

そうは言われても、シユテルの家を訪問した時は朝食を出してもらつてゐる。そして今から夕食までご馳走になるのだ。正直申し訳ない気持ちだが、だからといつてどうすることもできない。せめてお茶請けなどでもあればよかつたのだが。

シユテルの対面に座り、シユウはまじまじとシユテルを観察する。ちびちびと麦茶を飲んでいたシユテルはそれにすぐに気がつき、小さく小首を傾げた。

「何か?」

「え? えつと……」

可愛くて見ていたなんて口が裂けても言えない。言えば確実に呆れられる。ため息をつくシユテルの姿が容易に想像できる。

シユウはわずかに慌てた後、

「本当に似てるな、て思ってたただけだよ」

「……ナノハですか？」

「うん、そう」

「ナノハの姿を借りたのですから当然ですが……」

「いやあ、分かつてはいるけど……。今日はちよつとした理由でなのはたちとお昼ご飯を食べたから、余計にね」

なるほど、とシユテルはまた麦茶を飲む。シユウは冷や汗をかきながら、ごまかせたかなと内心で安堵した。

「ナノハと食べたのですか」

不意にそんなことをシユテルが言う。シユウは首を傾げながら、そうだよと肯定すると、

「そうですか」

会話が終わってしまった。ただ、なぜかこれ以上この話題に触れてはいけない気がする。とりあえずは気にせず、シユウはシユテルの視線から外れて着替えをすることにした。

「……見ないでね？」

「貴方は私をどう思っているのですか」

「あはは、冗談だよ」

笑いながら、シユウは手早く着替えを済ませる。終わった頃にはシユテルも麦茶を飲み終えていた。

「では行きましょう。ただレヴィが出かけていますので、待つてもらおうことになると思います」

「ああ、うん。もちろん大丈夫だよ」

シユウはシユテルと共に部屋を出ると、しっかりと鍵を閉めてシユテルの家へと向かう。シユテルが隣を歩くが、お互いが無言。どうにも奇妙な沈黙だが、不快な沈黙でもない。

シユテルたちが暮らすマンションにたどり着く。エレベーターで上の階へと上り、すぐにシユテルたちが暮らす部屋にたどり着いた。

「どうぞ」

「あ、うん……。お邪魔します」

シユテルに通されて、部屋の中に。前回と同じくりビングへと案内される。そこには読書をしている者とテレビを見ている者の二人がいた。ディアーチェとユーリだ。

「む……」

先にディアーチェがシユウに気づき、視線を送ってくる。シユウがわずかに緊張した

面持ちで、こんにちはと言うと、ディアーチエはわずかに苦笑してみせた。

「よく来た。……なぜ緊張している？ 朝に会ったばかりであろうが」

「まあ、うん。確かにその通りなんだけど……。なんでかな？」

我が知るか、とディアーチエは苦笑のまま言つて、本を閉じて席を立つた。テーブルに本を置き、キッチンへと向かう。

「何を飲む」

「え？ あ、いや、お構いなく……」

「何を飲む」

全く同じ言葉で再度聞かれた。これは答えなければ同じことを繰り返されるのだから。シユウは少し考え、

「じゃあ、麦茶で」

「……貴様が良いのなら構わぬが」

どこか納得のいつていない表情でキッチンへと消える。シユウは頬を指先でかきながら、怒らせたかなと少し不安になった。

「大丈夫ですよ、シユウ。とりあえずは座ってください」

「あ、うん」

シユウの心の内を察してシユテルがそう言つてくれる。シユテルがそう言うなら

きつと大丈夫なのだろう。シユウは促されるままソファに座る。

「あ……」

そこでようやく、ユーリがシユウの存在に気がついた。ユーリはしばらく唾然とした後、慌てて立ち上がってキッチンの方へと消える。顔を真っ赤にしていたが、大丈夫だろうか。

「あれ？　もしかして僕、嫌われてる？」

「いえ、ユーリは人見知りするだけですよ」

「それなら……いいんだけど……」

ユーリとも朝に会っているので人見知りをするとは何となく分かっただけだが、ここまではつきりと避けられると少々傷ついてしまう。本当に何かしてしまったのではと考えてしまうが、シユテルの様子を見るにそれはなさそうだ。いつものことだとばかりに、無表情でテーブルの上を片付けている。

程なくしてディアーチェが戻ってきた。手にはお盆を持っており、麦茶の入ったコップと湯気の立つコーヒーカップが四つ。そのディアーチェの後ろには、その背に隠れてこちらをうかがい見るユーリの姿。

「ほれ、受け取れ」

「あ、ありがとう」

デイアーチェからコップを渡され、すぐに受け取る。デイアーチェはその後にテーブルにカップを並べていく。その一つはシユウの前にも置かれた。

「え？ あ、あの……」

「いらぬなら残せ。その時はレヴィが飲むであろうよ」

「いや、さすがに残り物を飲ませるわけには……。いただきます」

麦茶のコップを置き、温かいカップを手に取る。満たされているのはカフェオレらしい。他の三人のものを見ると、ユーリがシユウと同じカフェオレで、デイアーチェとシユテルはブラックコーヒーのようだ。

「レヴィと連絡が取れました。あと一時間ほどで戻るそうです」

「そうか。ではこれを飲み終えたら準備を始めるとしよう」

「はい。ああ、シユウはゆっくりしておいてください」

微妙に腰を浮かせたシユウの機先を制してシユテルが言う。シユウは、いやでも、と首を振って、

「ご馳走になる立場だし、手伝えることがあれば……」

「お誘いしたのは私です。貴方はおお客様の立場ですよ。のんびりしててください」

そう言いながら、カップを傾けるシユテル。シユウはまだ納得できずに複雑な表情でカフェオレを飲む。ほどよい甘さがシユウの好みだ。カフェオレのおいしさに思わず



頬が緩むが、それでも納得できない気持ちに変わりはない。

それを察したのだろう、シュテルが小さな声で、仕方がありませんね、とつぶやいた。それはシユウには聞こえなかったのだが。

「そう言えば、王。明日の買い出しがまだでしたね」

突然そんなことを言うシュテル。ディアーチエはわずかに怪訝な表情を見せたが、それは一瞬のことだった。すぐにシュテルの意図していることを察して、ああ、とうなずく。

「そうであったな。明日は我ら全員用事がある。故に買い出しをしておかなければならなかったのだが……。さて、どうするか」

ディアーチエがちらりと視線をユーリによこす。ユーリもすぐに意図を察したが、不安そうな表情を見せるだけだった。

『ユーリ。シュウなら大丈夫です。私が保証します』

『……シュテルがそう言うなら』

瞬時に交わされる念話。シユウは不思議そうな表情で三人の様子をうかがうが、当然念話は聞こえない。

「じゃあ、わたしが買い出しに行きます。でも何を買えばいいのでしょうか?」

ユーリのそんな言葉。シュテルは念話で礼を言いつつ、そうですねと考える仕草をす

る。

「今から決めるのも時間がかかりますし……。すみませんがシユウ。お願いできますか？」

「……へ？」

まさかここで自分に話しが振られるとは思っておらず、間抜けな声を出してしまふ。

「すみませんが明日の夕食の買い出しをお願いします。メニューはそうですね……。せつかくなのでシユウが決めてください。貴方の好きなもので構いませんよ」

「僕の好きなもの？」

「はい。明日の夕食までに貴方の家に届けに行きます」

シユウにとってはとてもありがたい申し出だった。そう思うが、そこまで好意に甘えていいのかも思ってしまう。

「今から何を作るかを考えて買い物をする間に合わないだけです。貴方がメニューを提供する代わりに私が夕食を提供する。今日の夕食をご馳走する代わりに買い出しに行ってもらふ。これでどうでしょうか？」

なんだかかなり無理矢理な気もする。明らかにこちらが得ばかりしている。だがこれ以上反論を言っても聞いてもらえない気はしない。シユテルは先の言葉の後にすぐに立ち上がった、財布と買い物袋を用意し始めていたためだ。

シユテルは手早く準備を終えると、財布と買い物袋をユーリに渡した。

「ではよろしくお願いします。シユウも。お気をつけて」

「いまいち納得はできないけど……。うん。行ってくる」

実際に口に出してみてもシユテルは素知らぬ顔だ。自分の席に戻り、コーヒーを飲み始める。

シユウは大人しくシユテルたちの好意に甘えることにして、ユーリに促されてその場を後にした。

シユテルたちの住まうマンションから一番近いスーパーにシユウは来ていた。先導するのはユーリだ。シユウはこの辺りの土地勘はあまりないため、ユーリだけが頼りになる。

スーパーに入って、シユウはすぐに買い物かごを手にとった。のんびりしているとユーリが全ての荷物を持ってしまいうさだ。シユウの意図を察したのか、ユーリは笑顔で礼を言った。

「では、何を買いましたよか?」

「どうしようか。僕の好物でいいって言われても、好き嫌いってあまりないからなあ……」

正確に言えば、引越してきてから贅沢なことは一切していないだけだ。食事もそれ

に含まれるため、いつの間にか自分の好き嫌いですら分からなくなっている。確か、以前はハンバーグやカレーが好きだったような……。だが、この二つはシユテルとの今までの会話で、マテリアルズの誰かの好物でもあることは知っている。誰のかまでは聞いていないが。

「この二つを除くとなると、と首をひねる。やがて出てきた答えは、

「唐揚げ、かな……」

「唐揚げ！ いいですね」

「お味噌汁やおにぎりとかもおいしいよね」

「……シユウ？」

「煮魚とかも捨てがたいし、味噌煮もいいなあ。お好み焼きとかも好きだ」

思い出していくとどんどん出てくる。料理のイメージを浮かべるだけで、よだれが出てきそう。どれもが最近食べていない。味噌汁やおにぎりはともかく。

「まあ、最初に思い出したもので唐揚げでいこう」

「ですね」

どことなく安堵の表情を浮かべるユーリ。二人は必要なものとは意見を交わしながら、スーパールの奥へと入っていった。

唐揚げの材料とその他諸々の食材を買い終えたシユウとユーリは、そのまま寄り道せ

ずにマンションへと戻る。のんびりしていたつもりはないのだが、マンションを出てからもう一時間が経とうとしている。

「もうレヴィは帰ってるかな？」

「どうでしょう。レヴィはいつも連絡された時間から三十分前後しますから」

「じゃあかなり待たせてしまっている可能性もあるのか」

一時間までに帰ってこられたことに安堵していたが、もしそうなら急いだ方がいいかもしれない。もつともあととは一直線の廊下だけなので今更のことではあるが。とりあえず少しでも走ろうとしたところで、

「あれ、シユウにユーリ！ ただいまー！ じゃなくて、もしかしておかえりー？」

背後からの声に振り返ると、何とも目のやり場に困る衣服を着たレヴィが笑顔で立っていた。ところどころに擦り傷などあるのが少し気になる。

「おかえりです、レヴィ。わたしたちも買い出しから帰ってきたところです」

「買い出し！ ボクも行きたかった！」

「そうですね。今度一緒に行きましょう！」

「おー！」

なにやら二人で盛り上がっている。シユウは一人蚊帳の外だ。いきなりこんなところで買い物の計画を練り始めた二人に苦笑し、シユウは一人きびすを返す。そして、

「今のうちにご飯にしてしまおう」

ぼそりと一言。走る。

「え！ それひどい！ ちよつと待つてよ！」

それをしつかりと聞き取ったレヴィが慌ててシユウの後を追いかけて、ユーリも楽しそうに笑いながらその後続いた。

「なるほど、唐揚げですか」

帰宅後、シユテルはシユウから買い物袋を受け取り、中身を冷蔵庫など適切な保管場所に素早く入れていく。その動作が早すぎて手伝うこともできない。仕方なくシユウはそのシユテルの行動を見ながら、うなずいて答えた。

「うん。だめだったかな？」

「いえ、問題ありませんよ。……唐揚げなら大丈夫でしょう」

シユウが首を傾げる。シユテルはそれにすぐに気がつき、こちらの話ですと手を振った。

「では夕食の準備をします」

「分かった。手伝うことは？」

「いえ、あとは盛りつけるだけなので……。そんな悲しそうな顔をしないでください。では盛りつけ終えたものから運んでもらえますか？」

「了解！」

ようやく仕事をもらえたことに安堵しつつも、この程度しかないのかとため息も同時に出てしまう。シユテルたちは気にするなど言うが、これでは本当に申し訳ない。

とりあえず今はそれよりも、とシユウは思考を中断して、ようやく与えてもらえた仕事を始めた。

……それもすぐに終わったが。

「いただきます！」

部屋で元気な声が響く。声の主はレヴィで、言った直後にスプーンを驚つかみ、カレーを朽ちに運ぶ。その様子が幼く見えて少し可愛いと思える。

自分を含む他四人は手を合わせて落ち着いた様子でいただきますと言った後、シユウもカレーを口に運ぶ。だが口に入れる前に、

「んー……」

声にならない悲鳴が聞こえてきて、思わずシユウは手を止めた。声のした方向を見ると、レヴィが口とのどを抑えて苦しそうにしている。そのあまりの様子にシユウは青ざめてしまうが、

「やはりだめか」

「言わなければと思ったのですが」

シユテルとデアーチエ、ユーリは落ち着いていた。シユテルがあらかじめ手元に置いてあった冷たい水が満たされたコップをレヴィに渡し、デアーチエはその間にレヴィのカレーの側に蜂蜜を置く。それだけで何となく理由は察することができた。

「ちよ、ちよつと！ 辛いよこのカレー！」

「カレーですから」

「カレーだからな」

「カレーですもの」

シユテル、デアーチエ、ユーリがさらりと受け流す。それは分かっているけどとまだ何かを言おうとしていたが、デアーチエに蜂蜜をたっぷり入れてもらうことで納得したらしい。

「うん！ おいしい！」

嬉しそうなレヴィの表情。デアーチエは苦笑して、

「……明日のレヴィの夕食は蜂蜜ご飯だ」

そんなことを小声でつぶやいていた。さすがに本当にしないとは思うが。

「すみません、シユウ。お騒がせしました」

シユテルがシユウに頭を下げてくる。シユウはいやいやと手を振って、

「見ていて楽しいよ。賑やかな晩ご飯は久しぶりだから、特に」



「ん？ シュウの家はそうじゃないの……むぐ」

『たわけ。シュテルから聞いているだろう。黙っておいてやれ』

『あー、そうだった。ごめん』

そんな念話が交わされていたが、もちろんシュウには分からない。ディアーチエがレヴィの口を手で塞いでいるだけのように見える。その後、手に手をどかし、レヴィのカレーで汚れた手を見てため息をこぼしていた。

賑やかだな、と何となく自分も楽しい気分になりながら、シュウはカレーを口へと運ぶ。シュテルがこちらをじつと見ているのは気のせいだろう

「……ん。おいしいー」

シュウが勢いよく食べ始めると、シュテルは、お口に合って良かったですと薄く微笑んだ。

その後もレヴィの笑い声、ユーリの忍び笑い、シュウとディアーチエの呆れ声などが混ざり合い、賑やかな夕食の時間になっていた。シュウも時折会話に混ざりながら、久しぶりの賑やかな食事に自然と頬が緩み、笑顔になっていた。

食後。レヴィは風呂へ、ユーリとディアーチエはリビングで何かしらの相談、そしてシュウとシュテルは二人並んで洗い物をしていた。シュテルが泡を洗い流し、シュウがタオルでそれらを拭いていく。適当とすら思えるほど短い時間で洗い終えているのに、

皿は新品のようにきれいになっている。

きれいになった皿たちを感嘆の表情で眺めていると、隣から呼ばれた気がして振り返った。

「あれ？ 呼んだ？」

「はい。呼びましたよ」

いつの間にかシユテルの担当は終わっていた。あとは全て拭くだけになっている。

「カレーは……どうでしたか？」

タオルで食器を拭き始めながらシユテルが問うてくる。一見無表情に見えるが、どことなく不安そうにも見える。シユウはどうしてこんな表情をするのだろうかと思議に思いつつも、笑顔で言った。

「おいしかったよ。本当に。今まで食べたカレーの中でも一番おいしかった！」

「そう、ですか。ありがとうございます」

小さな安堵の吐息。どうやらシユテルは自分のことで結構気を遣っていたらしい。そのことに悪いとは思いつつも、少し嬉しくも思う。

「できればいいから、また呼んでほしいな」

そんなことをだめで元々で聞いてみると、シユテルは何でもないことのように、

「あらかじめ連絡さえいただければ、いつでも来ていただいて構いませんよ」

シユウが驚きに目を丸くする。手から皿を落としそうになり、慌てて支え直した。

「本当に……？」

「はい。シユウさえ良ければ、ですが」

「い、いやいや！ 頼むのは僕だし！ じゃあ……また連絡、するね」

「お待ちしてます」

かちやり、とシユテルが食器を置く。ふと気がつく、シユテルがほぼ全ての食器を拭いていた。シユウは慌てて手に持っている食器を拭き終える。そして時計を見ると、もう夜八時になろうとしていた。

「もうこんな時間ですね。……家まで送ります」

「いや、大丈夫だよ。気にしないで」

思わず苦笑。確かに自分よりもずっと頼りになるし強いのだろうが、夜中に女の子に送ってもらうというのは、男としてはとても情けない。

「じゃあ、ディアーチェ、ユーリ。帰るよ。レヴィにもよろしく」

「む。そうか。気をつけてな」

「また来てくださいね」

隣の部屋から二人が手を振ってくれる。そのことがとても嬉しくて、シユウは破顔しつつ自分も手を振った。

玄関まで来て扉を開ける。振り返ると、シユテルがいつもの無表情でシユウを見つめていた。

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だつて。心配性だね」

「……巻き込んだ前例がありますから」

「あー……」

まだ気にしているのかと少し驚き、同時に不安になる。今回のこれも、それを気にしてのことだろうか。確かめようとも思ったが、肯定されることが怖いので結局聞けずのため息をついただけになった。

「それじゃあ……。おやすみ、シユテル」

「はい。おやすみなさい、シユウ。また明日」

「……！ うん、また明日！」

シユテルから自然と出たまた明日という言葉にシユウは満面の笑顔を浮かべると、手を大きく振って廊下を走っていった。

Side : Stern

シユウを見送った後、シユテルは再びキッチンに立つと、明日の朝の準備を始める。

シユウが買ってきてくれた材料を使っていく。

「ふむ。明日の分か」

背後から王の声。シユテルは振り返ってうなずいた。

「はい」

「……とりあえず五人分はあるのだな？」

「はい。五人分作りますか？」

「うむ。せっかくだ、明日は散策にでも出かけよう」

王はそう言うとりピングに戻っていく。シユテルは唐揚げの準備を再開しながら、テーブルに置かれたものを見る。

少し前から使い始めた自分たちの弁当箱。自分が赤色、王が紫、レヴィが水色、ユーリが白色の弁当箱だ。そしてそれらと一緒にもう一つ。

新品の黒色の弁当箱が、自分たちのものと一緒に並んでいた。

## 第四話 お弁当

シユテルたちの家で夕食をぐご馳走になった翌日。シユウは目覚まし時計の音で目を覚ました。時計を叩いて音を止め、時間を見る。午前七時。いつも通りだ。

起き上がって、ゆっくりと伸びをする。流しの棚へと向かい、そこから昨日のパンの残りを取り出す。租借しながら着替え、すぐに学校の準備は終わった。

「ふう。ぐごちそうさまでした」

パンを食べ終え、袋はゴミ箱へ。腹が満たされたとは言えないが、食べない日の方が多いので満足はできる。

「さて、行くうかな」

準備も整え朝食も終えた。自宅にいてもやることがないので学校に向かうとする。荷物を持って扉を開けようとしたところで、インターホンの音が鳴った。

「……へ？」

最初、何の音か一瞬分からなかった。それほどこの音は久しく聞いていない。ここを訪ねてくる人などほとんどいないからだ。シユウは警戒しつつそつと扉を開けて、

「おはようございます、シユウ」

シユテルの顔を見て、啞然と口を半開きにして固まってしまった。たつぷり十秒間はシユテルを凝視したまま硬直して、その直後にはつと我に返る。

「ど、どうしたのっ？ こんな時間に！」

そう問いかけると、シユテルは申し訳なきように頭を下げた。

「そうですね。朝早くにすみません。迷惑だとは思いましたが……」

どうやらいらぬ誤解を与えたいらしい。シユウは用件を聞いたつもりだったが、来訪の時間を咎められたのだとシユテルは判断したようだ。シユウは慌てて首を振って言う。

「いや別に怒ってるわけじゃないから！ 単純に驚いただけ！ それで、どうしたの？」  
そうですか、とシユテルはわずかに安堵の表情を見せる。だがそれは一瞬で、またいつもの無表情に戻ると小さな包みを差し出してきた。

「どうぞ」

「え……？ なに、これ……？」

「ただのお弁当ですよ」

そっか、とシユウは受け取って、その包みをしばらく眺め、そしてすぐに、

「お弁当っ？ なんで？」

思わず大声を出していた。

「ナノハから昨日の昼食のことを聞きました。差し出がましいとは思いましたが……。必要なければ、どなたかご友人にでも差し上げてください」

そう言つてきびすを返そうとするシュテル。シュウは慌てて呼び止めて、振り返つたシュテルにおずおずといつた様子で問う。

「い、いいの……？ 本当にもらつても？」

「ええ、構いませんよ。もとより貴方のために作つたのですから」

「お、おお……。じゃあ……。ありがたくいただきます」

お気になさらずに、とシュテルは平坦な声で答え、そのまま立ち去っていく。本当にこれをお届けにきてくれただけらしい。シュウはシュテルから手渡された包みに視線を落とし、情けなく相好を崩した。

「シュテルが僕のために……。どうしよう、すごく嬉しい」

もちろんシュテルからすれば深い意味はなかつたのだらうとは思ふ。ただそれでも、弁当を作つてもらつたということそのものが嬉しく、思わずその場で小躍りぐらいしてしまいたくなる。シュウは大事そうにその包みを荷物に加えると、スキップしそうになりながら家を後にした。

「おはよ……。う……。う？」

教室に入つてくるクラスメイトのうち、シュウと親交のあるものは皆同じ反応を示し



た。シユウがどこの輪にも入らずに一人でいる場合のほとんどが寝ているか読書をしているのかなのだが、この日は机に頬杖をつきながらにやにやと笑っていたためだ。これほど機嫌の良さそうなシユウを誰も見たことがないだろう。

友人たちは何があつたのか聞くべきかと考えたが、触らぬ神にたたり無しという判断のもと、そそくさと自分の席に向かっていく。誰も話しかけようとはしない。

授業のチャイムがなつて教師が入つてきた時も、シユウの様子に目を丸くしたものだつた。

昼休み。待ちに待つた昼休み。シユウは誰よりも早く道具をしまい、弁当箱を取り出して、目を輝かせながら開けようとしたところで、

「シユウ。ちよつと来なさい」

アリサに呼び出された。シユウは待てを言い渡された子犬のような目でアリサを見る。さすがに罪悪感を覚えてしまう。

「……お弁当、持つてきていいから。一緒に食べない？」

「んー……」

真剣に悩むシユウ。普段シユウは誰かに誘われると喜んでついて行くような人間なので、悩まれるとは思わずアリサが表情を曇らせる。やがて聞こえてきた、いいよ、という声に心底安堵してしまった。

アリスたちのいつものメンバーと屋上に来る。シユウは大事そうに弁当箱を抱えたまま笑顔を崩さない。隣を歩くなのはがその様子をおかしそうに笑っているのが気になるが、今は些細なことだ。弁当を食べたい。

屋上のいつもの場所にたどり着き、全員が座つたところで、シユウは何も言わずに早速弁当箱を開けた。なのはたちは何も言えずにその様子を見守っている。

弁当箱は長方形の二段になっているものだった。下段にはのりが巻かれたおにぎりが三個並び、さらに隅に漬け物が添えられている。上段にはある具材がたつぷりと入っていて、あとはサラダとフルーツといったメニューだった。

たつぷりと入った具材、唐揚げと見て、シユウは思わず苦笑していた。どうやら昨日の買い出しの時点ですでに計画していたらしい。言ってくればよかったのに、と思いつつふと視線を上げると、こちらをまじまじと凝視している女の子たちと目が合った。

「……………え？ なに？」

シユウがわずかに驚いて問いかけると、なのはが笑顔で言う。

「何でもないよ。それがシユテルのお弁当？」

「うん。そう……………いや待って、なんで知ってるの？」

まだ誰にもらつたものか言っていないはずだ。それなのになのはに言い当てられたことに驚くが、

「シユテルから、昨日のお昼ご飯について聞かれたの。わざわざ聞いてきたぐらいだから、作ってくるのかなって」

「い、いつの間にそんなやりとりを……」

「うん。念話で」

なんて便利なのだろうかと素直に思う。電話代が浮く。すばらしい。

「へえ、これをあの子がねえ……。料理できるとは聞いてたけど、なかなかやるじゃない」

「……………」

じつとシユウがアリサを見る。またもや待てと言われた子犬の瞳。すぐにアリサはそれを察して、食べていいわよ、と言った。

シユウはすぐに顔を輝かせ、食べ始める。すごい勢いだ。

「なあ、シユウ。おいしいか？」

はやての質問にシユウは一度だけうなずく。

「じゃあ一口だけ……」

「だめ」

「ええ……。ケチやな」

「だめ」

初めて作ってくれたお弁当だ。誰にも譲る気はない。シユウの意思は硬い。冗談やつて、とはやては笑いながら自分の弁当を食べ始めた。

「これなら大丈夫そうだね、なのは」

フエイトがなのはに耳打ちする。なのはは笑顔でうなずいた。

「うん。みんな、ありがとう」

シユウの昼食を知ったなのは、どうしても放っておけなくなっていた。今日は自分たちの弁当を少しづつ分けてあげつつもりでもあった。知ってしまった以上は少しでも助けたい、そう思っていたからだ。

「シユテルちゃんは？」

「シユテルから聞いたわけじゃないけど……。ユーリから毎日作るようなことを聞いたよ」

シユテルの行動の真意は分からない。一人の友人としての気遣いからか、巻き込んだ罪悪感によるものなのか、それともまた別の感情からか。きつと本人にも分かっているのだろうか。なぜだかそんな気がする。

ともかく、これ以上自分たちでできることはない。さすがに人の家庭のことにまで首をつ突込むわけにもいかない。今のところは、二人のことを見守ろう。なのははそう決めていた。

あつという間に完食したシユウは、その後の授業は幸せそうな表情ですつと受けていた。教師たちの間では、今日はそつとしておこうという取り決めがなされたのか、生徒を指名する時でもシユウが当てられることはなかった。

放課後。シユウはいつもの公園へと向かいながら電話をかける。相手はもちろん、『はい。シユテルです』

聞こえてきた声に、シユウは自然と笑みを浮かべる。

「もしもし、シユウです。お弁当ありがとう。おいしかった!」

それを聞いたシユテルが、電話の向こう側でわずかに微笑んだ、気がした。

『それは良かったです。作った甲斐があったというものです』

「あはは。えっと、お礼とかはどうしたらいいかな?」

昨日の夕食といい今日の弁当といい、さすがに世話になりすぎていると自分でも思う。何かしらの礼ぐらいしたいと思ったのだが、シユテルの返答は必要ないというものだった。

『私が好きでやったことです。本当に気にしないでください』

「いや、でもそれだと……」

『明日は何がいいですか?』

「ええ!」

思わず声が裏返る。申し訳ないという気持ちと、それ以上に嬉しいという気持ちが強い。

「さ、さすがにそれは……」

『気にしないでください。三人分も四人分も手間は変わりません』

「そ、そう……？ えつと……。何でもいいよ？」

さすがに希望を言えるわけもない。シユテルは、そうですかとどこか残念そうにつぶやいた後、

『ではまた明日の朝に届けに行きます』

「う、うん。ありがとう……」

『いえ。ではまた後ほど』

そして電話が切れる。シユウは切れた電話を眺めながら、表情をにやけさせながらも首を傾げた。

なぜ、シユテルはこうも自分に良くしてくれるのだろう。ただの友人のはずのシユウに対して。シユウにとってはシユテルは大切な存在になりつつあるが、向こうもそうだとはさすがに思えない。

「今度聞いてみようかな」

そんなことを考えつつ、シユウはいつもの公園に向かった。

Side: Stern

電話を閉じる。小さくため息。豚肉を買い物かごに入れる。

シュテルは近所のスーパーに来ていた。今日の夕食と明日の朝食の準備だ。あとはシュウの弁当用。

ふと考える。どうして自分はここまで世話を焼こうとするのだろう。シュウはただの友人。それだけのはずだ。だが、どうしても放っておけない、そう思っている自分がある。そのことを王に告げてみると、

「我に聞くな」

という短い答えが返ってきただけだった。

「どうにも……分かりませんね。これが心というものでしょうか」

つぶやく。答えなどは求めていない。誰かに聞かれたくもない。

「不快でもありませんし……。今は気にしないでおきましょう」

この感情もいつか分かる時がくるかもしれない。それまでは、今の関係が続けていこう。

シュテルは微笑みつつ一つだけうなずくと、レジへと向かった。

## 第五話 雨のち晴れ

シユウの通う学校では土曜は午前授業で終わる。いつもならシユウは授業が終わった後はまっすぐに家に帰り、その後に図書館や近くの書店に行くのだが、今日ばかりは違った。

最後のホームルームの後、シユウはすぐに荷物を持って席を立つ。友人たちに遊びに誘われるが、用事があるからと全て断った。そして、一人慌ただしく教室を飛び出していく。向かう先は決まっている。シユテルたちの家だ。

「曇ってきてるなあ……」

走りながら空を見る。どんよりと黒い雲が空を覆っている。今にも雨が降ってきてそ  
うだ。

「せめて着くまでは降りませんように……」

そう祈りながら走る。ひたすらに走る。

だがシユウのそのささやかな願いは、叶えられることはなかった。

「おー！ いらっしやいシユウ！ びしょびしょだね！」

扉を開けて出迎えてくれたレイイが笑いながら言う。シユウは引きつった笑みを浮



かべる。シユウが走っている間に雨が降り始め、すぐに土砂降りになった。昼食に招待されたこともあり遅くなってはいけなさと無視して走っていたのだが、その結果が全身びしょ濡れという有様だ。当然、申し訳なくて家に上がることはできない。

さらに悔しことに、マンシヨンにたどり着いたところで雨足は遠くなっていた。

「ごめん、せつかく来たけど、ちよつと家で着替えてくるよ……」

そう言つてきびすを返すと、一瞬呆気にとられたレヴィがすぐに慌て始める。

「ちよ、ちよつと待って！ とりあえずシユテルに聞いてから……」

シユテルの名前を聞いたところで、シユウはわずかに動きを止めた。だが、ずぶ濡れの今の姿を見られることがなぜか恥ずかしく感じ、やっぱり逃げようと足を前に。そのままエレベーターまで走ろうとしたところで、

「……何をしているのですか」

背後からの冷たい声に、シユウは驚いて固まり、レヴィも、ひうつと小さな悲鳴を漏らして硬直した。二人そろって振り返ると、玄関で二人の様子を見つめるシユテルの姿。その手に持っているのは、バスタオル。

まったく、とシユテルはため息をつきながらシユウの元へと歩いてくる。そしてその頭にバスタオルをかぶせた。

「わぶっ」

「こんなに濡れて……。急ぐ必要などなかったのに。風邪でもひいたらどうするのですか」

そう言いながら、シュテルがシュウの髪を拭く。シュウはなされるがままになっていたが、やがて小さな声でつぶやいた。

「……………ごめん」

「いえ、お気になさらずに」

シュテルはタオルから手を離すと、部屋へと向かって歩き始める。着いてこないシュウへと振り返り、

「予想はできていたので、お風呂を沸かしてあります。そのままでは風邪をひくでしょう。入ってください」

「……………いいの?」

「今更遠慮なんてしないでください」

シュテルがどこか寂しげにそんなことを言う。シュウは少し驚いて目を見開き、やがて薄く微笑んだ。

「うん。ありがとう」

礼を言つて、シュテルの後に続く。

そして後に残されるのは、完全に放置されてしまったレヴィ。

「……………」

少しふて腐れたように唇を尖らせながら、扉を閉めた。

少し熱めのお湯に浸かりながら、シユウは大きなため息をついた。

バスルームと浴槽は少し広めのものだ。二人程度なら同時に入ってもまだ余裕がある。今は当然シユウしかないため、その広めの浴槽でのんびりと体を伸ばしていた。

「あ……………。気持ちいい……………」

体が冷えていたためか、熱めのお湯が心地いい。ぼんやりしていると、すぐに眠気が襲ってくる。もういつそのこと、少し寝てしまおうか。

——いや、怒られるか。確実に。

シユテルたち四人は、全員がシユウを待っていてくれたらしい。キッチンのテーブルに大きめのお皿が五個並べられているのを見ている。すでに盛りつけも終わらせているらしく、あとは温めるだけだとか。

早く上がった方がいいかな、と判断してシユウは立ち上がろうとする。

「シユウ」

ガラス戸越しの声。シユウは慌ててまた湯船に浸かった。

「湯加減はどうですか？」

シユテルの声だ。驚き慌てながらも、平静を装って答える。

「ちようどいいよ。気持ちいい」

「そうですか。こちらは昼食を温めてきます。少し時間がかかりますので、ゆつくりと暖まってください。着替えを置いておきますね」

何かを置く軽い音がした後、シユテルの歩き去っていく音が続いて聞こえる。シユウは安堵のため息をついて、ならお言葉に甘えてと再びリラックスする。すぐに眠気が襲ってきた。

「あー……。気持ちいい……」

二度目のセリフ。その表情は幸せそうだ。

そのまま五分ほどが過ぎたところで、至福の時間は終わりにした。バスルームから出ると、足下に小さなかこがあり、そこにバスタオルや着替えなどが入っていた。バスタオルを手に取り、体を拭いていく。全身しっかり拭いたところで、ふとシユウは着替えへと視線を向けた。

——誰の服？

ここは女の子の四人暮らしだ。当然男物などあるはずがない。まだ子供である自分たちにはそれほどの体型の違いはないため着れることは着れるだろうが、女の子の服を借りるのはさすがに申し訳ない。それ以上に少し恥ずかしい。

そつと着替えを取り出して、シユウは首を傾げた。

「……男物？」

安心するのと同時に少し不安になる。まさか自分が知らないだけで、他にも誰かが住んでいたりするのだろうか。もちろん住んでいたとしても問題はないのだろうか、なぜだろう、あまりいい気分にはなれない。

複雑な心境のまま服を着る。少し大きめで袖などが余った。自分よりも年上の人の服だろうか。どんな人だろうと考えるが、いくら考えたところで答えが分かるはずもない。シユウは苦笑すると、とりあえずそのことは忘れてリビングへと向かった。

リビングのテーブルにはすでに料理が並んでいた。楕円形の大きめの皿に溶けたチーズ。湯気が立っているので先ほど温め終えたところなのだろう。

「シユウ。ちようど今呼びに行こうと思っていました」

飲み物を載せた盆を持って、シユテルが立っていた。シユテルに促されて、席へと座る。対面に座るディアーチェと目が合うと、ディアーチェが薄く笑った。

「服のサイズはどうだ？」

「え？ あ、ちよつと大きいかな……。誰の服？」

「クロノ執務官の服ですよ。ディアーチェと一緒に借りてきました」

そう答えたのはユーリだ。レヴィと並んで座り、スプーンを持ってじつと皿を見つめている。

「クロノ執務官……。ああ、あの人が」

そこでやっと思い出した。それと同時に心の底から安堵する。クロノはアースラに行つた時に世話になつた人だ。特に問題がある人ではない。

「なんだかずいぶん安心したって顔だねー。何を考へてたの？」

聞いてきたのはレヴィ。好奇心に瞳を輝かせている。おそらく本当に他意はない。故に余計に恥ずかしい。妙なことを考へていた自分が情けない。

「いや、別に。気にしないで」

そう答えるだけで精一杯だ。

「さて、では食事にしましょう」

シユテルがそう言つてシユウの隣に座り、五人は手を合わせた。

昼食のドリアを食べ終え、五人はそれぞれ会話を交わす。といつてもシユウは話を振られない限り会話には参加しなかつたが、四人の会話を聞いているだけで楽しかつた。それに、聞いているだけでも分かることがある。四人の関係性などは最初の説明よりもむしろこういつた会話で察してきた。

ふとシユテルが視線を時計へと向ける。シユウも一緒に見ると、時刻は午後四時になつていた。

「そろそろですね」

シユテルがつぶやき、シユウが何が？ と首を傾げたところでインターホンが鳴った。シユテルが応対のために部屋を出て行く。

「……誰かと約束あったの？ 帰った方がいいかな？」

対面のディアーチェにそう聞くと、首を振られた。

「気にするな。ここにいろ」

「はあ……」

そして待つこと数分。戻ってきたシユテルと一緒に入ってきたのは、

「こんにちは、西崎君」

なのはとフェイト、はやて、そして見慣れぬ三人組と犬二匹。

「……なにこの集まり」

「ちゃんと自己紹介しておこうかなって。魔法のことについてはあまり話してなかったから」

答えたのはフェイトだ。どうやら自分のために集まってくれたらしい。シユウはどこか他人事のようにへえ、とうなずくと、はやての後ろの三人組に目を向ける。

「ということは、その三人がヴォルケンリッター？」

「そうだが……。誰から聞いた？」

そう答えたのはポニーテールの女性。シユウがクロノさんに、と答えるとうなずいて

納得していた。

「では我らの出自に関しては改めて言う必要もないな……。シグナムだ」

ポニーテールの人がそう言ったのを皮切りに、順番に挨拶をしていく。

「あたしはヴィータだ」

一番幼そうな赤髪の子が言って、次に金髪の女性が続く。

「シャマルよ。よろしくね、西崎君」

そして最後に、

「ザフィーラだ」

「犬が喋った!」

「うおっ!」

青い犬が口を開いた瞬間、シユウは目を輝かせて身を乗り出していた。青い子犬は突

然のことに驚いて固まっている。

「撫でていい? 噛まない?」

「いや、私は……」

「大丈夫。噛まへんよ」

「主っ?」

シユウが青い犬の頭を撫でる。犬は不服そうにしていたが、大人しく撫でられてい



た。

「守護獣だっけ？ 犬だね」

「かわいいやろ？」

「……………」

犬は無言。ヴィータが笑いをかみ殺しているのが少し気になったが、シユウは気にせずなで続ける。

「ちなみにこつちの赤い犬がアルフ。かわいいでしょ？」

フェイトがそう言って、赤い子犬を差し出してきた。シユウが再び瞳を輝かせる。

「かわいい！」

「撫でていいよ？」

「フェイトっ？」

「では遠慮なく」

青い犬から手を離し、今度は赤い犬を撫でる。両方ともふわふわの毛で、とても撫で心地がいい。顔がだらしなく緩んでしまっていることを自覚しているが、止められない。

「西崎君は動物が好きなの？」

そう聞いてきたなのはにシユウは視線を向け、うなづく。

「うん。あとシユウでいいよ。友達はみんなそう呼ぶから」

「え……？ いいの？」

「え？ 友達じゃだめ？」

驚いて聞き返すシユウに、なのはもわずかに驚く。だがすぐに笑顔になって、

「そんなことない！ よろしくね、シユウ君！」

「はいよろしくー」

そんな会話を交わしている間に、いつの間にかシユテルが出かける準備をしていた。財布と折りたたみ傘の確認をしているシユテルにシユウが首を傾げると、シユテルはすぐに気づいて説明する。

「夕食の買い出しに行つてきます。少し量が多いので……。なのは、ご一緒していただけますか？」

「うん。もちろん」

なのはがうなずいてこちらも準備を始める。といつても折りたたみ傘を持つただけだが。

「買い物なら僕が……」

「いえ、貴方はここにいてください。せつかくなので、他の方とお話を。では行きましようか、なのは」

「うん。それじゃあいつてきます」

二人そろって部屋を出て行く。シユウはどこか寂しそうにその背を見送った。一部始終を見ていたはやては、どこかおもしろそうな笑顔になる。

「なるほどな」

「なるほどって、何が？」

はやてのつぶやきに反応したにはヴィータだ。はやては首を振って、何でもないと笑った。

「ところでシユウ君……でええかな？ 王様の料理はどうやった？」

「なっ！ 何を言うか子鴉！」

皆がきて我関せずと読書を始めていたディアーチエが即座に反応する。シユウの方は、言葉の意味が分からずに怪訝そうな表情を浮かべた。

「ディアーチエの料理って……。もしかして、あのドリアはディアーチエが？」

驚いて聞くと、ディアーチエがそっぽを向いた。ほんのりと頬が赤くなっている。

「そうらしいで。それで、感想は？」

「ええい、黙れ子鴉！ 感想などいらぬわ！」

「あ……。そうだよ、僕の感想とかどうでもいいよね」

「な……。ま、待てシユウ！ そういう意味ではなくてだな……。！」

シユウが悲しげに目を伏せ、ディアーチエが慌てふためく。このようなディアーチエの反応は滅多に見れるものではないので、レヴィとユーリは目を丸くしていた。

「もちろん聞きたいとは思いますが、その、なんだ……」

「うん。すごくおいしかった。本当に」

「む……。そ、そうか……。いや、それならばいい……」

再びそっぽを向いてしまうディアーチエ。ユーリがこつそりとディアーチエの前へと場所を移動して、

「ディアーチエ。顔がにやけてます」

「ユーリ……！」

その言葉にディアーチエが再び慌て、はやてたちが笑う。シユウはぼんやりとディアーチエを見て、

——かわいいところもあるんだなあ。

こつそりと心の中でつぶやいた。

シユテルとなのはが帰宅して、すぐに夕食の準備が始まる。どうやら全員がここで夕食を食べていくらしい。人数が多いので、鍋とカセットコンロははやてとなのはがそれぞれ一セットずつ持参した。

太陽が沈み始めた頃に鍋が煮え、食べ始める。せつかくだからと、それぞれの鍋で水

炊き、すき焼き、うどんすきにした。ちなみにうどんすきのレシピははやての提供による。

各自それぞれ移動しながら食べていく。その時々で人の組み合わせは変わり、会話の内容も変化していく。それでも皆が意識してシユウを会話に入れようとしていたので、シユウも遠慮なく会話に参加することができた。

やがて夕食も終わりかけ、箸の動きが鈍くなる。移動も少なくなり、のんびりとした会話になっていく。シユウはその頃を見計らって、そつと部屋を後にした。

キッチンに面しているベランダに出る。物干し竿があるだけの少し寂しいベランダだ。このマンションのベランダはそれなりに広く造られているため、少し寂しくも感じる。

室内から聞こえてくる会話の声を聞きながら、シユウはのんびりと空を眺める。

「シユウ。どうかしたのですか?」

呼ばれて振り返ると、シユテルが立っていた。手には湯気の立つお椀。シユテルはシユウの隣まで歩いてくると、お椀を差し出してきた。

「雑炊です。いかがですか?」

「ありがとう。もううね」

シユテルからお椀とお箸を受け取り、まだ熱いそれを少しずつ食べる。

「うん。おいしい」

「それは良かった。ところで、何をしていたのですか？」

「んー……。空を見てただけ、だよ。あまり意味はないかな」

「空、ですか」

シユテルもとなりで空を見る。まだ雲が濃くかかっていたはずだが。

「ほんの少し前まではさ」

シユウが口を開くと、シユテルがこちらへと視線を向けてくる。それでもシユウは空を見上げたまま、続ける

「ずっと一人で家において、ご飯食べて……。寂しいと思うこともなくなって、なんて言え  
ばいいのかな、いろいろとどうでもよくなってたんだ」

「……………」

「シユテルと会って、一緒にご飯を食べたりして、今日みたいなことにも一緒にいさせて  
もらえて……」

そこでシユウは笑った。自嘲するかのよう。自分に対して冷たく笑う。心を冷や  
そうとする。

「二人のご飯がつらくなりそうだよ……」

心を冷やす。また一人になった時に耐えられるようにと。だが、ぬくもりを知ってし

まうと、そんなことは当然できるはずもなく。

「……一人は、嫌だなあ……」

気づくと、涙が流れていた。ぬくもりをもらったがために、家での孤独が怖くなる。孤独の冷たさを思い出すだけで体が震えてくる。ただただ一人。ただただ無音。もう慣れてしまっていたはずなのに、たった数日こうして過ごしただけでそれが何よりも怖い。

「シユウ」

シユテルがシユウの頬に触れる。手で涙を拭い、薄く笑みを浮かべた。

「二人でいる必要はありません。いつでもここに来てください。私たちはいつでも貴方を歓迎しますよ。貴方はもう家族も同然ですから」

「……シユテル……。ありがとう」

シユテルにつられるように、シユウも微笑んだ。

二人はそつと手を繋ぎ、今度は無言で星空を眺める。いつの間にか雲はなくなり、星の淡い光が二人を優しく包んでいた。

## 第六話 風邪

案の定風邪をひいた。

原因は分かっている。土曜日に土砂降りの雨の中を長時間走ったことが原因だろう。シユテルの家で風呂に入れてもらってはいたが、手遅れだったのかもしれない。

「ううう……」

頭痛にうなされながら、シユウは時計を見た。午前十時。もうあまり時間がない。

シユテルとディアーチエから、今日も昼食と夕食に誘われている。シユウにとつてもありがたい申し出ではあるので軽い気持ちで約束してしまったのが、この状態ではどう考えても行くことができない。

「約束破るのは嫌だけど……。風邪うつしちゃ、悪いしね……」

せめて連絡だけでもしておこう。そう思つてちやぶ台に置いてある携帯電話に手を伸ばそうとするが、

——……あ、無理。

頭痛がひどくなつて諦めた。もう少し休んでから連絡しよう。そう決めて、再びベッドに潜り込む。それにしても。



——シユテルが作るのかな、ディアーチエが作るのかな……。食べたかったなあ……。

空腹に耐えながら、シユウは小さくため息をついた。

次に目を覚ましたのは、携帯電話が鳴ったからだ。ぼんやりとした意識のまま頭痛をこらえて携帯電話に手を伸ばす。表示されている名前を見て、シユウは驚いて時間を確認した。午後一時。きつとかなり待たせてしまったに違いない。

シユウは慌てて通話ボタンを押すと、すぐに言った。

「ごめん」

『……突然ですね。急用でも入りましたか?』

電話の相手、シユテルの声はどこか不機嫌そうだ。それもそのはずだろう。昨日は正午までには行くと言った覚えがある。

「急用……。うん、急用が入ったんだ……。だから今日は行けそうにない。ごめんね、先に連絡をと思っていただけ……。」

怒らせることはしたくなかったが、心配させることはもつとしたくなかった。そのためシユテルの勘違いをそのまま利用する。

『……………』

無言が返ってくる。怒ってるかな、と不安になりながら、シユテル? と呼びかける。

『体調でも悪いのですか?』

突然言い当てられてシユウは押し黙る。それを凶星と取ったのか、シユテルがわずかに苦笑する気配が伝わってきた。

『大方、私たちに心配かけないように先ほどのことを言ったのでしようが……。わかりやすいですよ、シユウ』

「面目ない……」

全てを言い当てられシユウは情けなくなる。自分はそんなに単純な性格をしていただろうか。

『今はご自宅ですね? では今日の約束はまた後日ということにいたしました』

「うん……。本当にごめんね……」

『いえ、お気になさらずに。では』

電話が切れる。シユテルの声が聞こえなくなる。それだけで寂しさを覚えてしまうあたり、自分の心はとても弱くなってしまったようだ。

——……寝よう。

シユウは再びベッドに戻ると、すぐに目を閉じた。

次に目を覚ました原因は、聞こえてくるはずのない音が聞こえてきたからだ。部屋の扉側、短い廊下に備え付けられている流しから音がする。ぐつぐつと何かを煮込む音。

一体誰かと体を無理矢理に起こしてそちらを見る。

廊下への扉は閉じられているが、誰かがそこで何かをしていることは分かった。少しずつ思考を開始して、寝る前の電話を思い出す。電話を切る前に自分が自宅にいるかどうかをわざわざ確認していたような気もする。

——……もしかしなくても……。

扉が開けられる。そこに立っていたのは、やはりと言うべきかシュテルだった。

「おや、起こしてしまいましたか」

シュテルの手には小さな鍋。シュテルはそれをちやぶ台に置くと、一度流しの方へと戻る。次の戻ってきた時には、お椀とスプーンを持っていた。

「台所をお借りしました。事後承諾になってしまい申し訳ありません」

「いや、それはいいけど……。どうして？ むしろどうやって？」

「どうして、というのは理由でしょうか。体調が悪いと聞いたためです。貴方の声の調子から衰弱していると判断してここに来ました」

まさか声から判断されるとは。次があれば声にも気をつけよう。そう心に決める。

「どうやって、というのは家に入った手段でしょうか。鍵、空いていました」

不用心ですね、とシュテルはため息交じりに付け足す。それを聞いて昨日の記憶を思い出そうとしてみるが、そんな細かいところまでははつきりと覚えていない。だが確か

に閉めた記憶がないような気がする。

「以後気をつけます……」

「そうしてください。……まあ……。そのおかげで貴方を起こさずに済みましたが」

途中で起きられるというのは想定外でした、とつぶやきながら、シユテルはお鍋からお椀に中身を移していく。そのお椀とスプーンを差し出してきた。中身を確認すると、おかゆだった。黄色い何かが混ぜられている。

「さつまいもです。芋がゆにしてみました」

「ああ、なるほど……」

スプーンですくって口に運ぶ。一口食べて、二口食べて……。気づけばお椀は空になっていた。あ、と切なげな声をシユウが漏らすと、シユテルはうつすらと苦笑を浮かべ、シユウからお椀と取り上げる。すぐにお代わりを入れてくれた。

再び差し出されたお椀を受け取り、また食べる。そしてあつという間にお鍋は空になった。

「十分に用意したと思っていたのですが……。シユウ、まさか朝食は……」

「食べたと思う？」

「……愚問でした」

呆れたようにため息をつくが、その表情は柔らかい。そんなシユテルの顔を見なが

ら、シユウは何となく幸せな気持ちになる。今までは風邪をひいても、ただ寝て治したものだ。

不意に額に冷たいものが触れた。シユテルの手だ。ひんやりとしていて気持ちがいい。

「まだ熱いですね……。風邪薬を買ってきたので、それを飲んで眠ってください」

「う……。薬は飲みたくない……」

「子供ですか。飲みなさい」

子供です、という当然の反論はシユテルに睨まれてできなかつた。渡された水と薬を胃に流し込む。錠剤なので飲みやすくはあったが、やはり嫌悪感の方が強い。

「薬なんてここに来てから初めてだよ……」

そんなことをつぶやきながら布団にもぐる。横になると急に睡魔が襲ってきた。どうやらまだまだ回復は遠いらしい。シユテルが言うようにこのまま眠ってしまうとする。

早くも朦朧とした意識の片隅でシユテルへと視線を向けると、優しい微笑を浮かべてこちらを見つめていた。おやすみなさい、とかすかに聞こえてくる。いつまでいるんだろうと思いつながら、起きた時に側にいてくれたら嬉しいな、など思いながら眠りに落ちた。

## Side: Stern

シュテルはシュウが眠ったことを確認すると、押し入れの方へと向かう。ごめんなき、失礼しますと小声で謝罪して押し入れのふすまを開けた。押し入れは上下に分かれていて、上段には何も無い。おそらく普段はここに布団をしまっているのだろう。

下段には段ボール箱がいくつかときれいに畳まれた衣服やタオル、学校に必要なものなど。シュテルは目的のものがすぐに見つかったことに安堵しつつ、タオルを手を取った。流しへと向かい、冷水で濡らしてしっかりと絞る。それをシュウの額に置くと、表情が幾分か和らいだように見えた。

そこまでのことを終えて、シュテルは持つてきていた文庫本を取り出す。とりあえずはこのまま様子を見るため待機とする。文庫本を開こうとしたところで、ふすまを開けっ放しにしていたことに気がついた。

もう一度押し入れに向かい、閉める。その直前に、段ボールの上に置かれている写真立てに気がついた。悪いとは思いつつも手にとつて見てみる。

夫婦と思われる男女と、その男と手を繋いでいる笑顔のシュウ。この男女がシュウの両親なのだろう。そしてもう一人。

「妹がいるのですね」

女と手を握っているのはシユウよりも幼い女の子だ。順当に考えればシユウの妹だろう。そう言えばシユウの家族構成は聞いていない。

いずれ聞いてみたいと思いつながら写真立てを戻し、ふすまを閉めた。

「……………」

珍しくシユテルが息を呑む。視界の上、ふすまの上、天井。小さな穴が空いている。すぐに何食わぬ顔で戻り、読書を始めるふりをする。そつと待機状態のルシフェリオンを握り、魔法を展開。目に見えない魔力の玉がシユテルの目の代わりとして押し入れの穴の奥へ。

そこにあつたのは、監視カメラと思しきものだった。

「……………」

シユテルは内心で動揺しながらも表情には出さず、魔法を解除する。誰が何のために仕掛けているのかは分からないが、今自分にできることは何も無い。シユテルはとりあえずカメラのことを意識から追い出した。

Side: Hero

今度は自然と目を覚ました。シユウはゆっくりと目を開き、体を起こす。まだ体は重たいが、幾分か楽にはなった。

窓の外は暗く、部屋も電気が消されている。シユテルが消していつてくれたのだろう。そこまで考えて、扉の開閉の音で思考は中断された。

廊下を歩いて部屋に入ってきたのは、やはりシユテルだった。手には買い物袋がある。

「起きたのですね、シユウ」

いつもの無表情でシユテルが言う。シユウは笑顔でうなずいた。

「うん。おはよう。……夜だけど」

「はい。おはようございます。夜ですが」

シユテルは買い物袋をちゃぶ台に置くと、夕食を作ってきます、と言って部屋を出て行った。流しから音が聞こえ始める。

しばらく待つと、昼と同じく鍋とお碗を持ってシユテルが戻ってきた。今回も芋がゆのようだ。

「どうぞ」

差し出されたお碗を受け取り、ゆつくりと食べ始める。今回はお碗は二個あり、そのうちの一個でシユテルも食べ始めた。

無言で食事は進み、すぐに鍋は空になった。今回もシユウがほとんど食べてしまった。



「食欲はしつかりあるようですね」

「食欲だけはね」

自嘲気味に言うシユウの額にシユテルの手が触れる。冷たくて気持ちいいなあ、とまた思ってしまう。

「少し下がりましたね……。しつかりと眠れば、明日には治っているでしょう」

「うん……。ごめんね、助かったよ」

心の底から言うのと、シユテルはどういたしまして、と変わらぬ表情で答える。

「では風邪薬を飲んで眠ってください」

「いやさすがに無理だよ！ もう眠気もないし……！」

「横になっていればそのうち眠れますよ」

いやそれはさすがに、と言おうとしたところで水と薬を手渡された。渋々といった様子で胃に流し込み、また布団に横になる。本当に眠くなってしまふあたり、自分は本当に単純らしい。

「ではシユウ。明日の朝にお弁当を届けに来ます。あと夕食はいかがですか？」

「ん……。いいの？」

「今更そんなことを聞かないでください」

それを聞いたシユウは苦笑。じゃあお願いします、と答える。

「はい。では私はそろそろお暇いたします」

そう言ったシュテルの手を、シュウは反射的につかんでいた。わずかに驚くシュテルと、自分でも不思議に思ってしまうシュウ。だがどうしてか、離す気にはなれない。

やれやれ、といった様子でシュテルはため息をつく。だがその表情に棘はない。

「貴方が眠るまではここにいますよ」

「ん……。ごめんね」

シュテルの手がシュウの頬に触れ、お気になさらずに、という言葉が聞こえてくる。シュウはそれに笑顔を浮かべると、また深い眠りに落ちていった。

風邪をひくのも悪くない、そんなことを思いながら。

## 第七話 ヒーローショー

ある日の放課後、学校からの帰り道。シユウはいつも通りに着替えるために自宅へ帰るところだった。この後は普段通りシユテルたちの家で夕食をご馳走になる予定だ。正直自分でもかなり依存してしまっていると思う。

「ん?」

車が頻繁に行き交う大きな路地の歩道を歩いていると、向かい側から見覚えのある人影が走ってきた。人影はフェイトにうり二つだが、まとう雰囲気は全くの別物。ならば答えは一つだけ。

「レヴィ?」

レヴィはシユウに気づくことなく横を通り過ぎていく。しかしすぐにはつとしたように振り返り、シユウの姿をその目にとらえた。

「シユウ! いいところで会った!」

「は?」

「一緒に来て!」

「え？」

レヴィの勢いに流されるまま、シユウは右手を捕まれてレヴィと一緒に走る。何が何だか分からないが、緊急事態なのかもしれないと思い、レヴィについて行くことにした。

そしてたどり着いたのはデパートの屋上。そこで行われているのは、期間限定のヒーローショーだ。日曜日の朝に放送されている特撮番組らしいが、詳しいことはシユウには分からない。ヒーローが怪人に何かを叫び、躍りかかる。歓声を上げる子供たち。そしてレヴィ。

「いつけー！ そこだー！」

レヴィはとても楽しそうにしている。きつとこれを見るために来たのだろう。それは分かるが、なぜ自分が連れてこられたのかが分からない。

「ねえ、レヴィ。僕が来る必要って……」

「今いいところ！」

「あ、ごめん……」

怒られたことに少し落ち込む。とりあえずは自分もショーを見るが、元となっている番組を知らないのていまいちコンセプトが分からない。ただ集まっている子供の人数と歓声の大きさからして、それなりに人気のある番組なのだろうことは分かる。

三十分ほどしてショーは終わった。そしてアナウンスが流れる。

『期間限定販売のお菓子はステージ横での販売となります。このショー限定の販売となりますのでお見逃しなく……』

アナウンスが流れ始めた直後、レヴィはまたシユウの手を取るとステージへと走る。どうやら期間限定のお菓子というのも目的らしい。だがやはり自分は関係ないのではと思つたが、すぐに謎が解けた。

『なお、お一人様一個の販売となりますのでご注意ください』

つまりはお菓子をかうための頭数。少し残念に思つてしまうのはなぜだろう。

レヴィと一緒に列に並び、目的のお菓子を購入する。お菓子を受け取つたレヴィの表情はとても嬉しそうで、見た目の年相応の幼さだ。

「はい」

ステージから少し離れたところで、レヴィに自分が購入した分を差し出した。するとレヴィはぱつと顔を輝かせたが、すぐに表情を曇らせて上目遣いに自分を見てくる。どうしたのかと首を傾げると、

「いいの……？ 勢いで連れてきちゃったけど、シユウも欲しいんじゃない？」

どうやら自分のことを考えてくれていたらしい。シユウは思わず笑顔を浮かべると、首を振つた。

「僕は大丈夫。この番組、知らないしね。僕の方はレヴィに上げるよ」

今度こそレヴィに笑顔の花が開いた。シユウからお菓子を受け取り、大切そうにお菓子を抱きしめる。えへへ、と無邪気に笑う。

「ありがと！　じゃあボクの分はユーリに上げようかな」

「ん？　ユーリに？」

「うん。ユーリも好きなの、これ」

レヴィの話によると、本当はユーリと引率のディアーチェも一緒に見に来る予定だったらしい。だがディアーチェとユーリに予定が入り、シユテルも買い出しのために同行できず、仕方なくレヴィ一人で見に来たというわけだ。

「ユーリは今日のシヨウを楽しみにしてたから……。せめてお土産だけでもって思ってたんだ」

「そっか……。レヴィは優しいね」

そう言って頭を撫でてやる。見た目は同年代なので普通は嫌がられそうなものだが、レヴィは頭を撫でてもらうことが好きらしい。にへら、とだらしなく笑うと、

「そうかなー。えへへ、もつと撫でてー」

子犬か子猫のように甘えてくる。シユウは苦笑しながらも、レヴィが満足するまで撫でてやった。

デパートから出た二人はそのまま家路につく。レヴィの手にはビニール袋が握られ

ていて、中に入っているのはもちろんあのショーのお菓子だ。シユウは先に一度自宅に戻ろうかとも思ったが、わざわざ着替えに戻るのも面倒になったのでこのまま一緒に行くことにした。

デパートへ向かった時とは対照的に、のんびりと歩く。レヴィはデパートからずっと上機嫌で、鼻歌など歌っているほどだ。例の特撮番組の主題歌らしいが、見たこともないシユウには当然分かるはずもない。

しばらく歩いて公園にさしかかったところで、

「あれ？ レヴィにシユウ？」

公園の方から声をかけられた。見ると、フェイトが子犬のアルフと一緒にこちらへと歩いてくるところだった。アルフを見た瞬間にシユウが瞳を輝かせる。

「アルフ！ 撫でさせて！」

「えええ……」

アルフが思わず立ち止まり、シユウが少し傷ついたように落ち込む。それを見てアルフはどう思ったのか、仕方がないね、とつぶやいてシユウのところへとやってきた。

「少しだけだよ。あたしだって女の子なんだから恥ずかしいんだよ」

「了解！」

シユウがアルフを抱きかかえて頭を撫でる。アルフはやれやれと首を振っていたが、

抵抗はしなかった。

「オリジナル、オイツスー！」

「あはは。こんばんは、レヴィ」

シユウがアルフに夢中になつていたので、レヴィとフェイトは二人で話を始める。

「珍しい組み合わせだね。どこに行つてたの？」

「デパート！ ちょっとヒーローショーを見に！」

「ああ……。好きだつて言つてたね、特撮」

「うん！ だつてかつこいいし！ こう、シユバツつて！ ピカツつて！」

「そ、そうだね……」

あまりに抽象的すぎてさすがに意味が分からない。隣で聞いていたシユウすら思わず苦笑していた。フェイトとは本当に対照的で、性格も表現もかなり子供っぽい。

——子供の自分が言うことでもないけど。

ぼんやりとそんなことを考え、アルフを解放する。地面に下りたアルフは、振り返つて聞いてくる。

「もう満足したのかい？」

「うん。いつもごめんね」

「撫でられるぐらいいいさ。ほどほどならね」



アルフはそう言うと、フェイトのもとへと戻っていく。フェイトがそれを迎えて、頭を撫でていた。レヴィがそれを少し羨ましそうに見ているのはきつと気のせいだろう。

「……変身魔法でも覚えようかな」

「レヴィ……」

「冗談だよ、冗談！」

レヴィが慌てたように言う。先ほどの声には真剣な色が帯びていたが、あえて何も言わないことにした。

「じゃあシユウ！ そろそろ帰ろう！ シユテるんに怒られちゃうー！」

「それもそうだね……。それじゃあフェイト。また学校で」

「うん。またね、シユウ」

シユウとレヴィが手を振って、フェイトも手を振る。今度こそ二人は家への道を歩き始める。

「ところでさ、レヴィ」

レヴィと並んで歩きながら口を開く。レヴィは上機嫌を維持したまま鼻歌を歌っていたが、シユウに呼びかけられて中断した。

「なに？」

「そんなに撫でられたいの？」

撫でられることが好きだとは聞いたが、わぎわぎ変身魔法を覚えてまでとは思っていなかった。問われたレヴィは笑顔でうなずく。

「うん。大好き！」

「なんで？」

「へ？　なんでつて……」

理由を聞かれると、今度は返答に窮していた。首を傾げ、なんでだろ？　と自問している。しばらく歩きながら考えていたようだったが、やがてレヴィは一度だけうなずいた。

「うん！　分かんない！」

「あはは……。予想はしてたよ」

シユウは思わず笑みを浮かべた。深く考えすぎないところがレヴィのいいところでもある。感覚的なもので理屈で説明することはできないのだろう。

「レヴィ、わぎわぎ変身魔法を覚えなくてもさ」

「うん」

「僕でよければ、いつでも撫でてあげるよ」

それを聞いたレヴィが、ふえ？　と間拔けな声を漏らして立ち止まった。呆けたように立ち止まっていたので、心配になって振り返る。レヴィはまだしばらく啞然としてい

たが、すぐに満面の笑顔になった。

「ホントに？」

「うん。もちろん」

「えへへー。約束だよ！」

嬉しそうに笑いながらレヴィが走る。シユウは慌ててそれを追った。

「たっだいまー！」

「お邪魔します」

レヴィの元気な声が室内に響き、シユウの控えめな声はそれにかき消される。少しして、シユテルとユーリが顔を出した。

「お帰りなさい、レヴィ。いらっしやい、シユウ」

「レヴィ！ ショーはどうでしたか！」

挨拶もそこそこにユーリがレヴィのもとへと走る。レヴィはユーリへと身を乗り出して、

「すっごくおもしろかった！ えっとね……」

熱く語り出した。ユーリも熱心にそれを聞いているので、邪魔しないようにシユウは先に家にかかる。

「すみません、シユウ。レヴィがお世話になったみたいで」

「いや、僕も楽しかったよ」

「それならば良いのですが……。今王と夕食を作っているところなので、もう少々お待ちください」

「ん。分かった」

シユテルがキッチンへと戻るのを見送って、シユウはリビングに入る。いつの間にか決まっていた自分の定位置に座り、ふう、とため息をついた。正直に言うとは少しだけ疲れていたりもする。

すぐにレヴィとユーリが入ってきて、ユーリが嬉しそうにシユウに駆け寄ってくる。

「シユウ！ お菓子ありますがどうぞございます！ すごく嬉しいです！」

「あはは。どういたしまして」

ここままで喜ばれるとは思ってもみななかった。どうやら本当に好きらしい。ユーリはその後すぐにキッチンへ行き、何かを話し始めている。

レヴィはリビングに戻り、こちらも自分の定位置に座った。お菓子の袋を開けようとしたが、すぐに夕食が出てくるだろうことを思い出したのか部屋の隅に置く。それでも視線は頻繁にお菓子へと向いていたが、やがて諦めがついたのか小さくため息をついてシユウに向き直った。

「シユウ！」

「今日はほんとにありがとう！ 助かったよ！」

「一緒に行ったただけだけどね……。まあ喜んでもらえてるなら、それでいいけど」

レヴィの笑顔を見てみると、放課後を潰した甲斐はあったというものだ。こういうのも、たまになら悪くない。

「せっかくだからさ、レヴィ。僕にもそのヒーローのこと教えてよ」

「おお！ シュウも興味あるっ？ いいよいいよ教えてあげるー！」

喜色満面に語り出すレヴィ。その屈託のない笑顔を見ながら、

——うん。悪くない。

心からそう思った。

## 第八話 来訪

「おっじゃましまーす！」

シユウの部屋で、普段なら絶対にならない大音声が響き渡る。元気なことはいいことだが、これでは近所迷惑だ。そう判断して、叫んだレヴィにディアーチェが注意する。

「やかましい。近所迷惑だ。すなわちシユウに迷惑がかかる」

「ああ！ ごめんシユウ！」

言われて、レヴィが部屋の主へと頭を下げた。

シユウは部屋の中央で、ぽかんと間拔けな表情を晒していた。

日曜日の昼前。約束もないし書店にでも行こうかと思つてぼんやりしていると、唐突に自宅のドアが開いてレヴィが現れた。続いてディアーチェ、ユーリ、シユテルが入ってくる。

「突然すまぬな。何かをするところであつたか？ 我らのことは気にするな」

「ディアーチェがそう言い、続いてユーリが、

「お邪魔します、シユウ。お元気ですか？」

にこやかにそう言う。最後にシユテルがいつもの無表情で言う。

「お騒がせしてすみません。ご迷惑でしたか?」

シユウは首を振る。迷惑なはずがない。来てくれて本当に嬉しい。だがしかし、せめて事前に連絡ぐらいいは欲しいものだ。突然すぎて何も用意をしていない。

「……ちよつと待って」

シユウは客人四人をその場で待機させると、部屋の隅に積まれた座布団をちやぶ台に並べる。続いてお茶でも入れようとしたところで、

「ジユースを買ってきました。いかがですか?」

シユテルが持つていたビニール袋を掲げてみせる。中に入っているのはオレンジジユースとリングジユースのようだ。シユウは思わず笑顔になると、じゃあもらうね、とビニール袋を受け取った。

流しに立ち、棚を見る。紙コップぐらいいあるだろうと思つたが、一個もなかった。

「紙コップも買ってきました。同じ袋に入っていますよ」

「……ほんとだ。使わせてもらうね」

結局自分が用意したものは座布団だけになる。いつも通りなのだが、まさか自分の家でもこんなことになるとは。せめて何かお菓子でもあればいいが、そんなものがあればすでにシユウの朝食になっている。

せめて体を動かそう、そう決めて紙コップにジュースを注いでいった。

ちやぶ台にジュースの入った紙コップが並ぶ。それぞれ中身を確認せずにコップを取り、のどを潤していく。

「やっぱりジュースは百パーセントだね!」

「ですぬ!」

レヴィとユーリが笑顔で言つて、シユウも黙つてうなづく。一気に飲み干し、一息ついたところで全員をぐるっと見回した。

「……それで、急にどうしたの?」

シユウがそう聞くと、ディアーチエが、うむ、とうなずいて答えてくれる。

「レヴィとユーリがシユウの家に行つてみたいと言ひ出してな」

「だつてシユテるんばつかりずるいし!」

「ずるいですし!」

「何がずるいかはよく分かりませんが、ならみんなで行きましょうということになります」

最後にシユテルが締めくくる。四人の言葉を聞いたシユウはなるほど一つうなずいた。

「動機がすごく単純すぎる気がするけど、一応納得。でもできれば、家を出る時でいいか



ら連絡ぐらい欲しかったかな……」

「それについてはその通りです。すみません」

シユテルが静かに頭を下げる。責めているつもりもなかったシユウがまさか謝罪されるとは思わず、少し慌ててしまう。

「別に怒つてるとかじゃないから……！ ジュースも買ってきてもらつたし！ そ、それにこつちも何も用意できないし！ お昼ご飯とかもないよ！」

「それなら弁当を作ってきておいたぞ」

「用意周到すぎて何も言えない……。うん。まあせつかく来たんだし、何もないけどゆつくりしていいよ」

シユウは苦笑とともにため息をついて、おかわりを入れてくる、と全員のコップを回収して流しに向かった。

昼食は四人が持つてきた弁当をちやぶ台に広げた。弁当と言っていたが、三段重に様々なおかずが詰められている。家で食べるには少しもつたいたい気もしてしまう。

「まさか家でこんな豪華なものを食べることになるなんて……」

そう言つて、口に食べ物を入れる。それを見ていたディーアーチェが苦笑した。

「豪勢と言いながら最初に口に入れるのはおにぎりか。せつかく作つたのだ、遠慮はするなよ」

「そうだよシウウ！ ボクも手伝ったんだからいろいろ食べて！ ほら、これとか！」

レヴィが紙皿に焼き魚を盛りつけ、シウウに差し出してくる。それを受け取る前に、その紙皿にさらにユーリが少し形の崩れたハンバーグを盛る。

「これは私が作ったんですよ！ 食べてください！」

「では我はこれを勧めよう」

「私はこちらを」

ディアーチエは卵焼きを、シユテルは春巻きをさりげなく盛って。シウウの目の前に置かれた時には、おかずで山になっていた。

「うん、嬉しいんだけど……ゆっくり食べさせてほしい、かな……？」

「そう言わずに食べるんだー！」

「ちよ、やめ、レヴィ……！」

レヴィがシウウの口へと半ば強制的に食べ物を詰め込む。ユーリが楽しそうに笑い、シユテルが呆れ、ディアーチエが叱る。場所は変わってもいつもと同じ食事風景だ。

「むぐ、ぐ……。おいしい……」

「でしょ！ さあ、もっと……」

「いい加減にしなさい、レヴィ」

シユテルが注意したところで、レヴィは残念そうに手を引つ込めた。できればもう少

し早く止めてもらいたかったが。とりあえず口の中のを租借して、のどの奥へと流し込んだ。

「ふう……。うん。本当においしい」

「そうですか。それを聞いて安心しました」

「少し早起きした甲斐があったというものだ」

シユテルとディアーチエが満足そうにうなづく。ただ、それを聞いたシユウは小さく首を傾げて、二人を笑顔で見た。

「つまりここに来たのは計画的だった？」

「……………」

二人がそろってそっぽを向く。凶星らしい。シユウは苦笑するが、悪い気はしない。今まではここに訪ねて来る者などほとんどいなかったのだ。こうして来てくれただけで、驚きよりも嬉しさの方が勝っていた。

わいわいと楽しげに食事を進める四人を見て、シユウは幸福感に包まれていた。

——これを両親が見たらどう思うだろう。

そんなことを思いながら。

夕方。今度はシユテルたちの家で夕食を食べるために移動を開始する。昼食をこ馳走になったからと断ろうとしたが、すでに準備は済ませていると押し切られてしまっ

た。ありがたいのだが、どうにも申し訳なく感じてしまう。

——どうにかして恩返しをしないとなあ。

前を歩く四人を見ながら、シユウは考える。この四人に自分ができることなどあるかが分からないが。

やがて、前を歩いていた四人が唐突に足を止めた。

「どうしたの?」

シユウが怪訝そうに聞くと、シユテルが振り返った。しばらく何かを考えていたようだが、仕方がないというように首を振り、言う。

「シユウ。すみませんが、先に向かつておいてください。少し用事ができました」

「ん……。別にいいけど、用事って……」

内容を聞こうとしたところで、これもまた突然不思議な感覚がシユウを襲った。気がつくのと、周囲の雰囲気が変わっている。自分たち以外の人がいなくなり、とても静かになった。

「ああ、魔法関係か……」

シユウがつぶやく。仕方がないね、と四人を見ると。

全員が目を丸くしていた。

「え? あの、シユテル……?」

シユテルは無言。静かに目を閉じ、ため息をついた。

Side: Stern

アースラのエイミーから念話での通信が入る。

『ごめんね、シユテルちゃん！ とりあえず結界の展開は完了したから、ロストログアの回収お願い！』

緊急の依頼として舞い込んできたものは、もうすぐこの近辺に出現するだろうロストログアの回収だ。緊急の依頼は今に始まったことではないのでそれは構わない。最近少し多くなってきた気もするが、そんなこともあるだろう。しかしそれよりも。

『エイミー・リミエツタ。また一般人が巻き込まれています』

『えっ！ 嘘！ 誰？ 知ってる人？』

『シユウだ。貴様らは何をやっておるのだ』

念話に割り込んできたのはディアーチエだ。その声は少し不機嫌そうであり、実際表情もかなり険しいものになっている。

『ええっ！ 確かに結界の設定も調整もしたはずなのに……。おかしいなあ……。』

少し考える時間があり、そして唐突に通信の設定が切り替わった。念話から、実際に声が聞こえるものへと。

「こちらエイミー。シユウ君。聞こえるかな？」

どこからともなく聞こえてくる声にシユウがわずかに驚くが、すぐに笑顔になる。

「聞こえますよ。オペレーターさん、でしたっけ」

「うん、そう！ ごめんね、また巻き込みちゃって……。もう一度設定を見直して原因を究明するから……！」

エイミーの申し訳なさそうな声にシユウは苦笑する。どうやら前回のことである程度慣れてしまったようだ。

と、突然、分かった！ というエイミーの明るい声。

「シユウ君は人間じゃないんだ！ だから結界に巻き込まれるんだ！」

「……………」

重い沈黙が周囲を支配する。あ、あれ？ とエイミーの困惑した声だけが響く。

「エイミー……」

別の声。執務官、クロノの声だ。

「エイミー・リミエツタ。あとでゆつくりお話をしましょうか」

シユテルの静かな声。エイミーが狼狽したような声で、

「ご、ごめん！ ちょっと場を和ませようとした冗談のつもりで……！」

「管理局。あとで訓練室を貸せ」

そう言ったのはディアーチエだ。エイミイがさらに慌てる。

「待つて何をするつもりかな！」

「エイミイ、言い残すことがあれば今のうちに考えておくんだ」

「見捨てられたっ？」

ぎやあぎやあと通信で騒ぐ。シユテルはそれを聞きながら、小さくため息をついた。ふと見ると、シユウは腹を抱えてうずくまっている。

「ぷ……………くく……………」

どうやら嘔き出すのを必死に堪えているらしい。シユテルはそのシユウの様子を見ながら薄く微笑むと、

「さて、では冗談は置いておきまして……。始めましょうか」

出現した上空の光の奔流を鋭く見据えた。

出現したロストロギアの封印後、シユテルは一人アースラに来ていた。夕食の支度は王に任せている。待つているから早くしろ、とのことだった。

「失礼します」

ブリッジに入ると、すぐ側に艦長のリンデイが待機していた。お疲れ様、と笑顔で出迎えてくれる。

「こちらが封印したロストロギアです」

そう言つて、シユテルは小さな箱を差し出した。どういった効果を持ったロストロギアか分からない。リンディはそれを受け取ると、そのままクロノに渡した。

「ありがとう、シユテルさん。クロノ、あとはよろしくね」

「はい、分かりました」

クロノが一礼して去つて行く。それを見送つた後、リンディは改めてシユテルに向き直つた。

「またあの子を巻き込んでしまつたけど……。その後の様子はどう？」

すぐにシユウのことを言っているのだろうと察しがつく。そうですね、とシユテルは少し考え、意趣返しをすることにした。

「自分の正体について思い悩んでいましたよ」

「う……………」

奥の方からエイミイのうめき声。リンディがくすくすと忍び笑い。

「冗談です。特に何も。ただあまり気にしないでほしいとの伝言を預かっています」

「そう……。わざわざありがとう。でも何かしらの形で何かお詫びをします、とだけ伝えてもらえる？」

「はい。承りました」

うなずき、そしてきびすを返す。ブリッジを出ようとしたところで、



「立て続けにロストロギアが飛来するなんて……。何が原因なのかしら……。」「そんなつぶやきが聞こえてきた。

Side: Hero

「あ、おかえり」

テーブルに夕食を並び終えたところで、シユテルが戻ってきた。ただいま戻りました、と律儀に返事をしてくれる。

「戻ったか。では夕食にするぞ」

「はい」

ディアーチエが言って、それぞれの席につく。皆で手を合わせ、いただきます、と同時に言う。今日もいつもの夕食が始まる。

「それにしても、今日は本当に驚いたなあ」

シユウの言葉に、シユテルが申し訳なきように眉尻を少し下げた。

「すみません、シユウ。次からは必ず連絡します」

「あはは。別に大丈夫だよ」

笑いながら返事をして、

「またいつでも来てね」

と付け足す。それを聞いたシユテルはしつかりとうなずく。  
「はい。必ず」

シユテルの言葉を聞いて、シユウは嬉しそうに微笑んだ。

## 第九話 読書

ある日の放課後。シユウは行きつけの書店に立ち寄っていた。店主に会釈して、おもしろそうな本がないか探し始める。

「……あれ？」

見つけたのは本ではなく人だった。推理小説のコーナーで見知った人が立ち読みをしている。確かに家でもよく本を読んでいるところを見かけるが、こんなところで会うとはさすがに思わなかった。

「ディアーチェ？」

呼びかけてみると、ディアーチェが振り向いた。シユウの姿を認め、少し驚いたように眉を持ち上げる。

「なんだ、シユウか」

そう言ったディアーチェはすぐに視線を本へと落とした。熱心に読みふけている本が気になり、そつと下からのぞいてみる。推理小説だった。

「気になるなら言えばいい。タイトルぐらい言うぞ」

「ディアーチエの呆れたような目。自然と視界に入るだろうから当然と言えば当然か。シユウは照れたように頬をかき、姿勢を戻す。」

「推理小説が好きなの？」

「推理小説が、というわけではない。目についたものを読んでいただけだ」

そう言うと、ディアーチエは本を閉じて棚に戻す。次の取ったのは、その右側の棚からだ。こちらは今はファンタジー小説のコーナーとなっているらしい。ディアーチエはタイトルと表紙を確認すると、すぐに読み始めた。

シユウは、このままここにいってもいいのだろうかと少し悩む。読書中の人間に声をかけ続けるほど無神経な人間ではない。素直に自分も本を探すが得策だろうと判断してその場を離れようとしたが、ディアーチエ本人から呼び止められた。

「探している本でもあるのか？ 我でよければ手伝うが」

「あ、いや……。僕もおもしろそうな本がないかなって探してるだけだから。……よく読みながら話せるね」

「それぞれに意識を向けているだけだ。魔導師ならこれぐらいはできて当然のことだぞ」

それはすごい、と素直に感心する。同時に便利そうだな、とも。

「僕でもできるようになるかな」

「我が知るか」

素っ気ない返事だ。シユウは苦笑すると、先ほどまでディアーチェが持っていた本を手を取った。聞いたこともない推理小説だ。

「これ、おもしろかった？」

「いや」

え、とシユウはわずかに驚く。あれだけ熱心に読んでいたのならおもしろいのだろうと思つたのだが。

「展開稚拙、伏線回収不足、犯人の動機が逆恨みな上に犯行方法はご都合主義。三流もいといところだ」

「言いたい放題だ……！　なんで読んでたの？」

「読みかけたからだ。それ以上の理由はない」

それよりもこちらを勧める、とディアーチェは本を読みながら起用に棚の本を引き抜いた。その本を受け取りタイトルを見てみるが、これも聞いたことのないものだ。

「まあ……。ディアーチェが言うならきつとおもしろいんだろうね。どれどれ……」

シユウも本を読み始める。こちらはディアーチェのように器用ではないので会話と並行することはできない。ディアーチェもそれを分かっているのか、シユウが読み始めてからは話しかけなくなった。

どれぐらいの時間が経つたのだろうか。ディアーチェに肩を叩かれて振り返ると、あきれ果てたような表情がそこにあった。首を傾げながらも時計を確認して、すぐに理由に思い至る。もう午後七時だ。外はかなり暗くなっている。

「ずいぶんと集中していたな。気に入ったのなら、勧めた我としても満足だ」

シユウは本を閉じて、照れくさそうに笑った。

「うん。おもしろいね、これ。気に入ったよ」

「そうか」

「もうちよつとで読み終わるから、あと三十分待つて」

「そう……。待て！ シユテルに何と言えば……！」

ディアーチェが慌て始めた時には、シユウはすでに読書を再開していた。そこから、もう声をかけても反応しなくなった。

シユウは三十分と言ったが、実際は十分ほどで読み終えていた。ふう、とどこか満足したようなため息をつき、本棚へと本を戻す。それを確認して、ディアーチェは長々ため息をついた。

「まったく……。早く帰るぞ。今頃レヴィが騒いでいるだろう」

ディアーチェが本を抱えてそう言つて、カウンターへと消える。一瞬しか見えなかったが、先ほどまでディアーチェが読んでいた本がまぎつていたと思う。読み終わらな

かったのだろうか。自分だけが読み終わるまで待たせてしまったことに後悔する。

「ディアーチエを追ってカウンターへ向かうと、店主と目が合った。

「なんだ、知り合いか？」

店主が気さくに笑いながら言う。シユウがうなずくと、ふむ、と店主は手をあごに当てる。少し考え、にやりと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「シユテルちゃんがいるのにこんな子ともお近づきになっているとは……。やるな！」

「いや違うから！ 思っている関係と絶対に違うから！」

分かつてる皆まで言うな、と店主が手を上げる。今度はディアーチエに向き直ると、少し驚いている様子のディアーチエに笑顔を向けた。

「その本は持つていってくれていいよ。二股かけてる彼氏さんに出してもらおうから」

「いや色々とおかしいよー」

その後、関係を説明するのにさらに十分の時間を要した。シユテルとの関係から始まり、最近夕食をご馳走になってることまで。もちろん魔法のことは伏せておいたが。

全て聞き終えた店主は、自分のことのように嬉しそうだった。

「そうか。最近明るくなったのはそのためか」

え、とシユウが間拔けな声を上げる。店主はその間にディアーチエへ、今度は真剣な

表情を向けた。

「この子と仲良くしてやってくれ。強がってばかりいるが、寂しがり屋なんだ」

シユウが驚いて目を瞠った。予想以上に店主に観察されていたらしい。気恥ずかしくなつて何も言えなくなる。ディアーチエはそんなシユウを一瞥して、店主にうなずいた。

「言われるまでもない」

すっかり暗くなつた夜道を二人は歩く。向かうはマンシヨンだ。隣を歩くディアーチエは黙つたまま何も言わない。シユテルと念話をする、と言つていたのでシユウも邪魔しないようにただ黙々と歩く。

シユウの右手には紙袋が握られている。中に入っているのはディアーチエの本だ。結局店主から譲られる形になつてしまつた。その代わり、シユテルと同じくディアーチエにも時折顔を出すように言つていたが。

やがてディアーチエが小さくため息をついた。どうやら念話は終わつたらしい。

「終わつたぞ。寄り道せずに戻つてくるように、とのことだ」

「あはは。怒つてるかな?」

「誰のせいだと思つておる」

まつたく、とディアーチエは呆れるが、その表情は柔らかい。



「ところで、この本……読んでなかった？」

疑問に思っていたことを聞いてみると、ディアーチェは、そうだが、と当然そうにならずいた。どうやら何を聞かれたのか理解していないらしい。シユウは少し考えて、なるほどとうなずいた。

「そっか、これはシユテルにか」

「ああ。あやつもよく本を読むのな。お互いにおもしろいと思う本があれば、こうして相手にも勧めている」

なるほどね、とシユウはうなずいた。続いてもう一つ聞いてみる。

「あの書店は、もしかしてシユテルから聞いたの？」

「そうだ。そう言えばシユテルはシユウから聞いたと言っていたな」

ディアーチェは足を止め、シユウを見る。シユウもすぐに立ち止まって振り返った。

「良い店主、良い書店だ。あの男性もなかなかおもしろいやつだ。これからも通わせてもらおう」

ディアーチェがうなずきながら言うのを見て、シユウは少し嬉しくなった。自分にとつても、あの書店は常日頃からお世話になっている。こうしてあの書店の常連が増えるというのは喜ばしいことだ。

再びディアーチェが歩き出し、シユウもその隣を歩く。しばらくお互いに無言で歩い

ていたが、やがてディアーチエが口を開いた。ただ、珍しいことにその声は少し聞き取りにくいぐらいには小さかったが。

「よければ、その、なんだ……。我一人では少々行きづらいというのもある。あそこに行く時は声をかける。だから……」

「うん。一緒に行くよ」

ディアーチエは少し目を丸くし、すぐにわずかに笑みを浮かべた。

夕食後。シユウとディアーチエはテーブルに向かい合って座っていた。お互いに難しい表情をして、押し黙っている。シユウの隣にはシユテルがいて、こちらはとある本を読んでいるところだ。

「なるほど、そういう捉え方もあるか……」

そうつぶやいたのはディアーチエだ。視線をシユテルの持つ本に向け、ふむ、と腕を組む。

「ディアーチエの言う方が多分正しいんだろうけど、僕はそう感じたかな」

二人が話しているのは、ただの本の感想だ。お互いに自分はこう思ったというのを話している。その本は、現在シユテルが読書中だ。

「しかし、その考え方なら、あの犯人の動機に矛盾が発生するぞ？」

「うん。でもその動機に関してもしか……」

楽しんで二人で話を進める。その部屋の隅では、レヴィとユーリがテレビを見てい  
る。二人も最初こそ話を興味深そうに聞いていたが、すぐに飽きてテレビへと行ってし  
まった。そしてシユテルは、いつもの定位置で本を読んでいるだけなのだが、どこか不  
機嫌そうだ。

「そうなると犯人はずいぶんと阿呆だな。恋人を殺してそれだと報われん」

「まあそうなるよね」

ぴくり、とシユテルの眉が動いた。だが何事もなかったかのように時間は進む。

「これは是非ともシユテルの意見を聞かねばならんな」

「うん。今どのあたりかな？ 妹が犯人だつて名乗り出たところかな？」

「……………」

シユテルが小さくため息をつく。本を閉じてそっとテーブルに。そしてシユウと  
ディアーチエを順番に見る。

すぐに悟った。これは怒らせてしまったらしい。

「シユウ」

「……………はい」

「ディアーチエ」

「……………うむ」

呼ばれて、二人は静かに返事をする。

「一言だけ言わせてください。うるさい、と」

「……ごめんなさい……」

「……すまぬ……」

神妙な面持ちで謝罪を口にする二人。シユテルはそんな二人に満足したのか、再び本を手にとって読み始める。シユウとデИАーチェはしばらく押し黙っていたが、目が合うと苦笑を交わした。

その二人の様子にもシユテルはしつかりと気づいていたが、今回は何も言わない。ただ少し嬉しくは思う。本の議論など今までやっていなかったことだ。二人で帰ってきた時は何かなかっただろうかと少し心配したものだ。どうやら少しは仲良くなったらしい。

喜ばしいことだと納得しているが、同時に少し苛立ちも感じる。そんな自分の感情に自分が一番戸惑っている。

そのシユテルの感情の揺れ動きなど知らない二人は、

「シユウ。推理小説ではこの本が一番おもしろい。読んでみるがいい」

「お、ありがと。じゃあ僕はこの本を勧めておくよ。ファンタジーでは一番おもしろかった」

お互いに本を差し出して読書を始めていた。

## 第十話 縛鎖

「あ！ 流れ星！」

車の中。隣で嬉しそうに叫ぶ妹。呆れる自分。

「何言ってるの。今は昼だよ」

「ほんとだよ！ ほんとに流れ星だよ！ ほら！」

必死な声。窓の外を示す小さな手。そちらへと目をやる自分。そして見つける、こちらへと向かってくる光の塊。

そして……。

「っ！」

シユウはかつと目を見開き、飛び起きた。混乱した頭で周囲を見回す。見慣れた自分の部屋で、窓からは朝日が差し込んでいる。少しだけ寝過ごしてしまったらしい。

「……夢、か……」

忘れたくても忘れられない、昔のこと。時折夢に見ては、こうやって飛び起きる。忘れるなという警告だろうか。そんなものなどなくても、忘れられるはずがないというのに。

気分のいい目覚めだとは到底言えない。もう一度寝ようかとも思ったが、朝日を見てしまうと寝ようとも思えなくなってしまう。仕方なくシユウは着替え始める。が、途中で動きを止めた。頭痛がひどい。

「あー……。まあ、そうだよね……」

あの日の夢を見た後はいつもこうだ。だが普段は我慢できる痛みなのだが、今日はひどい。あまりの痛みで、立ち上がろうとした時に意識が飛びかけた。立ち上がるだけでこれなら、歩くようになるのか。考えるだけでも嫌になる。

シユウはまたため息をつくと、ゆっくりとした動作でちやぶ台に置いている携帯電話に手を伸ばした。

——学校は……休もう……。

休む旨を連絡した後、再び布団に横になる。だが、何かを忘れている気がする。そしてそれはすぐに思い出した。

呼び鈴が押される。部屋に音が響く。シユテルが弁当を持ってきてくれたのだろう。シユウはのろのろと立ち上がると、頭痛がひどくならないように注意しながら玄関へと向かう。ドアを開けると、果たしてシユテルがそこにいた。

「おはようございます、シユウ……。大丈夫ですか？」

シユウの顔を見た瞬間、シユテルがわずかに眉を寄せる。シユウはどうか笑顔を作

ると、

「おはよう、シユテル。大丈夫だよ。元気」

「無理しないでください。上がりますよ」

シユテルは靴を脱ぐと、シユウをすぐに支える。そしてそのまま部屋の中へ。無理をしているのがすぐにばれてしまったらしい。

——かなわないなあ……。

心の中で苦笑して、シユテルに連れられて布団に座る。

「風邪……ではないようですね。熱もありませんし」

「うん。ただの頭痛だよ。ちよつと昔の夢を見て……」

「昔の夢、ですか」

シユテルの表情がかすかに曇る。そのことには気づかず、シユウは続ける。

「ちよつと嫌なことを思い出したただだよ。あまり気にしないで」

シユテルはしばらく黙っていたが、やがて小さな声で、分かりましたと返事をした。立ち上がり、流しに向かつてコップに水を入れる。それをちやぶ台に置いて、シユテルはすぐにきびすを返した。

「朝食でも買ってきましょう。何がいいですか？」

「じゃあお言葉に甘えて……。あ、でも任せるよ」



「分かりました」

シユテルが部屋を出て、ドアの閉まる音が続いて聞こえてくる。シユウは力なくため息をつくど、布団に横になった。心配させまいと強がってみたが、逆に心配させてしまったようだ。

「どうにも……だめだなあ……」

自分はシユテルの隣にいてもいいのだろうか。離れた方がいいのでは。そんなことばかり考えてしまう。シユテルが聞けばきつと呆れられてしまうのだろうか。そんなことを考えている間に、シユウは再び眠りに落ちた。

白い部屋で眠る妹。二度と立ち上がることでできなくなった妹。自分を薄気味悪いもののように見る両親。運ばれていく棺。泣き崩れる知らない人々。走馬燈のような光景。

——夢だ……。

なんて分かりやすい夢だろうか。過去のものばかり見せて、何の嫌がらせだろう。

目の前に並び立つ知らない大人たち。友人だと思っていたクラスメイトたち。そして、自分の両親。

気味悪い……。

呪われた子だ……。

疫病神め……。

聞きたくない。だが耳をふさいでも聞こえてくる。当然だ。これは夢なのだから。なんてたちの悪い夢だ。

最後に目の前に立つのは、いや、目の前で這いつくばっているのは、自分の妹。恨みがましく睨み付け、呪詛を吐き出す。

——いやだ……。聞きたくない……。

お兄ちゃんなんかいなければ……。

Side: Stern

シュウの部屋に戻ると、ひどくうなされた声が聞こえてきた。慌ててシュウに駆け寄ると、苦しそうに喘いでいる。目からは涙が流れ、息も荒い。とてもではないが、黙って見ていることなどできない。

「シュウ」

シュウの肩を握り、軽く揺さぶって呼びかける。だが治まらない。

「シュウー」

強く、叫ぶように呼びかけ、頬を軽く叩く。するとシュウがゆっくりを目を開き、シュ

テルを見る。焦点が合っていない。

「シユウ、大丈夫ですか……?」

問いかけ、少し待つと、シユウの瞳の焦点がようやく合ってきた。シユテルの姿を認めたのか、安堵の表情を浮かべる。

「シユウ……」

もう一度呼びかけると、シユウはシユテルの手を掴んできた。少し驚いてしまい、だがシユウの手が震えていることに気がついて首を傾げる。

「ごめん、シユテル……。ちよつとだけ、このままで……」

弱々しい声がシユテルの耳に届く。シユテルはわずかに困惑しながらも、シユウの手をしつかりと握り返した。

「はい。私はちゃんとここにいますよ」

十分近くもそのままの体勢で過ごし、やがてシユウがゆつくりと体を起こした。

「もう大丈夫ですか?」

「うん。ごめんね」

申し訳なさそうに謝る少年。その姿はとても儂く見えて、今にも消えてしまいそうに思える。

「ちよつと昔の夢で……。こんなにひどいのは久しぶりだけど……って、ああそうか

……。今日は何日だっけ」

シユテルは首を傾げながらも日付を答えると、シユウは得心したようにうなずいた。

「それでか……。去年と同じだ。去年の今日も、頭痛と夢がひどかったから」

仕方ないね、と自嘲する。心の底から自分を嫌悪しているような笑みだ。自分の存在を否定してしまうような笑み。

「今日が、どうかしたのですか？」

おそるおそる聞いてみると、シユウが小さく首を振る。

「ただの事故。二年前にね。まあそれが発端で僕は追い出されたわけだけど」

「事故が原因で？ 何故？」

シユウが無表情にシユテルを見つめてくる。踏み込みすぎただろうか、と不安になっていると、やがてシユウは悲しげに微笑んだ。

「つまらない話だよ？ どこにでもあるような、そんな話」

それでも聞きたい？ と視線で問いかけてくる。シユテルは迷わずうなずいた。

「はい。教えてください。貴方のことを」

S i d e : P a s t

最初は本当に些細なことだった。シユウがまだ四歳の頃、保育園で両親が迎えに来る

のを待っていた。いつもの日常。いつもの光景。シユウは友達と一緒に保育園の遊具で遊んでいた。

そこに降ってきたのは小さな石。どこから飛来したかも未だ分かっていない。その石はシユウたちの保育園へと落ち、小さいながらも爆発を引き起こす。石の落下地点の側にいた園児数名が重軽傷を負う。シユウもその中にいたが、幸い擦り傷程度だった。

これが、一回目。

それから数ヶ月後、再び同様の事件が起こる。今回は日曜の公園で。子供を連れて遊びにきている人などが大勢いた中に、また石が落ちてきて小規模な爆発を起こす。幸い死者などはいなかったが、人が大勢いたために被害は前回よりも多くなった。その時もシユウは両親に連れられてそこにいて、擦り傷だった。

それが、二回目。

一度や二度ならまだいい。誰もが不運な事故だと思う。二度も被害にあった被害者だと皆が同情する。

だが、三回目からは周囲の反応は変わってきた。

三回目はデパートの屋上。遊戯コーナーがあり、そこに落ちた。そこにはまたしてもシユウが居合わせる。三回の落石の事故に必ず居合わせる子供。それに最初に気づいたのは、幼稚園での友人だった。

「しゅういちくん、またなの？　さんかいとも、ぜんぶだね！」

聞いたのは、その子の母親。それを聞いた母親は周囲に警告を発する。あの子は危ない、と。最初は誰も相手にしなかったが、四回目、五回目と続くと同調する人が増えてきた。

そして、シユウが五歳になる頃には、シユウに近づく人は誰もいなくなっていた。よく遊んだ友人ですら、シユウに近づくことはない。保育士ですら極力関わろうとはしてこない。どこに行っても、孤独になった。

唯一の例外が両親と妹だった。両親は、気にすることはない、いつか分かってくれとシユウを慰め、妹はまだよく分かっていることもあつたのだろう、純粹にシユウと遊んでくれていた。数少ない味方だった。

小学生になってもそれは変わらない。両親はシユウがいじめられるかもと不安に思っていたらしいが、まず近づくことを忌避されるがためにそれすらもなかった。

孤独のまま、ただ家族と共に過ごす時間が流れ。シユウの妹ももうシユウのことを理解していたが、それでも一緒にいてくれていた。

二年生に進級してからの休日。家族で山へとピクニックに行く予定だったが、急な仕事で両親は一緒に行けなくなった。その代わりに、隣に住む親切な人が一緒に行ってくれることになった。周囲と同調してシユウを避けてはいるが、そこまで気にしていない

数少ない人物。その人が運転する車で山道を登る。

「あー！ 流れ星！」

車の中。隣で嬉しそうに叫ぶ妹。呆れる自分。

「何言ってるの。今は昼だよ」

「ほんとだよ！ ほんとに流れ星だよ！ ほら！」

必死な声。窓の外を示す小さな手。そちらへと目をやる自分。そして見つける、こちらへと向かってくる光の塊。

そして……。

石は車へと直撃した。車は道から逸れ、崖下へと転落する。回る視界。よく分からぬ浮遊感。次に目を覚ました時には、我が目を疑った。

運転席の人は、死んでいた。どんな死に方をしていたかは覚えていない。思い出そうとすると吐き気を催す。おそらくとても悲惨な死に方だったと思う。

隣の妹は、両足が折れ曲がった車のボディに潰されていた。呼吸はあるため、死んではいない。

そして自分は。

かすり傷だった。腕や足をすりむいただけ。ただ、それだけ。

幼心にも異常性を感じてしまう。同乗している二人だけが被害を受け、自分はほぼ無

傷。運がいい、とはとてもではないが思えない。

助けを求め車から出ようとしたが、ひしゃげた車内から出ることはできなかった。それから数時間が経過して。

駆けつけてきたのは両親だった。どうやって知ったかは分からないが、シユウと妹の二人を助け出すと、さめざめと泣いていた。その腕の中で、シユウは安心して眠りへと落ちていった。

病室で目を覚ました時には、状況は一変していた。

両親までもが、シユウを避けるようになっていた。退院の時に迎えに来た時も、最低の会話しか交わさなかった。

シユウはすぐに退院して、向かった先は、葬儀場。誰の葬式かは、言わなくても分かる。運転をしていたあの人のだ。家族だろうか、みんなが泣いていて、シユウに気づいた多くの人が敵意をむき出しにしてシユウを睨んできた。ひそひそと、シユウに聞こえない声で会話を交わす。時折漏れ聞こえてくる声は、死神、呪われた子、など。

唐突に一人の女性が立って、

「あんたさえ……あんたさえいなければ……！」

女性は周囲の大人が取り押さえ、シユウ自身も周りの大人に連れ出されていた。

病院では妹が目を覚ましていた。シユウを見て、妹は不可解なものを見るかのように



目を細める。そして言った。

「どうしてお兄ちゃんは元氣なの？」

「どうして私だけこんななの？」

「どうして私だけ、歩けないの？」

シユウは何も答えられない。ただただ黙つてうつむいて。

「お兄ちゃんさえいなければ、私は元氣だったの？」

幼い妹の言葉。ただそれだけ。ただそれだけのはずなのに、今までで一番心を抉つた。

自分さえいなければ。その時は本気でそう思った。

そして自宅ではさらに追い打ちをかけられる。

「住むところと金は用意してやる。学校も手配しよう。明日には家を出ろ」

父の言葉。

「貴方がいると、わたしたちの家までが壊れちゃうのよ。分かるでしょう？」

母の言葉。

味方は誰もいなくなった。

そうしてシユウは、両親に連れられて遠くの土地へとやってきて。

そこで一人残されて、今に至る。

ただの、無知で不運な子供の話。

Side: Hero

「こんなところ、かな」

話し終えたシユウは、小さくため息をついた。シユテルは黙って聞いてくれていた。それがとてもありがたい。人に話したためか、少し気が楽になった気もする。

「そんなこんなで、僕は家族にも見捨てられて一人暮らし。ここに来た当初は、他人との関わりも絶ってたぐらいだよ」

外に連れ出してくれたのは、今の学校の教師だ。不運すぎるが、君は無害だと無理矢理外に連れ出された。また誰かが傷つけば理解するだろう、そう思っていたが、妹との事故以来、石が降ってくることもなくなった。

「僕が引き寄せてたのか、ただの不運なのか、今でもそれは分からないけど……。少なくとも、僕と一緒に出かけなければ、あの人は死ぬことはなかったし、妹も不自由なことにならずにすんだとは思ってる。事故の後だから何とでも言えるだけかもしれないけど」

シユウはシユテルの表情を見る。うつむいて、何かを考え込んでいた。シユウは苦笑する。

「もしこれ以上僕といるのが嫌になったなら、気にしなくていいよ。連絡しないようにするから、シユテルも……」

「それはないので気にしないでください」

即答だった。何かを考え込んでいたはずなのに、あまりの返事の早さに思わず唾然としてしまう。自然と笑みがこぼれた。

「……ありがとう」

「お礼を言われるようなことは何もしていませんが……」

本気で意味が分かかっていないようにシユテルは首を傾げていた。それが、そのことがとても嬉しい。

「ところで、シユウ」

「ん？」

話し終えたところで空腹感を覚え、シユウはシユテルが持つて帰ってきたビニール袋を見る。シユテルが無言で差し出して、シユウは恥ずかしそうにそれを受け取って中を漁る。

「（両親のことですが）」

「うん」

おにぎりとプリン、ゼリーがあった。シユウはおにぎりを取り出して、包装をとって。

口へと運び、

「本当にシユウを見捨てたのですか？」

そこでぴたりと動きを止めた。

「……………どういうこと？」

「この世界のことなので私は正確には知りませんが、私立の学校というのはとてもお金がかかるものだと思っています。本当に見捨てたのなら、わざわざそんなお金を出すでしょうか。むしろそもそも、まあ質はともかくですが、住む場所まで用意して。体面もあるのかもしれませんが、少し不可解だと感じました」

「……………」

「シユウ。貴方のご両親は、そこまで貴方を嫌ってなどいないのでは…………」

「やめて」

力のないシユウの声。弱々しい声だったのに、シユテルはそれ以上続けることができなくなっていた。シユウは目を閉じ、小さく首を振る。

「これでも……………割り切るのに苦労したんだよ。明日には迎えに来てくれるって、何度も思ったんだ。今更……………そんな希望なんて……………いらない、よ……………」

少しずつ、声がかすれていく。いつの間にか、涙が溢れていた。

シユウは大人びているが、実際には普通の小学生だ。親が恋しくないはずがなけれ

ば、一人で寂しくないはずがない。今まで多くのことを耐えてきたのだろう。それを察したのか、シユテルは目を閉じ小さく頭を下げた。

「すみません。忘れてください」

「……うん。僕の方こそごめんね。心配してくれたのに」

いえ、とシユテルは首を降った。

重たい沈黙が部屋を支配する。シユウは急いでおにぎりを食べてしまうと、努めて明るく言った。

「さあて！ 今のことは忘れて！ 今日は何しようかな！」

シユテルはそんなシユウを見て、少しだけ寂しげに微笑んだ。

昼食を食べて、その後は何もすることがないという理由で場所を移動することになった。向かうのはもちろんシユテルたちのマンションだ。しっかりと戸締まりを確認して、アパートを出る。

そして絶句した。

「どうしました？ シユウ」

目の前で立ち止まったシユウを心配してシユテルが声をかけてくる。続いてシユウの目の前にいる人物を見て、さらに首を傾げる。

黒髪黒目、スーツ姿の男。年は自分の記憶に間違いがなければ三十五歳だ。

「……お父さん」

「……っ！」

シユテルが驚いて目を見開く。シユウはただ黙って相手を見据える。今頃何しに来たとしても言うように。

「……………」

父は何も言わない。ただ黙ってシユウを見ている。シユウも無言で睨み続ける。やがて父は、なぜか満足したようにうなずいた。

「生きているようで何より」

「……………」

「その子は友達か？」

父がシユテルを見る。シユテルは小さく、どうも、と会釈をする。

「ふむ。私たちに多くの迷惑をかけてしぶとく生きているかと思えば、友達まで未だ懲りずに作っているとは」

シユテルの目がゆっくりと細められる。不快感を露わにしているが、シユウは気にしないでと笑いかける。

「最低限のお金はもらっているのです。いつも感謝しています。お父さん」

「当然だ。しかし……………」

尊大な態度を崩さない父。いつからこうなったのだろうか。昔はとても優しくかったのに。父はシユテルを少し観察して、鼻で笑った。

「お前にはふさわしい友達だな。平日の昼間に遊びほうけるなど、くだらない人間……」  
「黙れ」

シユウの冷たい声。父が思わず言葉を止める。

「いろいろと迷惑をかけた、いや今もかけてるから、僕のこととは好きに言っていていいよ。でも、シユテルは僕の大事な人だ。あなたでも、悪く言うのは許さない」

父を睨み付けて言い捨てるシユウ。父は驚いているようだったが、小馬鹿にするように鼻で笑う。シユウからシユテルへと視線を移し、

「……っー」

シユテルが目を大きく見開き、息を呑んだ。こんな反応を見るのは初めてだ。

「今日は少し確認しにきただけだ。これでも忙しいからな。せいぜいがんばることだ」  
父はそう言い残し、歩き去って行く。シユウはただ黙って見送るだけだった。

S i d e : S t e r n

マンションへと向かう途中、シユテルはシユウに鍵を預け、先に向かってもらうことにした。自身はシユウを見送った後、別の場所へと転移する。たどり着いたのは、アー

スラだ。

ブリッジに向かうと、艦長のリンディがにこやかに出迎えてくれた。

「あら、いらつしやいシユテルさん。今日は何も仕事がなかったはずだけど、どうかしたの？」

「はい。個人的に貴方をお願いしたいことがあります」

私に？ とリンディが驚いて聞き返す。シユテルからの個人的な依頼など滅多になるので驚くのも当然だろう。むしろリンディに対しては初めてかもしれない。

「ある人物のことを調べてもらいたいです。管理局の過去の局員から含めて」

「誰かにもよるわね……」

「シユウの父親です」

リンディが眉をひそめる。どういうこと？ と真剣な表情で問いかけてきた。

「先ほど、シユウの父親とお会いしました。その時に……」

そこで一度言葉を切り、目を閉じる。これを言えばもう引き返せないが、少しでも真実に近づけるなら。目を開き、告げる。

『息子に関わるな』という念話を送られました」

「……っ！」

リンディが息を呑む。信じられない、といった様子で。そしてシユテルは最後の言葉



を告げた。

「シユウの父親は魔導師です」

Side : Past

事故の直後、自分と妹を抱く両親。暖かな白い光が自分たちを包んでいた。自分と妹の小さな傷がふさがっていく。それを見て、シユウは、どこか楽しそうに笑った。

——魔法みたいだ……。

シユウがつぶやく。両親がそれに気づき、優しく微笑む。

——そうだよ、お父さんたちは魔法使いなんだ。

優しい声。シユウはすごいなと笑う。

——だから安心しておやすみ。

そこで突然シユウは眠りへと落ち、短い記憶は奥深くへと封じられた。

## 第十一話 ハンバーグ

学校が終わってからの放課後。シユウはいつも通りにシユテルたちのマンションに行く。呼び鈴を鳴らして少し待つ。反応がない。

「出かけてるのかな？」

どこかで時間を潰そうかと判断してきびすを返そうとした時、ドアが勢いよく開かれてユーリが飛び出してきた。その表情は焦りの色で染まっている。

「シユウ！ 助けてください！」

「ど、どうしたの？」

あまりの剣幕にシユウは驚くが、その後の異変で全てを察した。部屋の奥から何か焦げるような嫌な臭いが流れてくる。そしてユーリはエプロン着用。シユウは慌ててキッチンへと向かう。フライパンから黒っぽい煙のようなものが立ち上っていた。

「なにこれなにやったの！」

「ハンバーグを作ろうとして……」

「燃えたの？」

「燃えちゃいました」

そつとフライパンに近づいてみる。すでに火は消されていて、焼かれていたハンバーグらしきものも炭化しているものの燃えてはいない。消化はした後らしい。

「どうやって消したの?」

「これで、です」

シユウが振り返る。それを見た瞬間、思わず頬が引きつっていた。ユーリの背中から赤黒い翼のようなものがはえている。自己紹介でもするかのように、翼はいろいろな形に変形していく。聞くところによると、これが魄翼というものらしい。

魄翼が少し伸び、フライパンを包み込む。こうして空気の侵入を防いで鎮火したらしい。

「無理矢理だね……。それは熱くないの?」

「はい。これも魔法みたいなものですし」

そつとフライパンを流しへと入れ、ユーリは魄翼を消した。その表情は少しだけ得意気にも見える。

「後処理ができているなら……。助けてほしいことって?」

それを聞いたユーリはすぐに泣きそうな表情になった。

「シユウは……。料理ができますか?」

「料理? 得意ではないけど、まあ少しぐらいは」

書店で料理の本を借りて、一人で作ったことも何度かある。簡単なものしか作れないが、同年代の子には負けない自信ぐらいはある。

——いや、さすがになのはやはやてには勝てないか。

なのはは喫茶店の子だと聞く。料理ぐらい母親から教わっているだろう。はやては最初は自分と同じ一人暮らしで、家族ができてからも料理は彼女がしていると聞く。たまにしか料理をしない自分とは比べるまでもない。

そんなシユウの心情など知らずに、ユーリはぱつと顔を輝かせた。

「教えてください！ ハンバーグの作り方！」

「……………え？」

ぺたぺたとユーリが肉をこねる。シユウは隣で静かに見守る。シユウの手には料理の本。ハンバーグの作り方は覚えていないので、ここから指示を出している。手伝おうかとも思ったが、どうやらユーリは自分一人の力で作りたいらしい。

肉をこねおえ、フライパンに火をかける。肉を楕円形にして、フライパンに載せていく。肉の焼ける香ばしい匂いが食欲をそそる。

「うん。いい感じだね」

シユウはそつと胸をなで下ろす。あれだけ騒いでいたわりには、ここまでは順調にきている。見ていたところ、失敗らしい失敗もなかったので成功するだろう。そう思っ

いたのだが、ユーリの表情は未だに真剣そのものだ。

シユウはフライパンへと視線を落とし、少し首を傾げた。先ほどから、肉が少しずつ膨らんできているような気がする。そう思っていた直後に、

「わっ！」

二人はそろって悲鳴を上げる。軽い音ともに、肉が破裂した。ユーリがどうしようとうしようとうと慌てふためき、シユウはそんなユーリを宥める。

「とりあえず落ち着いて。まずは火を消して……あつち！」

破裂した肉がシユウの顔面に直撃する。顔をおさえ、流しの冷水ですぐに冷やす。その間もやはりユーリは一人慌てたままだ。むしろシユウに被害が及んだことでさらに追い詰められたようで、顔面蒼白になっている。

「ごめんなさいシユウ！ ど、どうしましょう！ どうすればいいですか！」

「落ち着いて！ とりあえず火を……火を消して！ あつち！」

再び肉がとんでくる。ユーリが慌てて火を消したが、肉の破裂は治まらない。

二人で右往左往している間に、肉はまた完全に焦げ付いてしまった。

その後も本の書いてある通りに焼いていくが、失敗が続く。なぜこうも失敗ばかりなのか、隣に立つシユウですら分からない。

やがて最後の材料になり、ユーリが心配そうにフライパンへ肉を投下。緊張の面持ち

でそれを見守るシユウ。

再び肉がふくれあがる。ユーリが泣きそうな表情をして、シユウが半ば本気で諦めた頃。肉は小さく破裂しただけで終わった。

「……ん？」

その後もそれぞれの大きな塊が何度か破裂したが、今までのような大事にはならなかった。せいぜい小さな欠片が大量にできてしまったぐらいだ。今までのことを思えば、十分成功だと言えるだろう。

ユーリは嬉しそうにシユウへ笑顔を向け、シユウも一度だけうなずいた。

「うん。まあ成功ってことでいいんじゃないかな」

ユーリが歓声を上げる。今日見た中で最高の笑顔だ。それを見ただけで、今までのことが報われた気がした。

しばらくして、三人が帰ってきた。三人一緒の用事だったらしい。

「ただいま戻りました」

「ただいまー！」

「戻ったぞ」

シユテル、レヴィ、ディアーチェがそれぞれ口にして、そしてすぐに顔をしかめた。部屋は未だに少し焦げ臭い。シユテルとディアーチェはすぐに何かを察したらしく、小さ

く嘆息しただけだった。

「ユーリ。怪我はないか？」

そう言いながらキツチンへと入るディアーチエ。そこで待っていたのは、満面の笑顔のユーリだった。

「ディアーチエ！ 見てください、一人で作れました！」

テーブルの上のハンバーグを指し示すユーリ。皿に盛られたハンバーグは少し歪な形をしていたが、それでも一目でハンバーグと分かるものだ。ディアーチエは感心したように、おお、と驚いていた。次に流しで洗い物をしているシユウを見て、事情を察したのかわずかに苦笑を漏らした。

「すごいぞ、ユーリ！ さすがは我らの盟主だ」

「えへへ」

ディアーチエに褒められて、ユーリが相好を崩す。だらしない笑みがそこにはあった。

その様子を見ながら、シユテルはシユウの隣へ。横に立ち、小さく頭を下げる。

「ユーリのお願いを聞いていただいたみたいですね。ありがとうございます。すぐに夕食の準備をします」

それを聞いたシユウは、少しだけ疲れたように微笑んだ。

今日もテーブルに夕食が並ぶ。メニユーはもちろんユーリが作ったハンバーグだ。それぞれの皿に二枚と欠片が少しずつ。ただしシウウの席にはない。

「あれ？ シウウは？」

不思議に思ったレヴィが聞くと、他の三人は一樣に首を傾げるだけだ。

「今日はキツチンで一人で食べると言っていたな」

「私のせい、ですか？」

ディアーチェの言葉にユーリが怯える。それでも罪悪感ぐらいはある。それに、シウウにも食べてほしかったという思いもあった。

「連れてきますー！」

「あ、ユーリー！」

ユーリが隣のキツチンへと向かい、レヴィがそれを追いかける。シユテルとディアーチェは先に食事を始める。

「シユウー！」

キツチンに入ったユーリが叫ぶ。シユウはテーブルの前で、目を見開いて固まる。テーブルには皿に盛られたハンバーグ。

「……………これ……………」

よく見ると、それは焦げ付いた大量のハンバーグだった。成功するまでに失敗したも



のだ。ユーリがシユウへと視線を投げると、シユウは気まずそうに視線をそらした。  
「……もつたいないと思つて」

そう言いながら、焦げたハンバーグを口に放り込む。ゆつくりと租借して、呑み込んで、笑う。

「うん。苦いけどおいしい」

「……………」

ユーリは無言。しばらくシユウのこゝろを見つめていたが、やがて頭を下げた。

「ごめんなさい、シユウ。私が失敗ばかりしたから……」

「え？ いやいや、そんなことないよ。本当においしいから」

慌てたように言うシユウ。そして再びハンバーグを口の中に。

「ほら。早く食べないと冷めちゃうよ？ せっかく作つたんだからさ」

「……………はい！」

ユーリが笑顔でうなずくと、レヴィと共にリビングに戻つた。

ユーリが戻つてくる直前。

「我らも手早く食べて、シユウを手伝うぞ。さすがにあの量は一人では無理だろう」

食事を進めながらそう言うディアーチェ。対するシユテルもうなずいて同意する。

「ですが、しっかりと味わってください。ユーリが王のために作つたのですから」

「む……。分かっておる……」

少しだけ顔を赤くし、黙々と食べ続けるディアーチエ。そこにユーリとレヴィが戻ってきて、席に座った。

「ユーリ。うまくできている。うまいぞ」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

ユーリが嬉しそうに笑う。その笑顔を見ていると、ディアーチエも自然と笑みがこぼれた。

「ディアーチエのためにたっぷりと愛情を込めましたから！」

「……………う、うむ……………」

そっぽを向くディアーチエ。顔は真っ赤になっている。シユテルはそんな二人の様子を見つつ、一人素早く食事を終わらせた。

キッチンに向かうと、シユウは無言でハンバーグを頬張っていた。シユテルを見て、右手を挙げる。ただの挨拶だ。

「すみません、シユウ。私もいただきます」

小皿を取り出し、ハンバーグを入れていく。一口食べると、焦げ特有の苦みはあるがしっかりとハンバーグの味はしていた。二人で黙々と食べていく。

「すまぬ、待たせた」

「私が失敗したもので私も食べます」

続いてディアーチェとユーリが入ってきて、

「ボクにもちようだい！」

最後にレヴィが戻ってくる。みんなで焦げ焦げのハンバーグを食べていく。シユウは口を動かしながら四人の様子を見て、思わず苦笑していた。

——隠れて食べる意味はなかったかな。

後片付けを済ませ、シユウは帰路につく。今回の見送りはユーリだ。マンションから出て、自宅への道をのんびりと歩く。

——これって、少し情けないよね……。

端から見れば年下の女の子に送ってもらおうという図だ。思い描いただけで情けなくなる。実際は四人の中では戦闘能力が一番高いらしいが。そんなことを考えながら少しだけ落ち込んでいると、シユウ、と自分を呼ぶ声が聞こえた。

どうしたの、と聞きながらユーリに向き直る。ユーリは少し迷っていたようだったが、やがて震える声で言った。

「今日は本当にありがとうございました。無事に作れたのはシユウのおかげです」

「いやいや、僕は隣で指示を出してただけだから。ユーリががんばった結果だよ」

「そんなことはありません！ 本当に、感謝しているんですよ？」

上目遣いにこちらを見てくる。シユウは少し照れくさそうに頬をかく。恥ずかしいのでこれ以上は何も言えない。

「また……手伝っていただけですか？」

おそろおそるといった様子で聞いてくるユーリ。シユウは微笑むと、もちろん、と明るく答えた。

## 第十二話　なのは

買い物に付き合ってください。

休日。昼前にシユテルたちのマンションに訪れると、シユテルからちようどいいとばかりに誘われた。普段世話になってばかりいるのだから荷物持ちぐらいはしよう、そう思つて二つ返事で了承したのが一時間ほど前。スーパーの特売コーナーから脱出して、店前にあるベンチに腰掛けている。

「この世界の人の底力には驚かされます」

「うん。否定しない」

スーパーの広告があり、安売りされる卵などを購入するために訪れた。二人はビニール袋を持っていて、シユテルの袋には十個入りの卵と豚肉が三パック。シユウの袋にも十個入りの卵があり、あとは菓子類がいくつかだ。

卵がかなり安く売られていたために真つ先にそちらへ向かつたのだが、すでに主婦の軍団があつた。二人も負けじとその中に突入して何とか一個ずつ確保することはできしたが、さすがのシユテルにも疲労が見える。無理もないと思う。

「少し休憩して帰りましょう」

というシュテルの言葉に賛成して、今はここで休憩中というわけだ。缶ジュースを少しずつ飲んでいゝる。

「この後はどうするの？ まっすぐ帰る？」

「一応そのつもりですが……」

どこか行きたいところでも？ とシュテルが視線で問うてくる。シユウは少し考え、特にないかたと首を振ろうとしたところで、

「あー！ シュテル！ シユウ君！」

二人を呼ぶ声。そちらを見ると、なのはが笑顔で手を振っているところだった。そのままこちらへと駆け寄ってくる。

「ああ、ナノハ」

シュテルが立ち上がり、なのはを出迎える。走ってきたなのはは躊躇いもなくシュテルの手を取って嬉しそうな笑顔を見せる。

「こんなところで会うなんて思わなかった！」

「そうですね」

シュテルは相変わらずの無表情だが、どこか柔らかいものを感じる。なのはに握られた手もふりほどこうとはしない。やはりこの二人は仲が良いらしい。

「ナノハはどうしてここに？」

そうシユテルが聞くと、なのはがポケットからチラシを取り出した。今朝シユテルのマンションにも配られたチラシだ。

「お買い物、だよ。シユテルたちは？」

「見ての通りです」

シユテルがベンチに置いてある袋を示すと、そっか、となのははまた笑う。本当によく笑う子だな、と最近改めて思うようになった。

「じゃあシユウ君は……えつと……。荷物持ち？」

今度は遠慮がちに、おずおずといった様子で聞いてくる。

「うん。卵しか買えなかったけどね」

「やっぱり中は……」

「行くのなら相応の覚悟を」

「う……」

シユテルの忠告になのはは思い切り顔をしかめた。スーパ－の入り口を見て、どうしようかと悩んでいるようだ。

「……私たちならもう少しここにいます」

シユテルがそう告げると、なのはは顔を輝かせた。すぐに行ってくるから！　と店内

へと駆け出す。どうやら、買い物をしなければという使命感とせっかく会えたのにという感情がせめぎ合っていたらしい。よく分かるな、とシユウは密かに感心した。

「この後の予定ですが」

そう言いながら、シユテルがベンチに座る。

「喫茶店にでも寄りましょうか」

「いいけど……。どこの？」

シユウが首を傾げて聞くと、シユテルはスーパーの方を、なのはが入っていった方を指さした。

「翠屋です」

買い物を終えたなのはに翠屋に行くことを告げると、一瞬驚いた後とても喜んでいった。なのはに先導してもらい、シユウとシユテルはその後に続く。出発する前になのはが、私が案内していいの？ とシユテルに聞いていたが、シユテルはなぜ聞くのですかと首を傾げていた。

ここから翠屋までは結構距離がある。三人はその間のんびりと話をしながら歩き続ける。道行く人はなのはとシユテルを見ると、驚いたように振り返っていた。

「やはり少々目立ちますね」

シユテルがつぶやいて、なのはは苦笑する。



「私たち、そっくりだもんね」

時折周囲の視線を受けながら、しかし二人はさほど気にしない。なのはは楽しげに、シユテルはどこか柔らかない無表情で会話をしている。シユテルと自然に話をしているなのはを見て、少しだけ羨ましいと思ってしまった。

翠屋に着いた時には、すでに昼を少し過ぎていた。ほとんど満席状態のようで、かなり繁盛しているようだ。初めてここに訪れたシユウは少し驚いてしまった。喫茶店と聞いていたので、もつとこぢんまりとした静かな場所……村中にあるようなものをイメージしていたのだが。

「ちよつと待っててね」

なのはが店内へと入っていく。どうやら空いている席がないか確認しに行ってくれたのだろう。すぐに戻ってきて、大丈夫みたい、と笑顔で教えてくれた。

なのはに案内されて店内へ。隅の窓際の席が空いていたので二人はそこに向かう。

「ちよつと忙しそうだから手伝ってくるね」

そう言い残し、なのはは店の奥へと消えていった。

「ここって、有名な喫茶店だったりする？ イメージと違うんだけど」

「それなりに、とは聞いています。それに今は昼食時ですし。もう少し時間が経てば落ち着くと思いますよ」

シユテルの言った通り、時間が経つにつれて店内の忙しきは少しずつ落ち着いていった。だがそれでも、客が一人もいないという状態にはならなかったが。とりあえずシユウは、もう少し店が落ち着くまではメニューを見て時間を潰すことにする。

「……あ」

間抜けな声を漏らしたシユウに、シユテルが首を傾げる。シユウは財布を取り出すと、中身を確認して頬を引きつらせた。小銭しかない。

「私が出しますので気にしないでください」

「いや、でも……。さすがに出してもらってばかりだし……」

「はい。今更気にしないでください」

「……はい」

女の子にばかりお金を出させているというのはいかがなものなのだろう。確かに自分はまだ働いていないので気にはいけない部分かもしれないが、男のプライドというものは理屈では説明できない。あまりにも情けなさすぎる。

「……忘れよう」

シユウは大きなため息をつき、再びメニューに視線を落とす。

少しして、店内も落ち着いていく。そうしたところで、

「お客様。ご注文はお決まりでしょうか？」

「あ、はい。えっと……」

答えようとして、だがすぐに、あ、と声を漏らした。目の前で立っているのは、他でもないのはだ。先ほどと違い、エプロンを着用している。

「へえ……。かわいいね」

「そ、そうかな？　ありがとう」

なのはが照れくさそうな笑顔を浮かべる。動作一つ一つが様になっているのはさすがと言うべきか。シユウとシユテルが注文を告げると、なのははきれいに一礼してカウンターへと向かっていった。ちなみに二人ともナポリタンだ。

少しして、店員がナポリタンを持つてきてくれる。食べている間になのはが戻ってきた。エプロンはすでに着ておらず、その代わりに手にはお盆。そこには皿に載ったシヨートケーキ。

「これ、お母さんから」

「え？　いいの？」

思わずそう聞いてしまうと、

「うん。気にしなくて大丈夫だよ」

そう言ってくれたので、遠慮無く食べることにした。とりあえずは先にナポリタンを食べ終えなければならぬが。

「そうだ、シユテル。呼んでたよ？」

なのはの言葉にシユウが首を傾げる。ここで誰が、と思つたが、シユテルの方は静かにうなずいただけだった。

「あの方も物好きいな方ですね。すみません、シユウ。少し席を外します」

「あ、うん」

シユテルが席を立ち、そして店内の奥へと消えていく。シユウはそれを見送つて、不思議そうに首を傾げた。なぜシユテルが奥に、しかも店員と顔見知りのごとく会釈だけで入つていくのだろう。

「シユテルはちよつと前から、ここによく来てるよ」

そう教えてくれたのはなのはだ。シユウが驚いていると、なのはが説明してくれる。

「最初は、この街で暮らすから妙な誤解が生まれる前に顔合わせを、てことで、シユテルたちが挨拶に来てくれたの」

「それは……驚いただらうね」

自分の娘とうり二つの子だ。さらにはその周囲には娘の友達のもつくりさん。きつととても驚いたことだらう。

「あはは。みんなすごく驚いてた。その後いろいろあつて、お母さんがシユテルのことを気に入つちやつたみたいで……。養子にならないかつて聞いたこともあつたみたい」

「へえ……。でも断つたみたいだね」

「うん。自分には王や家族がいますからって」

シユテルならそう答えるだろう。それは容易に想像がつく。常にディアーチエを第一に考えて行動しているような節もあるほどだ。

「今ではたまにお店の手伝いに来てくれるんだよ。……私と一緒にいると今度はお客さんが驚いちちゃつてるけど……」

「……だろうね……」

それも容易に想像がつく。この二人は髪型や目つきの違いこそあれ、一目見ただけでは区別がつかない。

その後もなのははシユテルのことを教えてくれる。シユテルと出会った経緯や、今では大切な友達の一人ということなど。仲の良さがよく分かる。

そんなことを話していると、シユテルが戻ってきた。手に盆を持って、お待たせしましたと座っていた席に腰掛ける。盆に載せられていたのはショートケーキだ。

「おかえり、シユテル。それは？」

「お待たせしたお詫び、ということ……。どうぞ」

そう言つてシユテルがショートケーキをシユウとなのはの前に配る。自分の前にも一つ置いた。シユウは少し首を傾げながらも、まあいいかとフォークを手にとつてケ-

キを口の中へ。先ほども思っていたが、このケーキはおいしい。

「あれ？」

少しだけ違和感を覚える。それはなのも同じだったようで、少し困惑した表情を浮かべていた。

「お母さんの味とちよつと違うような……？」

「私が作りましたから」

「へえ、そつか。シユテルが……。えー！」

思わずなのはと目を見合わせ、次いでシユテルを見る。シユテルは涼しい顔で、自分のケーキを口に運んでいた。呑み込み、ふむ、と感想を口にする。

「やはり桃子さんの味にはほど遠いですね。精進しなければ」

「いや十分美味しいと思うよ？ そんなに違いがあるとは思えないんだけど」

シユウが素直な感想としてそう言ったのだが、シユテルは納得していないのか首を振る。まだまだです、と。

「んー……。まあシユテルがそう言うなら、そうなんだろうね。僕は十分美味しいと思うんだけどな」

ふと、シユテルがシユウを見た。目が合って、シユウが首を傾げる。

「美味しい、ですか？」

「うん。すごく」

「……そうですね」

シユテルが薄く微笑んだ。そんな気がした。

Side: N a n o h a

シユテルとシユウの二人を見送ってから、なのはも翠屋を後にした。この後はフェイトと買い物に行く約束がある。そろそろ向かった方がいいだろう。

——それにしても……。

シユウが美味しいと言った時、シユテルが一瞬だけ見せた微笑は今まで見た中で一番嬉しそうなものだった。あんな表情もするんだな、という嬉しさと同時に、シユウが少し羨ましいと思う。自分ももっとシユテルと仲良くなりたいのに。

シユテルに自然な笑顔が増えつつある。これは素直に喜ばしいことだ。そう考えるだけで、少し気分が良くなってくるのも事実だ。

ふと携帯電話を見る。約束の時間が迫っている。

「急がないと……!」

なのはは携帯電話をしまうと、慌てて走り出した。

## 第十三話 フエイト

ある休日の昼前。シユウは今日もシユテルたちのマンションにいる。今日はゆっくり来ようと思っていたのだが、書店に向かう途中にレヴィに見つかり、半ば強制的に連行されて今に至る。シユウを連行した張本人であるレヴィは、連れてきたことで満足したのかテレビ番組に夢中になっていた。

テレビに流れているのは、最近話題の特撮だ。先ほど聞いた話では、休日ということもあり一話から一挙放送しているらしい。特にすることもないシユウも、レヴィの隣で一緒に見ている。

「でね！ でね！ 次の敵がすつごくかつこいいんだ！ でも大幹部が変なことするせいで……」

ネタバレ全開である。佳境を迎える頃にはどのような決着がつくか分かってしまう。それでも見ていておもしろいと感じるのは、番組の出来が良かったためか。

やがて正午になり、その特撮の特集番組が終わる。おもしろかったー、と言ってレヴィが立ち上がる。



「さて！ 行こう、シウウ！」

「いやどこに？ というより聞きそびれていたんだけど、今日はレヴィ一人なの？」

現在、部屋にはシウウとレヴィの二人きり。他の三人の姿は見えない。それを聞く  
と、レヴィはうなずいて答えてくれる。

「うん。シユテルんはアースラに行つてて、王様とユーリは子鴉つちに会いに行つてる。

ボクはシウウが来たら……えつと……。おもてなし？ しろつて言われてる！」

「へえ……。じゃあ一人でお留守番か。でもさつきは出歩いてたね」

「シウウを迎えに行つたの！ そしたら家にいないし！ 探したんだからね！」

「あ、はい。すみません」

なぜか怒られた。少し理不尽だと思いが、悪い気はしないので気にしないでおく。

「それで、どこに行くの？」

シウウの言葉を聞きながら、レヴィは出かける準備をする。その際に小さな紙片を握りしめて、それに書かれていることを何度も確認している。シユテルかディアーチェにでも持たされているのだろうか。やがてレヴィは出かける準備を終え、シウウに向き直った。

「オリジナルのところ！」

レヴィのオリジナル。つまりはフェイト・テスタロッサ。聞いた話によれば、レヴィ

が一人で留守番すると聞いたフェイトが心配して、レヴィを自宅に招待したらしい。さらに後で聞いた話によれば、最初は渋っていたレヴィだったが、フェイトの、カレーもあるよ？ の一言で即決したそうだ。

シユウはフェイトの自宅を知らないのでレヴィに案内してもらおう。先導するレヴィは鼻歌を歌い、とても機嫌が良いようだ。鼻歌は先ほどまで見ていた特撮のテーマソング。

しばらく歩き続け、やがてマンションが見えてくる。どうやらそこがフェイトの自宅らしい。

レヴィに続いてエレベーターに乗り、上階へ。インターホンを押すと、エプロンを着用しているフェイトが出迎えてくれた。

「おいーつす！ 遊びに来たよ、オリジナル！」

レヴィが元気よく挨拶する。フェイトも笑顔になって言う。

「うん。いらつしやい、レヴィ。それにシユウも」

「僕まで来てごめんね。迷惑じゃないかな？」

「ちつとも。気にしないで上がって」

フェイトが先に中へと戻り、レヴィとシユウがそれに続く。奥からはカレーの香りが漂ってきた。レヴィが嬉しそうに笑顔になる。

「カレーだー!」

「もうすぐできるから、待っててね」

フェイトはそう言うと、キッチンへと向かう。シユウはレヴィと一緒にリビングへ。リビングには見知らぬ女性がテーブルを拭いていた。

「……えっと。お邪魔します? 初めまして?」

シユウがそう言うと、女性は苦笑する。

「アルフだよ。この姿で会うのは初めてだけどね」

「ああ……。なるほど」

使い魔であるアルフは犬の形態と人間の形態があるとは聞いていたが、人間の姿を見るのは初めてだ。言われて見れば、確かに犬の時と同じ特徴がいくつもある。むしろ知っていないがらなげ気づかなかったのか、自分が少し恥ずかしい。

「……ねえ、アルフ」

シユウが声をかける。アルフが顔をそむける。

「……………」

「……はあ。分かったよ……」

アルフは小さくため息をつくとき、子犬になった。すぐにシユウが笑顔になり、子犬のアルフを抱きかかえ、撫でる。

「うん。いい撫で心地だ」

「どうも」

「……むー」

それを不満そうに見ているのはレヴィだ。拗ねたようにシユウをじっと見ている。それに気づいたのはアルフで、内心で苦笑しつつシユウに言った。

「ほら、もういいだろ？ フェイトを手伝いたいんだ」

「ん。分かった。ありがとう」

シユウが解放すると、アルフは人間形態に戻って、じゃあねと軽く手を振る。そしてキツチンへと消えていった。アルフを見送ってから、シユウはやつとレヴィが自分を見ていることに気づいた。

「ん？ どうしたの？ レヴィ」

「……何でもない」

ちえー、と口をとがらせ、いすに座るレヴィ。シユウは首を傾げるだけだった。

「お待たせー！」

フェイトがカレーを四人前持ってくる。皿をテーブルに置き、いすに座る。シユウとレヴィが隣同士で、フェイトとアルフはそれぞれの向かい側に座った。四人同時に手を合わせ、いただきますと口にする。

レヴィがすぐにカレーを口に運んだ。しっかりと味わって、呑み込む。すぐに満面の笑顔になった。

「おいしい！ さすがオリジナル！ すごい！」

「あはは。ありがとう」

フェイトは楽しげに笑い、自分も食べ始める。シユウも一連のやり取りを眺めてから、食べ始める。

「ん。おいしい。甘口？」

「うん。レヴィが甘口でないと食べられないから」

なるほど、とシユウはうなずく。そう言えばシユテルたちの家でカレーが出てきた時も、レヴィはハチミチをたっぷり入れた特製のものだった。シユウは中辛程度がほどよくて好きなのだが、誤って食べてしまったレヴィはそれすら悶絶していたほどだ。

シユウは何度かうなずいて、レヴィに言った。

「子供だね」

「なんだとー！ これでもボクはマテリアルだぞ！ 偉いんだぞー！」

味覚と知識は関係ないけど、と思いつつも、シユウはごめんごめんと笑いながらレヴィを撫でる。それだけでレヴィは気分が良くなったのか、だらしない笑みを浮かべると、

「分かればいいんだよ。えへへ、もつと撫でてー」  
「うん。なでなで」

レヴィはご機嫌になって、大好きなカレーを食べることすら忘れてしまっている。シユウの方はレヴィを撫でながら、器用に片手で食べていた。そんな二人の様子を見ながら、フェイトは微笑む。アルフもどこか感心したような表情をしていた。

「二人とも、すごく仲がいいよね。びっくり」

「そうかな？ でもフェイトもだよな？ こうしてレヴィが遊びに来るくらいだし」  
「カレーで釣ってるような気もするけどね」

フェイトはレヴィの横に移動すると、手をどけたシユウの代わりになで始める。お？ とレヴィが首を傾げ、フェイトを見る。

「どうしたの？ オリジナル」

「ううん。何でも無いよ。ちよつと撫でていてもいいかな？」  
「いいよいいよ、もつと撫でて」

嬉しそうなレヴィ。カレーを思い出したのか、鼻歌を歌いながら食べ始める。そんな様子のレヴィを見ながら、フェイトは優しく微笑んだ。

「こうして見ていると双子の姉妹だね」

「奇遇だね、シユウ。アタシもそう思うよ」

アルフもうなずく。それを聞いたフェイトは、そうかな、と照れくさそうに笑い、レヴィの方は無反応。カレーに夢中だ。

「フェイトがお姉ちゃんで、レヴィが妹かな？ 手のかかる妹？」

「手のかかる、は分からないけど……。でもかわいいよ？」

「お姉ちゃんの感想だよねそれ」

三人でそんな話をして、笑う。カレーを食べ終えたレヴィが皿を前に出した。

「お代わり！」

「はい。ちよつと待つてね」

フェイトは受け取ると、すぐにお代わりを用意する。受け取ったレヴィがまた食べ始める。とても美味しそうに食べるレヴィは見ていて飽きない。

「そう言えば、レヴィ」

「ん？ なに？」

シユウが呼ぶと、口を動かしながら振り向いた。スプーンは口に入れたままだ。

「どうしてフェイトをオリジナルって呼ぶの？ なのはとかは名前で呼ぶのに」

「めんどくさいから」

「……分かった。分からないことが分かった」

呼ぶ気も覚える気もないらしい。ある意味レヴィらしいが、それ故に何を言っても無

駄だろう。それにレヴィは人のことをよく愛称で呼ぶ。オリジナル、というのも愛称のつもりなのかもしれない。

「食べた食べた！　ごちそうさま！」

レヴィは満足したのか、スプーンを置く。そしてすでに食べ終わっていた他の三人のお皿も持つてキッチンへ向かう。流しにお皿を置くと戻ってきた。

「意外だ。偉いね、レヴィ」

「む！　当然じゃないか！　だってやらないとシユテるんに怒られるから！」

「うん。納得した」

「でもちゃんと必ず片付けてくれるよ。たまに一緒に洗い物もしてくれるし」

「一人で待つてもつままないから」

それでも嬉しいよ、とフェイトが言うと、レヴィは少しだけ照れくさそうに笑った。

その後は四人で他愛もない話をして、一緒にボードゲームをしたりする。フェイトとレヴィは端から見ていれば本当に姉妹のようだった。ただ、時折フェイトが少し悲しげな表情をすることが気になったが、何となく察しはつく。

——アリシア、だっけ……。

フェイトの姉とも言える存在。少しだけレヴィに重ねているのだろうか。シユウはアリシアのことは知らないので憶測にもならないが。



「あ、もうこんな時間だ！」

レヴィが声を出す。時計を見ると、午後五時を回っていた。太陽はすっかり傾いていく。

「そろそろ帰ろう、シユウ」

「そうだね。遅くなったらシユテルに怒られるし。……レヴィが」

「あう……。帰るよ！ 急いで帰るよ！」

慌てて玄関へと走るレヴィ。シユウもそれを追って玄関へ。

「あ、待ってレヴィ。お土産」

そう言つてフェイトが渡したのは、棒付きのキャンディ。大きな袋に入ったもので、中にはいろいろな色のキャンディがある。

「まんまるみずいろ！」

レヴィが嬉しそうに叫ぶと、すぐに包装を破つて中から水色のキャンディを取り出した。それを口に入れ、うなずいて言う。

「おいしい！ やっぱり水色に悪いものはないな！」

「あはは……。そうだね」

「はい、シユウ」

シユウもレヴィからキャンディを受け取ると、口に入れる。甘い味が口の中に広が

る。

「うん。おいしい。ありがとう、レヴィ。フェイトも」

「ううん。気をつけてね。またね、レヴィ、シュウ」

フェイトの見送りを受けて、シュウとレヴィは帰路についた。

### Side:Fate

二人を見送って、フェイトは静かにドアを閉めた。急に静かになった部屋を見回して、フェイトはため息をつく。寂しくないと言えば嘘になるが、言っても仕方のないことだ。リンディとクロノに心配をかけるわけにはいかない。

「それにしても、レヴィはまた一段と元気になってたね」

洗い物を始めながらフェイトが言うと、それを手伝うアルフがうなずいた。

「そうだね。シュウに懐いてるみたいだったし」

「すごいよね。どうやって信頼を築いたのかな」

もちろんシュウに打算などがないことは分かっている。シュウはいつも自然体だ。生活面でいろいろあることは知っているが、少なくとも自分が知る限り、交友関係ではいつも楽しそうにしている。それがあの子たちにはいい影響を与えているのかもしれない。

「私も……見習おうかな……」

フェイトがそうつぶやく。あの二人と遊んだ先ほどの時間を思い出しながら。自然と表情が柔らかくなり、笑顔が生まれていた。

## 第十四話 端午の節句

がちやがちやと耳障りな音がある。シユウはその音で目を覚ました。何の音だろうか、寝ぼけた頭で考える。すぐに、出入り口のドアの音だと気がついた。では何故そのような音があるのだろうか。誰かが開けようとしているのか。

その考えに至った瞬間、シユウは慌てて飛び起きた。すぐに時計を確認して、しかし首を傾げる。午前六時。約束の時間よりかなり早い。

「シユウ！ シユウってば！」

ドアの向こう側から呼ぶレヴィの声。なぜこんなに朝早くにと自問するが、分かるはずもなく。シユウはぐつと伸びをすると玄關に向かった。ドアを開けると、嬉しそうなレヴィがそこにいた。

「やつと起きた！ おはよう、シユウ！ 迎えにきたよ！」

「うん。おはよう、レヴィ。早くない？」

あくびをかみ殺しながら聞くと、レヴィはそうかな？ と頭に疑問符を浮かべる。どうやら自覚はないらしい。まだ寝てただけだなあと苦笑すると、

「レヴィ、やはりここでしたか」

階段の方からシュテルの声。二人同時にそちらを見て、レヴィは怯え、シュウは苦笑を濃くした。

「まだ早すぎると……言いましたよね……？」

ゆつくりとシュテルが歩いてくる。表情はいつももの無表情。それなのにいつもと違う威圧感。当事者でないシュウですら今すぐ部屋に逃げ込みたい。

「あの、シュテルん、これは違うんだ……」

「……………」

「ほ、ほら！ どうせだから起こしてあげようと思って！ そうすればたくさん遊べ……………」

直後。レヴィの悲鳴が静かな朝に響き渡った。

三十分後。シュウは自分の部屋で味噌汁をすすっていた。ちゃぶ台には白ご飯と焼き魚。全てシュテルが用意してくれたものだ。そのシュテルはシュウの対面に座り、一仕事終えてお茶を飲んでいる。

その後、レヴィを帰らせたシュテルは、起こしてしまったお詫びとして朝食を用意してくれた。希望を聞かれたので和食と答えたところ、目の前の品を出されたというわけだ。買い出しを含め三十分で作り終えた時はさすがに驚いた。

静かな部屋。静かな時間。シュウが朝食を食べる音とシュテルがお茶をすする音だ

けが聞こえてくる。のんびりとした時間だが、シユテルと一緒にこの時間はそれなりに気に入っている。

やがて、シユテルは小さくため息をついた。見るとお茶を飲み終えたようだ。自分へと視線を移し、目が合う。

「どうですか？」

シユテルの控えめな問いかけ。すぐに朝食の味を聞いているのだと気づく。

「うん。美味しいよ」

正直に答えると、シユテルはそうですかとうなずいただけだった。

「この後はどうしますか？」

「九時にシユテルたちのところ、としか決めてなかったからね……。今から寝るのも中途半端で嫌だし……」

少し考え、それに、と付け加える。

「せっかく来てくれたんだし、もう少しお話したいかな？」

それを聞いたシユテルは少しだけ眉を持ち上げる。少しだけ表情が柔らかくなった気がした。

「ではもう少しだけ、お話でもしましょうか」

その後、本来の約束の時間まで、二人はのんびりと話をしていた。時折お互いに無言

になつてしまふ時もあるが、別段気まずい沈黙でもない。のんびりとした時間が緩やかに流れていく。

やがて九時になり、二人は支度を整える。といつても、シユウには持つて行くものがないので戸締まりの確認程度なのだが。いつもの道を歩いてシユテルたちの住まうマンションへ向かう。途中のいくつかの民家では鯉のぼりが上がっていた。

「子供の日つて感じがするね。どこかで柏餅でも買おうかな……」

たまにはそんな贅沢品を買うのも悪くない。そう思つて言つたのだが、シユテルからだめですと止められた。首を傾げると、

「柏餅なら用意してありますよ。あと王がちまきも用意してくれています」

「ほんとに？ ……僕も食べていいの？」

「もちろんです。……ちなみに手作りですよ」

後半は少しだけ小さな声で付け足してくる。しつかりと聞き取つたシユウは顔を綻ばせて、それは楽しみだと期待に胸を膨らませる。シユテルはシユウのそんな様子を見て、少しだけ嬉しそうに目を細めた。

マンションにたどり着いて、リビングに入る。部屋のテーブルには大量の柏餅とちまきが積まれていた。あまりの量にシユウは思わず絶句するほどだ。シユウがシユテルを見ると、さつと視線をそらした。

「……初めて作るものでしたので、材料の量が分からず……」

「買った材料を使い切ったら、すごい量になった？」

「その通りです」

シユウは苦笑。これだけの量があれば昼食としても十分そうだ。さすがに量が多すぎると思うが。

シユテルがキツチンへと向かい、シユウはいつもの席へ。読書をしていたディアーチエが、視線をシユウへと向ける。すぐに本へと戻した。

「ところで、どうしてちまき？」

シユウが問いかける。ディアーチエが再び視線をシユウへとやり、言う。

「子鴉に聞いたのだ。どこぞの場所ではちまきも食べるものだ。この世界の風習については詳しくない。違ったのなら許せ」

「まあ僕も詳しいわけではないから」

キツチンからシユテルが戻ってくる。手に持ったお盆には熱いお茶が三つ。シユウとディアーチエ、そして自分の席の前に置く。

「そう言えばレヴィとユーリは？」

いつもならもつと騒がしいはずだが、今は騒がしきの最たる原因となる二人がいない。珍しいなと思い聞いてみると、ディアーチエは本を閉じてテーブルに置いてから言



う。

「買い出しだ。すぐに戻るであろうよ」

「へえ……。何を？」

「鯉のぼりが欲しいとか言っていたな」

その言葉にシュウは哑然として、次いで苦笑した。外に出ればどこかの民家のものを見れるだろうに、鯉のぼりとは。

「さすがに他の家にあるような大きいものは買ってこないでしょう。それ以前にそこまでの金銭を渡していませんが」

「でも、それだといつ帰ってくるか分からないね」

「もう少し待ってから念話でも送ります」

そんな会話を交わしながら、三人はお茶を飲んで雑談を続ける。

レヴィとユーリが帰ってきたのは、それから一時間以上も後、正午前になってからだった。

「王様、鯉のぼりあったよ！」

元気な声で報告するレヴィ。それを聞いたディアーチエが何を言っているのかと怪訝そうに眉をひそめる。聞いていたシュウも首を傾げた。レヴィの手にはそんな大きなものは何もないが、魔法か何かで収納しているのだろうか。

「はい、これ」

そう言つてレヴィが差し出したのは小さなビニール袋。デイアーチエの表情がいよいよ困惑に深く染められる。ビニール袋を受け取ったデイアーチエは中身を取り出して、む、と小さくうなつた。出てきたのはプラスチックの棒にかなり小さな鯉のぼりがついたもの。

「……鯉のぼりだな」

「なるほど、小さくはありますが、確かに鯉のぼりです」

シユテルが感心したようにうなづく。えへへ、とレヴィが嬉しそうに笑つた。

「商店街のお店でたくさん飾っていたのでお願いしてきました」

そう報告するのはユーリだ。ユーリの手にもビニール袋が握られ、中の小さな鯉のぼりが見て取れる。そのビニール袋を四袋も持っていた。つまりは人数分だ。

「これはシユウの分です」

ユーリが差し出してきたものを受け取る。中から鯉のぼりを取りだしてしばらく眺め、薄く微笑んだ。

「ありがとう、ユーリ」

お礼を言うと、ユーリが照れたように笑つてくれた。

二人が帰つてきたのでシユテルがお茶を入れ直し、それぞれに配る。では、とシユテ

ルが言う。全員で手を合わせ、いただきますと言った。

シユウはまず柏餅を手に取る。一口食べて、相好を崩した。ほどよい甘さのあんこでとてもおいしい。続けて二個目も食べる。ふと隣を見ると、シユテルがこちらを見つめていた。

「どうでしょうか」

少しだけ不安そうな声。初めて作るものだから気になるのだろうか。シユウは頬張っていた柏餅を呑み込み、笑顔で言った。

「すごくおいしい！ 柏餅はシユテルが作ったんだっけ？」

「はい。お口に合ったようで良かったです」

「いやほんとにすごくおいしいよ……。うん」

続いてちまきを食べる。こちらはディアアーチェが作ったと聞いている。それを思い出してディアアーチェの方を見ると、ちまきを手に取ったシユウをこちらも見ていた。苦笑しつつ、口に入れる。ちまきは見たことはあっても食べたことがないため比較するものがないが、美味しいと思う。なのでうなずいて言う。

「うん。おいしいよ、ディアアーチェ」

「む……。そうか。いや待て、なぜわざわざ報告する」

「気にしてるかなって」

「気にしてなどおらんわ!」

少し顔を赤らめてそつぽを向く。シユウは笑いながら、次のものに手を伸ばした。

食事後はいつも通りの時間を過ごす。リビングでみんなとのんびり過ごし、雑談を交わす。いつもと違うのは、大量に作られた柏餅がテーブルにまだあることだ。時折誰かが思い出したように手を伸ばし、少しずつ数を減らしていく。夕方になってもまだかなりの量が残っていた。

「今日はみんな用事があるんだっけ」

そう言いながらシユウは帰り支度をする。もつとも持ってきているものは何もないが。

「はい。すみません、シユウ。夕食も思っていたのですが」

「いやいや、気にしないでよ」

申し訳なさそうに謝ってくるシユテルにシユウは慌てる。こういう日もあるだろうとしか思っていないので改めて謝られると少し困る。ただ確かにシユテルの料理が食べられないのは少し残念には思うが。

四人はそれぞれ何かしらの準備をしていた。デバイスの準備もしているため管理局から呼び出しでもかかっているのだろうか。ただシユテルは他の三人と違い、柏餅をせつせと袋に詰めていた。

「作りすぎましたから、ナノハたちにも」

どうやらこれから向かう先にはなのはたちもいるらしい。そっか、とうなずくシユウ。そんなシユウに、シユテルはおもむろに大きな袋を差し出してきた。驚いているシユウの目の前で、袋を少し揺らすシユテル。早く受け取れ、ということらしい。

シユウは一先ず受け取って中身を確認する。柏餅とちまきがたっぷり入っていた。

「もう飽きているかもしれませんが、捨てるのもつたいたないのでよろしければ」

「いやいや、飽きてない！ いいの？ 本当にいいの？」

「はい。もちろんですよ」

「おお！ ありがとう！」

嬉しそうに礼を言うシユウ。そんなシユウの様子を見て、シユテルは満足そうに一度だけうなずいた。

そろそろ四人が出発する時間になったので、シユウは先に退室することにする。もらった柏餅とちまき、小さな鯉のぼりもしっかり持っている。

「それじゃあ、今日もありがとう。また呼んでね」

「はい。特に予定がなければ明日にでも」

「いいの？ じゃあまた明日」

いつものやり取りのあと、笑顔で手を振るシユウ。シユテルも小さくだが手を振って

くれた。

帰宅後。シユウはちやぶ台に小さな鯉のぼりを置く。柏餅とちまきを広げ、食べ始める。いくつ食べても飽きないおいしさだ。一つまた一つと数を減らしていく。

「晩ご飯としては栄養がちよつと悪いだろうけど……。うん。悪くない」  
幸せそうに食べ続けていた。

Side:S t e r n

シユウを見送った後、シユテルは部屋の中に戻る。すでに三人は支度を終えていた。シユテルも自分のデバイスを持って、お待たせしましたと告げる。

「よし、では行くか」

そうディアーチェが告げると、レヴィがおー！ と元気な声で返事をして、ユーリがはいと笑顔でうなづく。転移魔法で二人が先に転移した。

「……ところでシユテルよ」

シユテルも転移魔法を使おうとしたところで王に呼び止められる。何か？ と首を傾げると、

「あの大量の柏餅……わざとだな？」

「はい、そうですよ」

真顔でうなづくシユテル。やはりか、とディアーチェは苦笑した。

「あんなものでも、用意しないよりはましでしょう。何も食わずに寝てしまおうということもありそうですから」

「それはそうだな」

ディアーチェは苦笑してうなづく。まだ短い付き合いだ、それぐらいは手に取るように分かる。先に行くぞ、と言ってディアーチェも転移した。

「さて、私も行きましようか」

そう言って転移魔法を展開する。転移の直前にテーブルに置かれたままになっている鯉のぼりが視界に入り、

「……………」

シユテルはわずかに微笑んで、その場から姿を消した。

## 第十五話 はやて

本棚が並び、大量の本に囲まれた館内。つまりは図書館にシユウはいた。特に目的があったわけではない。気まぐれに足を運んだだけだ。たまには書店ではなく図書館というのも悪くはない。特に座って落ち着いて読めるというのがいい。

シユウは三冊ほどの本を適当に選ぶと、隅に設置されているテーブル席に座って本を読み始めた。それが開館の十時ぐらいで、ふと気がつくともう昼前だ。今日の昼は特に約束もないので、このまま夜まで読もうかと思う。

「……何をやっておるのだ」

そう思っていた矢先に声をかけられた。振り返ると、少し不機嫌そうに立っているダイアーチェがいた。その手には本が五冊ほど。シユウは少し驚きながらも、笑って言った。

「図書館だから本を読んでもよ？」

「そういう意味ではないわ」

ダイアーチェは呆れ果てたというようにやれやれと首を振った。少し待っておれ、



と言ってカウンターの方へ歩いて行く。そこで持っていた本を全て渡すと戻ってきた。返却にきたらしい。

「シユテルはどうした？」

「今朝お弁当はもらつたよ。ただ今日は一日用事があるからつてどこかに行つちやつたけど。聞いてない？」

「む……。確かに言つておつたが、貴様と一緒にだと思つていたのだが……」

違つたのか、と意外そうに目を丸くするディアーチェ。だがすぐになるほどと何度かうなずいて、

「例の件か。ならば仕方ない」

「何のこと？」

「気にするな。こちらのことだ」

ディアーチェはそう言うと、本棚へと本を取りに行つた。それを見送りつつシユウは首を傾げる。魔法関係のことなのだろうが、何一つ力になれないというのはもどかしいものがある。管理局の人に頼んでもう少し教えてもらうべきだろうか。

そんなことを考えていると、自分の背後に立つた人影に気がつかなかつた。本へと視線を落とそうとしていたシユウに声がかけられる。

「シユウ君」

振り返ると、そこにいたのは二人。一人ははやてだ。笑顔でこちらを見ている。

「こんにちは、やな。こんなところで会うとは思わなかったで」

「こんにちは、はやて。ちよつと驚いたよ。……で、そっちの人は誰？」

はやての奥、車椅子を押している女性に目を向ける。女性が一度だけ礼をする。

「この子はリインフォース。そう言えばまだ紹介してなかったな」

「初めまして。主はやてから話は聞いていますよ。よろしく頼む」

そう言つて手を差し出してくるリインフォース。シュウはその手を取ると、笑顔でよろしくね、と言つた。

「そう言えばシュウ君は一人なんか？ マテリアルの子は？」

「ああ、さつきディアーチェと会つて……」

「な！ 子鴉！」

シュウが切り出したところで、うろたえたような叫び声上がる。見ると本を数冊抱えたディアーチェがはやてを見て固まっていた。そんなディアーチェを見てはやてが笑顔になる。

「王様！ 奇遇やなあ、こんなところで」

「ちつ……。貴様が来ると知つていれば来なかつたわ」

忌々しい、と吐き捨てるように言つてきびすを返すディアーチェ。去り際に、帰ると

短く言い捨てる。そしてそのまま歩き去ろうとしたディアーチエを、

「ああ、待ってや王様！ もうちよつとお話しようや！」

慌てて追いかけるはやてとリインフォース。そして少し離れた場所でなにやら言い合いを始めている。二人とも場所に気を遣ってか小声なため、内容までは聞き取れない。周囲の利用者も無反応だ。どこからかかすかに、今日もか、という苦笑の声が聞こえてきた。どうやらそれなりの頻度で起こっていることらしい。

初めてあの光景を見るとどうしても不仲に思えてしまうが、お互いにお互いの家を訪ねることもあるなど、関係は悪くないようだ。けんかするほど仲がいいとはよく言ったものだ。

しばらくして二人が戻ってきた。ディアーチエは不機嫌そうな表情だが、はやての方は反対にすこぶる機嫌がよさそうだ。いつも以上の笑顔を振りまいている。

「シユウ君。今日の夜は暇か？」

はやてがそう問いかけてくる。今のところ約束などはないのでうなずくと、嬉しそうに手を叩いた。

「ならご飯食べにこうへんか？ 王様と料理勝負や！」

「どこからそんな流れになったのかいまいち分からないけど……」

一体どこから料理の話になっていたのだろう。想像ができないことに思わず苦笑し

てしまうが、料理勝負というのは見たことがないのでおもしろそうではある。

「うん。じゃあお邪魔するね」

そう言うのと、よっしや！ とはやてがガッツポーズをした。

その日は結局太陽が傾くまで図書館に居座っていた。夕方になり、買い出しに行くという三人と一緒に図書館を出る。

「それじゃあ材料を買いそろえたらあたしの家に集合な。王様、すつぽかしたらあかんで？」

「たわけ。貴様こそ忘れてたなぞぬかすなよ」

そう言うて二人は途中で別れる。はやてにはリインフォースがいるので、シユウはディアーチェの方についていくことにした。シユウがついてくることを確認したディアーチェは、しかし何も言わずに黙々と歩く。シユウも黙ってその後についていく。

最初の目的地のスーパーが見えたところで、ディアーチェが口を開いた。

「すまぬな、シユウ。つまらぬことに巻き込んでしまった」

シユウは一瞬驚き、すぐに笑う。何を気にしているのかと。

「いやいや、おもしろそうだし、いいよ。ご飯も食べられるし」

「そうか……。ならば良い」

ディアーチェはどこか満足したようにうなずくと、スーパーに入っていった。一緒に

入ろうとしたところ、公平にならないから待つておくように言い渡された。

買い物が終わり、八神家に到着する。想像していた家よりも一回り大きくシユウが驚いていると、玄関の前で二人を待つていたはやてがそれを見てまた笑う。

「アリサちゃんやすずかちゃんの家の方が当然やけどすごいで？」

「ああ……。まああの二人ならどんな豪邸でも不思議じゃないけど。金持ちだし」

それでも一度は見てみたいとは思う。ただ入つてみたいとまでは思わないが。

八神家の入ると、ヴォルケンリッターが出迎えてくれる。リビングへと案内してくれるのはシグナムだ。ディアーチエと視線が合うとどこか気まずそうにしている。

「ディアーチエ。シグナムさんと何かあったの？」

「気にするな」

「……はあ」

それはつまり何かあったということなのだろうが、教えてくれそうな気配はない。気にしないことにした。

リビングに通されて、ヴィータがお茶を持ってきてくれる。ごゆつくり、と緊張した面持ちで言う。少し可愛いと思つてしまった。

「まるで喫茶店だね」

思わずそんな感想が出てくる。丁寧にリビングへと案内され、お茶を出され。自分は

何かしただろうか。

「シユウ君はお客様やから、ゆっくりしてな」

そう言つてキッチンへと向かうはやて。デイアーチェもそれを追う。

「えつと……。お構いなく。僕のことには気にしないでね」

一応そう言つておくが、他の飲み物はどこだお茶請けはどこだと右往左往を続けているので自分の声は届かなかつたようだった。

出されたお茶を飲みながらテレビのバラエティ番組を見ていると、キッチンからはやてが出てきた。手にはお盆、その上には炊きたてご飯と肉じゃが。

「おおー！ 肉じゃが！」

思わず歓声を上げるシユウ。肉じゃがなどかなり久しぶりだ。目の前に並べられていくと期待感が高まる。

「みんなの分ももちろんあるからな。でもちよつと待つてな？」

「はい、大丈夫です」

「今回の主役はシユウ君ですから」

シグナムとシャマルがそう応じる。はやては一つうなずくと改めてシユウに向き直った。

「それじゃあ……。どうぞ、シユウ君。一応それなりに自信はあるよ？」

「それは楽しみだ！　じゃあいただきますー！」

手を合わせ、肉じやがを食べ始める。ご飯も食べる。久しぶりに食べる肉じやがは、そう言えばこんな味だったなと少し懐かしさも感じられた。あつという間に食べ終え、ふう、と一息ついて箸を置く。

「ごちそうさま。すごく美味しかった！」

「はい、お粗末さんでした。いやあ、そんな美味しそうに食べてくれると、あたしも嬉しいわあ」

上機嫌に言うはやて。シユウは料理はしても食べてもらうことではないのでその感覚はあまり分らないが、そういうものなのだろう。だからこそ正直に言うようにはしているのだが。

「では次は我だ」

キッチンから出てきたディアーチェも盆を持っていた。その上にはとろとろのチーズが入ったカレー。それをシユウの前に置く。

「おお！　チーズカレーだ！」

「反応同じだな」

思わずヴィータが言うが、シユウは気にしない。目の前に出されたチーズカレーで頭はいっぱいだ。エサを与えられた子犬のごとく、じつとディアーチェの言葉を待っている。

る。

「……待たなくていい。さっさと食べる」

「いただきます！」

シユウはスプーンを手にとると、すさまじい勢いで中身を減らしていく。肉じゃがと同じく、こちらもあつという間に食べ終えてしまった。

「おいしかった！ いやあ、すごく満足だ」

幸せそうに言うシユウ。出した側としてもそれを聞ければ満足だ。だが、今回の名目は料理勝負でもある。作って食べて終わり、というわけではない。

「それで、シユウ君。どっちが美味しかった？」

はやてに聞かれ、ああそうかと思いつく。今の今まで勝負のことなど忘れていた。腕を組んで少し考える。肉じゃがの味を思い出し、カレーの味を思い出し……。そして出した結論は一つだけだ。

「うん。分からないね。せめて一緒に料理を作ってもらわないと」

「ああ……」

「そうであらうな……」

はやては苦笑し、デИАーチエがため息をつく。二人ともどうやらこの結果を察していたらしい。ならなげもう少し打ち合わせをしなかったのかと言いたいところだが、



「ディアーチエがそれを拒否していいそうなので何も言わないでおく。」

「それでもどちらかと言えば、ディアーチエかな。僕の好みの問題だけだ」

はやてとディアーチエがそろって目を丸くして、次いではやてが肩を落とし、ディアーチエが得意気に表情を綻ばせる。当然の結果だというように。

「シユウ君の好みを知ってるだけあるなあ……。でも次は負けへんで？」

「ふん。次も振り返りにしてやるわ」

そんな会話を交わす二人。やはり関係は良好なのだろう。むしろこうして見ていると、二人はまるで、

「姉妹みたいだね」

思わず声に出してしまった。そしてその反応は劇的だった。ヴォルケンリッターたちが表情を強ばらせ、はやてが喜色満面になり、ディアーチエが憤怒の形相になる。先に口を開いたのははやてだった。

「やつぱりそう見えるか？ 見えるよな？ いやあ、さすがシユウ君や！」

「誰が姉妹だ！ 誰と！ 誰が！」

叫ぶのはディアーチエだ。えー、とはやてが不満を言う。

「あたしは姉妹でもいいと思うけどなあ。お姉ちゃんって呼んでくれてもいいんやで？」

「誰が呼ぶか！ 阿呆が！」

「じゃあ逆か？ お姉ちゃん」

「貴様……！ 表に出ろ！ ジャガーノートを食らわせてくれる！」

どうやら自分が発した一言はちよつとした爆弾だったらしい。だがこれすらもいつものことなのか、ヴォルケンリッターたちはすでに立ち直って自分たちの夕食の準備を始めている。

「つれないなあ、王様。あたしは王様のこと、好きやで？」

「黙れ子鴉！ 我は貴様などとは会いたくないわ！」

「そんな……それはひどいわ……」

はやてが涙声になると、ディアーチエが珍しく狼狽する。

「な、なぜそうなる……。待て、我はそのようなつもりでは……」

「なんて、冗談やけどな」

「子鴉貴様あ！ 表に出ろおおおおお！」

騒ぐ二人。食事の準備を終え、主を待つヴォルケンリッターたち。シユウはその光景を見て、今日も平和だなあ、と微笑んだ。

Side: Hayate

シユウとディアーチエを見送り、はやては玄関のドアを閉じた。少しだけ寂しげにその扉を見つめ、そしてリビングに戻る。

「彼女は少し柔らかくなりましたね」

ラインフォースがやってきて車椅子を押ししてくれる。はやては微笑むと、うなずいた。

「うん。シユウ君のおかげやろうな」

ずっと彼女たちのことが気になっていた。特に今後についてをだ。今後についてのはまだこれから決めていかねばならないが、シユウがきつと良い方向に導いてくれることだろう。なぜだかそんな確信がある。

「これからよろしくな、シユウ君」

新しい友人に向かって、はやては楽しげにそうつぶやいた。

## 第十六話 五月雨

しとしとと雨が降る。冷たい雨が周りの地面を濡らしていく。シユウはその様子をぼんやりと眺めている。今いる場所はシユテルとよく来る公園で、大きな木の下にいる。目の前には晴れていたなら二人でよく座るベンチがあり、さらにその奥には池。草地の上にレジャーシートを広げ、シユウはそこに座っていた。

隣にいるのはシユテルだ。黙々と本を読んでいる。シユウも先ほどまで本を読んでいたのだが、少し休憩して周囲の様子を眺めていた。

休日の朝にシユウの住居へとシユテルが訪ねてきた。少し出ませんか、と。すでに梅雨入りしており空模様も悪かったが、そんな日に出歩くのも悪くないかなと了承した。そして二人でのんびりと歩いてきたところ、案の定雨が降り始め、今に至る。

レジャーシートや本を数冊持ってきていたことから、シユテルはこうなることは予想していたらしい。最初からどちらかの家にいればいいのにと一度は思ったが、こうして雨の音を聞きながら本を読むのも悪くはないと思えてきた。それに、隣にはシユテルもいる。

しとしとと雨が降る。周囲を濡らしていく。全てに水を与えていく。

「ふああ……」

大きな欠伸をして、シユウは腕を伸ばして伸びをする。目をこすりながら隣を見ると、こちらを見ているシユテルと目が合った。

「疲れましたか？」

シユテルが聞いて、シユウが首を振る。

「大丈夫。気にせず読んでね」

「はい」

シユテルが再び本に視線を落とす。シユウはそれを見て微笑むと、自分も本を手にとって続きを読み始める。昼までに一冊読み終えしまおうと、なぜかそんなことを思ってしまった。

そしてしばらくして、シユウは顔を上げる。灰色の雲ごしにかすかに見える太陽の光が、ほぼ真上へとさしかかっている。もうお昼だ。シユテルを見ると、また目が合った。思わず苦笑すると、シユテルがそっと包みを差し出してくる。首を傾げて受け取って、包みをほどこいて中を見る。弁当箱だ。

「お昼にしましょうか」

「うん。そうだね」

二段重ねの弁当箱を開けると、上段には小さめのサンドイッチが並んでいた。下段には海苔のおにぎり。全てが片手で食べられるものだ。本を読みながら、ということ想定していたのだろうか。

いただきます、と手を合わせ、シユウはサンドイッチを手に取った。具材はハムとレタスだ。シンプルながら、それ故に食べやすい。それを口に入れて、うなづく。

「うん。おいしい。さすがシユテル」

素直にそう言うと、シユテルが小さく頭を下げた。

「光栄です」

そしてまた食べ始める。ゆっくり降り続ける雨の中、のんびりと食べていく。とても静かな時間だ。

やがて全て食べ終えて、弁当箱を包み直す。二人は食事を終えると、また読書へと戻ろうとして、

「……………」

シユウはちらりとシユテルを見る。食事の名残か、器用に片手で本を読んでいる。シユテルの顔とその手を交互に見て、シユウは逡巡して、しかしすぐに口を開いた。

「ねえ、シユテル」

「はい」

すぐに返事が返ってくる。視線は本に落とされたままだが。

「手、繋いでいい?」

「……はい?」

シユテルが顔を上げる。怪訝そうに眉をひそめ、どうしたのかと言いたげにシユウを見る。その視線を受けて自分が口走った言葉の意味を理解して、少し恥ずかしくなって顔を背けた。

「いや、ただ何となくだったから……。気にしないで」

「構いません」

「……へ?」

今度はシユウが間の抜けた声を漏らした。どういう意味か分からずに首を傾げてみると、シユテルは黙ってシユウの手を掴む。びくりとシユウが体を震わせ、しどろもどろになって狼狽してしまった。

「あ、えつと、シユテル……」

「これでいいですか?」

「あ、うん……」

こともなげに言うシユテルを見て、シユウは内心で少し気落ちした。やはり自分はそれほど意識はされていないらしい。ただ、それでも手を繋いでくれるということは嫌わ

れていないということでもある。そう考え、それでいいかとシユウは納得した。

シユテルの手は温かい。なぜか妙に安心してしまう。片手でシユテルの体温を感じながら、シユウはまた視線を本に落とした。

### S i d e : S t e r n

シユテルは視線だけをシユウへと向ける。少しだけ嬉しそうにしているシユウは、また読書へと戻っている。片手はシユテルの手を握ったままだ。そんなシユウを見て、内心で首を傾げた。なぜ、手を繋ぎたいと言ってきたのだろう。

少し考えたが、本人の心の内のことなので理解できるはずもない。シユテルは早々に思考を打ち切ると、また視線を本へと戻す。

ただ、少しだけ。少しだけ恥ずかしいと感じてしまうのはなぜだろうか。

シユウの手は少し冷たい。この雨で冷えてしまったのかもかもしれない。まだ寒さが残る季節だ。簡単な防寒具ぐらいいは誘った側である自分が持つてきておくべきだったか。そう思ったが、今から取りに行くことはできなかつた。今の時間をもう少し一緒に過ごしたい。そう思ったからだ。

さらに時間が流れ、雨足が遠くなってきた。今日は夕方から少し天気が回復すると聞いている。雨が上がれば帰って温かいココアでも入れよう。そんなことを考えている



と、不意に肩が少し重たくなった。何が、と思つてそちらに視線を向ける。シユウの頭がそこにあつた。

「……シユウ？」

呼びかけてみると、整つた寝息が返ってくる。シユテルは一瞬唾然とした後、仕方のない方ですね、と我知らず微笑んでいた。

Side: Hero

シユウはゆつくりと目を開ける。いつの間にか眠つてしまつたようで、頭が少しぼんやりとしている。だから、目を開けてすぐにシユテルの顔を見た時は、まだ冷静に物事を考えられなかつた。

「おはようございます、シユウ」

シユテルのどこか優しい声。シユウは少しだけ笑顔になつて、

「おはよう、シユテル」

答えたところで、思考が一気に戻ってくる。いつの間にか横になつてゐる体、目の前にあるシユテルの顔。そして、頭の下にある何か柔らかいもの……。

膝枕。

「うわあー！」

その結論が出た瞬間、シユウは慌てて飛び起きた。シユテルが少しだけ目を丸くする。

「どうかしましたか？」

きよとんとした様子でそう尋ねてくるシユテル。シユウは慌てながらもその場で頭を下げる。

「ご、ごめん！」

謝罪の言葉を口にする、対するシユテルは意味が分からないといった様子で首を傾げるだけだ。シユテルは少し考えて、寝てしまったことなら構いませんと少し違うことを許してくれる。それもあがるが、それではない。

「いや、そうじゃなくて、いつの間にかシユテルの膝を枕にしてしまったみたいで……」  
「それも別に構いませんが……」

むしろどうしてそんなに狼狽しているのか、と聞きたげなシユテルに、シユウは余計に言葉を詰まらせた。謝罪の必要はないと言われたようなものだが、それでも納得はできない。

「本当にごめん……」

もう一度心から謝罪すると、シユテルの方が納得していない様子だったが、まあいいでしょうと会話を打ち切った。

「私としては問題なかったのですが」

「いやそこはちよつと気にしてほしいなあ……」

「そうですか？ 貴方が気持ちよきそうに眠っていただけで十分なのですけど」

「……え？」

口を開けて呆けるシユウを置いて、シユテルは片付けをする。最後にレジャーシートを片付けるだけというところまできて、シユテルは忘れ物やゴミが残されていないか確認する。全てが終わって改めてシユウは視線を向けられたが、シユウは固まったままだった。

「シユウ。そろそろ帰りましょう」

シユテルの言葉にシユウが我に返った。慌ててレジャーシートから離れ、畳むのを手伝う。顔が真っ赤になっているのだが、シユテルに何も言われないうらうか。

「では行きましょう」

シユテルが手を差し出してくる。シユウはその手をしばらく見つめ、逡巡してしまふ。シユテルがなかなか手を引つ込めないで、シユウは遠慮がちにその手を取った。

先を歩くシユテル。それを追いかけるシユウ。そして繋がれた手。

シユテルの手はやはり温かく、そして柔らかかった。それを意識するとすぐにまた顔が赤くなる。マンションに着くまでに落ち着かなければならない。

そんなシユウの考えなど知るよしもなく、シユテルは帰路を歩いて行く。その表情はいつもより柔らかい。どこか機嫌が良さそうなものだ。もちろん後ろを歩くシユウはそのことに気がつかないのだが。

雨足はすでに遠のき、二人はお互いの手を握って淡々と歩く。濡れた地面の上をゆつくりと、時折水たまりを避けながら。雨の後の世界をのんびり歩く。

「ねえ、シユテル」

前を歩くシユテルに声をかける。何でしようか、と声だけが返ってくる。

「今日はどうしたの？　こんな雨の日に」

自分でも今更それを聞くのかと思ってしまうが、ずつと気になっていたことだ。するとシユテルは足を止めて振り返り、いつもの無表情で言う。

「特に理由はありません。たまにはこういうものも悪くはないかと思っただけです」

「そう？」

「はい。無理に付き合わせてしまい、すみません」

そう言つて頭を下げるシユテル。シユウはまさか謝られるとは思つておらず、途端にしどろもどろになってしまう。

「い、いや！　そんなことないから！　僕も雨は嫌いじゃないし……！」

ならいいのですが、とシユテルは言つて、また歩き始めた。安堵のため息をついて、

シユウはすぐにその後を追う。今もまだ手は繋がれたままだ。

雨は嫌いじゃないと言ったが、好きでもない。雨の日は空の暗さのせいもあるのか、少し昔のことを思い出してしまう。すぐに気が滅入ってしまう。

——でも……。

目の前のシユテルを見る。初めて会った魔法使い。明日からの雨はこの子と過ごした今日という日を思い出せることだろう。それならもう少し、雨が好きになれるかもしれない。そこまで考えて、シユウはふと思う。自分はいつまでシユテルたちと一緒にいられるのだろう。

そんな答えのない考えを始めると、自然と歩みが遅くなった。シユテルが怪訝そうに振り返り、

「どうかしましたか?」

「……いや、何でもない。気にしないで」

そう笑顔で答える。シユテルは、そうですかと言った後もしばらくシユウの表情を見ていたが、やがて前に向き直ると歩き始めた。

——今は……いいか。気にしなくても。

自分の側にシユテルがいる。シユテルの手を握っている。それだけで今は十分だ。そう自分に言い聞かせ、シユウはシユテルの隣に並んだ。遠慮がちに話しかけると、

シユテルがいつも通りに返事をしてくれる。そう、今はこれだけで十分。

しとしとと雨の降った街。通り過ぎた雨。濡れた道を歩く二人。先ほどまでは人がいないかのような静かな世界だったが、ようやく楽しく二人の声が聞こえてきた。

## 第十七話 労働

ある日の午前。シユウが自室の掃除を済ませ、お茶を飲みながら一息ついていると、突然の来訪客がやってきた。ドアを叩き、シユウを呼ぶ声が聞こえてくる。

「シユウ！ 開けてください！ お願いします！」

この声はユーリか。シユウは、どうしたのかなと疑問に重いながらも立ち上がり、玄関へと向かう。ドアを開けると、果たしてそこにユーリがいた。シユウの顔を見て、嬉しそうにぱつと顔を輝かせる。いつの間やら慕われたものだ。なぜかは分からないが。

「シユウ！ お願いしたいことがあります！」

「うん。とりあえず入って」

続けて口を開こうとしたユーリを宥め、自室へと招き入れる。ちゃぶ台の前に座ったユーリに冷たいお茶を出し、自分はその向かい側に座ってからどうぞと手で合図をした。お茶を飲んで落ち着いたのか、ユーリがうなずいて話し始める。

「実はディアーチェたちに何か贈り物をしようと思つています」

「へえ。なんで？」

「え？ えっと……。お世話になったらプレゼントをしないとイケないって、テレビでやってました」

なるほど、とシユウはうなずく。間違つてはいないのだろうが、そんな突発的に上げるものでもないと思うが。だがあの三人ならきつと喜ぶだろう。ユーリが望むのなら、それを手伝うぐらいはしよう。

「何を買うの？」

「それはえっと……。秘密です！」

なるほど、つまりプレゼント選びかな。そう考え、あの三人ならどんな物なら喜ぶだろうと考え始める。だが、次の言葉にそんなものは吹き飛んだ。

「だからシユウ！ お仕事を紹介してください！」

「いきなり難易度が上がったね！ いやさすがに無理だから！」

それ以前になぜいきなり仕事ときたのか。そう聞くと、ユーリは少し難しい表情をした。

「今のお金は、管理局の皆さんに協力することです。みんなでもらっているお金です。ちゃんと、自分でお金をもらって、それで贈り物したいんです」

「気にしすぎだと思っけどなあ……」

以前、シユテルから家計のことを少しだけ聞いたことがある。管理局の嘱託魔導師と



して働き、そこからお給料をいただいていると。食費などの必要なお金以外はそれぞれ均等に四人に分けているそうだ。その分けられたお金ならユーリが自分で稼いだお金と言っても大丈夫だと思うのだが、どうやらあまり納得はしていないらしい。

じつとシユウを見つめてくる。期待に満ちた眼差しで。こうなると、シユウもさすがに断れない。シユウは小さくため息をつく、立ち上がった。

「分かった。ただ僕もそういつたお願いができるところは限られるから、期待はしないでね」

「はい！ ありがとうございます！」

ユーリの笑顔を見て、まあ悪くないか、と納得してしまった。

「というわけです」

相手に簡単な成り行きを説明する。相手は納得したように何度かうなずいて、笑顔を見せた。

「分かったわ。接客とかなら大丈夫かしら？」

この人なら了承してくれるだろうと思っていたが、まさかこんなに軽く引き受けられるとは。シユウはユーリを前に出して、お願いしますと頭を下げた。

かくして、ユーリはエプロンを着用する。翠屋のエプロンを。

「い、いい、いらつしやいませ……！」

入り口で緊張した面持ちで挨拶するユーリ。来店したおばさん二人はユーリを見る  
と少し目を丸くし、すぐに柔和な笑顔を浮かべた。かがんでユーリと目線の高さを合わ  
せる。

「あらあら、かわいい店員さんね。どこの子？」

「あ、えつと……。その……」

「ちよつと、お仕事の邪魔をしちゃ悪いでしょう？ それじゃあ席に案内してもらえ  
る？」

二人からの続けざまの言葉にユーリは一気に泣きそうな表情になる。助けを求め  
るように周囲を見回す。それに気づいたアルバイトの人がすぐにフォローに入りきた。  
おばさん二人がアルバイトの人に案内されながら、それじゃあねとユーリに手を振る。  
ユーリはずつと固まっていた。

「うん。無理そうだ」

桃子から与えられた仕事は、来店したお客様を空いている席に案内する、というもの  
だった。この時間帯に来る人は急いでいる人もいないので、少しぐらいの失敗は大目  
に見てもらえるからというものだったのだが。

——失敗する前に挑戦すらできてないね。

シユウは苦笑すると、席を立った。人見知りするユーリにこの仕事は難易度が高い。

残念だが断ることにしよう。

また何かあったらいつでも来てね、という桃子の言葉に見送られ、シユウはユーリを連れて翠屋を後にした。ユーリは茫然自失としている。おそらく自分でもあそこまで何もできないとは思ってもみなかったのだろう。シユウは苦笑すると、さて、と仕切り直しにかかった。

「次に行こうか」

「次……ですか？」

不安げにこちらを見つめてくるユーリ。シユウはうなずくと、

「とりあえず、アースラに行こう」

そう言つて、ユーリに手を差し出した。

「なるほど、事情は分かった」

そう言つてうなずいたのは執務官のクロノだ。二件目にして早くも最終手段の管理局頼みだ。そのことに自分が少し情けなくなるが、こればかりは仕方が無い。

「とりあえず艦長に聞いてくるよ。待っていてくれ」

クロノはそう言つてその場を後にした。二人はそれを見送り、お互いに無言でクロノが戻つてくるのを待つ。

やがて戻つてきたクロノは二枚の書類を持っていた。それを二人に差し出して、言

う。

「ユーリにはこちらの仕事を。心配することはない、ただの資料運びなどの雑務だ。難しいことはないし、人と話すことも最小限で済む。これなら大丈夫だろう?」

安堵のため息をついてうなづくユーリ。続いてクロノはシユウに言う。

「せつかくだから君も体験していかないか? 基本的にはユーリと一緒にだ。ユーリも君と一緒にの方が安心できるだろう」

もとよりユーリと共に行動するつもりだったが、お墨付きをもらえるならその方がいい。クロノの言葉に、シユウはありがとうとうなずいた。クロノもうなずきを返し、言う。

「それじゃあ仕事の内容を説明するよ。終わりの時間は君たちに任せる」

そう前置きして、クロノの説明が始まった。

仕事の内容は単純だったが、それ故にハードだった。資料室から各部屋への往復をかなりの回数こなしている。一つの部屋に資料を持って行けば、次はこちらを頼むと指示される。その繰り返しで、二人は常に足を動かしていた。ただ、それでもしつかりと仕事ができていることが嬉しいのか、ユーリは嬉しそうに続けている。ほとんど巻き込まれただけの体に近いシユウも、その表情を見ただけで十分だ。

時折休憩を挟みながら、ひたすらに資料を運び続ける。使い終わった資料を元の部屋

に戻すのも二人の役目だ。ひたすらに何往復も繰り返し、やがて海鳴市の時間で午後六時を回ったところでクロノから連絡が入った。そろそろ終わろうか、と。

「も、もう少し……!」

ユーリが言つて、クロノが苦笑する。

「気持ちありがたいが、そろそろ君たちを送り返さないと僕が怒られるんだ。誰から、とは言わなくても分かるだろう?」

「う……。はい、そうですね……」

ユーリがうつむいてうなずき、シユウは少し想像する。ディアーチエやシユテルが怒っている様を。今日は七時から夕食だと聞いている。そろそろ帰らないといけないだろう。

「それじゃあ、最後に艦長室に行こうか。艦長が待っているから」

そう言うクロノに先導されて、二人は艦長室に向かう。さほど歩きもせずに艦長室にはたどり着いた。どうやら最後の資料運びは艦長室の側を意図的に選んでくれたらしい。

失礼します、と言つてクロノが室内に入る。シユウとユーリも、やや緊張した面持ちで入室した。

「いらっしやい、シユウ君、ユーリさん」

和室のようなそうでないような、何とも微妙な部屋を見てシユウは苦笑した。聞いてはいたし知ってはいたが、何度見てもこの部屋は慣れない。シユウとユーリはクロノに促され、リンディの前に座る。

「今日は本当にありがとう。仕事が捗ったって、みんな喜んでいたわ」

「いえ。こちらこそ急なお願いを聞いていただいてありがとうございます」

答えるのはシユウだ。ユーリはシユウの影で小さくなっている。その様子もいつものことなのか、リンディも何も言わず淡く微笑むだけだ。

「それじゃあ、どうぞ」

リンディが封筒を二封差し出して来る。シユウとユーリがそれぞれ一封ずつ受け取り中身を確認すると、五千円札が入っていた。シユウが、うあ、と妙な声を漏らす。

「いいんですか？ こんなにもらって」

「ええ、もちろんよ。正当な対価だから」

リンディは笑顔でそう言う。ただ資料を運んでいただけなのには思うが、とりあえずはリンディの好意に甘えてありがたく受け取ることにした。

「ありがとうございます」

シユウが礼を言うと、ユーリも頭を下げた。リンディはいえいえと手を振る。

「また良ければ手伝ってね。歓迎するわ」

リンデイに見送られ、二人は艦長室を後にする。そのままクロノに地上まで送つてもらい、アースラを後にした。

ユーリは何を贈るか決めていたらしい。帰りにデパートに寄ると、ユーリは大急ぎで買い物を済ませていた。シユウは入り口で待つ。十分程度で戻ってきたユーリの手には大きめの紙袋があり、中にはラツピングされた箱が三つ収まっていた。

「お金は足りた？」

「ばっちりです！」

嬉しそうに言うユーリ。シユウも満足そうにうなずくと、マンシヨンへと向かう。

マンシヨンにたどり着いたのは午後七時になりそうな時間だった。ユーリがドアを開けていただいとようと、奥から誰かが駆けてくる音。すぐにディアーチェが姿を現した。

「ユーリ！ 戻ったか！ 今までどこに……！」

「ごめんなさい、ディアーチェ。ちょっとお買い物に行っていました」

嘘は言っていない。シユウは隣で思わず苦笑してしまう。ひとまずユーリと共に室内に上がりリビングに向かうと、すでに夕食が並んでいた。ハンバーグだ。

「わ！ ハンバーグです！」

「はい。冷めないうちに食べてください」

そう言ったのはシュテルだ。すでに席について、全員分のご飯を準備している。レヴィは待ちきれないとばかりに目を輝かせていた。

「あ、その前にですわね……。これを、三人に……」

ユーリが紙袋からラッピングされた箱を取り出すと、三人に渡す。三人はそれぞれ大なり小なり驚いた様子だった。

「ありがとうございます、ユーリ」

最初に言ったのはシュテルだ。続いてデイアーチェ。

「突然どうしたというのだ……。いや、ありがたく受け取っておく」

「ユーリ、ありがとー!」

最後にレヴィ。ユーリは何かやり遂げたかのように、少し誇らしげな表情をしていた。全てを知っているシュウはそれを微笑ましげに眺める。そして、シュテルも。

食事後。シュウは玄関に向かう途中でシュテルに呼び止められた。

「シュウ。ありがとうございます。わざわざ連絡していただいて」

気にしないで、とシュウは笑う。今回の顛末は資料運びの合間を縫ってシュテルに連絡済みだった。実は今日の夕食も、一日がんばったユーリを労うためのメニューだった。

「ちなみに、何をもらったの？」



シユウが聞くと、シユテルは首を振って言う。

「秘密、ということだ」

「そっか。分かった」

大人しくうなずき、シユウは玄関へと向かった。

S i d e : Y u r i

シユウを自宅へと送るために、シユウの隣をユーリは歩いていった。歩きながら、今日一日の出来事を振り返る。何から何までシユウに頼りっぱなしだった。

「シユウ」

「ん？」

「今日は、ありがとうございました」

せめて心からのお礼を口にする。するとシユウは、

「いや、僕も貴重な体験ができて良かったよ」

そう笑顔で言ってくれる。いつもの、屈託のない笑顔だ。その笑顔を見ると、ユーリも自然と笑みがこぼれてくる。

いつかは、私もみんなを支えられるようになりたい……。

そんなことを心に思いながら、ユーリは今日もシユウの隣を歩いた。

## 第十八話 七夕

とある家の夜の庭。シユウはそこで呆然と立ち尽くし、考える。なぜこうなった。

目の前ではどこから持ってきたのか、大きな笹が飾られている。知り合いたちが願い事を短冊に書き、吊していく。庭にはテーブルが出され、様々な料理が並べられていた。こういう行事ではなかったはずだが。

シユテルとなのはが二人で短冊に何かを書いて、なのはが笑ってシユテルが嘆息している。あまり見ない光景なので少し新鮮だ。こういうのもいいなと思うのだが、それでもやはり、なぜ自分もここにいるのだろうとは思う。

高町家の庭で、シユウはそう思った。

発端は学校から帰る時だった。さて帰ろうと帰宅の準備をしていると、なのはが駆けてきた。どうしたのかと首を傾げていると、なのはが目の前で息を整えてから言う。

「ねえ、シユウ君。今晚、暇かな？」

突然の問いかけ。クラスメイトの何人かが驚いて二人を見るが、シユウとなのはは気づかない。

「シユテルとの約束があるけど、どうしたの？」

「シユテルもあとで誘うつもりだったんだけど……。よければ家に来ない？ お父さんが葉竹をもらってきてるから、みんなで願いの事を書こうってことになってるの」  
「……ああ。そう言えば今日は七夕だっけ」

完全に忘れていた。そういつた行事とは縁が無かったので当然と言えば当然なのが。なのははどうかかな？ と少し不安げにこちらをうかがっている。

「分かった。シユテルには僕から聞いておくよ。多分大丈夫だとは思うけど」

「ほんとに？ ありがとう！ じゃあお願い！」

嬉しそうに笑うのは。シユウは了解、と一つうなずくと、教室を後にした。

夜までの時間はさほど長くない。シユウは自宅には戻らずに、そのままシユテルたちのマンションに向かう。シユテルたちにも準備があるだろうと考え、道すがら携帯電話でシユテルに連絡をすることにした。

『はい、シユテルです』

一コールで出たことに驚きつつ、シユウは歩きながらなのはからの誘いを説明した。するとシユテルは、七夕ですかとつぶやき、しばらく考え込む。のんびりと次の言葉を待っていると、やがて分かりましたとの返事があつた。

『ではナノハのご自宅に伺いしましょう。王やレヴィたちにも伝えておきます』

「うん。よろしくね」

電話を切つて、そろそろ急ごうかとシユウは走り始めた。

マンションでシユテルたちと合流して高町家へ向かう。道中、レヴィやユーリはともテンションが高かった。七夕つて何をするんだろうねー、とそんな言葉を交わしている。シユウが首を傾げてシユテルとディアーチエを見ると、行けば分かるかと答えたとのことだった。

「きつとあれだよユーリ！ お団子が食べられるんだ！」

「いやそれはお月見だから」

苦笑しつつ訂正する。実際にあちらでどういったことをするのか聞いていないが、あまり期待させてしまうのはいけないだろう。とりあえずはハードルを下げておこうと思う。

「じゃあ何を食べるの？」

「……食べることから離れようか……」

レヴィの中では行事と食べ物かイコールで繋がっているらしい。確かにほとんどの場合は間違いではないが、さすがにそればかりというわけではない。

「まあ、行つてからのお楽しみということだ」

「はーい」

元氣よく返事をするレヴィとユーリ。うなづくシユウ。後ろで見ていたディアー

チエが、

「どこの父親だお前は」

呆れながらそんなことを言つて、シュテルがため息をついていた。

高町家に到着し、インターホンを押そうとしたところではが笑顔で出てきた。押そうとしていた体勢のままシュウが驚いて目を丸くする。

「よく気づいたね……」

「うん。シュテルからの念話で」

なるほど、便利だ。こういつた時は少し羨ましくなる。

なのは案内されて敷地内へ。建物には入らずにそのまま庭へ向かう。どこから調達してきたのか、そこには立派な葉竹があつた。その周囲にテーブルが並び、料理が所狭しと並べられている。レヴィがそれを見て目を輝かせたのは言うまでもないだろう。七夕について間違つた解釈をするのではと思うが、いずれ正せばいいかと今は何も言わないでおく。

こちらを認めた何人かが向かつてくる。フェイトとはやてだ。

「レヴィ！ 来たんだね」

「来たよー！ おいしいものが食べられると聞いて！」

「あはは。うん。たくさん食べられるよ」

そう言いながらフェイトはレヴィの手を取ると、テーブルの一つへと連れて行く。レヴィも喜んでフェイトに連れられていった。

「王様、これはあたしが作ったんよ。食べてな？」

「ふむ。……なるほど、なかなかの見た目だ」

「いや味！ 食べてって！」

いつの間にかディアーチェもはやてと一緒にいる。はやてがきれいに盛りつけられた皿をディアーチェに押しつけようとして、対するディアーチェは無視して感心した様子で葉竹を眺めていた。少しぐらい話してあげても、と思っていると、ディアーチェがおもむろにはやての料理に手を伸ばし、口に入れる。

「うむ。悪くない」

ぶつきらばうなその言葉。はやてはしばし唾然とした後、すぐに嬉しそうに笑った。

「願い事用の短冊。ちゃんと五色あるよ」

「なるほど。では一枚いただきます」

シユテルはなのはと短冊に向かっている。どうやらこれから願い事を書くらしい。

「みんなとずっと仲良しでいられますように、と」

「ナノハを倒せますように」

「ひどい！」

「冗談です」

いい関係だなあ、と二人のことを眺めた後、いつの間にかユーリの姿までなくなっていることに気がついた。周囲を見回すと、高町家の家族に囲まれていた。

「へえ、君がユーリちゃんか！　かわいいなあ……」

あの人は確かなのはの姉だったか。その母親がユーリを撫でながら、またいつでも翠屋に来てねと楽しそうに言っている。どうやら先日働いた時にとても気に入られているらしい。ユーリは困惑しているようだが、しかし嬉しそうでもある。

そして自分は一人、取り残されていた。

「……何だろこの疎外感は」

苦笑して、シユウは短冊に手を伸ばした。

そして今に至る。

料理に舌鼓を打ち、短冊に願い事を書き、親しい者と談笑し……。そんな中で、シユウは一人だけ庭の隅で短冊を睨み付けていた。願い事を書くとうとは思ったのだが、何も思い浮かばない。料理にも手をつけず、ずっと考え込んでいる。

腕を組んで唸っていると、ジュースの注がれたコップを差し出された。少し驚いて顔を上げると、シユテルが立っていた。

「オレンジジュースです。ずっとここにいますね」

「ありがと。うん、ちょっと輪に入りづらいかな」

ここにいるほとんどの者は魔法の関係者、またはその家族と友人だ。なのはたちがどのような事件に直面したか知っている人たちだけだ。自分は簡単に話を聞いただけの部外者。そんな自分が輪に入れるはずがない。

「そんなことは誰も気にしないと思いますか」

「うん。僕が気にする」

「そんなものですか」

「そんなものです」

オレンジジュースを一口飲み、のどを潤す。少し空腹も感じ始めてきた。

「こちらはどうぞ」

そう言つてシユテルは料理が載った皿を差し出す。盛られているのはサンドイッチだ。礼を言つて受け取り、口に入れる。すっかり慣れ親しんだ味だ。

「……あれ？ これって」

「はい。私が作ってきたものです」

こともなげにシユテルは言い、シユウはそつかとつぶやいて口を動かす。呑み込んで、笑顔で言つた。

「うん。さすがシユテル。美味しい」



「誰が作っても材料が同じなら変わらないとは思いますが……。光栄です」

その後は静かな時間が流れる。サンドイッチを頬張りながら、目の前の賑わいを眺める二人。輪の中には入らずに、シユウは傍観者の立場を貫く。これで、いい。

「そう言えば、なのはともういいの?」

ふと疑問に思いそう尋ねると、シユテルが小さくうなずいた。

「ナノハから、シユウのところへ行くべきだと」

「ふうん。なんで?」

「なぜでしょう?」

二人して首を傾げる。考えても理由は分からず、二人はすぐに、まあいいかという結論に達した。会話が止まってしまったので、今度はシユウから問いかける。

「シユテルは願ひ事はもう書いたの?」

問われたシユテルは一つうなずき、指で指し示す。すでに吊されている短冊の数は結構なものになっていたので分からないが、あのどれかにあるのだろう。内容を聞くと、秘密ですと言われてしまった。

「僕はどうしようかな」

「思い浮かんだものを書きましよう。一枚だけとは言われていませんし、思いつく全てを書いてもいいと思いますよ」

シユテルの言葉に、なるほどとうなずく。全て書いてもいいなら、これは書いておきたいというものがある。ただ見られるのが恥ずかしくて書いていなかったものだが。シユウは短冊に文字を書く、と、とりあえず一枚目と笑顔で言った。

「あとは……」

短冊をもう一枚手に取り、少し考える。そして思い浮かんだものは、自分にこんな感情がまだあったのかというものだった。思わず自嘲を漏らすと、シユテルが首を傾げてくる。何でも無いよと笑い、とりあえずそれも書いておいた。

「二枚目。あともう一枚」

「意外と欲張りですね」

「そうかな? そうかも」

笑いながら、三枚目はすぐに書き終えた。それを葉竹へと持って行き、吊す、すぐに戻ってきた。シユウの短冊には誰も気づかない。

「何を願いましたか?」

「ん? 秘密」

何か飲み物を取ってくる、と言ってその場を離れる。吊した後に書いた内容を後悔した。さすがに少し恥ずかしい内容だ。近くのテーブルからジュースを取ってくると、すぐに庭の隅へと引き返す。だがそこにシユテルはおらず、

「……あ」

葉竹の、シユウが吊した短冊の真下にシユテルがいた。

書いた一枚を思い出し、少し恥ずかしそうに頬をかく。葉竹の方に行くくと、シユテルが少しだけ振り返り、すぐに視線を戻す。

一枚目。

『家族と仲直りできますように』

自然とこれを書いたということは、自分はやはりまだ家族の中に戻りたいと思つてい  
るらしい。自覚はないが。

二枚目。

『シユテルたちとずっと一緒にいられますように』

シユテルはその短冊を見て、固まっていた。シユウ自身は顔が真っ赤になっている。

「えつと……。あまり見ないでほしいかな……。？」

シユウが遠慮がちに言うのと、シユテルは振り返り、すみませんと頭を下げてきた。慌  
てて手を振るシユウ。

「別に怒ってるわけじゃないから……！」

「シユウ」

「あ、え、なに？」

真剣な声で名前を呼ばれ、姿勢を正してしまふ。シユテルはそんなシユウの手を取る  
と、ほんの少しだけ微笑んだ。

「貴方が望むのなら、私は……私たちは貴方の側にいますよ」

シユウが目を大きく見開く。シユテルはまたいつもの無表情に戻り、それだけです、  
と締めくくった。

「……ありがとう、シユテル」

「いえ」

手を繋ぎ、葉竹を眺める二人。シユウは、今の生活が続きますように、そう心の底か  
ら願っていた。

そんな二人を眺める三人。アリサとすずか、それになのはだ。

「なかなかいい雰囲気じゃない？ あとはシユウに度胸があれば！」

「度胸も何も、これだけ人が多いと無理だと思うよ？ アリサちゃん」

「にやはは……」

少しだけ羨ましそうに、だが温かく見守っていた。

三枚目。

『みんなの願い事が叶いますように』

その短冊は、瞬きの間もないほどの一瞬、淡く発光した。だが誰もそのことに気づかなかった。

## 第十九話 里帰り

「……………」

シュテルたちのマンションのリビングで、シュウはどんよりとした空気に包まれていた。時刻は朝八時。少し前に管理局からの呼び出しを受けてレヴィが向かったのだが、レヴィですら話しかけようとしないうちにシュウの周囲はとても重い。

シュテルとディアーチェはそんなシュウの様子をうかがいつつ、対応に窮している。なにせここまで気落ちしているシュウは初めて見る。声のかけ方からして分からない。しばらくシュテルとディアーチェは視線を交わしていたが、やがてシュテルが小さくうなずいた。シュウに向き直り、言う。

「シュウ。どうしたのですか？ 私たちでよければ聞きますが」

シュテルの言葉を聞いて、シュウは胡乱な瞳をシュテルに向けた。シュウがゆつくりと笑顔を作る。だが顔のあちこちが引きつっており、笑顔とは言えないものになっている。

「明日……………」

「はっ」

「父さんから呼び出しを受けた……」

「……はい？」

予想外の言葉にシユテルだけでなくディアーチエも眉をひそめた。シユウの両親はシユウをあからさまに避けて遠ざけているようだったのだが、そのシユウを呼び出してどうするつもりだろうか。

「目的が分からなくて行くのが嫌だ……」

いっそのこと無視しようかとも思ったが、学費や生活費などは出してもらっている以上、そんなことはできない。理由も目的も分からないが、行かないという選択肢は初めからない。

「なるほど、それで朝から元気がないのですね」

シユテルが納得したようにならずき、シユウは申し訳なさそうに頭を下げた。

「ごめんね、気を遣わせちゃって……」

しっかりと頭を下げるシユウに、シユテルがいえ、と首を振る。それでもシユウは頭を上げられない。やがてシユテルが、つまり実家に帰ると？ と会話を続けてきた。

「うん。一応そうなると思う。まあ話をしたら帰ってくるけどね」

なるほど、とシユテルが考え込む。どうしたのだろうかと首を傾げていると、やがて

シュテルが、分かりましたと一つうなずいた。

「では私もご一緒しましょう」

「……へ？」

「一人だから不安なのでしょう。それとも、私では役者不足でしょうか」

「いい、いやいやそんなことはもちろんないけど……！」

両親に一人で会うというのはかなり心細いものがあつたので、シュテルの申し出は正直嬉しいものだ。だが、シュテルの意図が分からない。自分の父親の態度は以前一度見て知っているはずだ。もう一度会いたいとは思わないだろうに。

「理由でしたら、この世界の他の土地も見てみたいというだけです。他意はありません」  
シュウの表情からシュウが何を気にしているのか察したのである。シュテルがそう言った。シュウは未だに納得していなかったが、来てくれるなら、とシュテルの申し出をありがたく受けることにした。さすがにシュテルに不快な思いはしてほしくないの  
で、実家に行く時は別の場所に待機しておいてもらえばいいだろう。

ではそういうことで、とシュテルはうなずくと、デИАーチエに向き直った。

「王。すみませんが、明日は外出します」

「うむ。気をつけて行ってこい」

特に反論もせず、デИАーチエは興味なさげにうなずいただけだった。



翌日。シユウとシユテルは朝の八時に合流して、九時の電車に乗った。シユウの実家まではここから少し遠く、新幹線で一時間ほど。時間にしては短いが、距離で考えるとかなりのものだ。電車賃も安くないので、呼び出しがなければわざわざ帰らなかつたらう。

両親の呼び出しは手紙によるものだった。その手紙には往復の金も同封されていた。一人分しかなかつたため、シユテルの電車賃は出せなかつた。涼しい顔で問題ないとは言っていたが。

新幹線では同じ列の席に座り、到着をのんびりと待つ。その間、シユテルは本ではなく、クリップで留められた紙束を見つめていた。文章が羅列してあるので何かの、おそらくは魔法関係の資料だろう。邪魔をしてはだめだろうと思い、シユウは到着まで眠ることにした。

新幹線から降りた後は各駅停車の電車に乗る。十駅ほどで降りた場所は、普通の町並みだった。高層ビルが建ち並ぶわけでも田園が広がるわけでもない。適度に田園があり、民家が並び、マンシヨンが点在し、といった都会とも田舎とも言えない町。海鳴とさほど変わらないとも言える。

「ここ、ですか？」

「うん。あまり寄り道したくないから、行こうか」

いい思い出のあるところではない。それに、シユウの顔を覚えている人も少なくないだろう。寄り道せずに向かうことにした。

人目を避けるように大きな道を避けて歩く。時折遠回りをしていることにシユテルも気づいているだろうが、幸い何も言わずにいてくれた。そのことに心の中で感謝しつつ、歩を進める。一時間ほど歩いたところで、民家が並ぶ住宅街が見えてきた。その中の一軒、一際大きい建物へとシユウは向かい、門の前まで来たところでシユテルへと振り返る。

「この家ですか？」

「うん」

敷地の広さや家の大きさなどは八神家と同じようなところだ。ただ、シユウの実家は洋風に近い造りの家で、三階建てになっている他、地下室もある。昔はよく地下室を秘密基地と言って遊んだものだ。

「それじゃあ、シユテル。終わったら連絡するよ。近くに本屋さんがあつたはずだから……」

「いえ、私も行きます」

「そこに……。え？」

シユテルの言葉にシユウが間拔けな声を出した。シユテルは変わらずの無表情で続

ける。

「一人だと心細いのでしよう。心配しないでください。私は一切口を挟みませんから」  
言われたシユウは、どうしようかと悩んでしまう。確かに一人で両親の顔を見るよりはシユテルがいてくれた方が心強いが、そこまで巻き込んでしまつていいものだろうか。どうしようかと考えていたが、その思考は中断せざるを得なくなつた。

「……何をしている」

実家から出てきた男、シユウの父親。シユウは驚いて振り返り、表情を強ばらせる。そんなシユウの手を、シユテルは黙つて握つてくれた。

「さつさと入れ。近所に迷惑だ」

父がそう言つて中へと消える。シユウは一つ深呼吸すると、ごめんねとシユテルに謝罪する。シユテルと一緒にの場所を見られた以上、選択肢はなくなつた。一緒に行くしかないだろう。

「よろしくね、シユテル」

シユウの弱々しい声に、シユテルはしつかりとうなずきを返した。

父に通された部屋は、六畳ほどの和室だつた。ちゃぶ台と座布団があるだけの部屋だ。何のための部屋かは詳しくは知らない。その部屋には先客がいて、母親が先に座つていた。母はシユウを一瞥すると、心底嫌そうに鼻を鳴らす。シユウは思わず苦笑しつ

つも、その向かい側に座った。シユテルはその隣だ。

「誰よ、その子」

母の投げやりな言葉。シユウは笑顔で答える。

「友達。心配してくれて、一緒に来てくれたんだ」

母は、あつそ、とそれほど興味もないのか、すぐに顔を背けた。

父が母の隣に座る。茶などは当然出ない。ちゃぶ台だけが間に座る不思議な空間。やがて父がおもむろに口を開いた。

「秀一。単刀直入に言う」

「なに？」

「引越してもらおう」

「……な……」

突然の言葉にシユウは言葉を失い、シユテルはわずかに目を細めた。父はそんなシユウの様子など知ったことではないという体で言葉が続ける。

「転校の手続きは終えている。次の学校はさらに遠くなるが、気にすることでもないだろう。引越しの準備は自分でしろ。明日には業者が荷物を取りに行く」

矢継ぎ早に言う父。シユウの頭は真っ白になっている。なぜ、今まで放置していたくせに、突然転校なのか。意味が分からない。父がさらに言葉を重ねるより前に、シユウ

はちやぶ台を叩いて父の言葉を止めた。

「……なんだ」

不機嫌そうな父の顔。シユウは少し怯むが、それで引き下がれるはずもない。

「転校は、嫌だ。友達がたくさんいる。今の家から離れたくない」

はつきりと拒否の意思を伝えると、しかし父は鼻で笑って一蹴した。

「お前に拒否権があるとでも思っているのか？ いいから支度をしておけ」

あまりの横暴のシユウは怒りで我を忘れそうになるが、しかしぐつと目を閉じて首を振った。父の言う通り、自分に拒否権はない。父は父親であり、金を支払っているのもこの両親だ。自分には何の権利もない。シユテルたちと別れなければならないのは残念だが、仕方のないことなのだろう。

シユウがため息とともにシユテルへと振り返る。そして、絶句した。

シユテルは静かにシユウの両親を睨み付けていた。不愉快だからといった理由の目ではない。明らかに敵を見る目だ。だが、シユテルはシユウが見ていることに気がつく。と、すぐにいつもの無表情に戻った。

その後はほとんど会話もなく部屋を出た。両親は当然見送りに来ない。意気消沈したまま玄関まで歩いていると、

「あ……」

「……………」

車椅子の少女が玄関で固まっていた。シユウを見て、言葉を失っている。

「お兄ちゃん……………」

少女の、妹の声。だがシユウは何も言わず、妹の横を通り過ぎて靴を履く。

「また、逃げるんだね」

妹の声。シユテルが振り返ろうとするが、シユウがそれを止める。

「……………行こう」

「分かりました」

妹には何も声をかけずに、シユウは実家を後にした。

今更。今更何を言えるというのか。自分を恨む妹に対して、何を。

駅までたどり着いたところで、シユウは大きなため息をついた。家に帰ってから忙し

くなる。心の準備もしなければならない。

——せめて、海鳴に着くまでに……………」

そう決心してシユテルへと振り返る。だがシユウの思惑に反して、シユテルは天を仰いで目を閉じていた。少し嫌な予感がしつつもシユテルの言葉を待つ。そしてシユテルの言葉は、予想通りのものだった。

「すみません、シユウ。仕事が入りました。先に帰っておいてください」

「え？ いや、でも……」

どうして、と思う。こんなタイミングで。今でなくていいだろうに。

「すみません。ではまた」

シユテルはそう言つて、きびすを返して歩いて行く。シユウにはその背中を、呼び止めることなどできなかつた。

S i d e : S t e r n

シユテルは来た道を戻り、やがてシユウの実家へとたどり着く。インターホンを押すと、シユウの両親が出てきた。シユテルを見て、わずかに驚いた様子だつた。

「忘れ物か？ ならさつさとするといい。ずっと無言で何をしに来たのやら……」

後半はぶつぶつと独り言のようだつた。シユテルは無表情で言う。

「はい。忘れていたことを」

「ならさつさと……」

しろ、という言葉は出させなかつた。シユテルは相手が反応できないように、素早く結界を展開し、そして、二人にデバイスを、ルシフェリオンを向けた。

「時空管理局嘱託魔導師、シユテルと申します。ご同行願えますか？」

時間をさかのぼり、新幹線の中。シユテルは眠っているシユウの寝顔を横目で見て、

資料を読み進める。それは、シユウの両親に関するものだった。

西崎ケイン 及び 西崎さくら に関する報告書。

西崎ケイン。元管理局所属の魔導師。現在は研究者として活動。主にロストロギアの関する研究を行っている。特に後述するロストロギアに対しては執着を見せている。さくらと結婚後に管理局を退職し、住居をさくらの故郷である第九十七管理外世界の地球へと移している。

.....

西崎さくら。元管理局所属の魔導師。ケインと同様、現在は研究者として活動。ただしケインほど表だって活動はしておらず、ケインのサポートをメインとしている。ケインと結婚後、故郷である第九十七管理外世界の地球へと戻り、研究を続けている。

.....

二人の共通事項。定時連絡では、十年ほど前に子供を授かるが、管理局の仕事に巻き込まれ、生むことはできなかった。そのことに絶望しての管理局退職と見られる。

共通して熱心に取り組んでいる研究対象のロストロギアは、願いを叶えるというものの。前述の経緯から何かをするつもりではと疑われていたが、そのロストロギアの規模を考慮し、その可能性は否定された。

そこまで読み終え、シユテルはシユウを見る。死んだはずの二人の子供。存在してい



ないはずの存在。そつとシユウの手を握る。人の温かさが、ある。そのことに我知らず安堵する。そして資料の最後の一枚を見る。二人が研究しているロストログアについて書かれていた。

二人が調べているロストログア。願いを叶えるとされているが、現在までこのロストログアによる大規模な被害などは出ていない。おそらく効果そのものが弱く設定されていると思われる。そのため、叶えられる願いは小規模なものになっているようだ。ただしそれ故に暴走も確認されておらず、ロストログアの中では危険度は低いものとされている。

その願いを叶えるロストログアの名称は以下の通り。

——ギフテッド。

## 第二十話 眞実

暗い闇の中、彼は目的もなく漂っていた。行きたいところも何も無い。ただ、流れに任せてそれは進んでいく。時空の流れに身を任せて。

やがて彼はたどり着いた。どこかの世界。名前など知るはずもない。興味もない。興味があるのは、願っただけだ。最初で最後のマスターの命令を唯々遂行するのみ。やがて彼は、二人の人間を見つける。つい先ほどまで泣いていたのか、二人とも目が赤い。二人の心の内を探り、彼らの願いを聞こうとする。

その瞬間、流れ込んできたのは深い悲しみだった。体が引き裂かれそうな悲しみ。そして叶うはずもない願い。あまりに悲壮で切実な願い。その願いを聞いて、彼は悩む。彼には無から有を生み出すことはできない。だが、どうしても二人の願いを叶えてやりたい。

だから彼は、決断した。

「ん……」

シユウはゆっくりと目を開く。最初に視界に入ったのは、鈍色の天井だ。当然自分の

部屋ではなく、シユテルたちのマンションでもない。

——夢、かな……。何の夢だったっけ……。

思い出そうとするが、ほとんど思い出せない。暗い場所にいた気がするが、それだけだ。

——いや、今は夢のことよりも……。

周囲を確認する。ベッドだけがある部屋で、シユウはその部屋に寝かされていた。ドアは一つだけで、そのドアの形状からここがアースラの中だろうことは分かる。次に疑問に思うのは、どうして自分がここにいるのか、ということだ。

目を閉じ、記憶を掘り起こす。シユテルと別れた後、シユウは帰りの切符を買って、ホームで電車を待つていた。そこで声をかけられて、振り返ると、

「ディアーチェと……ユーリ……」

二人がいたのは覚えている。ディアーチェは不機嫌そうな表情で、ユーリは申し訳なさそうな表情だった。それを認識した瞬間に意識が途切れたはずだ。つまりは、彼女たちが自分に対して何かをしたのだろう。

なぜ、と思うが考えても答えが出ないことは分かっている。シユウはすぐに思考を中断すると、ドアへと向かう。だが、どうやってもドアは開かなかった。

「……なんで？」

首を傾げ、ベッドへと戻る。先ほどは気がつかなかったが、ベッドの側には小さなテーブルがあり、水とお菓子、果物が用意されていた。しばらくここにいろ、というような意図が伝わってくる。シユウは苦笑しつつもベッドに腰掛けて、誰かが来るのを待つことにした。

水を飲んだところで、唐突に中空にモニターが出現し、驚いているシユウの目の前で別室の映像が流れ始めた。

### Side: Stern

テーブルといすがあるだけの部屋にシユテルはいた。テーブルの反対側には二人、シユウの父親ケインと、母親のさくらがいる。ここまで二人は特に抵抗することもなく、大人しくついてきていた。

二人の向かい側に座るのはリンデイとクロノだ。シユテルはその側で立って、シユウの両親の様子を観察している。

やがて、ケインが口を開いた。

「どういふつもりかな? 管理局」

どこか不機嫌そうな声だが、緊張の色もある。リンデイはそのケインに対し、笑顔で答える。

「少しお話を聞かせていただきたくお呼びいたしました。秀一君のことについてです」  
「あれが何かしましたかな？ あれとはほとんど絶縁状態ですが、まあ一応親だ。責任ぐらいはとりましょう」

おいくらで？ とケインが薄く笑いながら聞いてくる。あまりに不快な言い方だが、さすがと言うべきか、リンデイとクロノは表情を変えなかった。

「いえ、特に何もしていません。ただ秀一君のことについて聞きたいだけです」

「ふむ。生活のことですか？ これは親子の問題。あなたたちが気にすることではないはずですが」

その通りだとは思う。ただし、普通の親子なら、という前提条件があるが。

リンデイがシユテルへと目配せする。シユテルは一つうなずいて、少し前まで自分が読んでいた資料を二人に差し出した。怪訝そうな表情でそれを受け取った二人だが、それを読んで表情を険しくする。やがて、シユテルを睨み付けてきた。

「ずいぶんと調べたようだね。こんな個人的なことまで調べられるとはさすがに思わなかったよ」

口調が、変わった。いや違う、とシユテルは内心で否定する。口調が戻ったと捉えるべきだろう。おそらくはこれが本来の彼であり、シユウの前でのあの態度は、仮面を被ったものだ。

「改めて、お話を聞かせていただきます」

シユテルがそう言うと、ケインはため息をついてうなずいた。

「貴方たちにはロストログアの無断使用の疑いがあります。理由などあれば聞きますので、正直に話してください」

そう言ったのはリンディだ。ケインとさくらがうなずく。

「管理局が調べた記録では、貴方方のお子さんは生まれることなく亡くなっているそうですね。秀一君は養子ですか？」

リンディが聞いて、ケインとさくらが首を振った。二人で目配せして、今度はさくらが口を開く。

「養子じゃないわ。そんなことは調べているはずでしょう？」

「そこまで言ってから、さくららは不機嫌そうに眉をひそめた。三人を順番に睨み付ける。」

「ある程度の予想をしているのなら、先にそちらを話してほしいわね」  
その言葉に、分かりましたとリンディがうなずいた。

Side: Hero

「……………」

シユウは黙ってモニターに映る映像を、食い入るように見つめていた。モニターに映る映像は、別室での光景だろう。なぜここに両親がいるのか、とは思うが、会話の流れから察するにどうやら魔法の関係者だったらしい。全く気がつかなかった。

「シユウ。入るぞ」

部屋のドアが開かれ、ディアーチェが入ってくる。シユウは力なく笑うと、いらつしやいと出迎えた。その表情を見て、ディアーチェが一瞬だけ言葉に詰まるが、すぐに鼻を鳴らしてシユウの側まで来た。

「先ほどはすまなかつた。納得させてから連れてくるべきなのであろうが……」  
「いいよ。気にしないで」

シユウの言葉にディアーチェは少し黙ると、分かったと小さくうなずいた。そしてシユウにクリップで留められた紙束を差し出してくる。受け取り、内容を見る。自分の両親について書かれたものだ。少しだけ驚き、モニターに再び視線を向ける。

「シユウにはつらい内容になるだろう。聞かない、という選択肢もある。我らは強制はせぬ」

「……大丈夫。聞くよ」

「……そうか」

ディアーチェはそれきり黙り込んだ。だが退室するわけでもなく、側にいてくれる。

何も言ってくれないが、側に誰かがいるというだけで心強い。シユウはディアーチェに感謝しつつ、モニターの音を聞きながら手元の資料に目を落とす。

Side : Stern

「貴方たちが願いを叶えるロストログア、ギフトッドを調べ始めたのはお子さんが亡くなってからですね？」

リンデイの言葉に、ケインときくらがうなずいた。二人とも神妙な面持ちだが、別段取り乱す様子はない。

「どういった手段かは分かりませんが、貴方はギフトッドを手に入れた。そして、その研究を始めた。管理局などの然るべき機関に提出しなかったのは、それを利用するため」

またもうなずく二人。だが今度は少し時間がかかった。答えることをしたくないかのように。

「貴方方がギフトッドを利用する目的は……。お子さんの蘇生、ですね？ その結果が秀一君であり、つまりは秀一君はギフトッドによって蘇生された子。こんな推測をとりあえずは立てましたが、間違いはありますか？」

「いや、ない。見事に正解ですよ」



ケインがやれやれと苦笑しつつ首を振る。さくらも諦めたようにため息をついて笑った。

「まああれの存在が知られた時点ですぐにばれるとは思っていましたがね。それにしても、手が早い。それで、私たちはどうすればいいですか？」

ケインの問いかけに、リンディとクロノは少し呆気にとられた。今ある情報で簡単に推察しただけのものが正解だとは思わなかった。だが二人はそれを認めている上に、自分にある罪とはしっかりと向き合うつもりのようなのだ。今はこれ以上を求めるべきではないかもしれない。

事実確認や裏を取るのとは後でさらに詳しくするとして、今はとりあえず二人にもっと詳しく話を聞くことが先決だろう。リンディはそう判断して、これからのことを提案しようとして、

「……待ってください」

そこでシユテルは口を挟んだ。リンディがこちらへと振り向いてくる。シユテルはただ黙ってケインとさくらの様子を観察していた。今は二人とも、こちらを不思議そうに見つめている。

考える。ケインとさくららはギフトッドを使用後もギフトッドに対する研究を続けていた。二人の経緯から疑われることは容易に想像できるだろうに、それでも続けること

を選んだ。まだ手元にあるということだろうが、子供の蘇生以外に何かに使ったということか。

手元にある、という条件なら、なぜ管理局に伝わるような公の場で研究を行ったのかも疑問だ。他のロストロギアの資料などは自由に手に入るのかもしれないが、ギフテッドそのものは彼らが保有している。そのものを研究した方が早いのではないだろうか。わざわざこの世界を離れなくても、ここで静かに研究を続けた方が確実では。

つまりは、ギフテッドは彼らの手元にはない。もしくは。

——手元にあっても、容易に調べることができないか。

先ほどまでの二人の様子を思い出す。罪を負うことを良しとしているような素振りだった気がする。自分たちに罪があると決まれば、それを急いで決めてしまったそう。そう思うと、さくらのあのため息は、諦めではなく安堵では。

自分たちのことはどうでもいい、と。守るべきものが他にあるのか。

少し前のことを思い出す。シユウの家にケインがやってきたことを。そのタイミングを。今まで放置されていたシユウの元へとやってきた理由。シユウの家の監視カメラ。そこから得られる情報で変わったことと言えば、

——私たちの存在。

シユテルはまっすぐにケインとさくらを見る。二人はシユテルの考えを察したのか、

わずかに顔を青ざめさせた。それでもシユテルは言う。

「これは私の勝手な推測です。貴方たちはギフテッドを使っていますね」

リンデイがわずかに眉を持ち上げる。続けて、と手で合図を送ってくる。

「ギフテッドで願いを叶えたのではなく、ギフテッドが願いを叶えた。貴方たちは、いつの間にか願いを叶えられていただけです。違いますか？」

押し黙る二人。シユテルは続ける。

「ギフテッドの研究をこの世界でしないのは、容易に利用することができないからです。それでも研究を続けるということは、利用できないだけで身近にあるのですね」

ケインがシユテルを睨み付ける。さくらが顔を伏せる。シユテルはその様子に小さくため息をついた。

「西崎秀一という存在が、ギフテッドそのもの。違いますか」

シユテルの言葉に、ケインとさくらは押し黙る。しばらくの間は無言の時間が流れたが、やがてケインが力なくうなずいた。それを見てさくらが驚くが、ケインが悲しげに微笑むとさくらも目を伏せてうなずいた。

「シユテルさん、だったね。君の推測通りだ。間違っていないよ」

そうですか、と答えるだけにとどめ、シユテルはため息をついた。今の推測は、今ある情報から推測できるものの中で、ある意味で、自分にとって一番当たってほしくない

ものだった。

「詳しいお話を聞かせていただけますか？」

黙り込んだシュテルに代わり、リンデイが言う。ケインはうなずいて、ゆつくりと語り出した。

### Side: Past

ある冬の日、ケインは公園のベンチで隣に座る妻を優しく慰めていた。妻は、さくらはもう数時間も前から泣き続けている。何度も何度も、自分と死んでしまった子に謝っている。ケインとさくらに捕まえられた犯罪者が、脱獄して逆恨みで二人を襲った。悪いのは相手であつてさくらではないのだが、それでもずっと謝り続けている。

特に、生まれてくるはずだった子に対して。

ケインはさくらを立たせると、自宅へと向かつて歩き出す。雪が降つて積もつている。ここには風邪をひいてしまうだろう。さくらはなかなか立ち上がるうとしなかつたが、ケインの懇願を聞き入れて重い腰を上げてくれた。

それを見つけたのは、その帰り道でだ。

道中に赤ん坊が捨てられていた。狭い道の隅に、裸の赤ん坊が雪の中にいた。ケインは驚きながらも慌てて赤ん坊を抱き寄せる。一体親はどうしたのか。周囲を見回して

も誰もいない。

どうしたの？ とさくらがケインの抱く赤ん坊を見る。驚くさくらに、ケインは言った。

とりあえず警察に届けよう、と。

その後、この国の組織が手を尽くして赤ん坊の親を探したが、手がかりは一切なく、結局見つからなかった。その結果、養護施設に預けられることになったのだが、

私たちが引き取ります。

ケインとさくらは、その赤ん坊を引き取ることにした。

自分が拾ったから放っておけない、というのがケインの理由であり、さくらは、死なせてしまった自分の子の分も生きてほしい、という思いがあった、とのことだ。

自分の子に付けるはずだった名を、秀一という名を与え、我が子のように大切に育てた。その数年後に実子も生まれる。そして、異変が起き始めたのはそれからすぐのことだった。

秀一の周囲でおかしなことが起こり始めた。悪い話ばかりが目立つが、実はもう一つある。秀一が知るはずもない誰かの落とし物をよく見つけてくるという些細なものだ。この二つを手がかりに、今まで二人の中で禁忌としてきた秀一に対する研究を始めた。

「その結果、秀一の存在に行き着いた。ギフトッドそのものだということに」

「よくその考えに至りましたね……。何か理由が？」

「ああ……。今はもうないが、その頃はまだ、秀一は微弱ながら魔力を持っていたんだ。秀一が探し物をする時にその魔力が少し大きくなる。そのデータを取って当てはまるデータがないか探していたところに、たまたま研究施設に居合わせた研究者が言った」

——ケインさん。お久しぶりです。何をお調べですか？ ……おや、この魔力の波長……。どこかで見覚えがありますね。

——ああ、そうだ。思い出しました。確かロストログアの中にそれと同じものがあつたはずですよ。

その言葉を頼りに管理局のデータベースからロストログアを一つずつ調べていき、完全に一致したのが、一致してしまつたのが、ギフトッドだった。

次に調べるのは、なぜ秀一の周囲で異変が起こるのか。こればかりは最後まで分かることはなく、時間だけが流れていった。やがて、秀一にとつて忘れられない運命の日が訪れる。人を死なせ、妹を巻き込んでしまつた日。この事故のため、二人は最も有力視していた仮説を検証することにした。

自分たちの魔力がギフトッドに何かしらの影響を与え、異変が起こっているのでは。

この仮説を信じて、ケインとさくらはその対策に乗り出した。自分たちの魔力に反応

するなら、自分たちから遠ざけておけばいい。魔力のない場所まで遠ざけてしまえばいい。その時から二人は仮面を被った。秀一の呪いを嫌う最低最悪な親の仮面。その仮面で感情を隠し、秀一を家から追い出した。避難させたのだった。

Side : Stern

「そんな演技をする必要があつたのですか？」

ケインの話の後、シユテルが聞く。ケインは分からない、と首を振つたが、

「でも、ただ遠ざけるだけじゃだめだ。優しくしていれば、秀一は帰る家があると思つてしまう。帰つてきてしまう。その時に何か起こつてからでは遅いんだ」

「だから、私たちはシユウを追い詰めた。精神的に追い詰めて、私たちが嫌いになるように」

さくらが言葉を引き継ぐ。シユテルは、そうですか、とため息をついた。

「貴方たちが罪を被ろうとしたのは、シユウを守るためですね」

さくらがうなずく。

「管理局はロストロギアを収集して安全に封印する。それは人の形を取つていても例外ではないでしょう。特に、実際に異変が起きてしまっているのなら」

リンディは目を伏せて重くうなずいた。異変を起こすロストロギアならば封印しな

ければならない。例えそれが人の形を取っていても。

「だから俺たちが罪を被って秀一から注意が逸れるなら、それでいいと思っただ。……もう手遅れだけどね」

自嘲気味に笑うケイン。シユテルは、そのケインを冷たく見据える。

「貴方たちはそれで満足でしょうが……。シユウの気持ちを考えてことがありますか？」

「……それは……」

「シユウは毎年、最後の事故の日を思い出すそうです。そのたびに体調が悪くなるそうです。たった一人でその苦しみに耐えているシユウの気持ちを、考えていますか？」

考えているとは言わせません、とシユテルは先に相手の口を塞いだ。静かに冷たく相手を見据え、続ける。

「一つ、教えておきますが。魔力から避難させるために海鳴を選んだようですが……。この町には、先天的に魔力を持って生まれた子がいます。貴方たちを超える魔力資質を持った子が。当然訓練など受けていないのでかなりの量の魔力が漏れていたと思いますよ」

「……っ！ それは、つまり……」

「貴方たちはきつと、ここに送ってから異変が起きないから仮説は正しかった。そう



思ったのでしよう。それはただの偶然です。仮説が正しかったのなら、被害が大きくなることはあってもなくなることはありません。……まあ……。貴方たちの気持ちも嘘ではないでしょうし、私が貴方たちなら同じことをしたと思います。が」

そこまで言って、シュテルはため息をついた。リンデイへと向き直る。

「リンデイ艦長。今後はどうなりますか？」

突然話を振られたリンデイが少し目を丸くするが、少し考えてすぐに答えた。

「シュウ君と異変との因果関係が分からない以上、まだ様子見になるでしょうね。とりあえず現状維持ができるように手を尽くすわ」

ただ、とリンデイの表情が暗くなる。シュテルから視線をそらし、ケインとさくらへと向ける。

「もしも因果関係が証明されて、なおかつそれを回避する手段がなければ……。可能な限り手は尽くしますが……」

「分かっています。私たちもできる限り協力します」

シュウと異変の因果関係。すぐに分かるものではないと思うが、残されている時間も少ないかもしれない。シュテルは一礼すると、その部屋を退室した。

——楽観視はいけませんね。因果関係の証明はあの人たちに任せるとして、私は回避方法を探りましょう。

今の生活が続けるために。シユテルは一人静かにうなずいた。

Side: Hero

シユウのいる部屋へと入ってきたシユテルは、真つ先に頭を下げて謝罪をした。勝手なことをした、と。

「いいよ。父さんと母さんの本音を聞けて、嬉しいから」

「すみません。……ああ、シユウが聞いていたことは話していません。今後どうするかは、シユウ自身が決めてください」

「うん。まあとりあえずは現状維持でいいかな。連れ戻されたくはないし」

あはは、とシユウは笑う。その笑顔は少し寂しそうで、それを見ていたシユテルは少し目を細めた。

「でも、水くさいよねえ、血は繋がってないみたいだけど、親子なのに。話してくれたらいいのに」

「きつと貴方のことを想った上、ですよ」

シユウが首を傾げる。シユテルは少し考える素振りを見せ、次いでどこか申し訳なさそうに目を伏せた。

「先ほどは感情的になってしまいました……。あの二人はシユウのことを本当に想っ

ていたのだと想います。事実を話せば、あることが確定します。貴方はきつと、自分を責めるでしょう」

「……どういふこと？」

「異変が貴方が原因で起こったのなら、あの事故も貴方が原因と捉えることができます。あの二人はそう考えさせないためにもこの手段を取っていたと思いますよ」

なるほどね、とシユウは苦笑した。ゆつくりとため息をつく。モニターでリンディたちと話す両親を見る。今まで見ていた無愛想な表情はなく、真剣に自分のために話し合ってくれている両親。少しだけ嬉しくなる。

「まあ、なるようになるか」

「そうですね。……できる限り手は尽くしますよ」

「ありがとう。僕にできることがあったら、言つてね」

シユテルが真剣な表情でうなづく。シユテルを頼もしく思いながら、シユウはそれでも心に決める。

——これからは、もっと一日一日を大切にしよう。

「よし！ シユテル、帰ろうか！」

「そうですね。帰つて夕食にしましょう」

立ち上がったシユウに差し出されるシユテルの手、シユウはその手をしっかりと握る

と、シュテルと共にその部屋を後にした。

後に残されたのは、音が流れるモニターだけ。やがてそのモニターも消え、電気すらも消えると、後には静かな闇が横たわった。

## 第二十一話 デパート

——またか。

シユウはデパートの屋上で、内心でため息をついた。目の前で行われているのはヒーローショー。そして当然のように、隣にはレヴィがいて大はしゃぎだ。小さな子供たち混ざってヒーローを応援している。

今回は偶然レヴィと出会ったわけではなく、昨日のうちに誘われていたことだ。レヴィ曰く、行きたいところがあるから一緒に行こう、と。最初はどこに思っていたが、来てみれば前と同じデパートのヒーローショーだったというだけだ。

——楽しそうだから、まあいいか。

ヒーローショーではなくレヴィを見ながら、シユウは苦笑しつつもうなずいた。

ショーの後は今回も限定販売のようなことが行われるらしい。レヴィもそれに向かうのかと思つたが、予想外にもそちらへは何の興味も示さずに、シユウの手を取つて下りの階段へ向かうレヴィ。思わず目を丸くして、あれはいいの？ と聞いてみると、

「うん。前と同じだから」

そう言うのとレヴィは歩く速度を速くする。何かを振り切るように。なるほど、とシユ

ウは納得してうなずいた。

——本当は行きたいのか。

そう思ったが口には出さない。せつかくレヴィが我慢をしているのだ。水を差す必要もないだろう。

「それで、次はどこに行くの？」

シユウが聞くと、レヴィは振り返ると元気よく答えた。ご飯、と。

レヴィが案内したのは、デパートのレストランフロアまでだった。そこまで来て、飲食店の多さにレヴィは驚いていた。シユウへと振り返ると、頬の引きつった笑みを浮かべてくる。

「もしかして……決めてない？」

「うん。行けば何とかなると思ったから」

「そっか」

レヴィの言葉にシユウは笑う。この子らしいなど。まずは一通り見てみようと考え、フロアをゆつくりと歩いて行く。シユウの後ろからレヴィがついてくる。珍しそうに周囲をきよろきよろと見回している。

やがてフロアの反対側までたどり着いた。そのことにレヴィが少し驚き、聞いてくる。

「シユウ、ご飯はどうするの?」

「どうしようかな。レヴィは何か食べたいものはある?」

「カレーライス!」

聞くまでもなかったとシユウは笑う。シユウは手を差し出すと、じゃあ行こうかとレヴィの手を取った。

レヴィを連れて入ったのは、カレー専門店だ。このカレーはとても美味しいことで評判で、学校でもクラスメイトたちが時折話をしているのを聞くことがある。今は昼を少し過ぎた時間なので、店内にはちらほらと空席がある。これが昼時や夕食時などは行列ができるらしい。

シユウはカウンター席に向かい、レヴィもその隣に座った。この店に入つてすぐに匂いで気づいたのだらう、レヴィはそわそわと落ち着きがない。そんな様子にシユウは優しく微笑むと、レヴィにメニューを差し出した。

「はい、レヴィ。選んでね」

「ありがと! えつと……。うわ、いっぱいある!」

メニューを開いた瞬間、レヴィが顔を輝かせた。写真を一つずつ順番に見て、これがおいしそう、あれもおいしそうととても楽しそうだ。ただこの調子だと決めるまでに時間がかかりそうではある。シユウは店員が持ってきた水に口をつけつつ、レヴィの注文

が決まるのを待った。

レヴィの注文が決まったのは、それから十分もしてからだった。悩んだ末に選んだのはナンカレーだ。ご飯とは別にナンと呼ばれる食べ物もついているメニュー。

「この間シユテるんに作ってもらったんだ。これ、すごくおいしいんだよ！」

「へえ。じゃあ僕も同じものにしようかな」

「それがいいよ！」

レヴィの元気な声にうなずいて、シユウは店員を呼ぶ。人が少ないためかすぐにやって来た。レヴィがこれ、とメニューを指さすと、かしこまりましたと丁寧に頭を下げてくれる。

「辛さはどうしましょうか？」

「一つは普通で。もう一つは可能な限り甘口にしてあげてください」

「かしこまりました」

最後にまた礼をして立ち去る店員。それを見送ってから、レヴィは速くもスプーンを手にとった。期待に満ちた眼差しで、カレーが来るのを待っている。ほほえましい光景に、シユウの頬も自然と緩んだ。

やがてカレーが運ばれてくる。カレーライスが一皿に、別のさらには平べったいナンが置かれている。それが二セット。



カレーライスを置いて、店員はすぐに一礼して戻っていく。さて、とスプーンを手にとり取ったところで、

「いただきます！」

レヴィの声。早速一口目を食べて、レヴィがおお、と少し感動したようだった。

「すごいよシユウ！ すっごいおいしいカレーだ！」

「気に入ったのなら良かったよ」

「うん！ でもま、王様のカレーの方がおいしいけど」

最後の方は少しだけ小声になっていた。そうだね、とシユウもうなずく。だがそれもそのはずだろう。ディアーチエは一人一人の好みを把握していることが多い。カレーなどはレヴィの好物のため、どんな辛さでどんな具材が好きかも熟知しているだろう。レヴィのための特製カレーなのだ。専門店とはいえこんなところに劣るとは思えない。

でもこつちもなかなか、と言いながら食べ続けるレヴィはとても嬉しそうだった。そのことにひとまずは胸をなで下ろす。こんなに喜んでいられるならレトルトのものを買ってみるのもいいかもしれない。そう考え、シユウは店員を呼んだ。

昼食後、次に入ったのはデパートの中にある遊戯施設だ。クレインゲームなどといった子供が好きそうなものが並べられている。それらを見て、レヴィは目を輝かせてい

た。

「シユウ！ あれしよう！ あれ！」

レヴィが指し示したのは、クレーンゲームだ。中には動物のぬいぐるみが並んでいる。

「どれが欲しいの？」

「かっこいいやつ！」

「いやだからどれ……」

苦笑しつつ、シユウは財布から百円硬貨を取り出す。先ほどのカレーですでに結構な出費だったが、もう少しぐらいならいいだろう。この子たちには夕食をご馳走してもらっているのだから、これぐらいは払おうと思う。

硬貨を入れ、クレーンを動かす。クレーンはゆっくりと動き始める。狙うのは、レヴィが指し示したライオンのぬいぐるみ。

「おお……う？」

レヴィが少し目を丸くする。クレーンはライオンの真上で停止する。

「おお……」

クレーンがライオンを持ち上げる。ゆっくりと元の場所へ戻っていく。そして、

「おおおおおー！」

ライオンが落ちて、取り出し口から軽い物が落ちる音が聞こえてくる。シユウはそこからライオンのぬいぐるみを差し出すと、はい、と手渡した。

「すごい！ こんな特技があつたなんて！」

「特技……なのかな？」

クレーンゲームは昔から得意ではある。だがしかし、昔から自分が欲しいものは一切取れず、友人が欲しがっているものはよく取れた思い出がある。

その後も、レヴィの言われるままに三個ほどぬいぐるみをいただいた。犬と猫、虎のぬいぐるみだ。レヴィは嬉しそうにそれを抱きかかえている。大切な宝物を持つかのように。ふとレヴィは何かを思いついたのか、唐突に走り始めた。

「レヴィ？」

「ちよつと待ってて！」

慌てて呼ぶと、レヴィのそんな返事。言われた通りにその場で待っていると、レヴィはすぐに戻ってきた。その手にはビニール袋が二つ握られている。片方からはライオンが顔をのぞかせ、もう片方は猫だ。猫の方はそれ一つしか入っていないのか小さな袋に入っている。

「はい！」

レヴィに猫のぬいぐるみが入った袋を手渡された。シユウが怪訝そうに眉をひそめ

ていると、レヴィが答えてくれる。

「シユテル人にはシユウから上げた方がいいんだよ。王様がそう言つてた！」

シユウが、どうして？ と首を傾げるが、どうしてだろう？ とレヴィも首を傾げてしまう。二人は少し考えて、すぐにまあいいかと思考を打ち切つた。レヴィがシユウの手を取り、歩き始める。

「今度はあれ！」

「はいはい……」

今度はお菓子が景品のゲームへと連れて行かれた。

マンシヨンへと帰つてきたのは午後六時。休日の半分をレヴィに献上したことになる。これも悪くない、とは思っているが。

「たつだいまー！」

レヴィが元気よく言つて、リビングの方に駆けていく。王様ユーリこれあげる、という声が聞こえてくる。こっちはいいのかな、とシユウは持たされていた袋の一つを見た。現在シユウが持たされている袋は二つで、一つは猫のぬいぐるみ、もう一つはお菓子が大量に入った袋だ。帰つてみんなで食べるとのこと、デパートや帰り道では一つも食べていなかった。何度も誘惑に駆られてはいたようだが。

シユウは袋を持ったままキッチンへ。そこではシユテルが夕食の準備をしていた。

「ああ、おかえりなさい、シユウ。もう少し時間がかかります」

「うん。何か手伝えることはある？」

「いえ、後は待つだけなので」

シユテルはそう言うのと、鍋にふたをして手を洗う。シユテルが手を洗い終わるのを待つてから、シユウは袋の一つを差し出した。シユテルが不思議そうにしながらもそれを受け取る。

「ぬいぐるみ、ですか？」

「うん。デパートのゲームセンターで取ってきたんだ。シユテルには僕から渡せつてレヴィがね」

「そうですか」

ぬいぐるみを袋から出して眺めるシユテル。なぜだか緊張してきたが、その理由がシユウには分からない。じつとシユテルの言葉を待つ。やがて、シユテルがぬいぐるみを抱きかかえて言った。

「ありがとうございます、シユウ。大切にします」

「あ、えつと……。うん」

シユテルはいつもの無表情だったのだが、なぜだか今日はそれをしっかりと見ることでできずに、シユウは逃げるようにリビングへと向かった。

夕食後。シユウはお茶を飲みながらリビングの様子をのんびりと眺める。ぬいぐるみを気に入ったのか、テーブルに並べてにこにこ笑っているレヴィとユーリ。こうして見ているとやっぱり女の子なんだなと思う。時折ぬいぐるみを撫でては、やわらかいだのふかふかだのと楽しそうにはしゃいでいる。

デイアーチエは本に視線を落としていたが、時折そんな二人を見ては少し嬉しそうに笑っている。シユウに見られていることに気がつく、慌てたように表情を隠していたが。

シユテルの方も本に視線を落としていた。その膝の上には猫のぬいぐるみ。レヴィやユーリと違いぬいぐるみに対する反応がほとんどないが、ずっと持っているということはそれなりに気に入ってくれているのだろう。

四人の様子に満足げにうなずく。一日歩き回って疲れたが、その甲斐はあったというものだろう。

「それじゃあ帰るよ」

立ち上がりつつ言うと、

「はい。お気を付けて」

「気をつけて帰るのぞぞ」

「また来てくださいね！」

シユテル、ディアーチエ、ユーリがそう言ってくれる。レヴィは、「今日はボクが送つていく日だ！」

思い出したようにそう言った。

Side : Levi

レヴィはシユウと並んで歩く。今日は一日しっかりと遊べたので気分がいい。そのお礼もこめて、レヴィがシユウへと言う。

「シユウ、今日はありがとう！ 楽しかったよ」

「いや、こちらこそ。ただちよつと歩き疲れたけどね」

苦笑混じりに答えるシユウ。そつかとレヴィはうなずく。

「あとぬいぐるみも！ あんなに嬉しそうなシユテルんは久しぶりだよ」

「ああ、喜んでもらえてたのか。なら良かったよ」

嬉しそうに笑うシユウ。その笑顔を見ただけでも、今日は誘つて良かったと思える。ただ、シユウにとっては迷惑だったのではと少し思ってしまう。

「ねえ、シユウ。また一緒に来てくれる？」

不安に思いながらそう聞いてみると、シユウは少し目を丸くした後、笑顔でうなずいてくれた。

「もちろん。いつでも誘ってね」

そう言って頭を撫でてくれる。レヴィは幸せな気持ちになりながら、やっぱりシユウはいやつだ、と嬉しそうに笑っていた。



## 第二十二話 海

夏休み。学校から解放された子供たちが遊び尽くす夢の期間。もちろんシユウも例外ではなく、夏休み二日目から自宅でだらけきっていた。布団に横になり、小説を黙々と読み耽っている。今は昼前で、起きてからずっとこの調子だ。

「……何をしているのですか、シユウ」

声をかけられ顔を上げると、部屋の入り口にシユテルが立っていた。呆れたようにこちらを見ている。

「いらつしやい、シユテル」

「お邪魔します。……鍵が開いていましたよ」

「うん。来るかなと思って」

「……そうですか」

シユテルはため息をつきながら玄関の側のキッチンへ行く。少しして戻ってきた時には、冷たいお茶が注がれたコップを二つ持っていた。それをちやぶ台に置く。

「せめて起きてください」

「ん。了解」

立ち上がって、ぐっと伸びをする。シユテルの向かい側に座り、お茶を飲む。それなりに汗をかいていたのでただのお茶がとても美味しい。

「ナノハから夏休みだと聞きましたが、宿題があるのでしよう。やらなくていいのですか？」

「うん。終わったから」

「……は？」

シユウが部屋の隅を指さす。そこには昨日のうちに片付けた問題集の山があった。あとは日記など、前もってできないものだけだ。

「それなりの量だと聞いていましたか……」

「うん。一日は二十四時間あるんだよ？」

「そう、ですね……。はい。いいことだとは思いますが」

「こちらも気を遣わなくてよくなりますし、とシユテルがつぶやく。シユウが首を傾げると、

「レヴィがプールに行ってみたいと言いました」

唐突にそんな話が始まった。すぐにそこからの誘いを察して、プールか、とシユウは笑う。

「いいね。いつ?」

「明日です。海に行こうかなと」

「……海か。ちよつとだけ予想の斜め上だよ」

せつかくなので、とシユテルがうなずく。泳ぐ、または遊ぶという目的では大差ないのだろうし、どちらでもいいのかもしれない。むしろ海の方ができることは多いだろう。それ故にどうせ行くなら海に、ということだろうか。

「僕も行つていい?」

一応聞いてみる。シユテルは、何を今更、といった様子で眉をひそめた。その様子にシユウは少し嬉しそうに微笑む。

「明日の朝七時に迎えに来ます。必要なものは今日中に用意しておいてください」

「うん。どこまで行くの? 電車賃とかはいくらぐらいいるかな?」

「お気になさらずに。こちらで用意します。これから王たちと買い物に行きますが、シユウはどうしますか?」

一瞬、行きたい、と言いかけたが、口に出しかけたところでその言葉を呑み込んだ。おそらくはこれから水着などを買いに行くのだろう。さすがに女の子たちの買い出しの中に混じる勇氣はない。シユウは首を振って、今日はいいやと伝えた。

「分かりました。これは夕食にどうぞ。夜は少し用事がありますので」

シユテルが差し出してくる弁当箱をありがたく受け取る。まだほんのり温かい。どうやら作つてすぐここに来てくれたらしい。いい匂いもしてきて、食欲がそそる。

「先に言つておきますが、夜まで我慢してください。あとで後悔しますよ」

「わ、分かつてるよ？ もちろん」

ちよつと食べようかなと思つていた矢先だったので、思わず頬が引きつつてしまう。その表情からシユウの考えを察して、シユテルは小さくため息をついた。仕方のない方です、と。

「コンビニのパンでよければどうぞ」

「お、ありがとー！」

次に差し出されたのはコンビニの袋で、中にはメロンパンとジャムパンが入っていた。嬉しそうなシユウの笑顔を見て、シユテルは満足したようにうなずきを一つ、そして立ち上がる。

「それではシユウ、また明日」

「うん。いつてらっしやい」

シユテルを玄関まで見送り、そして戻つてすぐにメロンパンの封を開けた。

翌日。天気は快晴。海水浴日和だ。蝉の鳴き声がうるさいが、これがなければ夏とも思えない。そしてシユウは、今日も布団で横になっていた。

「……暑い……」

早く海に入りたいと思う。ちやぶ台の上には昨日のうちに用意した荷物があり、準備は万端だ。念のため、全財産を入れた財布も用意してある。あとはシユテルたちを待つだけだ。欠伸をかみ殺していると、ドアの開く音がした。

「シユウ！ おつはよー！」

真つ先に聞こえてくるのはレヴィの明るい声。次いで足音がして、本人が入ってくる。未だに布団で横になっているシユウを見て、レヴィが少し目を丸くした。

「だめだぞシユウ！ ちゃんと起きないと！」

「準備はできてるよ？」

「なら問題ないね！」

ぐつと親指を立てるレヴィ。その後ろで、シユテルたちがどちらに呆れているのか分からないため息をついた。

最寄りの駅から電車で海へと向かう。それほど遠くもないので、海水浴場にはすぐに着いた。まだ朝のためか、人はそれほど多くない。だがこれが昼になれば人でいっぱいになるのだろう。

「さて、レヴィ。海に来たわけだが」

砂浜にビニールシートを広げながらディアーチエが言う。

「何をしたいのだ？」

「遊びたい！」

「うむ。具体案を聞こうか」

言葉に詰まるレヴィ。どうやら何をするかまでは考えていなかったらしい。慌てる様はなかなかかわいいとも思う。

「とりあえずさ、レヴィ。水着を買ってきたのなら泳いできたら？」

苦笑しつつ助け船を出すと、そっか、とレヴィが顔を輝かせた。それじゃあ着替えるねとその場で服を脱ごうとしたのを慌ててディアーチエが押し止める。シユウは何も言えず慌てて視線をそらしていた。

「阿呆か貴様！　こんなところで着替えるやつがいるか！　ついてこい！」

ディアーチエがレヴィの首根っこを掴んで引きずっていく。あー、と言いながらレヴィはされるがままになっている。いつてきますと手を振ってくるあたり余裕があるらしいが。

「では私たちも行きましょうか、ユーリ」

「はっ」

「じゃあ僕は荷物を見ておくよ。いつてらっしゃい」

お願いしますと頭を下げるシユテルとユーリを見送り、シユウは一人残された。とり

あえずは全員の荷物を一カ所にまとめる。それだけですることはなくなつた。

十分ほどして四人が戻ってくる。全員が水着姿になつていた。シユテルだけは何故か上にパーカーを羽織つていたが。手に文庫本を持っているということは泳ぐ気はあまりないらしい。

「お待たせしました。シユウもどうぞ」

「あー……。僕はここにいるから、みんなで遊んできたなら？」

「もしかして、シユウは泳げないのですか？」

そう聞いてきたのはユーリだ。そう捉えられるかと思いつつも首を振つて不定する。

「誰かが遊び疲れたらでいいよ」

そう言いながら自分の荷物から文庫本を取り出す。今のところは一緒に行く気がないと分かつたのか、どこか不満そうな表情をしながらもシユテルを除いた三人が海へと向かつた。それを見送つてから、シユウはシユテルへと向き直る。どうぞ、と言うとシユテルはシユウの隣に腰を下ろした。

「シユテルは行かないの？」

「最初は荷物を見ておこうかと思つていましたから。後ほど王と交代する予定です」

なるほど、とうなずく。その後シユテルの水着を横目でしっかりと見て、すぐに目をそらした。その一連の視線の動きに気づいていたのか、シユテルがじろりとシユウを

睨んでくる。

「水着というのはよく分からないので……。何か言いたければ遠慮無くどうぞ」

「うん。似合ってる。かわいい」

「……………。そう、ですか。光栄です」

今度はシユテルが視線をそらした。ほのかに頬が赤くなっている。どうやら少し照れているらしい。その様子にシユウは笑うと、文庫本を開いて読み始めた。

その後は一人ずつ交代しながら海で遊んだ。遊ぶといつても、海ではしゃぐレヴィとユーリに付き合う形になっていたが、途中で昼食を挟みつつずっと遊んでいたが、やがて日が傾いて空が赤くなってきた頃、レヴィとユーリが戻ってきた。休憩をのぞいても六時間以上遊んでいたことになる。

戻ってきた二人は、疲れたと言いながらも満足そうな笑顔だった。

「では着替えてくる」

ディアーチェが二人を連れて着替えに行く。残されたシユウとシユテルは三人を見送ってまた文庫本に視線を落とした。もうすぐ二冊目も読み終わる。

「レヴィとユーリは満足したかな？」

「十分でしょう。あんなものまで作っていましたし」

視線を後方へ。そこには少し大きめの砂の城があり、周囲で時折写真が撮られてい



る。レヴィとユーリが作っていたもので、シユウたち三人も手伝わされていたものだ。完成した時のレヴィの喜びようはあまり見られるものではなかった。

砂の城を見ながらシユウは笑う。楽しめていたのなら何よりだ。ただ遊んでばかりで疲れているのも事実なので、帰った後はゆっくりと眠れそう。それでも、次があればもう少しのんびりしたいとも思う。

本を読み終え、荷物にしまう。ディアーチェたちはまだ戻ってこない。隣を見ると、シユテルも読み終えたのか本をしまっているところだった。シユテルと視線が合い、シユウは理由もなく少し慌ててしまう。

「えつと……。ディアーチェたち、遅いね。まだかかるのかな？」

シユテルは特に目立った反応は示さず、そうですねとディアーチェたちが向かった方を見た。しばらくそのまま無言でいたが、やがて振り返ってシユウに言う。その表情はどこか困ったような苦笑に見えた。

「どうしたの？」

聞いてみると、シユテルはいえ、と首を振る。少し考えてから言った。

「せっかくだから夕食を食べていこう、ということ。近くのコンビニまでお弁当を見に行ってくる、と」

「お弁当ってことは、ハンパでっ！」

海へと振り返る。海水浴客はかなり減ってきている。もうすぐ暗くなるため海から出るようにという指示もあった。あとは砂浜で遊ぶ人が残るぐらいだろう。昼よりはかなり静かになるはずだ。そう思うと、ここで食べる弁当というのも、

「うん。悪くない」

シユウがつぶやくと、シユテルはそうですなと一つうなずいた。

やがて日が沈み、星空が広がる。シユウはシユテルと並んで座り、海を見つめながらのんびりとディアーチエたちを待つ。居心地のいい静かな無言の時間。場所が変わってもシユテルと二人の時はさほど変わらないものだ。

やがてディアーチエたちがコンビニの袋を提げて戻ってきた。

Side : Dear che

帰りの電車で、ディアーチエはため息をついて本を閉じた。この状況は集中できるものではない。両肩にレヴィとユーリの頭があり、二人とも眠っているためだ。遊び疲れたためだろう。二人の幸せそうな寝顔を見ていると起こす気にはなれない。もう少し寝かせておくことにする。

真向かいに座っているはずの二人も静かなので怪訝に思いながらもそちらを見て、ディアーチエは少し驚いた。シユウとシユテルが、お互いに寄りかかって眠っていた。

シユウはともかく、シユテルがこれほど無防備な姿を見せるのは珍しい。

——それだけシユウを信頼しているということか。

奇妙な関係になったものだと思う。元は赤の他人だったはずなのに、気がつけばシユウを家族の一人として見てしまっている。シユウの方はどう思っているのかは分からないが。

仲良く眠る二人を見つめ、デイアーチエは淡く微笑んだ。本人たちにはあまり言わないが、今の生活はそれなりに気に入っている。管理局に使われるのは不本意だが、この四人を守るならそれもいいだろう、と。

——ああ。悪くない。

そんなことを思いながら、デイアーチエは一人うなずいていた。

## 第二十三話 鍵

夏休み。多くの学生が勉強やスポーツ、遊びに興じる中、それとは対照的に何もすることがなくむしろ暇を持て余す者も当然ながら少なからずいる。シユウはそんな中の一人だ。成績は良い方ではないが悪い方でもないでそれほど勉強する気もなく、スポーツは嫌いではないが誘われなければやろうとはしない。遊びに関してもスポーツと同様、誘われなければ出かけることそのものが少ない。

そして今日もシユウは貴重なはずの夏休みをどのように消化しようか悩んでいた。シユテルたちのところへ遊びに行こうかとも思っていたが、彼女たちにも都合があると思ひ、あまり行きすぎるのもよくないと考えた。今日は自宅でのんびりしていたのだが、やはり暇すぎて困る。

「……少し出かけよう」

散歩でもしてみようかと思ひ、シユウは自宅を後にした。

そして現在いる場所は、シユテルたちの部屋の前。なぜか自然とこちらへと足が向いていた。習慣、と言つていいのかは分からないが、恐ろしいものだ。どうしようかと少

し考えていたが、せっかくここまで来たのだからとインターホンを押した。

軽い音がかすかに聞こえてくる。その後は少し無音が続いたが、やがてドアの鍵が外される音がした。そして隙間だけ空けられ、顔をのぞかせたのは、

「……おはよう、ディアーチェ」

ディアーチェはシユウを認めると、わずかに目を丸くした。

「どうした、シユウ。今日は約束はなかったはずだが」

「うん。ちよつと気まぐれ。ごめんね、迷惑なら帰るよ」

「いや、そう言うわけではない。……まあ、入れ」

ディアーチェが扉を開ける。エプロンをしているところから、何か料理でもしていたらしい。シユウはディアーチェの後に続き、ドアを閉めた。

「今日は我以外は出かけている。一応来ていることぐらいは伝えておくが、すぐには戻っては……」

「いや、いいよ。ディアーチェの言う通り約束してたわけじゃないし。暇だから来ちゃったってだけ」

むしろお仕事の邪魔とかしたら悪いし、と言うと、ディアーチェはそうかと苦笑していた。そのままリビングに通され、すぐにお茶が出される。それと共に何かお茶請けを出そうと棚を見ていたようだったが、ディアーチェはすぐに少し考える素振りを見せ、

戻ってきた。

「シユウ。洋菓子が好きか？」

「え？ うん、まあ好きだけど」

「ならばちようどいい。少し待っておれ」

そう言つて、デИАーチエがキツチンへと戻つていく。シユウは首を傾げながらも、お茶を飲みながら待つことにした。何を待てばいいのかは分からなかつたが。

十分ほどしてリビングに戻ってきたデИАーチエの手にはお盆があり、その上には十個ほどのマフィンが載せられていた。どうやら作っていたものはこれらしい。デИАーチエはお盆をテーブルに置くと、エプロンをはずしていすに座つた。

「我も一人で退屈でな。暇つぶしに作っていたのだ。あやつらが帰つてきた時のおやつにちようどいいだろうと」

「へえ……。え？ それつて僕が食べちやだめじゃあ……」

不安になつて聞くと、デИАーチエが苦笑する。気にするなと手を振りながら、「それなりの数を作つた。これを全て食べたとしても問題はない。むしろ感想を聞かせてほしいぐらいだ」

感想と言われても、とシユウも苦笑しながらマフィンを手に取つた。一口かじり、味わうようにゆっくりと租借しながら呑み込む。ほどよい甘さと柔らかさでちようどい

い。シユウは一度うなずき、手に取った一個をとりあえずは完食する。

「うん。美味しいよ、ディアーチエ。よく分からない洋菓子店で買うよりかは美味しいと思う」

「そうか。だがシユウ。洋菓子店のマフィンを食べたことがあるのか？ お前が？」

訝しげに問いかけてくるディアーチエに、よくぞ聞いてくれましたとシユウは胸を張って、自信満々に答えた。

「ない！」

「うむ、だろいな」

分かつてはいた、とディアーチエが苦笑しつつマフィンを手に取り、食べ始める。今回の出来はなかなかだ、と本人もそれなりに納得したようだ。これならあいつらも満足するだろう、と。その様子を見て、シユウは思わず笑みをこぼす。

「ディアーチエってさ」

「なんだ」

「優しいよね」

途端にディアーチエがとても渋い表情をした。認めたくなさそうな、しかしあまり否定する気にもなれないそんな表情。その変化が少しおもしろくて眺めていると、ディアーチエがやれやれと首を振った。

「優しくなどしておらん。あやつらは我の手駒だ」

「うん。でも優しいよね」

「……むう……」

腕を組んで唸るディアーチェ。シユウはそんなディアーチェの様子をおもしろそうに眺めながら、二個目のマフィンに手を伸ばした。

その後はマフィンの時折つまみながら、くだらない世間話をして過ごしていた。最近是这样いった本を読んだ、こういうった書店があった、など本に関わることが少し多くなるのがディアーチェとの会話だ。ただマフィンが美味しかったので作り方を聞くと、少し照れくさそうにしながらも嬉しそうに教えてくれた。必死で表情を隠そうとはしていたが。

「教えてから言うのもなんだが……。作る機会があるのか？」

「……さあ……。まあ、いずれ、ね」

時折自炊などもするが、それすら最低限のものだけだ。こういった手の込んだ料理などはあまりやらない。だが料理そのものは嫌いではないので、いずれ作る時があるだろう。練習ができないというのも困りものだが。

「材料ぐらいならいつでも用意してやる。まあ、たまには作りに来るといい」

教わったことをメモ書きしていたシユウは、その言葉に少し驚いて顔を上げた。デイ



アーチエはシユウの方へは見向きもせず、そつぽを向いたままだ。

「いいの？」

「それぐらいは、な。ただし、シユテルがいる時だけだ。味見役ぐらいいるだろう」

「どうしてシユテル？」

「貴様は……。いや、何でもない」

何かを言おうとしたディアーチエだったが、諦めたかのようにため息をついた。やれやれと首を振る。シユウは首を傾げるばかりだ。

「どうせなら教えてくれたディアーチエに味見をしてほしいけど」

「む……。まあ、我でも構わん……」

ディアーチエは小さな声でそう言うと、そのまま黙ってリビングを出て行ってしまった。いつまでも首を傾げているシユウだけがそこに残された。

メモを何度も読み返していると、しばらくしてからディアーチエが戻ってきた。いつもの席に座り、そして片手をシユウへと突き出してくる。きよとんとしているシユウへと、突き出された片手が揺らされる。早く受け取れ、というかのように。

手を出して、ディアーチエの手に握られていたものを受け取る。見ると、金属のできた板のようなものだった。なんだろう、と考えていると、ディアーチエが教えてくれる。

「この部屋のカードキーだ。持って行け」

「へえ、ここってカードキーなんだ……って、え？　持って行けって？　誰かに届けるの？」

「なぜそうなる！　貴様が管理しろと言っている。誰もいない時はそれで勝手に入れればいい」

「ディアーチエの真意が理解できず、シユウは唾然としてしまう。それなりに仲良くさせてもらっているつもりではあったが、さすがに鍵をもらうというのが気が引けてしまう。他人の自分が持つていていいものではない。」

「気持ちはありがたいけど……」

「そう言っただ断ろうとしたが、ディアーチエがシユウを睨んできた。慌てて口を閉じる。」

「家には何もないのでろう」

「え？　まあ、うん。本ぐらいだね」

「この家にあるものは好きに使え。暇つぶしに本を読むもよし、料理をするもよし。我らにもそれぞれ部屋があるが、そこにさえ入らなければ問題は無い」

「納得していないシユウへと、それに、とディアーチエが続ける。」

「我らにとつてはお前はもう家族も同然だ。持つていても問題は無い」

「……へ？」

「……忘れてろ」

ディアーチエがまたそっぽを向く。少しだけ見えたその顔は、ほのかに赤く染まっていた。シユウは先の言葉の意味を考え、少し嬉しくなる。自分も家族に数えてくれているのか、と。家族の温かさなどもうすっかり忘れてしまったが、ここならそれを思い出せるだろうか。

手の中にある鍵を見て、そつと握りしめる。ディアーチエへと笑顔に向け、言った。

「ありがとう、ディアーチエ。じゃあ、もうね」

「……ああ」

ディアーチエはそれきり黙り込み、シユウはその横顔を静かに見つめていた。

日が沈みかけた頃、三人が帰宅した。そして三人とも、少なからず驚いていた。

「たわけ！ 入れすぎだ！ 卵焼きでも作るつもりか！」

「あはは！ 方向転換して卵焼きでも作ろうか！」

「開き直るな阿呆！」

キツチンに並んで立つディアーチエとシユウ。シユウが笑い、ディアーチエは怒りながらシユウからボウルをひったくっている。しばらくして三人に気がついたのか、シユウが片手を上げた。

「おかえり！」

「……ただいま戻りました……」

現状把握ができずに困惑しているシユテルと、未だに無言のレヴィとユーリ。そんな三人へ、シユウがリビングのテーブルを指さす。少しだけ申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「失敗作がたくさんできて……。捨てるのはもったいないから、ちよつと食べてくれると嬉しいかな？」

リビングのテーブルには失敗作のお菓子類がある。デイアーチエから鍵をもらった後、時間もあるし菓子作りでもしようとなつて作ったものだ。だが予想以上に難しく、見事に失敗が続いていた。おそらく晩ご飯はこのまま菓子類だけになるだろう。

まずシユテルがリビングへと向かい、歪な形のマフィンを手取る。一口かじり、ゆつくりと租借して、ふむ、と一度うなずいた。

「シユウ。作ったのは初めてですか？」

「うん。お菓子なんて作る機会がなかったから」

「なら十分良く作れていると思いますよ。美味しいです」

それなら良かった、とシユウは笑う。そしてそれを許さないのがデイアーチエだ。

「たわけ！ 我が教えておるのだ！ その程度では困る！」

なるほど、とシユテルがうなずいた。静かにシユウの隣に立ち、小さな声で耳打ちす

る。おそろく長くなります、と。それを聞いたシユウは、苦笑しかできない。

「とりあえずがんばるよ」

「シユウ！ もう一度ここからだ！」

ディアーチエの声に、シユウは了解、と答えて料理を再開した。

リビングのテーブルに並ぶお菓子の山。マフィンを始めとした洋画菓子類が並び、それぞれの席の前にはジュースも用意される。レヴィとユーリは大喜びだが、シユテルの表情はいつも以上に無表情だ。長く一緒にいれば、これが怒りの表情だと分かる。シユウですら分かるのだから、ディアーチエももちろん理解しているだろう。

「ディアーチエ」

シユテルの声。ディアーチエが頬を引きつらせながら、シユテルを見る。

「反省してください」

何を、とは言わない。言わずとも分かるだろう、と。ディアーチエは神妙な面持ちで一つうなずき、

「すまぬ、調子に乗りすぎた」

素直に謝罪する。シユテルは小さくため息をついて、

「とりあえずはいただきます。五人でなら食べきれる量ですし」

「お菓子が晩ご飯なんて幸せだー！」

「私もです！ たくさん食べます！」

「味は保証しないよ。いやほんとに」

そんな会話を交わしながら、食べ始める。五人一緒のテーブルで。

家族のように。

シユウは口を動かしながら四人を見る。先ほどダイアーチエから鍵をもらったことをシユテルに話したのだが、シユテルの反応はそうですか、の一言だけだった。反対されないことに胸をなで下ろしつつ嬉しくなる。ここにいいのだと思えた。

片手で鍵を握りしめ、シユウは嬉しそうに微笑んだ。

## 第二十四話 花火大会

高町家のリビングにて、シユウは落ち着かない様子でいすに座っていた。オレンジジュースを少しずつ飲みながら、かすかに聞こえてくる声に耳を傾ける。

『これでよし。どうか、シユテルちゃん』

『わあ、シユテル、似合ってる！ かわいい！』

『光栄です。貴方も似合っていますよ、ナノハ』

『えへへ、ありがとう！』

楽しそうな会話である。そんな場所に自分がいられないことに不満は覚えぬ。むしろ戻ってきた時になんと云えばいいのかとずっと悩んでいる。シユウはまた一口オレンジジュースを飲み、思考をフル回転させていた。

今日はこの街の花火大会がある。近くの公園に露店などが数多く並ぶ、それなりの規模のものだ。その花火大会のことを知り、早速シユテルを誘ったのが三日前の出来事。その時は承諾してくれたのだが、なのはとも約束があると聞いてはいた。

まさかそれが、浴衣を借りに行くこととは思ひもしなかつたが。

何も聞かされていないシユウがシユテルと一緒に高町家に行くと、シユウは一人リビ

ングに通され、オレンジジュースとケーキを出された。そして女性陣は別室へ。男一人、シユウだけがリビングに残されることになった。

余談だが、なのはの兄はすでに出かけており、父は喫茶店で仕事だ。母は一時的に抜け出してきたのはとシユテルの着替えを手伝いに来たらしい。

どんな浴衣なのかな、と少し楽しみにしながら待っていると、やがてリビングのドアが開かれた。満面の笑みの桃子が先に入ってくる。

「お待たせ、シユウ君」

「いえ。あ、ケーキご馳走さまです。美味しかったです」

頭を下げるシユウに桃子がいえいえ、と手を振る。

「それじゃあ……。なのは。シユテルちゃん」

桃子が二人を呼ぶと、なのはが少し恥ずかしそうに、シユテルはやはりいつもの無表情で部屋に入ってくる。シユウはその二人を見て、おお、と感嘆のため息を漏らした。

なのはの浴衣は白を基調としたもので、桃色の桜の柄がある。素直にかわいいと思えるが、しかしなのははなぜか一歩下がっている。

シユテルはなのはとは反対の色の浴衣だ。黒色を基調としたもので、桃色の桜の柄は同じ。クールなシユテルによく似合う浴衣だと思う。シユウはシユテルの浴衣をまじまじと見つめ、一度うなずいて笑顔で言った。



「うん。すごく似合ってると思う。かわいい」

「ありがとうございます」

礼を言うシユテルの表情はどこか嬉しそうにも見える。その様子を見守っていたなのはと桃子は満足そうにうなずいた。

「それじゃあなのは。私は翠屋に戻るから。あまり遅くなりすぎないようにね」

「うん。ありがとうございます、お母さん」

桃子が手を振って部屋を出て行く。それを見送ってから、なのはがシユテルへと言う。

「私たちも行こう。フエイトちゃんたちも待つてるだろうし」

「そうですね。……シユウ」

シユテルが呼ぶ。シユウはコップと皿を流しへと持って行ってからうなずいた。

戸締まりをして、公園への道を歩き始める。ここからだと少しだけ歩くらしい。この周辺の地理に明るくないシユウは、二人から一步遅れて歩く。二人の後ろ姿を眺めながら。こうして見ていると、双子がおそろいの浴衣を着ているように見える。なのははとても楽しげに、シユテルも機嫌良さそうに会話をしていた。

しばらく歩いて神社が見えてくる。到着、となのはが言ったところで、

「おお！ なのはちゃん見つけたで！」

そんな声。見るとはやてが手を振っていた。側にはヴォルケンリッターの面々もいる。

「はやてちゃん！ お待たせ！」

「あたしらも今来たところやから、気にせんといて。フェイトちゃんたちもまだやし」

楽しいげに会話を始める二人。シユテルはそんな二人をしばらく見ていたが、少し待ってからのには声をかける。あ、ごめんとなのはが振り向いた。

「シユテル、ありがとう！」

「いえ。ではまた後ほど、浴衣を返却に伺います」

「うん。お母さんにも伝えておくね」

お願いします、とシユテルは少し頭を下げ、シユウへと振り返った。行きますよ、と公園の中へと歩いて行く。シユウは少し驚きつつも、シユテルの後を追った。

「シユテル。なのはたちとの約束は？」

「終わりました」

シユテルの言葉にシユウが首を傾げる。

「浴衣を借りること、公園まで一緒に行くこと。約束したのはこの二点だけですよ」

「あ、ああ……。そうなんだ」

なぜそんな中途半端な約束だったのかは分からなかったが、もしかするとシユウが

シユテルを誘うことを予想してのものだったのだろうか。もしそうならなのはに感謝しなければならぬ。心の中でなのはに感謝していると、不意に手を握られた。

「え、あ……。シユテル？」

シユテルが自分の手を握っている。目を丸くしているシユウへと、しかしシユテルはその様子に首を傾げていた。

「公園は混雑していいそうですから、はぐれないようにです」

「あ、うん……。そうだよね」

少しだけ肩を落とす。そんなシユウの様子を見て、シユテルはやはり首を傾げていた。

花火までまだ時間がある。二人は露店を巡りながら時間を潰すことにした。焼きそばなどの食べ物売っているところや射的などのゲーム関係の露店など、出ている店は様々だ。こういった場所は初めてなのか、シユテルは視線を頻繁に動かしていた。

少し歩いたところで小腹が空いてきたので、二人は焼きそばとフランクフルトを購入して、人が大勢行き交う道から横に出る。草地になっている場所は人が少ない。二人と同じように、買ったものを食べている人がいるぐらいだ。ベンチなどがないため、二人は立ちながら食べることにした。

並んで立って焼きそばをすする。お互いに無言だったが、いつものことだ。やがて二

人とも食べ終えて、ゴミを捨てて混雑している道に戻る。また露店巡りへと出発する。しばらく歩くと、シユテルが唐突に立ち止まった。ある店を凝視している。何かやりたいものでもあるのかと同じ方向へ視線を向け、すぐに納得した。「何してるの?」

その店まで行き、そこにいた人物に声をかける。スーパールボールすくいのお店で遊んでいる人物はレヴィとユーリだ。その後ろにディアーチエが立っていて、声をかけられたディアーチエは少し驚きながらも振り返った。

「お前たちか。二人がやってみたいと言うのでな。付き合っている」

レヴィとユーリはシユウたちに気づかない。スーパールボールが浮いた水槽をじっと凝視している。緊張感が二人から伝わってくるようだ。内容はともかく。

「とりや!」

レヴィが勢いよくポイを水槽に突っ込む。そして当然の結果として、すくえずに破れた。

「うそ! なんでも!」

レヴィが愕然と言つて、見守っていたディアーチエとシユテルは呆れたようにため息をつく。シユウは苦笑しかできない。ユーリの方は、そつと水面にポイを入れ、一個、また一個とすくっていく。だがやはり初めてで慣れていないためか、五個ほどすくつたと

ところで破れてしまった。

「残念だったね、嬢ちゃんたち。浮いているやつなら一個ずつ持って行きな」

悔しそうに唸るレヴィとだめでしたと笑うユーリ。二人は一個ずつスパーボールを手に取ると、振り返った。

「あれ？ 二人とも、どうしてここに？」

そこでようやくシユウとシユテルに気づいたのか、レヴィが目を丸くする。ユーリはシユテルの浴衣を見て、目を輝かせた。

「シユテル、それが浴衣ですか？ すごく似合っています！」

「ありがとうございます、ユーリ」

素直に礼を言うシユテルと、珍しそうに浴衣を観察するユーリ。シユウがそんな三人の様子を微笑ましく眺めていると、ディアーチェの少し大きな咳払いが聞こえてきた。そちらに視線を向けると、ディアーチェはレヴィの首根っこを掴み、ユーリの片手を握る。次にシユテルと自分に目配せをして、

「では我らは次に行くとする」

それだけ言うときびすを返して歩き始める。シユウが啞然としている前で、レヴィとユーリが笑いながら手を振ってきた。また後で、という言葉は周囲の音に紛れてあまり聞こえなかった。

「行っちゃった……。シユテル、良かったの？ 一緒に行かなくて」

「ディーチェが消えていった方向を指さしながら聞くと、シユテルは一度うなずいた。

「はい。今日は貴方と約束をしましたから。王にも伝えてあることです」

「そう……？ あまり気を遣わないでね」

「はい。分かっています」

二人はそんな会話を交わしながら、ディーチェたちとは反対方向に歩き始めた。

それから時間が経ち、花火の時間が近づいてくる。シユウとシユテルは公園の側にあ  
る神社に来ていた。長い階段が特徴の神社で、ここからは花火がよく見える。ただその  
階段故にあまり人は来ていない。それでも他に人目があることから、シユウはシユテル  
と共に神社の裏手に回った。

神社の裏手にはほとんど何もなかった。目の前に草木が生い茂る林が広がるだけだ。  
ただ、位置的にここからでも花火は見る事ができる。シユウは周囲に人がいないこと  
を確認すると、安堵のため息をついて後ろの壁にもたれかかった。

「( )なら落ち着いて花火を見られるよ」

シユウがそう言うと、分かりましたとシユテルも壁にもたれかかる。二人で静かな夜  
空を見上げ、静寂が二人を包む。静かな夜の静寂だ。携帯電話の時計を確認すると、予

定の時間まであと十分ほどある。

「ねえ、シユテル」

シユウが声をかけると、シユテルがこちらと視線を合わせる。シユテルに見つめられたシユウは内心で緊張しつつ、言葉が続ける。

「シユテルたちはこれから、どうするの?」

「この後は着替えるために一度ナノハの家に向かいますが」

「そうじゃなくて……」

説明の仕方が分からずに、それでも何とか伝えようとシユテルをまつすぐに見つめる。それだけで察したのか、シユテルはなるほどと一度うなずいた。

「将来的な意味でしたら、決まっています。とりあえずしばらくは、囑託魔導師として動こうとは思いますが」

「うん……。ねえ、シユテル」

「はい」

「僕に気を遣ってない?」

シユテルがわずかに目を見開いた。それを凶星だと判断して、シユウは続ける。

「もしも、もしもだよ。誰かがシユテルたちの力を必要としていて、シユテルたちもそれに協力したいと思つたのなら、僕のことには気にしなくていいから。シユテルたちと一緒に

にしているのは楽しいけど、縛りたいとまで思っていないから」

シユテルはシユウの言葉を黙って聞いていた。シユウをまつすぐと見つめ、やがて目を閉じる。小さくため息をついた。

「どういった心境の変化ですか？ 突然すぎますよ」

「うん。ちよつと前に僕のためにいろいろ動いてくれてたよね。嬉しいし感謝してるけど、わざわざ僕のために時間を使わなくてもいいよってこと」

なるほど、とシユテルは一度うなずいた。夜空へと視線を戻す。返事がないことにシユウは少し気落ちしながらも、シユテルと同じ夜空を見上げた。やがて花火の開始時間になる。

「分かりました」

シユテルの声。シユウは少し驚くが、シユテルは気にせずに続ける。

「誰かが私たちの力を必要としていただけなら、私たちはそれに応えます」

「うん」

「ですがそれは、貴方も含まれています。シユウ」

「……うん」

視線を夜空へ。その瞬間に小さな花が咲いた。花はやがて次々と咲いていく。星の光の中、炎の花がいくつも咲いていく。咲いては、消えていく。



「なるほど、これは素晴らしい。とても綺麗だと思います」

「うん。シユテルと見に来て良かったよ。一緒に来てくれてありがとう」

次々と咲いては消えていく花火を見ながら、シユウが笑顔で言う。シユテルはちらりとシユウの表情を確認して、すぐに花火へと視線を戻す。やがてシユテルは、

「こちらこそ。誘っていただきありがとうございます」

優しげに微笑みながら、そう言った。そつとシユウの手を取ると、シユウもシユテルの手をしつかりと握り返してくる。

手を繋いだまま、二人は星空に咲いては消えていく花々を、いつまでも眺め続けた。

### Side : Stern

花火の後、高町家で着替えたシユテルはシユウを送り、自身はアースラに来ていた。用件は回収したロストロギアの引き渡し。何とも危ないことに、祭りの最中、道に転がっていたものだ。発動も暴走もしていないことが幸いだった。

封印処理をしたロストロギアをリンディに渡す。リンディはそれを受け取り、次の瞬間には封印を解除した。何を、とシユテルが言うよりも早く、リンディが表情を険しくする。

「やはりこれも、なのね」

リンディのつぶやきにシユテルが首を傾げる。リンディが険しい表情のまま教えてくれる。

「最近この世界に飛来したロストロギアは、内包されている魔力が消失しているのよ。一つ残らず、全て」

なるほど、とシユテルはうなずいた。今回のロストロギアが発動していなかったのも魔力が枯渇していたからなのだろう。ただ、一つ気になることはある。

「内包されているはずの膨大な魔力は、どこに消えてしまったのかしらね」

リンディのつぶやきに、シユテルの背筋が冷たくなる。効果の弱いロストロギアばかりだったが、それらの魔力を全て集めるとユーリに、エグザミアに届く量にはなるはずだ。そのことに薄ら寒いものを感じながらも、シユテルは一礼してその場を後にした。

## 第二十五話 お出かけ

シユウはある人からの依頼を受け、シユテルたちのマンシヨンに朝早くから向かってきた。欠伸をかみ殺しながら、今日はどうしようかと考える。といつても、だいたいの計画などは考えてもらっているので基本的にはそれに従うのだが。

昨晚、シユウが寝ようとしていた頃に電話があった。

『明日はユーリが一人で留守番だ。すまぬが一緒にいてやってくれ』

急な頼みだったが、どうせ暇を持て余しているので快諾した。そして明朝に依頼主のデイアーチエが来てメモを渡されている。そのメモには、植物館のチケットが二枚と今日の日程表が書かれていた。参考程度にしてくれと言われているが、他に案はないのでありがたく頂戴した。

マンシヨンにたどり着き、インターホンを押す。すぐに誰かが駆けてくる音の後、ドアが開かれ、ユーリが顔をのぞかせる。シユウの顔を見て、表情を輝かせた。

「シユウ！ お待ちしてました！ みんな早くに出かけてしまつて……」

「うん。そうみたいだね。僕と一緒にだつたらまらないかもしれないけど、一緒に留守番

してようか」

「そんなことないです！　ありがとうございます！」

ユーリが嬉しそうな笑顔でそう言った。

リビングでシユウはシユテルたちが用意していったという朝食を食べる。バターロールを縦に切り、ウインナーと炒めたサラダを挟み、最後にチーズをたっぷりかけたホットドッグのようなものだ。ユーリと二人でトースターで温めてリビングで食べる。シンプルながらも美味しかった。

それとは別の香ばしい匂いもしている。キッチンには弁当箱が二つあり、これはユーリが作ったものらしい。がんばりました、と胸を張って言っていたので自信作なのだろう。中身を聞くと、秘密だそうだ。

「ユーリだけお留守番って珍しいね。ディアーチェとよく一緒にいるのに」

ホットドッグを平らげてジュースを飲みながら聞くと、ユーリはそうですねと寂しそうに眉尻を下げる。

「ディアーチェが、たまには気分転換も必要だろうと。私はディアーチェと一緒にいたのですけど」

「なるほど。ユーリはディアーチェが好きなんだね」

「はい！　大好きです！」

元気よく答えてくれる。人見知りをするのにこういったことはストレートに伝えてくるのがユーリだ。言われているデイアーチエは照れていたり対応に困っていたりとしていて飽きない。ただ、ユーリがデイアーチエに依存しすぎないかとユーリ以外の三人は心配しているようだ。自分のやりたいことを見つけてくれることが一番なのですが、とシユテルはよく言っている。

今日のこと、ユーリのやりたいことを探すための一環なのかもしれない。

「とりあえずデイアーチエから植物館のチケットを預かってるから、今日はそこに行くか」

「はい！ 初めてなので楽しみです！」

先ほどの寂しそうな表情から一転、目を輝かせるユーリにシユウは微笑んだ。

リビングで少し雑談をしてから、二人は出発した。植物館は隣の市にあるのでそこまでは電車で向かう。電車を降りた後は徒歩だ。三十分ほど歩いて目的地の植物館に着いた。長方形のような形をした建物で、大きなデパートぐらいの大きさがある。

「わあ……。大きい建物ですね……」

「そうだね。……行こうか」

「はい！」

早速中に入り、受付にチケットを渡す。受付の人は二人を見て、笑顔でどうぞと通し

てくれる。通り過ぎてから、最近の子供は進んでいるわね、と聞こえてきたがきつと気のせいだろう。二人はとりあえず案内に従って、順番に見ていくことにした。

熱帯地方の植物や別の時期の植物など、普段では見られないような植物を見るたびにユーリは目を丸くしていた。何を見るにしても興味津々といった様子で、シユウがのんびりと歩いている間にあちらこちらへ走り回っている。時折これは何かと聞かれるが、当然答えられるはずもない。パンフレットを渡してからは、一人で駆け回っていた。

昼過ぎには全て見終えることができ、植物館を後にして最寄りの公園へ向かう。鉄棒とジャングルジムがあるだけの小さな公園だったが、それでも夏休みということもあってか遊んでいる子供たちはいた。シユウとユーリは公園の隅にあるベンチに座った。

「結構早く見終わったね……。それで、どうだった？」

ユーリが持ってきていたリユックから弁当箱を取り出しながら、

「とても楽しかったです！ 見たこともないものがいっぱい……。あんなにたくさんお世話するのは大変でしょうね」

「まあ人手はそれなりにあるとは思いますが、大変だろうね」

そんな発想になるのかとシユウは思わず苦笑した。渡された弁当箱を受け取り、膝の上に広げる。そして、おお、と驚きの声を漏らす。

「がんばりました！」

嬉しそうに言うユーリ。おにぎりが詰められた段とおかずが詰められた段の二段で、おかずはハンバーグだった。以前一緒に作った時よりもかなりうまくなっている。ただ失敗しているところもあり、

「粉々だね」

「あう……」

ハンバーグは大小の違いはあるものの、六個以上の欠片に分解されていた。これはこれで器用だと思ってしまうのだが。先ほどまでの元気はどこにいったのか、ユーリは肩を落としていた。

シユウはそんなユーリをちらりと見て、ハンバーグの欠片を口に入れる。ゆっくりと食べて、味を確認する。呑み込んでから、笑顔で言った。

「うん。おいしいよ、ユーリ」

本当ですか、とユーリが顔を上げ、笑顔になった。シユウはうなずきながら弁当を食べ進めていく。ユーリはその様子に満足したのか、上機嫌で自分も弁当を食べ始めた。

ユーリよりも早く弁当箱を食べ終えたシユウは、ダイアーチエから渡されたメモをこっそりと見る。植物館を早く見終えてしまったと思っていたのだが、ダイアーチエの計画と比べると十分程度の誤差しかない。それだけユーリの行動パターンを理解しているということか。ダイアーチエらしいと思いつつ次の予定を確認する。それを見て、

なるほど、とシユウはうなずいた。

食べ終わり、弁当箱を片付け始めたユーリに声をかける。

「ユーリ。デパートでヒーローショーがあるらしいけど、見に行く？」

「本当ですか！ 行きます！」

シユウの言葉に目を輝かせる。やっぱりユーリも好きなんだなと思いつつ、足を動かして始めた。

海鳴市に戻ってきた二人は早速デパートに向かう。屋上にたどり着くと、ちょうどヒーローショーが始まったところだった。内容はレヴィと見たものは少し違うようだ。舞台を見た瞬間にユーリの表情が明るくなる。シユウはユーリを連れて、前の方の席へと移動した。

怪人が登場した時や観客の子供が怪人に捕まる時など、ユーリははらはらとした様子でずっと見ていた。そしてヒーローが登場した時は他の子供たちと一緒になってヒーローの名前を叫ぶ。思わず笑みがこぼれてしまう。

やがてショーが終わり、二人は屋上を後にした。メモにはこの後は買い物と書かれている。

「やっぱりヒーローはカッコイイですね！ すごく興奮しました……！」

「うん。見ていてよく分かった」



どこに行こうかと考えながらそう返事をする。買い物とは書かれていたが、具体案が示されてはいなかった。どうしようかと真剣に悩んでしまう。

「シユウ。どうかしました？」

ユーリがそう尋ねてくる。シユウは一瞬答えようかどうか迷ったが、まあいいかと素直に言った。

「買い物、どこか行きたいところはある？」

シユウの言葉にユーリが目を瞬かせる。その後少し考える素振りを見せ、ちらりとシユウの表情を伺ってくる。シユウが首を傾げると、ユーリが遠慮がちに言う。

「ここに行ってみたい、です」

デパートの案内図を指して、ユーリはそう言った。

そして来た店はペットショップだ。子犬や子猫がゲージに入れられて並べられている。ユーリは歓声を上げながらゲージへと走って行く。

「すごいです！ かわいいです……！」

子犬を見つめながら嬉しそうに言うユーリ。その様子を見ると、やっぱり女の子なんだなと思ってしまう。少し後ろからそんなユーリの姿を眺めていたが、すぐにその表情が暗くなっていることに気がついた。

「どうしたの？」

肩を叩くとユーリが振り返る。何でも無いですよ、と眉尻の下がった悲しげな笑みで答えた。再びゲージへと視線を戻し、ただちよつと、と続ける。

「かわいそうだなって……。こんなところに閉じ込められて……」

「……ああ。それは、まあ……」

確かにこんな狭い場所に閉じ込められ、人の見世物にされてかわいそうだとは思う。買い手が見つかるまでの辛抱なのかもしれないが、買われた先で幸せになれるかも分からない。ユーリは子犬に手を伸ばしながら、感情のない声で言う。

「ダイアーチェたちも、少し前までは閉じ込められていました」

「え？」

「紫天の書の一部として。夜天の書の中に。とても長い間、閉じ込められていました」

ユーリがすつと立ち上がる。シユウへと振り返り、まっすぐと見つめてくる。シユウが驚きで固まっていると、ユーリが柔らかく微笑んだ。普段はあまり見ない、慈愛に満ちた優しい笑みだ。

「ダイアーチェ、シユテル、レヴィ……。三人のことを、よろしくお願いします。三人とも、シユウに心を許しているみたいですから」

その言葉を聞いて、シユウは妙に納得してしまった。そして、もつと早く気づくべきだったかなと自分を恥じる。

ディアーチェたちがユーリの幸せを願うように、ユーリもまたディアーチェたちの幸せを願っている。紫天の書の盟主として、三人の生活を守ろうとしている。お互いがお互いに同じことを想っている。いい関係だな、と羨ましく思ってしまう。

「ねえ、ユーリ」

「はい？」

ユーリがかわいらしく首を傾げる。シユウは少し考えた後、言った。

「ユーリと同じことを三人とも想ってるよ。ユーリにはやりたいことを見つけてほしいって」

だから。

「みんなで見つけなければいいんじゃないかな？　これから先のことを」

ユーリが目を見開き、すぐに笑顔になった。いつもの無邪気な笑顔だ。それもそうです、ね、とどこか嬉しそうだ。

「帰ったらディアーチェとお話してみます！」

「うん。そうしなさい」

はい、と元氣よく返事をして、ユーリは子犬たちに手を振って店の出口へと向かう。シユウもそれに従った。

その後もいくつかの店を見て回り、そしてマンションに帰り着くと午後六時頃になっ

ていた。三人とも帰ってきており、ディアーチエとシユテルが料理をしていた。帰ってきた二人に気がつくのと、遅かったなどディアーチエが言ってくる。そのディアーチエへとユーリは歩いて行くと、

「ディアーチエ、お話があります！」

「む？ な、なんだ？」

「来てください」

「え？ あ、うむ……」

腕を掴まれ、引つ張られていくディアーチエ。シユウとシユテルは啞然とそれを見送った。

「……シユウ。何があったのですか？」

「うん。まあ、ちよつと……」

考える。このままここにいいのかと。ディアーチエとどのような話をしているかは分からないが、この後は四人で何かしら話をするかもしれない。そう考え、シユウはよしと一度うなずいた。

「ごめんね、シユテル。今日は帰るよ」

「……………」

シユテルはシユウを見る。やがて小さくため息をつくのと、分かりましたとうなずい

た。どうやら何かを察してくれたらしい。シユテルはすでにできあがっているおかずを小さなプラスチックの容器に詰めると、ビニール袋に入れてシユウに手渡ししてくれた。ありがたく受け取り、玄関へと向かう。

「それではシユウ。おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

挨拶を交わして、シユウはその場を後にした。

その日の夜。電話をかけてきたシユテルによると、四人ともやりたいことを探すことになったらしい。それをお互いに支えていく、という形で落ち着いたそうだ。

『今日はお疲れ様でした。それと、いろいろとありがとうございます』

「いやいや、余計なことを言っちゃった気がするから……。ごめんね」

『いえ。助かりましたよ。では今日はこれで失礼します』

「うん。おやすみ」

電話が切れる。少し寂しく感じながらも、携帯電話をちやぶ台へ。ぐつと伸びをして、布団に潜り込む。

——あの四人がずっと仲良く一緒にいられますように。

そんなことを思いながら、眠りへと落ちていった。

## 第二十六話 花火

「花火をしたい？」

シユテルたちのマンションで本を読んでいると、レヴィとユーリから突然そんなことを言われた。突然のことで唾然としているシユウの隣では、シユテルが立ち上がりキツチンへと行つてしまう。それに続いてデイアーチェもキツチンへと消えた。

「花火つて、この前見たじゃない」

「うん。打ち上げ花火じゃなくて、手で持つやつ！ 打ち上げ花火もやりたいけどさ！」  
「夜に子供がやっているのを見て、おもしろそうだなって話していたんですよ」

レヴィとユーリが続けて言う。ユーリも何も知らなければ子供にしか見えないのだが、今は何も言わないでおく。花火か、とシユウは考える。今の季節ならコンビニでも売っているが、どういったものを買えばいいのかが分からない。何かいいのがあったかと記憶を探っていると、

「では行きましょうか」

シユテルのそんな声。振り向くと、出かける準備を済ませたシユテルとデイアーチェ

がいた。

「えつと……。どこに？」

一応聞いてみる。デイアーチェの返答は予想通りのものだった。

「花火を買いにだ。決まっておるだろう」

昼前に出発し、コンビニやデパートなどを巡り多種多様な花火を買い集めた。昼食はコンビニのおにぎりで済ませ、いろいろな店を回っていく。夕方になって帰ってきた時には、全員の両手に花火の入った袋が提げられていた。かなりの量になっている。

「さすがに……。買いすぎじゃないかな？」

リビングのいすの座りながらシユウが苦笑する。そうですねとシユテルが同意して、

「それならオリジナルたちも呼ぼうよ」

レヴィの提案で管理局側のメンバーも呼ぶことになった。シユテルがなのはへ、デイアーチェがはやてへ、レヴィがフエイトへと連絡する。デイアーチェはかなり渋っていたが、何とか説得した。電話を終えた三人によれば、なのはたちは夕食の後に来てくれるらしい。

「それじゃあ僕たちもご飯にしよう。お腹減ったし」

「そうですね。……コンビニのお弁当ですが」

温めてきます、とシユテルがキッチンへと向かう。それに続いてシユウもキッチンへ

向かい、飲み物を用意するついでに全員の水筒にお茶やジュースを入れておく。いつでも出かけられるように。

夕食の後、なのはたちを待ちきれないレヴィとユーリの要望もあつて近くの公園へ向かった。

誰もいない街。人気のない公園。その中央で、シユウは水の入ったバケツとライターを準備する。レヴィとユーリが期待に胸を膨らませ、きらきらとした瞳でシユウの準備を待っている。シユテルはバリアジャケットの姿で、手にはルシフェリオン。目を閉じていた彼女だったが、シユウの準備が終わるのと同じぐらいに目を開けた。終わりました、と。

シユテルが行っていたのは広域の結界魔法だ。買ってきたものの中には打ち上げ花火も含まれているが、この近辺で許可されている場所がない。それならばと結界魔法を使つて誰にも迷惑がからないようにした。

「いいの？ 結界魔法なんて使っちゃつて」

管理局の許可も取らずに、と心配したシユウだったが、ディアーチエは鼻で笑うだけだ。

「なぜ奴らの許可がいる。気にすることではなからう」

「そう、なのかな……？」



不安を感じているシュウが正解だった。レヴィとユーリが花火に火をつけようとしたところで、シュテルの携帯電話が鳴り始める。リンディ艦長からです、とシュテルは電話に出た。会話が聞こえるように設定するのも忘れない。

「はい、シュテルです」

『シュテルさん？ こちらリンディだけど。結界魔法を使っているかしら？』

「ええ、使っています。……打ち上げ花火のために」

え、と電話先で言葉に詰まるのがシュウにも感じられた。わずかな沈黙の後、リンディが声押し殺して笑う。あらそう、と朗らかに。

『了解したわ。せっかくだし、後で私たちも行つていいかしら？』

シュテルがちらりとディアーチエを見て、ディアーチエが澁々ながらうなずいたのを確認して、構いませんと返答した。

『ありがとう。それじゃあ、楽しんでね』

通話が切れる。全く怒られなかった。いいのかこれで。

「それじゃあ気を取り直して！」

レヴィが叫び、花火に火をつけた。

手持ち花火をつけて走り回るレヴィとユーリ。危ないよと声をかけたが、聞き入れてもらえなかった。かなりテンションが上がっているようだ。

「元氣だなあ……」

苦笑しつつ、シユウはこっそりとある花火を回収する。一番好きな花火で、これをレヴィたちに譲るのは少しもつたいたい。落ちていて花火をすることができそうにないためだ。

「シユテル。後でこれ、一緒にやらない？」

回収した花火を持ってシユテルへと聞く。静かに花火の光を見ていたシユテルがこちらへと顔を向け、分かりましたとうなずいた。

しばらくしてなのはたちが到着する。はやての方はヴォルケンリッターたちも一緒だ。さすがに人数が多くなりすぎではと思ったが、三人とも追加の花火を買ってきてくれていた。そのすぐ後にリンディとクロノ、エイミイも合流。こちらも近所で買ってきただという花火を持参。

気づけば大人数になっていた。みんなで花火をしてはしゃいでいる。当然ながらかなり騒がしくなってきた。

「……うん。いいことだ」

シユウは満足げに笑う。仲がいいのはいいことだ、と。ただこういった集まりになると自分は輪に入りにくいというのが困ったところでもある。だが見ていて楽しいのでやはり嫌いではない。せめて自分に魔法の才能が少しでもあればと思うが、叶わない願

いだ。

シユテルの姿を探すと、なのはと二人で話をしていた。二人とも手には花火があり、なのはは楽しそうに笑い、シユテルもわずかに微笑んでいるように見える。邪魔するのもし悪いと考え、シユウは一人その場を後にした。

公園から離れ、側の神社へ向かう。シユテルはかなり広い結界を張ったようで、神社の階段を上りきつてもまだ結界の中だった。振り返り、階段の下を見る。そこからは公園を一望することができ、花火の光も確認できる。色とりどりの光が幻想的だ。

そばらくその光景を見ていたが、やがてシユウは公園から視線を外した。持つてきた花火にライターで火をつける。小さな火花が散り始め、ぶつくりと小さな赤い玉ができていく。線香花火だ。その場にしゃがみ、線香花火をじつと見つめる。静かな光で、吹けば消えてしまいそうだ。

一本目が終わり、二本目に火をつける。他の花火ほどの派手さはないが、この静かな花火がシユウは好きだった。

「綺麗な花火ですね。一ついただけますか」

声をかけられ、シユウが驚いて体を震わせる。その振動で線香花火の火が落ちてしまつた。

「あ……」

思わず悲しげな声が漏れてしまう。声をかけたシュテルが少しだけ眉尻を下げ、申し訳なさそうに言う。

「すみません。驚かせてしまいましたか」

「あ、いや……。驚いたけど、気にしないで、まだたくさんあるし」

苦笑しつつ、シュテルに線香花火を渡す。受け取って、自分の隣にしゃがんだシュテルの線香花火に火をつける。小さな火花が静かに散り始めた。シュウも自分の線香花火に火をつける。

「なのはともういいの？ 話をしてみたいだけけど」

「ただの世間話です。お気になさらずに」

そう答えた後、それにしても、と続ける。

「他のものとは違い、控えめな花火ですね」

「うん。僕はこれが一番好きなんだ。……でも人によるだろうし、つまらなかつたら遠慮しないで戻ってね」

一人でも楽しめるものだし。そう言ったが、シュテルは首を振った。花火に目を落とすまま、言う。

「私も嫌いではありません。こちらの方が静かだと思います」

「そう？ それなら嬉しいかな」

それきり、お互いに無言になってしまった。

線香花火を二人でただただ見つめ続ける。風もなく暗い静寂の中、線香花火のかすかな音だけがはつきりと聞こえてくる。線香花火の淡い光が暗闇の中で目立っている。二人はそんな線香花火を、飽きることなくずっと続けていた。

持ち込んだ線香花火を半分ほど終えたところで、シユウは公園へと視線を向けた。相変わらず色とりどりの光が踊っている。ここから見ているだけでも和気藹々としていて楽しそうだ。シユテルへと視線を向けると、不機嫌そうに少しだけ目を細められる。それを見て、少し焦ってしまう。

「な、何も聞かないよ?」

「ならばいいのです」

シユテルが次の線香花火に火をつける。乾いた笑みを漏らしながら、シユウも同じく火をつける。

「シユテル」

「はい」

「ありがとう」

シユテルは何度か目を瞬き、次いで、何のことでしようかと呆れたような声を返してくる。シユウは何でも無いと花火を見つめつつ小声で言った。

さらに時間が経ち、線香花火から火が落ちる。隣ではシユテルの線香花火からも火が落ちたところだった。シユテルの視線を受け、次の線香花火を取ろうとして、

「……あ」

最後の一つだった。それなりに回収してここまで持ち込んだつもりだったが、もう全て使い切つたらしい。少し寂しげにため息をつき、その最後の一つをシユテルへと差し出す。だがシユテルは首を振つた。

「好きなのでしょう？　なら私に遠慮せずに」

「ん……。いや、でも見ていれば同じだし」

「それは私にも言えますが」

「あ、そうだよね」

それもそうだとおなずいたが、どうしても一人だけにする気にもなれない。しばらくシユウが悩んでいると、シユテルが小さくため息をついた。シユテルの手が伸び、線香花火の先を掴む。シユウが驚いていると、シユテルはシユウとは視線を合わせずに言う。

「なら二人で。それならば良いでしょう」

「うん」

シユテルの提案に、シユウは笑顔でうなずいた。二人で同じ線香花火を持ち、火をつ

ける。最後の線香花火が柔らかな光を放ち始める。二人でその様子を静かに見守る。同じ線香花火を持っているため二人の体は密着しているのだが、どちらもそれには気づかない。

そして最後の火が落ちて、二人はそろって満足そうにため息をついた。顔を見合わせ、シユウは笑う。シユテルも少しだけ笑ってくれた。

「それじゃあ戻ろうか」

「そうですね。……ああ、待つてください」

帰り支度を始めたシユウを止め、シユテルは公園へと視線を向ける。何度かうなずき、シユウへと視線を戻した。すぐに片付けを手伝い始める。

「どうしたの?」

「王から現在位置を聞かれました。もう少しそこにいろとのこと。シユウ、こちらへ」

荷物を持って階段へ。シユウもそれに続き、二人は階段に腰を下ろす。未だに意味が分からずにシユウが首を傾げているので、シユテルが公園へと指を指し、教えてくれた。

「もうすぐ打ち上げ花火をするそうです。ここからならきつとよく見えるでしょう」

「ああ……。なるほど。それはいいね」

得心してうなずき、少しだけ楽しみになる。そう言えば公園の花火の光もいつの間

か少なくなっていた。今頃打ち上げ花火の準備中か。

「僕たちは手伝わなくていいの？」

「王が待っていると言ったのです。お言葉に甘えましょう」

「分かった」

うなずいたところで、公園から光が上り始めた。それは天高く舞い上がり、大きな花を咲かせる。花火大会のものと似たものだが、今日は距離がとても近いので迫力が違う。思わず感嘆のため息を漏らしてしまった。

「ディアーチェにはお礼を言わないとね」

「ええ、そうですね」

並んで座り、花火を眺める二人。花火の光で映し出される二人の影。二人の影は寄り添うようにして映し出されていた。

Side : Stern

シユウに手を引かれ、階段を下りていく。暗くて危ないからとのことだったが、飛んで下りれば問題ないのではとも思う。ただ、シユウと手を繋いでいるとなぜか心が温かくなるので嫌いではない。シユウの言葉に甘えて、手を繋いで階段を下りていく。

公園に戻ると、花火を終えたメンバーが後片付けをしていたところだった。ディアーチェがシユウとシユテルの姿を認めると同時に大きく目を見開く、慌ててこちらへと



「ディアーチエが走ってきて、口早に言う。

「戻ったか。そちらの片付けは済んでいるな？」

「もちろん」

「ならば先に帰れ。夜食の準備を頼む。さっさと行け」

半ば追い出されるような形で二人は公園を後にする。眉をひそめ、二人で顔を見合わせる。お互いに意味が分からずにただただ首を傾げるしかない。

とりあえずは指示に従おう、その結論に達し、二人はマンションへと歩き始める。その後ろ姿をディアーチエが見守っているが、そんなことに二人は気づかない。

ずっと手を繋いでいたことに二人が気づいたのは、マンションにたどり着いてからだった。

## 第二十七話 マテリアルズ

「お出かけお泊まり温泉だー！」

バスの車内でレヴィの声が響く。真後ろに座るシユウは苦笑するしかない。あまり人の乗っていないバスだが、数少ない乗客たちは心の広い人ばかりらしく、元氣ねえと笑ってくれている。

現在、五人は温泉旅行に向かう途中だ。発案は温泉特集を見ていたユーリ。場所などの計画を決めたのはディアーチェだ。せっかくだから遠出をするかとの案もあったが、初めての温泉ということもあり、海鳴市の郊外にある温泉に向かっていた。

シユウはその話を聞きながら、その間は会えないと少し寂しく思っていたのだが、気づけばメンバーに組み込まれていた。嬉しいのだが、自分が邪魔していいものかとも思っている。一度シユテルにも聞いたのだが、今更何をと呆れられてしまった。

レヴィの声が少しずつ大きくなっていく。我慢の限界がきたのか、レヴィの前に座るディアーチェが叫ぶ。

「やかましー！」

レヴィの声が瞬時に消え、目の前から悲しげな気配が漂ってくる。どうしたものかと思うが、自業自得とも言えるのでシユウは何も言えない。他の席からは忍び笑いまで聞こえてくる。

そんな一行を乗せたバスは、昼過ぎには旅館に到着した。他の乗客が全員降りるのを待つてから、シユウたちも下車する。旅館の玄関に向かうと、従業員が出迎えてくれた。「予約をしているハラオウンです」

シユテルがそう言うと、従業員が部屋へと案内してくれる。

旅館の予約をしてくれたのはリンディだ。自分たちでは外見的に難しいということもあり、シユテルがリンディに依頼していた。快く引き受けてくれた上、どう説明したのか当日は自分たちだけで大丈夫なようにしてくれたりらしい。

案内された部屋はそれなりに広い部屋で、五人で寝ても問題ない広さがある。一先ずシユウは自分の寝床を確保するため、部屋の隅に自分の荷物を置いておく。予算の都合上一部屋だけなのは仕方ないと思うが、さすがに女の子たちの中で寝るのはかなり気まずい。自分の布団はできるだけ隅にしてもらうとしよう。

「おお、お菓子がある！」

レヴィが部屋の中央のちゃぶ台に向かう。見ると上には小さなかごにちよつとしたお菓子が入れられていた。早速レヴィが一つ口に入れ、幸せそうな表情になる。次いで

ユーリも食べ、おいしいですと喜んでいた。

「言っておくがお菓子のかわりは有料だ。あまり買えぬからな？」

ディアーチエがそう言うのと、レヴィとユーリが残念そうに肩を落とした。それを見たディアーチエが、

「いや、まあ少しぐらいは頼んでやるから……。ええい！ そんな顔をするな！」  
かなり慌ててそう言った。

Side:Levi

お菓子を食べながら、レヴィはかごの隣に置かれていた館内説明書を手に取った。なにやら難しいことが前半部分に書かれているが、そこは飛ばす。あとでディアーチエかシユテルが読むことだろう。後半の館内施設一覧を見て、ある一室に目をとめる。卓球台。

——タツキユウ？ 何かテレビで見たような……。

むむむ、と唸りながら記憶を探る。すぐに思い出した。小さな玉を小さな木の板で打ち合う遊びだ。そう、遊びだ。

「シユウ！」

行動は迅速に。呼ばれたシユウがびくりと体を震わせ、自分を見る。どうしたの？

と笑顔で聞いてくる。

「タツキユウ!」

「……やりたいの?」

「うん!」

シユウがうなずいてくれる。すぐにダイアーチェとシユテルに、少し行つてくると告げる。二人はレヴィが放り投げた館内説明書を拾つて読んでいたところで、どうぞと言つただけだった。

「それじゃあ出発!」

「はいはい……つて、引つ張らないで! 行くから!」

「いつてらっしやい」

シユウの手を取つて走り出す。後ろからユーリの声が小さく聞こえた。

シユウから卓球についての説明を聞き、従業員から道具を借りてさっそく遊んでみる。シユウが打つた小さなボールを全力で打ち返すと、ボールはシユウの顔面横を飛んでいつて壁に当たった。

「……レヴィ。ルールは……覚えてる?」

「うん。ごめん」

「結構怖かった。今のは怖かった」

「……ごめんね？」

シユウの表情はかなり引きつっている。どうやら本当に怖かったらしい。申し訳なくなつて謝ると、シユウは苦笑しただけだった。

再びシユウがボールを打つ。レヴィも今度は手加減して、しっかりと相手のコートにボールを返す。そしてラリーを続けていく。軽い音が響き、それがとても心地いい。

「もう少し早くぐらいいなら何とかなるけど、続ける？」

「うん！」

元氣よく返事。そしてラリーの応酬を始めた。

どれぐらい続けただろうか。汗だくになつたシユウがもう無理と言つたところで中断した。

「シユウ、もうちよつと鍛えた方がいいよ？」

「うん……。自覚はしてる。ごめんね」

「でもま、楽しかったから良しとしとく！」

「あはは……。そう言つてもらえると、付き合つた身としては嬉しいかな」

シユウが立ち上がり、側の自販機に向かう。

「何か飲む？」

「オレンジジュース！」

「了解」

シユウは自販機からオレンジジュースを二つ購入し、片方をレヴィに渡してくれる。二人で飲んで、一息つく。ほどよく疲れているのでいつもより美味しく感じられた。

「シユウ。今日は来てくれてありがとう」

「ん？ どうしたの急に」

「言っておきたかっただけだよ」

レヴィが笑顔でそう言うのと、シユウは首を傾げていた。

Side : Dear che

ユーリとシユテルは館内を一回りしてくと出かけたため、ディアーチェは部屋で本を読んでいた。自分もついて行こうかとは思ったが、レヴィとシユウが戻ってくる時のために留守番をしている。

「む……………」

扉の方から音が聞こえ、そちらを見やる。シユウが戻ってきたところだった。ディアーチェが一人だけなのを見て、シユウは少し驚いているようだった。

「戻ったか。レヴィはどうした？」

「館内を探検してくるってさ。飽きたら戻ってくると思うよ。…………迷子になってなけれ

ば」

「まあ大丈夫であろう」

シユウは自分の荷物から本を一冊取り出すと、ダイアーチエの向かい側に座った。読み始めようとしたシユウを見てみると、お互いに視線が合ってしまう。シユウが首を傾げるので、何でも無いと手を振った。

「温泉まで来たのにやることは変わらんなど思ったただけだ」

「あはは……。遠出なら観光地を巡ったりとか考えるけど、郊外とは言え地元だしね」  
「うむ」

自分もあまり外に出ようとは思えない。結局は普段通りというわけだ。たださすがにずっとここにいるというのももったいないので、後ほどユーリと散策ぐらいには行こうかとは思ふ。そこまで考えて、ふと思う。シユウはここにいていいのかと。

「シユウは出かけぬのか？」

「ん？ まあ、一人で出歩いてもね。それとも一緒にどこかに行く？」

「……いや、遠慮しておく」

残念、とシユウが笑う。どこまでそう思っているのか自分には分からない。シユウが本に視線を落としたので、自分も読書を再開した。

しばらく読み耽り、シユウが本を置いた音がしたので顔を上げると、大きな欠伸をし



たところだった。思わず笑ってしまうと、シユウも照れたように笑う。

「せっかくなのだから温泉でも入ってきたらどうだ？」

「んー……。あとでのんびり浸かりたいなあ……」

「そうか」

そこで会話が途切れる。シユテルは無言の時間もいいものだと言っていたが、自分としてはどうしても気になってしまう。何か言葉を発さなければと思い、すぐに一つ思い当たった。

——二人でいられる間に言っておくか。

ディアーチェも本を置くと、シユウが怪訝そうに眉をひそめた。

「あれ？ もういいの？」

「ああ。先に一つ言っておこうかと思っただけ……」

シユウが首を傾げる。ディアーチェは姿勢を正すと、しっかりとシユウと向き合っただ。

「いつもありがとう。感謝している」

シユウが驚いて目を見開く。その様子を見て、ディアーチェは顔が赤くなるのを感じてそっぽを向いた。本を手に取り、表情を見られないように顔を隠す。しばらくして、シユウの声が聞こえてきた。

「驚いた……。でも、なにが？ お礼を言われるようなこと、してないよ？」  
「そんなことはない」

視線だけをシユウに向ける。シユウは意味が分からずに首を傾げている。

「お前が我らの元を訪ねてくるようになってから、我らの生活にはまた色がついた。ユーリやレヴィなどはお前が来るのを楽しみにしているほどだ。それだけで十分感謝する理由にはなる」

「そう言ってもらえると嬉しいけど、僕は何もしてないんだけどね。ご飯とかご馳走になってるし。でも……。どういたしまして、でいい？」

「うむ……。二度は言わんからな！」

「あはは。うん。でもしっかり覚えておくよ！」

シユウが満面の笑顔で言つて、ダイアーチェはくつとのを鳴らした。立ち上がり、シユウの元へ。きよとんとしているシユウの腕を取ると、

「ここにいる暇があるならシユテルでも探してこい！」

半ば追い出すようにしてシユウを室外へと追放する。シユウの困惑の表情が見えたが、気にしないことにする。

「……まったく……」

ダイアーチェは自分の席に戻ると腰を下ろし、そしてわずかに頬を緩めた。

S i d e : Y u r i

シユテルと途中で別れ、ユーリは旅館を囲んでいる森を歩いてきた。すっかりと整備された道で、この道は旅館の周りを一周するように造られている。簡単な散策ができるようにと造られているようだが、ユーリ以外に人はいない。

「……あ」

反対側から歩いてくる人影があつた。シユウだ。うつむいて、難しい表情で何かをつぶやいている。

「シユウ！」

呼ぶと、反応を示した。顔を上げたシユウと視線が合う。シユウはユーリの姿を認めると、優しい笑顔を見せてくれた。

「やあ、ユーリ。シユテルは一緒じゃないの？」

「はい。途中で別行動になりました。今は散策中です」

「なるほどね」

うなずきながらシユウはユーリの元まで来ると、そこで反転、ユーリと並んで歩く。ユーリが不思議そうにしていると、

「二人でいても退屈だし、一緒に行くよ」

そう言つて、ユーリのペースに合わせて歩いてくれる。ユーリは少しだけ嬉しくな

り、自然と笑顔になっていた。

シユウと並んでのんびりと歩く。時折足を止めては木々や草花を観察する。そのたびにシユウも立ち止まってくれ、一緒になって見てくれていた。

「静かですね。鳥の鳴き声がよく聞こえます」

「そうだね。まあ今は夏休みとはいえ、平日だからね。本当ならもつと賑やかかも」

「それも楽しそうです」

少なくとも心細さを感じながら一人で黙々と歩くよりはましだろう。先ほどまでは実はシユテルと別れたことを後悔していたので、シユウが来てくれて本当に良かった。

所々で草花を観察し、道中は他愛ない話をしながら歩いていると、いつの間にか旅館まで戻ってきていた。そのことに寂しさを覚えながら小さくため息をつく。そのユーリの様子を見ていたシユウは、ユーリの頭に手を載せてきた。怪訝そうにシユウを見ると、

「また今度、散歩でもしようか。今度はみんなと……ディアーチェも一緒に」

「はい！ 是非！」

シユウの誘いに、ユーリは嬉しそうにうなずいた。ディアーチェと一緒に楽しむより楽しい。シユウは少し眠たいのか欠伸をし

並んで部屋に戻りながら、ユーリはシユウを見る。シユウは少し眠たいのか欠伸をし

ていた。

「あの……。シユウ」

「ん？」

「ありがとうございます」

ぴたり、とシユウが立ち止まった。またかといった様子で苦笑している。ユーリは怪訝そうにしながらも、言葉が続けた。

「いつも一緒にいてくれて。みんなを支えてくれて。ありがとうございます」

シユウは少し考えるような仕草をして、次いで天を仰ぐ。すぐにユーリへと顔を向け、やはりいつもの笑顔で言う。

「むしろ僕が支えてもらってるよ。こちらこそありがとう」

シユウの言葉にユーリは満足して、シユウの手を取ってまた歩き出す。今頃はもうシユテルも戻っているだろう。嬉しそうにシユウの手を握りながら、部屋まで楽しそうに歩いて行った。

### Side : Stern

夕食後に温泉に入ろうということになった。全員で支度をして温泉に向かう。浴室の前でシユウと別れ、中に入る。レヴィが真っ先に着替えを済ませ、温泉へと駆けだし

た。

「いっちゃん！」

元気な叫び声が聞こえ、すぐに大きな音が聞こえてくる。その直後にはいつも通りの、ディアーチエの怒鳴り声が響き渡った。

四人で体を洗い、湯船に浸かる。少し熱めのお湯が自分にはちょうどいい。一息つく  
と、すぐにレヴィとユーリが別の湯船へと向かっていった。それなりの種類があるが全  
て一通り入ってみるらしい。

「王はどうするのですか」

「我はここにいいい」

ディアーチエはため息とともにそう言う。かなり無防備な姿で、このような姿を外で見  
るとは思わなかった。

「ところでシュテルよ」

呼ばれ、振り返る。ディアーチエが入り口の反対側を指さしていた。

「露天風呂があるようだが、行ってみてはどうだ？」

シュテルもそちらを見る。ガラス戸があり、露天風呂はこちら、という張り紙があつ  
た。シュテルはしばらく考え、やがてうなずいた。自宅では露天風呂は体験できない。  
一度行ってみるのもいいだろう。

「では行ってきます」

「うむ。おそらく我らは先に戻る」

「はい。分かりました」

すぐに戻ってくるつもりだったが、とりあえずは何も言わずに露天風呂へ向かうことにした。

ガラス戸を上げ、シユテルは少しだけ目を瞠った。石などで造られた湯船はかなりの広さだ。それを囲うように竹で造られた高めの壁がある。空は満点の星空だ。

「なるほど。これは素晴らしい」

うなずいて、湯船へ向かう。つま先を湯に入れたところで、

「へ？」

そんな間の抜けた声が奥から聞こえてくる。見ると、湯船の奥でシユウが呆然としてこちらを見つめていた。なぜここに、と思つて一度振り返る。入り口は二つ。男湯と女湯にそれぞれ繋がっている。つまりは混浴。

なるほど、と一つうなずき、シユテルは迷いなくシユウの元へと向かう。我に返つたシユウが顔を真っ赤にして慌てて意味のない動きをしているが、どうかしたのだろうか。

「失礼します。どうかしたのですか？ シユウ」

「あ、え、そ、あ、う、あー……」

言葉になっていない。シユテルは首を傾げつつ、シユウの隣に腰を下ろした。シユウが体を強ばらせたのだが、シユテルはそれに気づかない。一息ついて、星空を眺める。

「あ、あのさ……シユテル……」

ようやくシユウがまともな言葉を発した。シユテルがシユウを見ると、しかしシユウはそっぽを向いていた。

「こ、ここは混浴……だったんだね……」

「そのようですね」

「ぼ、僕はすぐに出るから……!」

慌てて立ち上がるシユウ。歩き去ろうとするシユウの手を掴み、それを止める。シユウが振り返るが、相変わらず視線だけはこちらを見ようともしない。

「どうしたのですか? ……私が何かしてしまいましたか?」

そう問うと、シユウは勢いよく首を振った。内心で安堵しつつ、では何故と問いかける。

「……恥ずかしいから……」

「……は……」

それきり黙り込むシユウ。シユテルもしばらく固まっていたが、やがて薄く微笑ん



だ。シユウの手を引き、隣に座らせる。やはりシユウはこちらを見ようとはしない。

「何を気にしているのかは知りませんが……。少し付き合ってください」

「うう……。了解……」

観念したのか、シユウは口元までお湯につかりながら言った。

しばらく話を続けていると、シユウも慣れてきたのか少しはこちらと視線を合わせるようになってきた。それでも下手に下を向けないのはやはり恥ずかしさ故か。一応体にタオルは巻いているのだが。

「なんだか今日はみんなにお礼を言われたよ。僕の方が言わないといけないのにな」

そんなことを苦笑しながら言ってくる。そんなことがあったのかとシユテルは少し驚いていた。レヴィやユーリならともかく、デアーチエが素直に感謝の言葉を口にするなどほとんどないことだ。

「ではせっかくですし」

「え？」

「私からも、ありがとう、と言っておきます」

「……何に對して？」

不思議そうにそう聞いてくる。シユテルは目を閉じ、言う。

「私と友達になっていただいて、ありがとうございます」

シユウが驚いて目を丸くする。シユテルは満足したのかゆっくりと息を吐くと、立ち上がった。お先に、と声をかけてガラス戸へ向かう。

「シユテル！」

シユウの声。シユテルが振り返ると、シユウも立ち上がった。こちらをまつすぐに見ていた。

「僕の方こそ！ 友達になってくれてありがとう！」

それを聞いたシユテルは、珍しく満面の笑顔を浮かべた。それを見て目を大きく見開いているシユウを残して、シユテルは露天風呂を後にした。

S i d e : H e r o

誰か助けて。

心の中で助けを求めるシユウ。しかしそれを聞き入れてくれる人は誰もいない。むしろ今回ばかりは、シユテルたちが完全に敵だ。紛うことなき敵だ。

就寝時、シユウは当初の計画通り部屋の隅に布団を移動させ、そこで寝ようとしていた。しかしそれを許さなかったのがレヴィ。

「シユウ！ なんてそんな遠くで寝るのさ！」

その声に他の三人が気づき、布団が移動される。初めは五つ並んだ布団の端だったの

だが、

「寝ている間に逃げたりしそうですねー」

ユーリの何気ない一言によって、自分の布団は真ん中になってしまった。

「いやいやいやいや、恥ずかしいよ本当に……!」

「今更何を言うておるか。シユテルの膝枕も体験済みだろう?」

「それとこれとは話が……。どうして知ってるの!」

「え? 言っではいけませんでしたか?」

「まさかの本人からの報告か! 穴があつたら入りたい……!」

そんな一騒動を経て、現在シユウはど真ん中で布団に入っている。もちろん間違ったことが起こるわけがないのだが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

「すみません、シユウ。嫌でしたか?」

シユテルの小さな声。そちらを見ると、布団に潜っているシユテルと目が合った。シユウはどう答えたものか迷って、すぐに苦笑して首を振った。

「本当にただ恥ずかしかっただけだから。気にしないで」

そうですか、と目を閉じるシユテル。シユウも諦めて眠りにつこうと目を閉じる。しかしすぐに目を開けて、小声でシユテルを呼んだ。

「はい」

返事が返ってくる。シユウは目を閉じて、言う。

「みんなにお礼を言われたから、僕も言っておくね」

「はい」

「僕と出会ってくれてありがとう。シユテルと会えなかつたら、きつと僕は今も家で一人でいたから」

全ての始まりに感謝する。例えこの先何があろうと、何に巻き込まれようと、それだけは変わらない自分の本心だ。シユテルはしばらく黙っていたが、

「（こちら）そ、どういたしまして」

そんな優しい声が返ってきた。それを聞いたシユウは少しだけ照れて笑う。幸せな気持ちに浸りながら、シユウはゆっくりと眠りへと落ちていった。

## 第二十八話 心

「お邪魔します」

そう言いながら、シュウはマンシヨンのシユテルたちの部屋に入った。先ほどインターホンを押したのだが反応がなかったため、もらっていた鍵で開けて中に入る。中からしつかりと鍵をかけて、リビングに向かう。

誰かが帰ってくるまで本でも読んでおこうかな、とそんなことを考えながら何の警戒もせずリビングに入ったため、人影があることにはかなり驚いた。いつもの自分の席、その隣に座っているのは他でもないシユテルだ。泥棒かと疑っていたため、シユテルの姿を認めて安心する。

——どうして出てくれなかったのかな。

「シユテル？」

呼びかけてみるが、反応はない。そつと前へ回り込んでみると、本を開いたまま整った寝息を立てている。珍しいなと思いつつ、シュウはシユテルを起こさないように自分の席に座った。持ってきていた本を開いて読み始める。

静かな部屋で、シユウは一人本を読み進める。聞こえてくるのは隣からの寝息だけだ。時折そちらへと視線を向けるが、シユテルが目覚ます気配はない。シユウはシユテルの寝顔を見て、少しだけ頬を緩めた。

遠慮がちにシユテルの手に触れる。やはり反応を示さない。

「……………」

シユウはシユテルの手にそつと触れたまま、シユテルの顔をじつと見つめる。しばらく見た後に目を閉じ、自分の心と向き合う。

おそらく自分はシユテルのことが好きなのだろう。まだまだ短い生なのでこれが恋愛感情だとは明言できないが、シユテルと一緒にいるだけで心が安らぐし、できるならばこの先もずっと一緒にいたい、隣にいてほしいと思う。

——思うだけなら……自由だよね……。

シユウは小さくため息をつくくと、背もたれにもたれかかった。ゆっくりと息を吐いて、自嘲する。こんなことを自覚して何の意味があるのか、と。

シユテルのことが好きだ。しかし、シユウはその気持ちを告げようとは思っていない。シユテルたちには魔法の力があり、管理局内でも重宝されるほどの力だと聞く。本人たちは管理局に正式に所属する気はあまりないようだが、それでも今後も魔法と関わらないということはないだろう。

逆に自分には魔法の才能はない。魔力も持っていない。魔法と関わることはできない。その道に進もうとしても、シユテルたちの足を引つ張るだけになるだろう。四人とも自分のことを家族だと言ってくれてとても良くしてくれているが、足手まといになることだけは避けたかった。シユテルたちには自分の道をしっかりと歩いてほしい。

自分の感情をシユテルに告げれば、常は無愛想だが心根は優しい彼女だ。おそらく自分の道にシユウも連れて行ってくれるだろう。

シユウを守りながら。

人を背負ってどこまで進めるのか。当然一人で進むよりも短いに決まっている。シユテルの足枷になるぐらいなら、こんな感情は封じてしまう方がいい。

この感情は、この気持ちは、ずっと心に秘め続けよう。彼女たちの未来のために。

——まあ、シユテルが僕のことをどう思っているかは知らないけど。

苦笑しつつシユテルを見る。無防備な寝顔。いつも無表情だが、時折見せてくれる笑顔がシユウは好きだった。

シユテルの隣に居続けることはできない。それは分かっている。だが、せめて。彼女たちが地球にいる間だけは隣にいたい。諦め切れていないだけのただの自己満足だろうが、それはシユウの嘘偽りない気持ちだ。

——この生活がもう少しだけ続きますように。

そう願ひながら、シユウはいつの間にか襲つてきていた眠氣に身をゆだねた。

S i d e : S t e r n

シユテルは目を覚ますと片手に温もりを感じ、少し驚いた。そちらを見るといつの間に来ていたのかシユウがいて、シユテルの手を遠慮氣味に握つて眠つてゐる。少しだけ呆れつつも、自然と頬が緩む。

毛布でも取りに行こう。そう思つて立ち上がろうとしたが、すぐに思い直した。シユウは自分の手を握つてゐる。このまま行けば起こしてしまうかもしれない。そう考え、シユテルはシユウが起きるまで読書を再開することにした。

片手で本を開き、視線を落とす。だがどうにも落ち着かず、すぐにため息をついて本を閉じた。テーブルに置いて、またため息をつく。

隣のシユウはよく眠つてゐる。その寝顔を見ていると安心できる。理由は分からな  
いが。

ふと思ひ出す。以前リンディから聞かれたことがある。シユウのことをどう思つて  
いるのかと。その時は質問の意味が分からずに首を傾げていると、リンディは苦笑いを  
浮かべて何でも無いと手を振つてゐた。

シユウの顔を見る。片手から伝わる温もりを意識する。それだけで心が安らぐ。



自問する。自分はシユウをどう思っているのか。

最初はただの共通の趣味を持った友人、だったのだろう。それがいつの間にか、一緒にいる時間が長くなっていった。今では、戦闘中などはともかく、自宅などでは隣にいないければ落ち着かないとすら感じてしまっている。

——何なのでしょ、この感情は。

自分で自分の感情が分からない。本当に自分はシユウをどう思っているのか。自分が聞きたいぐらいだ。なのはと模擬戦の後に聞いてみた時など、どうにも答えにくそう、複雑な表情をされてしまった。

シユウをどう思っているのか。一言で言ってしまうえば好きだ。王やユーリ、レヴィ、それになのはもちろん好きだ。だが、どうにも好きの意味が違うような気もするが、言葉にはできない。

しばらく自問を続けていたが、やがて小さくかぶりを振った。自分では答えを出せそうにない。それに急いで答えを出す必要もないだろう。この世界に住むシユウとはいずれ別れることになるのかもしれないが、その時まで隣に居てくれていれば十分だ。

そう結論づけたところで、シユテルはさてどうしたものかと悩んでしまう。本を読もうとしても集中できず、かといってシユウはいつ起きるか分からない。テレビを見ようかとも思ったが、この時間の番組はあまり興味がない。

しばらく考えて、また隣のシユウを見る。とても気持ちよさそうに、幸せそうに眠っている。

——私ももう少しだけ、休みましようか。

シユテルはシユウの手をしっかりと握る。その温もりを確かめるために。手放さないように。そうするだけで、不思議な安心感に包まれる。その安心感に身を委ね、シユテルはそつと目を閉じた。

S i d e : D e a r c h e

「……何だこれは」

帰宅したディアーチェの第一声がそれだった。

今いる場所はリビングだ。シユウとシユテルが寄り添うようにして眠っていた。二人とも、何とも幸せそうに眠っている。シユウはともかく、シユテルのこのような姿を見るのは珍しい。これも変化かと思いつつ、いいことだとも思う。

ディアーチェは毛布を取つてくると、二人に掛けてやる。一人満足そうにうなずき、ディアーチェはリビングの電気を消した。そのままキッチンへと向かい、冷蔵庫の中身を確認する。

今日の夕食はシユテルが作ることになっていたが、せつかく二人で仲良く寝ているの

だ。今日は自分が作ろう。そう考え、ディアーチエは料理を始める。途中でユーリとレヴィが帰ってきたが、リビングを見るとディアーチエの考えを察したのか、ユーリは黙ってキッチンに来て自分を手伝ってくれる。レヴィもせっかくお昼寝しているのだからキッチンに来て手伝いを始めた。

「ようし！ 王様、ボクは何をすればいい？」

「うむ。とりあえず静かにしておれ」

「……………」

無言で肩を落とすレヴィ。ユーリが笑いながら、一緒にやりましょうとレヴィを連れて行く。二人でジャガイモの皮むきを始めた。

ディアーチエはリビングに視線を移す。暗い室内で、シユテルとシユウが眠っている。まだ眠っていることを確認して、仕方ない奴らだ、と不機嫌そうに悪態をつく。そんなことをつぶやくディアーチエは、誰にも見られないように淡く微笑んでいた。

## 第二十九話 因果

「今日は自信作だ！ 心して食せ！」

海鳴市の外れにある広い公園、その隅の広場でディアーチエが腕を組んでそう言った。ビニールシートが広げられたその上には、弁当の箱がいくつも並べられている。それら数多くの品を見て、レヴィとユーリは瞳を輝かせていた。

夏休みも残すところあと二週間弱。ユーリ発案、ディアーチエ計画のもと、一行は少し遠出のピクニックに来ていた。出発時の天気は快晴。ピクニック日和である。

朝に出発して、電車に一時間以上揺られ、駅からさらに一時間歩く。二時間以上の時間をかけてたどり着いた自然公園は、遊具などはほとんどない、大勢で遊べる空間があるだけの公園だった。公園の一部区画ではとても長い滑り台などそういったものもあるらしいが、ほとんどはある程度整備されただけの草原だ。

自然公園にたどり着いた時には、すでにいつもの昼食の時間を過ぎていた。レヴィの要望もあり、とりあえずは公園の隅で昼食を取ることにする。

ビニールシートに並ぶのはディアーチエ作のものと、シュテル作のもの、そしてなぜ

かシユウが作った弁当もあつたりする。弁当作りのために朝早くに起こされもした。

円を描くようにビニールシートに座り、シユウが手を合わせていただきまますと言う。それに倣い、シユテルたちも手を合わせた。

「さて、ではまずはシユウの料理の腕がどれほどか、確かめさせてもらおうとするか」  
「いや、期待しないでよ。本当に」

意地悪そうに笑い、ディアーチエがシユウの弁当箱からおかずを一品とつていく。シユテルたちもそれに続き、全員一斉に口に入れる。味わうようにゆっくり租借して、呑み込んで、ディアーチエが複雑そうな表情を浮かべた。

「まずくはない。いや、美味しいのだとは思ふ。だが何かが足りない……」  
「愛情ですね！ テレビでやってみました！」

そう叫んだのはユーリだ。その言葉にショックを受けたようにレヴィがシユウを見て目を伏せる。

「つまりシユウは、ボクたちのことが嫌いってこと？」

「いやいや、ユーリ何言ってるの！ レヴィも真に受けない！」

「じゃあ好き？」

「両極端だね……！ いや好きだけど！ 認めるけど！」

レヴィとユーリが嬉しそうに笑い、ディアーチエが大声で言うなどそつぽを向く。

シユテルはずつと無言だった。

「……シユテル？」

不安になって呼びかけてみる。シユテルは視線を上げると、一度うなずいた。

「シユウ。がんばってください」

「……あ、はい……」

シユテルの口に合わなかったかと肩を落としながら、シユウは自分の作ったおかずを頼張る。次にシユテルのおかずを食べて、大きなため息をついた。続けて食べれば分かる。シユテルの料理に比べると自分の料理はまずい部類に入るかもしれない。シユテルでこれなのだから、デイアーチエの料理と比べるとどうなることやら。

「ですが、私はこの味も嫌いではありませんよ」

そうつぶやくように言いながら、シユテルはシユウのおかずをゆっくりと食べていく。シユウは力なく微笑むと、ありがと、と短く礼を言った。

昼食を終えた後は自由時間だ。レヴィとユーリは海鳴市最長と言われる滑り台を体験しに、デイアーチエはその付き添いとして行ってしまった。昼食の場に残されたのはシユウとシユテルの二人。一緒に片付けをして、今はシユテルからお茶を受け取って少しずつ飲んでるところだ。

本を読んでいるシユテルの隣で、シユウは小さく欠伸をする。風がとても心地よく、

睡魔が襲ってくる。せつかくここまで来たのに、寝てしまうのはもったいない。

「眠たそうですね、シユウ」

シユテルの声。シユウはシユテルを見て、苦笑してうなずく。

「うん。ここは気持ちがいいから……」

「寝てしまってもいいと思いますよ。帰宅の時は起こします」

「ここまで来て寝るのはもったいないかなって」

「なるほど、そういうものですか」

何度かうなずいて、シユテルはまた視線を落とす。シユウは苦笑を返して、また小さく欠伸をした。ついでにぐつと伸びもする。ふと視線を上げた先で、シユウは、ああ、と残念そうな声を漏らした。それを聞いたシユテルがシユウを見る。

「天気が悪くなりそうだね」

シユウの言葉。シユテルはシユウの視線を追って、そしてシユテルもうなずいた。二人が見る先、まだ遠いところだが、暗雲がゆっくりとこちらへと近づいてきているらしい。雨でも降りそうだ。

「王たちに連絡だけしておきます」

「うん。よろしく」

念話の方へと意識を傾けたシユテル。シユウはその様子を横目で見ながら、せつかく

来たのにな、と残念そうにしながら暗雲をぼんやりと見つめていた。

デイアーチェが戻ってきて、少しした頃には雨が降り始めた。なかなか強い雨で、ここから最寄りのコンビニまで走るとびしょ濡れになってしまう。

「参ったな」

デイアーチェが不機嫌そうに言つて、シユウが仕方ないよと笑う。天氣が味方しなかったが、こういう時もあるだろう。通り雨だと判断して、五人はこの場所で、大きな木の下で時間を潰すことにした。

話をしながら雨が上がるのを待つ。だがすぐにシユテルの携帯電話が鳴り、失礼しますと断つて電話に出る。しばらくして電話を切つたシユテルの表情は、とても険しいものになっていた。何となくだが、そうと分かる。

「シユウ。この後の予定は空いていますか？」

突然のそんな言葉。もとより予定などないのでうなずくと、分かりましたとシユテルはデイアーチェたちに向き直る。

「リンディ艦長からです。アースラに来てほしいと」

シユテルの声音から感情が読み取れない。自分を律するかのような、冷たい声だ。その声に、シユウは一抹の不安を覚えた。

雨はまだまだ降り続ける。



アースラに着くと、クロノが出迎えてくれた。クロノはシユウを見ると、悲しげに表情を曇らせる。だが一瞬後には、その感情を隠して無表情になっていた。クロノの案内のもとアースラの廊下を歩いて行く。

「ここだ」

少し歩いてたどり着いた部屋の前でクロノが言って、扉を開ける。その部屋に入つて、シユウは少し驚いた。

部屋は中央にテーブルといすがあるだけの小さな部屋だった。その奥に、艦長であるリンデイがいて、あと二人、シユウを見つめる人物。

「元氣そうだね、父さん、母さん」

ケインとさくらはシユウの声を聞いて、棘のない声を聞いて、思わず笑顔になっていた。何度もうなずき、言う。

「ああ。元氣だとも。……シユウ、今までのことだが……」

ケインの言葉に、シユウは静かに首を振った。

「だいたいは聞いているからいいよ。もうちよつと違う方法をとつて欲しかったけど」

「……すまない」

「まあ、ここに来たからこそシユテルたちに会えたしね」

そう言って、自分の後に入ってきたシユテルたちへと振り返る。シユテルはいつもの

無表情だが少しだけ口の端が持ち上がり、レヴィは照れたように笑う。ディアーチエはそっぽを向いていて、ユーリはその様子を見ておかしそうに笑っていた。

「それで、わざわざ僕を呼び出した理由は？ 別にいいとはいっても、怒ってないわけじゃないよ？」

今更とやかく言うつもりはないが、許すか許さないかで言えば許せない。だからこそ、今更自分の生活を邪魔してほしくないとも思う。連れ戻そうというなら拒否するつもりだ。

だが、リンディから放たれた言葉は、そんな些細な問題ではなかった。

「シユウ君。これからする話を、よく聞いてください」

管理局の協力のもと、ギフトテッドに対する研究は一気に進められた。その切り出しで、両親がゆつくりと話し始める。とても辛そうに、シユウとは視線を合わせずに。

蓄積されていたデータを解析した結果、シユウの周囲で起こっていた異変の原因が判明した。それはとても単純なものだった。

西崎秀一は魔力を有していない。しかしギフトテッドが人の形を取り続ける以上、一定量の魔力は消費し続けているはずだ。ならその魔力はどこから使われているのか。

——外からの魔力。

幼少の頃はギフトテッドそのものに残されていた魔力を使い、人としての存在を維持す

る。残りが少なくなってきたからは、外部から調達する。外部になれば、呼び寄せてしまえばいい。そうして呼び出されたものが今までの異変、強い魔力を帯びた物質が飛来してきたものだ。

海鳴市に来てから異変が起こっていないなかったのは、前回の異変の時に莫大な量の魔力を回収できたため。それがまた枯渇しそうになってから再び異変が起き始める。現在頻発しているロストロギアの飛来だ。

「ではロストロギアの魔力がなくなっていたのは……」

「シユウが吸収したのだろうね。自身の存在維持のために」

ケインの言葉に、シユテルが黙って顔を伏せる。小さな声で、そうなりますか、とつぶやく。その声は少し震えているようだった。

「シユウと異変との因果関係がはつきりした……。してしまった……」

「そして管理局が協力した以上、管理局もそれを把握している」

なるほど、とシユウはうなずいた。どうやら知らないところで、自分の運命が決まっていたらしい。そのことに少しだけ悲しくなるが、だがどこか他人事のように捉えている自分もいる。思わずシユウが自嘲気味に笑うと、クロノがそのシユウへと頭を下げた。

「すまない。こちらとしても、できる限り手を尽くした。だが……」

「異変を起こさずに維持できるなら、監視などはついても今までの生活が守れたのでしようけど……。異変を起こすと、管理局はそれを無視できない……。次に呼び寄せられるものが危険なロストログアではないと、誰も断定できない。だから……。管理局の決定は……」

クロノの言葉を引き継いだリンディが、まっすぐにシユウを見つめる。一切の感情を隠していたが、その瞳が揺れていることに気がついてしまう。

「ギフテッドの、封印処理。それが管理局側が出した決定よ。……。ごめんなさい、シユウ君。本当に、ごめんなさい……」

リンディが頭を下げる。シユウは黙ってその様子を見守っている。

「封印って……。どうして！ どうにかならないのっ？」

そう聞いたのはレヴィだ。答えるのはケインとさくら。

「この決定が出そうになつてからは、どうにかしてこちらから魔力を与える術がないか調べていた。だが……」

「調べた限りでは、見つからなかった。私たちではシユウを救うことはできない……」

さくらが目を伏せる。レヴィがまだ言い募ろうとしたが、ディアーチエがそれを止めた。レヴィの非難がましい視線に、ディアーチエはゆっくりと首を振る。

「当事者であるシユウが何も言っておらんだろう」

二人が、部屋の全員がシユウを見る。シユウは少し考え、シユテルへと振り返る。

「ねえ、シユテル。人に魔力を分け与えることってできたよね」

「はい。やってみますか？」

「うん。お願い」

シユテルがルシフェリオンをシユウへと向ける。淡い光がシユウを包み込む。だがそれらはシユウへと入ることはなく、周囲へと四散して消えてしまった。やっぱりか、とシユウが苦笑して、シユテルも小さくため息をつく。

「貴方の意思に関係なく、ギフトッドそのものが人から魔力を吸収することを拒絶しているのでしょうか。人の子となるために、そうしたのかもしれないね」

「完全に裏目に出てるけどね。恨むよ、当時の僕」

その時は意識すらなかったけど、とシユウは乾いた笑みを浮かべる。どうやら避ける手段は本当にないらしい。シユウはリンデイへと向き直り、言った。

「一週間だけ、時間をください」

リンデイが顔を上げ、少しだけ驚いたようだった。シユウが笑顔で続ける。

「一週間後に大人しく封印されます。逃げません。だからあと一週間だけ、僕に時間をください」

シユウが頭を下げると、リンデイは今にも泣きそうなほどに表情をゆがめた。しっか

りと一度うなずき、答えてくれる。

「分かりました。本局には私から伝えておきます」

「お願いします。それでは」

そう言つて、シユウはきびずすを返す。急ぐようにその部屋を後にした。

Side: Hero

シユウが部屋を出て行く。デイアーチエたちがそれを追い、シユテルはリンディたちへと向き直る。今まで我慢していたのだろう、さくらはその場で泣き崩れ、ケインはそのさくらを抱きしめていた。

「あの子は……私たちを責めなかったわね……」

リンディの声。シユテルは、そうですねと嘆息混じりに返す。

「貴方は、シユウと一緒にでなくてもよろしいのですか？」

シユテルがケインとさくらに問いかける。二人は少し驚いた様子だったが、しっかりとうなずきを返した。泣きそうな表情のまま笑顔を浮かべる二人。

「あの子は、多分君たちと一緒にいることを選ぶだろう」

「だから、あの子と一緒にいてあげて。勝手なお願ひというのは分かつてるけど……」

元よりそのつもりです、と返答してシユテルは部屋を立ち去った。内心の動揺を押し

殺しながら。

リビングで、シユウがいつものように本を読んでいる。その様子は平時と変わらな  
い。死刑宣告も同然の通達を受けたにもかかわらず、シユウはいつも通りだ。

違いますね、とシユテルは内心で首を振った。本を読むスピードが明らかに違う。か  
なり急いで読んでいるようにも見える。

「すまん、シユテル。我らが声をかけても無反応でな……」

そう言ってきたのはディアーチエだ。シユテルは仕方ありませんと首を振り、シユ  
ウの隣に腰を下ろした。シユテルに気づいたのだろう、シユウが少しだけ顔を上げ、だ  
がすぐに本へと視線を戻す。

「何をしているのですか、シユウ」

「読めない本を読んではまおうかなど。もう読めなくなるだろうし」

そうですか、とシユテルはそれ以上何も言えなかった。そつとシユウの手を握ってや  
ると、シユウがびくりと体を震わせる。そしてシユテルを見てきたシユウの目は、ひど  
く怯えたものだった。

「……ねえ、シユテル」

「はい」

「封印ってことは、僕は消えるってことだよな」

「……はい」

「……僕は、死ぬの？」

答えられずに顔を伏せる。封印といっても、ギフトッドが破壊されるわけではない。だが、西崎秀一という人間の自我は完全に失われてしまうだろう。それを死と言わずに何と言うのか、シユテルには思い浮かばない。

「……ねえ、シユテル」

「はい」

シユウの呼びかけ。シユテルはしつかりとシユウを見る。もしも、もしもシユウが自分に助けを求めるなら、それに応えよう。そう心に誓って。

だが、シユウの言葉は違うものだった。

「一週間だけでいい……。一緒に、いても構えない、かな……」

シユテルが目を睜る。少し言葉に詰まったが、しかしシユテルはしつかりとうなずいた。

「はい。もちろんですよ、シユウ」

それが、このきつかけを作ってしまった自分ができる、精一杯のことだ。

例え自分が調べようとはしなくても、異変が起き始めていた以上管理局はいずれシユウに行き着いただろう。それでも、自分の意思がシユウの封印を早めたことに変わりは



無い。そのことをシュウがどう思っているのかと不安になるが……。

——貴方が望むのならば、私はずっと側にいましょう。

シュウの震える手をしっかりと握り、嗚咽を漏らし始めたシュウをそっと抱いた。

## 第三十話 黄昏

翠屋のテーブルで、シユウはシユテル作のケーキに舌鼓を打っていた。アースラから戻った翌日にシユテルにケーキをもう一度食べたいと言うと、驚いたことに一時間後には翠屋と話をつけてしまっていた。申し訳ない気持ちが強いのだが、気にしないようにと何度も言われている。

ケーキを切り分け、口に運ぶ。ほどよい甘さでシユウの好みの味だ。シユウの向かい側では、シユテルがその様子を静かに見守っている。

「あの、シユウ君……」

自分を呼ぶ声に振り返ると、なのはがそこにいた。視線を落とし、何度も口を開けては閉じるを繰り返している。それを見れば、なのはが何を言いたいのか察することができた。

「シユテルから聞いた？」

なのはが驚いて目を丸くする。反対に、シユテルの反応は少し視線を上げた程度だ。

「えっと……。うん。あの、それで……」

「そんなわけで、僕はあと一週間しかいられません。いやあ、短いね!」

おどけた調子でそう言う。なのはが戸惑っている間に、シユウはケーキを大急ぎで食べてしまう。ごちそうさま、と立ち上がると、素早く出入り口へと歩き出す。

「あ、シユウ君……!」

なのはの呼ぶ声は聞かなかったことにして、シユウは翠屋を後にした。

少し歩いたところで立ち止まる。すぐにシユテルが追ってきた。一言も発さないシユウの手を取り、シユテルが歩き出す。

「さて、次はどこに行きましようか」

「……ん。じゃあ次は……」

手を繋いだ二人は街の喧騒の中へと消えていった。

Side: Nanoha

「それ、本当なの?」

八神家のリビング。なのはからの話に、フェイトとはやてが思わず聞き返していた。シユウとシユテルが帰った後、なのははシユテルから念話で聞いた話をフェイトとはやてに話しているところだ。この二人に話すことはシユテルからも許可をもらっている。

「うん。シユテルから聞いた話だから間違いないと思う」

「そんな……。せっかくあの子たちとも仲良くなっていたのに……」

あの四人が現在最も信を置いている人間は、間違いなくシユウだろう。だがそのシユウはあと一週間でいなくなってしまう。管理局の封印によつて。管理局の判断は組織としては正しいのだろうか、あの四人から見ればどう映るだろうか。

「どうにかならんのかな……」

そうつぶやいたのははやてだ。だが、今回ばかりは自分たちではどうしようもないだろう。リンディヤクロノ、ユーノ、それにシユウの両親が解決策を必死に探したらしいのだが、手がかりすら見つからなかったのだ。そういつた知識のない自分たちが見つけれられるはずもない。

三人はしばらく重苦しい空気を共有し、そして同時に、長々とため息をついた。せめてあと一週間、あの子たちの邪魔はしないでおこう。そう心に誓つて。

Side: Hero

楽しい時間ほどあつという間に過ぎていくものだ。

一週間。シユウはその期間を思う存分楽しんだ。シユテルと図書館や買い物に出かけたり、レヴィヤユーリも連れてヒーローショーを見に行き、ディアーチェを交えて夕食の準備などをする。そんな毎日を過ごし、さらにはこの間行つたばかりだというの

に、また温泉旅行に出かけました。

シユテルを始め、皆がシユウのために動いてくれる。いつもの四人だけでなく、要望さえ出せば、管理局やなのはたちも協力してくれる。なのはたちの家に遊びに行った時など、事情を知っているだろうに何も言わずに普段通り接してくれたのは、とてもありがたかった。

約束の日の前日は、シユテルたちのマンションで静かに過ごす。リビングで、トランプや雑談に花を咲かせる。普段と同じように。そして夜は、この日はシユテルのマンションに泊まることになった。

リビングのソファに横になるシユウ。シユテルからは自分の部屋とベッドを提供すると言われていたが、さすがに断っている。シユテルの部屋には興味があったが。

シユウの傍らでは、シユテルが本を読んでいる。寝ないのかと聞くと、まだ起きていますとの答え。

シユウは毛布にくるまり、目を閉じる。今日で終わりだと思うと、恐怖が一気にこみ上げてくる。知らず知らずのうちに体を震わせていると、手に温かいものが触れた。見ると、シユテルが手を握ってくれていた。

「シユウ。もう何度も聞きました……」

シユウが目を閉じたまま苦笑する。この一週間、一日に最低でも一回は、四人の誰か

から聞かれたことだ。

「貴方が望んでくれるなら、私たちは貴方を連れてどこにでも行きましょう。その意思は……ないのでしょうか」

ないよ、と短く答えると、シユテルは小さくため息をついた。

自分が望めば、きっとシユテルたちは本当に自分を連れて逃げてくれるのだろう。ただその先に何が待っているのか分からない。シユテルたちの生活を、自分の都合で奪いたくはない。それが正直な気持ちだ。それに、自分が行く先で、自分が呼び寄せた何かに巻き込まれる人を見たくはない、というのもある。

シユテルの手に少しだけ力が込められる。シユテルを見ているが、特に変化はない。シユウはシユテルの手をしつかりと握り返し、眠りへと落ちた。

「はいでございませぬ」

リンデイの問いかけに、シユウは静かにうなずいた。

約束の日。シユウはアースラに向き、最後は自分の部屋でと願うと、すんなりと希望が通ってしまった。現在いるのは、あのアパートのシユウの部屋だ。読みかけの本がちやぶ台にある。そう言えば読み終えていなかったと今頃になって気がついた。

部屋にいるのはシユウとシユテルたち、リンデイとクロノ、なのは、フェイト、はやて、そしてシユウの両親だ。ヴォルケンリッターや他の管理局の人間は結界の展開など

の雑務を行っている。

「できればもう一つお願いが」

リンディに向かって言うと、リンディが首を傾げてどうぞと言ってくれる。

「できれば……。シユテルたちに封印してもらいたいと」

管理局の面々が目を丸くする。ただシユテルたちは予想ができていたのか、何も言わずにデバイスを展開した。その様子を見ていたリンディが、仕方ないわね、と苦笑する。

シユウが部屋の中央に立ち、シユテルたち四人がその周りに立つ。その間、誰も何も言わない。静かに魔方陣が展開されていく。

「さて、いつでも始められるが……。シユウ、今からでも考え直さんか？」

「ボクたちには気を遣わなくてもいいんだよ？」

「私たちはみんなシユウのことが大好きです。シユウを守るためなら……」

手を上げて、言葉を遮る。シユウが首を振ると、三人は悲しげに顔を伏せた。

「……始め、ますか？」

シユテルの声。その声はどこか震えているようにも聞こえる。シユウが一つうなずくと、淡い光がシユウを包み始める。

「みんな、元気でね」

シユウが思い出したように、自分たちを見守っている面々に声をかける。それに対す

る反応は様々だ。リンディとクロノは頭を下げ、なのはたちは泣きそうになりながら手を振ってくれる。両親は何かを言おうとしているようだが、結局何も言えずにうつむいてしまっていた。

次にシユウは側にいる四人を見る。静かに封印魔法を展開していく四人。

「レヴィ。あまりシユテルやディアーチエに迷惑かけちゃだめだよ。」

レヴィは返事をせずうつむいた。嗚咽のようなものが聞こえてくる。ごめんねと小さく謝ると、次にユーリを見た。

「ユーリは……。もう少しわがままを言えるようになろうね」

「はい……」

涙を堪えながらうなづくユーリ。次に見るのはディアーチエだ。

「ディアーチエ。みんなのこと、よろしく」

「分かっておる」

そう答えるディアーチエの表情は、ない。無表情の仮面を被り、シユウを静かに見送ろうとしてくれている。後のことは心配するな、言外に言われている気がして思わず苦笑してしまった。

最後に、シユテルを見る。無表情のシユテルと視線が合い、どうしようかと少し考える。最も長い時間を共有したので、今更言うことも何もない。



——……いや。

言わずにおこうと思っていたことがある。ただ、これは呪いだ。言えば相手を縛り続ける呪いの言葉だ。だが、それでも、シユウは口にした。消える間際になって、欲が生まれたのだろう。

「シユテル。一つ、頼んでいいかな？」

「何でしようか？」

「僕のこと、忘れないでね」

シユテルが息を呑む。シユウは照れたように笑うだけだ。

「たまにでいいから、思い出してほしいかな。僕のこと」

シユテルはしばらく押し黙っていたが、やがてしつかりとうなずいた。

「もちろんです。絶対に忘れませんよ」

「ごめんね、と小さく謝ると、何がですかと返される。シユテルらしいなと思ってしま  
う。」

「今までありがとう、シユテル。楽しかったよ」

「こちらこそ。とても楽しかったですよ、シユウ」

静かに言葉を交わす。いつもの会話。こんな時だというのに、それがとても心地い  
い。

そして、ゆっくりとシユウの体が光の粒子となって崩れていく。レヴィとユーリが何かを叫んでいるようだが、音はもうほとんど聞こえない。少しだけ恐怖心を持ちながらも、シユウが柔らかい笑顔を浮かべた。

「ああ、そうだ……。最後に一つだけ……」

びたり、と周りの喧噪が止まる。か細くなっているシユウの言葉を聞き逃さないために。

「僕は……」

いたずらっぽく笑う。楽しげに笑う。

「シユテルのことが、好きだったよ……」

シユテルが大きく目を見開くのをぼんやりとした視界の中でもしっかりと捉え、シユウは満足そうに口の端を持ち上げ。

そして、静かな闇の中へと意識を沈めた。

S i d e : S t e r n

シユウが消えてしまった場所に残されたのは、淡く光る小さな宝石。これがギフトエツドなのだろう。シユテルはその宝石をそつと手に取り、胸元に抱き寄せる。

「ずるいですよ、シユウ……」

温かい雫がシュテルの頬を伝い、宝石に落ちて消えていった。

Side: Gifted

暗い、とても暗い闇の中、シユウは意識を取り戻した。周りには何も無い。光もなければ音もない。本当に何も無い空間だ。

なんだろう、これ、と首を傾げていると、唐突に目の前がまぶしくなった。手で目を覆おうとするが、今の自分に手が、体がないことに気づいただけだった。

光がゆつくりと収まり、人の形を取る。長めの金髪に褐色の瞳をした女だった。年は二十代半ば頃だろうか。白衣を着て、不適に笑ってこちらを見ている。

「やあ、ギフトテッド。いや、シユウと呼んだ方がいいかな？ 気分はどうかな？」  
——誰？

声を出そうとするが、出なかった。そのことに申し訳なく思うが、女はすぐにかからうと笑う。

「ちゃんと聞こえているよ。あたしは……いや、名前なんていいか。ギフトテッドを造った者の意識データ、とも思ってくれればいい」

思わず息を呑む。女は楽しそうに笑っている。

「さてさて、これから完全に封印されるわけだけど……。この空間が閉鎖されるまでま

だもう少し時間がある。一緒に暗い闇を楽しもうじゃないか」

何だろこの人は。けんかを売っているのだろうか。これでも怖くて怖くて仕方がないというのに。そしてその心情を読み取ったのか、女はやはり楽しそうに笑っていた。

「まあ怖いだろうね。今の君は人と意識レベルが同じだから。よければ君に、夢を見せようか？」

——夢？

「ああ、そうとも。恐怖を紛らわすことしかできないけどね。どうかな？」

どうしてそんなことを、と思う。一体何を考えているのかと。女は、ふむ、と腕を組んだ。少し考える素振りを見せ、そして言う。

「ただのご褒美だよ。長い期間、ずっとがんばってくれたからね。最後ぐらいは、安らかに眠ってほしいんだ。ほんとだよ？」

優しげに微笑む女。手を伸ばし、両腕を広げる。おいで、と囁きかけてくる。シユウは少し躊躇いながらも、その腕の中へと飛び込んでいく。

「さあ、子守歌を歌ってあげよう。夢を見るために。ゆっくりとおやすみ、私のかわいいギフテッド」

Side: Hero

シユウはリビングで目を覚ました。ソファから起き上がり、欠伸をする。先ほどまで何か夢を見ていたような気がするのだが、思い出せない。

「シユウ。どうかしましたか？」

隣に座るシユテルが首を傾げて聞いてくる。シユウは少し考え、何でも無いよと首を振った。

「そうですか。ではそろそろ夕食にしましょう」

シユテルがテーブルに広がっている料理を指し示す。カレーや唐揚げ、ハンバーグなど様々な料理が並んでいる。

「早く食べないとシユウの分も食べちゃうぞ！」

レヴィの声。カレーライスを食べている。隣ではユーリがハンバーグを頬張っていた。

「ディアーチェのハンバーグは美味しいです！」

ディアーチェは無言。見ると、少しだけ照れたように頬を染めていた。シユウと目が合い、すぐにそっぽを向いてしまう。

「片付けられんだろう。さっさと食え」

シユウは苦笑すると、いただきますと食事を始める。

いつもの夕食。いつもの会話。平和な日常。なんだかそれが、今はとても大切なものを感じる。

夕食が終わり、それぞれが自由に時間を過ごす。レヴィとユーリはテレビを見て、デイアーチエは読書。シユテルは怪訝そうにシユウを見ていた。

「どうかしたのですか、シユウ。機嫌が良いように見えますが」

そうかな、と笑う。確かに、今はとても気分がいい。幸せだな、と実感できている。

だが、そこで不意に睡魔が襲ってきた。大きな欠伸を一つ、目をこする。それを見たシユテルがかすかに苦笑を浮かべた。

「少し休みますか？　心配せずとも、起こして差し上げます」

シユウは少し悩む。今の幸せを手放したくはないなど。だが睡魔には抗えず、どんどんと眠気が強くなってくる。仕方なくシユウはソファに横になった。そのシユウの手に温かいものが触れる。シユテルの手だ。見ると、少しだけ顔を赤くしながらも、シユテルは笑顔でシユウを見つめていた。

「おやすみなさい、シユウ。良い夢を」

その言葉にシユウも笑顔を浮かべる。そしてそっと目を閉じる。

——おやすみ……シユテル……

恐怖感など一切ない幸福感に包まれながら、シユウは眠りへと落ちていく。安らぎの

中へと。

そして、西崎秀一はいなくなった。

Side : Stern

シユテルは主のいない部屋に一人佇んでいた。この世界を離れる前に、もう一度ここに来ておこうと思つたためだ。

シユウがいなくなつてから数ヶ月、桜の舞う季節になつていた。シユウと初めて会つた日からちようど一年だ。まだそれだけの期間しか経っていないことに驚いてしまう。

封印されたギフトテッドはリンディたちに預けられた。今頃はもう研究なども終わり、どこかに静かに安置されていることだろう。

シユテルはそつと目を閉じる。一緒に同じ時間を過ごした友人を思い出す。たった数ヶ月の期間だったというのに、自分の中でシユウは大きな存在になつていた。

「おや、また来てくれていたのか」

背後からの声に振り返る。シユウの父親、ケインがいた。優しいな微笑みを浮かべている。最初に会つた時とは別人のようだ。

「リンディさんから話は聞いたよ。この世界を出て行くそうだね」

「はい。今日の夜に発ちます」

先日、エルトリアという世界からユーリの力を借りたいという姉妹が訪れた。世界を救うためにエグザミアの力が必要だと。それを聞いたユーリが協力を決め、それに自分たちも同行することになった。

——貴方の示してくれた道ですよ、シユウ。

誰かが自分たちの力を必要としているのなら、それに応えよう。それはシユウから言われたことでもあり、あの後皆で決めたことでもある。だからこそ自分たちは、この世界を離れる選択肢を選んだ。

「これを君に」

ケインの言葉に我に返ると、小さな箱を四箱差し出されていた。箱の表面にはそれぞれに自分たちの名前が書かれている。

「実はシユウに頼まれていたんだ。造ってほしいと。私たちが恨んでいるだろうに頭を下げてね。だからそれは、シユウから君たちへの、最後の贈り物だ」

「……そうですか。わざわざ、ありがとうございます」

シユテルは自分の箱をそっと開けた。中に入っていたのはペンダントだ。星形に成形された小さな宝石がついている。シユテルがそれを着けると、ケインは笑顔でうなずいた。

「うん。似合っているよ」



「ありがとうございます」

素直に礼を言う。ケインは笑うと、それじゃあ、と部屋を出て行ってしまった。

シユテルはもう一度振り返る。部屋をゆっくりと見る。片付けられはしたが、あの頃と同じ雰囲気を持った部屋を。

シユテルはそつと目を閉じると、雫を一滴、畳に落とした。

「私も貴方のことが好きでしたよ、シユウ」

ずつと考えていた自分の気持ちだ。その言葉をこの世界に、この場所に置いていく。新たな旅立ちのために。思い出はそつと胸にしまい込む。

「それでは、さくらばです」

シユテルは優しげに微笑み、静かに告げる。きびすを返し、その部屋を後にする。胸元のペンダントが日の光を受けて少しだけ輝いた。

主のいなくなった静かな部屋に、今日も夕焼けの光が降り注ぐ。

その光を受ける者は、誰も居ない。

## 第三十話B 黎明

暗い暗い夢の中、シユウは静かにそれを見つめていた。

終わっていく世界。世界が崩れ、消えていく光景。そして自分の隣には、見知らぬ人影。

——お前のせいじゃないよ……。

人影が言う。姿をよく見ようとしても、真つ黒な影で分からない。

——さあ、おいで。あたしのかわいいギフトッド。

人影に連れられて、シユウはその場から姿を消した。

S i d e : S t e r n

泣き疲れたのか、シユウはソファで眠っている。その様子を見つめ、シユテルは一人ため息をついた。どうしたものかと考えるが、自分ではどうすることもできないと分かっている。またため息をつき、シユテルは立ち上がった。毛布を持ってきてそれをシユウにかけてやる。おそらくこのまま朝まで目を覚まさないだろう。

シユテルは部屋の電気を消し、ソファに座り直した。暗い室内の中で考える。

できれば、シユウを助きたい。それが本音だ。だがシユウを助けるためには、その根本の問題を解決しなければならぬ。シユウを連れて逃げる、という選択肢は、シユウが受け付けないことだろう。故に見つけるべきは、ギフトッドに魔力を与える方法だ。「考えていても仕方がありませんね」

シユウを落胆させることになるだろう。今はそれでも構わない。彼を助けるために彼に嫌われる道を選ぼう。シユテルは寂しげにうなずくと、そのまま目を閉じて眠りに落ちた。

翌日。シユテルは朝食の準備を済ませ、シユウの起床を待つ。目を覚ますのはまだまだ先だろうと思っていたが、意外と早くに目を覚ました。目をこすり、シユテルを見つめてくる。

「……おはよう、シユテル」

「おはようございます、シユウ」

挨拶を交わし、朝食を用意する。バターを塗ったトーストにコーンスープと簡単に食べられるものだ。シユウは出された朝食を、のんびりと食べていく。

「ディアーチェたちは？」

「まだ部屋にいます。もう起きてはいると思いますよ」

実は念話でしばらく話をさせてほしいと頼んである。快諾してくれているので、王た

ちがりビングに来るのはもう少し後だろう。

「そつか。さて、と……。今日はどうしようかな……」

ぐつと伸びをして笑うシユウ。そのシユウへ。シユテルは真剣な面持ちで切り出した。

「シユウ。お願いがあります」

「ん？ なに？」

「貴方の一週間を、使わせてください」

意味が理解できずに首を傾げるシユウ。シユテルはそれ以上は言わず、じつとシユウを見つめる。やがて少しずつ意味を理解してきたのか、シユウの表情は悲しげなものになっていった。それを見ると胸が締め付けられるようだが、こちらも譲れない。

「何をするの？」

「貴方を助ける方法を探します」

それを聞いたシユウは、力なく微笑んだ。どうにも反応に困っているようだ。

「別に、いいよ？ それよりも僕は……」

「お願いします、シユウ」

頭を下げるシユテル。シユウは驚いたように目を睜り、やがて苦笑した。

「分かった。ありがとう、シユテル」

「いえ……。こちらこそ、ありがとうございます。シユウ」

その日の昼頃、シユウの見送りを受けつつ、シユテルはアースラへと転移した。

「よろしく願います、師匠」

「いやだから師匠はやめて……」

管理局の無限書庫。シユテルはそこに来て、ユーノと会っていた。無限書庫を移動しながらの会話で、ユーノは引きつった笑みを浮かべている。

「ナノハの師匠なのですから、私の師匠でもあります」

「どういう理屈なの、それ！ いやもういいけど……」

諦めたようにため息をつきつつも移動は続ける。シユテルもそれを追い続ける。

ユーノに案内してもらったのは小さな部屋だ。テーブルとすが一つずつ、そして大量の書物が床に山積みされている。ユーノはシユテルを部屋に入れると、しっかりと扉を閉めた。

「管理局の人たちが調べていた本はあその一角。ギフトッドに関する記述が明確にあるものだよ。あっち側が今日集めてきたもので、ロストログア全般の資料。これでいいかい？」

「はい。ありがとうございます」

「うん。なのはにも協力してあげてほしいって頼まれてるしね。何かあったらいつでも

呼んでほしい。あと食事とかも簡単なもので良ければ持つてくるから」  
「すみません。助かります」

言いながら、シユテルは早速本を三冊ほど選び出す。それを宙に浮かせて同時に読み始める。その上でさらに、他の資料を探して部屋を歩き回り始めた。

「……がんばって」

ユーノは小さな声でそうつぶやき、静かに退室していった。

三日後。シユテルは今も小さな部屋に閉じこもったまま、資料を読み続けている。食事や仮眠以外で休むことはせず、ひたすらに読む。今日も仮眠から起きてからはずっと読んでいたが、突然の来客にシユテルは顔を上げた。

「シユテル、大丈夫？」

なのはが心配そうに顔をのぞかせ、部屋に入ってくる。手には食事の載った盆があり、それをテーブルに置いてくれる。

「ナノハ……。どうしたのですか？」

「ユーノ君とクロノ君に、シユテルがずっと部屋に閉じこもって調べ物してるって聞いて……。せめて何かしつかり食べてほしいなって」

盆を見ると、普段差し入れでもらっているものとは違うメニューだった。どうやらなのはが作ってくれたらしい。少し嬉しくなり、頬がわずかに緩む。

「すみません、ありがとうございます」

「ううん。こんなことしかできなくて、ごめんね……」

「得手不得手がありますから、お気になさらずに」

シユテルは読み進めている本の半分ほどを一度床に下ろし、手を合わせて食事を始める。それでも残り半分は自動的にページが捲られていき、読み進めていく。なのはは感心したようなため息をつき、すごい、と言葉を漏らしていた。

「じゃあ、邪魔をしないうちに戻るね。シユテル、がんばってね」

なのはが手を振り、シユテルも手を振り返す。笑顔を浮かべたなのはは、そのまま退室していった。

さらに数日が経過し、約束の日の前日。すでに真夜中。時間はもう、あまりない。

「……………まで、ですか」

シユテルは最後の一冊を閉じて、本の山の頂にそつと載せる。これでこの部屋にあるもの、連日運ばれてきた追加の資料、それら全てを読み終えた。そして導き出された結論は、管理局と同じもの。打つ手が無い。だが、一つだけ、不確実ながらも試す価値があることを見つけた。ただしかなりの危険が伴うこともある。

資料を読み進めていくうちに分かったことは、ギフトッドには意思があるということだ。願いを叶える前に会話を交わした、という記述もあった。魔力を拒絶しているのは

ギフトテッドの意思かもしれない。そうであるなら、その意思に接触さえできれば、可能性はあるだろう。

問題は、どうやってギフトテッドの意思に接触するかだ。これも方法はあるにはあるが、シユウにとつても自分にとつても危険なものだ。

——しかし、やらなければ結局は同じ、ですな。

シユテルはうなずくと、部屋を出てアースラに向かった。

アースラにたどり着いて、シユテルはすぐにリンディを呼び出した。まだ日も昇っていない時間だったので眠っているかと思つたが、どうやら起きていたらしい。シユテルがリンディの部屋に入ると、コーヒーを出してくれた。

「こちらも今まで調べていたのだけど……。私たちではどうしようもないわね」

リンディがお茶を飲みながら言う。そうですか、とシユテルもコーヒーを飲み始めた。

「シユテルさんの方は？」

「……………」

シユテルは無言。少しだけ考える素振りを見せ、そしてリンディに頭を下げた。お願いします、と。

「半日ほど待つていただけですか？ 試しておきたいことがあります」



そして顔を上げたシュテルの目を見て、リンディは何かを察したのか薄く微笑んだ。分かりました、と小さくうなずく。

「何か協力できることはある?」

「ではシュウの家の周辺に結界をお願いします。私は魔法を使うことができなくなりま  
すので」

その言葉に怪訝そうに眉をひそめたが、シュテルはそれ以上は何も言わずにゆつくりとコーヒーロー飲み終えた。

昼前になり、シュウが自宅へと戻ってくる。シュテルは部屋の中央に立ち、静かに待ち続けていた。シュウはシュテルを見て、嬉しそうな笑顔を見せてくれる。シュウに続いて入ってくるのはディアアーチェたちだ。朝方に全員を呼び出したのだが、その時はシュウの家だと聞いてとても驚いているようだった。

シュウがシュテルの前まで歩いてくる。ディアアーチェたちは部屋の入り口で、その様子  
をじっと見守っている。

「シュテル。何をするの?」

シュウの言葉に、シュテルはうなずいた。

「調べて分かったことですが、ギフトッドには意思があるそうです」

「そう、なの?」

「はい。ギフトテッドの意思に接触をしてみようかと思えます」

シユウが、どうやってと首を傾げる。シユテルはそれには応えずに、ユーリに目を向けた。見られたユーリが居住まいを正す。

「ユーリ。一つお願いがあります」

「はい！ 何でしょう？」

「駆体を一時放棄します。後ほど戻ってくる時にご助力をお願いします」

「はい。わかりまし……え？」

ユーリが絶句して、レヴィも驚きで目を丸くしている。だがディアーチエだけはシユテルの意図を察したのか、少し驚きはしたもののすぐになるほどとうなずいていた。紫天の書を取り出し、ページを捲っていく。

「我也準備をしておこう。十分に気をつけろ」

「はい……。ありがとうございます、王」

察しながらも引き留めようとはしない王に、シユテルは心から感謝した。さすがは自分たちの王だとも思う。少しだけ笑みを浮かべると、改めてシユウへと向き直った。

「えつと……？」

「貴方は気にしなくて大丈夫です。手を出して、目をつぶってください」

指示を出す、シユウはおずおずといった様子で手を差し出して来る。どこか不安そ

うに瞳を揺らしながらも、しっかりと目を閉じた。シユテルは満足そうにうなずき、シユウの手を握る。驚いたのかシユウの体がびくりと震えたが、今は気にしないことにする。

シユテルはそつと目を閉じると、駆体の放棄を開始する。本来なら一度データなどを闇に戻すところだが、シユテルは闇に戻らずに、シユウの中に眠るギフテツドへと潜っていた。

S i d e : D e a r c h e

「……行つたか」

ダイアーチェはシユウだけになった部屋を見て、小さくため息をついた。シユウのためとはいえ、無茶をするものだと思う。シユテルは自身の駆体を放棄して、データだけの存在となってシユウの中へと潜っていった。現在、シユウからシユテルの魔力を感じるといふ奇妙なことになっている。

「始まつたのかしら」

入り口からの声に振り返ると、リンデイがいた。クロノとなのはも一緒だ。その三人へとダイアーチェはうなずく。

「シユテルは？」

なのはの問いに答えたのはユーリだ。

「会いに行きました。シユウの中の、ギフトッドに」

S i d e : S t e r n

気づけば、シユテルは真つ白な小さい部屋にいた。家具も道具も何一つない、白いだけの部屋。すぐに放棄したはずの体があることに気がつくが、だがこれは幻のようなものだろうとも自覚する。

——さて……。どうするべきでしょうか。

中に入る、という発想は人間にはないだろう。そのためここに来たのもおそらく自分が最初だ。当然事前の知識などあるはずもなく、ここから素早くギフトッドの意思を探さなければならぬ。

とりあえずは周囲の壁を調べてみようかと移動しようとしたところで、

「やあ、やはり君が来たね、シユテル」

驚きつつも声のした方向、先ほど見ていたはずの正面の壁を見る。すると、いつの間にか人の姿があった。長い金髪に褐色の瞳の女だ。資料を含め、自分は一度も見たことがない。

「ああ、そんな警戒しないでいいよ。ただの過去の亡霊だから。そうだね、パストとでも

名乗っておこうか」

そう言うのと、パストと名乗った女はからからと楽しげに笑う。シユテルはそんなパストの動作をしつかりと見る。動きを見逃すまいと観察を続けながら、

「貴方が、ギフテッドの意思、ですか？」

シユテルの問いかけに、パストの笑顔の質が変わる。楽しそうなものから、困ったようなものへと。そして小さく首を振った。

「ではギフテッドの意思まで案内していただけませんか？」

「いやいや、それは無理な相談だよ」

「何故ですか？」

シユテルが相手を睨むように目を細める。パストが肩をすくめ、怖いなあと楽しそうに続ける。

「だって、ここにはいないから」

「……は？」

「君たちが会ってるじゃないか、ギフテッドの意思には」

どういふことですか、とは聞かない。意味を理解したシユテルは、小さくため息をついた。

「さすがだね。そうさ、ギフテッドの意思は、西崎秀一という人間だ」

パスト曰く。ギフテッドは無から有を生み出すことはできない。それは人の意識なども例外ではないため、人間となる時にギフテッドは自分の記憶を封印して、その上で人として生まれた、ということだ。つまりは、最初からシユテルはギフテッドの意思に出会っていたということになる。

「……残念です」

「何が？」

「私では……シユウを救うことができなかつた……」

ギフテッドの意思は、魔力の拒絶とは関与していない。ならば自分が取れる手段はもうない。そのことに落胆してしまう。こうなってしまうなら、最後の一週間はシユウと共に過ごすべきだった。

だがそれを聞いたパストは笑顔をさらに深くした。にやにやと小馬鹿にするようなそんな笑みだ。思わずシユテルが睨むがパストは動じない。

「見当外れではないよ、シユテル。君がここに来たことは正解だ」

「どういうことですか」

「あたしが、魔力を拒絶している張本人だからね」

シユテルが目を丸くする。パストの言葉の意味を理解すると同時に、シユテルはすぐに思考を回転させる。この女を説得しなければならない、と。

「魔力の拒絶をやめていただけませんか。その結果がどうなるか、お分かりでしょう」  
ゆつくりと語りかける。パストは、分かっているさと理解を示してくれるが、しかし首を縦には振ってくれない。

「封印となるなら仕方がないね。大人しく封印されよう」

「何故、ですか？」

「ん？ 簡単さ。人間が信用できないからだ」

その言葉を発した瞬間に、パストの表情は真剣なものになっていった。敵意にも似た感情をシユテルへと向けてくる。思わず怯みそうになってしまいが、シユテルはしっかりと相手を睨み返した。すると、パストの視線が少しだけ逸らされた。どこか嬉しそうにも見える。

「さすがだね……。ああ、続きだけだね。ギフテッドは願いを叶えることができる。ただ十分な魔力さえあれば、シユウは無意識に人の願いを叶えてしまう。それはとても危険なものだ」

「ギフテッドはそれほど力の強いロストロギアではないと聞いていますが」

パストが顔の前で舌を鳴らしながら指を振る。外れだ、というパストの表情は、何かを自慢したくてたまらないといった子供のような表情だ。

「ギフテッドはね、ロストロギアと呼ばれているものの中でも凶悪な部類に入ると思う

よ。なんせ、無から有は生み出せない、だけで他に制限がないからね」

シユテルが訝しげに眉をひそめると、パストは小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「ギフトッドの力が弱いんじゃない。与えられる魔力が少ないだけだ。ギフトッドは、与えられる魔力に応じて願いを叶える。魔力さえあれば、世界を滅ぼすことすらできるよ」

「……ずいぶんと詳しいのですね」

「まああたしが作ったものだし」

シユテルが大きく目を見開いた。その様子がおかしいのか、パストが忍び笑いを漏らす。シユテルはすぐに表情を引き締め、パストへと言葉を投げかける。

「貴方の言い分は理解しました。そしてその通りだとも思います。確かに人間には信用できない者が多いでしょう」

「そうだろうか？ だから……」

「それでも、お願います。シユウを利用するものがあるなら、私が排除します。ですから、どうか……」

深々と頭を下げるシユテル。パストは先ほどまでの嘲笑に近い笑みを引つ込めると、どこか寂しげに眉尻を下げた。いい子に出会えたものだ、と小さな声が聞こえてくる。やがてパストは、仕方がないねと苦笑した。



「では聞くが、君はシユウを守るといふ。ではそんな君は、シユウを、ギフトテッドを利用しないと誓えるかい？ あんたほどの魔力があれば、叶えられる願いも大きなものになる」

「先のことは分かりませんが、今は利用するつもりはありません」  
「……正直だね」

呆れたようにため息をつき、だがパストはどこか楽しそうだ。

「君は危険を冒してまでここに来たんだ。無事に帰れる保証もないのに。そんな君に敬意を表して、君の魔力だけは受け付けてあげよう。それ以上の譲歩はしない」

シユテルが顔を上げる。パストは優しい瞳でシユテルを見つめていた。シユテルは安堵のため息をつき、もう一度頭を下げる。

「ありがとうございます」

「はいはい。じゃあさっさと帰れ。駆体の方もサービスしてやるから」

ひらひらと手を振ってくる。どこか名残惜しそうにも見えるその仕草に、シユテルは少しだけ首を傾げた。そしてふと疑問に思うことがある。

パストがギフトテッドを造ったという。ならば、その理由は何なのだろう、と。理由もなく造ると思えないものだ。そのシユテルの思考を察したのか、パストはシユテルからそっぽを向いて、しかし教えてくれる。

「あたしには子供がいたんだ。でもまだ赤ん坊の時に、殺されちゃった」

当時は戦争中だったから仕方がないけど、と笑うパストは、しかしとても悲しそうに表情を歪めていた。黙って聞いているシュテルへと、パストは続けて教えてくれる。

「ギフテッドを造った理由は単純なものだよ。子供を蘇らせたかったんだ。幸い、あたしの世界では魂の保存なんてことができたからね。ギフテッドを造り、魂を与え、願いによって人の姿を取ってもらった。願いを叶える、というのは付随効果に過ぎないんだよ」

ギフテッドがああ夫婦の願いを叶えたかったのは、その最初の願いの影響だろうねと寂しげに言った。

話は終わりだ、とパストが腕を振る。その瞬間、白い部屋が崩れ去った。同時にシュテルの幻の体も消え、魔力とデータだけの存在になる。パストだけが暗い闇に残され、こちらを優しく見つけている。やがて、わずかな浮遊感とともにパストがゆつくりと遠ざかっていく。

「それじゃあね。あんたと話ができて良かったよ。私のかわいいギフテッドを……。私の息子をよろしくね」

息子、と聞いてシュテルは少し驚く。だがすぐに、なるほどと得心した。ギフテッドの意思はパストの息子のものであり、その意思が今の西崎秀一なら、パストの息子とも

いえるものなのだろう。だからこそ、息子を利用されたくないがために、魔力を拒絶していたのかもしれない。それが封印される理由になろうとも。悪意の願いによつて重い十字架を背負わされる前に。

不器用な人だ、と思うと同時に、シュテルは意識を失った。

### S i d e : P a s t

パストはシュテルを見送り、満足そうに微笑んだ。あの子になら息子を任せられる、と判断した。その自分の判断に間違いはないという自信もある。もつとも、ここまでくる度胸がなければ、任せる気にはなれなかつたが。

パストは、過去の亡霊は思い出す。ギフテッドが叶えた最初の願いと結末を。

願いは叶えられ、確かに息子は蘇った。だが願いを叶える魔導具を、戦争中の国が欲しがらないわけがない。結果、自分たち親子は味方であるはずの国そのものに裏切られ、自宅を襲撃され、二人とも命を落とした。

そしてその時にパストが願ったこと。願ってしまったこと。

——ことなくそつたれな世界、消えてしまえばいいのに。

その時は、ギフテッドには大量の魔力が蓄えられていた。それ故に、その願いは叶えられた。叶えられてしまった。次元震など生やさしいものではない。世界がゆつくり

と消滅していく。崩壊していく。多くの人々に恐怖と絶望を与えながら、老若男女問わず、善悪問わず、全ての人間を巻き込んで世界は消滅した。後に残されたのは、暗い無の世界。

その時になって、パストは自分が造りだしたものの危険性を理解した。だが理解した時にはすでに自分の体は失われていた。

——ギフテッド。あんたに最後の命令だ。

だからパストはギフテッドに、親として命令を下す。これからのために。

——これからみんなの願いを叶えにいこう。小さな願いを叶えにいこう。二度とこんなことが起こらないように。あんたはあたしの命令によつて願いを叶え続けていくんだ。

だから。

——だからこれは、お前のせいじゃないよ。

さあおいで、とギフテッドを次なる世界へと導く。世界のあつた場所を名残惜しそうに見つめながらも、次の世界へと旅立っていく。

——振り返らずに。さあ、おいで。あたしのかわいいギフテッド。

やがて次の世界に着く頃には、パストはギフテッドの中で眠りについていた。

はるか昔の出来事。一人の科学者と魔導具の、終わりと始まりの、誰にも知られるこ

とのなかつた世界の話。

Side: Stern

シュテルが目を開けると、最初に見たものはシユウの心配そうな顔だった。その周囲にはデイアーチエやユーリ、レヴィがいる。

「おかえり、シュテル。ちゃんと帰ってきてくれてよかつたよ」

泣き笑いのような表情でシユウが言う。シュテルはそんなシユウの手を静かに握った。困惑するシユウをよそに、シュテルは自分の魔力を分け与える。魔力光が揺らめき、シユウの中へと、ギフトッドへと取り込まれていく。その光景に、その場にいる全員が啞然とした。

「シユウ……。貴方の母親にお会いしてきましたよ……」

シユウが首を傾げる。だがシュテルはそれに気づかず、用件のみを伝えていく。

「魔力をもらっていただけに話をつけてきました……。ただ、一つ、勝手に約束したこともあります……」

「約束？」

「はい。私以外の魔力は、受け付けるつもりがないそうです……。そのため、貴方は私と共にいなければなりません。勝手なことをしてしまつてすみませんが、それしか方法が

なく……」

声がどんどんと弱々しくなっていく。激しい睡魔が襲ってくる。今までろくに眠りもしていなかったのが今になって、安心したためが響いてきているらしい。シユテルの言葉を聞いたシユウは驚きを露わにしつつも、やがて満面の笑顔を浮かべた。

「シユテルと一緒にいればいいんだよね。僕は別にいいよ。……シユテルのこと、好きだから」

ぼつりと、そんなことを言う。デイアーチエが驚き、ユーリが顔を赤くし、レヴィがおーと意味のなさない声を発している。

「シユテルは……良かったの？」

シユウの声に朦朧とした意識を向ける。薄く微笑んで、言った。

「ええ、私も構いません……。私も貴方のことは好きですから……」

シユウが完全に硬直する。おいしっかりしるとデイアーチエがシユウの肩を揺らすのが、シユウはフリーズしたままだ。その光景にシユテルは満足そうに一度笑うと、眠りへと落ちていった。

Side: Hero

シユテルから魔力をもらった翌日。管理局からは監視付きではあるが自由を許され

た。監視の担当になったのは、本人からの申し出から高町なのはだ。彼女が海鳴市にいた間は、彼女が自分たちのことを報告することになる。やがて管理局に正式に入局した後には、また別の誰かが監視に来るのだろう。

だがシユウにとつて、そんなことはどうでもいいことだった。これからもシユテルたちと一緒にいられる、それがとても素晴らしい。

そしてシユウは、引越をした。諸々の費用を負担したのは両親だ。一緒に生活するつもりはないとはつきりと言うと、これぐらいはさせてほしいと引越すことになった。そして引越した先は、

「おっじやましませーすー」

お隣さんからの客人の、レヴィの声が部屋に響く。

シユウが引越してきたのは、シユテルたちの隣の部屋だ。ただ貧乏性が染みついてしまったせいも、広すぎるこのマンションはシユウには合わず、リビングとキッチン以外は扉すら開けていない。

「お邪魔します」

シユテルがリビングへと入ってくる。シユウは顔を真っ赤にしてうつむいてしまうが、シユテルはいたっていつも通りだ。この間のやり取りを覚えていないのか、それとも好きの意味を友人として取ったのか、シユウには分からない。怖くて聞くこともでき

ず、そのままになっている。

「何もないな。家具も買うべきだと思うが」

ディアーチエの言葉にシユウは苦笑。現在、リビングは前の部屋の家具をそのまま移してきただけの状態だ。テレビすらもないので、かなり広々としている。

「でもこれはこれでいいと思いますよ」

ユーリの明るい声。同じ構造だろうに、珍しそうに周囲をきよろきよろと見回している。

「ではシユウ。手を」

唐突なシユテルの言葉。シユウは顔を赤くしながらも手を差し出し、シユテルがその手を優しく握る。暖かな魔力がシユウを満たしてくれる。やがてシユテルが手を離す。

「ありがとう、シユテル」

「いえ。この程度なら」

シユウは、お茶を入れてくるねとキッチンへ向かう。その背にシユテルの小さな言葉。

「さすがに少し照れますね……」

え、とシユウが振り返るが、シユテルはいつも通りの無表情だ。シユウが首を傾げると、何でもありませんよと首を振った。



「これからもよろしくお願いします、シユウ」

「あ、うん……。こちらこそよろしく、シユテル」

笑顔と談笑が溢れる部屋に、今日も朝焼けの光が降り注ぐ。

その光を受ける者は、幸せそうな笑顔を浮かべていた。

## プロトタイプ

## 第一話 殲滅者

終わりのない人の夢。

それは人に活力を与えるもの。

人ならざる闇の夢は、少女に何を与えるのだろうか。

## 『殲滅者』

自分は、夢を見ているのだろうか。

思わずシユウはそんなことを思ってしまった。

本屋から家への帰宅途中、近道をしようと思った裏道。

そこに、一人の少女が横たわって苦しそうに喘いでいた。

茶色のショートヘアに、黒衣をまとった少女。

顔は、少年の友人、高町なのはとうり二つ。

「……なのは？」

シユウは無意識に携帯電話を取り出すと、自然となのはに電話をかけていた。

数回のコールの後、

『はい、なのはです』

なのはが電話に出た。

「あ、なのは……？　今、どこにいるの？」

『え？　はやてちゃんの家にいるよ』

「……側に誰かいる？」

『シュウー、聞こえるかー？』

答えの代わりに、ヴィータの声が返ってきた。

シュウは苦笑して、聞こえてるよと返事をする。

「ごめんね、何でもないんだ。切るね」

『え？　ちよつと待って……！』

呼び止められたが、それを無視して電話を切った。

なのはははやての家に行った。

では、この少女は誰だろう。

「えつと……。生きてる？」

恐る恐る近付いて、少女の肩を揺する。

少女の目がわずかに開かれた。

「ハハハ、は……？」

少女の口から漏れた声は、弱々しく震えていた。

「海鳴市。詳しい場所は……ちよつと説明できないかな」

「……そう、ですか」

少女が再び目を閉じようとする。

それに気づいて、シユウは慌てて制止した。

「ちよ、ちよつと待って！ 君は誰?!」

「……私は……」

何か答えようとしたが、途端に苦しそうにうめいた。

シユウはわずかな逡巡の後、少女の体を背負った。

「なに、を……?」

「見捨てるわけにもいかないからね。病院もまずそうだし……」

少女の手元を一瞥する。

なのはと同じ、だが色の違う杖がしっかりと握られていた。

「とりあえず、僕の家に行こう。そこで休むといいよ」

少女の返答はない。

それを都合の良いように解釈し、シユウは自宅への道を急いでいく。

「物好きな、方ですね……」

とても弱々しい声で、そんな言葉が紡がれた。

自宅にたどり着いてすぐ、シユウは部屋に布団を敷いた。

少女をそこに寝かせ、額に手を触れる。

驚くほど熱かった。

シユウは小さな流し台へと行き、タオルを冷たい水で冷やす。

しっかりと絞って、少女の額に載せてあげた。

「ん……」

先ほどまで苦悶の表情だったが、幾分か和らいだようだ。

それを見て胸を撫で下ろし、シユウはその場にあぐらをかいて座った。

少女の静かな寝息をのんびりと聞きながら。

シユウはいつの間にか、眠ってしまっていた。

目が覚めた時、日はとっぷりと沈んでいた。

少女は今も静かな寝息を立てている。

シユウは新しいタオルを取り出すと、再び冷水でぬらして絞った。

それを少女の額のタオルと交換して、

「……あ」

少女の瞳と目が合った。

澄んだきれいな青色をしていた。

「えつと……。おはよう」

シユウがどこかぎこちなくそう言うのと、

「……おはようございます」

少女もしつかりとした声で返事を返した。

「ここは、どこですか？」

「僕の家。路地裏で倒れてたんだけど、覚えてない？」

「……いえ、覚えています」

少女は一瞬だけ目を閉じると、そつと体を起こした。

頭痛がするのかわずかに顔を曇らせるが、すぐにシユウへと視線を向けた。

「ありがとうございます」

そう言って、頭を下げる少女。

それを見て、シユウは激しく狼狽した。

「いや、えつと……。当然のことと言うか何と言うか……。！」

「一つ、お聞きしてよろしいですか？」

「あ、はい！ どうぞ！」

「私は、なぜここにいますのでしょうか」

シユウの表情が怪訝そうに歪んだ。

対する少女は、わずかに首を傾げている。

「えつと……。覚えてない？」

「……………。すみません、私の質問が悪かったですね」

少女は言葉を探すように顔を伏せた。

急かすことはせず、じつと少女の言葉を待つ。

やがて、少女が顔を上げた。

「少し前の会話から察するに、貴方は魔法のことを御存知なのですね？」

「ああ、うん。知ってるよ」

「では、高町なのはという方は御存知ですか？」

「……………うん、知ってる」

「では…………。闇の書のこととは？」

シユウはわずかに顔を曇らせた。

聞いてはいるが、そこまで詳しいわけではない。

そう説明すると、少女は十分ですとうなずいた。

「私は、闇の書の残滓です」

「へ…………？」

少女が説明を続けていく。シユウはそれを自分なりに解釈していった。闇の書の防衛プログラムが破壊された後、その細かい残滓が残された。それはやがて集まっていき、魔力を集め始める。

そうして生まれた闇の欠片が、関わった人間の記憶を写し、様々な形を取った。闇の書の闇を再生させてしまう闇の欠片。

それらは少し前に、管理局の魔導士に全て処理されたそうだ。

「そんなことがあったんだ。全然知らなかったな……」

「どのような関係かは存じませんが、必要ないと判断されたのでしよう」  
闇の欠片の中で、独自の自我を持ち、目的を持っていた存在がいた。

マテリアルと呼ばれる存在。

それらも、他の欠片と同様に処理された。

「……そのマテリアルも、誰かの姿を投影していたの？」

「はっ」

「……じゃあ、もしかして……」

少女の顔を見ると、一度だけ小さくうなずいた。

「私とその、マテリアルの一人です。星光の殲滅者と呼ばれていました」

「……………。じゃあ、管理局の、敵？」



「そうなりますね」

うなずく少女は無表情で、何を考えているのかは読み取れない。シユウは腕を組み、じっと考え込んだ。

——これは、みんなに伝えた方がいいのかな。

「お任せします」

「え？」

不意にかけられた言葉に、シユウは驚いて顔を上げた。

「私を通報するかどうかで悩んでいるのでしょうか。」

「ご自由にしてください。」

私自身、なぜ今もこうして存在しているのか分からないのです。

貴方に助けられたのですし、貴方にお任せします」

少女の言葉に、シユウはため息をついた。

「こう言われると、正直管理局には言いづらい。」

「どこまで記憶があるの？」

「……オリジナルに敗れるまで、ですね」

「ということは、なのはと戦ったのか……」

この対応次第で、管理局との関係が悪くなるような気がする。

だが、この少女を見捨てる気にもなれなかった。

以前の、ひとりぼっちだった時の自分の境遇と重ねているのだろうか。

「どうして、なのはと戦ったの？」

「私の中から、声がありました。全てを壊せと……」

それを止めるために、なのははこの少女と戦ったのだろう。

自分と同じ姿の、この少女と。

「今も……そんな想いがある？」

「……なぜでしょうね。もう、何かをしたいとは思わなくなっています」

「そっか……」

少女の言を信じるなら、危険性はないだろう。

だが、それを言っても、他と同じように処理されてしまう気がする。

「……君は、消えたいと思ってる？」

「……分かりません。自分がどう思っているのかも……」

少女はうつむいて、黙り込んだ。

どこか困惑しているような表情。

今にも消えてしまいそうなほど、儚げに見える。

その様子を見て、シユウは心を決めた。

「じゃあ、どうしたいか決まるまで、ここにいたいよ」

「え……？」

「僕は管理局に通報したりしない。ここで休んでいくといいよ」

ただし、と前置きして続ける。

「勝手に外に出歩かないでね。」

管理局の人達に見つかつたらやつかいだから」

それだけ言い終えると、シユウはよいしょと立ち上がった。

「何か作るね。まあゆっくりしてて」

そう言って流し台へと歩いていく。

少女はしばらく呆けたようにその後ろ姿を眺めていたが、

「ありがとうございます」

そう言って、頭を下げた。

## 第二話 道

本音を言えば、のんびりと暮らしていきたく思っている。  
でも、なぜだろう。

君を見ていたら、別にいいかと思えるんだ。

『道』

「これ、買ってきたよ」

そう言つて、シユウは目の前に座る少女に大きな袋を渡した。

目の前の少女、星光の殲滅者と呼ばれているらしい少女は、それを受け取つて首を傾げた。

「これは、何ですか？」

「服。さすがにそのままじゃまずいでしょ？」

少女の衣服は、黒いバリアジャケットのままだった。

このまま出歩かれると、管理局に見つけてくださいと言つているようなものだ。

少女は得心したようにならずき、袋の中をのぞき込んだ。

「女の子が着るような服が分からないから、適当に選んできたんだけど……」

中に入っていたのは、白いシャツと黒を基調としたパーカー、それに黒色のスカートだった。

シユウは何かを言い訳するように、言葉を探しながら言い続ける。

「その、僕自身あまりファッションとか気にしたことなくて、それで、えつと……」  
言いながら少女の方を見ると、シユウを見つめる少女の目と目が合った。

少女は無表情のまま、小さく頭を下げる。

「ありがとうございます」

少女にとつても、最近生まれたばかりなのだからファッションなど知るはずもなく、それ故に単純に買ってきてもらったことに対するお礼だと分かつてはいるのだが、その言葉でシユウの気持ちは少し軽くなっていた。

「ずっと家においても仕方ないだろうし、着替えたら外に行ってみよう」

「はい」

素直にうなずく少女。

そしておもむろに服を脱ぎ始めた。

「なああああ!?!」

慌てて首をそらし、玄関の方へと視線を向ける。

少女が首を傾げた気配が伝わってきたが、シユウは何も言えなかった。

——恥ずかしいとかそういうのは、ないのかな……。

なのはの記憶が少しあるようだが、感情は伴っていないらしい。

シユウは真つ赤になりながら、少女が着替え終わるのを待った。

しばらくして衣擦れの音が途切れたので振り返ってみると、

シユウが買ってきた服を着た少女が自分の姿を不思議そうに見ていた。

「えつと……。それじゃあ、ちよつと外に行こうか」

「はい」

少女はシユウの方へと顔を向け、小さくうなずいた。

特に目的地などはないので、シユウはとりあえずいつもの本屋へ行ってみることにした。

少女を連れて、本屋までの道を歩いていく。

少女は民家やコンビニ、公園などを見かけるたびに、興味深そうに視線を向けていた。

「どうしたの？」

「いえ、知識としてはありますが、実際に見たことはないのです……」

そこで言葉が途切れた。

見ると、公園でサッカーをしている子供達へと視線を向けている。

その横顔はどこか寂しそうに見えた。

だが、シユウに見られていることに気づくと、すぐにいつもの無表情に戻ってしまった。

「君にも友達はいたの？」

「友達……ではなく、仲間はいました。」

今はもう、消えてしまっているでしょうが」

わずかに少女の表情がかける。

——何を聞いているんだ、僕は。

仲間がいたとしても、すでに処理されているだろうことは容易に想像がつく。

それなのに無神経なことを聞いてしまった。

「ごめん……」

「……なぜ謝るのです？」

対する少女は、小さく首を傾げているだけだった。

「いや、気にしないで……。」

ところで、君のことは何て呼べばいいかな？」

「お好きなように」

「……それが困るんだけどね……」

少女に名前がないことは分かっているが、それだと何と呼べばいいのか困る。

星光の殲滅者と毎回呼ぶわけにもいかない。

本屋へと歩きだしながら、シユウは手をあごに当てて考えていた。

その後ろを、少女は黙ってついていく。

「……本当に何でもいいの?」

「はい。構いません」

「……じゃあ、星光って呼ぶね」

シユウがそう提案して振り返ると、少女は相変わらずの無表情でシユウを見ていた。

小さく吐息し、言う。

「どうぞ」

「うわ! なんかに冷たいよ! すごく!」

その後も何かいい案はないかと考え続けていたが、結局思い浮かぶことはなかった。

「……ネーミングセンス皆無で、ごめん」

それを聞いた少女の顔は、どこか苦笑めいたものを浮かべていた。

本屋で軽く立ち読みをして、店員に挨拶をして店を出る。

立ち読みの間、少女もシユウの隣で適当な本を選んで読んでいた。

シユウが驚くほど集中して読んでいて、シユウの声にもほとんど反応しないほどだった。



「本、好きなの?」

気になってたずねてみる。

「嫌いではないですね。……買っていただいて、ありがとうございます」

少女の手には、本屋の紙袋がある。

シユウが店を出る際に買ったもので、少女がずっと立ち読みをしていた本だ。

せっかく興味のある本があったのにこのまま帰るといいうのも悪い気がしたので、

遠慮する少女を無視して購入した。

現在二人が歩いているのは、近くの公園の道だ。

道の左右は木々が生い茂り、側には小さな池もある。

シユウのお気に入り公園だった。

「きれいな場所ですね」

「そう? そう言ってもらえると、嬉しいかな」

少し照れくさそうに頬をかく。

ふと前方を見ると、アイスクリーム屋の屋台あった。

まだ肌寒い季節だというのに、買う人はいるのだろうか。

少女がその屋台を指差して聞く。

「あれは何ですか?」

「アイスクリーム屋。アイスクリームは……知ってる?」

「いえ……。知りません」

そっか、とシユウはうなずくと、少女をその場で待たせ屋台へと走っていった。

少女が怪訝そうな表情で待つこと数分。

アイスを二つ持ったシユウが、小走りで戻ってきた。

「はい」

「え……? いいのですか?」

「うん」

シユウからアイスを受け取り、しばらくそれを眺めていた。

シユウがアイスを口に含むのを見て、少女も同じように口に含む。

その冷たさにわずかに驚き、その甘さに頬がゆるんだ。

「おいしい?」

シユウが笑顔で聞いて、少女が一度だけうなずく。

「はい。とてもおいしいです」

「そっか。それは良かった」

「でも……。この季節に食べるものではありませんね」

「……まあ、そうだね」

シユウは苦笑して歩きだす。

アイスを頬張りながら、少女もその後ろを歩いていった。

公園の道を、のんびりとだが黙々と歩く。

その間、少女はずっと少年の後ろ姿を見つめていた。

——なぜ、この少年は私を助けてくれるのでしょうか。

少年に何かメリツトがあるとは思えない。

最初、このまま管理局に引き渡されるかとも思ったが、どうやらそれもなさそうだ。

ならば、なぜ自分を助けてくれるのだろうか。

「……どうしてですか？」

気づけば、口に出していた。

「へ？ 何が？」

「私を助けても、貴方にいいことなんてないでしょう。」

それなのに、なぜ私を助けてくれるのですか？」

その問いを聞いて、少年は天を仰いだ。

言おうか言うまいか悩むように、その体勢のままうなっている。

やがて、どこか照れた笑みを浮かべながら少女を見た。

「僕と似ているような気がして」

「似ている？ 私か、貴方に？」

「うん、そう」

言つて、シユウは歩き始める。

少女はその後ろ姿を追い、少年の言葉の続きを待つ。

「僕は、少し前まで一人だった。」

悩みをうち明けられるような友達もいなくて、ずっと孤独だと思つていたんだ」

まっすぐな道を二人は歩く。

木々の間の道を、歩き続ける。

「でも、いろんな人達と出会つて、いろんなことがあつて……」

今は、僕は一人じゃない。いろんな友達がいて、助け合うことができる」

シユウが振り返つた。屈託のない、満面の笑顔。

「みんなが僕を助けてくれたように、僕も君を助けたいんだ。」

一人で抱え込むより、二人で助け合った方がいいと思わない？」

そつと、シユウは手を差し伸べた。

目の前に出された手に、少女はわずかに戸惑つた。

この手を取つていいのだろうか。

この少年に迷惑をかけてしまうことになるのに。

「ねえ、星光」

呼ばれ、少女は顔を上げた。

優しく微笑む少年の顔を見た。

「僕と、友達になろうよ」

その言葉で、この少年がどんな人か、分かったような気がした。

きつと、自分が拒んでも、この少年は自分に関わろうとしてくるだろう。

だから少女は、薄く微笑んだ。

生まれて初めて、笑顔を浮かべた。

その自覚もないままにそつと握った少年の手は、とても温かかった。

「……はい。よろしくお願いします」

それを聞いた少年の表情は、どこか嬉しそうだった。

再び道を歩きだす。太陽に照らされた明るい道を。

だが。

少女は知っている。

自分の道は、決して明るくはない。

自分は人間でないどころか、闇の書の闇を復活させようとしていた存在だ。

今後、その意志がよみがえらないとも限らない。

——それでも……。

今は、この少年の側にいたい。

この温もりに触れていたい。

シュウの手を握りながら。

星光の殲滅者は、そう強く願っていた。

## 第三話 意思

何事もなく平穩に。

そんなことは不可能だと分かっている。

ただ、それでも、願うだけなら……。

『意志』

暗い夢の中に少女はいた。

暗黒に閉ざされ、右も左も上も下も、一切の判別がつかない。

分かるのは、自分がそこにいるという感覚だけ。

ただ、不思議な声だけは聞こえ続けていた。

少女に命令する声。

受け入れたくはない、声。

——壊せ。

たった三つの音から成るその言葉。

だがその音からは、声の暗い意志が伝わってくる。

——壊せ。

他に言うことはないのか、と思うが、少女にはそれだけで十分だった。故に少女は、ゆつくりと手を上げる。

いつの間にか持っていた杖で。

魔法の光を放つ。

その光の先にいるのは……。

「……………」

黒衣の少女は、目を開けるなり跳び起きた。

荒い息をつき、状況確認のために周囲に視線を飛ばす。

見慣れたシユウの部屋と、少し離れた位置で眠るシユウの姿。

そして自分が先ほどまで被っていた布団を見て、安堵のため息をついた。

——ただの夢……。

シユウを起こさないように立ち上がり、流し台へと向かう。

そつと蛇口をひねり、冷たい水をコップに注いだ。

ゆつくりと時間をかけて飲み干し、大きくため息をつく。

「……………星光？」

呼ばれて、少女は振り返った。



シユウが半身を起こし、まぶたをこすりながら少女を見ている。どこか心配そうな目だった。

「どうかしたの？」

「いえ……。何でもありません」

そう答えたが、シユウはまだ何かを言いたげに少女を見ていた。

だが、言葉が見つからなかったのだろう、やがて首を振った。

「何かあつたら、言つてね？」

「はい」

しっかりとうなずいてみせると、シユウは苦笑を浮かべた。

再び布団の中へともぐり込んでいく。

少女はその様子を静かに眺めていたが、ふと自分の布団の側へと視線を向けた。

少女の黒い杖が、そこにある。

それを見て、先ほどの夢を思い出してしまった。

——あれは……間違いなく……。

目を閉じ、夢の光景を思い出す。

放った光の先にいたのは、シユウ。

その表情は恐怖に怯えることもなく、ただ悲しげに少女を見つめていた。

もしも本当に同じことが起これば、この少年は同じ反応をするのだろうか。  
——……何を考えているのでしょうかね。

自分の考えに自嘲し、もう一度眠るために布団に入ろうとする。  
そこで服がじつとりと湿っていることに気づいて苦笑し、  
いつの間にか杖を握っていた自分に対して絶句した。

「……っ」

少女は杖を流し台の方へと放り投げると、布団を頭まで被った。  
そのまま強く目をつむり、

結局朝日が昇るまで、眠ることはできなかつた。

「顔色悪いけど、大丈夫?」

心配そうなシユウの声に、少女は顔を上げた。

朝日に照らされた部屋にちやぶ台が一つ。

それを挟むように二人は座っていた。

ちやぶ台には湯気の立つご飯とみそ汁。

先ほどまで、少女がじつと視線を落としていたものだ。

「はい。大丈夫です」

うなずき、みそ汁のお椀を手取る。

だが、どうしても食べる気にはなれず、そこで動作が止まってしまふ。

そのまま小さくため息をつくとき、シユウの困惑した表情が視界に入った。

「何かあつたら、言つてね……？」

「はい。分かっています」

言えるわけがない。

シユウを殺してしまう夢を見たなどと。

言えば、どんな顔をされるのか……。想像もしたくない。

「三日前からその調子だよ？　何かあるんじゃない？」

「……っ」

少女は何も言えず、うつむいて黙り込んだ。

シユウの世話になり始めてから、もう一週間が過ぎている。

この夢は、三日前から見始めたものだ。

最初は声が聞こえるだけで、シユウが夢に出てきたのは昨夜が初めてだったが。

「大丈夫です。……大丈夫、です」

うつむいたまま、自分に言い聞かせるように言う。

シユウはその様子を、何かを探るようじつと見ていたが、やがて小さくため息をついた。

「分かった」

空になった食器を持ってシユウが立ち上がる。

流し台へと歩いていくシユウの背中が、どこか寂しげだった。

それを見ているだけで、少女は胸が締め付けられるようだった。

日課となっているシユウとの散歩の間も、少女はうつむいて黙り込んでいた。

少女は黒い衣服に、これも真つ黒なキャップを被っている。

先日、通りすがりの人になのはと間違えられたためだ。

あの時は適当にごまかして逃げるようにしてその場を離れたが、

あの人はなのは本人と会った時に何を言うだろうか。

黒いキャップは同じ事が起こらないようにするために、シユウが買ってきたものだった。

以来、外を出歩く時は必ずこのキャップを被っている。

「ところでさ、そろそろ何をしたいか決まった？」

シユウに声をかけられ、少女ははつと我に返った。

気づけば公園の池まで来ていた。

池の側のいすにシユウは腰かけ、その隣を軽く叩く。

座って、ということらしい。

わずかに躊躇したが、シユウの隣に腰を下ろした。

「で、どうなの？」

「……まだ、決まっています」

というより、ほとんど考えていなかった。

最初はそれなりに考えていたが、いつの間にか考えることを忘れていた。

思っていた以上に、シユウと共に過ごす時間が心地よかったから。

「そろそろ決めた方がいいでしょうね」

「のんびりでいいよ。急いで仕事をし損じる……だっけ？」

シユウが笑顔で言つて、少女が申し訳なきそうに顔を伏せる。

あまり迷惑をかけたくないと思つているので、長居するつもりはなかった。

だが、いつの間にかもう一週間だ。そろそろ考えなければならぬ。

「……ちよつと曇つてきてるね」

シユウの言葉で天を仰ぐと、どんよりとした雲が空を支配しようとしていた。

いつ雨が降り出してもおかしくはない。

「帰ろうか」

シユウがそう提案するが、どうしても帰る気が起きなかった。

返事もせずうつむくと、かすかに苦笑する気配が伝わってきた。

隣にまたシユウが座り、それから二人とも無言。

少女は目を閉じ、思索の闇へと潜った。

微笑むシユウの胸からは血が流れ、

杖を持つ自分は青ざめた顔で硬直し、

ただ無情に時だけが流れていく。

そんな、夢。

「……………」

少女は勢いよく目を開いた。

いつの間に眠ったのだらう、闇色の雲は空を完全に覆い尽くしている。

ただ、相変わらず隣にはシユウがいて、そして新たな客もいた。

「……」

「……………」

膝の上に、子猫が座っていた。

甘えた鳴き声で少女にすり寄ってくる。

シユウを見れば、笑いかみ殺しているように肩を震わせていた。

「……………私は、どれぐらいの間眠っていましたか？」

「二十分ほどかな。さっきは小鳥が頭に乗ってたよ」

全く気づかなかった。

そのことに少なくとも衝撃を覚え、少し反省する。

——気を緩めすぎですね。

自分一人だけならまだしも、今はシユウがいる。

管理局の人間に見られれば、シユウの立ち位置も危うくなるだろう。

「はい」

膝の上の子猫が再び甘え声を出した。

少女は視線を下げると、相変わらずの無表情ながらも、そつと子猫の喉元に手を触れる。

優しく撫でてやると、気持ちよさそうにゴロゴロと鳴いた。

「動物に好かれてるね」

「……私のことなんて、知りもしないでしょうから」

「そんなことないと思うけどな」

「貴方が私の何を知っているんですか」

思わず硬い声を出してしまった。

シユウは少し驚いているようで、少女の方をまじまじと見つめている。

少女は何も言わず、立ち上がって池の方へと歩いた。

その時に猫が転げ落ちたが、気にも留めない。

ただ、子猫が寂しそうに一鳴きした時は、少し胸が痛んだ。

「…………どうしたの？」

池の側で悄然とうつぶむく少女に、シユウがそつと近寄ってくる。

シユウを一瞥し、

「夢を、見るんです」

そう切り出した。

そして、今までの夢のことを全て話した。

夢の声、少女の魔法、その先にいる少年……。

話している間に雨が降り始め、二人を容赦なく叩きつける。

だが、それでも少女は話し続けた。

「私は、結局は、闇の書の残滓なんですよ……」

消え入りそうな声でそう締めくくり、目を閉じた。

これで、全てを話した。

どんな罵倒の言葉でも甘んじて受けよう。

そう思っていた。

だが、シユウから出てきた言葉は、予想とは違っていた。



「……くだらない」

「え……？」

「所詮は夢じゃないか。くだらないよ」

少年は吐き捨てるように言った。そして続ける。

「君は確かに闇の書の残滓なのかもしれない。」

でも、だからなに？ 君は君じゃないか。

僕が見てきた君は、ちよつと無愛想だけど、とても優しい子だよ。

側で見てきた僕が、保証する」

シユウの言葉が、胸に温かく広がった。

少女はそつと胸に手を置き、その温もりに身を浸す。

しかし、すぐに首を振ってそれを拒絶した。

「それでも私は、本質的には闇です」

「違うね」

シユウが即答。

シユウの視線は、少女の足下に向いていた。

少女もその視線を追って、

「……」

いつの間にか足下に来ていた子猫が、甘えた鳴き声で少女の足にすり寄ってきた。その子猫をそっと抱きかかえると、再び小さく一鳴きした。

「知ってる？ 動物はね、人の本質を見るんだよ」

シユウに視線を戻すと、優しげな微笑を浮かべていた。

「動物達は、君の本質を見て、君に懐いているんだ」

「……………」

少女はしばらく子猫を見つめ、子猫も少女を見つめてくる。

少女は嘆息すると、子猫を地面に下ろした。

子猫が名残惜しそうに少女を見つめてくるが、少女はすでに子猫を意識から閉め出していった。

それを感じ取ったのだろう、子猫もわがままを言わずに、木々の間へと姿を消した。

「シユウ……………」

子猫を見ていたシユウが少女を見る。

少女は相変わらずの無表情で、しかし悲しげな声で、

「私は、正夢にならないかと不安なんです。

ですから、シユウ。私はもう一人で……………」

直後。

少女は言葉を発せなくなっていた。

自分の唇が、少年の唇にふさがれていたから。

再び声を出せるようになっても、茫然自失の体となっていた。

「僕はね」

顔を赤くしたシユウが言う。

「君のことが好きだ。だから側にいてほしい」

それだけ言うと、池の方へと視線をやってしまった。

その様子を見て、少女はやつと思考を再開する。

しばらくシユウを見つめ、そして……。

わずかに優しく微笑み、

薄く頬を朱に染めて、

少女は一滴の涙を流した。

「物好きな方ですね」

「……ほつといて」

照れ隠しのように、少年は空を見て言った。

いつの間にか雨はやみ、雲の切れ間から太陽がのぞいていた。

## 第四話 残滓

少女の意志に関わらず、  
運命の歯車は回り続ける。

その行く先は光か闇か。

『残滓』

「こんにちは」

「……!!」

それはあまりに突然だった。

日課となつた立ち読みの最中、シユウに話しかけてきたのは、なのはだ。

どこか照れたような笑顔で、シユウのことを見つめている。

その笑顔を受け止めたシユウの心臓が跳ね馬のように暴れ出す。

さっと視線を動かし、連れの姿を探した。

通路の最奥、本棚の影に黒衣の少女の姿があつた。

少女もなのはに気づいたのだろう、本を持ったまま啞然としている。

だが、シユウと視線が合うとすぐに平静を取り戻し、キャップを目深に被った。そのまま本棚の影へと消えていく。

とりあえず安堵のため息をつくとき、シユウはなのはへと向き直った。

「こ、こんにちは、なのは」

「……シユウ君、どうかした？」

「え、いや！ 何でもないよ！」

我ながら挙動不審すぎるとは思うが、なのはに言うわけにもいかない。

あるいはなのはなら大丈夫かとも思うが、少しでも可能性があるなら潰しておきたい。

だが、そんなシユウの思惑は、無駄に終わった。

悪い意味で、それもあまりに突然だった。

「私と、会わなかった？」

何言ってるの？ どういうこと？ そう返すべきだった。

何も知らなければ、そんな反応になったはずだ。

だが、シユウは言葉に詰まってしまった。

なのはに問われ、頭が真っ白になってしまった。

それが明確な答えになっているというのに。

「やつぱり……。近所の人が、私と歩いてるシユウ君を見かけたって言ってたから」  
「いや、それはその……」

言い訳を続けようとしたシユウだったが、それも続かなかつた。

黒衣の少女が、静かになのはの真後ろに立ち、

ゆつくりと人差し指をなのはの首に突きつけた。

「どなたかをお探しですか？」

「……やつぱり、いたんだね」

少女の声に、なのはは苦笑。

シユウの目の前で、二人は完全に沈黙したまま突っ立っていた。

どうするべきかと悩んでみるが、シユウにできることはない。

二人の様子を固唾を呑んで見守っていると、やがて少女が指を下ろした。

「お久しぶりですね、高町なのは。私のベースとなった方」

「うん、久しぶり、だね。喜んで良いのかは分からないけど」

なのはが笑顔で振り返る。

黒衣の少女の表情は、冷たい仮面に覆われていた。

公園の池の側で、シユウは立ち尽くしていた。

目の前には、向かい合うようになのはと黒衣の少女が立っている。

あれからとりあえず場所を移動してみたが、状況はいいとは言えない。むしろ最悪とも言える。

なのはに見つかっているのなら、管理局にも知られている可能性が高い。

「私のことは、もう管理局に報告済みですか？」

少女も気になっていたのだろう、開口一番そう聞いた。

なのははその問いに、小さく首を振る。

「まだ、言っていないよ。ちゃんと確認したわけでもなかったし……」

「念話などは？」

「してない。大丈夫、まだ私以外は、誰も知らないよ」

それを聞いて、シユウは大きく息を吐いた。

だが少女の方はその答えでは満足していないらしい。

今まで以上の警戒心をあらわにして、なのはを睨みつけている。

「なぜ、報告しないんですか？ あなたは管理局側の人間でしょう」

「それは……その……」

なのはは言葉を探すように、少女から視線をそらした。

指をあごに当てて、しばらく考える。

「今も、最初に会った時みたいな破壊衝動というか……。そういうのはあるの？」

「いえ……。それは、ありませんが……」

「だったら、いいの」

嬉しそうな満面の笑顔を浮かべるなのは。

思わずどきりとしてしまった。

「クロノ君やリンディさんには黙ってるって約束する。

だから……。友達に、なろうよ」

そう言つて、そつと手を差し出した。

「……いいのですか？」

「うん」

「……………」

少女はゆつくりとなのはに近づき、その手を握つた。

満面の笑顔のなのはと、相変わらずの無表情のなのはと同じ顔。

シユウはその様子を見つめ、嬉しそうに笑つていた。

「よかつたね」

自宅に帰つてきて、すぐにそう言つた。

スーパーの袋を二つ持ったまま、少女は意味が分からないようできよとんとしていった。



それからすぐに言葉の意味を察したらしい。

帰り際に寄ったスーパールの袋を床に置いて、少女は一度だけうなずいた。

「はい。まだ管理局には伝わっていないようで、よかったです」

「いや、そうじゃなくて……」

シユウが苦笑すると、少女は怪訝そうに眉をひそめた。

「どうやら本当に分かかっていないらしい。」

「なのはと仲直りできて、だよ」

「……………」

少女の表情が、笑顔になった。

だがそれは本当に一瞬で、次の瞬間にはいつもの無表情。

「見間違えたのかと思ってしまうほどだ。」

「よかったのかは分かりませんが……」。

「また敵対することにならなくてよかったとは思いますが」

「そっか」

それ以上は何も言わず、シユウは静かに微笑んだ。

——管理局とも、なのはと同じように和解できたらしいのに。

「どうにかすれば可能なのではないだろうか。」

そんな淡い期待を胸に抱いた。  
だが、それは結局は儂い願望だった。

なのはと出会って一週間後。

夕暮れの淡い光が室内を照らしていた。

シユウと少女は、自宅でのんびりと読書をしている。

ふと、少女が顔を上げた。

「……………聞が……………」

「へ……………」

シユウも顔を上げ、今まで見せたことのない少女の表情を見て驚いた。

こめかみにしわを寄せ、険のある顔をしている。

不機嫌そう、というのではなく、何かに強く警戒しているようだ。

「シユウ……………。最初に言っておきます」

少女がそつと立ち上がって杖を持った。

その仕草に思わずシユウの体が固くなる。

そんなシユウの反応も今の少女にとってはどうでもいいようで、言葉を続ける。

「なのはが口外したわけではありません」

「え？ それってどういう……」

「この街に、闇の断片が再び現れ始めました。

今はまだ意志を持たない小さなものですが、管理局はその掃討を始めています。

今回こそ漏れないように徹底的に索敵して……」

ノブを回す小さな音がして、シユウは驚いて跳び上がった。

シユウはとまどいの目で、少女は睨みつけるように、ドアを見る。

ゆっくりと開かれていく。

そこにいたのは、クロノ・ハラオウンだった。

「故に、自然と見つかってしまいました」

淡々と、少女は締めくくった。

どこかで雷が鳴った。

そんな、気がした。

## 第五話 星光

太陽は朝を照らしだし、  
月光は夜を照らし出し、  
そして星は世界を彩る。

『星光』

アースラの一室。

何もない部屋に、六人の人間がいた。

静かに目を閉じ、何かを考えているリンデイ。

その隣である人物にずっと警戒しているクロノ。

壁際で今にも泣きそうな表情のなのは。

その隣で心配半分、戸惑い半分のフェイト。

管理局のメンバーに対する敵意を隠そうともしていないシユウ。

そして、相変わらぬ無表情で目を閉じる星光の殲滅者。

この部屋にシユウと黒衣の少女が連れられてきて十分。

その間、誰も一言も喋っていない。

重苦しい沈黙に包まれていた。

やがて、リンディが小さくため息をついて、口を開いた。

「シユウ君……。できれば、その子のことは教えておいてほしかったわね」

「どうしてですか？」

「その子のことは、知っているのかしら？」

シユウはちらりと少女の方へと視線をやった。

無表情の仮面からは何も読み取ることができない。

「聞いています。でも、もう星光には破壊の意志とかなくて……」

「残念ながら、そんなことは関係ないんだ」

クロノの声に、シユウが不愉快そうに眉をひそめた。

言い返そうとして、だが先にクロノが続ける。

「その子の存在に気づいた後になのはから話は聞いた。」

それから察するに、確かに破壊の意志などはないみたいだ」

「だったら……！」

「問題はそこじゃないんだ。存在していることに問題があるんだよ」

「……は？」

意味が分からずに、間の抜けた声を出してしまった。

存在していることが問題とはどういうことか。

それはつまり、消えろということなのか。

そう考えると怒りで思考が危うくなってきた。

拳を握りしめ、奥歯をかむ。

怒りに我を忘れそうになる。

だから、少女がどこか悲しげにシユウを見ていたことに、気づかなかった。

「今回発生した闇の欠片……」

唐突に少女が口を開いた。

シユウだけでなく、その場にいた全員が驚いたように少女を見る。

今まで無表情に黙り込んでいた少女が突然口を開けたのだから、当然と言えば当然か。

全員の視線を受けた少女は、その一つ、リンデイの視線をしっかりと受け止めていた。

「新しい闇の欠片が発生した地域の中心は、シユウの家ですね？」

「ええ……。もしかして、あなた……」

「これでも一応、マテリアルですから」

一度だけうなずき、少女はシユウへと視線を向けた。

表情は変わらずだが、その目はシユウのことを案じている。

少なくとも、シユウにはそう感じられた。

「シユウ。こんかいの闇の欠片ですが……。おそらく、原因は私です」

「え……。？ いや、どうして……。！」

「私のちよつとした感情の変化……。いえ、それは関係ないかもしれませんがね。」

私から漏れ出ている少しの力が集まって、闇の欠片になっているんです」

少女がため息をついて目を閉じた。

まるでシユウから視線をそらすかのように。

「私は……。消えなければ、いけません」

「……………」

その言葉の意味を理解するのに、たつぱり十秒かかった。

理解しても、その結果を想像するのにもまた十秒。

さらに混乱しそうになる思考を落ち着けるのに十秒。

その頃には、シユウの表情は顔面蒼白になっていた。

「そ、そんな……。消える必要なんか……。！」

助けを求めるように周囲に視線を飛ばす。

なのはとフェイトはその視線から逃げるようにうつむき、

リンディとクロノは小さく首を振っただけだった。

「……そんな……」

呆然とその場に立ち尽くすシユウ。

気がついた時には、振り返って走っていた。

部屋を出て、廊下を走り抜けていく。

自分でも何がしたいのかは、分からない。

逃げれば何かが変わる。そう、思ったのかもしれない。

「管理局の方々。お願いがあります」

シユウが走り去った部屋で、少女は抑揚のない声で言った。

「一週間だけ、時間をいただけませんか？」

「それは構わないけど……。一週間だけでいいの？」

「はい。それが、抑えられる限界です」

少女の言葉の意味が分からなかったようで、リンディはわずかに首を傾げた。

隣のクロノも眉をひそめていたが、やがて得心がいったように一度うなずいた。

「なるほど。今まで闇の欠片が発生しなかったのは、君が抑えていたからか」

「はい。ただ、もうそれも限界のようです」

いつから闇を抑えていたのか、いつ自分が抑えていることに気がついたのか。



そういったことを、少女は覚えていない。

だが、自分が抑えている感覚を持っていることだけは確かだった。

今回闇の欠片が現れたのは、それが限界に近いという証だろう。

「今後も闇の欠片が発生するかもしれませんが……。」

一週間だけ、処理をお願いしてよろしいでしょうか？」

「ああ、分かった。引き受けよう」

「私も協力する！」

クロノと、そしてなのはの力強い言葉に、少女はわずかに微笑んだ。

——悪くはないですね……。

シユウ以外の人に頼ることになるなど予想もできなかったが、悪くはないものだ。

「こちらでも、可能な限り解決策を模索してみるわね」

「はい。ありがとうございます」

少女はその場で一礼すると、静かに退室した。

池の側のベンチに座り、シユウは天を仰いでいた。

空は真つ黒な分厚い雲に覆われている。

その黒い雲は、まるで自分の心のようにだ。

——情けない。

そう思う。

本当なら自分は少女を支えないといけない立場だ。

それなのに、自分は逃げてしまった。

目の前の現実から、逃げてしまった。

「星光に……合わせる顔がないな……」

目を閉じ、黒衣の少女のことを想う。

逃げてしまった自分のことをどう思っているだろうか。

やはり落胆しているかもしれない。

「……消えてしまいたい」

ため息混じりにつぶやくと、

「それは困りますね」

「……!」

背後からの声に、シユウは勢いよく振り向いた。

そこにいたのは、いつもの無表情で立つ、思考にいた少女。

「貴方が消えてしまうと、私は少し寂しいです」

少女はそれだけ言うと、シユウの方へと歩いてきた。

目を丸くして固まっているシユウの隣に、静かに腰を下ろす。

そこで小さく、ため息をついた。

「……突然走って行ってしまったので、驚きました」

「……ごめん」

「別に構いませんよ」

いつもの表情で素っ気なく答える少女。

いつもなら無表情の中のわずかな変化や声の調子などで何となく察することができ  
る少女の気持ちだが、今は全く分からなくなっている。

自分が動揺しているのか、それとも少女が隠しているのか。

今はそれすらも分からない。

「……情けないよね」

「そうですね。情けないです」

即答し、断言する少女。

シユウは申し訳なさで小さくなるばかりだ。

「落胆、した？」

「……してないと言えば、嘘になりますね」

これにはわずかに躊躇ったのか、答えるのに少しだけ間があった。

「これから……どうなるの？」

「一週間だけ時間をもらいました。」

管理局側はその間に解決策を探してくれそうです」

その答えに、シユウの気持ちは少しだけ軽くなった。

なぜだろうか、クロノ達なら見つけてくれるような気がする。

それに、まだあと一週間の時間がある。

だが……。

「もし……見つからなかったら？」

「……………」

その沈黙が、明確な答えだった。

シユウは目を伏せ、言葉を探すが見つからない。

少女も何も言わず、ただじつと座っていた。

ゆつくりと雲が流れていく。

黒い雲は途切れることなく続く。

どれほどの時間が経つただろうか。

流れる雲に、小さな切れ間ができた。

「……………星光」

「はい」

シユウが顔を上げると、少女はうつすらと微笑んでいた。

……そう見えたが、気のせいだったのかいつもの表情に戻っている。

「一週間後、どうなるかは分からないけどさ……」

「はい……」

「少なくともそれまでは、一緒にいられるんだよね？」

しつかりとうなずく少女。それを見て、シユウは微笑んだ。

「じゃあ……」

シユウは立ち上がると、少女に手を差し出した。

「家に帰ろう」

その言葉に少女がわずかに目を瞠る。

しばらく唾然としていたが、やがてどこか嬉しそうな笑顔を浮かべた。

それは気のせいでも何でもなく。

笑顔をシユウに向けていた。

「はい。帰りましょう、シユウ」

一週間。

幸福な時間ほど、時は早く流れていく。

気づけばもう明日。

それだけ今という時間が満たされていたということだろう。

そんなことを最後の夜に話すと、

照れたような笑顔を浮かべて同意してくれた。

「結局、管理局から連絡はなかったね……」

最後の朝。シユウは気落ちした声でそうつぶやいた。

少女の方は小さく首を振って、

「まだ分かりませんよ。行けば、何か解決策が見つかるかもしれない」

まるで、自分に言い聞かせるような声だった。

——何を言ってるんだ、僕は。

なぜ、わざわざ少女を不安にさせるようなことを言ったのか。

そんな自分に自己嫌悪し、心の中で叱咤する。

どんな結果になろうとも、最後までこの少女を支えよう。

そう、心に決めて。

アースラの、リンディ達が待つ部屋。

その部屋の空気にどこか重たいものを感じた。

それだけで、察することができた。

解決策はない、と。

部屋の扉を見つめたまま、シユウは開けられずにただ立ち尽くしていた。少女も急かすことはせず、静かにうつむいているだけだ。相変わらずの無表情。

だが、今ではその無表情の中から感情を読み取ることができ。今は……。

「シユウ、行きましょう」

不意に少女が顔を上げた。

しっかりとシユウを見つめる瞳は、不思議な光をたたえていた。

「星光……。でも……」

「いいのです。いずれ……こうなることは分かっています」

寂しげな声音に、シユウは奥歯を噛みしめた。

自分では、どうすることもできない。

そんなことは分かっているはずなのに、自分の無力さに泣いてしまっそうだ。

「……失礼します」

シユウは小さな声でそう言うと、ゆっくりと部屋の扉を開いた。

部屋の中にいたのは、五人。

机で手を組み、悲しげに微笑むリンディ。

その隣で静かに目を閉じているクロノ。

部屋の壁側で泣きそうな表情をしているのは。

そのなのは心配そうに見るフェイト。

そして、目を伏せ表情を読み取ることができない、はやて。

はやてがいることに、背後の少女がわずかに息を呑む気配が伝わってきた。

「星光……？」

「いえ……」

少女がはやてを見ていると、はやても顔を上げた。

しばらく無言で見つめ合っていたが、やがて少女が頭を下げた。

何も言わず、ただ静かに。

それを見たはやては、再び目を伏せたただけだった。

「待っていたわ、星光さん」

リンディが笑顔を作ろうとして、しかし作れずに諦めた。

「……お待たせして申し訳ありません」

「そういう意味じゃなかったんだけど……」

「十三時にお願ひします」



その言葉に、部屋にいる全員が思わず少女を見た。

少女はリンディの目をまっすぐに見つめている。

シユウは少女の瞳を盗み見て、強い光が宿っていることに微笑を浮かべた。

「やっぱり……察しはついていたみたいね」

「これほど重たい空気なら、誰でも分かると思えますよ」

「それもそうね……。ごめんなさい」

そう言つて、頭を下げた。

「できる限りのことはしてみただけど……。分からなかつたわ」

「でしようね……」

部屋に入る前から分かつてはいたが、やはり改めて聞くとショックを隠しきれない。

——もう、どうしようもないのか……。

ふと少女を見ると、同じように自分を見ている少女と目が合った。

その目を見ただけで、彼女が自分を気遣っているのだと分かる。

今も気を遣わせてしまっていることに、シユウは情けなさや悔しさで泣きそうになつた。

「では十三時に、よろしくお願いします」

「ええ……。本当に、ごめんなさい」

「……………」

少女が初めて見せる表情を作った。

苦笑。

何を思い、何を伝えようとそんな表情をしたのか。

それを知ろうにも、その表情は一瞬で消えてしまい、もう知ることはできない。

「場所も指定させていた দিয়ে よろしいですか？」

「ええ、それぐらいはもちろん」

その後指定した場所を聞いて、シユウは無性に泣きたくなつたのを何とか堪えた。

十三時まではまだ時間がある。

その空いた時間を使って、シユウは少女と散歩することにした。

こうして散歩をするのも、会話をするのもこれで最後。

そう思うと、今にも涙が溢れそうになる。

目的地があるわけでもなく、ただただ歩く。

シユウが何も言わないように、少女も一言も発しなかった。

少女は今、何を思っているのだろうか。

「シユウー」

そんなことを考えていると、背後からの声に跳び上がりそうなほど驚いた。

振り返り、声の主を確認する。

黒衣の少女も振り返り、そしてまた息を呑んだ。

はやてが、そこにいた。

「はやて？ どうかした？」

「あ、えつと……。ちよつと言いたいことがあつて……」

そう言つて、少女へと視線を向ける。

黒衣の少女は、ただ黙つて見つめ返していた。

「……ごめんな」

「は？」

思わず間抜け声を出してしまふ少女。

その意表をつかれた呆けた顔は、少し新鮮だった。

「……何がですか？」

「あたしが……。あたしが闇の書を覚醒させてしまったから、こんなことに……」

「……後悔しているのですか？」

「……ううん、それはしてないけど……」

黒衣の少女は、どこか満足そうに微笑んだ。

一度だけうなずき、

「だったら、いいのです。

闇の書……夜天の書が覚醒したからこそ、今の貴方がいて、今の私がいま

「うん……。でも、もつとどうにかしたら、こんなことには……」

「選択の時は去りました」

少女が天を仰いだ。

気持ちのいい青空が広がる天空。

少女はまぶしそうに、そしてどこか悲しげに目を細めた。

「今は今の最善を尽くしましょう」

歌うようにそう言つて、踵を返した。

シユウとはやてを置いて、すたすたと歩いていく。

「……うん。そやね……」

うつむいてつぶやくはやて。

シユウは逡巡した後、黒衣の背中を追つた。

その後、二人はシユウの家へと一度戻り、昼食をとつた。

食欲があるわけではない。

ただ、せめて最後まではいいつも通りの生活を送りたいと思つただけだ。

「シユウ」

少女の呼ぶ声。

シユウはお箸を動かすのを止め、顔を上げた。

「どうしたの？」

「……いえ、何でもありません」

少女は小さく首を振ると、食事を再開した。

十二時。

いつもの公園の、いつもの池の側。

二人で一番多く来た場所。

そこが、星光の殲滅者が指定した場所だった。

二人は特にすることもなかったの、自然と足がここに向いていた。

側のベンチに二人並んで腰を下ろし、流れていく雲を眺める。

あと一時間の後には隣には誰もいないなど、想像すらできない。

しかし、それは紛れもなく刻一刻と迫ってきている事実だ。

「ねえ、星光」

「何でしょうか？」

シユウは少女の顔を見ない。

少女もやはり、シユウの顔を見ない。

「逃げたいって言うてくれたら、ぼくは全力を尽くす」

「言いません。……分かっていてるのでしょ？」

「うん……」

それきり、また黙ってしまう。

そのまま流れていく時に身を任せ、

しかしシユウは少女の手を握り、離さなかった。

やがて、十三時になった。

いつの間にか周囲に人影はなくなっている。

何かしらの魔法でそうしたのでろうか。

星光はすつと立ち上がると、シユウの手を離した。

「心残りは、ない？」

何もない場所からの声。

やがて目の前にリンデイが現れた。

その背後には、杖を持ったなのはとフェイトがいる。

「はい、ありません」

少女が淀みなく答えると、なのはが泣きそうな表情になった。

そのののに向けて、少女がうなずく。

なのは目を閉じると、うなずきを返した。

「始めましょう」

少女が迷わずにそう言う。

それは、自分の迷いを振り切るかのようだ。

なのはとフェイトが左右に移動して、杖を構える。

すると、青い魔法陣が大地に描かれた。

「では、シユウ」

少女が振り返る。

シユウをまつすぐと見つめ、シユウもその視線を受け止める。

止めることはしない。

いや、できない。

「お世話になりました」

少女は頭を下げると、その魔法陣の中に入っていった。

その中央で、もう一度振り返り、シユウを見る。

そして、目を閉じた。

——消える……。

シユウはその光景を漠然と眺めながら、

——……いやだ！

勢いよく立ち上がった。

驚いてなのはとフェイトがシユウを見て、黒衣の少女も顔を上げる。

シユウは魔法陣まで走っていき、

「だめだー！」

いつの間にかいたのか、直前でクロノに倒された。

うつ伏せになりながらも、シユウは必死になって少女の手を伸ばす。

「星光……いやだ、消えないで……！」

涙を流し、訴える。

なのはとフェイトは顔を伏せ、静かに涙を落とした。

少女は、

「シユウ……！」

悲しげに、微笑んでいた。

「今までありがとうございます。本当に、感謝しています」

「そんなのいいよ！ だから、まだ……！」

「いいえ、だめなんです」

少女はシユウの所まで歩くと、身をかがめた。



そしてその手に、何かを握らせる。

それは、小さな黒い石だった。

「私の欠片です。心配せずとも、それが闇の欠片を発生させることはありません」

「そんな、形見みたいに……」

「形見ですよ」

こともなげにそんなことを言つてのける。

シユウが言葉に詰まっている間に、少女は再び円の中心へ。

「星光！」

シユウが叫ぶ。少女が振り返る。

「ぼくは、ぼくは……！」

君のことを忘れない！ 絶対に、ずっとだ！」

少女がわずかに目を瞠った。

そしてどこか嬉しそうに目を細める。

「はい……。ありがとうございます。」

でも、時が来たら忘れてくださいね」

「無理！」

「ふふ……」

楽しそうに星光は笑った。

そして、天を仰ぐ。

「お願いします。なのは。フエイト」

魔法の光が強くなっていく。

少女の姿が見えなくなっていく。

「星光……！」

シユウがつぶやくのと同時に、

「貴方に出会えて良かった……」。

私の、本当の気持ちですよ……」

そんな声がかすかに聞こえて。

そして、星光の殲滅者はいなくなった。

本来の日常が戻ってきた。

黒い少女のいない日常が。

シユウは布団から出ると、しばらくぼうっとした後、

「朝ご飯、作らないと……」

つぶやき、動き始める。

そして机に、トーストの載ったお皿を置いた。

二枚。

「……何やってるんだ、ぼくは」

あの少女はもういない。

そのことを実感して、目頭が熱くなってくる。

「……星光……」

ポケットから小さな黒い石を取り出した。

あの少女が残していった欠片。

あれが夢ではないと証明する、たった一つのものだ。

——もう……あの子はいない……。

シユウは黒い石を胸に抱くと、そのままじつと動かなくなる。

その瞳から、涙が一筋流れ落ちた。

そして、シユウは顔を上げる。

「よし、学校に行こう！」

黒い石に紐をくくりつけ、首から提げる。

しっかりと固定されていることを確認して満足そうにうなずいた。

二枚のトーストを手早く平らげ、家を出る。

扉をしめようとして、

「……さよなら、星光」

最後に、小さな声でそうつぶやいた。

## chapter 1

## 宿題

『お願い！ 手伝って！』

夏休み終わり間近。シユウはそんな電話を受けて目を覚ました。現在いる場所は引越した先のマンションのリビングだ。布団を敷いてそこで寝ている。他にも部屋はあるのだが、掃除が面倒ということもあり、リビングとキッチンのみで生活していた。

朝九時頃、携帯電話が鳴って目を覚ました。うたた寝から起きて目をこすりながら電話に出ると、なのはからの助けを求める電話だった。魔法関係のものではなく学校のことでの。つまりは夏休みの宿題。

「まだやってなかったの？」

欠伸をかみ殺しながら言うのと、電話の向こうから、うんとどんよりとした空気が伝わってきた。思わず苦笑して、シユウは部屋の隅に置いてあるかばんを漁る。学校の荷物ほとんどがここに入れてある。もちろん宿題もだ。

「ちゃんと計画的にやらないと」

「うん……。分かつてはいたんだけど、ちよつと忙しくて……」

そうだろうなとは思ふ。なのはたちは管理局で働いている。嘱託魔導師としてなので毎日仕事というわけではないようだが、それでも仕事があつた日は丸一日潰れているようだ。その上、宿題そのものもかなり多い。さすがは私立というべきか。

「まあ、うん。暇だし手伝うよ。ただ見せることはしないよ。分からないところを教え  
てあげるだけだからね」

『本当に？　ありがとう！』

嬉しそうなのはの声。その後は集合時間を決め、高町家に集まることになった。どうやらフェイトとはやても追い詰められているそうで、三人で集まる予定らしい。アリスとすずかは別件の用事だとか。さすがに自分一人では心許ないので、シユテルたちにも声をかける許可をもらつておいた。

電話の後は早速シユテルたちの部屋へと向かう。現在はお隣なのですぐに会うことができる。自宅を出て隣のインターホンを押すと、すぐにシユテルの声が聞こえてきた。

『はこ』

「僕だよ」

返事はなく、すぐに扉が開かれる。シユテルが顔をのぞかせ、どうぞと招き入れてく

れる。

「どうかしましたか?」

「うん。ちよつと手伝つてほしいことがあつて……」

リビングに向かいながら苦笑しつつ言う。珍しいですね、とシュテルは少し驚いているようだった。相変わらず表情に変化がほとんどないが、今では何となく分かるようになってる。

リビングではディアーチエ、レヴィ、ユーリが勢揃いしていた。どうやら今日は全員休みらしい。のんびりと寛いでいるようだった。

「あ……。邪魔しちゃつたかな?」

たまには家族水入らずで、と思ひそう聞くと、ディアーチエがシュウを軽く睨む。

「もう家族も同然だと言つたであらうが」

「……そうだったね。ありがとう」

「……ふん」

顔を背けるディアーチエ。シュウは薄く笑むと、いつもの自分の席に座つた。シュテルがジュースを出してくれる。シュウはお礼を言いながら、それを少しだけ飲んだ。

「シュウ。手伝いというのは?」

「ああ、うん……。実はね……」

シユテルからの切り出しに、シユウは苦笑気味に電話でのやり取りを話した。シユウが話している間、シユテルは黙って静かに聞いていてくれる。全て聞き終えて、シユテルはどこか呆れたようなため息をついた。

「なるほど、事情は理解しました。私で良ければ協力しましょう」

「本当に？ 助かるよ」

「ふむ。では我も行くか」

そう言ってきたのはディアーチエだ。それを聞いたレヴィとユーリも早速出かける準備を始める。どうやら結局全員で行くことになりそうだ。

「時間だけど……」

「知らん。今から行くぞ」

「え……」

さすがにシユウが頬を引きつらせるが、すでにレヴィとユーリによつて支度が終わってしまっている。助け船を求めてシユテルの方を見ると、こちらは戸締まりの確認をしていた。シユウの視線に気づいて、首を傾げてくる。

——あ、だめだこれ。

この場にいる四人は今から行くつもりなのだろう。シユウだけが異論を唱えても受け入れられるとは思えない。シユウは小さくため息をつく、まあいいかと苦笑した。



「わー！ シュウ君、早いね！ シュテルたちも、いらっしやい！」

約束の時間よりかなり早く高町家に来てしまったが、幸いなのは笑顔で歓迎してくれた。なのはの案内のもと、リビングに向かう。リビングのテーブルには宿題が広がっており、フェイトとはやてが頭を抱えていた。学校ではあまり見ることできない、珍しい光景だ。

「フェイトちゃん、はやてちゃん。シュウ君たちが来てくれたよ」

なのはの声にフェイトとはやてが顔を上げる。そして少し目を見開いた。おそらくディアーチエたちもいたことに少なからず驚いたのだろう。二人が啞然としている間に、ディアーチエが静かにはやての側へ行き、問題集を取り上げる。我に返ったはやては大慌てだ。

「あ、待って王様！ それはまだ途中で……！」

「ここが違っておるな」

「え、うそ」

ディアーチエの指摘にはやての表情が固まる。問題集を返してもらったはやては一瞬の思考ののち、がくりと項垂れてしまった。

「あかん、やり直しや……」

陰鬱な声でつぶやくはやて。さすがにディアーチエもその様子に言葉を失っている。

なにやらしばらく内心で葛藤していたようだったが、やがてディアーチエははやての隣に座った。

「ええい、辛気くさい顔をするな！ 調子が狂う！ 見せてみる！」

「え、あ、うん……。はい」

「くっ……。なぜこういう時ばかり素直なのだ……！」

文句を言いつつも問題の解説を始めるあたり、やはりディアーチエは優しいなと思う。

その真向かい、フエイトの方にはいつの間にかレヴィがいた。同じように解説などしている。

レヴィが。

あのレヴィが！

「レヴィって賢いのっ？」

思わず声を上げるシユウ。それを聞きとがめたレヴィがあからさまに不機嫌そうな表情をする。

「ぶー。君はボクをなんだと思ってるんだ。ボクはマテリアルだぞ、賢いんだぞ！」

「……普段の言動があれだから……」

「ひびこー！」

二人のやり取りにフェイトがくすくすと忍び笑いを漏らす。優しげに微笑みながら、フェイトが言う。

「やっぱり仲がいいね。レヴィもシユウのこと好きそうだし」

「うん。好きだぞ。あとオリジナル、その解釈間違ってる」

「え……」

レヴィの指摘に一瞬固まり、フェイトはため息をついた。

そう言えば、とシユウは思い出す。シユテルに聞いた話だが、レヴィは精神こそ幼いがマテリアルの一基としてしつかりと知識は持っているらしい。そのため勉強などに関しては問題ないそうさ。もつとも、自分の興味の向かないことは長続きしないので勉強をするとなると話は別だそうだが。

「シユウ。なのはの方はお任せします」

シユテルに言われ、シユウとなのはが首を傾げる。シユテルが教えるものと思っていたが、どうやら違うらしい。

「昼食の用意でもしておきます。それまでがんばってください」

そう言って、冷蔵庫の中のを少し使いますよ、と断りを入れてからシユテルはキツチンへと向かっていった。

「……それじゃあ、やろうか。なのは」

「うん。よろしくね、シユウ君」

顔を見合わせて、微笑した。

昼食を終えた後も宿題は続く。本当に量が多いためいつ終わるのかも分からない。昼食後は、なのにはシユテル、フェイトにはレヴィ、はやてにはディアーチエが教えていた。シユウは三人でも分からない部分、つまりはこの世界独特のものを教えていく。ユーリはシユテルたち三人が休憩を取る時などのサポートだ。なのたちは三人は休憩せずにひたすら宿題に取りかかっている。

日が傾くまで続け、なののは家族も帰ってくる。勉強をしているところを見て、皆が苦笑していた。

日が暮れ、終わりの見えなかった宿題はようやくと残りわずかとなった。あとは読書感想文など、教えることができないものだけだ。

「私たちでできることはここまでですね」

そう言つてシユテルが立ち上がる。他の二人も同じところまで終わったのか、ディアーチエが小さくため息をつき、レヴィがテーブルに突っ伏した。どうやら全員それなりに疲れたらしい。

「みんな、ご飯食べていくわね？」

桃子の言葉にシユテルたちは少し悩んだようだが、せっかくなのでお言葉に甘える

ことになった。シュテルが桃子を手伝うためにキッチンへ向かう。

「まったく、少しは計画性を持って。たわけめ」

「うう……。おっしやると通りですう……」

テーブルに突っ伏すはやてとなのはとフェイトも疲れたようにうつろな表情で一言も発さない。管理局の仕事はそこまで忙しいのだろうかと思ってしまう。

——でもやめないってことは、本人たちはそれが好きなんだろうなあ……。

羨ましいと思う。将来がしつかりと定まっているということだ。それに対して、自分はどうだろうか。この先、自分はどうすればいいのか。シユウには分からない。将来のことを考えると不安で胸が苦しくなってくる。

「お待たせしました。夕食にしましょう」

シュテルの声。運ばれてくる料理。そして集まってくる高町家の面々。

大人数での夕食が始まる。楽しいな会話が交わされていく。シユウも時折話を振られては笑顔で返す。家族の団らんというのはこういうものなのだろう。

——今はいいか。

将来のことを今考えても仕方がない。とりあえず今は、目の前の夕食を楽しむことにした。

今日も夜は更けていく。高町家からは普段よりもずっと騒がしい、けれど楽しいげな笑

い声が聞こえてきていた。

## 第一話

それは願いを叶えた。そしてそれは今までの記憶と経験を放棄した。それは後のことを不安に思っていたのだが、きつと中のものがどうにかするだろう、そう判断していた。事実、残された魔力、本来は緊急用のものだが、それさえあれば人の一生程度は体を維持できるはずだった。

それが新たな意識を持ち、一年が経った。二人はまだ何かを願っていた。そしてそれは、無意識のうちに願いを叶えた。

始業式。校長先生を始めとする先生方の話を聞いた後、生徒たちはそれぞれの教室へと戻っていく。もちろんシユウも今は自分の教室にいて、自分の席でぼんやりとしていた。この後はホームルームの後に下校ということになっている。

今日は何しようか。今はそればかり考えていた。明日からは授業がある。自然とシユテルたちと会う時間も減ることになる。今日のうちにできるだけ遊んでおきたいなど、そんなことを考えていた。

「ちよつと、聞いてる？」

隣からの声にシユウは我に返った。視線を投げると、アリサと目が合う。少々不機嫌そうだが、何かあったのだろうか。

「さつきから何度も呼んでるのに……」

「……………めん、全然気づかなかった」

気づかなかったとはいえ、アリサを無視してしまつたらしい。申し訳なく思い素直に謝罪をすると、アリサはまあいいけど、とそっぽを向いてしまう。

「ホームルームの後にみんなで翠屋に行くんだけど、あんたもどう？」

「へえ。でもどうして僕を誘うの？」

魔法を知つた日以来、時折話をすることはある。だが仲がいいかと聞かれれば、どちらでもないと答える程度の間柄だ。それなのになぜ自分を誘うのだろうとシユウは首を傾げる。アリサが少し考える素振りを見せ、すぐに答えてくれた。

「ちよつと話をしたいだけよ。だめ？」

なるほど、とシユウはうなずきを一つ、アリサをよく観察する。シユウと視線が合うと、どうにも気まずそうな表情を浮かべ、すぐにそっぽを向いてしまう。次に、この会話を聞いているであろうなのは視線を向けると、困つたように眉尻を下げた笑みを浮かべていた。

それらを見て、シユウは内心でうなずいた。聞いたのかな、と。ならば自分の口から



しっかりと説明した方がいいようにも思う。ただ、それは今日でなくてもいいだろう。

「悪いけど、ちよつと別の用事が……」

「シユテルがケーキを焼いてくれるらしいわよ」

「行きます」

断る理由はなくなった。シユテルのケーキと聞いただけでよだれが出てくる。アリサはシユウの即答に啞然としていたが、やがて噴き出すように笑い出した。

「じゃあまた、ホームルームの後で。ちゃんと待つてなさいよ」

「了解です」

シユウの返事に、アリサも満足そうにうなずいた。

翠屋の隅の席でシユウたちは陣取っていた。ホームルームの後にはまつすぐにここに来ていた。途中でシユテルと合流するのだろうかと思つたが、結局ここまで来る間では会っていない。なのはたちの話では、後から来るとのことだった。

「お待たせ」

なのはがカウンターの方からこちらへと歩いてくる。その手にはお盆があり、人数分のケーキとジュースが載せられていた。

「言つてくれたら手伝つたのに」

重そうに運んできたなのはにシユウが言うと、なのははこれぐらいなら、と首を振る。

そして並べられるケーキ。無難にショートケーキだ。

「ごめんね、シユウ君。シユテルはもうちよつとかかるみたいだから、とりあえずはこれで我慢してほしいな」

なのはの申し訳なきような言葉に、気を遣わなくていいのにと思いながらもシユウは苦笑でうなずく。なのはが席に着いたところで、皆で手を合わせてフォークを持った。ケーキを切り取って、口に運ぶ。しつかりと味わって、シユウは思わず笑顔になった。

「うん。おいしい。さすがシユテル」

シユウ以外の全員がぎよつとしたように目を剥く。何をそこまで驚くのかと怪訝に思うが、今は目の前のケーキをもつと味わいたい。二口、三口と食べ進めていく。

「よく分かったね、シユウ」

フェイトの言葉にシユウは不思議そうに首を傾げた。どういう意味かが分からない、といった様子で。それを見た面々が呆れたような、しかしどこか羨ましそうな表情になる。

「お口に合ったようで何よりです」

カウンターから出てきたのはシユテルだ。桃子に会釈をしてからこちらへと歩いてくる。空いている席、シユウの隣に座った。

「どうして分かったの？」

興味深そうに聞いてきたのはさすがだ。シユウはどうしてと聞かれても、と少し困惑してしまふ。だが言われてみれば確かに微妙な違いではあるので、分かりづらいものもあるのだろう。

「味がちよつと違うから」

シユウがそう答えると、なのは以外の全員が首を傾げた。

「いつもの翠屋のケーキやと思うんやけど、ちやうの？」

「うん。ちよつと甘さ控えめ。僕好みの甘さ」

皆が一齐にケーキを口に運び、なるほどとうなずいた。

「言われてみれば確かに……。でもこれ、言われないと分からないわよ」

「僕がシユテルのケーキの味を間違うとでも？」

「……あ、そう」

一瞬言葉を失い、すぐにやれやれとアリサが首を振る。見れば他の面々もシユウの言葉に苦笑していた。理由が分からず助けを求めてシユテルの方を見ると、いつもの無表情でお茶を飲んでいた。一連の会話には最初から興味がなかったらしい。

ふと気づく。シユテルの前にはお茶のコップがあるだけで、ケーキはない。

「シユテル。ケーキは？」

「お気になさらずに」

「……………。じゃあ、はい」

シユウは最後の一口になっていたケーキをフォークで刺してシユテルの目の前へと持つていく。あまりに自然な行動に唾然としていたなのはたちだったが、こちらも自然とそのケーキを食べたシユテルを見て完全に絶句してしまった。

「…………ふむ。まだまだ改善の余地がありますね。桃子さんに教えを仰ぎましょう」

「相変わらず自分に厳しいなあ…………。おいしいと思うけど」

「光栄です」

そんなやり取りが交わされる。二人そろって飲み物を飲み、そろって一息つく。それを見ていたなのはたちは、顔を真っ赤にして黙々とケーキを食べ始めた。

「結局この間のこと聞けてないし！ 直接ちゃんと聞こうと思ってたのに！」

翠屋から出たアリサが叫ぶ。まあまあ、とすずかが宥め、なのはとフェイト、はやては苦笑していた。

「この間のことって、封印関係だよね。なのはたちから聞いてないの？」

「まるで他人事ね…………。一応聞いてはいるけど、詳しくは本人からって」

シユウは内心で得心した。どうやらなのはたちは自分に気を遣ってくれたらしい。あまり勝手に話していいものではないと判断してくれたのだろう。心の中で感謝しつつも、別にいいのにも思ってしまう。シユウはどう説明しようかなと考えるが、

「……うん。別に気にしないから、なのはカフェイトかはやて。よろしく」  
「シユウ君がそれでいいなら……。じゃあ、アリサちゃん、すずかちゃん。あとでまた教えるね」

なのはの言葉にすずかは素直にうなずいたが、アリサはどこか納得のいかない表情をしていた。だがシユウ自身、あまり自分で語りたくないことでもないのは確かだ。アリサもそんなシユウの心情を察したのか、それ以上は何も言つてこなかった。

その後は他愛ない話をしながらのんびりと歩く。この後は、なのはたちは一度解散して各自で昼食を取り、また集まる予定らしい。シユウもそれに呼ばれたのだが、さすがにそれは辞退した。女の子たちの中に男一人だけというのは、これでも結構恥ずかしいものがある。

樂しげに会話をしながら歩いて行く。シユウもそれに時折加わる。シユテルの方は無言だったが、なのはたちの会話はしっかりと聞いているようだった。

普通の学校生活。普通の登下校と友達との会話。今はそれが何よりも嬉しい。ここにおいて良かったと実感できる。自分に関しては少し普通ではない部分もあったが、シユテルがいれば普段通りの生活ができる。それがとても嬉しい。

——ずっとこの生活が続けばいいのに。

幸福感に包まれながらそんなことを思つた時だった。

「あれ、見ない子だね」

「ほんまやな。車椅子で大変そうやな」

「いやそれはやてもだから……」

「そうやった」

反対側からこちらへと来る子を見てそんな会話が交わされる。その会話を、シユウは一切聞いていなかった。視線はその車椅子の子に釘付けになっている。シユウは大きく目を見開き、顔を青ざめさせ、立ち止まって凍り付いていた。

「シユウ君？」

シユウの異常に気づいたのだろう、さすがが振り返って首を傾げてくる。だがシユウにはそんな声すら届いていない。ただただ車椅子の子を見つめるばかりだ。

シユテルも険しい表情をして車椅子の子を見ていた。真剣みを帯びたその表情に、遅れてシユウたちに気づいたなのはたちは首を傾げるしかない。一体どうしたのか、と。そしてその答えは、すぐに出されることになる。

「やっと思つけたよ。ちゃんと家に来てくれないと、困るじゃない」

いつの間にか車椅子の子が目の前まで来ていた。誰かの知り合いかとなのはたちはお互いを見るが、誰もが首を振るばかり。ただ二人、シユウとシユテルを除いて。

「久しぶりだね、お兄ちゃん」

その言葉に、なのはたちが一斉にシユウを見る。その瞳の色は様々だったが、ほとんどが困惑と心配によるものだった。シユウは車椅子の子、妹の言葉で我に返る。頬を引きつらせながら、妹をしつかりと見る。

「……ああ、久しぶり、文花」

文花と呼ばれた少女がゆっくりと笑顔を浮かべる。その笑顔を見て、なのはたちですら一步を引いて凍り付いてしまった。

S i d e : S t e r n

西崎文花。西崎ケインと西崎さくらの実の子である。魔力資質を持つてはいるが、両親の意向により魔法の存在は徹底的に伏せられている。

以前、シユウの両親を調べた時に彼の妹についても記載があった。だがその時は関係がなかった上に、魔法との関わりも持つていなかったようなので一切気にしていなかった。シユウの実家で顔を合わせた時はさすがに驚いたものだが。

せめてもう少し、シユウの両親から話を聞いておけばよかったと今になって後悔する。これほどの表情を見せられるとは思ってもみなかった。

親愛。憎悪。殺意。様々な感情がない交ぜになった少女の笑顔は、とても凄絶なものだった。ただの人間にこのような表情ができるとは思ってもいなかった。それだけ、

この少女が持つシユウへの感情は強いものなのだろう。  
良くも悪くも。

「友達と一緒に帰っておしやべりだなんて、気楽だね」  
笑う。嗤う。凄絶に嗤う。

「お兄ちゃんと話をしに来たよ。……逃げないよね？」

少女の言葉に、シユウはゆっくりと、とても長いため息をついた。  
シユテルはそんなシユウの手を、誰にも気づかれないようにそつと握った。



## おはぎ

ある日の日曜日。シユウは朝日が昇る前に目を覚ました。近所迷惑にならないように静かに布団を片付け、そして空いたスペースの床に正座する。目を閉じ、黙禱。思うのは、実家に住んでいた頃に隣に住んでいた青年のこと。自分のせいで亡くなったしまった青年のことだ。本来ならお墓へと挨拶に行きたいところではあるが、彼の家族と鉢合わせしたくはなかったし、それ以前にまず場所を知らないというのもある。

古い記憶を呼び起こしながら、シユウは黙禱を続けた。彼岸の期間のうち、日曜日はいつもこの黙禱から始まる。こんなことは偽善にもならない自己満足なのだろうが、いつの間にか習慣のようなものになっていた。

長い時間黙禱を続け、やがてシユウは目を開けた。窓から外を見ると、少しずつ空が明るくなっていく。シユウは立ち上がると、毎週日曜の恒例である部屋の掃除を始めた。

日曜日は七時頃にシュテルたちの部屋に行くことになっている。約束をしているわけではないが、いつの間にか暗黙の了解になっており、行かなければ心配された上で迎

えに来られる。今日もシユウは七時前に部屋を出て、シユテルたちの部屋へと向かう。歩いて十秒足らず。とても楽だ。

リビングに向かうと、すでにレヴィとユーリがテレビの前で待機している。七時からの特撮番組を見るための毎週の光景だ。もう一人、ディアーチェは読書。ディアーチェがここにいるということは、シユテルが朝食の当番なのだろう。

「おはよう」

そう言うと、三人がそれぞれ反応を返してくれる。レヴィとユーリは振り返って笑顔で、ディアーチェはちらりと一瞥してくるだけだが、挨拶はしっかりと返してくれた。

「おはようございます、シユウ。もうすぐできますよ」

キツチンの方からエプロン姿のシユテルが顔を出した。

テーブルに並べられていく朝食は、ご飯と焼き魚、お味噌汁といったもの。皆で手を合わせ、食べ始める。レヴィとユーリは行儀悪くテレビを見ながら食べているのだが、これに関してシユテルとディアーチェが怒ることはない。ディアーチェ曰く、むしろ静かに食べられるからもつと見ておけ、とのことだった。

朝食を終えての片付けはシユウとレヴィ、ユーリの担当だ。その間にシユテルとディアーチェは部屋の掃除や洗濯など、家事全般をこなしていく。洗い物が終わった三人は、シユテルとディアーチェの手伝いだ。

「さて、では今日の予定だが」

家事が終わればディアーチェが今日の予定を告げる。囑託魔導師としての仕事があればこの時に誰が行くか決めるそうだが、日曜日は彼女たちも休みと決めているらしく、今日も仕事に関しての話はなかった。

「予定はない。せつかくの休日だ、好きに過ごせ」

そう告げるだけ告げて、ディアーチェは席に座って読書を始めてしまう。出かける予定がなければ、これもいつものことだ。レヴィとユーリはどうやら外に遊びに行くらしく、出かける準備を始めていた。

——さて、どうしようか。

シユウも当然ながら予定などはない。シユテルはどうするのかと姿を探してみると、キツチンで何かの準備を始めているようだった。しばらくその様子を眺めていると、視線に気づいたのかシユテルが振り返る。思わずシユウが照れ笑いを浮かべると、「シユウ。お暇なのでしたら手伝っていただけますか？」

シユテルからそんな申し出があった。

シユテルと一緒に家を出て、近くのスーパーへ向かう。おやつに何かを作るらしいが、何をかまでは聞いていない。材料で分かると思いますが、とのことだった。おやつに材料にさほど詳しくないのだが、それでも分かるのだろうか。

シユテルと一緒にスーパーの中を歩く。買い物かごを持つのはシユウの役目だ。ついでに夕食の買い物も済ませるつもりらしく、野菜や精肉コーナーも見て回る。豚肉にジャガイモ、人参……。カレーの材料ばかりなのでカレーかと思ったが、肝心のルウを入れていない。それに三日ほど前に食べたところなので、さすがに違うだろう。

「……肉じゃが?」

カレーと共通する材料で連想してそう聞いてみると、シユテルはシユウをちらりと見て、一度だけうなずいた。正解です、と。

「……あれ? おやつは?」

「これから買いますよ」

そう言ってシユテルが買い物かごに入れたのは、餅米と小豆、きなこだ。少し首を傾げたシユウだったが、今日が何の日だったかを思い出し、手を叩いた。

「おはぎか!」

「はい。作るのは初めてなのでうまく作れるかは分かりませんが……」

「僕もできるだけ手伝うよ。……作り方知らないけど」

「図書館で作り方の本を借りておきました。私は覚えてありますので、そちらはシユウが見てください」

このためだけに覚えたのか、とシユウは驚くが、シユテルのことだ。覚えようとして

覚えたのではなく、興味を持って読んだら覚えてしまっただけだろう。シユテルの足を引つ張らないように、帰ったら自分も覚えようと思う。

「では帰りましょうか」

シユテルはシユウからかごを受け取ると、レジへと向かっていった。

帰宅後、昼食を済ませ、シユウは料理の本を借りておはぎのページの熟読する。それほど難しくはないようだが、万が一にも手順が抜けて迷惑をかけるということにはなりたくないのです、しっかりと頭にたたき込んだ。

覚えてからキッチンに立ち、シユテルと一緒に作業へと入る。シユウは餅米を洗って炊くまで、シユテルはあんこを作るまでだ。シユウの方が簡単すぎる気がするが、シユテルの指示に従っておく。

やがて餅米が炊き終え、あんこも出来上がった。二人で並んで成形していく。シユウは餅米をあんこで包み、シユテルはその逆でさらにきなこをまぶしていく。きなこには砂糖を入れていないようだったが、砂糖を入れると水分が出てしまうからだそうだ。

途中で交代して、今度はシユウがきなこをまぶしていく。一個一個丁寧に。そしてさらにしばらくしてまた交代。その繰り返し。

「……ちよつと待つて。多すぎない？」

「なのはにも頼まれましたので。あとはアースラの方たちにも」

アースラはともかく、なのはは少し意外だった。桃子が作っていいようなものだが。

夕方になる頃によくやく全ての成形が終わった。お疲れ様でした、とシュテルが言つて、シュウもお疲れ様と笑顔で返す。シュテルはあんこのおはぎを手に取ると、シュウに差し出してきた。

「味見しましょうか」

「ああ、そう言えば食べてなかったね」

シュテルからおはぎを受け取り、半分かじる。甘過ぎないあんこでシュウの好きな味だ。さすがシュテル、と思っていると、残りの半分をシュテルが横からぱくりと食べてしまった。

「へ？ しゅて、る……？」

「なるほど……。それなりの出来、としておきましょうか。機会があればもう一度作りたいですね」

シュテルは何も気にしていないのか、今度はきなこの方を手に取った。それを半分食べ、一人うなずいている。シュウは固まったままだ。そのシュウの目の前へと、半分になつたきなこのおはぎが差し出される。

どうぞ、とシュテルが言う。すぐに意図を察して、しかしシュウは動けずにいた。頭が真っ白になっている。なんだろう、この状況は。

「シユウ?」

シユテルが首を傾げる。シユウはシユテルに見つめられるのが恥ずかしくなり、そのきなこのおはぎをシユテルの手から食べた。何度も租借する。ほどよい甘さ……なのだろうが、先ほどより味が分からない。もう何も考えられない。

「どうですか?」

シユテルの問いに、シユウは何とか笑顔を浮かべて答える。

「うん。美味しい、よ」

「そうですか。では私はなのはたちへ持つて行つてきます。シユウはゆっくりしててください」

そう言つてシユテルはパツクへとおはぎを詰めていく。そして一礼してキッチンを出て行く。シユウは呆然としたままその後ろ姿を見送つた。

「……なんだこれは」

リビングで読書をしていたディアーチェが呆れていることに、シユウは気づいていない。

シユテルが戻つてくる頃にレヴィとユーリも帰つてきた。テーブルに並べられたおはぎを見て、レヴィが目を輝かせる。先に手を洗つてこい、というディアーチェの言葉に従い、流しへと走つて行つた。

「急がなくとも消えはしないというのに」

「あはは……」

「ディアーチエのため息交じりの言葉にシユウは苦笑。シユテルと共にお茶とジュースを用意する。シユウとシユテル、ディアーチエは熱いお茶、レヴィとユーリはオレングジューズだ。それをテーブルに置いて、レヴィとユーリが戻ってきたところで手を合わせた。

「やわらかくておいしー!」

レヴィが次々に食べていく。その様子を見てみると、作った方としてはとても嬉しくなる。最も難しいだろうあんこを作ったのはシユテルだが、それでも嬉しいものだ。

「ねえシユテル、青色はないの?」

「ありません」

「ぶー」

レヴィが口をとがらせる。シユウは何を使えば青色のおはぎが作れるだろうと考えるが、答えは出なかった。というよりも、青色のおはぎを想像したところで気持ち悪くなつてやめた。

「ふむ。なかなかよくできておるな。さすがはシユテルだ」

「ですね! とつても美味しいです!」



「光荣です」

「ディアーチェとユーリの言葉に、シユテルが小さくうなずいた。ですが、とシユテルが続ける。

「シユウにも手伝ってもらいました」

「シユウにも？　なるほど、共同作業、ですね！」

「げふっ！」

ユーリの無邪気な言葉に思わずむせてしまう。もちろんユーリに他意はないのだから、シユウはずっと味見のことを忘れずにいた。自分が食べたものをシユテルが食べ、シユテルが食べたものを自分も食べ……。思い出すだけで顔が赤くなってくる。何度もせきをしていると、目の前のお茶が差し出されてきた。

「大丈夫ですか？」

シユテルの言葉。シユウは礼を言って受け取り、何口か飲む。そして気づいた。

——あれ、僕のコップ、別にあるよね……。

視線をシユテルの前へ。コップがない。他の皆の前にはしつかりとコップがある。つまりは。

シユテルのコップ。

——これって……間接……。

さらにシユウの顔が赤くなる。心配そうに顔をのぞき込んでくるシユテルへとコップを返し、顔を隠すようにうつむいておはぎを食べる。

そしてふと見ると、シユテルが首を傾げながらお茶を飲む。返されたコップで。

「これは……あれかな。意識されてないってことなのかな」

ちびちびとおはぎをかじりながら、シユウはそんな言葉を小さくこぼす。それを聞いた、聞いてしまったディアーチエは、やれやれといった様子で首を振った。

S i d e : S t e r n

夕食後。おはぎはまだまだ余っていたので、それらをパックに入れて自宅へと戻るシユウに持たせた。一緒におはぎを作った後、どうも自分と視線を合わせようとしてくれない。おはぎを渡した後は逃げるように帰ってしまった。テーブルに食べかけのおはぎを残してしまうほどに。

——何か気に障ることをしてしまったのでしょうか。

そう考え記憶を探るが、心当たりがない。王に聞いてみても、知らんとそっぽを向かれてしまった。

——明日、聞いてみましょうか。

シユテルはテーブルにある余りのおはぎをパックに入れていく。冷蔵庫に入れてお

けば明日でも食べられるだろう。捨ててしまうのはもったいない。だが、シユウが残りていつてしまったおはぎの処理には少し困ってしまう。食べかけのものをパツクに入れてしまうのは気が引けた。

仕方がないですね、とシユテルは独りごち、そのおはぎを手を取った。しばらく動きを止め、そして口に入れる。なぜだろうか、妙に甘く感じてしまう。しっかりと味わつてから嚙下し、そしてすぐに片付けを再開した。

デイアーチェはそのシユテルの頬がわずかに朱に染まっていることに気づいてはいしたが、あえて何も言わない。ただ本日何回目かも分からないため息をつき、そして薄く笑っただけだった。

## 第二話

マンションのシユウの部屋、そのリビングにシユウと文花は机を挟んで、向かい合つて座っていた。文花の前にはオレンジジュースとお菓子が置かれているのだが、手を着けようとはしていない。それがとても寂しいのだが、仕方がないことだとも思う。

隣のキッチンにはシユテルとなのはたちもいる。自分のことを心配してくれており、ここまで来てくれている。さすがに同じ部屋にいてもらうことなどできないが、それでも隣にいると思うだけで心強い。

「お兄ちゃん」

文花の言葉。無表情に見つめてくる文花の瞳を見つめ返す。文花の目が不愉快そうに少し細められた。

「お父さんとお母さんから、いろいろと聞いたよ。魔法のこと。ロストロギアのこと。……お兄ちゃんのこと」

そうだろうとは思っていた。今まで会いに来ようとはしなかった文花が突然ここまできたのだ。考えられる理由としては、父と母が妹に全てを話したことぐらいだ。ただ

それでも、わざわざ会いに来るとは思えないので、他にも理由か、もしくは目的があるのだろう。

シユウは一言も返さずに、じつと文花の言葉を待つ。逆に文花はシユウの言葉を待っていたようだったが、シユウが何も言わないことを察して言葉を続けた。

「お兄ちゃんのせいだね」

何が、とは言わない。言われなくても分かる。シユウは文花の足を見る。二度と動かない足。両親の魔法ですら治せなかった足。その原因。シユウは静かに目を伏せると、重々しくうなずいた。

「ああ、そうだね。あの時の事故は僕がいたから引き起こされたものだ。だから、文花が歩けなくなったのは僕のせいだ」

否定はしない。言い訳もしない。そして謝罪もしない。文花がそれを望んでいないことは分かっている。この妹が自分に望むのは謝罪ではなく贖罪だ。文花が望むのなら、自分のできることなら叶えてやりたいと思う。

だが、文花はそれ以上の言葉を続けなかった。リビングをゆつくりと見回し、鼻を鳴らす。

「お兄ちゃんって、今は幸せ？」

予想していなかった問いかけ。シユウは怪訝そうに眉をひそめながらも、一度うなず

く。その瞬間、文花が嗤った。

「ひどいね。私の足を奪ってにおいて。私を不幸にしておいて。お兄ちゃんは幸せなんだ」

お兄ちゃんばかりずるい。文花の言葉に、シユウはわずかに目を見開き、うつむいた。もちろんシユウもここに来て、この土地に来て苦労しているのだが、それでも自由はあった。だが、文花はどうだろうか。一人で歩くことすらできず、日常生活もままならないだろう。その苦しみがどれほどのものか、シユウには分からない。

「お兄ちゃんのせいなんだから、ちゃんと、聞いてくれるよね」

シユウが顔を上げると、文花が優しげに微笑んだ。自分へと手を伸ばし、手のひらを出す。自分の方へと誘うかのように。

「帰ってきてよ」

短い言葉。まるで赦しを与えるかのような言葉。すがりつきたくなくなる言葉だが、その言葉に隠されている意図をシユウは正確にくみ取った。それと同時に、思わず苦笑を漏らしてしまう。文花が不愉快そうに目を細め、差し出していた手を引つ込めた。

「そんな反応、するんだ？」

冷たい無表情になった文花に言われ、シユウは肩をすくめた。

「文花が言いたいのはつまり……。一生、自分のために尽くしてことじゃないの？」

「ふふ。さすがお兄ちゃん」

シユウの察しの良さに文花がまた嗤う。背筋が冷たくなる笑みをシユウは真正面から受け止め、内心でどうしたものかと困惑する。自分の妹はとんでもない性格になってしまっているものだ。

「私の言葉に従って、私のために働いて、私のために生き続けてよ」

「……奴隷になれってことかな」

「そうともいうね。でも、人の人生を奪った対価としては安いものでしょう?」

文花の言葉に、シユウは神妙な面持ちでうなずいた。他の人が聞けば安くはないと言うだろうが、自分にとっては破格もいとところだ。妹の足が治るならこの命を捧げてもいいとすら思っていたこともあったのだから。だが、それは自分一人だけの問題ならの話だ。

シユウはシユテルたちに助けられ、多くの人に見守られながら今を生きている。そんな自分が妹のためだからと人生を捧げることはできない。だからシユウは首を横に振った。

「悪いけど、それはできないよ。文花」

「……どうして?」

「僕はいろんな人にお世話になったんだ。いや、今もお世話になってる。それなのに、そ

の恩を全て捨てて文花のために生きることができない」

「なにそれ。結局、私のことはどうだつていいつてことじゃないの？ 自分の不幸を私に押しつけて、あとは知らんぷり。そういうことでしよう？」

違う。そうじゃない。そう言つても文花は納得しないだろう。しようとしないう。

そして、その理由もシユウは何となくだが察することができた。

だからこそシユウは、うなずいた。

「ああ、そうだよ。文花の人生なんてどうでもいい。僕は今の生活を守る」

恨むといい。憎むといい。そのために自分は存在し続けよう。

文花は目を見開いてしばらく固まっていたが、やがて冷たくシユウを睨み付けた。そして何も言わずに部屋を出て行くこうとする。シユウも何も言わず、部屋の扉を開けてやった。

「……お兄ちゃんだけが幸せになるなんて、認めない。許さない。絶対に」  
文花の小さな言葉。シユウは静かにそれを受け止めた。

S i d e : S t e r n

隣の部屋でそれを聞いていた一同は、それぞれ異なつた表情をしていた。



アリサが苛立ちを露わにしながら小声で言う。

「なにあれ。逆恨みもいいところじゃない。シユウが望んで引き起こしたわけじゃないんでしょ？」

「そうだね。ちよつとひどすぎると思う」

「さすが悲しげに目を伏せる。あんな恨み辛みの言葉を真正面から受けて、シユウは大丈夫なのかと。」

「こんなことはあまり聞きたくないんだけど……。はやて。その……」

「フェイトの遠慮がちな言葉。はやてはその言葉の続きを理解して苦笑する。気を遣わなくていいのにと。」

「まあ、確かにかなり不便ではあるよ。世の中を恨むのも分からんでもない。でもなあ、あれは行き過ぎや。特に不幸かどうかの話なんて本人次第やろ」

「あたしは今では幸せやし、とはやてが締めくくる。はやての事情も特殊なものだが、それでも理解はできる。少なくとも、先ほどの文花の言葉よりは。」

「最後の方、シユウ君は文花ちゃんを怒らせるような言い方をしてたね……。どうしてかな」

「なのはが気になったのはその点だった。謝罪も言い訳もせず、むしろ自分に怒りの矛先を向けるように感じていたと感じた。シユテルへと視線を投げると、シユテルは少し

難しい顔をしていたが、なのはの視線に気がついて口を開いた。

「おそらくですが。実際にシユウは、矛先が自分に向くようにしていたのだと思います」  
「やっぱり？」

「はい。私の印象ですが、フミカという方は理解力がある聡い人だと感じました。それでもシユウを憎み続けているのは、その感情故でしょう。そしてシユウに非はないと理解してしまえば、その感情はどこに向けられるのか」

シユテルが部屋を出て行く。なのはたちが驚きながらもそれに続いてくる。シユテルの視線は、扉の前で立ち尽くすシユウだ。その背中は寂しげで、小さく見える。

「納得のいかない感情の矛先は、次は別の何かに向けられます。両親かもしれないけれど、世の中そのものにかもしれませんね。そうなれば、本当にやり直しがきかなくなるでしょう。シユウは、それなら自分を憎み続けてくれた方がいい、とそう判断したのでしょうか」

シユテルの声が聞こえたのだろう、シユウが振り返った。シユテルと目が合い、力なく笑う。とても悲しげな笑みだった。

「せめて、もう少し精神的に余裕を持てれば良かったのでしょうかね。感情も納得させることができるぐらいには」

フミカはまだ幼すぎる。頭で理解はしていても、感情が納得できない。それ故にその

原因となったシユウを憎み続ける。例えシユウに非がなかったとしても、憎まなければ自分を見失ってしまうから。自分の存在意義のためにシユウを憎み続けているようなものだ。

シユウは、間違つてないよと肯定するかのように静かにうなずいた。

「僕の選択は……間違つていたかな？」

泣きそうなほどに震える言葉。なのはたちはそれに答えることはできない。シユテルはしばらく考えた後、分かりません、と首を振った。

「正しくはないのでしよう。けれど、間違つているとも言えません。これは貴方たち兄妹の問題ですから」

シユテルの言葉に、そうだねとシユウはうなずいた。

Side: Hero

なのはたちの帰宅後、シユウはシユテルをリビングへと通す。手の着けられていないジューズとお菓子があるままだ。新しいものを用意するためにキッチンへと向かおうとしたが、シユテルは構いません、とオレンジジューズに口をつけた。

「ごめんね、シユテル。嫌な思いをさせちゃって」

自分と文花の問題にシユテルたちを巻き込み、きつと嫌な気分にならせたこと

だろう。頭を下げると、しかしシュテルは首を振った。

「二人で抱え込む必要はありません。貴方たちの問題に私が手を出すことはできませんが、支えることぐらいはさせてください」

シュウは目を睜り、すぐに悲しげに微笑んだ。ありがとう、と短く答える。シュテルがいてくれて良かったと心から思えた。

「一つだけ……お願いしてもいいかな？」

「何なりと」

「手……繋いでいい？」

シュテルが首を傾げ、しかしすぐに手を差し出してくる。シュウは照れくさそうにながらも、その手を握らせてもらう。

——ああ……。温かいな……。

「シュウ……。どうして泣いているのですか？」

言われて初めて、シュウは自分が泣いていることに気がついた。顔に手をあて、不思議そうに呆然とする。自分でも理由が分からない。なぜ涙が出てきたのか。

——……いや……。

文花との和解が叶いそうにない。それどころか、このままいけば一生文花に恨まれ続けるだろう。そのことを考えると、胸が締め付けられるように苦しい。そこまで考え

て、気づいた。自分は文花に許されたかったのかもかもしれない、と。

「……丸くおさまってめでたしめでたし……とはいかないね……」

シュウのつぶやきにシュテルの手を握る力が少しだけ強くなったような気がする。顔を上げると、真剣な表情のシュテルと目が合った。

「ここには私しかいません。だから、我慢しなくてもいいですよ」

シュウが顔をゆがませる。涙が止めどなく溢れてくる。小さく嗚咽を漏らし始めたシュウの頭を、シュテルが優しく撫でてくれる。その温もりに身を任せながらも、シュウは嗚咽を漏らし続けた。

妹が正しく生きるためには、自分を恨み続ける歪みが必要だ。ならば妹を守る兄として、自分はその矛を受け続けよう。それが自分の贖罪だ。

結局シュウは、その結論にしか至れなかった。

## ユーノ

ある日の昼下がり。シユウはシユテルと一緒に高町家に向かつていた。シユテルと並び、のんびりと歩いて行く。

数日前、なのはからシユテルに念話での連絡があつたらしい。曰く、ケーキを焼いてみたいので作り方を教えてほしい、とのことだ。母に聞けばいいのではと思つたが、仕事で忙しいだろうからと話してすらいなとのことだつた。

特に予定もなかつたそうのでシユテルは引き受けたそうだ。その時の条件として、なぜかシユウの同行の許可を求めたそうだが、理由は分からない。

高町家に到着すると、すぐになのはが出迎えてくれた。笑顔でいらつしやい、と言つてくれる。

「ごめんね、シユテル。こんなこと頼んじやつて」

「構いません。この程度ならいつでも引き受けられます」

二人がそんな会話を交わしながら廊下を歩く。シユウはその少し後をついて行く。やはり自分が来た意味が分からなくなる。自分がいない方がいいのではないだろうか。

リビングに入ると、すでに先客がいた。見たことのない男の子だ。こちらに気がつく  
と、笑顔で手を上げてくる。

「師匠も来ていたのですか」

シユテルの言葉にシユウが目を見開いた。男の子をもう一度見る。年は自分と同じ  
ぐらいに見えるし、とても大人しそうだ。この子がシユテルの先生なのか。

「いや違うから！ いい加減それやめないかな！」

「なのはの師匠なら私の師匠でもあります」

「何度も言ってるけどその理屈が分からない……！」

なるほど、とシユウは納得した。シユテルの表情をよくよく観察すると、どこか楽し  
げな印象を受ける。本気で言っているのかまでは分からないが、どうやらいつものやり  
取りらしい。

「シユウ君。紹介するね。こちらユーノ君。私に魔法を覚えてくれた人」

なのはがユーノの隣に立ってそう言っ、次にシユウへと手を向ける。

「ユーノ君。こちらが秀一君。シユテルが助けた子」

「ああ、そうか。君が……」

ユーノが少し驚いて、すぐに笑った。立ち上がって、シユウへと歩いてくる。手を差  
し出して、

「初めまして。ユーノ・スクライアです」

「あ、ご丁寧にどうも。西崎秀一です。親しい人からはシユウと呼ばれています」

差し出された手をシユウもしっかりと握り返す。

「では僕もシユウと呼ばせてもらってもいいですか？」

「もちろん。あ、あと敬語もなしで。疲れてきた」

「あはは。了解」

二人で笑い合う。ユーノとは気が合いそうだと感じた。その二人を見てシユテルとなのはがどこか満足そうにしていたのだが、そんなことに二人は気がつかなかった。

シユテルとなのはがキツチンへ向かってからは、シユウはユーノとの談笑を続けた。どうやらユーノはなのはから自分のことをそれなりに詳しく聞いているらしく、シユウも気兼ねなく話すことができた。

「無限書庫だっけ。たくさん本があるんだね。どれぐらいあるの？」

「さあ……。まだまだ整理が追いついてなくて、把握できてないんだ」

へえ、とシユウはどんな場所なのだろうかとイメージする。大きな図書館のようなものをイメージしているのだが、ユーノの話からすると違うのだろうか。どれほどの量の本があるか分からないが、とても興味がある。

「いつか行ってみたいな。他の世界の本とかすごく魅力的だし」



「そうだね……。もしも来る時が決まったら案内するから、その時は連絡して。僕も休みを取るから」

ユーノの言葉にシユウは顔を綻ばせた。そんな機会があるのかすら今はまだ分からないが、いつかきつと行こうとは思う。

「ユーノも次にこつちに来る時は連絡してよ。他の世界の話とか、いろいろ聞きたい。アースラの人たちはいつも忙しそうだから、そういった話ができないから」

「分かった。僕もシユウと話するのは楽しいから、ちゃんと時間を作ってまた連絡するよ」

何となくだが、ユーノとはやはり気が合うようだ。ユーノもそう思ってくれているらしく、快く約束してくれる。同じ男相手ということもあり、気兼ねなくいろいろと話ができそうだと思う。今日は残念ながらあまり時間がないようだが、いずれもつとゆつくりと話したいものだ。

「お待たせ」

キッチンからなのはが戻ってきた。その手にはホールケーキ。テーブルに置くと、それを丁寧に四等分する。シユテルもすぐに出てきて、こちらはジユースを用意していた。

「どうぞ、ユーノ君」

なのはがユーノへとケーキとジュースを差し出す。シユテルの方は無言だが、いつものように自分に差し出してくれる。二人は笑顔で礼を言つて受け取り、なのはとシユテルの準備が終わるのを待つ。

「感想聞きたいから食べてほしいかな」

なのはのその言葉に、シユウとユーノはケーキを口に運んだ。しつかりと味わう。シユウにとつてのいつものケーキの味に近いが、少しだけ違いがあるのはなのはがいるからだろう。いつもより甘さがほんの少しだけ強い。もちろんこれはこれで美味しいが。

「うん。美味しい」

シユウとユーノが同じ感想を口にする、なのはが嬉しそうな笑顔になった。良かった、と胸をなで下ろしているようだ。

「ところで、どうして急にケーキを？」

着席したなのはに聞いてみると、なのはは照れくさそうに、

「ユーノ君が遊びに来ることになったから、せつかくだからと思つて……」

それを聞いたユーノが少し驚いたように目を開き、なのはを見るが、

「大切なお友達だから」

なのはの言葉に肩を落としていた。それを見てシユウは何となくユーノの気持ち

察する。どうやらなのはは自分に向けられる好意にはかなり鈍感なようだ。

「ユーノ。がんばれ」

小声でそう言うと、ユーノは小さくため息をつきながらうなずいた。

「シユウもね」

ユーノがちらりとシユテルを見る。黙々とケーキを食べ続け、いつからそうしていたのか、手元に置いたメモ用紙に何かを書き連ねていた。内容から察するに改善点だろうか。その間、シユテルはこちらを一度たりとも見ていない。

シユウとユーノは視線を合わせると、お互いに長いため息をついた。

帰宅後。シユウはシユテルに頼まれ、自分の部屋に彼女を招き入れていた。自室といってもリビングだが。そこでシユテルは小さなケーキを取り出し、シユウへと差し出してきた。

「いつものものですが」

「おお。ありがとう!」

嬉しそうにシユテルのケーキを食べ始めるシユウ。こちらはシユウの好みの味だ。幸せそうな表情で、シユウはケーキを食べ進める。

「さすがシユテル。すごく美味しい!」

「光荣です」

シユテルもシユウの隣でケーキを食べ始める。二人だけでのんびりと。

シユテルは自分のことをどう思っているのだろうか。本人からしつかりと聞けたことはないので気になるところではあるが、聞く勇氣もシユウにはない。ただ、それでもこうしてよく一緒にいることが多いのはユーノの立場と違うところだろう。そう考えると、ユーノと違って自分はきつと恵まれている方だろう。

好きな人と一緒にいられるのだ。十分すぎるほどに幸せだ。  
「機嫌がよさそうですね。どうかしましたか？」

シユテルが首を傾げながら聞いてくる。シユウは笑顔のまま首を振った。  
「何でも無いよ。気にしないで」

「そうですか」

今日もシユテルと一緒にいられる。今日は新しい友達ができた。今日もとてもいい日だ。

そしてシユテルのケーキを味わいながら、シユウは新しい友人へと心の中でエールを送る。

がんばれ、と。

そう思うのと同時に、自分もがんばらないとなと思わず苦笑してしまった。

## 第三話

文花と部屋で話をした翌日。今日も当然ながら学校がある。起床したシユウは文花との会話を思い出し、陰鬱な気分になってしまう。今は考えるのをやめようと首を振り、顔を洗って制服に着替える。準備を終えたところで、シユウはシユテルたちの部屋へと向かう。

自分の部屋の鍵をしっかりとかけて、次は別の鍵でシユテルたちの部屋の扉を開ける。リビングに向かうと、すでに朝食が並んでいた。バターの塗られたトーストにコーンスープ。珍しく洋食だ。

「起きたか、シユウ」

いすに座っていたディアーチエがシユウに気づき、顔を上げる。ディアーチエの声でレヴィとユーリも振り返り、笑顔で挨拶をしてくれる。

「おはよう。待たせちゃったかな？」

「いや、今用意を終えたところだ。シユテルは飲み物を用意している」

ディアーチエの言葉を聞きながらシユテルの姿を探すと、すかさずディアーチエがそ

う言つてきた。シユウは恥ずかしそうに頭をかくと、自分の席に座つた。

平日の朝食は六時半だ。引越しをしてから毎日朝食に呼ばれているのだが、おかげで早起きの習慣がついた。

「シユウ。おはようございます」

シユテルの声に振り返ると、キッチンからシユテルが出てくるところだった。手には人数分のコップ。注がれているのはミルクだろうか。それらをシユテルは並べると、席についた。

「ではいただくとしよう」

皆で手を合わせ、いただきますと食べ始める。少し焦げ目のあるパンは焼きたてのようで、かりかりしていても美味しい。

「そう言えば、いつもお米なのに今日はパンなんだね」

シユウがそう言うと、ディアーチエは渋い顔をしてレヴィを睨む。う、と短い声を上げて、レヴィは視線を逸らした。

「こやつが炊飯器のタイマーを入れ忘れたのだ。すまぬな、シユウ」

なるほど、とシユウはうなづく。最初はいつも通りの和食の予定だったらしい。

「いや、僕はどちらかと言えば和食なだけで、パンも好きだから」

頬張りながら、頬を緩ませるシユウ。それを見たディアーチエは、そうかと短く答え

ただけだった。その表情がどこか安堵したようなものになっていることをシユウは見逃さない。

「もしかして、いつも僕のために？ ごめんね」

「む……。自惚れるでない。たまたまだ」

「ディアーチエは頬を赤らめ、顔を逸らす。素直ではないがディアーチエは分かりやすい。

「ありがとう、ディアーチエ」

「……………ふん」

ディアーチエが鼻を鳴らして食事を再開する。シユウもそれに倣って手早く食べていく。やっぱりディアーチエは優しいなど、そんなことを思いながら。

朝食後はシユテルと一緒に食器を片付け、そして学校に向かう準備をする。シユテルたち四人はこれから今日の予定を話し合うはずだ。休日はシユウも一緒に聞くのだが、平日は仕事の話も多いだろうと思いつつも早めに学校へと向かう。

「それじゃあ、行ってきます」

支度を終えてリビングに集まっている四人に言うと、四人がそれぞれ挨拶を返してくれる。挨拶をすれば挨拶を返してくれる、その当たり前のことがとても嬉しくて、シユウはそれだけで笑顔になれた。

毎朝の学校での日課。それは二度寝。シユウが登校する時間ではまだほとんどのクラスメイトが登校していないので話し相手もおらず、いつも自分の席で寝息を立てている。シユウの後に登校してきたクラスメイトたちも、朝だけはシユウをゆつくり寝かせてやろうと決めているのか声をかけてくることはない。

ただ、今日だけは例外だった。まだチャイムが鳴っていないのに肩を揺すられ、シユウは億劫そうに顔を上げる。そして少し驚いたように目を見開き、すぐに表情を和らげた。

「おはよう、なのは。どうしたの?」

そこにいたのはなのはだ。なのはの仲の良いメンバーが側にいないが、きつと聞き耳を立てているのだろう。

「おはよう、シユウ君。えっと……。昨日のことなんだけど……」

なのはが言いづらそうに話し、シユウはああ、と苦笑する。

「文花のことは忘れていいよ。あれは僕と妹の問題だから、なのはたちが気にすることじゃない」

「うん……。で、でも! 私たちで良ければ、いつでもお話は聞くから……! だから、元氣出してね」

優しいなと思う反面、この子は将来苦労しそうだなとも思う。文花のことは本当にこ



こちらの兄妹の問題だ。そんなことまで気にする必要はないだろうに。ただ、これがなのはたちの良いところでもあるのだろう。

「ありがとう、なのは。みんなにもそう言っておいて」

「うん！」

なのはがうなずき、自分の席へと戻っていく。そこにはやはり、こちらの様子をうかがっているいつものメンバーがいた。シユウが小さく手を振ると、全員そろって微笑笑を浮かべる。我ながら良い友人に恵まれたものだなとうつすらと自嘲した。自分のような人間に、と。

ホームルームが終わり、授業が始まり、そして終わっていく。気がつけば昼休みだ。まだ誰かと食べる気分にはなれないので、シユウは自分の席で一人で弁当を広げる。シユテル手作りのもので、家を出る時に渡されたものだ。最近の学校での一番の楽しみがこの弁当になっているような気がする。

その弁当に舌鼓を打っていると、聞き慣れた、聞きたくない声がかすかに聞こえてきた。

「すみません、西崎先輩はいらっしゃいますか？」

シユウの頬が引きつる。なぜここに、と思いつながら教室の出入り口を見る。クラスメイトが先ほどの言葉の主である少女を連れてくる。少女の車椅子を押しながら。シユ

ウの側まで来ると、少女が小さく頭を下げた。

「……どうしてここに……」

思わずそんな声が出る。少女は、文花は楽しそうに嗤った。

「そんなこと言わないでよ、お兄ちゃん。せっかく遊びに来たんだから」

文花の言葉を聞いて、周囲のクラスメイトが目を丸くする。妹がいたのか、という言葉もかすかに聞こえてくる。シユウはそんな周囲の反応に戸惑いつつも、文花の服装を見て驚いていた。この学校の制服だ。

「転校してきたんだよ。お兄ちゃんに会いたかったから」

おお、という周囲の反応。いつの間にか、教室中のクラスメイトたちがシユウと文花の会話に耳を澄ませている。

「そっか、よく転校できたね。編入試験だっけ？ あれは？」

「これでも成績は良い方だから。あの程度なら簡単だよ」

その言葉にクラスメイトたちの笑顔が固まる。簡単か、とシユウも苦笑せずにいられない。結構難しいと聞いたことがあるのだが。

「だってこの足だからね。勉強しかすることがないし」

墓穴を掘った、とすぐに悟った。シユウは、そうだね、と答えることしかできない。それ以上の言葉を続けることができない。

「父さんと母さんは？」

「ほとんどお仕事。でも私が家にいる時は必ずどちらかがいてくれるよ。お兄ちゃんと違つて」

につこりと笑顔になつて言つてくる。容赦なく責めてくることに少しだけ安堵する。それでいい、と。ただ、できれば。

「お兄ちゃんは、本当に何もしてくれないね。私から足を奪つた張本人のくせに」

こういつたことをここで、しかもわざわざ音量を上げてまで言わなくてもいいだろうに。

案の定、周囲からは驚愕と困惑、軽蔑の視線が突き刺さつた。シユウは疲れたようにため息をついて、小さく首を振る。自分が選んだ道とはいえ、まさか学校にまで来るとは思わなかつた。

だが、それでもいい。この妹が正しく生きるためなら、自分は喜んで学校生活を捨ててしまおう。いくらでも悪役になつてやる。そう決意し、シユウは嘲笑を浮かべた。

「それで？ そんなくだらないことを言いに来たのかな？」

文花が目を瞪る。クラスメイトたちもシユウらしからぬ発言に驚き、困惑しているのがよく分かる。しかしシユウは言葉を止めない。それでクラスメイトが敵になつたとしても、友達が一人もいなくなつたとしても、それで構わない。

「文花の人生は僕に関係ない。がんばれ、ぐらいいは言っておくけど、気が済んだらさっさと帰るんだよ」

シユウは文花から視線を逸らすと、昼食を再開した。その様に文花が嫌悪と憤怒の入りに交じった眼差しを向けてくるが、シユウは気にもとめない。すでにそこにはいないかの様に、文花を無視して食事を続ける。やがて文花は何も言わずに、出入り口へと戻っていく。

シユウを見る周囲の視線が軽蔑と嫌悪のものになっているが、シユウは甘んじてそれを受け入れる。横目で文花を見ると、文花の友達だろうか、下級生が迎えに来ていた。言葉を交わす文花の表情は、先ほどと違って自然なもので、とても柔らかい。優しい笑顔だ。

——うん。これでいい。

一人満足して、シユウは薄く微笑んだ。

S i d e : N a n o h a

なのはたちが屋上で昼食を取り、教室に戻ってくると、雰囲気が出る前とがらりと変わっていた。張り詰めるような緊張感が漂っている。同じことを感じ取ったのか、誰もが目を丸くしていた。

「何かあったの?」

フエイトが側の男子生徒に聞くと、先ほど起こったこと、シユウと文花の会話を詳しく教えてもらった。それを聞いて、なのはは悲しい気持ちになった。シユウはたった一人のために、生活の半分以上を占める学校で孤独になる道を選んだ。どれほど辛い選択だったのだろうか、想像すらできない。

説明を聞いたアリサがすぐにシユウのもとへと走る。シユウの机の前に立つと、シユウは少しだけ顔を上げ、首を傾げた。

「どうしたの? アリサ」

「どうしたのじゃないわよ! あんた、ね……」

アリサの声が尻すぼみになり、やがて消えた。シユウの視線に気圧されたと言うべきか。黙り込んだアリサに満足して、次にシユウはこちらを見てくる。しっかりとシユウと目が合い、そしてシユウの視線から意思を感じた。

何も言うな、と。

どうして、とは言わない。あまりにも悲しい選択だとは思いますが、シユウの瞳からは断固とした決意を感じる。ここで自分たちが何か言うことは、シユウの気持ちを踏みにじることと同じだ。アリサもそう考えたのか、結局それ以上何も言わず、自分たちのところへと戻ってきた。

「シユウ君……」

周囲からの視線を受けるシユウは、しかしいつも通りの笑顔を見せる。欠伸をする  
と、机に突つ伏して昼寝を始めてしまった。

このことで自分には何もない。そう思ったのは、せめてシユテルに連絡だけはしておこうと念話を送った。

S i d e : S t e r n

『わざわざありがとうございます、なのは。助かりました』

シユテルはなのはとの念話をその言葉で終えた。どうしたものかと考えるが、学校の  
ことで自分にできることは何もない。学校にすら行ったことがないのだから。

——せめて、夕食はシユウの好きなものを用意しましょう。

シユテルはそう決めると、買い物に行くために立ち上がった。

夕方、帰宅したシユウがいつものように自宅での風呂を終えてこちらの部屋へと入っ  
てくる。シユテルもいつものようにシユウを招き入れると、夕食の準備を始めた。

リビングでのいつもの夕食。いつも通りの夜。レヴィが騒ぎ、ディアーチェが怒り、  
ユーリが笑う。本当にいつも通りだ。その光景を、シユウはいつも以上に楽しそうに眺  
めていた。

「シユウ。大丈夫ですか？」

思わずそんな言葉が出ていた。シユウは一瞬怪訝そうに眉をひそめたが、すぐに納得したのか何度かうなづく。

「なのはから聞いたの？」

「はい。昼頃に念話を受けました」

「そつか。うん、大丈夫だよ。気にしないで」

そう言うシユウの笑顔はいつも通りのもののようにも見える。だがその笑顔が作られたものだとすぐに気がついた。しっかりと見てみれば、今にも泣き出しそうな気配がある。かなり無理をしているのだろう。

「シユウ……」

声を掛けると、シユウは苦笑した。鋭いなあ、と。

「帰ってきたらみんながいる。今の僕には帰る場所がある。それだけで……十分だよ」

それ以上はシユウは何も言わなかった。食事を再開し、家族との会話に花を咲かせた。その横顔はとても幸せそうだった。

よくない傾向だとは思う。シユウは妹を優先するあまり、自分のことを蔑ろにしすぎている。例えば妹がそれで正しく生きていけたとしても、シユウの心が壊れかねない。それは、嫌だ。心の底からそう思う。

だがシュテルが手を出すことはできない。魔法のことならともかく、文花はこの世界で生まれ、この世界で生きている一般人だ。魔力を持つているとはいえ、自分が関わることはできないだろう。そのことをとても悔しく思う。自分は無力だと思つてしまふ。せめてシュウの隣にしよう、そう考え、シュウの手を握る。

そんなシュテルの心情を知つてか知らずか、シュウはわずかに驚きつつも、どこか照れくさそうに微笑んだ。



## 台風

平日の朝、シユウはいつもより少し早く目を覚ました。窓からの明かりはなく、部屋は暗いままだ。なぜこんな時間に起きてしまったのだろうかと首を傾げ、すぐに気がつく。窓の外から風と雨の音がうるさく聞こえていた。立ち上がって見てみると、強い雨が窓を叩いている。まさに暴風雨だ。

シユウはその様子をしばらく眺め、なるほどと納得してまた布団に潜った。ただの台風だと。

いつもの時間に起きたシユウは、いつも通りに学校の準備をする。相変わらず雨が窓を強く叩いていた。暴風を含むいくつかの警報が出ていそうだが、とりあえず準備だけは済ませておく。準備を終えて、シユテルたちの部屋に向かうために玄関へ。扉に手をかけ、

「……………」

開けるのを躊躇した。廊下は雨も風も入ってくる構造だ。当然ここを開ければ、とてつもない暴風がシユウを待っていることだろう。そう考えるともう部屋で寝てしまお

うかと思つたが、そうなるとシユテルたちが迎えに来る。シユテルたちが濡れるぐらいなら自分が濡れよう、と判断して扉を開けて、シユウはすぐに眉をひそめた。

風も雨もない。通路にガラスがあるわけでもないのに、なぜか通路に入ってくるはずの雨は途中で弾かれてしまっている。よく見てみると、その現象が起こっているのは自分とシユテルたちの部屋を繋ぐ廊下だけで、それ以外はやはり容赦なく暴風に襲われている。

「……ああ、結界か」

どのような結界なのかは知らないが、雨よけ程度の簡単なものを張っているのだろう。気合いを入れた自分を馬鹿らしく思いながら、シユウはシユテルたちの部屋へと向かった。

リビングのテーブルにはすでに朝食が並んでいた。全員がそれぞれの席に座り、テレビを、ニュースを見ている。

「おはよう」

シユウが声をかけると、それぞれが挨拶を返してくれる。シユウは嬉しそうに笑いながら、自分の席に座る。シユテルが入れてくれたお茶をありがたく受け取った。

「今日はずつとこんな天気だつてさ」

レヴィの残念そうな声。なぜみんながニュースをと思つていたが、どうやら天気を気

にしていたらしい。

「警報は出てる?」

シユウの問いに答えてくれるのはユーリだ。

「はい。大雨、洪水、暴風、波浪の四つの警報が出ましたよ」

「うわ、そんなに……。学校は休みかな」

「そうなんですか?」

「うん。暴風警報が出たら休み。後で一応電話して確認するけど」

へえ、とその場にいるシユウ以外が驚いていた。どうやらこういったことは知らないらしい。学校に行かないのなら無理もないことだとは思うが。

「とりあえずは先に朝食だ。冷めるぞ」

「ああ、そうだね。いただきます」

ディアーチェの言葉に全員が手を合わせ、食べ始めた。

食事後、学校に電話をして確認してみると、やはり今日は休みということになった。安全のために出歩かないように、という注意も受けたが、言われるまでもなくこんな嵐の日に出歩く物好きはいないだろう。

「よし! じゃあ出かけてくる!」

前言撤回。目の前にいた。レヴィが元気よく立ち上がり部屋を出て行こうとしたと

ところで、待て、とデイアーチエが声をかける。レヴィが不満げな表情で振り返ってきた。「どこに行くつもりだ？」

「遊びに？」

「この嵐の中で外に遊びに行く奴があるか！ 大人しくしている！」

デイアーチエの雷が落ちて、レヴィは渋々といった様子で席に戻る。レヴィにとつて外の天気は関係ないらしい。

洗い物を終えて全員がリビングに集合する。ここから先は今日の予定の話し合いだ。さすがに自分は邪魔だろうと席を立とうとしたが、それを見たシユテルがシユウを見て首を振る。

「構いません。聞かれて困るものでもありませんから」

「……いいの？」

「何を今更」

シユテルの言葉にシユウは苦笑。いすに座り直すと、それを見計らっていたのかデイアーチエが改めて咳払いをする。全員の視線がデイアーチエに集中して、その一つ一つをしつかりと見ていく。やがてデイアーチエから出た言葉は、

「今日は予定がない。休みだ。好きに過ぐせ」

という簡単なものだった。え、と驚いて啞然としているシユウを置いて、他の面々は

それぞれが行動を始める。シユテルとディアーチエは二人で何かを話し合い、レヴィとユーリはテレビをつけておもしろい番組がないか探し始める。シユウは一人、やるべきこともなくぼつんと座ったままだった。

話し合いが終わったのか、シユテルとディアーチエが本を広げる。そこまで待つてから、もういいかな、とシユウはシユテルに声を掛けた。

「今日は本当に、みんな休みなんだね」

シユテルが顔を上げ、シユウを見る、いつもの無表情でうなずく。

「はい。全員で掃除をしよう、ということにはなっていたのですが、この雨だと空気の入れ換えもできませんし」

そう言いながら窓の外に視線を移すシユテル。シユウも同じように見て、そうだね、とうなずいた。未だに雨が窓を強く叩いている。

「そのため、今日は洗い物など最低限の家事だけになりました。せつかくなので私は本でも読ませていただきます」

「ん。じゃあ僕は……。寝よう」

シユテルが呆れたようにため息をつく。そして席を立ってどこかへと行ってしまった。何か怒らせるようなことを言っちゃったかな、といすに深く座りながら考えるが、いつも通りの会話しかしていないはずだ。

背もたれに体を預け目を閉じると、すぐに眠気が襲ってきた。その睡魔に身を任せようとしたところで、何か柔らかいものが自分の体を覆う。少し目を開けると、毛布がかけられていた。

「……シユテル？」

「風邪をひきますよ」

そう言いながら本を開くシユテル。シユウは少し嬉しそうに微笑むと、ありがと、と短く礼を言っておく。

「おやすみ」

「はい、おやすみなさい。良い夢を」

シユテルの言葉を聞きながら、シユウは眠りに落ちた。

次に目を覚ました時は正午だった。ぐっと伸びをして、周囲を確認する。部屋には誰もいないが、隣のキッチンから話し声が聞こえてくる。そちらへと視線を向けると、シユテルが入ってきた。

「おはようございます、シユウ。もうすぐ昼食です」

「……ごめん。何も手伝ってないね」

「お気になさらずに」

シユテルがテーブルの中央に置いた大きな皿にはドライカレーが山盛りになってい

た。自分たちの席にはそれよりも小さめの皿を置いていく。その後すぐにディアーチエたちが戻ってきた。

「む、起きたかシユウ。ちようど今から昼食だ」

「うん。ごめんね、手伝わなくて」

気にするな、とディアーチエが手を振り、それぞれが席についていく。皆で手を合わせ、食事を始めた。自分の好みの量を大きな皿から移していく。シユウは控えめ、レヴィは大盛りだ。

「シユウ、それだけでいいの？」

せつかくのドライカレーなのに、とレヴィが不思議そうに首を傾げる。本当にカレーが好きだなと思いつつ、シユウは一度だけうなずいた。

「さすがに寝起きだからね……。ちよつとつらい」

「そうでしょうね。おそらく少し残ると思いますので、後ほどまた食べてください」

シユテルがちらりとレヴィを見て、レヴィがうなずく。それをしっかりと見てしまったシユウは、二人に心の中で感謝する。どうやら気を遣わせてしまったらしい。こんなことならもう少し早く起きていれば良かったとも思う。

全員が食べ終わっても、まだお皿一杯分のドライカレーが残った。シユテルはそれを新しい皿に移し替え、ラップをかけて冷蔵庫へと持って行く。とても慣れた手つきだ。

「さて、シユウ。ここで問題が発生しているのだが」

唐突なディアーチエの言葉にシユウが首を傾げる。ディアーチエはシユウをまっすぐに見て、そしてすぐに視線を逸らした。言いにくそうにしていたが、やがて声を漏らす。

「夕食の食材が足りない」

「……ああ……」

窓を見る。相変わらずの嵐。いつになればやむのか、見当もつかない。

「とりあえず適当なくじでも作る。買い出しと、残る側は風呂の用意だ」

「くじはいいよ。僕が行く」

立ち上がりながら言うと、ディアーチエが少し驚いたように目を丸くした。すぐに手を振り、ディアーチエも立ち上がる。

「いやだめだ。風邪をひくかもしれないだろう」

「誰でもいいから、あとで僕の部屋のお風呂も沸かしておいて。何を買ってくればいいのかな」

「聞け！」

ディアーチエが苛立ちながら叫び、シユウはディアーチエに向き直る。シユウに見つめられ、ディアーチエが気まずそうに視線を逸らした。



「まだ何もやってないから、僕が買い物に行く。いいよね？」

いつもと変わらない口調と表情。それなのに、有無を言わさぬ雰囲気がある。ディアーチエはやれやれと首を振ると、財布をシユウに放り投げた。慌てながら受け取るシユウに、ディアーチエが告げる。

「必要なものは財布の中にあるメモに書いてある。すまぬが任せた」

「うん。了解」

シユウはうなずいて玄関へ。靴を履いている間にシユテルが見送りに来てくれる。何となく嬉しくなつて振り返ると、シユテルの手には二着の雨合羽があつた。

「……………えつと……………？」

シユウが戸惑っていると、シユテルが雨合羽を差し出してくる。シユウがそれを受け取ると、シユテルもその場で雨合羽を着用した。そして一言。

「私も行きます」

「え、いやでも……………」

「シユウ一人では心配ですから」

そこまで信用がないのか、と内心で苦笑いする。断る理由もないのでシユテルの言葉に甘えることにした。シユウも雨合羽を着て、一緒に外に出る。

すでに結界は解除していたのか、扉から出ただけで暴風に晒された。雨が容赦なく体

を打ち付けてくる。部屋に雨が入らないように、シユウはシユテルが出たことを確認するとすぐに扉を閉めた。

「さあ！　がんばって行こう！」

風と雨の音で周囲の音が聞こえづらい。シユテルに聞こえるようにと大声でそう言うのと、シユテルは黙ってうなずいた。

風の中、シユウとシユテルはスーパーまでの道のりをゆつくりと歩いて行く。豪雨のため視界も悪く、時折側を通る車に肝を冷やしてしまう。シユテルは大丈夫かと振り返ると、涼しい顔をしていた。それでも一応、声をかけてみる。

「シユテル！　大丈夫？」

「はい、特に問題なく」

平然としたいつもの声。大声ではないのに風雨の音に負けずにしっかりと聞こえるのは何かしらの魔法を使っているのか。ならいいや、と笑顔で言つて、シユウはまたゆつくりと歩き始める。

このままのペースでは帰りはとても遅くなりそうだとは思うが、急ぐこともできない。しっかりと一歩ずつ歩いて、スーパーへと向かった。

時間をかけて買い物を買ませ、自宅への帰り道。当然ながら帰りも嵐の中だ。買い物袋を何重にもして破れないようにして、しっかりと持って帰路を歩く。まだまだ家は遠

い。歩くことそのものが嫌になってくるが、家に帰らなければ休むこともできない。しっかりと歩みを進めていく。

「……あ」

シュテルの漏らした声にシユウはその歩みを止めた。振り返ると、シュテルの視線は側の公園へと向けられている。そちらを見ると、子猫が数匹、木の下で小さくなっていた。

「……連れて帰る?」

「いえ。親猫がいずれ迎えに来るでしょう」

そう言いつつも、シュテルは子猫たちへと近づく。シユウもその少し後ろについて行く。シュテルは雨合羽を脱ぐと、側に落ちている木の枝なども使って簡単なながら雨よけを作った。

「ここで大人しくしててくださいね」

子猫の頭を撫で、シュテルが優しく言い聞かせる。子猫たちがかわいらしい鳴き声を上げた。ただ、少し大きさが足りずに数匹まだ雨にかかっていたが。

「……シュテル。これ」

シユウも雨合羽を脱いでシュテルに差し出す。シュテルは逡巡したが、しかしすぐに、ありがたうございますと受け取った。脱いだ瞬間にずぶ濡れになっている。今更遠

慮しても意味がないと分かったのだろう。

もう一組の雨よけを作り、子猫全てがしっかりと中に入れたことを確認して、二人は今度こそ家路についた。

「戻ったか……。なぜそれほど濡れておる！ さつさと風呂に入つてこい！」

帰宅したシュウとシユテルを見たダイアーチエの第一声がそれだった。言われるままにシユテルは風呂場へと向かい、シュウは自分の部屋の方へと向かう。当然ながら一緒に入るなどといった発想はない。

「ダイアーチエ、ここに置いておくね」

玄関に今なお水が垂れている買ひ物袋を置くと、ダイアーチエはすぐにそれを回収した。

「うむ。助かった。そちらの部屋もユウリが沸かしておいてくれる。さつさと入つてこい」

「うん。そうするよ」

手を振り、自室へと戻る。着替えを用意してまっすぐに風呂場へ。浴槽にはお湯が満たされ、手をつけてみると少し熱めの温度になっていた。手早く服を脱ぎ、軽く体を洗ってから湯船に浸かる。雨で冷え切っていたので熱めのお湯が気持ちいい。

ゆつくりと長く息を吐いて口元まで湯船に浸かる。無事に家に帰り着いて安心して

しまったのか、眠気が襲ってきた。いつそのこと寝てしまおうかと考えてしまう。

「でもみんなが心配しそうだしねえ……。早めにながらないとねえ……」

ぼんやりと天井を眺めながらそんなことをつぶやき、うつらうつらと船をこぐ。

そして、いつの間にか意識は夢の中へと潜ってしまった。

S i d e : S t e r n

風呂から上がり、リビングを見回す。シユウの姿がないことに首を傾げ玉に聞いてみるが、風呂に入りに行つたきりだとのことだった。

「遅いですね……。少し見えます」

「うむ。シユウの部屋までなら結界を張っておる。濡れる心配はないぞ」

「ありがとうございます」

一礼してシユウの部屋へと向かう。鍵は開いていたので一声かけてから中に入り、自分たちの部屋と同じ構造なのでまっすぐに風呂場へと向かう。電気がつけられ、シユウの着替えもそこにあつた。

「シユウ。いますか？」

呼びかけてみるが返事はない。そつと扉を開けて中をのぞき、シユテルは大きなため息をついた。

湯船に浸かったまま、シユウはとても気持ちよさそうに眠っていた。これがリビングでなら放っておくのだが、風呂だとさすがにそういうわけにもいかない。シユテルは中に入り、シユウの肩を揺する。

「シユウ。起きてください。シユウ」

しばらく揺るとシユウが目を開け、シユテルの姿を確認する。そして、

「……っ！」

声にならない悲鳴を上げた。

「情けない……情けなさすぎていつそ死にたい……」

リビングでシユウはずっとそんなことをつぶやいていた。風呂場でのやり取りを聞いてからは、レヴィとユーリ、ディアーチエまでが笑いを堪えている。

「まあ、なんだ。見られて減るものではないだろう」

「それはそうなんだけど、叫びそうになった方も含めてもう……」

これはだめだな、とディアーチエが苦笑して夕食の準備を始める。

シユテルは意気消沈したままのシユウの隣で、どうしたものかと考え続けていた。だ  
が  
いい考えも思い浮かばないので、仕方なくシユウの手を握る。シユウが顔を上げて、  
うつろな瞳で自分を見てくる。目に涙が溜まっているのを見て、もう少し他の起こし方  
を考えれば良かったかと後悔した。

「シユウ。すみませんでした」

「いや、寝ちやつた僕が悪いから。気にしないでね」

「そう、ですか。……では、ありがとうございます」

シユウが、何が？ と首を傾げる。

「子猫のことです。シユウまで濡れる必要はなかったのですから。ありがとうございます」

それを聞いたシユウは、しばらくシユテルと視線を交わした後、少し顔を赤くしてシユテルから視線を逸らす。照れくさそうに頬をかきながら、気にしないで、と笑った。

その笑顔を見て、シユテルは一先ず安心する。とりあえずは大丈夫だろう、と。そう思つてシユテルもうつつすらと笑顔を浮かべた。

雨はまだまだ降り続け、風も強いままだ。だがたまにはこんな日もいいだろう、と考へ、そんな思いがあることにシユテル自身が少し驚いていた。

## 第四話

文花が転校してきてから一週間が過ぎた。文花は毎日のようにシユウのクラスに顔を出す、というようなこともなく、あの一件以後は平穩に過すごしている。だがそれでも、シユウはクラスで孤立していた。あの日以来、シユウに話しかけてくる者はかなり少なくなっている。事情を知っているのはたちと、友人が一人。ただシユウ自身がほとんど会話に応じようとしないので、なのはたちもそれを察してか積極的に話しかけてくることはない。

今日も特に何かがあるわけでもなく、普段通りに授業を終えた。

放課後はいつも通りに自宅へど戻り、いつも通りにシユテルたちと食事を取る。普段と変わらない日常だ。嵐の前の静けさ、とも取れるが、それでもシユウは満足だった。

ある日の放課後。ホームルームを終えて、シユウはすぐに帰り支度を済ませる。さあ帰ろう、と席を立ったところで、

「お兄ちゃん。遊びに来たよ」

来たか、とシユウの表情は自然と冷たくなった。振り返ると、文花が笑顔で自分を見上げていた。小さくため息をついて、いすに座り直す。気がつけば、いつの間にか教室



が静まりかえっていた。やれやれと小さく首を振りながら、文花を見る。「なにしに來たのかな?」

シユウの言葉に、文花は笑顔を崩さない。

「お兄ちゃんとお話をしに來ることは、いけないこと?」

「……問題ないね。うん。何の話かな」

わざと明るい声を出す。文花もどことなく嬉しそうだ。

「そろそろお兄ちゃんに帰ってきてほしいなって。だめ?」

「だめ」

「やっぱり?」

くすくすと楽しそうに嗤う。自分の答えが変わるわけがないと分かっているだろうに、なぜこの妹は何度も聞きに來るのだろうか。そう考えていると、不意に文花の笑い声が止まった。じつとこちらを無表情に見つめてくる。

「ねえ、お兄ちゃん……」

「シユウ! 一緒に帰ろうぜー!」

唐突な大きな声。シユウが驚いて目を見開き、文花はびくりと体を震わせる。シユウが教室のドアを見ると、そこにいたのは別のクラスの友人だった。茶色の髪の少年で、カバンを肩に担いでいる。へらへらとした締まりのない笑顔が特徴の、シユウの海鳴市

での最初の友人。

「あれ？　なんやこの空気。俺、タイミング間違った？」

友人は教室を見回して困ったような声を漏らす、笑みは変わらない。まいったな、とやはり笑い続ける。

「まあどうでもええわ。帰るで、シユウ」

友人がシユウの席まで歩いてくる。そしてシユウのカバンを掴むと、さっさろ歩いて行ってしまう。シユウは慌ててその背を追おうとして、

「……………めん」

文花に小さな声で言う。聞こえてはいないだろう。最後に少しだけ見えた文花の表情は、感情のない無表情だった。

友人に追いついて、二人で並んで廊下を歩く。途中で友人にカバンを返してもらい、ありがと、と礼を言っておく。友人はやはり笑顔だった。

「さっきのが噂のシユウの妹やな？」

友人の問いかけに、シユウは神妙な面持ちでうなずいた。この友人は文花のことをどう見たのだろうか。できれば、あまり悪い印象を持ってほしくはないのだが、そんなシユウの心情など知らずに友人が言う。

「いやあ、可愛い子やったな！　なあ、シユウ。紹介してくれへん？」

「……君はいつも通りだね。安心するよ」

「あつはつは。俺はみんなの癒やしやからな！」

自分で言うなよ、と笑い合う。学校では孤立しつつあるシュウだが、この友人は変わらぬ態度で接してくれる。シュウの事情など一切知らないというのに、それがとてもありがたく、嬉しかった。

校門まで来て、友人が手を振る。また明日、と。シュウも手を振って、友人と別れた。自宅で荷物を置いてシュウテルたちの部屋に向かう。今日は全員がリビングにいた。台所からはカレーのいい匂いが漂ってくる。食欲がそそられる。

「シュウテルん、ちよつとだけ……」

「だめです。夕食の時間まで我慢してください」

「ぶー」

会話の内容から、レヴィがカレーのつまみ食いをお願いしているのだろう。相変わらずだなと思いつつ、シュウは自分の席に座った。

「おかえりなさい、シュウ」

「ただいま、シュウテル」

挨拶を交わした後、シュウテルがお茶を入れてくれる。礼を言って受け取り、のどを潤す。冷たくて美味しい。

「ねえ、シユテるん」

「だめです」

「うー……」

シユウから見て二度目のやり取り。レヴィは何度もキッチンの方を見てうずうずとしている。だが何度頼んでも無理だと悟ったのか、レヴィは唐突に立ち上がると部屋を出て行こうとする。

「レヴィ、どこに行くの？」

シユウが聞いて、レヴィが答える。

「遊びに行つてくる！ お腹を空かせてくる！」

そう言つて玄関へと向かつてしまった。シユウは座つたままそれを見送り、苦笑してしまう。

「まったく、あやつは……」

「ダイアーチエの声が聞こえ、

「でもレヴィらしいですよ」

そんなユーリの言葉。二人とも表情は柔らかい。今日に限らず、何度もあつた会話でもある。今更驚くようなことでもない。ただ、少し思うのは、

「少しぐらい味見させてあげればいいのに」

そうつぶやく。シユテルは少し顔を上げて、肩をすくめた。

「そうですね。帰ってきたら、小皿で少しだけ出してあげましょう」

そうしてあげて、とシユウが言うと、シユテルは静かにうなずいた。

Side : Levi

公園の子供たちとひとしきり遊び、皆が帰るのを見届けてレヴィも家路につく。そろそろ夕食の時間でもある。今日はカレーなのでとても楽しみだ。自然と足が軽くなり、スキップしてしまう。不思議な音程の鼻歌を歌いながら家へと急ぐ。

「待って」

背後からの声に、レヴィは足を止めた。振り返ると、そこにいたのは車椅子の少女だ。シユウに写真を見せてもらったので、この少女が誰なのかはすぐに分かった。

「シユウの妹、だよね。ボクに何か用？」

シユウとの関係は聞いているが、自分との繋がりはないはずだ。首を傾げて問いかけるが、文花は何も答えずにレヴィを見つめ続ける。意図も目的も分からないので、レヴィはどうしたものかと反応に困ってしまう。

「何も用がないなら、ボクは行くけど……」

そこまで言ったところで、自分の頬を何かがかすめていった。レヴィの頬に傷が生ま

れる。レヴィはしばらく黙り、文花をじつと見る。

文花の手に握られているのは黒いカード。それを起点として魔力が渦巻いている。おそらくはデバイスか。シユウの両親が魔導師なら、その娘が魔力を持つていても不思議ではない。デバイスを持つている理由も、自分を襲う理由も分からないが。

「貴方たちが、お兄ちゃんを惑わしているんでしよう?」

文花の声。レヴィは首を傾げる。惑わすとはどういうことか。

「貴方たちさえいなくなれば、お兄ちゃんを縛るものはなくなる。私に従ってくれる。違う?」

何を言っているのかいまちよく分からない。だが自分が何を言おうとも、この少女は納得しないだろうことは何となく分かる。レヴィはデバイスを展開すると、瞬時に境界を張った。得手としている魔法ではないため規模はそれなり程度だが、二人だけの戦いなら十分だろう。

「うん。少しだけ遊んであげる」

朗らかにそう言い、バルニフィカスを構える。文花の表情が一瞬怯えたような表情になるが、すぐに引き締まったものになりデバイスとバリアジャケットを展開させていく。そうして展開されたデバイスの形状は、鎌。バリアジャケットは黒いローブ。展開が終わると同時に、文花の体がゆっくりと浮く。

「おお。すごい！ かつこいいい！」

「あ、ありがとう……」

少しだけ照れたような表情を浮かべ、すぐにはっとしたように表情を引き締める。あの一瞬の照れ笑いが素の性格なのだろう。

「借り物のデバイスなんだけどね」

「あれ？ そうなの？ まあどっちでもいいけど」

お互いにデバイスを構える。張り詰めたような緊張感が場を支配する。この緊張感が、レヴィにとつては心地いい。さて、どう戦おうかと考えを巡らしたところで。

家族の顔を思い出した。シュウの顔を思い出した。シュウの悲しげな表情を思い浮かべてしまった。

——……そう、だよね。

家族とは大切なものだ。レヴィもシユテルやディアーチエたち、家族を傷つけられると悲しいし当然怒る。なら、今ここで文花と戦ったとすればどうだろうか。

シュウの悲しげな表情を連想する。もしかすると嫌われるかもしれない。それだけは、嫌だった。

だから、文花がこちらへと向かってくると分かっているとしても、レヴィはデバイスを下ろした。自分らしくない、と思いつつも、文花の魔力が込められた一撃を、抵抗せずに受

け止めた。

新しい家族に、シュウに嫌われないようにするために。

ただ、気づくべきだったのは、シュウにとってレヴィもまた大切な家族だったということか。

地に伏したレヴィを見下ろす文花は、蒼白になっていた。なんで、どうして、と中身の無い疑問ばかりを口に出している。やがて文花は自分のデバイスに向けて叫んだ。

「非殺傷設定っていうのがあるんじゃないやなかったのー！」

次に聞こえてくるのは少し低めの女の声。それがデバイスの音声なのだろう。

「はい。非殺傷設定はあります」

「じゃあどうして……！ この人、今にも……！」

「設定していません。非殺傷設定があるとは言いましたが、設定しろとは言われておりません」

「なに、それ……」

愕然とした文花の声。なるほど、とレヴィは理解する。文花の目的は自分たちを脅してシュウから遠ざける、というものだったのだろう。殺傷設定だったのは偶然というところか。

「どうしよう、私、私が、殺し……」



どうやら文花は自分たちの事情も知らないらしい。

——まだ生きてるんだけど。ちよっと駆体の維持は難しいけど。

心の中で苦笑して、しかし声には出さない。レヴィは自分の家族へと念話を送る。内容は単純、駆体の再起動をするからご飯はいらぬ、と。

「おめでとうございます」

デバイスの声が再び聞こえる。レヴィはそちらへと意識を向ける。

「何が！」

「これでお兄様と同じですね。同じ人殺しです。おめでとうございます」

これがデバイスの言うことか。主人を責める発言をして。だが、そう言えば文花は借り物のデバイスだと言っていた。なら主人と思われるいなくても当然かもしれない。

「人殺し……。私、が……。？」

「ええ、そうですとも」

文花はしばらく何かをぶつぶつとつぶやいていたようだが、やがて狂ったように笑い出した。笑い声は周囲の空気を振るわせる。狂ったような哄笑。

「あはは、あははははは！」

文花がきびすを返す。レヴィに背を向けて歩き始める。

「殺しちゃった！ 私、が、殺した！ あははははは！」

笑いながら文花は歩いて行く。心が壊れた少女はそのまま歩き去って行く。レヴィは黙ってそれを聞いている。

後悔と悲しみの哄笑を最後まで聞いていた。

S i d e : S t e r n

レヴィの念話を受け取った時、シュテルはシユウとともに、帰りの遅いレヴィを迎えに外に出たところだった。レヴィにどういうことかと念話を返すが、返事がない。何があつたのかと不安が心を支配する。

唐突にシユウが足を止めた。遅れてシュテルも足を止めて、そしてそれを見た。

倒れて動かない、大きな傷を負ったレヴィを。

「レヴィー！」

シユウとシュテルが駆け出し、すぐにレヴィのもとにたどり着く。二人がレヴィの顔をのぞき込むと、レヴィがゆっくりと目を開いた。

「やつほ、シユウ。どうしたの？　なんで泣いてるの？」

レヴィの声はいつも通りだ。だがその体は全く動かない。

「ど、どうしよう！　病院？　救急車？　アースラに連絡した方が……！」

混乱するシユウをシュテルは手で制し、レヴィをしつかりと見る。レヴィもシュテル

「をまっすぐに見つめ返してきた。」

「駆体の再起動、とのことでしたね。大丈夫ですか？」

「うん。平気。あ、でも早く帰りたいから手伝ってほしいかも」

「分かりました。私から王とユーリにも伝えておきます」

よろしく、とレヴィが笑う。こんなことになってもこの子はいつも通りだ。

「それで、レヴィ。何があつたのですか？」

「別に？　ちよつと文花つて子と遊んだだけだよ」

そうですか、とシュテルは目を伏せた。シュウは大きく目を見開き、絶句している。

シュテルはレヴィの頭を撫でると、優しい声音で言った。

「後ほど、念話で構いませんので詳しいことを教えてください」

「うん。それじゃあそろそろ、行くね」

「はい。行つてらっしゃい、レヴィ」

レヴィが笑い、ゆつくりと体が溶けていく。そしてあつという間に光の粒子となり、消えてしまった。シュテルは小さくため息をつき、そしてシュウはレヴィが消えてしまった場所をいつまでも見続けている。

シュテルはそんなシュウへと声をかける。

「心配しないでください、シュウ。レヴィは駆体の再起動をするだけです。すぐに戻つ

てきますよ」

「……そっか」

シユウが静かに立ち上がる。それにシユテルも続き、こつそりと深呼吸した。いくらシユテルでも、家族に手を出されて怒らないわけがない。内心では激しい怒りを感じているが、今ここで自分が動けばレヴィの行動の意味がなくなる。だからこそ、ひとまずは王とユーリに相談しよう。

帰りましょう、とシユウを見て、シユテルは息を呑んだ。

「ちよつと用事ができた」

そう言うシユウの表情は、何も無い。完全な無表情。喜怒哀楽のどれもが感じられない、人形めいた表情になっている。だが、なぜかその表情を見ているだけで背筋が冷たくなってくる。

今更ながら、シユテルは気づく。シユウは感情をはつきりと見せてくれるが、怒りだけは今の今まで見たことがなかったと。そして、これこそがシユウの怒りの表情なのだと。

完璧なまでに感情を廃した表情のまま、シユウはシユテルにきびすを返した。そのまま歩き去って行く。

「シユウ！ 待ってください！」

呼ぶが、シユウは止まらない。歩いて行ってしまふ。シユテルはわずかに迷つたが、一先ずシユウを追いつつ声をかけ続ける。返事を一切返してくれないことが、とても悲しく感じられる。

今のシユウに何を言つても無駄だろうことを悟り、シユテルは、ディアーチェとリンディに念話を送つた。

静かに、されど激しく憤怒と憎悪の炎を燃やし、シユウは愚昧の元へと向かう。その体の中で、心の中で、誰かがため息をついていたことを、シユウには知る由もない。

## 月見

シユテル宅のキッチンにて。てきぱきと作業を進めていく者が三人いる。シユテルとダイアーチエ、それにシユウだ。三人はそれぞれ作業を分担してあるものを作っていた。残りの二人、ユーリは足りなくなった材料の買い出しや家事などをこなし、レヴィはそんなユーリの手伝いだ。

「このペースなら間に合うかな？」

手を動かしながら口を開くシユウ。それにうなずくのはシユテルだ。

「こちらの団子は大丈夫ですね。王、そちらはどうでしょうか？」

「問題ない。予定の一時間前には仕上がるぞ」

「さすがです。シユウ、こちらも急ぎましょう」

作業のスピードが早くなり、シユウも慌ててそれに倣う。二人が作っているのは団子だ。白と黄色の二色で、ほとんどが白の団子。昼過ぎから二人で大量生産をしている。ダイアーチエは月を模した料理だ。子鴉を喰らせてくれる、と張り切っていた。

今日は十五夜で月見だ。なのはたちから誘われたのをきっかけに、知人友人を多数誘っての大きなものとなっている。高町家の庭で皆で集まる予定だ。月見団子はなの

はたちに誘われた時に作って持って行く、とシユテルが申し出て、今現在作成中というわけだ。

「むう……。たまに変な形になる……」

シユウが丸めた団子を見て唸る。ほとんどが綺麗な円形で作れるのだが、なぜか時折歪な形になってしまう。やり方を変えているわけでもないのにとシユウが首を傾げていると、シユテルがシユウの手からそれを取ると、しばらく眺めた後、そのまま他のものと一緒に並べてしまった。

「いや、失敗作だよ？」

慌ててそう言うと、シユテルが首を振る。

「味が違うわけでもありません。もしも残れば私たちが食べればいいことですし」「それはそうだろうけど、純粹に恥ずかしいなあ……」

苦笑いしつつ、次の団子を丸めていく。そして気づけばまた歪な形に。あ、とシユウが立ち尽くし、シユテルはやれやれと首を振った。

「がんばってください」

「……はぐ」

肩を落としながらも、シユウは団子作りを続けた。

太陽が西へと沈み始めた頃に、シユウたちは高町家へと出発した。全員の両手に荷物

があり、それら全てが団子や料理などだ。購入した材料が多かったために、団子は少し作りすぎたかもしれない。

高町家に到着した頃にはすっかり日が沈んでいた。インターホンを押すと、すぐになるのが出迎えてくれる。いつもの、嬉しそうな笑顔だ。見ているこちらもつい笑顔になつてしまう。

「いらつしゃい！ もうみんな集まつてるよ」

なのは案内されて庭へと向かう。以前の七夕と同じように、様々な料理が載せられたテーブルがいくつも並んでいる。シユウたちは空いていたテーブルに料理と団子を並べていく。それに気づいた皆がすぐに集まつてきた。

「団子、すごい量だね。シユテルが作ったの？」

「シユウにも手伝ってもらいましたよ。やはり作りすぎましたか」

「どうだろう……？」

シユテルとなのはがそんな会話を交わす。その側ではディアーチェとはやてがお互いの料理を並べて喰っている。

「さすが王様や……。月見らしさを出しつつ、家族の好みにもしつかり応えるなんて……」

「そう言う貴様こそ……。月というテーマで考え得る最高のものの一つだな。少しばか



り見直し……」

「そうやる！ お姉ちゃんって呼んでくれてもいいんやで！」

「なぜそうなる！ 調子に乗るな子鴉！」

二人で漫才のようなものを始めていた。シユウは微笑ましくそれを見つめながら、月見団子を一個手に取り、口に入れる。満足そうにうなずいた。

レヴィとユーリは夜空の満月を見て楽しそうにはしゃいでいる。それを見守るのはフェイトとリインフォーサだ。時折会話を挟みつつ、月を見ている。どこか感慨深そうに。そつとしておこう、とシユウは視線を逸らした。

「……何やってんのよ」

声を掛けられて振り向くと、アリスが呆れたような表情で自分を見ていた。その手に持った紙皿にはディアーチェの料理。何口か食べて、うん美味しい、と言ってくれる。自分の料理ではないが、その言葉にとても嬉しくなった。

「シユウ君は食べないの？」

そう聞いてくるのはずさだ。いくつかの料理が載った皿を差し出してくる。シユウは礼を言いながら受け取り、それを口に入れる。ディアーチェが作ったものではないので、誰かが持ち込んだものだろうか。

「美味しいね」

「でしょ？ さすがは桃子さんよね」

ああ、桃子さんが作ったのか、とその姿を探す。縁側で夫と二人並んで座っていた。邪魔してはいけないだろうと思い、アリサたちへと視線を戻す。同じように桃子たちを見ていたアリサもシユウへと視線を戻してきた。

「感想は次の機会に伝えるよ」

「それが無難ね」

三人で笑いながら料理に舌鼓を打つ。デイアーチエや桃子以外にも、はやてやリンデイが持ち込んだものもあるらしい。テーブルをよくよく見てみると、自分たちが作ったもの以外にも団子がある。アリサたちに聞いてみると、こちらも桃子が作ったものだろう。

「あのさ、シユウ。聞きたいんだけど」

「ん？」

料理を食べて回っていると、アリサが突然そんなことを言ってきた。シユウが振り返り、首を傾げる。アリサはしばらく言い淀んでいたようだったが、やがて意を決したかのようにシユウを見据えた。

「正直なところ、シユテルとどうなのよ」

「ぶふっ！」

盛大にむせた。苦しそうに何度も咳をしていると、誰かが背中をさすってくれり。差し出されたコップを受け取り相手を見ると、すずかだった。礼を言いながらコップに注がれていたジュースを少し飲む。ふう、とため息をついた。

コップをテーブルに置き、アリサたちへと向き直る。満面の笑顔で言つてやる。

「意味が分からないね！」

「シユテルのこと、好きなんでしょ？」

「アリサちゃん、ストレートすぎるよ……」

思わずすずかが苦笑する。シユウはそんな二人の様子をしばらく眺めながら、やがて困惑した表情を浮かべた。

「もしかして僕って分かりやすい？」

「……隠してるつもりだったの？」

そう聞いてきたのはすずかだ。シユウの引きつった笑みを見て、アリサとすずかはそろつたため息をついた。呆れ果てたかのようなため息だ。

「まあ……がんばりなさい。あたしたちが言いたいのはそれだけよ」

「応援、してるから」

アリサとすずかの言葉に、シユウはどこか複雑そうな表情をしながらも、ありがとうと言葉を返した。

シユウは時折こちらに来る人と会話をしながら、庭の隅でぼんやりと月を見ていた。他の皆はまだ食事や会話を続けているが、シユウはいつものごとくあまり混じろうとは思えない。魔法関係の話になるとほとんど分からないのはいつものことだ。

「また一人ですか、シユウ」

声をかけられ、そちらを見る。シユテルがそこにいて、コップを二つ持っていた。そのうちの一つを差し出してきたので受け取り、少し飲む。グレープジュースだ。

「何をしていたのですか？」

「……月見？」

「……皮肉にも聞こえますよ。ですが貴方の場合はそのままの意味なのでしょうね」

どうせなら一緒に見ましょう、とシユテルがシユウの隣に立つ。二人で月を眺める。普段は意識して見ないが、改めて見ると綺麗だなと思う。月の周りには幾つもの星が寄り添うように輝いていた。シユウはシユテルを一瞥して、すぐに月へと視線を戻す。

シユテルは自分をどのように思っているのだろう。好きか嫌いかではなく、足を引く張っていないかどうか。だ。あの時、シユウと共にいなければならぬことをシユテルは構わないと言ってくれていたが、それでもやはりいつも気になってしまう。自分という存在が、シユテルを、シユテルたちを縛る鎖になっていないか。

そんなことを心の内で悶々と考え続けていると、不意に手に温かいものが触れた。

シユテルの手だ。シユテルを見ると、真剣な眼差しでこちらを見つめている。

「シユテル……?」

シユテルはしばらくシユウを見て、そして言う。

「余計なことは考えなくて構いません」

「え……?」

「私がしたいからそうしただけです。貴方は鎖になどなっていないですよ」

シユウが目を丸くする。どうして、とつぶやくと、シユテルはどこか呆れたようにため息をついた。声に出していましたよ、と短く告げられ、シユウの顔面が蒼白になっていく。その様子を見て、シユテルは薄く苦笑を漏らした。

「貴方は貴方の思うように生きてください。私も四六時中貴方と共にいなければならぬわけではありませんし、私たちもやりたいようにやりますよ」

魔力は届けに来ますので、とシユテルがシユウの手を包み込むように握る。温かいものがシユウの中へと流れ込んでくる。シユウはそれに身を任せ、微笑んだ。

「ありがとう、シユテル」

それを聞いたシユテルは、いつもの無表情で、ただどこか柔らかい雰囲気です、お気になさらずに、とうなずいた。

夜も遅くなってきたところで未成年者は解散となった。皆と挨拶を交わして、シユウ

たちは家路につく。シユウたちの両手には来た時と同じように荷物があり、余り物の料理などだ。それぞれの家庭がそれなりの量を作ってしまったため、各自好きなものをバックに詰めて持つて帰ることになった。

「帰った後は風呂の用意だな。あとは……まあ今日は早めに休むとしよう」

「ディアーチエがこの後の予定を組み立て、すぐにレヴィが異を唱える。

「えー！ せっかく食べ物もあるんだし、家でもお月見したい！」

「む……。気持ちに分かるが、しかしだな……」

「いい考えだと思えます！ ディアーチエ、お願いします！」

「よし分かった。帰ったら二次会だ」

レヴィとユーリが歓声を上げる。シユウはその様子を一步離れて見守っていた。明日も学校があるため早めに休みたいというのが本音ではある。だがたまには夜更かしもいいだろう。

「シユウ。休む時は遠慮なく」

シユウの考えを察したのか、シユテルがそう言うてくれる。シユウは大丈夫だと応えつつも礼は言った。

帰宅後は順番に風呂に入り、その後に料理を温め直してベランダに持つて行く。シユテルとディアーチエがどこからか小さなテーブルを持つて来て、そこに料理を並べた。

五人で並んで座り、月を眺めながら料理を食べ始める。

「今日は晴れて良かったですね」

ユーリの言葉に全員がうなずく。曇りなら月など見られないし、雨ならまず中止だった。

のんびりと話を続けながら料理を食べていく。どれほどそうしていたかは分からな  
いが、いつの間にかレヴィとユーリは眠っていた。最初に気づいたのはデイアーチエ  
で、困ったやつらだと言いつつもユーリを背負って室内へど入っていく。シュテルもレ  
ヴィを背負い、室内へど姿を消した。

残されたシュウは団子を食べながらぼんやりと待つ。すぐに二人が戻ってきた。

「我は中に戻るが、どうする?」

「私は……シュウに任せます」

二人の視線が自分に注がれる。シュウはそれを感じながら、団子をまた口に入れる。  
「もう少しだけ、ここにいていいかな」

「構わん。空いている皿は下げておくぞ」

デイアーチエがいくつかの皿を持って室内へど戻った。

S i d e : S t e r n

「ディアーチエの姿が消えてから、シユテルはシユウの隣に腰を下ろした。団子をつまみ、口に入れる。我ながらなかなかうまく作れたと思う。ただ桃子が作ったものを食べた後では、まだ改善の余地があると理解できる。」

隣のシユウを見ると、何を見るでもなくぼんやりと夜空を眺めていた。思い出したかのように手が動き、団子をつまみでは口に入れていく。何を考えているのかまでは分からない。

静かな時間がゆっくりと流れていく。高町家での月見も良かったが、静かなところで落ち着いて月を見るのもいいものだ。なにより今は、隣に……。

「シユテル」

唐突に呼ばれ、シユテルは内心で驚いた。それを隠しながらシユウへと視線を向ける。

「今頃になるんだけどね」

「はい」

「お団子、おいしいよ」

「……………。光栄です」

今になって、しかも突然言われるとは思わなかった。シユテルはシユウから視線を逸らし、夜空へと向ける。顔が熱いのは何故だろうか。



満月の見下ろす夜の静寂の中、シユテルとシユウの二人は、ダイアーチエが呼びに来るまでずっと月を眺め続けていた。

## 第五話

アースラの部屋の一つに、リンデイ、ケインとさくららが向かい合つて座つていた。三人の間にあるテーブルにはコーヒーが湯気を立てている。ケインとさくららは先ほど突然の呼び出しを受け、シユウに何かあつたのかと慌てて駆けつけたところだ。

「突然お呼び出ししてしまい、申し訳ありません。少しお聞きしたいことがあります」  
「私たちに答えられるものでしたら」

ケインの言葉にリンデイがうなずき、写真を一枚取り出した。ケインとさくららがそれを見る。娘の、文花の写真だ。なぜこれが、と二人そろつて首を傾げる。

「一応言つておきますが、管理局に入局させるつもりはありませんよ」

動揺を抑えながら、釘を刺すつもりでそう言う。だがリンデイは首を振つた。

「文花さんがシユウ君に取つている態度をご存じですか？」

ケインとさくららが怪訝そうに眉をひそめる。文花から学校の話を書くことはあるが、特に問題があるようには思えなかつた。それとも、あの子があえて話してないだけか。

「詳しく教えてもらつても？」

ケインの言葉に、リンデイがうなずいて教えてくれる。なのはたちなど、見た人から聞いたただだがという前置きはあったが、内容は思ってもみないものだった。さくらは目を見開いて絶句し、ケインは愕然としている。

「家ではお兄ちゃんに会えて嬉しい、としか……」

「まさかそんな……。そんなことになっていたとは……」

動揺を隠しきれず、狼狽える二人に、しかしリンデイは続ける。

「文花さんが、レヴィさんを襲いました」

「な……!」

「シユテルさんがシユウ君とともに文花さんのもとへ向かってきています。……それを踏まえて、聞いておかなければならないことがあります。文花さんは鎌の形状になるデバイスを持っていたそうですが、デバイスの詳細を教えてくださいませんか?」

我が子に与えるデバイスだ。ただのデバイスであるわけがない。何か特殊な能力を付加させているだろう。そう考えての質問だったのだが、しかしケインとさくらの反応は違うものだった。デバイスと聞いて、啞然としていた。

その表情を見た瞬間に嫌な予感がある。思わず頬が引きつってしまふ。

「私たちはあの子にデバイスなど渡していません」

さくらの言葉に、今度はリンデイが絶句した。

## Side: Humika

まだ自分が今よりももっと小さかった頃、男の子たちにいじめられていたことがある。どうすればいいか分からないでいる間にいじめはひどくなり、ある日小さな怪我を負った。低い段差で突き飛ばされたもので、腕を少し切っただけのものだ。

些細な怪我。足下に気をつけるように、で終わるはずの小さなもの。だが兄はすぐに何かを察したのか、自分を問い詰めてきた。そしていじめのことを知った兄から表情が消える。喜怒哀楽が完全に廃された無表情。

兄はすぐにその男の子たちのもとへと向かった。問い詰める兄に対して男の子たちは無視。それどころか、しつこい兄に対して明確な暴力行為に出る。ただ、それでも兄は自分からは一切手を出さず、ただただ無表情で何度も起き上がり、じつと相手を見据えていく。やがて気味が悪くなったのか、男の子たちは謝罪をすると逃げるように走り去った。

自分が兄を慕っていた一番の理由。その出来事。妹を守ってくれる兄。自分だけのヒーロー。

だが、その無表情は、今は文花に向けられていた。

## Side: Hero

夜の闇の中、砂浜に座り込む一つの影。黒い海を無言で見つめるその背中とは、とても小さく見えてしまう。シユウはその背中を見つけると、やはり無言で砂浜に立ち、歩いて行く。

「よくここにだと分かりましたね……」

シユテルのそんな声が聞こえる。シユウ自身にも分からなかったが、なぜかここにいてという確信があった。兄妹で繋がる何かがあるのか。今となつてはどうでもいいことだが。

少しずつ歩いて行くと、座り込む影が、文花が振り返つた。シユウの姿を認め、嬉しそうに嗤う。背筋が冷たくなる笑顔だ。

「来てくれると思つていたよ、お兄ちゃん」

文花の言葉。しかしシユウは何も応えない。ただ静かに文花を見据えるだけだ。

「何しに来たの？ お説教？ 説得？ それとも……私と一緒に来てくれる気になつた？」

「そこまで聞き終えて、シユウが小さくため息をつく。首を振つて、言う。

「違う。どれでもない」

「じゃあなに？」

怪訝そうに眉をひそめる文花。対するシユウはやはり無表情。

「叱りに来た」

「……は？」

「僕のせいで文花が傷ついた。今回の文花の行動も僕が原因の一つだと思う。だから、僕は偉そうなことを言うつもりはない」

しかしそれでも。

「文花のしたことは悪いことだ。だから、文花のお兄ちゃんとして、文花を叱りに来た」  
そして一步を踏み出す。そこからは早い。どんどんと文花へと歩いて行く。文花はそれに驚き、すぐにカードのようなものを取り出した。すぐに光り始め、形状が変化、鎌へと変わる。文花は黒いローブ姿になっていた。

「来ないで！」

文花の叫び声。同時に射出される魔法。それはシユウの足下に着弾して、シユウは足を止めた。少し振り返り、シユテルを見る。シユテルもデバイスを取り出していた。そのシユテルをじっと見つめる。

「……………」

意図を察したのか、シユテルが一度だけうなずいてくれる。

『危なくなったら手を出します。それまでは好きにしてください』

シユテルの声が頭の中に響く。これが念話というものなのだろう。どうして急に聞こえるようになったのかも思ったが、シユテルの魔力をもらっている影響かもしれない。シユウはうなずくと、再び文花に向き直った。

「あ、あはは……。そこの人に助けを求めろの？」

文花の嗤い声。だがその声はかすかにだが震えている。そしてシユウは、また一步を踏み出した。その直後に足下から土煙が上がったが、シユウは気にしない。今度はわずかにも止まることなく、歩いて行く。

驚いた文花が何度も魔法を放ってくる。その全てがあらぬ方向へと飛んでいき、シユウには当たらない。威嚇射撃だとわかりきっている。だからこそ、恐れる必要がない。

文花はまだ恐れている。人を傷つけるということを。レヴィから念話を受けたシユテルの話では、最後はずっと笑い続けていたらしいが、相当無理をしていることは見れば分かる。

それでもやはり壊れかけていることには違いないのだろう。このまま放っておいたら、おそらく二度と取り返しのつかないことになる。だからこそ、文花の兄として、妹の間違いを正さなければならぬ。それが、妹と向き合わなかった自分の責だ。

一步一步、しっかりと近づいていく。右手に力を込めていく。愚昧の文花を叱るために。

「こ、来ないで……。来ないでよ！」

文花の叫び声。同時に右腕に激痛が走る。血が流れ、砂浜に落ちて吸い込まれていく。

シユウはすぐに振り返った。シユテルに、まだ大丈夫だという意思を示し、また文花に向き直る。シユテルの表情がわずかに怒りのものとなっていたが、今は文花が先だ。魔法が当たったことが文花にとっても予想外だったのか、文花の顔面が蒼白になっていた。おそらく、レヴィを襲った時もこんな表情をしたに違いない。激しい後悔に彩られた表情に。

シユウが文花へと歩く。もう魔法は飛んでこなかった。文花は蒼白になりながら、啞然とした様子でシユウを見つめている。やがて文花の前までたどり着く。狼狽える文花に、シユウは、

「てっ」

「あうっ」

拳骨を落とした。頭を押さえてうずくまる文花と、手を揺らすシユウ。殴った時に右腕の傷に激痛が走ったのだが、人を殴る代償だと考えれば安いものだろう。シユウはその場にかがみ込むと、うずくまる文花をしつかりと見た。

「文花」



シユウに呼ばれ、びくりと体を震わせる。おそるおそる顔を上げる文花にシユウは言う。

「文花のやったことは、間違いだ。どんな理由であれ、関係のない人を巻き込んだらいけないかった」

「そんなの……！ お兄ちゃんが……！」

「分かってるよ。文花と向き合わずに逃げ続けた。僕が文花を追い詰めてしまったんだと思う。でも、それなら僕を襲えばいいじゃないか」

「……っ」

文花が言葉を詰まらせる。シユウはその様子を見て、やがて薄く微笑んだ。まだ大丈夫だと。自分の行いに悔いているなら、二度と同じ過ちは犯さないだろう。

「文花。僕を恨め。僕を憎め。それで文花の心が安定するなら、僕はいくらでも文花の矛を受け止めてあげる。その代わり、他の人を巻き込まないで」

「え……っ？」

文花が顔を上げる。間の抜けた表情でシユウを見つめてくる。シユウは、余計なことを言ったかと少し後悔したが、言った以上は取り消すことはできない。さて、と言って立ち上がる。

「お兄ちゃん、もしかして最初から……っ？」

「さて、何のことかな？」

いつものように笑うシユウ。言いたいことを言えて、ようやく自分の気持ちも落ち着いてきた。あとはアースラに行くだけだ。

「文花、今回のことは犯罪だからね。アースラに行こう。一緒に行つてあげるから」

シユウが差し出した手を、文花は躊躇しながらも、その手を取った。

「人に迷惑をかけた者同士、行くとしようか」

「……一緒にじゃないよ。お兄ちゃんと違って、私は自分の意思で人を殺したんだから、もう後戻りはできないよ……」

「ああ……。それだけど……」

本当にレヴィが死んでいたら、こんな簡単な話で済むはずがない。デイアーチエたちがどうあつても許さないだろうし、何より自分も妹相手であらうと怒り狂う自信がある。思えば強く依存してしまつたものだ。罪は罪だが、少しでも安心させようと口を開こうとして、

「……………え……………」

自分の腹から突き出た刃を見て、絶句した。

S i d e : H u m i k a

「それでは困りますね、文花様」

「デバイスの声。自分の握る鎌からの声。鎌の刃は兄の体に突き刺さっている。

「……………え……………？」

シユウと同時に、シユウと同じ声を漏らす。自分は、何をしているのだろうか。

「シユウー」

奥から聞こえてくる声。兄と一緒に来た人の声だ。文花は呆然としたまま兄を見る。

兄は振り返ると、戸惑いの表情を浮かべていたが、やがてすぐに微笑み……………。

どしやりと、地面に倒れた。その腹部からは大量の血が流れ出していく。

「あ……………ああ……………」

かすれた声を漏らし、文花は後退る。こんなことをするつもりではなかった。こんなはずではなかった。そう心が叫ぶ。

「何を今更。どんなことをしてでもお兄様を奪い取ると、言っていたではありませんか」

「デバイスの声。震える瞳で鎌を見る。鎌は静かに明滅している。

「貴方ができないのなら、私が手伝ってあげましょう」

直後に、文花は体の自由を失った。勝手に手が、足が動き、魔法を展開し、空へと浮かぶ。鎌は激しい光を放ち、次の魔法の展開を始める。

「さあ、まずはお兄様にとどめを。そうすればどんな願いでも叶うはずですから。あと

はとりあえず、邪魔な者たちも一掃しなければなりませんね」

文花の口からそんな言葉が漏れ始める。違う。そんなことはしたくない。心が叫ぶが、文花の意思ではもう何もできない。

——いやだ……!! お兄ちゃん、助けて……!!

心で叫ぶ。通じるはずがないと分かっているのに。

だが、その直後、シユウが目を開き、立ち上がった。腹部から流れ出る血は止まらない。駆け寄った少女が治癒魔法を施しているが、そう簡単に治る傷でもないだろう。

「文花……」

兄の声。じつとこちらを見据えてくる兄の姿。何を言われるのかと怯えるが、しかしいつもの笑顔を浮かべてくれる。

「大丈夫……」

そうつぶやきながら。

S i d e : S t e r n

「シユテル。お願いがある」

シユウに治癒魔法を施していると、そんな声が降ってきた。何を、とは聞かない。言いたいことは分かる。だが、今魔法を止めてしまえば、シユウの命が危ない。

「大丈夫。僕なら大丈夫だから。だから、文花を止めてあげて」

「シユウ……」

シユテルはしばらくシユウの顔を見つめ、やがて小さくうなずいた。すぐに念話を飛ばし、なのはや王、リンディに助けを求める。一方的に助けを求め、シユテルは念話を打ち切った。

「すぐに助けが来ます。動かないように」

「うん。了解」

シユウが力なく笑い、シユテルは一つうなずいた。ルシフェリオンとバリアジャケツトを展開し、空にいる文花と対峙する。

「邪魔をするのですか？ いいでしょう、相手になりましょう」

文花が嗤う。狂気に満ちた嗤い声。

「貴方の目的も本来の主も私には分かりませんが……」

言いながら、ルシフェリオンを突きつける。魔力の収束を始めていく。

「シユウにその子のことを頼まりました。容赦はしません。灰も残さず……消え果てなさい」

そして、シユテルの収束砲撃の第一射が放たれた。

## Side : Nanoha

「シユウ君！」

最初に駆けつけたのはなのはだ。そのすぐ後からデイアーチエたち、リンデイたちが続く。はやてに連絡を回してくれたのか、リンデイとともにはやてとシャマルも来た。た。

「ひどい傷……。シャマルさん！」

「はい！」

リンデイの声にシャマルがすぐに魔法を展開。治癒にあたる。

なのはは上空を見る。シユテルと文花が戦闘をしている。文花の接近しての攻撃をかわしながら、シユテルは牽制を織り交ぜつつ攻撃を続けていく。押しているのは、シユテルだ。

「まさか本当に……。文花が……」

遅れてきたのはケインとさくらだ。呆然とした様子で戦闘を見ている。リンデイから少しだけ聞いたが、どうやら本当に何も知らなかったらしい。

「(こんな)とつて……」

シャマルがそんな声を漏らす。全員が驚き、そちらを見る。シャマルの魔法は正常に機能しているのだが、シユウの顔色は一向に良くならない。むしろ悪化しているような

気さえする。

「おい、どうしたのだ！」

ディアーチェの焦ったような声。シャマルが分からないと首を振る。

「魔法が届かないの……！　まるで、何かに拒絶されてるような……」

「……なに？」

ディアーチェが目を見開く。なのはもすぐに思い当たった。シユテルから聞いた話では、シユウはシユテルの魔力しか受け付けない、と。だがまさか治癒魔法なども拒絶してしまうとは。

「シユテルに加勢してきます！　シユテルの魔法なら……！」

ユーリがそう言葉を放つと同時に、何かが空から降ってきた。それは自分たちの側に突き刺さる。黒い鎌の刃だ。

「お待たせしました」

シユテルがゆつくりと降りてくる。その背には、ぐったりとした文花の体。いつの間にか決着がついていたらしい。シユテルはすぐに周囲の様子に気がつき、眉をひそめた。

「何かありましたか？」

Side: Stern

魔法を受け付けないと聞き、さすがにシユテルも驚いた。しかしよく考えれば、その可能性も考慮しておくべきだった。自分の短慮に後悔しつつも、シユテルはすぐに行動に移る。シユウへと駆け寄り、治癒魔法を施そうとして、

「……………」

すぐに理解する。間に合わない、と。なのはたちが来た時に戦闘を代わってあげれば、と後悔するが、今は後悔しても仕方がない。ならば最終手段だ。

シユテルは治癒魔法を放棄、ありつたけの魔力をシユウへと注ぎ込む。周囲が何を、と困惑しているが、口を挟む者はいない。

「頼るべきではないと分かっています。ですが、どうか一度だけ……。その力を貸してください。お願いします……」

パスト。シユテルがそう締めくくる。反応はない。それでも魔力を注ぎ続ける。

やがて、全員に対する念話で、シユテルしか知らない声が聞こえてきた。

仕方ないね、と。

『シユテル。君はあたしに、ギフトッドを利用しない、と言っていないかったっけ?』

パストの声。周囲が驚きで困惑している中、シユテルは苦笑した。

「すみません。私でどうにかできれば良かったのですが……。しかしそれを言うなら、貴方も治癒魔法ぐらいいは受け取ってくれても良かったのでは?」



『悪いね。そんな細かい設定はめんど……あ、いや、できないんだ』

シユテルの目がわずかに細められる。ぼつが悪そうに。パストは咳払いをすると、分かったよと承諾した。

『魔力ももらったしね。まあこの子を治すだけなら、やってやるよ。ただ、追加で約束しておくれ』

「何なりと」

『この子と、その文花つて子。あまりケンカしすぎないように見ててくれ。正直、情けなさ過ぎるんだよ』

どういふことかと文花が首を傾げる。パストは文花が聞いていると気づいていないのか、それとも知っていてあえて言っているのか。言葉が続ける。

『同じ魔力を分けた兄妹でケンカするなつてことさ。ギフトッドの祝福を受けて生まれただからね』

なるほど、とシユテルがうなづく。さすが理解が早いねとパストが楽しそうに笑う。

そして唐突にパストの声は聞こえなくなり、それと同時にシユウの顔色が良くなつていく。体の傷も、腕も含めて消えていく。やがて、シユウの体から傷が消え去り、整った寝息を立て始めた。

「ありがとうございました、パスト。……おやすみなさい、シユウ」

## Side: Hero

ギフトッドは願いを叶えるロストログアだ。その効果は絶大で、魔力さえあれば何かを生み出すことでない限り、どのような願いも叶えてしまう。

西崎秀一の場合はどうだろうか。ギフトッドそのものが人の形を取ることにより願いは叶えられた。ただしその代償として魔力を必要とし、足りなくなれば外部から魔力を帯びたものを呼び寄せる。だが、少し待つてほしい。

これは願いを叶えたと言えるのか。何かを呼び寄せるなど、ただの人間ができるはずもない。人外と言わざるを得ない体質。最初からその予定だったとは思えない。本来、魔力は十分に足りていた。だが、ギフトッドはもう一つ願いを叶え、魔力が不足したのではないか。

それが文花だ。ケインとさくらはシユウに愛情を注ぐ一方で、実子も望んだのだろう。それを聞いたギフトッドが、自身を維持する魔力を使ってまで叶えてしまった。今回は、少しばかり父親と母親の体に干渉し、子を宿させるというやり方で。その時に、おそらくギフトッドの魔力がその子、文花にも宿ったのだと思われる。

文花の魔力のランクは、AA相当。なのはたちと比べるとどうしても劣っているように思えるが、両親のランクはCだそうだ。純粋な魔力量なら管理局でも随一で、これは

ギフテッドから与えられたものだろう。

アースラの一室で目覚めたシユウにそう説明してくれたのはシユテルだ。本人に聞いたわけではないので仮説ですが、という前置きはあったが、何となくそれで正しいと分かる。

「お兄ちゃん！」

話を終えた頃、部屋の扉が開き文花が入ってきた。車椅子を押しているのはリンディだ。

「お兄ちゃん、良かった……。ごめんなさい、ごめんなさい……！」

何度も謝り続ける文花。シユウはどうしたものかと苦笑してしまう。

「大丈夫だから。それより、今後の話をしよう」

リンディさんもいることだし、と続けると、文花の表情が硬くなった。何の話をするのか理解できたらしい。文花もリンディへと向き直る。

「リンディさん。文花の罪のことなんですけど」

「ええ」

「全て、とは言えませんが、半分ぐらいは僕が負うことはできますか？」

これに驚いたのはリンディはもちろん、文花もだ。シユテルは一人、予想していたのか表情を変えずに嘆息しただけだった。

「お兄ちゃん……」

「僕の責任でもあるって言ったよね。だから、半分は僕が負うよ」

どのような罪になるかは分からないが、リンディへと視線を向けると、困ったような笑顔を浮かべていた。

「そうね。文花さんの罪のことだけど……」

「はい」

「何もないわよ」

「……はい？」

リンディ曰く、今回文花が起こした事件はレヴィに対する傷害事件と、海での暴走。後者に関してはデバイスの暴走ということで落ち着いているし、前者に関しては被害者であるレヴィが、そんなことはなかったと言い張っているらしい。

「ど、どうして……？」

戸惑う文花。シユウも怪訝そうに眉をひそめる。

「本人に聞いてみればいいんじゃないかしら？ 私としても、何もしていない一般人を拘束するわけにはいかないから」

そう言いながらもリンディは文花を見る。監視だけは付けさせてもらうけど、と付け足した。

シユウは文花を伴って、自宅のマンションへと帰ってきた。そのまま荷物を置いてシユテルたちへの部屋へと向かう。話を聞いていたのか、全員がリビングで待っていた。

「レヴィ、どういうこと?」

開口一番、シユウが言う。今朝に戻ってきたというレヴィはカレーを幸せそうに食べながら、何が? と首を傾げる。

「文花のことだよ」

「あ、それか。いやだつて、痛かったけどそれだけだし。生きてるし」

「で、でも! 私がレヴィさんを襲ったのは事実ですし……!」

シユウの後ろから文花が言う。レヴィはカレーをもう一口食べて、それはそうだけど、とうなずいた。

「だからボクからお願いがあるんだ」

「お願い?」

「うん。ボクは文花に対して怒らない。許してあげる。だから文花も、シユウのことを許してあげてよ」

シユウと文花が目を丸くし、レヴィはまたカレーを食べ始める。文花はしばらく呆然としていたが、やがてしつかりとうなずいた。分かりました、と。

「え？ 文花……？」

「そういうことだから。私はもうお兄ちゃんを恨まないし憎まない。今までごめんなき  
い」

そう言つて頭を下げる。そして顔を上げた時には、明るい笑顔があつた。

「……ああ……。ありがとう……」

シユウは、そう言うことしかできなかつた。

しばらくして。

文花もシユウと同じ学校に通い続けることになった。だがやはり思うところがある  
のか、シユウと一緒に暮らそうとは思えなかつたらしい。今までと同様、両親が交代で  
文花の様子を見に来る生活をしているようだ。

その文花は、時折シユウの部屋へと遊びに来る。目的は、

「シユテルお姉ちゃん！ 魔法、教えて！」

シユテルだ。ディアーチェたちに対してはさん付けで呼んでいるのだが、なぜかシユ  
テルに対してだけお姉ちゃんと呼んでいる。理由を聞いてみると、戦う姿がかつこうよ  
かつたから、らしい。

「それにお兄ちゃんと結婚したら本当のお姉ちゃんだし」

「ん？ 何か言った？」

「何でもないよー！」

屈託なく笑う。そんな笑顔をまた見ることができて、シユウも自然と頬が緩む。シユウはシユテルと話す文香の笑顔を見ながら、幸福感に浸っていた。

だから、文花のデバイスのことなど忘れてしまっていた。

## chapter 2

## ハロウイン

シユウは自分の部屋で、この日のために用意した服に着替えていた。この日のために、シユテルたちと一緒に買い物に行き、選んでもらったものだ。着替え終わったシユウの服装は、東洋の貴族のような服装に黒いマント、ついでに口には牙のようなものをつけている。

シユウは鏡の前に立ち、一つうなずいて言った。

「誰これ」

今日はハロウイン。なぜかこの地域ではハロウインは盛大に行われている。街中にハロウイン関係の飾り付けが施され、仮装をした子供たちが家々を訪問している。今も耳を澄ませば、どこからかトリックオアトリート、という声が。

「シユウ！ トリックオアトリート！」

「あ、レヴィか」

ドアを開けて入ってくるレヴィ。仮装はしている、と言えるのだろうか。バリアジャ



ケツトの衣装だった。

「レヴィはそれ？」

「うん。どう？」

「いや……。時折見てるから何とも……」

シユテルたちのバリアジャケツトは見たことがある。だから今更驚きはしない。ただ少し残念だったのか、レヴィは口を尖らせた。

「あはは、ごめんね。はい、お菓子」

シユウがカップケーキを差し出すと、すぐにレヴィの顔が輝いた。受け取ってすぐに口の中へ。しばらく租借して、笑顔になった。

「うん！ 美味しい！」

「そう？ なら良かった」

シユウはビニール袋にカップケーキを丁寧にに入れていく。数は二十個ほど。少し作りすぎたかもしれないが、残れば朝食にでもすればいい。用意を済ませ、シユウはレヴィに言った。

「お待たせ。行こうか」

「うん！」

レヴィと共に部屋を出て、鍵を掛ける。そして隣のシユテルたちの部屋へ。リビング

ではすでに準備を終えたシユテルたちが、思い思いに過ごしていた。

ユーリは黒い服に同色の三角帽子。魔女だろうか。ディアーチエは甲冑めいた衣装に黒色のマント。魔人、だそうだ。そしてシユテルは、猫耳。シンプルだ。

「おー……。ハロウィンって感じがしてきたね」

「それなりにな」

ディアーチエがうなずく。ただ少し恥ずかしいのか、まともに顔を見ようとはしてくれない。ユーリも帽子を目深にかぶってしまっている。シユテルだけが普段通りに本を読んでいた。

「シユテルは猫、なんだね。……えっと……」

うまく言葉が出てこない。こういった時はどんなことを言えばいいのかと悩んでしまふ。シユテルは本を閉じると、さて、と立ち上がった。

「王。そろそろ向かいますか?」

「ん? ああ、そうか……。そうだな」

シユテルの言葉にディアーチエがうなずき、それを聞いていたユーリも立ち上がった。それぞれお菓子の入ったビニール袋を手取る。それら全てに、シユテルとディアーチエの二人が作ったお菓子が詰められていた。

これから向かうのは八神家だ。先日、ハロウィンパーティをする、という連絡が本人

からあり、こうして準備を整えていたのだ。仮装もしてきてな、ということでも今の格好となつている。

「では行くか」

ディアーチエが言つて、部屋を出て行く。シユウはしばらく呆然としていたが、やがて慌てて四人を追つた。

——かわいい、て言いたかつたんだけどね……。

なかなか言葉に出すのは難しいな、とシユウは小さくため息をついた。

八神家に到着したのは昼を少し過ぎてからだ。インターホンを押すと、シャマルが笑顔で出迎えてくれる。いらつしやい、と招き入れてくれた。

リビングにはすでに参加者が揃つていた。八神家一同、そしてなのは、フェイト、アリサとすずかだ。テーブルにはすでにお菓子が並べられている。そしてやはりと言うべきか、全員が仮装をしていた。

アリサとすずかは童話に出てくるような騎士の衣装。はやては顔に控えめなメイクをしている。フランケンシュタイン、といったところか。フェイトは黒いローブの魔女姿。なのはは控えめで、そしてシユウの隣と被つていた。

「ナノハも猫ですか」

「うん。おそろいだね」

そうですね、とシユテルがうなづく。無表情ながらもどこか柔らかい印象を受ける。なのもそれを分かっているのか、嬉しそうに笑っていた。

ちなみにヴォルケンリッターの面々は仮装していない。曰く、買い出し担当だからだとか。だがここに来るまでの間にも仮装している人が大勢出歩いてた。それを指摘すると、一瞬言葉に詰まり、大人の姿だと恥ずかしいんだ、としどろもどろになる。

「うん。大人も仮装してたよ?」

「ぐっ……!」

「うん。まあ無理にしろとは言わないし言えないから、これ以上はやめとくよ」

そう言っつてシグナムから視線を逸らす直前、シグナムが安堵のため息をついていたのを見逃さなかった。追求はしなかったが。

「ところでシユウのそれは……。吸血鬼?」

問うてきたのはフェイトだ。いつの間にかディアーチエたちが持つてきたお菓子などをテーブルに並べている。シユウもすぐに手伝いながらうなづく。

「うん。仮装なんて初めてだからちよつと恥ずかしいね。変じやない?」

「そんなことないよ、似合ってる」

フェイトの笑顔にシユウの頬が緩む。事前にこの姿を見ていたのはシユテルたちだけだったので、正直不安にも思っていた。

「それを選んだのはやっぱりシユテル？」

そう聞いてきたのはアリサだ。シユウはそうだよとうなずく。選ぶ時に希望を聞かれ、特にないけどあまり派手じゃないもの、と告げるとこれを選んでくれた。その時は派手だと思つたものだが、周辺の仮装を見ると十分控えめだった。

「準備完了や！　じゃあ始めよか！」

はやての言葉で皆がお菓子を食べ始める。それぞれ菓子を選び、会話を弾ませていく。

——お菓子があるだけで普段と変わらないような。

そう思ったが、口には出さずに心の中にしまった。

「これが今日の自信作！　王様、勝負や！」

はやての声。その向かい側のディアーチエが鼻を鳴らす。

「来ると思っていたぞ。我はこれだ！」

ディアーチエもテーブルには出さず取っておいたお菓子を出した。二人が同時に新たなお菓子をテーブルに出し、全員の注目を集める。見守られる中で、はやてとディアーチエの二人はお互いのお菓子をまず観察した。そして次に、お互いに一口ずつ頬張る。

「ふむ。なるほどな。見た目はただのケーキだが、カボチャの風味がしっかりと効いて

いる。カボチャのほのかな甘みがなかなか……」

「王様のは見た目からすごいなあ。カボチャの皮を器にしてるんやね。中に入ってるのもカボチャをしつかりと使った……」

ある意味二人の世界だ。この会話についていけない一同は苦笑しつつ少し距離を取る。

「あれは少し時間かかりそうだね……。今のうちにちよつと買い物に行ってくるよ」

シユウがそう言つて玄関へと向かう。それを聞いたシグナムたちが自分たちが行くこ  
う、と言つてくれるが、シユウは困つたように首を振つた。

「気分転換もしたいんだ。……あとちよつと察してほしいかな」

実は結構居心地が悪かつたりする。これははやてたちが悪いなどというわけではなく、単純にシユウの問題だ。理由は単純。女の子ばかりに囲まれて、男は自分一人だけだ。友人が聞けばきつと羨ましがるだろうが、実際にこの場に立つと居心地の悪さが際立つてしまう。

シユウの気持ちを察したのはザフィーラだ。シグナムたちがそれ以上何かを言う前に、気をつけて行くといい、と言つてくれる。ザフィーラが了承したのでシグナムたちもそれ以上は言えなくなる。

玄関で靴を履いたところで、

「私も行きましょう」

いつの間にか、シユテルがそこに立っていた。

八神家を出てのんびりと歩く。出かける前にテーブルを見た時、お菓子はまだまだ残っていたが飲み物が残り少なかったはずだ。それらを買えばいいだろうとスーパーへと向かう。

「それにしても、毎年思うけど海鳴市はすごいね」

シユウがそう言うと、隣のシユテルが、そうなのですかと首を傾げてくる。

「うん。僕が生まれたところだと、ハロウィンなんて誰も気にしてなかったよ。だからちよつと新鮮だね」

何か行事があれば街ぐるみで楽しもうとしているような気がする。一人だった時は煩わしく思えたものだが、今はしっかりと楽しむことができる。

周囲を見ると仮装した人が大勢いる。ほとんどは子供たちで、シユウのように吸血鬼だろう男の子や魔女の女の子、童話に出てくる騎士の子、様々だ。辺りを見ているだけでも飽きることがない。

「二度聞いておこうと思っていたのですが」

シユテルの言葉にシユウが振り返る。笑顔で首を傾げるシユウに、

「その衣服で良かったのですか？」

問われたシユウは質問の意味が分からず、言葉を返せない。シユテルが続ける。

「地味なもの、と頼まれましたから。……それはそこまで派手とは思いませんが、地味かと聞かれると否定しなければいけません」

ああ、とシユウは納得した。派手ではないが地味というわけでもない。どうやらシユテルも少し気になっていたらしい。

「シユテルはどうしてこれを選んでくれたの？」

「単純に、貴方に似合うだろうと思ったためです」

真顔でそんな返事。そんなことを言われるとは思わなかったもので、そうかな、とシユウは照れくさそうに笑う。少しだけ顔が赤くなつていくのを自覚する。

「えつと……。実際、どうかかな？ 僕の格好。変じゃない？」

今更聞くことでもないとは思うが、シユテルに選んでもらったものだ。やはりシユテルから感想を聞いてみたいという思いはあった。ただ、鏡を見た自分の感想が、誰これだったのて聞くのは少し怖かったりもするのだが。

シユテルが改めてシユウを見る。しばらくして、小さくうなずいた。

「とても似合っていると思いますよ」

「本当に？」

「こんなところで嘘などつきません」



シユウの疑いの声にシユテルはため息をついた。シユウは嬉しそうに笑い、ありがと、と言っておく。シユテルが似合っていると云ってくれたなら、自分にとってはそれでも満足だ。自然と頬が緩む。

スーパリーの側まで行くと、人通りが増えてきた。自分たちと同じく買い出しの人だろうか。はぐれないようにとシユテルに手を差し出すと、すぐに手を握ってくれた。それが嬉しくもあり、やはり少し恥ずかしい。

赤くなつた顔を見られないようにシユウは前を向いて歩いて行く。そして、ふと思ひ出したように言う。

「シユテルも似合ってる」

「は？」

「猫耳。すごくかわいいよ」

やっと言えた、とシユウは勝手に満足する。シユテルからの返事がないのできつと呆れられているのだろうが、今更だと気にもとめない。

だから、後ろを歩くシユテルの頬が朱に染まっていることにも、シユテルが小声で、不意打ちは卑怯です、とつぶやいたことにも、全く気がつかなかつた。

Side:Stern

「楽しかった!」

我が家に帰り着いてのレヴィの第一声。デイアーチェに促され、レヴィが風呂の準備に行く。

「シユウはどうした？」

「疲れたから早めに寝る、と自宅の方へ」

「ああ……。まあそうだろうな」

シユウとシユテルが買い出しから戻ってきた後、近所の家々を周りに行った。はやてと面識のある家にしか行っていないのだがシユウにとつては初対面だ。それなりに気も遣っただろう。歩いた距離もそれなりだったので、体力的にも疲れているはずだ。

あとで甘い物でも差し入れしよう、と考えながら洗い物を始めようとするシユテルへと、

「シユテル」

デイアーチェが声をかける。シユテルが振り返った。

「何でしようか？」

「何かいいことでもあったのか？ 機嫌がよきそうだが」

シユテルはしばらくきよんとしていたが、やがて薄く笑みを漏らした。とても自然な笑みだ。

「そうですね。少しだけですが、ありました」

「ふむ。そうか。ならば良い」

「ディアーチェが満足そうにうなずいてリビングへと向かう。王がどこまで察しているか分からないが、それでも、さすがは王、と思ってしまった。」

シユテルは買い出しのことを少し思い出し、少し頬を染めながらも、少しだけ嬉しそうに微笑んでいた。

## 第一話

運動会。学校に通う子供たちの一大イベント。もちろんシユウの通う学校にもあり、今日の日曜がその日になっている。ただシユウはあまり乗り気ではない。本来なら日曜はシユテルたちとのんびりと過ごせる日だからだ。明日の月曜は振替休日になるが、シユテルたちのうち誰かが仕事に行く可能性が高いのでやはり日曜にのんびりしたい。シユウは目の前の校庭で行われている高学年の組み体操を見ながら、長いため息をついた。すごいとは思うが、やはり興味そのものはない。

「あかねで、シユウ。先輩らががんばってるんやから」

隣からそんな声がかけられる。シユウはそちらを一瞥して、分かっているよ、とうなずいた。そうして返事をしてすぐに、何か違和感を覚える。今、誰が自分に話しかけた？「……何してるの、コウ」

いつの間にか隣にいたのは、別のクラスの友人だ。名を東江幸司。シユウはコウと呼んでいる。学校の中では親友と呼べる唯一の友人だ。

今は運動会の真っ最中。シユウたちはクラスごとに別れて集まり、応援している。ク

ラスの違うコウは当然別のグループのはずなのだが、なぜか今、シユウの隣にいる。シユウが怪訝そうにコウを見てみると、コウは目を逸らした。

「みんなまじめすぎて暇やもん……」

「だからって……。いや、もういい……」

コウは良くも悪くも自由奔放だ。好きなこと、楽しそうなことは喜んでやるのだが、嫌いなこと、つまらないことは逃げてくる。今回もその類いだらう。コウはシユウの返事を聞くと、満面の笑顔を見せた。

「さすがシユウ！ 話が分かるな！」

「でも呼ばれたら帰るんだよ？」

「分かっているって！」

シユウの肩を何度も叩き、コウは楽しそうに笑う。友人のその笑顔を見て、シユウも釣られて微笑んだ。

競技に出していない間ははっきり言って暇だ。応援をしなければとは思うが、あまりしようにも思えない。とりあえずはコウと話をしながら自分の競技を待つ。

コウと話し始めて少しして気づいたのだが、いつの間にかクラスごとのグループはかなり散らばっていた。周りを見れば他のクラスの子がいるし、逆に自分のクラスメイトの姿が見えないこともある。教師の目をかいくぐり、うまく立ち回っているらしい。

「お兄ちゃん、見つけた！」

その声にシユウは少し驚きながらも振り返る。笑顔の文花がそこにいた。

「どうしたの？ 文花」

仲直りしてからというものの、文花はよくこうしてシユウの元を訪れる。シユウとしても文花は大切な妹なので、訪ねてくるのは大歓迎だ。仲直りをした数日後に、文花はシユウに対しての誤解をとくためにがんばってくれもした。余計に頭が上がらない。

それを言うと、文花は、私が巻いたことだから、ごめんなさい、と謝られた。

文花がシユウの隣に来て、すぐにコウと目が合う。一瞬驚いた後、小さく会釈をする。「ああ、確かシユウの妹さんやったっけ？ 可愛いなあ」

「あ、ありがとう……」

どう返事をしていいのか分からないのか、微苦笑で礼を言っている。文花はすぐにシユウへと視線を戻した。

「文花はこの後は？」

何の競技に出るのか、などそんなことは聞かない。文花は今も車椅子だ。競技そのものに出ることはできない。文花は校庭の反対側のテントを指さした。そこは教師や何かしらの役職についている保護者の待機場所となっている。

「あとで私が放送するんだ」

「へえ……。がんばってね」

「うん！」

文花は笑顔でうなずくと、そろそろ行くねと去って行く。その背を見送っていると、コウがぼつりと漏らした。

「うん。可愛いな」

「……手を出したら怒るよ」

「お義兄さんって呼んでええかな」

「……………」

「……冗談です。怖いからその無表情はやめてくれ……」

シユウの視線から逃れるようにコウが顔を逸らす。シユウは小さくため息をついて、すぐに笑みを漏らした。

さらに時間が経ち、昼休憩となる。午前の部でシユウは一度だけ競技に出た。クラス全員参加の玉入れだが。

昼休憩の予定はない。シユウは自分のクラスの待機場所に戻り、午後の部まで寝ようと目を閉じる。昼食は忘れてきたので、ない。

「……………ん？」

瞼を閉じたところで、誰かに肩を叩かれた。誰だろうと振り返り、すぐにシユウは驚

きに目を瞠る。そこにいたのは、シユテルだった。黒いキャップを目深にかぶり、他から顔が見られないようにしている。

「な、何してるの?」

シユウが戸惑いながら聞くと、シユテルは何も言わずにシユウの手を取った。シユウを立ち上げらせ、歩き始める。未だにどこに行こうとしているのかが分からない。

「……シユテル?」

無言のシユテルに従い、少し歩く。そうしてたどり着いたのは、校舎の一つ。どうしてここに、と思いながら校舎の中に入り、そしてすぐに気がついた。

「……………あれ……………」

「ここまで来れば大丈夫ですね」

シユテルがキャップを取り、シユウを見る。側の教室を指さして続ける。

「王たちもお待ちです。昼食にしましょう」

——わざわざ結界まで張らなくても。

先導するシユテルを追いかけながら苦笑するが、しかしシユテルたちの気持ちは素直に嬉しかった。

案内された教室では、机といすが部屋の隅に片付けられ、中央にビニールシートが敷かれていた。ビニールシートに座るのは三人。ディアーチェとレヴィ、ユーリだ。シー



トには弁当箱がいくつも並べられている。

シユテルに促され、シユウがシートに向かうと、レヴィが手を上げた。

「やつほ！ がんばってる？」

「あー……。うん。一応」

どうしても歯切れの悪い返事になってしまふ。がんばったと言っても、参加した競技は玉入れだけだ。後は応援しかできない。それでもシユウの返事に満足したのか、レヴィは、ならよし、と笑っていた。

「まあ座れ。話はそれからいいだろう」

ディアーチェの声に従い、シユウもシートの上に腰を下ろした。隣にシユテルが座る。

「では、いただきます」

シユテルたちが持ってきた弁当を食べ終え、シユテルから差し出されたお茶を飲んでシユウは一息ついた。外で食べるというのも、たまにはいいものだと思う。教室の中ではあるが。

「シユウはどの競技に出るんですか？」

ユーリがどこから持ってきたのか、運動会のしおりを眺めながら聞いてくる。

「最後の方。クラス対抗リレーだよ。ちなみにアンカー」

「アンカーって、最後に走る人でしたよね？　すごいです！」

ユーリが瞳を輝かせる。それがとてもまぶしくて、シユウは思わず目を逸らしてしまつた。頬をかきながら、表情を引きつらせながら正直に話す。

「いや、単純に余り物……。いつの間にかそこしか空いてなくて、組み込まれてました……」

「……えつと……。がんばってください！」

ユーリが言葉に詰まりながらもそう言つてくれる。下手なフオローよりはいいのだが、これはこれで心に堪えるものがある。もとはと言えば、競技を決める時間に最後まで手を上げなかった自分が悪いのではあるが。

「でもま、シユウなら大丈夫だよ。がんばれ！　応援するぞ！」

「よもや、無様に負けるつもりはあるまいな？」

いつの間にかハードルが上がっている気がするのは何故だろう。走ることは嫌いではないが、得意というわけではない。負けようとは思わないが、他のクラスにはまじめに勝ちにきたメンバー構成もある。そんな中でシユウがどれほどがんばろうと……。

「シユウ。がんばってください」

シユテルの声に、シユウは思考を中断。頷くことをためらつたが、それでも最後にはしっかりと頷いた。

「がんばるよ」

結果的には、シユウは、シユウのクラスは三位だった。バトンを受けた時は四位だったので、順位を一つ上げるに止まったことになる。無論、手は抜かなかつた。どこかでシユテルたちが見ていると考えると、そんなことをできるはずもない。格好悪いところは見せられないと、一位になるつもりで全力で走った。

だが、シユウは、走るのが遅いわけではないが早いわけでもない。体力がないわけではないがあるわけでもない。下ではないが上ではない。体力も力も平均より少し上程度だ。そんなシユウがいくら必死になっても、努力を続けてきた子に勝てるわけもなく。そんな結果になった。

運動会が終わり、片付けも終え、生徒たちは帰路につく。リレーの後、シユウは意気消沈していた。クラスメイトたちは、順位が一つ上がっただけでもすごい、と言っているが、それでも自分にとっては不満の残る結果だった。

——こんなことなら、練習すれば良かったかな……。

そんなことを考えながらため息をつき、校門を出る。そして、

「お疲れ様でした」

その声に顔を上げた。

待っていてくれたのは、シユテルたちだ。全員が帽子やキャップを目深に被ってい

る。さて何を言われるだろう、と言葉を待っていると、

「すごいじゃん、シユウ！ 一人追い抜かした！」

「とても格好良かったです！」

「まああれなら十分だろう」

レヴィとユーリ、デイアーチエがそう言ってくれる。情けない、もつとがんばれ、そんな言葉を予想していたのでシユウは返事を忘れ、しばし啞然としてしまった。だが、よくよく考えればそんなことを言うはずがないと分かるはずだった。

シユウは力なく微笑むと、

「できれば勝ちたかったんだけどね」

「あれには走ることに努力してきた者もいるのでしよう。ならばシユウの結果は十分です。お疲れ様でした」

シユテルがそう言つて労つてくれる。それを聞いて、ようやくシユウは胸をなで下ろした。

五人で帰路につく。同じマンションへ同じペースで歩き始める。五人でこの道を歩くのは初めてだ。それがとても新鮮に思える。シユテルたちの会話を聞きながら歩き、それ故に背後からの声に気がつかなかつた

「シユウ！」

真後ろからの声。シユウが驚きながら勢いよく振り返り、シユテルたちは言葉を止める。そこにいたのはコウだった。朗らかな笑顔でシユウを見ている。

「帰るの早すぎやで！　ちよつとぐらい俺とも話しようや」

「あ、うん。ごめんね」

「まあええけどな。前と違ってちゃんと元気そうやし」

コウの言葉に、シユウは息を呑んだ。コウが言っているのは、まだ文花との関係が悪かった時のことだろう。やはりこの友人にも心配をかけてしまったと反省する。

「ところで、その子らは？」

反省の気持ちは一瞬で吹き飛んだ。代わりに焦燥感に支配される。全員が帽子かキヤップを被っているのもそう簡単に分かるものではないと思うが。

「高町さんと八神さん、テスタロツサさん、やでな？」

そんなことはなく、シユテルたちの顔を確認していたらしい。

「あれ？　でも三人ともまだ学校にいたような……」

やばいまずいでしょう。そんな気持ちばかりが空回りして、うまく考えがまとまらない。どうにかしてこの場を切り抜けなければならぬのに、頭の中は真つ白だ。そんなシユウの目の前に、シユテルが立った。

「初めまして。シユウのご学友の方ですね」

「そうやけど」

落ち着いたシュテルの声に、コウがわずかに眉をひそめる。シュテルが続ける。

「私はシュテルです。なのはとは友人ではありませんが、それだけですよ」

「我也同じく。ディアーチエだ」

「レヴィ」

「ユーリ・エーベルヴァインです」

シュテルに続いてディアーチエとレヴィ、ユーリが簡単ながら自己紹介をする。それで納得する者がどれだけいるのかと不安になるが、しかしコウはその数少ない者だったらしい。そうかそうかと何度も頷いて笑顔になった。

「世の中には似た人が三人居るってゆうもんな！ 東江幸司です！ コウって呼んでな」

屈託なく笑うコウに、それでいいのかとシュウは思わず苦笑してしまった。シュテルもまさかこれを通とは思っていなかったのだろう、少々戸惑っているようだ。

「それにしても、シュテルさんか……」

「何でしようか？」

コウはしばらくシュテルを見つめる。シュテルもわずかに首を傾げながらも視線は逸らさない。やがてコウが破顔した。

「クールで格好いいな！」

「はあ……。ありがとうございます」

シュテルの戸惑いが強くなる。シユウたちも突然なんだと訝しげに眉をひそめる。そしてコウが、言った。

「一目惚れしました。付き合ってください」

「……はい？」

シュテルが珍しく間の抜けた声を漏らし、デИАーチエたちが絶句する。

そしてシユウは。

「……え？」

予想もしていなかった親友の言葉に、何一つ反応できずにいた。

## クリスマス（特別編）

自室のこたつで暖を取りながら、シユウは時計を何度も確認していた。現在は昼の一時前。もうすぐ一時だ。準備は済ませているのだが、どうしても不安になってきてしまう。シユウの向かい側にはシユテルが座っており、こちらはみかんの皮をむいている。

「どうぞ」

むき終わったみかんをシユテルが差し出してくれる。ありがとう、とそれを受け取り、半分は割ってシユテルに返す。二人でみかんを口に入れ、しつかりと味わう。そのみかんを食べ終えた頃、シユテルがきて、と口を開いた。

「そろそろ時間ですね」

「あ、うん……。えつと……。行こうか？」

「はい」

シユウが立ち上がり、シユテルがそれに続く。シユウが戸締まりを確認し、その間にシユテルが電気類を切っていく。そうして二人同時に最後の準備を終えて、玄関に向かう。もちろん寒さ対策も忘れない。シユウはグレーのマフラー、シユテルは赤いマフ



ラーを着用している。

「それじゃあ……。いつてきます」

「誰に言っているのですか」

シユテルがわずかに苦笑しつつ、二人は扉をくぐる。そして手を繋いで、歩き出した。クリスマス飾り付けがされている街を、シユウとシユテルは二人で歩いて行く。お互いの手をしっかりと握り、目的地向かかって歩いて行く。大人たちであれば、映画館などで恋愛映画など見たりするのだろうが、シユウにそんな趣味はなく、シユテルも恋愛映画はあまり見ない。なので二人が最初に向かうのは、書店だった。

二人が最初に会った書店。そこでいつものように立ち読みを始める。せつかくのクリスマスだというのに普段と変わらないが、これが二人の関係でもある。

「やる気があるのかあいつは……」

店主が情けないと首を振っていることにシユウは気づかない。シユテルと一緒に、しばらくは本を読み続けた。

二時間ほどの読書を終え、二人は店主に挨拶をして書店を後にする。次に向かうのはデパートだ。特に何かを買う目的があるわけではない。ケーキなどはディアーチェが作っているし、それ以前に、今日は何も気にするなどディアーチェから言われている。気にせず遊べ、と。

それでも普段の生活の習慣か、二人は一階の食品売場に来ていた。試食などを少し食べつつ、ぐるりと一周する。だが何か必要なものがあつたわけではないので、商品は手に取らなかつた。

その後もデパートの各種売場を巡り、そして結局何も買わずに外に出る。自分はここに何をしにきたのだろうか、と思つてしまふが気にしても仕方のないことだ。

辺りが赤く染まり始めた頃、シユウとシユテルは公園のベンチで一息ついていた。予定のコースを回り終え、マンションに帰る前に少し休憩しようとしてここに立ち寄つている。結局、今日はいつもより多くの店を回つただけの日だった。それが少し、シユテルに申し訳なく思う。

クリスマスにシユテルを誘つたのは、シユウだ。忙しい時期でもあるので断られるかもしれないと思つていたのだが、快諾されてしまった。誘つたのはいいものの計画がなく、慌てて親友に相談していろいろとアドバイスをもらったのだが、結果はこの有様だ。

あまりにも情けなくて項垂れていると、シユテルの声が降つてきた。

「どうかしましたか？」

問われて、シユウは答えに窮する。正直に答えられるものではない。ただ、だからといって何も言わないわけにもいかない。シユウが選んだ言葉は、

「ごめんね」

その一言だった。だがシユテルにはその一言で通じてしまったらしく、わずかに苦笑するのが分かった。

「私は十分に楽しかったですよ。ですので、お気になさらずに」  
「でも……」

納得できずに言葉を続けようとする。だが、不意に手を握られ、シユウの言葉は最後まで出なかつた。シユテルがいつもの無表情で、しかし柔らかい声音で言う。

「貴方と一緒に回れるだけで楽しいですよ、シユウ」

「……………」

シユウの頬が朱に染まる。それを知ってか知らずか、シユテルは視線を前方へと移していた。シユウの表情を見ないように。

「あまり遅くならないうちに帰らないといけませんね」

シユテルの言葉にシユウは頷く。夕食は七時からと言っていたので、それまでには帰らなければならぬ。まだ時間はかなりあるが、今の時間が続けばいいのにも思ってしまう。

手から伝わるシユテルの温もりを感じながら、シユテルの横顔を見る。正面を見るシユテルはいつもの無表情だ。

「あ……」

シユテルの声。シユウがシユテルの視線を追うと、子猫が一匹、二人のことは見つめていた。どこか切なげな鳴き声で、にやあと鳴く。周囲を見ても親猫の姿はない。エサでも探しに行っているのだろうか。

シユテルが手を差し出すと、子猫がおそろおそろといった様子で近づいてきた。目の前まで来て、少し躊躇した後、シユテルの膝の上へと飛び乗る。そしてまた、にやあと鳴いた。

「猫によく好かれるよね」

「何故でしょうね……」

子猫ののどを撫でてやりながら、シユテルが首を傾げる。慣れた手つきだ。

「寒そうだね」

シユウはすぐに自分のマフラーを取った。適当に丸めてくぼみを作り、子猫を入れてやる。子猫はすぐにその場で丸くなった。その様子に、シユウの頬も自然と緩む。何もかわいらしい姿だ。

「シユウ、寒くないのですか？」

「これぐらいなら大丈夫だよ」

子猫の相手をしながら答える。本音を言えばマフラーを外しただけでかなり寒く感

じているのだが、だからといって今更子猫からマフラーを取り上げるわけにもいかない。気を遣わせたくもないので、平気な振りをする。

だがやはり体は正直なもので、答えてしばらくした後、シユウは大きなくしやみをした。鼻をすすり、隣から感じる白い視線を見ないようにする。やがてシユテルが小さくため息をつくとき、自分のマフラーを外した。

「シユテル？」

シユテルはマフラーの端の方を自分の首に巻き、もう片方をシユウの首へ。長めのマフラーであったため長さは足りたが、それでも本来の用途ではないため少し短くなり、シユテルが足りない分を補うために体を寄せてきた。

シユテルの体が密着し、温もりが直に感じられるようになる。シユウの顔が恥ずかしさのあまり赤く染まっていく。

「シユテル……」

「何も言わないでください」

見ると、シユテルの頬も朱に染まっていた。シユテルにとつてもやはり恥ずかしいらしい。それでもシユウのためにマフラーの片側を譲ってくれた。それだけで、シユウの心が温かくなっていく。

「ありがとう」

シユウが礼を言うと、シユテルはそっぽを向いてしまった。その様子がおかしくて、シユウから笑みがこぼれる。

シユテルの温もりを感じながら、時折子猫の相手をしつつ、時の流れに身を任せる。どれほどそうしていただろうか。別の猫の鳴き声が聞こえてきた。シユテルと共にそちらを見ると、少し大きい猫がこちらを見ていた。親猫、だろうか。

子猫が「やあ、と一鳴きして、二人から飛び降りる。一度だけこちらに振り返りもう一度鳴くと、親猫の元へと走って行ってしまった。

「行っちゃったね」

そこで二人は黙り込む。シユウは自分のマフラーを回収して、膝の上で丸めた。

「シユウ。マフラーは……」

「もう少しこのまま、とか……。だめ?」

「……仕方のない方ですね」

シユテルがわずかに苦笑を浮かべるが、しかし拒否はしなかった。シユテルに甘えて、もう少しこのままここで過ごすことにする。

寒さから逃れるように、二人はお互いに身を寄せ合う。お互いの温もりがとても心地いい。

やがて太陽が沈み、辺りが暗くなっていく。そろそろ時間かなとシユウは時計を見て、肩を叩かれてシユテルを見た。シユテルは空の何かを見ているようだ。同じように空へと視線を移し、すぐにそれに気がついた。

雪がゆつくりと落ちてくる。真つ白な雪の粒が空から落ちてくる。

「ホワイトクリスマス、だね」

ただの雪だ。クリスマスまでも何度か降っている。そう思っている、やはり今の時に降っていると何かが違うような気もする。人の心とはいいい加減なものだ。二人でしばらく雪を眺めていたが、やがてシユテルが薄く微笑んだ。

「いい物が見れました。さて、そろそろ帰りましょうか」

「うん」

返事はするが、立ち上がらない。シユテルは怪訝そうに眉をひそめながらも、何も言わないようにしてくれた。雪をしばらく眺め続け、やがてシユウはシユテルに向き直る。

「シユテル」

「はい？」

同じように雪を見ていたシユテルがシユウを見る。シユウはその眼をまっすぐに見て、行った。

「シユテル。大好きだよ」

「………………。以前にも聞きました」

頬を染め、シユウから視線を外すシユテル。シユウは笑いながら、続ける。

「何度でも言う。好きだよ」

シユテルが小さくため息をついた。シユウの方へと向き直り、視線が合う。身を寄せ合っていたため当然なのだが、顔が近い。

「私も好きですよ、シユウ」

いつもは見せない、優しい微笑。

そして、目を閉じる。

その少女の唇に、シユウはそつと唇を落とす。少しして、すぐに離す。かなり短い時間のソフトキスだが、二人にとっては十分以上だ。次の瞬間にはお互いに視線を逸らし、気まずそうにしてしまう。まだまだ片手の指で数えられる程度しかしていないとはいえ、慣れたいなと思う。

それに、せつかくのクリスマスだ。

シユウが視線をシユテルへと戻す。シユテルの頬はまだ赤い。自分だけが見ることのできる表情。そのシユテルの体を、シユウは抱きしめた。

「あ…………。シユウ…………？」



シユテルが戸惑いの声を上げ、シユウを見る。だが抵抗はしない。自分に身を預けてくれる。

「シユテル」

「はい」

「シユテルを守るように、がんばるから」

せめて自分の一番大切なものを守るように。守ってもらうのではなく、自分が守れるように。そんな意思を込めてつぶやいた言葉を、しかしシユテルは苦笑で流した。

「人には得手不得手があります。貴方は貴方の道を歩いてください。それに……」

シユテルが左手をシユウの背中へと回し、右手でシユウの頬に触れる。しっかりとシユウの顔を見つめてくる。

「あの時から……。シユウは私にとって、ヒーローですよ」

シユテルの言葉にシユウは一瞬呆けたように呆然として、そしてすぐに照れくさそうに笑う。シユテルも自分で言っただけで恥ずかしくなったのか、頬をさらに染めてしまう。

やがて二人は、もう一度だけ、お互いの唇を重ねた。

静かな、暗い公園の中。

ゆつくりと落ちてゆく雪の中。

一つの影を作る二人の姿を、星の光が優しく見守っていた。

## 第二話

「ええい、押すな！ 見つかるだろうが！」

ディアーチエの押し殺した声が聞こえてくる。それに反論するのはレヴィだ。

「だつて見えないし！ 王様ばかりずるい！」

「遊びではないと何度言えば……！」

「二人とも、落ち着いてください……」

小声で言い合う二人を仲裁するのはユーリだ。何とも複雑そうな表情をしている。そんな三人を眺めながら、シユウは小さくため息をついた。三人の向こう側、建物に隠れて見えにくいのが、二つの人影がある。

シユテルと、そしてコウだ。

どうしてこうなったのだろう。思い返してみても、答えは出なかつた。

コウがシユテルに唐突な告白をした直後、その時こそ戸惑いや驚きで呆けてしまつていた五人だったが、シユウをのぞく四人は回復が早かつた。シユテルがどうしたものかと考え込み、ディアーチエが不愉快そうに眉をひそめる。レヴィとユーリはコウのこと

を興味深そうに観察していた。

その時のシユテルが考えていたことは、何となくだが理解できる。シユテルはシユウとコウの関係を考えていたのだろう。下手な対応をして、シユウとコウの関係が悪くなることを避けたいと考えたのだろう。だからといって、その後のシユテルの言葉には納得できなかったが。

「付き合う、の意味合いを分かりかねますが……。買い物程度でしたら、時折でよければお付き合いします」

この言葉に驚いたのはディアーチエたちも同じだ。シユテルの言葉を聞いた瞬間、三人とも驚きで目を丸くしていた。まさかそんな答えが返ってくるとは思わなかったのだろう、告白した本人であるコウも啞然としていた。

「え……？　ほんまに？」

「時折では不満ですか？」

「い、いや！　そういうわけやないけど！」

コウが慌てたように首を振る。シユテルがならば良いのですが、とうなずきを一つ、自身の携帯電話を取り出す。その意図を察したのか、コウもすぐに自分の携帯電話を取り出した。そして手早く連絡先の交換を済ませてしまう。

「じゃ、じゃあ……。また連絡します！」

「はい。分かりました」

コウがおそるおそるといった様子で手を振り、そして走り去っていく。シユテルはその背中を無表情に見送り、そしてシユウはその一部始終を、口を挟むこともなくただ呆然と見ることしかできなかった。

そして現在。シユウたちは遊園地の中にいる。いつの間にかコウと約束をしていたらしく、シユテルはコウと二人でここに来ている。シユウやディアーチェに相談は一度もなかった。そのことに少なからず衝撃を受けたものだ。

「あの二人、何をしてるのかな」

レヴィの疑問に正確に答えられる者はいない。むしろそれを知るためにここに来ている。

今朝、シユテルが珍しく一人で出かけるということだった。時折あることではあるのが気になるべきではなかったのだが、なぜか妙な胸騒ぎを覚えて、シユウは隠れて追いかけてきてしまった。シユウの直感に思うところがあるのか、それについてきたのがディアーチェたちだ。

シユテルとコウが何かしらの話をしながら、移動を始める。それに合わせてシユウたちも少し距離を置いて、後を追いかける。

やがて二人がたどり着いたのは観覧車だった。二人で観覧車に乗り込んでしまう。

「……入っちゃいましたね」

ユーリのつぶやき。ディアーチェが自分を気遣うような視線を投げってくる。シユウはそれに応える余裕もなく、ただただ呆然と観覧車を見上げていた。

Side : Stern

シユテルは観覧車のいすに座る。特別な造りなどない普通の観覧車だ。シユテルの向かい側にはコウが座る。コウは満面の笑顔だ。

「一応聞いておきますが、何のつもりですか？」

シユテルの目がわずかに細められる。そこからシユテルの不機嫌を感じ取ったであろうコウは、しかし肩をすくめただけだった。

「いや、だってデートに誘っても来うへんことは分かってるしなあ。まあ少しぐらいええやろ？」

「……ここが最後ですよ」

「おうー」

コウの明るい返事に、シユテルは小さくため息をついた。

今朝方、コウから電話があった。少し買い物に付き合っただけ、というものだ。先日の会話もあり、一度ぐらいならいいだろうと了承し、買い物程度ならすぐに終わるだ

ろうと誰にも言わずに待ち合わせ場所にまで来た。そしてコウから聞いたのは、遊びに行こう、という言葉。

当然シユテルはそれならと断ろうとしたが、切り出そうとした瞬間、コウが捨てられた子犬のような目をしたので、結局少しだけならと一緒に来てしまっている。せめて王ぐらいには連絡するべきだったと思うが、今更連絡しても意味はないだろう。

目の前のコウを見る。コウはシユテルと一緒に行くと言っているから、ずっと笑顔だ。今はその笑顔のまま、景色を、というよりは真下の風景を眺めている。

「狙い通り、やな」

そんなコウのつぶやきが聞こえてきたが、意味は分からなかった。

観覧車からコウと共に下りる。あ後は特に話らしい会話もなかった。ただ、コウが何かを楽しみにしているかのように、下りるのが待ちきれないといった様子だったのは覚えている。その時は意味が分からなかったが、たった今理解した。

「シユウ……」

目の前に、シユウがいた。自分を見つめてくるその表情は、困惑、戸惑いに彩られている。それを見ただけで、罪悪感に心が締め付けられた。してはいけないことをしてしまった、とすぐに分かった。

「おっす、シユウ！ 奇遇やな！」

コウの元気な声。その声が今はとても恨めしい。何が奇遇だ、こうなることを知っていたのではないのか。シユテルが不愉快そうにコウを睨み付けると、しかしコウはそれに気づかないようにシユウに手を振っている。いや、気がつかない振り、だろうか。

「えつと……。ごめんね、邪魔をするつもりはなかったんだけど……」

シユウが困ったように苦笑する。不本意な誤解をされているとは分かるが、どう説明すればいいのか咄嗟には出てこない。自分自身さほど自覚はなかったが、どうやらこれでも慌てているらしい。不思議なことがあるものだ、とどこか他人事のように思えてしまう。

「えつと……。ごゆっくり」

シユウはそんな言葉を残すと、きびすを返して走り去ってしまった。シユテルはそれを追おうかと思ったが、コウに腕を掴まれる。無表情でコウを見ると、悪戯が成功した子供のような表情をしていた。

「……貴方は何を考えているのですか」

いつもの無表情ながら、シユテルの声色は低い。しかしコウは臆することもなく、別に、と答えてくる。

「最初会った時にすぐに分かった。俺が立ち入る隙がない」

シユテルがわずかに眉をひそめる。いまいち意味が理解できない。構わずにコウが

続ける。

「だから、まずは俺が立ち入る場所を作らなあかん。シユテルさんが俺と一緒にここに来てたら、それぐらいはできるやろ？」

予想以上の効果やったけど、とコウは苦笑した。

コウはシユウがここに来ることを見越していたらしい。その上で、自分と二人きりであるところを見せた、と。そういうことだろう。何故、と疑問には思うが、シユウの表情や自分の罪悪感など、おそらくコウの目的は果たせているのだろう。それだけは何となく理解できた。

「シユウは鋭いからなあ。来るだろうと信じてたけど、まさか本当におるなんてな」

コウはくつくつと楽しげに笑うと、改めてシユテルに向き直った。無邪気な笑顔をシユテルに向けてくる。今までのことが全てなかったかのように。

「シユテルさん。今日はありがとな。楽しかったで」

「……………」

シユテルは無言。自分のこの感情をどのような言葉にすればいいのか、分からない。こんなことは初めてだ。

「それじゃあ。また遊ぼな」

屈託なく笑うと、コウは手を振ってその場を後にして歩いて行ってしまった。



S i d e : H e r o

シユウは、気づけば自宅のドアの前にたどり着いていた。どこをどのようにして帰ってきたのか覚えていない。帰り際、ディアーチエたちに呼び止められたような気もしたが、それすらうろ覚えだ。ディアーチエたちに悪いことをしたとは思っているが、それを反省する余裕は今のシユウにはない。

自宅のドアを開け、シユウはすぐに鍵を閉めた。唯一使っている部屋、リビングに向かい、床に倒れ込む。なぜかとても疲れていた。今日はこのまま眠ってしまいたい。そう考えて、実際に目を閉じて間もなく、インターホンが鳴らされた。起き上がるのも億劫なので無視していると、今度はドアが強く叩かれる。

「シユウー」

ディアーチエの声。しかしシユウは何も言わない。やがてドアを叩く音がなくなり、すぐに人の気配もなくなった。そのことに安堵しつつ、シユウは今度こそ目を閉じた。

S i d e : S t e r n

「戻ったか、シユテル」

自宅のリビングに入ったところで、王の低い声が聞こえてきた。シユテルは王を見

て、次に居心地悪そうにしているレヴィとユーリを見る。二人には悪いことをしてしまつたと思つてしまう。

「経緯を話せ」

王の命令に、シユテルは頷いて説明する。全てを聞き終えたディアーチエは、呆れたように天を仰いだ。

「せめて我に念話でも送つていれば、あらかじめ説明しておけたものを……」

「そうですね。そうするべきでした」

その点は素直に反省している。すぐに済むだろうと思つていた自分が恨めしい。そのせいでシユウに余計な誤解を与えてしまつた。

そこでふと疑問に思う。なぜそのことをこんなにも気にしているのだろうか。

不思議そうに考え始めるシユテルに、ディアーチエはやれやれと首を振つた。

「先ほどシユウの部屋に行つたが、出てきてくれなかつた。鍵は預かっているが、今勝手に入るのはずかろう。あとで行くといひ」

そう言つて王が鍵を投げってくる。シユテルはそれを受け取ると、しつかりと頷いた。

だが、結局その日、シユウが部屋から出てくることはなかつた。

Side: Hero

明朝。シユウは太陽が昇るよりも前に目を覚ました。これほど早くに目を覚ましたことに自分でも驚いてしまう。立ち上がって伸びをして、そして腹の音が大きく鳴った。そう言えば昨日は朝食しか食べていない。同時に、あの後シユテルたちとは一切会っていないということにさらに驚いた。

一晚寝て、一応落ち着きはした。シユテルとコウが二人きりで遊園地にいたことには少なからず驚いたが、だから何だとも思う。その程度で困惑するなど自分の器はどれだけ小さいのかと。

だが、朝にいきなり会うというのも何故かとても気まずい。学校でもう少し気持ちを落ち着かせてからにしようと、シユウは静かに着替えて学校に向かった。

まだ暗い道を黙々と歩き、学校にたどり着く。学校の警備員にかなり驚かれたが、早くに起きてしまったので、と説明すると、とても複雑そうな表情をしていた。シユウの教室まで一緒に来てもらい、中に入れてもらう。途中でお腹の虫を鳴らすと、苦笑した警備員がおにぎりをくれた。とてもいい人だ、と思う自分は安いのだろうか。

おにぎりを食べ終え、シユウは自分の席でぼうつと過ごす。空がだんだんと白み始め、クラスメイトたちが登校してくる。その間も、シユウは心ここに在らずといった様子で呆けていた。一応シユテルとどんな話をしようか、などと考えるのだが、それを知らないクラスメイトたちはとても怪訝そうにしていた。

しばらくして、一人の女の子がシユウの目の前に立つ。それに気がついてシユウが顔を上げる。女の子はシユウと目が合うと、顔を真っ赤にした。

——何だこれ。

シユウが不思議そうに首を傾げる。女の子はしばらくもじもじとしていたが、

「これ！ 読んでください……！」

そう言つて、かわいらしい封筒を机に置いた。そしてこの様子を見守っていた女の子グループに向かって走つて行く。シユウは首を傾げながら封筒を開け、中の便箋へと視線を落とす。

「……は？」

シユウが間の抜けた声を発し、そして顔が真っ赤になる。まさか、と思い、どうして自分が、とも思う。

それは、俗に言うラブレターだった。

## 日なたぼっこ

ある晴れの日の昼下がり。シウウとシュテルは自宅の側の公園に来ていた。いつものベンチに腰掛けて、二人揃って本を読んでいる。特に目的などはない。強いて上げるなら、散歩に近いものだろうか。

今朝方、せっかくだが天気なのだからどこかに行かないかとシュテルたちを誘ってみたのだが、全員がとても複雑そうな表情をしていた。デイアーチェから聞いた話では、大きな仕事が入りこれから全員出かけるとのことだった。

その後、デイアーチェの、少し待て、という言葉に従い、四人が出かけた後にリビンで待機する。すぐに終わる仕事なのだろうかとぼんやりと待っていると、程なくしてシュテルが戻ってきた。その時に聞いた話では、シュテルの担当を別の人に依頼してきたらしい。

「そんな無理しなくても……。良かったの？」

「構いません。物量が多いだけで、危険な仕事というわけでもありませんし」

そんな会話の後に、シュテルはキツチンへと向かった。何かを作り始めたようなの

で、そのまま大人しく待つ。そして戻ってきたシュテルの手には、二つの弁当箱があった。

そして今、ベンチに座る二人の側にはその弁当箱がある。

シュウ自身、出かけようと言ったものの何か計画があったわけではない。申し訳なく思いながらもそれを告げると、ではいつもの場所へ、ということでのこの公園に来ているというわけだ。

シュウは読みかけの本を閉じた。欠伸をしつつ天を仰ぐ。太陽の光が降り注ぐ。もう肌寒い季節だが、太陽の光のおかげが少し温かく感じる。それがとても心地よく、強い睡魔に襲われてしまう。

少しぐらい寝てもいいかな、と誘惑に負けそうになった時、不意に肩に重みを感じた。一瞬何が起こったのか分からずに首を傾げ、隣を見る。本気で我が目を疑った。

シュウの肩にシュテルの頭がある。静かに目を閉じ、整った寝息を立てていた。本当に、本当に珍しいことがあるものだ。あまりの衝撃に、シュウの眠気は一気に吹き飛んでしまっていた。そして心の中で決める。シュテルが起きるまでは動かない、と。

そう考えてから十分ほどが経過し、早くもシュウは再度眠気に襲われていた。太陽の温かさに加え、隣で気持ちよさそうに眠っている人がいるとなぜか自分も眠たくなってくる。何度も欠伸をしながらも、必死になって意識をつなぎ止める。

ちらりとシュテルの表情を見る。変わらず眠る少女。出会ってから半年は経っているが、シュテルが眠る姿などほとんど見たことがない。もちろん毎晩自宅で寝ているのは分かっているのだが、シュウの目の前で眠ることが少ないので、とても新鮮な感じがする。

この機会にシュテルの寝顔をもっと見ようかなと漠然と思ったところで、シュウもついに意識を手放し、眠りに落ちた。

目を覚ましたのは二人同時だった。お互いに体重を預けていた二人は同時に顔を上げ、シュウはゆっくり伸びをして欠伸をする。シュテルは、起きてすぐに啞然としていた。おそらく、自分でもうたた寝をしてしまったことが信じられないのだろう。

「おはよう、シュテル」

その様子が少しおかしくて笑いながら声をかけると、シュテルはシュウへと向き直る、そして小さく頭を下げた。そのことに少し驚くシュウ。

「すみません、迷惑をかけてしまいました」

「いやいや、迷惑じゃないから！ 珍しいなって思ったぐらいだよ！」

慌ててそう告げる。本当に迷惑など思っていない。驚きはしたが、それだけだ。ただ、それでも気になることはあるが。

「疲れてるの？ もう少し寝ていてもいいと思うよ？」

純粋に心配してしまう。シユテルがあんな無防備に眠ることなどほとんどない。だからこそ、シユウが知らないだけでシユテルには疲れが溜まっているのではないかと。告げられたシユテルは、少し考える素振りを見せてから首を振る。

「確かに忙しいことも多いですが、疲れが溜まるほどではないと思います。それに、単純に気持ちが良いかったです」

シユテルが顔を上げる。シユウも同じように顔を上げて、光を放ち続ける太陽を見る。ほかほかと気持ちが良く、またしても眠気が襲ってくる。シユテルに言う前に、自分が眠ってしまいそうだ。

「シユウ。少し遅くなりましたが、昼食にしましょうか」

昼食、と聞いてシユウは眠気を頭から追い出す。シユテルから渡された弁当箱を受け取り、ふたを開ける。唐揚げやハンバーグ、おにぎりなどが詰まっていた。

「急だったので有り合わせの材料で作ったものですが……」

「十分だと思うけど」

唐揚げをつまみ、口に入れる。いつもの味だ。満足そうに頷いて、シユテルに笑顔を向ける。

「うん。おいしいよ」

「そうですか」



シユテルの返事は短かったが、どこか安堵のような雰囲気を感じられた。

弁当を食べ終えた二人は、そのまま読書を続けていた。時折会話を交わしつつ、のんびりとした時を過ごす。シユウにとっては、こういった時間はとても好きなものでもある。それに今は、暖かな光の中にいる。それがとても気持ちがいい。昼食直後のためか、先ほどよりも強い睡魔に襲われてしまうほどだ。

思わず大きな欠伸をして、シユテルがこちらをじつと見つめていることに気がついた。シユウが驚いて少し慌てる中、シユテルはわずかに目を細めた。不機嫌そう、というわけではなく、どこかおかしそうな、優しきすら感じられる。

シユテルはおもむろにデバイスを取り出すと、次の瞬間、周囲に結界が張られた。

「私も少し疲れました」

シユテルの声。シユウが怪訝そうに眉をひそめる。

「せっかくの良い天気です。少し休ませていただきます」

シユテルが本を閉じてシユウを見る。そして問うてくる。貴方はどうしますか、と。シユウは、気を遣わせてしまったかなと少し反省しつつも、シユテルの申し出をありがたく受けることにした。

「じゃあ、僕もちよつとお昼寝させてもらおうかな」

本を閉じて伸びをする。そのままベンチに深く腰掛けると、シユウは日差しの温もり

を感じながら目を閉じる。それだけで、眠気が一気に強くなり、シユウはまた欠伸をしてしまった。眠たい、と感じている時に寝られるというのは気持ちがいいものだ。

横目でシユテルの方を見てみると、シユテルも同じようにベンチに深く腰掛け目を閉じていた。だがまだ眠ってはいないようだ。不意にシユテルの目が開き、シユウと視線が合った。

「どうかしましたか？」

「え？　えつと……」

唐突な問いかけに思わず言葉に詰まる。一言だけ言いたいことはあるが、必ず言わなければならぬというわけでもない。このまま言わずにいようとも思っていたが、シユテルがじつとこちらの言葉を待っているので、仕方なくシユウは口を開いた。

「ごめんね。誘うならもつと何か計画しておくべきだったね」

仕事の予定まで変更させてしまったのに、この有様では本当に申し訳ないと思ってしまう。そして、自分がこう言った後にシユテルがどう返答するか、そこまで予想できている。

「気にしないでください。十分楽しめていますから」

予想通りの返答に、シユウは笑みをこぼす。お世辞にも聞こえそうだが、シユテルが嘘をついていないことぐらいは分かる、シユウはシユテルの言葉に、一先ず胸をなで下

ろした。

「せっかくなのです。休みましょう、シユウ」

「うん。そうだね」

シユテルの言葉にシユウは頷いて、また目を閉じる。

今度こそ、二人揃って眠りに落ちた。

「で、結局寝て過ぎした、と」

シユテルたちの部屋のリビングで。夜、ディアーチエがため息とともにそう言った。それを聞いたシユウは、乾いた笑いを浮かべながら頭をかく。

「もう少し何かできたであろうに……。まあ、それで良いのなら我は何も言わぬが」

「あはは……。なんだか、ごめんね？」

かまわん、とディアーチエがおもしろくなさそうにしながら手を振る。

夕方、目を覚ましたシユウとシユテルは、買い物を済ませて帰宅した。そこにはすでにディアーチエたちが仕事から戻ってきており、早速今日のことを報告しろと命じられていたところだ。シユウの話の間に、シユテルはキッチンへと夕食を作りに行っている。

ディアーチエは何かを期待していたようだったが、どうやらそれに応えることはできなかったらしい。一先ず謝罪を口にする、ディアーチエは呆れたような目でこちらを

見た後、やれやれと首を振っていた。

「まあ、それがシユウらしいとも言えるか……」

「どういふこと？」

「こちらの話だ」

気にするな、とディアーチエが手を振る。シユウは怪訝そうに眉をひそめていたが、すぐに、まあいいかと話を終えた。

その日もいつものように一日が過ぎる。代わり映えのしないいつもの一日。シユテルが料理を並べていくところを眺めながら、シユテルの寝顔を思い出してしまふ。シユテルのあの顔もかわいいなと、ついそんなことを思ってしまう。

「シユウ。何か妙なことを考えていませんか？」

「か、考えてないよ！」

ならばいいのですが、とシユテルが隣に座る。内心で驚きながらも、シユウは安堵のため息をつく。

ゆつくりと一日が過ぎる。いつも通りの時間。シユテルたちとの時間。

そのことに確かな幸せを感じながら、また誘いたいなと一人でそんなことを考えていた。

## 第三話

昼休み。シユウは誰もいない教室、視聴覚室に来ていた。普段は鍵のかかっているはずの扉は、なぜか今だけは開いていた。あの子が開けたのだろうかと考えながら、シユウは中ではばらく待つ。その手には、朝に受け取った手紙がある。

手紙の内容は、簡単な告白の文章だった。そして最後に、昼休みにここに来てほしい、というもの。ここで返事を聞かせてほしい、ということだろうか。

どうやって断ろうかと考え始め、しばらくして。教室のドアが開かれた。入ってきたのは、朝の少女、ただ一人だ。少女はシユウをみつけると、花が咲いたような満面の笑顔を見せてくれる。

「良かった！ ちゃんと来てくれたんだね」

少女がこちらへと歩いてくる。

少女の姿を改めて見て、そう言えばこんな子いたな、というのがシユウの本音だった。黒いロングヘアに黒い瞳、顔にはそばかすがある。何度か姿を見たことは当然あるが、それほど記憶に残っているわけでもない。もつとも、シユウ自身クラスメイト全員を覚

えているわけではないが。それでもこの少女は、見かけるたびに笑顔を浮かべているほど明るいイメージのある少女だ。今まで自分と接点などなかったはずなのだ。

そこまで考えたところで、少女が目の前に立った。少しだけ恥ずかしそうにしながら問うてくる。

「手紙、読んでくれた、よね？」

そうだった。その返事のために来たのだ。シユウはしっかりと頷いて、一言謝罪を口にしようとして、しかし目の前の少女の、待つて、という一言に口を閉じた。

「西崎君は私のこと、よく知らないよね？」

名前すら覚えていません、とは口が裂けても言えない。シユウが引きつった笑みでどうにか頷くと、それじゃあ、と少女が言葉が続ける。

「放課後、一緒に遊びに行こう？ 私のことを知ってほしいから。返事はそれから聞かせて」

たった一日の付き合いで考えが変わることはないと思うが、一日だけなら、とシユウは了承した。ここで首を振って断ってしまうのは簡単だが、それだと勇気を出して想いを告げてくれた少女に失礼だろう。

告白というものがどれほど勇気が必要か、それだけはよく分かっているつもりだ。シユウも、シユテルへとしっかりと想いを告げられずにいるのだから。それができただ

けでも、この少女は尊敬に値すると思っっている。

「それじゃあ放課後！ 帰らずに待っててね！ 約束、だよ！」

少女は元気よくそう言うのと、すぐにきびすを返して走り去ってしまった。

——なんだか……妙なことになっちゃったな……。

心の中で苦笑しつつ、シユウもその教室を後にした。

そして放課後。シユウは少女と共に街を歩いていった。少女が、是非とも一緒に行きたいところがある、というので先導するのは少女だ。シユウはその後ろをのんびりといて行く。少女の方は何度もシユウへと振り返り、時折シユウと目が合うと顔を赤くして視線を戻していた。

少女に失礼だとは思いつつも、シユウはシユテルがこの反応を取る様子を想像してみ  
る。

——うん。あり得ない。

きつと可愛いだろうなと思うが、シユテルのイメージではない。そんなことを考えながら一人で微笑している、目の前の少女が首を傾げていた。慌てて、何でも無いよと言うと、少女はまた前を向いて歩き始める。

とりあえず今はこの少女のために時間を使おう。一先ずシユウはそう決めて、思考を  
中断した。

悪いことは続くものだ。それもとびきりの内容で。最初の方から、まさかとは思っていた。途中から、たまたま同じ通り道なのだろう、と思っていた。だがここまで来れば間違いない。断っておけば良かったとシユウは頬を引きつらせた。

少女に案内されてたどり着いたのは、翠屋だ。ピーク時ではないためか、席は空いているようではある。できれば埋まっていたほしかった。

悪いことはさらに続く。店内に入ると、いらつしやいませと元気な声で出迎えてくれたのはなのはだった。少女と、そして共にいるシユウを見て、目を大きく開いて唾然としている。

「シユウ君……？ どうして音奈ちゃんと一緒に……？」

音奈と呼ばれた少女が、シユウよりも先に答えてしまう。

「デートだよ。だめ？」

「ふえ……？ でーと……？」

少しして意味を理解したのか、なのはが顔を真っ赤にする。同時にシユウへと向けられる、非難の混じった眼差し。なのはがこんな目を向けてくることは意外だったが、それも仕方のないことだろうと思う。なのはに案内されて音奈と共にテーブル席につき、

「……………」



カウンターの奥の人影と目が合った。厨房にいたのであろうその人影は、すぐに奥へとまた姿を消す。

——最悪だ……。

思わず頭を抱えてしまう。なのはが怒るのも当然だ。よりにもよってこんなタイミングで来てしまうとは。先ほどの人影は、シュテルだった。手伝いに来ていたのか料理を教わりに来ていたのかは分からないが、間違いない。自分がシュテルを見間違えるはずがない。

「西崎君。どれにする？」

シュウの心境を知ってか知らずか、音奈は楽しげにメニューを見ていた。

S i d e : S t e r n

珍しくシュテルは動揺していた。厨房に戻って手伝いを再開するが、先ほど見たシュウが気になって仕方がない。一緒にいた少女は誰だろうか。初めて見る顔ではあった。無論、シュウの交友関係に口を挟むつもりなどないのだが、なぜか気になってしまっただ。

「大丈夫？」

動きが悪くなったシュテルを心配したのか、桃子が声をかけてくる。シュテルは今ま

での思考を無理矢理頭から追い出すと、大丈夫ですと頷いた。

Side: Hero

翠屋での軽食を終え、シユウは音奈と夕焼けの道を歩いていった。あの後は音奈の趣味や家の話など、いろいろと教えてもらっていた。楽しげに、気持ちの良い笑顔を浮かべる音奈は魅力的な女の子なのだろうとは思う。もしもシユテルと出会う前なら、この少女と常に一緒に行動するようになっていたかもしれない。

ただしそれは仮定の話だ。シユウにとってやはり一番はシユテルであり、今もシユテルにどう話そうかと考えて続けている。音奈の話は半分近く聞き流してしまっていた。やがて音奈が足を止めた。シユウへと振り返り、とても悲しげな笑顔を向けてくる。今にも涙が落ちそうな、泣き笑いに近い顔。それを見て、さすがにシユウも反省した。

「ごめん……」

素直に謝ると、音奈が苦笑しつつも首を振る。別にいいよ、と。

「やっぱり、シユウ君の心にはもう誰かがいたんだね」

「うん……。最初に、言っておくべきだった」

「気にしなくていいよ。それに……」

音奈が一步後ろに下がる。そうして見せてくるのは花が咲いたような満面の笑顔。

シユウが驚いている中、音奈が続ける。

「まだ、諦めてないから。いつかきつと、振り向かせてみせるよ！」

「あ、あはは……」

これにはシユウも苦笑するしかない。素直に諦めてほしいところだが、そうもいかな  
いようだ。

「ところで西崎君。好きな人って、もしかしてなのはちゃん？」

シユウが目を睜り、違うと首を振る。

「どうしてそう思ったの？」

「なのはちゃんと会ってすぐ戸惑っていたみたいだから」

なるほどそう見えるのか、と妙に納得してしまった。確かになのはに見られたことにも焦ったのだが、シユテルに伝わってしまうという理由のためだ。たださすがに説明まではしづらいので、違うよ、という否定の言葉だけ伝えておく。

「ふうん……。じゃあ、そういうことしておくね」

どうやら音奈の中ではシユウの好きな人はなのはということになったらしい。ただこれ以上の説明も難しいので曖昧に笑って流すことにした。

「じゃあ、西崎君！ また学校でね！」

音奈が大きく手を振り、シユウも小さく振り返す。それでも満足したのか、音奈はき

びすを返すと走り出した。まるで何かを振り切るかのように。シユウは音奈の背が見えなくなるまで見送って、悪いことをしたかなと項垂れた。もう少し、何かやり方があったのかもしれないのにと。

「シユウ」

背後からの声。シユウが振り返ると、無表情のシユテルがいた。目が合い、お互いに黙り込む。しばらくして、先に口を開いたのはシユテルだった。

「先ほどの方は？」

「クラスメイト……だよ。ちよつといろいろあつて」

「そうですか」

再び黙り込む。気まずい沈黙が場を支配する。お互いに、何を言えいいのか計りかねている状態だ。やがてシユテルがきびすを返した。黙って歩き始めてしまう。

「あ、シユテル……！」

「すみません、まだ手伝いの途中なので」

「そっか。うん、ごめん……」

振り返らずに言ったシユテルの言葉に、シユウは頷いた。歩き去って行くシユテルを、シユウは黙って見送ることしかできなかった。

S i d e : S t e r n

シュテルは翠屋に戻るまでの間、自身の感情が理解できずにいた。

シュウが見知らぬ少女と翠屋に来てから、どうにも気分が悪い。説明のできない感情にずっと悩み続けている。シュウと一緒にいるのが他の家族やなのはなど面識のある者ならこんなことにはならないのに、なぜか知らない少女だと焦燥感に似た何かを感じる。

——私は……どうしたのでしょうか……。

足を止め、振り返る。すでにシュウの姿はない。そのことに寂しいと感じてしまう自分に驚いてしまう。自分は、何をどうしたいのだろう。

「……シュウ……」

目を閉じ、もう一度自身の感情と向き合う。しかしやはり何の感情なのか、理解がでない。シュテルは小さくため息をつくとき、そこで気持ちを切り替えて翠屋の中へと入っていった。

## 紅葉狩り

「紅葉狩りに行きませんか！」

ある日の朝。ユーリが本を手にそんなことを提案した。本は何かの雑誌らしく、表紙には秋の特集のようなことが書かれている。それに影響を受けたのだろう。

「紅葉狩りか……。我は構わんが……」

ディアチエが視線をシュテル、レヴィ、そしてシユウへと向ける。どうする、という問いかけだ。この場合はユーリに同行するか否か。もしも三人とも断れば、ユーリとディアチエが二人で行くことになる。

シユウとシュテルは顔を見合わせしばらく考えていたが、すぐに返答する者がいた。当然、レヴィだ。手を上げて、元気よく言う。

「行きたい！」

そして、レヴィが行くならとシュテルも参加を表明し、シュテルが行くならとシユウも同行することになる。

「うむ。では昼から向かうか」

「本当ですか！　ありがとうございますー」

ユーリが満面の笑顔で言う。その笑顔を見られるだけでも十分だった。

少し早めの昼食の後、五人は隣町の公園へと向かった。この辺りでは紅葉が一番きれいに見れると聞いた場所だ。その話は正確で、公園の道は紅葉の木のトンネルとなっており、とても幻想的に思える。わあ、とユーリが瞳を輝かせた。

ユーリとディアーチエに先頭を歩いてもらい、シユウはシユテルと最後尾を歩く。赤と黄色のトンネルは、時折太陽の光で輝いて見えたりもする。綺麗なところだな、と素直に思えた。

「ねえ、シユテるん」

ディアーチエたちと一緒に歩いているはずのレヴィが戻ってきた。頭上に疑問符を浮かべ、何かを考えているようだ。シユテルが、何でしょうと先を促す。

「いつ紅葉をかるの？」

「……………」

シユテルが小さくため息をつき、シユウは苦笑する。どうやらレヴィは紅葉狩りの意味を理解できていかなかったらしい。ある意味レヴィらしいとも言えるが。

「紅葉狩りは、簡単に言えば紅葉を見て楽しむことだよ」

シユウの言葉にレヴィが驚いて目を丸くした。

「どこかの地域では実際に紅葉の天ぷらなどがあるようですが、ここにはありません」

レヴィが残念そうに肩を落とした。どうやら珍しいものを食べられる、といったイメージがあつたらしい。最初に言っておくべきだったか、と少し反省する。

「レヴィ。帰りに紅葉まんじゅうとかでも買おう。ね？」

「紅葉まんじゅう？」

「うん。紅葉の形をしたおまんじゅう」

おまんじゅう！ とレヴィの顔が輝く。現金なもので、すぐに上機嫌になり鼻歌などを歌い始める。シユウはその様子を見て、安堵のため息をついた。

前を歩くディアーチエたちに合わせ、シユウとシユテルものんびりと歩く。平日の昼間のためか、他の人は少ない。周囲を気にせず散策できるというのはいいものだ。

「ふむ……。弁当でも用意すればよかったか」

不意にディアーチエが足を止め、道の脇にあるベンチを見る。スーツの男がそこおにぎりを頬張っていた。仕事の合間の軽食、だろうか。その男の隣に置かれた包みを見て、シユウは少し驚いた。白い紙にお菓子のようなものが置かれている。

「ここで休憩しない？」

突然のシユウの言葉にディアーチエが怪訝そうに眉をひそめるが、すぐに頷いてくれた。来た道にもベンチがあつたはず、ということとで五人で少し戻る。誰も座っていない



ベンチがあったので、そこで休憩することになった。

「近くに売店でもあればいいのですが」

シユテルが周囲を確認して、すぐに肩をすくめた。仕方がない、とディアーチエが苦笑する。

「シユテル。ちよつと一緒に来てくれない？」

「何でしょうか？」

ちよつと離れる、とディアーチエに告げると、ディアーチエは二人を一瞥しただけで軽く手を振った。礼を言いつつ、シユテルの手を取って道の先へと行く。まだいればいいのだが。

「シユウ、どこに行くつもりですか」

「ちよつと待つてね……」

道を少し進み、すぐに目的の人物を見つける。おにぎりを食べ終えたところなのか、水筒のお茶を飲んで一服していた。その男へと近づくと、シユウたちに気づいた男が首を傾げてこちらを見てくる。

「何か用かな？」

シユウが口を開くよりも先に男が言った。シユウが頷いて聞く。

「それ、ここの近くで買ったんですか？」

「ん？ ああ、これか」

男が傍らの紙袋に視線を落とす。そこに入っていたものはすでになく、何かのお菓子でも入っていたのか、小さな欠片だけが残されている。男はその紙袋を丸めて小さくしながら、道の先を指さした。

「もう少し行つたところで小さな屋台が出ているよ。行つてみるといい」

「ありがとうございます」

シユウが頭を下げ、シユテルも意味が分からないままとりあえずは頭を下げる。

再びシユテルを伴って、少し早足で道の先へ向かう。もうシユテルも何も言つてこなかった。何かを買おうとしている、というのは伝わっているのだろう。

やがて、ちよつとした広場になっているところで小さな屋台を見つけた。何かを油で揚げるような香ばしい匂いが漂ってくる。シユウは嬉しそうに顔を綻ばせると、その屋台へと向かった。

S i d e : D e a r c h e

——遅いな……。

ユーリとレヴィの会話を聞きながら、ディアーチエは首をひねっていた。待っているのは、当然ながらシユテルとシユウだ。どういった目的で離れるかを聞いておけば良

かったかと少し後悔する。先に出発していいのかすら分からない。

念話でも送るか、と何度か思ったが、二人の邪魔をすることにならないかと結局送れずにいる。気にしすぎだとは思うのだが。

どうしたものか、と腕を組んで考えていると、道の先から走ってくる二人分の足音が聞こえてきて、ディアーチエは顔を上げた。シユテルとシユウだ。シユウの手には紙袋が抱えられている。

「お待たせ!」

文句の一つでも言うべきかと迷っていたが、満面の笑顔で言われると何も言えなくなる。ディアーチエは、仕方のない奴らだ、と苦笑する。そのすぐ後に鼻を動かし、シユウの抱えている紙袋を見た。

「それは何だ?」

ディアーチエの問いかけに、シユウが悪戯っぽく笑う。そして紙袋から取り出したものは、お菓子のようなもの。いつの間にかレヴィとユーリの視線もそれへと釘付けになっている。

「紅葉の天ぷら。屋台が出てたから買ってきた」

「ほう、これが……」

話には聞いたことはあったが、見るのは初めてだ。ディアーチエはそれを一つつまむ

と、口へと入れる。ほのかに甘く、かりんとうが連想される。

「お菓子みたい！ おいしい！」

いつの間に取りついていたのか、レヴィとユーリも頬張っていた。ぱりぱりと皆で咀嚼する。

「これもどう？」

そう言つてさらに差し出されるのは、紅葉の形をしたまんじゅうだ。レヴィとユーリが顔を輝かせる。

「うむ。とりあえず落ち着こうか」

收拾がつかなくなりそうなので、ディアーチエは苦笑と共にそう言った。

紅葉の天ぷらと紅葉まんじゅうを全員に配り終え、シユウが満足そうに一息つく。

現在、ベンチに座っているのはユーリとシユテル、レヴィだ。三人とも、初めて見て食べる紅葉の天ぷらというものに興味深そうにしている。

ディアーチエは、その側で一仕事終えたとばかりに満足そうに笑っているシユウの隣に立った。

「わざわざすまぬな」

一言、そう声をかける。するとシユウは少し驚いたように目を瞪り、すぐに首を振つた。

「せっかくだから、ね。ちゃんと喜んでもらえて何よりだよ」

「しかし、気にしなくて良かったぞ？ わざわざ探さなくても……」

「ただの気まぐれだから。それに、喜んでくれていたら十分だよ」

シユウが優しげに目を細め、ユーリを見る。ディアーチエもそちらを見ると、楽しげに談笑しているユーリたちの姿がある。ユーリはディアーチエたちに気がつくくと、手を振ってきた。それに少し躊躇しながらも振り返すと、シユウが薄く笑う。

「うん。満足だ」

——……かなわぬな。

シユテルの気持ち少しは分かる気もする。ディアーチエは小さくため息をつきながらも、その頬は緩んでいた。

## 第四話

「お兄ちゃん？」

文花の声でシユウは我に返った。

自宅のリビング。休日の朝から、シユウはいすに座ってずっとぼうつと惚けていた。特に何かをするわけでもなく、考えるわけでもなく、茫然自失としていた。時計を見ると、すでに昼前だ。文花に声をかけられるまで、時間の感覚すらなくなっていた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

文花の声に、シユウは大丈夫だよと答える。無用な心配をかけてしまったことに少し反省した。

「文花はどうしたの？」

「妹がお兄ちゃんの家遊びに来るのがそんなにおかしい？」

口をとがらせてそんなことを言う。思わずシユウは苦笑した。確かに何も変なことはない。

「シユテルお姉ちゃんはず？」

「今日はまだ来てないよ」

「え？」

文花が驚きに目を丸くする。シユウ自身、シユテルがまだ来ていないことに今更ながら驚いていた。いつも朝食と一緒に食べているので、シユウが来なければ様子を見に来てくれるのに。そのことに少なからず衝撃を受け、落ち込んでしまう。だが、

「あれ？ 来てみたいだよ？」

いつの間にかキツチンに行っていた文花がお皿を持って戻ってくる。そのお皿にはおにぎりが三個載っていた。メモ用紙のような紙片も一緒にあったそうで、そこには、声をかけても気づかないようなのでおにぎりを置いていきます、とあった。

文花の目が細くなり、冷たい眼差しがシユウへと向けられる。シユウは目を逸らして頬をかいた。まさか来てくれていたとは思わなかった。気づかなかったことに自分でも驚いた。

「何かあったよね。話して」

先ほどの疑問系ではなく、今回は何かがあったことを確信しての言葉だった。疑問も何も無い、発言を促すための言葉。シユウは文花を巻き込みたくはないという思いから発言を躊躇していたが、文花の強い眼差しを受け、小さくため息をついた。

友人の告白。その友人とシユテルの不思議な関係。自分自身もクラスメイトに告白

され、一度だけ一緒に出かけたこと。そして翠屋での出来事。それらを全て話し終える  
と、すでに昼の時間はすっかりと過ぎてしまっていた。

「お兄ちゃん」

「な、何かな？」

「バカでしょ」

「う……」

「考えなし」

「うう……」

「死ねばいいと思うよ！」

「ひどくないかな！」

罵倒がどんどんとエスカレートしていく。思わずシユウが抗議すると、しかし文花は  
鼻を鳴らして、シユウを睨み付けてきた。

「まだ言い足りないくらいだよ」

今日の文花はかなり辛辣だ。ただ正論だとも思うのでそれらの言葉を甘んじて受け  
ることしかできない。何とも情けない、とも思う。

「シユテルお姉ちゃんがその人とお出かけた時に、どうしてちゃんと話をしなかった  
の？」



「それは……気が動転して……」

「シユテルお姉ちゃんって人がいるのに、どうして他の人とデートしたの?」

「いや、だって告白されたから……。勇気を出してくれたんだから、無下に断るのはさすがに失礼だと思つて、一度だけならと……」

一度だけ一緒に過ごして判断してほしい、と言われたのだ。その一度ぐらいならと思つたのだが、文花に言われずとも愚策だったと後悔している。

「シユテルお姉ちゃんに失礼だと思ふな!」

「ごもつともです……」

あまりに正論すぎて反論する余地がない。

「それで、お兄ちゃんははどうするの?」

腕を組んで睨み付けてくる文花に、シユウは言葉を詰まらせる。何かをしようとは思つていなかった。時間が解決してくれる問題ではないと分かつてはいても、どうすればいいのか分からない。それを察したのか、文花は苛々とした様子で舌打ちをした。正直、怖い。以前よりも遙かに怖い。

「確かにシユテルお姉ちゃんにも悪いところはあるよ。シユテルお姉ちゃんもちゃんと説明するべきだと思うし。でも、お兄ちゃんも悪いよね?」

「うん……」

「じゃあちゃんとシユテルお姉ちゃんと話し合わないと！ ほら、行きなさい！」

文花の怒声。シユウは勢いよく立ち上がったものの、まだ行動を渋っていた。顔を合わせづらい。

「い、今から……?」

「……………」

「行つてきます！」

きびすを返して全力逃走。怖くて文花を振り返ることはできない。

だから文花が、世話の焼けるお兄ちゃんだな、と笑っていたことには気づかなかつた。数分後。

「お仕事なのか誰もいませんでした……」

「……………」

文花は重く長いため息をゆっくりと吐き出した。

Side : Dearche

「見つけたぞ」

マンシヨンの近くの公園で、デイアーチエは探していた少年を発見した。少年もデイアーチエを認めると、どこか楽しげな笑顔を浮かべる。

「いやあ、奇遇やな。ディアーチエさん。こんなところで、どうしたん？」

「どうしたもこうしたもあるか。洗いざらい話してもらおうぞ」

ディアーチエの鋭い視線を受け、少年、コウは肩をすくめてみせた。

シュテルたちが仕事へと行く前に、ディアーチエはシュテルへとある依頼をした。コウへとこの公園へ来てほしい、という内容のものだ。その後すぐにシュテルたちは仕事へと向かったので、ディアーチエはずっとこの公園の側で待っていた。

二人はとりあえず近くのベンチに向かい、腰掛ける。コウは相変わらずへらへらと笑ったままだ。

「それで、何の話かな？」

笑顔で問いかけてくるコウ。ディアーチエは単刀直入にその問いを口にした。

「貴様、目的は何だ？」

「何が？」

「とぼけるな。シュテルに一目惚れをしたとか言うておるが、本当にそうか？ 外見に關しては近い者がシュウのクラスにいるのだぞ？」

「なのはさんのことやな。そりやまあ、雰囲気……」

「シュテルと遊園地に行った後、一切連絡を入れていないのはなぜだ？」

「あ……」

コウがどこか間の抜けたような声を出す。少し考えて、だがすぐに諦めたのか首を振った。そして次に見せた表情は、どこか照れくさそうな笑みだった。

「あの二人の様子をちよつと見て気づいたんやけど」

突然の話題転換。しかしディアーチエは何も言わず、無言で頷く。

「あれ、いつからや?」

何がだ、とは聞かない。何を聞かれているのかは察しがつく。故にディアーチエは端的に答える。それなりに長い、と。

「そうやろな、そんな気がしてたわ」

何度も頷くコウ。そのまま続ける。

「シユウはそつち方面の勇氣はからつきしやからな。何か危機感を与えたら変わるかもしれないやろ? そう思つて、シユテルさんをデートに誘つたわけや。お前が安心している関係は、結構脆いものやと伝えるために」

今のところは計画通り、というわけだろう。過剰に与えすぎだろうとは思ふが、そこまで言うつもりもない。そうか、と頷いていると、コウがさらに続ける。

「でも意外やつたのが、シユテルさんも自分の気持ちをいまいち理解してなかつたことやな」

「ああ……。そう、だな」

思わずダイアーチエが苦笑する。赤の他人にまで悟られるとは、と。

「だからそつちにも手を打たせてもらたわ」

「なに？」

「以前からシユウに想いを寄せてる子がおつてな。その子をけしかけた。もちろん、ちゃんと事情は説明したで。本人も、告白せずに終わるぐらいならと受けてくれたからな」

「あれは貴様が仕組んだことか」

シユテルから翠屋での手伝いのことは聞いている。あの時はシユウに対して少し腹を立てたものだが、まさかこれもコウの差し金だったとは思わなかった。確かにタイミングが良すぎるとは思っていたが。

「あともう一押しつてところやな。邪魔せんといてな？」

悪戯つぼくコウが笑う。今度はダイアーチエが肩をすくめ、頷いた。

「いいだろう。いや、我に協力できることがあれば言え。あの二人を見守るのもいささか疲れてきたからな」

ずっとどうにかできないものかと思っていたことだ。この少年がどうにかする策を持っているなら、それに乗るのも悪くはない。ただ、あまりいい気分だとは言えないが、仕方ないだろう。

「しかし、やはりいささかやり過ぎな気はするぞ?」

「まあ、そうやろうな」

コウが苦笑する。そして、

「一目惚れはほんまやし」

そんな言葉を続けた。驚きで絶句しているダイアーチエに、コウが続ける。

「だから、全部が演技じゃないで。ただ、自分の恋路より友達の恋路を優先しただけや。今回の策であかんかったら、その時はほんまにシユテルさんにアプローチするで」

樂しげに笑いながらコウが立ち上がる。携帯電話を差し出してきたので、一先ず連絡先を交換。コウは満足そうに頷くと、それじゃ、と手を振って去って行った。

「……食えぬやつだ」

その後ろ姿へと、ダイアーチエは苦笑を送っていた。

S i d e : S t e r n

その日の仕事はとて遅くまで時間がかかってしまった。自宅に帰り着いた時間は夜の九時だ。レヴィとユーリはすぐに風呂へと入り、夕食を済ませてベッドに向かっていた。

シユテルも風呂を済ませリビングに向かうと、まだ王が読書をしていることに驚い

た。何をしているのだろうかとうと首を傾げていると、

「六時頃にシユウが来たぞ」

王の言葉にシユテルがびくりと身を震わせる。王へいつもの無表情を向けると、王は薄く微笑んだ。

「そんな怯えた目を向けるな。一緒に夕食を食べただけだ」

そうですか、とシユテルは胸をなで下ろした。そこで疑問に思ってしまう。自分は何を不安に思っているのだろうか。シユテルが自分の感情に戸惑っていると、王はやれやれと首を振っていた。変わらん、と。

「それで、シユテルよ。どうするつもりだ？」

「どう、とは？」

「シユウとこのままでいいのか？」

シユテルが言葉を詰まらせ、視線を逸らしてしまう。シユテルにしては珍しい反応に王は興味深そうにしていた。こんな反応もするのか、といったように。

「最初に説明をしておけば。シユウが説明をすれば。我から見ても、今の貴様らは見ていて滑稽だぞ？」

「……でしようね」

シユテルがそれだけを短くつぶやく。デИАーチエは小さくため息をついた。

「あまり口出しをするつもりはないが、早めにどうにかしなければ手遅れになるぞ」  
「……はい……」

シュテルは頷くと、一礼して自室へと向かう。その背後ではディアーチエが、困ったものだと微苦笑を浮かべていた。



## スキー

見渡す限りの白い景色。雪の積もった山を滑っていく大勢の人々。その中にはクラスメイトの姿があり、家族の姿ももちろんある。

冬休み、シユウたちは高町家や八神家に誘われてスキー場に来ていた。海鳴市から離れ、日本の北の地方まで来ている。シユウもここまでの遠出は初めてだ。当然シユテルたちも初めてで、レヴィやユーリはここに来るまでの間にかなり騒いでいた。

シユウはスキー場の隅にある小さな喫茶店でのんびりとホットココアを飲んでいる。そのシユウの目の前で、シユテルとなのはが何かしらの話をしている。少しして、リフトへと向かっていく二人。

レヴィはフェイトと一緒にだった。最初は何度も転んでいたレヴィだったが、いつの間にかコツを掴んだらしい。滑り降りてくるたびに楽しそうな笑顔を見せてくれている。

ディアーチェとユーリは、ユーリの希望によりスキー場の隅にあるフリースペースで、雪だるまを作っていた。はやてやヴォルケンリッターも参加していて、和気藹々とした様子で作っている。楽しそうだな、と思っていると、

「ええい、子鴉！ 邪魔をするな！」

「手伝ってるだけやで？ そや、せっかくやからおつきな雪だるま作らへんか？」

「何をわけのわからんことを……」

「おつきな雪だるま！ 作りたいです！」

「うぐ……！ ええい、分かった！ 作るからにはこだわるぞ！ 不本意だが手を貸せ、

子鴉！」

「もつちろんや！」

やっぱり楽しそうだな、とシユウは一人で頷いた。そしてすでに冷めてしまっているココアを一気に飲み干す。さて、と席を立った。

「どこに遊びに行こうかな？」

Side:Dearche

フリースペースで作っている雪だるまはなかなかの大ききさになっていた。大の大人が手を伸ばしても雪だるまの頭には手が届かない。我ながら、よくこんなものを作ったものだと思う。ただ、ユーリの嬉しそうな笑顔を見られたので価値はあった。

全員がやり遂げたような満足そうな表情をして、雪だるまを眺める。おつきいなあ、とはやてが言つて、がんばりましたね、とシヤマルが笑う。

「おお、本当に大きな雪だるまになってる」

その声に振り返ると、シユウがいた。雪だるまを感心した様子で眺めている。

「見ておったのなら手伝っても良いだろうに」

「いやあ、邪魔したら悪いかなって」

妙な気の遣い方をするな、とディアーチエが呆れ果て、シユウが困ったように苦笑する。ディアーチエは自分の荷物からインスタントカメラを取り出すと、それをシユウへと放り投げてきた。

「記念撮影だ」

「うん。撮るのはいいけど、カメラなんて持ってたんだね」

「我のではない。たくさん撮れと渡されただけだ」

なるほど、とシユウが頷いた。誰からとはあえて言わなかったが、察しはついているのだろう。このカメラは桃子に渡されたもので、せっかくだから一つのアルバムを作ろうという計画ができているらしい。それを聞いたユーリの希望により、カメラを持ち歩いている。

「よし、じゃあ並んで。撮るよ」

「あ！ シユウ君、王様たちの後でええからこっちも！」

「了解、ちよつと待ってね」

ディアーチエとユーリが並び、シユウがシャッターを切る。その後には八神家も同じよ

うに撮影し、そして最後に全員で。なぜ貴様らと、と不満を口にしたがはやてやユーリの笑顔に押し切られた。

全員での撮影も完了し、一息つく。次は何をしようかと相談しようかと思っただが、「かまくらを作ってみたいです!」

次の要望があつた。デイアーチエは苦笑しつつも、よし分かつたと早速準備を始める。

「シユウ。ここにいるのだ、次は手伝え」

「うん。分かつた」

今度はシユウも加わり、さらに人数が増えての作業となつた。

S i d e : Y u r i

程なくしてかまくらが完成した。自分たちを見ていた他の人たちもなぜか参加し始めて、フリースペースは雪だるまとかまくらで占領されつつある。いろいろな雪だるまを見るのがとてもおもしろく、ユーリは目を輝かせていた。

「ユーリ、入らないの?」

背後からの声。他の人の雪だるまから視線を移して自分たちのかまくらを見る。大人数で作つたためなかなか大きなサイズで、中は五人はゆっくりとくつろげるほど

には広い。

「入ります！ 入りたいです！」

シュウに手招きされて中に入る。空洞をぐるりと回るように雪のいすがり、すでにダイアーチェエたちが座っていた。ダイアーチェエとシュウの間が空いたのでその間に座る。

「なんだか神秘的ですね。それほど寒くもないですし」

「ああ。作った甲斐があつたというものだ」

「ダイアーチェエも満足そうに頷いている。今度はシュウの感想を聞くべく振り返り、  
「……あれ？」

いつの間にかいなくなっていた。かまくらにはユーリとダイアーチェエの二人きりだ。  
「あやつなら先ほど子鴉に呼ばれて出て行つたが」

全く気づかなかつたことに衝撃を受け、何も言われなかつたことに悲しくなつてしまふ。そうして少し落ち込んでみると、ダイアーチェエが苦笑した。

「じきに戻ってくる」

「え？」

どういうことですか、と聞く前に足音が聞こえてくる。そしてかまくらに入ってきたのは、盆を持ったシュウだった。盆には湯気の立つお椀が三つ。シュウがそれを自分と

ディアーチェに順番に渡してくる。

「あ、ありがとうございます?」

「どうして疑問系なの?」

笑いながら先ほどと同じ場所に腰掛け、シユウが手を合わせた。

渡されたお碗を見る。中に満たされていたのは豚汁だった。お碗から伝わってくる温もりが心地いい。ゆつくりと飲み、ふう、と息を吐く。美味しい。

「暖まります……」

「喜んでもらえたなら何より。ちなみにこの喫茶店で急遽作ったらしいよ」

シユウ曰く、かまくらが大量生産され始めた頃から作り始められていたらしい。販売チャンスだ、と。

「その店主には感謝だな」

「ですね! とても美味しいです」

ゆつくりと食べ進めていく三人。そして最初に食べ終わったのはシユウで、すぐに席を立った。

「さてと。それじゃあ、他の二人も見えてくるね」

「うむ。気をつけて行ってこい」

ディアーチェが頷き、インスタントカメラをシユウへと放る。受け取ったシユウは一

瞬戸惑いを浮かべたが、すぐに笑顔になった。

「いっぱい撮ってくるよ」

「ああ。任せたぞ」

かまくらを出ていくシユウを見送り、静かになる。

「さて、他にしたいことはあるか？」

「ダイアーチェの問いかけに、シユウが出て行った方向を見つめていたユーリが我に返り、そうですねと考え始めた。

Side:Levi

「あー！ シユウだー！」

フエイトと滑り降りていく際、リフトへと向かうシユウを見つけた。レヴィはすぐにフエイトへと目配せし、フエイトが苦笑しつつも頷くのを確認してからシユウへと方向転換。まっすぐにシユウへと向かう。

「ん？」

シユウの方はレヴィのことを見つけられていないのか、周囲を見回している。そしてほどなくしてレヴィを見つけ、すぐに表情が凍り付いた。

「ちよ、レヴィー！ 危ない！」

「だいじょぶー！」

シユウの手前で急制動、計画通りにシユウの目の前で停止した。シユウはその場に立ち尽くし、顔を青ざめさせている。

「えつと……。シユウ？」

「………………。怖かった。本気で怖かった」

「ご、ごめんね？」

どうやら予想以上に驚かせてしまったらしい。レヴィが素直に謝ると、シユウは、もういいよと言ってくれる。その頬はまだ引きつってはいたが。

すぐにフェイトもレヴィの隣に到着する。フェイトがシユウへと笑いかけ、シユウも笑顔を返す。

「ずっと一緒に滑ってるの？」

「うん。シユテルに頼まれて……」

シユウが首を傾げ、レヴィを見る。その視線の意図を察して答える。

「慣れてきたから一人で滑ろうと思ったんだけど、シユテルんにだめって言われちゃった。オリジナルと一緒にいるように、て」

「なるほど、コントロール係だね」

「そ、そうなるのかな……？」



シユウのつぶやきにフェイトが困ったように眉尻を下げた。同じ言葉をレヴィも聞いていたのだが、いまいち意味は分からない。

「ま、いいか！ シユウは滑らないの？」

言葉の意味などどうでもいいと判断して、シユウを誘うために聞いてみる。シユウは少し考えた後、少し答えにくそうに視線を逸らした。それだけで何を聞きたいのかは理解できる。

「シユテるんならもう少しで下りてくるよ」

「そ、そう？ じゃあもう少し待つよ」

「うんうん。そうした方がいいよ！」

レヴィはそれだけ言うと、すぐにリフトへと向かう。フェイトもすぐにその後を追ってきた。

「レヴィ。いいの？」

「ん？ 何がさ？」

「シユウと滑りたかったんじゃない……」

リフトの順番を待ちながら、レヴィは楽しげに笑った。オリジナルは分かってないね、と前置きして、

「こういう場合はお邪魔になるんだよ！」

「そ、そうなんだ……。ところで、誰かに言われた？」

あまりに当然なことを聞かれて、レヴィは首を傾げる。それを見てフェイトは、やっぱり、と得心した表情をする。

「王様から聞いたけど」

「うん。……来たよ、今度はどう滑る？」

「えつとね……」

フェイトと話をしながら、レヴィはリフトに乗った。

Side : Stern

シユテルはなのとは一緒に滑っていた。スキーというものに最初こそ戸惑いはしたが、今ではすっかり慣れて頂上付近から滑ってきている。一緒に滑っているなのは氣遣うことも忘れない。

「ナノハ、大丈夫ですか」

「う、うん……。シユテルはすごいね……。こんなに早く覚えちゃうなんて……」

そうでしょうか、とシユテルは首を傾げた。それほど特別なことをしているつもりはもちろんない。だがそれを聞いたなのは、それがすごいんだよ、と笑っていた。

短い休憩を挟みながら、滑り降りていく。やがてリフトが見えるようになり、シユテ

ルが目を細めた。見知った人影がある。

「シユウですね」

「え？ 本当に？ どー？」

「リフトの側です。誰かを探しているようですね。……私がシユウを見間違えるだけでも？」

なのはの頬が一瞬染まり、そうだよな、と目を逸らしていた。どうしたのかと首を傾げるが、なのはは何でもないよと笑うだけだ。無理に答えてもらう必要もないと考え、すぐにシユウへと視線を戻す。

「先に行きます」

「うん。私もすぐに行くから」

最後に短い会話を交わし、残りの距離を一気に滑り降りていく。やがてシユウもこちらに気づいたのが、シユテルをしつかりと見たシユウが小さく手を振っていた。シユテルはシユウの目の前で停止する。

「さすが、すごいね。もう慣れたんだ」

「まあ、これぐらいは」

シユウに褒められるのは悪い気はしない。素直にその言葉を受け取る。シユウはその反応に少し驚きつつも、照れくさそうに笑った。

「シユウは滑らないのですか？」

「いや、スキーはちよつと苦手で……」

視線を逸らすシユウ。そう言えば皆でスキー板を借りに行く時も、シユウだけは断固として借りようとしなかったことを思い出す。何か嫌な思い出でもあるのだろうか。無理に話してもらおうとは思わないが……。

「あ、別に嫌な思い出とかじゃなくて、どれだけ練習しても滑れなかつただけだよ」

「そうですか」

心を読まれたかのように、思わずシユテルは薄く苦笑する。それならば、と続ける。

「私で良ければ、教えましようか。せっかくのスキー場ですし」

「う……。すごく魅力的な提案……」

無理強いはしませんよ、とシユウの返答を待つ。シユウはしばらく考え込んでいたようだったが、一分以上も熟考した後、無言でスキー板をレンタルしに行った。

「では、ナノハ。また後ほど」

「うん。またね」

シユウへと滑り方を教えるため、なのはとはリフト前で別れた。後ほどまた一緒に滑ろうという約束をするのも忘れない。その後、なのははしばらくどうしようか考えていたようだったが、フリースペースにみんなで作ったかまくらがあると聞いてそちらへと

向かっていった。

なのはを見送った後は、リフトではなく徒歩で山を少しだけ登る。五十メートルほどの距離だ。そこまではスキー板を担いで運び、到着後に準備をする。

「では始めましょうか」

「お手柔らかに……」

一時間後。シュテルの指導のおかげか、シユウは少しだけ滑れるようになったようだ。ただそれでも、ゆっくりと、スピードが出ないように、という状態だった。

「シユウはスポーツが苦手、というわけではありませんよね？」

「そのはずなんだけど……。普通を自負してる」

「ではこれももう少し練習してコツを掴めばとは思いますが……」

考えながら、シュテルは隣のシユウを見る。ゆっくりと滑るシユウの表情は、必死そのものだ。もしかすると、技術面ではなく何かしらの恐怖心からくるのかもしれない、と思ったところで、

「うわっ」

シユウの短い悲鳴。直後に何かが倒れる音。見れば、シユウが尻餅をついて嘆息していた。単純に、シユウには合っていないだけ、という可能性もある。

「大丈夫ですか？」

そう言つて手を差し出す。シユウはその手をしばらく見つめ、

「……情けないなあ……」

「は？」

「いや、何でも」

シユウがシユテルの手を取る。少し力を入れてシユウを立ち上がらせ、また滑り始める。

「シユウ」

「ん？」

再び必死の表情なり滑り始めたシユウへ、シユテルは短く告げた。

「これが終わったら休憩にしましょう。かまくら、があるのですよね？ 私も見てみた

いです」

「ん……。そうしようか……。わあ！」

再び尻餅。シユウの表情がどこか悲しげな、泣きそうなものへと変わっていき、シユテルはどうにも声が掛けづらくなってしまふ。無言で手を差し出し、再び引つ張り起す。

「つて、シユテル勢いよすぎ……。うわっ」

「は……。？ きゃっ」

勢いよく引つ張り上げすぎ、シユウがシユテルを押し倒す形になって再び倒れた。シユテルのすぐ目の前に、シユウの顔。しばらくそのまま無言で見つめ合ってしまう。

「……シユウ。離れてください」

「あ、ご、ごめん！」

慌ててシユウが飛び起きる。シユテルも立ち上がり、服についた雪をはらいながらシユウから顔を背けた。一瞬前のことが脳裏によぎり、顔が赤くなっていく。

——なんて情けない声を……。

シユウに聞こえていなければいいのだが、と思いながら振り返る。シユウも服の雪を払い終え、また滑る準備を終えていた。そのシユウと視線が合う。

「ん？ どうしたの、シユテル」

「いえ……。何でもありません」

どうやら聞かれてはいなかったらしい。そのことに安堵のため息をつきつつも、二人は再び滑っていく。

「シユテルもあんな声を出すんだなあ……」

そんなシユウの声は、シユテルには届かなかった。

S i d e : H e r o

数日後。学校でなのはから渡されたアルバムを大事に持ち帰り、シユテルたちと一緒に見る。そこには、

「ほう」

「へえ」

「わあ」

「ダイアーチエ、レヴィ、ユーリの驚きの入り交じった吐息。そして、

「い、いつの間に……」

「……………」

シユウが慌て、シユテルの表情が凍り付いている。

ちやうどシユウがシユテルを押し倒す形となった時の写真が収められていた。

「……………夕食の準備をします」

シユテルはそれだけ言って、キッチンへと消える。残されたシユウは捨てられた子犬の心境となりつつも、シユテルの表情に驚いていた。頬に赤みの差した表情に。

——少しでも照れてくれていたら……。それはそれで嬉しいかも？

そんなことを思いながら、この写真を撮った誰かに少しだけ感謝した。



## 第五話

ある日の昼休み。昼食を終えてシユウが自分の机に突つ伏していると、誰かが自分の側に立つ気配がした。顔を上げると、そこにいたのはコウだ。いつもの笑顔ではなく、まじめな表情でシユウを見つめてくる。

「……コウ……」

シユテルと一緒にいたのを見かけた日以来、コウと会話はしていない。そのコウが、今自分の目の前に立っている。じつとシユウを見つめている。

「シユウ。先に一応、言うところかなって」

「な、何を……?」

コウの真剣みを帯びた声に思わず身構えてしまう。とても嫌な予感がする。そして、嫌な予感というものは多くの場合、的中してしまうものだ。

「今日の放課後、ちよつと告白してくるな」

「こ、告白? 誰に?」

「シユテルさんに決まってるやろ。わざわざ言わせんなよ」

シユウの表情が凍り付く。頭が真っ白になってしまう。ただただ無言で、コウと見つ

め合ってしまう。

シユテルがコウの告白を受けるはずがない。そう思いはするが、それは自分の願望もいいところだ。本人の口から聞いたわけではないのだから。もしも受けてしまったらと思うと、それだけで胸が締め付けられるように苦しい。

「まあ、そういうことやから。一応シユウには言うとかんとあかんと思って」

そう言つて、コウが笑う。照れくさそうな、けれど楽しそうな笑顔だ。コウが手を振り、教室の外へと向かう。シユウはその背中を呼び止めることができず、教室から出るまで見送ってしまった。

残されたシユウは、未だに鈍いままの思考を必死になつて働かせる。どうすれば阻止できるか、どうすればいいのか、と。しかしそんな都合の良い答えがでるはずもなく、シユウは次の授業が始まるまで呆然としたままだつた。

### S i d e : S t e r n

夕方。シユテルは初めて編み物というものに挑戦していた。肌寒くなつてきていたので、人数分のマフラーを編んでいる最中だ。初めてのはずが、すでに動きが様になっているのはさすがというべきか。

ディアーチエは読書をしながらも、シユテルの様子を何度ものぞき見ている。そわそ

わと少し落ち着きがない様子だ。何度も時計を見ていたりもする。予定があるとは聞いているのだが。

「シユテル。少し聞きたいのだが」

王の声にシユテルは手を止めて顔を上げた。何でしょう、と先を促し、ディアーチェが一つ頷く。

「それはいつ作り終えるのだ？」

シユテルは一瞬考え、すぐに今自分が作っているものことだろうと察しがついた。足下に置いたいくつかの紙袋を見て、中身を確認して、すぐにディアーチェへと向き直る。

「終わっていますよ」

「なに？」

「材料が余ってしまったので、もう一枚作っています」

言い終えて、シユテルは作業を再開する。ディアーチェは安心したように、そうかと安堵のため息をついた。何をそこまで気にしているのだろうか。

不意に携帯電話が鳴り、シユテルは怪訝そうに眉をひそめた。ちょうど追加の一枚を作り終えたところだ。携帯電話に表示されている名前を見て、眉間のしわを深くした。

コウ。シユウの友人である、自分にとっては顔見知り程度の相手。それでも、以前の

遊園地のことは忘れられないのだが。シユテルは王に頭を下げると、携帯電話の受話ボタンを押した。

「はい、シユテルですが」

『おお！ 繋がってよかったわ！』

相変わらずテンションが高いな、と苦笑してしまう。

『この後、ちよつとだけ時間あるかな？ 一時間だけでもええから』

シユテルはわずかに目を細めた。先日、この少年の誘いを受けたことを後悔したばかりだ。正直あまり良いイメージがない。故に断ろうとしたところで、

『大事な話があるから。一時間だけでええから』

その言葉に少し悩んでしまう。どこまで信用できるかが分からないが、ここまで言うならもう一度ぐらいは信用してもいいかもしれない。シユテルは小さくため息をつくと、分かりましたと返事をした。

『おおきに！ じゃあ、待ち合わせ場所やけど……』

そしてコウが指定してきた場所にシユテルは目を見開いた。

指定された場所は、目と鼻の先にある小さな公園だ。シユウとよく一緒に行く公園。知っていて指定したのか、知らなかったのか。考えても仕方がないので、今から向かいます、と通話を切った。携帯電話をしまい、王へと向き直る。王は興味深そうにシユテ

ルを観察していた。

「出かけるのか？」

シユテルが口を開くよりも先に王が言った。少し驚きつつも答える。

「はい。さほど時間はかからないかと思えます」

「うむ。気をつけて行ってくるといい」

シユテルはその場で一礼すると、玄関へと向かった

Side: Hero

シユウはリビングで頭を抱えていた。思い出すのは学校でのこと。コウの話だ。コウが本気なら、今すでに告白をしているのかもしれない。自分はどうすればいいのだろうとずっとここで悩み続けている。

ただ、純粋にコウがすごいとも思う。自分の想いを告げるなど相当の勇気がいることだ。その勇気が自分にはなく、それが原因で今の事態を招いたとも言える。

「お兄ちゃん、何してるの？」

いつの間に来ていたのか、文花がリビングの入り口でシユウを見つめていた。その視線は冷たいわけでもなく、ただ不思議そうにしていた。

「ちよつと聞いたんだけど、お兄ちゃんのお友達、シユテルお姉ちゃんに告白するんだよ

ね」

どこからそれを、と聞こうとして、しかしすぐに首を振った。シユウはともかく、コウは声を抑えようとはしていなかった。どこからか伝わっていてもおかしくはない。例えば、なのはたちからとか。彼女たちに限つてないと思うが。

「それで、お兄ちゃんはどこで何をしてるの？」

声が冷たくなつてきた。シユウの頬が引きつる。文花がゆつくりとシユウのところまで来る。

「ちゃんとお話、したの？」

「い、いや……。まだ……」

「じゃあ行かないと。今すぐ。でないと、シユテルお姉ちゃんがいなくなつちゃうよ？」  
いなくなる、と聞いてシユウが目を見開いた。顔を伏せ、小さく頷く。分かつてはいることだが、改めて言われると辛いものがある。

「でも、場所が……」

「側の公園」

え、とシユウが間の抜けた表情をする。文花は顔を逸らし、視線が合わないようにしている。何故そこまで知っているのかと聞きたくなるが、今はこうしている場合でもない。

「文花……。ありがとう、行ってくる」

立ち上がり、玄関へと向かう。

「がんばってね」

背後から妹の間延びした声を聞き、シユウは思わず頬を緩めた。

Side: Humika

兄を見送り、文花は一息つく。お茶でも飲もうとキッチンへと向かおうとして、

「シユウは行ったのか？」

その声に動きを止め、入り口に立つ声の主を見る。ディアーチエだ。

「はい。今行きましたよ。多分間に合います」

そう答えている間にディアーチエがキッチンへと入り、文花の分もお茶を入れてくれる。差し出されたコップを礼を言いながら受け取り、ゆっくりと飲んでいく。

「まさか貴様も共犯だとは思わなかったぞ」

「私だってディアーチエさんが共犯だとは思いませんでした」

言葉を交わし、しばらく黙り込む。やがて二人同時に、反論を口にする。

「我が知ったのはつい先日だ。それまでは本当に知らなかった」

「私が知ったのは数日前だから、共犯じゃないです」

二人で顔を見合わせ、同時に嘖き出した。文花が楽しげに笑い、ディアーチェは忍び笑いをする。

「まんまと踊らされた形になったが……。まあ、悪くはない」  
「ですね。あとは任せちゃいましょう」

——がんばれ、お兄ちゃん。

お茶を飲みながら、文花は心の中で兄へと激励を送った。

S i d e : S t e r n

マンシヨンの近くの公園、その池の側にコウはいた。シュテルが近づくと振り返り、嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「シュテルさん！ 来てくれてありがとうな！」

コウの言葉にシュテルはいえ、と小さく首を振る。コウから少し距離を置いて立ち止まった。相手の表情を観察しながら、次の言葉を待つ。しかし、しばらく待っても何も言わず、笑顔のままこちらを見つめてくるだけだった。

「大事な話があったのでは？」

痺れを切らしたシュテルが問うと、コウは眉尻を下げて、あー、とも、うー、ともつかない曖昧な声を漏らす。困ったように頭をかいて、もう少し待つてほしいと告げてく



る。

「もう少しだけなら構いませんが……」

「ごめんな、多分もうすぐ……」

コウの言葉、そして動きがぴたりと止まる。シュテルが怪訝そうに眉をひそめている前で、コウはポケットから携帯電話を取り出し、操作する。そしてすぐに、意地の悪い笑顔を浮かべた。やつとか、という声も聞こえてくる。

「あの……?」

何があつたのかと聞こうとして、しかしコウは手を振った。気にしなくていい、と。

「それじゃあ、大事な話をするで!」

普段よりも大きな声でコウが言う。シュテルは少し驚きながらも、どうぞ、と先を促した。

「俺はシュテルさんのことが!」

半ば叫ぶような声だ。何をしたいのか理解できないが、とりあえず言葉を待つ。

「好きだ!」

コウがそう言い終わると同時に、

「待って!」

後方からの第三者の声。シュテルがわずかに驚き、コウが笑みを深くする。シュテル

が振り向いたそこには、シユウがいた。

Side: Hero

シユテルを探して走り回っていると、突然コウの声が聞こえてきた。慌ててそちらへと全力疾走。聞こえてくる内容は、これから告白するだろう内容そのものだ。必死になつて走り、そして、

「好きだ!」

「待って!」

そのコウの声に自分の声をかぶせた。シユテルが驚いて振り返り、コウは自分を見てなぜか不敵に笑っている。

「シユウ。どうしてここに?」

シユテルが首を傾げながら聞いてくる。シユウは、ちよつと用事があつて、と言葉を濁しながらコウを見る。にやにやと意地の悪い笑みだ。

「あかんなあ、シユウ。今は俺が大事な話をしてるんやけど?」

「ちよつと待って……。お願いだから」

コウが笑顔のまま首を振る。そして次の瞬間には、シユウのことを睨み付けてきた。

「シユウにはまだ勇気がないんやろ? なら俺が先に言うてもいいよな?」

「……言う。ちゃんと、言う。だから待つてほしい」

ほう、とコウがあからさまな驚きを見せる。少しわざとらしく見えるが、今は気にしていられない。

「じゃあ、俺のは後でええわ」

「え？」

「シユウの後でいいって。さっさとやればいい。当たつて砕ける！」

「砕けたくないよ！」

コウの予想外の言葉にシユウが驚き、次には軽口が交わされる。いつものコウだ、と思ひもするが、簡単に身を引いたことに内心で首を傾げる。だが、今はそれよりも、今の決心がついている間に言つてしまわなければならないことがある。

勇気を出せる間に、勇気がなくなつてしまう前に。

「シユテル」

シユウが改めてシユテルへと向き直る。二人のやり取りを不思議そうに眺めていたシユテルがシユウへと視線を移し、何でしょうか、といつもの調子で訪ねてくる。

「僕も、大事な話があるんだ」

「シユウもですか？ ……まあ、聞きますが」

やはりいつもの調子だ。そのことにシユウは少し安堵しつつ、ゆっくりと深呼吸し

た。そして、

「ごめん！」

勢いよく頭を下げた。

「は？」

シユテルが呆気にとられ、少し離れたところではコウが間抜けな声を漏らしている。

「変な態度を取ってて、ごめん。いろいろと考えていたら、変な気持ちになっちゃって……。だから、ごめん。許してくれるなら、まだ友達でいてほしい」

シユテルの表情がわずかに和らいだ。どこか苦笑しているようにも見える。そして、言う。

「私の方こそ、すみませんでした。私も自分のことが分からなくなったりと色々あったもので……。こちらこそ、私でよければ友人でいてください」

シユテルと顔を見合わせ、自然と笑みがこぼれる。やつといつもの関係に戻れた気がする。

コウが、落胆を露わにしたため息をついた。そして、

「なあ、シユウ……」

コウが呼ぶのと同時に、

「……からも、大事な話」

シユウが言葉を続ける。そしてすぐにコウに呼ばれたことに気づき、視線をうつした。

「なに？」

「あ、いや……。続けて続けて」

危ない危ない、とコウの頬が引きつっている。シユウはどうしたのだろうと思いがながらも、シユテルへと視線を戻した。

「シユテル」

「はい」

いつもの無表情で首を傾げるシユテル。そのシユテルへと、シユウは。

なけなしの勇気を振り絞り、言った。

「僕はシユテルのことが好きだ。友達としてもだけど、女の子として。だから……。これから先もずっと、シユテルの側にいさせてほしい」

シユウの言葉に、シユテルは大きく目を見開いた。そのまま言葉を失ってしまう。コウからは、おお、という声が聞こえてきた。

しばらく無言のシユテルを見つめ続ける。やがてシユテルの頬が少し赤くなった。珍しいなと思いつつながら言葉を待つ。

「……いいのですか？」

それが第一声だった。何が？ とシユウが聞き返す。

「私は人ではありません。私と一緒にいても、貴方はきつと後悔すると思います」

「そんなことないよ。僕はシユテルのことが好きなんだ。それに、それを言っつてしまえば、僕だつてかなり怪しいものだし」

シユウも今は人の姿だが、もともとはギフトッドというロストログアだ。自分ですら、いつこの姿が終わりになるのかも分からない。それを聞いたシユテルは、ため息をついた。だが口角が上がり、少しだけ笑顔をこぼしている。

「物好きな方ですね……」

「それでもないと思うけど」

物好きですよ、とシユテルが呆れたように言う。そんなことないよと同じ反論を繰り返す。やがて、シユテルがそつと手を前に差し出した。

「私のこの感情がどういったものかは、正直よく分かりません。ですが、私も貴方と一緒にいると、不思議と心が安らぎます」

だから。

「私などでよろしければ……。一緒にしましょう」

シユテルが優しげな笑顔を浮かべた。今までも表情の変化は小さいものは見たことがあったが、はつきりとした満面の笑顔だ。それにシユウは驚き、すぐに照れくさそう

にシユウも笑った。

「うん。よろしくね、シユテル」

そつとシユテルの手を握る。お互いに見つめ合い、そして、

「あー、はいはい。ごちそうさま」

コウのそんな声。シユウがびくりと体を震わせ、そちらを見る。コウは微笑を浮かべていた。

「これで万事解決、やな。いまいちよく分からん話もあつたけど、まあ俺には関係のない話やな」

その言葉にシユウははつとした。先ほどの会話にはとんでもない内容が含まれていた、と。シユテルもすぐにそれに気づいたのか、難しい表情をしている。シユテルの左手が胸元のルシフェリオンへと……。

「二人とも家庭事情が複雑やからな。そういうことやろ？」

シユウが安堵のため息をつき、頷く。シユテルも左手を静かに下ろした。

「それじゃあ、帰るわ。あとはごゆつくり」

「大事な話はいいのですか？」

コウがぼつの悪そうな表情になる。二人から視線を逸らし、頭をかいた。

「シユテルさんって意外と天然なところがあるんやな……。俺の話はもう解決したか

ら。じゃあ、改めて。ごゆっくり」

手を振ってきびすを返すコウ。その背中へと、シユウが声を放つ。

「コウ。もしかして、今までのことって……」

「ん？ さあ、何の話かな？」

にやにやと意地の悪い笑みを浮かべる。それが全てを物語っていて、シユウは苦笑してしまった。いい友人に恵まれたと素直に思える。

「でも、シユテルさんに一目惚れしたのは事実やからな？ ケンカなんかして手放した

日には、ねらうで？」

「あはは……。肝に銘じておくよ」

乾いた笑い声を出すシユウ。コウは満足そうに頷くと、今度こそその場を後にした。

「何だったのでしょうか？」

「うん……。僕がコウにお世話になっただけのことだよ」

「そうですか」

よく分かりませんね、とシユテルが言って、そうだろうねとシユウがつぶやいた。

「では、そろそろ帰りましようか」

シユテルが言って、しかしシユウは首を振る。

「もう少しだけこのまま、いいかな？」



「はい。大丈夫です」

手を握ったまま、シユウがだらしない笑顔を浮かべる。シユテルはその様子を見て呆れたようなため息をつきかけたが、すぐに自分も笑顔になっていることに気づいた。

しばらくそのまま手を握り合い、やがて満足してシユウが一度頷く。

「これからもよろしくね、シユテル」

その言葉に、シユテルは、

「はい、こちらこそよろしくお願いします、シユウ」

優しいな笑みでそう返してくれた。

Side: Kouji

手を繋ぎ合っていた二人がマンションへと歩いて行く。コウはそれを静かに見守っていた。

先ほどは帰った振りをして、実は隠れて様子をうかがっていた。親友の一世一代の告白だ。最後まで見届けたいと思ったためだ。明るい道へと帰って行く二人を静かに見送りながら、コウは満足そうに頷いた。

それにしても、と思う。自分の前でもとんでもない会話を交わしていたものだ。人でないとか、どういうつもりだと思う。

自分でなければ頭のおかしいやつだと思うところだ。

そのコウの動きが、止まる。視線だけがゆっくりと動き、ポケットから携帯電話を取り出す。画面に表示されている名前を見て、コウの表情が引きつった。

「まさか、もう、か……?」

嫌な予感を覚えながらもコウは電話に出る。親友たちに気づかれぬように静かに立ち上がり、きびすを返す。

「はい」

電話に出て、コウはすぐに顔をしかめた。何度か頷きながら、言葉を交わしていく。

「はい。はい。大丈夫です。特に変わりはありません」

普段とは違う言葉遣い。それを指摘する者は、この場にはいない。

「ああ、そうですね。分かりました」

コウの表情が安堵に染まる。どうやらもう少し、今の生活を続けられるらしい。

コウは立ち止まり、振り返る。二人の姿がかすかに見える。光の中へと歩いて行く姿を。対するコウは、その光景を悲しげに見つめ、すぐにきびすを返した。暗い夜闇の中へと歩を進めていく。まっすぐに、しかしおぼつかない足取りで。

そしてコウは、相手に告げた。

「了解しました。西崎秀一の……。ギフトテッドの監視を続行します」

どこか苦しげにも聞こえるコウの声。しかしコウは、振り返りもしなければ、立ち止まることすらせず、闇の中へと姿を消した。

## chapter 3

## 元旦

大晦日。シユウはシユテルたちの部屋で一緒にこたつに入っていた。机の上には天ぷらそばがあり、今は皆でそれを食べている。テレビに流れているのはこの日特有の歌番組。まさに年越しといった様子だ。

「ぷはー！ おいしかったー！ ぐちそうさまー！」

真っ先に食べ終えたのはレヴィだ。しっかりとだし汁まで飲み干し、そしてすぐに机の中央、みかんに手を伸ばす。他の皆も順番に食べ終え、すぐにシユテルが食器を流しへと持って行き、戻ってくる。

「ユーリ。ほれ」

「わ！ ありがとうございます、ディアーチェー！」

いつの間にかディアーチェもみかんに手にとっており、むき終えたみかんにユーリに手渡していた。それを見ていたレヴィが少しだけ口を尖らせる。

「王様！ ボクにも！」

「先ほど自分で食べていただろうが。……ええい、そんな顔をするな！ 待つていろー！」  
レヴィが悲しげに眉を下げた瞬間、ディアーチエが次のみかんに手を伸ばす。面倒な、と言いつつも丁寧にむいてやるのはさすがと言える。その様子をシユウが微笑ましく思いながら眺めていると、自分の目の前にも皮のむかれたみかんが置かれた。  
「どうぞ」

「ありがとう、シユテル」

いえ、とシユテルは首を振りながら、またみかんをむき始める。シユウはむいてもらったみかんを頬張りながらテレビを見ていたが、すぐに何かを思いついたような表情をした。みかんの一粒を持って、シユテルへと向く。

「シユテル。はい」

シユテルへとみかんを差し出す。すぐにシユウの意図を察したのでろう、シユテルはわずかに躊躇いを見せたが、すぐに小さく口を開けた。そこへみかんを入れてやる。わずかにシユテルの頬に赤みが差す。

「……ん？ ディアーチエ、どうしたの？」

じつと見られていることに気づいてシユウが首を傾げる。ディアーチエは首を振ると、気にするなど苦笑していた。どこか満足そうにも見える笑みだった。

数日前。シユテルに想いを告げた日。その後の二人だが、実は特に変わったことがな

い。今まで通りの生活で、今まで通りの日常だ。ただもちろん変わったこともある。お互いに対して正直になったことだろう。

例えば、食事の時もテレビを見る時も、二人はいつも並んで座るのだが、以前よりも近くなっている。時折視線を交わし、シユウが照れたような笑みを見せることもある。そんな些細な変化に気づいたのは家族だけだが、しかし三人とも何も言わず、ただ見守ってくれていた。

もつとも、二人きりの時はどうかはディアーチエたちには知る由もない。

テレビから鐘の音が流れ始める。除夜の鐘だ。ついに一年が終わろうとしている。

「二年も終わりかあ……。今年はいろいろあつた」

シユウがそんなことをぼつりと漏らし、シユテルたちはどう反応すればいいのか困っていた。いろいろの大部分が魔法に、シユテルたちに関係するものだから困るのも当然だろう。それを知ってか知らずか、シユウはしばらく遠いものを見つめるように目を細めていたが、やがて頬を緩ませた。

「楽しい一年だった」

それを聞いた四人が一斉に安堵のため息をついた。

さらに時間が流れ、時計の針が十二時を指した。

「明けましておめでとうございます」

シユウがその場で頭を下げ、それに皆が続く。

「今年も……よろしくね」

そう付け加えると、シユテルたちはしつかりと頷いてくれた。

その後は皆で少し仮眠を取る。シユウとシユテル、ディアーチェは二時間ほどの仮眠で起床した。時計の短針は三を指している。

「レヴィとユーリは……。まだ寝てるね」

数時間程度の仮眠だからとこたつで寝ていたのだが、レヴィとユーリはぐつぐつと熟睡しているようだ。気持ちよさそうに眠っているので起こしにくい。どうしようかと考えていると、出かける準備を終えたディアーチェが戻ってきてそのままこたつに入ってしまった。

「まだ急ぐ時間でもあるまい。後ほど追いかける。うぬら二人で行ってこい」

シユウとシユテルが顔を見合わせ、ディアーチェへと視線を戻す。さっさと行けと手を振るディアーチェにシユウは苦笑して、小さくありがと、と告げる。

「じゃあ、先に行くね。追いついたら連絡して」

「うむ。気をつけて行ってこい」

「はい。では行ってきます」

レヴィとユーリを起こさないように、シユウとシユテルは静かにリビングを後にし

た。

目的地の神社は少し遠いところにある。最初は最寄りの神社に行こうということになっていたのだが、なのはたちも初詣に行くと言き、彼女たちが行く神社に合わせる事になった。後ほど高町家でおせちとお雑煮をご馳走してもらおう予定になっている。

目的の神社にたどり着く。すでに初詣に来た人々が大勢いた。まだ朝日も昇っていないのに、と思つたが、自分たちにも同じことが言えることにすぐに気づいた。

「シユテル。行こうか」

シユウがはぐれないようにと手を差し出す。シユテルは今度は躊躇いもせずとその手をしっかりと握つた。

「はい。行きましょう」

この神社の土地は他よりも少しだけ高いこともあり、初日の出を見る場所として有名だそう。シユウとシユテルは夜食代わりに屋台で買い食いをして、敷地の奥へと進んでいく。人混みにもまれながらも歩き続け、やがて拝殿へとたどり着いた。大勢の人が賽銭箱にお金を入れ、手を合わせている。

シユウとシユテルも賽銭箱へとお金を入れる。二人並んで手を合わせ、願い事をす

る。

——この生活が続きますように。シユテルと一緒にいられますように。



願い事を終えた二人は、次の人の邪魔にならないように素早くその場を後にした。

拝殿を後にした後。日の出まではまだ時間がある。それまではすることもなく、はっきり言ってしまえば暇だ。何かを買うわけでもなく屋台を見て回っていたが、やがてシユテルが足を止めた。それに気づいたシユウもすぐに立ち止まり、シユテルが見ているものへと視線を移す。

そこにあつたのは、ちよつとした広場だ。そこに多くの鍋が並べられ、鍋の側にいる人が中ものものをお椀に入れ、並んでいる人に配っている。お椀をもらった人は多量に並べられたいすに座り、食べているようだった。

「シユウ。あれを」

シユテルに促され見ると、その広場の入り口に看板があつた。豚汁無料サービス、と。「せっかくだし、行こうか」

「そうですね」

二人そろつて広場に入り、近くの列に並ぶ。すると、

「おお、まだ子供なのに偉いねえ。寒かっただろう、さき、前にお行き」

目の前の人が順番を譲ってくれ、さらにその次の人も譲ってくれる。もちろん一度は断ろうとしたが、遠慮しなくていいんだよ、と言われて大人しく引き下がった。そのまま流されること数十秒、いつの間にか最前列にまでやってきていた。

「どうぞぞ」

若い女性が豚汁で満たされたお椀を差し出してくれる。シユウはそれを礼を言いながら受け取り、その女性の顔を見る。笑いを堪えているような表情だった。

シユテルと一緒に今度は空いている席を探す。なかなかの盛況ぶりで混雑しているので見つからないだろうとも思っていたが、

「あー！ シユテル！」

知り合いの声。そちらを見ると、なのはとフェイトが手を振っていた。

「ナノハ。明けましておめでとうございます」

シユテルが丁寧に頭を下げる。それを見たなのはとフェイトも慌てて同じように頭を下げた。

「今年もよろしくね、シユテル」

「はい、こちらこそ。……今年も勝ち越しますよ」

「にやはは。負けないよ？」

楽しげになのはが笑い、シユテルもわずかに笑みを漏らしていた。この二人はよく模擬戦をしていると聞いているので、おそらくはその関連の話だろう。シユウが黙って二人の会話を聞いていると、

「ごめん、シユウ。邪魔したかな」

隣からの声。フェイトが自分を申し訳なさそうに見ていた。シユウは苦笑して首を振る。

「日の出までどうしようかって言つてたぐらいだし、気にしなくていいよ。僕としてはシユテルが楽しそうならそれで十分だし」

「あ、うん……。そっか」

フェイトが少し顔を赤くして戸惑いを見せる。どうかしたのかとシユウが首を傾げるが、フェイトは何でも無いよと手を振った。

なのはたちと一緒に話をしながら日の出の時間を待つ。はやてたちはどうしたのかと聞くと、こちらはヴォルケンリッターたちと屋台を巡っているとのことだった。そんな会話を交わしているうちに、やがてシユテルが入り口へと振り返る。見ると、デアーチエたちが豚汁を持ってやってくるところだった。

「……なぜ貴様らまでいる」

デアーチエが不機嫌を隠さずに、なのはとフェイトを睨み付ける。すぐにシユウがその間へと割って入った。

「たまたま会つただけだよ。暇になったからちよつと話をね」

「そうか。……うぬが良いなら、いいが」

ため息をつきながら、デアーチエが空いている席に座る。一緒に来ていたレヴィと

ユーリもディアーチェの隣に座った。

「ディアーチェたちも何か願いたい事したの？」

「一応な。内容を言うつもりはないが」

「シユウは何か願いたい事したの？」

そう聞いてきたのはレヴィだ。シユウが頷いて答える。

「欲張って二つほど。この生活が続きますように」

ディアーチェが一瞬だけ目を見開き、表情を少し和らげた。レヴィとユーリは嬉しそうに、どこかくすぐったそうな笑顔になる。

「ちなみにもう一つは？」

そう聞いてきたのはなのはだ。シユウは少しだけ困ったような表情になり、言おうかどうか少し迷う。そのわずかな沈黙を拒否と取ったのだろう、なのはがすぐに手を振った。

「別に無理して言わなくて大丈夫だから！」

「別にそういうわけでもないけど……。まあ、言わなくていいなら、そっちの方がいいかな」

言ってもいいのだが、内容が内容だけに人前で言うのは恥ずかしいものがある。この流れに便乗して黙秘を通すことにした。

「じゃあシユテルんの願い事は？」

豚汁をすすりながらのレヴィの言葉。シユテルはレヴィを一瞥すると、すぐに答える。

「私も二つほど。王を始め、私たちの安寧が続きますように」

「む……。そ、そうか……」

ディアーチエの頬が引きつっている。悪い意味ではなく、笑顔になりそうになるのを堪えているものだ。

「もう一つも聞いていいですか？」

ユーリが聞いて、シユテルが、構いませんとうなずく。先ほどのシユウの時と同じような流れというのが少々気にかかる。シユウはシユテルの表情をうかがい見ながら、言葉を待った。

「シユウと一緒にいられますように、と」

その言葉を聞いた瞬間、それを聞いた全員が顔を赤くした。特にシユウは完全に絶句して、固まってしまっている。ディアーチエが、平然と言いおつて、と呆れたように微笑している。言った本人はそれらの反応に首を傾げていた。

「何か？」

「う、ううん。何でもないよ」

なのはが照れ笑いを浮かべ、目を逸らした。

「……先に言われた」

ぼつりとシユウが漏らす。ディアーチエがそれをしつかりと聞き取り、シユウへと視線を向けた。

「まさか貴様の二つ目の願い事は……」

「シユテルと一緒にいられますように」

「貴様もか……」

天を仰ぎ、手で目を覆うディアーチエ。シユウも自分のことでなければ同じ反応をしたかもしれないが、当事者となつては何も言えない。

「えつと……。あ、ほら！ 初日の出だよ！」

何とも言えない妙な空気の中、いつの間にかゆつくりと日が昇ってきていた。

Side : Stern

この場で話をしすぎていたために、場所を移動するタイミングを逸してしまっていた。シユテルは日の出に気がつくとすぐに行動を開始する。

「シユウ。行きましよう」

「ん？ え、どこに？」

戸惑うシユウの腕を取って歩き始める。王やなのはに、少し出てきます、と頭を下げ、その場を後にする。

「気をつけてな」

「また後でね」

王となのはの言葉に見送られながら、シユテルはシユウを伴って少し移動、すぐに横道に逸れた。そのまま人の視線がなくなる場所へと向かう。

「シユテル？」

シユウの戸惑いの声。人の視線を感じなくなつたところで立ち止まり、シユテルは簡易的な結界を展開した。驚くシユウの両手を取って、空へと飛ぶ。

「うわわー！」

驚き慌てるシユウ。暴れないでください、と告げるとすぐに大人しくなつた。そのまままゆつくりと上昇し、空高く昇る。しばらくして、

「わあ……」

シユウのそんな声。目の前には昇りつつある太陽と朝日に照らし出された街並みが広がる。幻想的な光景だ。

「きれいだね」

「そうですね」

二人きりで日の出を見つめる。とても静かな時間の中、シユウの声が届く。重くないかな、と。シユテルは苦笑を漏らし、全く、と答えた。

「ねえ、シユテル」

シユウの声。シユテルが視線をシユウへと向ける。

「何でしょう？」

「何でもない。呼んでみただけ」

「……おかしな人ですね」

言いながら、薄く笑う。シユウも楽しげに笑っている。

「じゃあ、これだけ。ありがと。いいものが見れたよ」

「これぐらいでよければ、いつでも」

静かな会話を交わしていく。少しずつ日の光が強くなっていき、二人を優しく包み込んでいく。しばらくの間二人はそのまま日の出を見守っていたが、やがて太陽の光を受けながら、大地へと帰って行った。

Side: Nanoha

なのははフェイトと一緒に日の出を見守りながら、何度か視線を上空へと投げている。そこから簡易結界の魔力が感じられている。きつと今頃、二人はそこにいるのだろ



う。自分たちも空で見てみたいと思うが、今は二人に譲ろうと思う。

今頃どんな話をしているのだろうか。そんなことに思いをはせながら、なのはは優しげに目を細めていた。

## 節分

「こんなところ、かな？」

マンションの最寄りのスーパーで、シユウは買い物をしていた。左手に買い物かごを持ち、右手には買う物のリストが書かれたメモ用紙。すでにかごには、あるものの材料が収まっている。卵やいくら、大きめの海苔などだ。

今日は節分。豆まきの準備は終わっているのだが、一つ準備を忘れていた。恵方巻きだ。かごに入っている材料は恵方巻きのもので、帰宅した後はシユテルと作ることになっている。ただ、詳しい具材は分からなかったためその辺りは適当に選んできたりもするが。

そろそろレジに行こうかな、と足の向きを変えたところで、

「あー！ シユウ見つけた！」

後ろからの元気な声。どうしてここに、と思いつつも振り返る。

「レヴィ。どうしたの？」

レヴィがいつもの笑顔で立っていた。その表情のまま、言う。

「王様が、荷物が多くなってるだろうから手伝ってこいって」

「そうなんだ。気にしなくても良かったんだけどね」

確かに量が量なのでかなり重たく感じてはいるが、持てないことはない。むしろ女の子に荷物を持たせるといふ方が申し訳ない気持ちになる。これでも男としてのプライドがあるのだ。すでにほとんど打ち砕かれているものだが。

「とりあえず持つね」

言うが早いのか、レヴィはシユウから買い物かごを奪い取ってしまった。それを見て、シユウは頬を引きつらせた。かごを持ったレヴィの反応は、いつもと大差ない。つまりはシユウが重いと感じていたかごに対しても何とも思っていない。自分の中で何かはまだ砕けた気もするが、今更気にしても仕方のないこともある。

シユウは少し肩を落としながらも、レジへと向かう。レヴィがそれに着いてくる。やがてレジの列へとたどり着いたところで、シユウは気づいた。いつの間にかレヴィがいないことに。思わず苦笑して、シユウは来た道に戻る。レヴィはすぐに見つかった。

「何を見てるの?」

「あ、シユウ。な、なんでもないよ?」

レヴィが素早く棚へと商品を戻す。シユウはその商品を見て、薄く微笑んだ。ファミリーパックのチョコレートだ。有名なメーカーのもので、小袋に入ったチョコレートが

二十個ほど入っている商品。シユウはそれを手に取ると、黙ってかごに入れた。

「え？ いいの？」

不安そうな表情をしながら聞いてくるレヴィに、シユウは頷いて言う。

「うん。小さいやつならともかく、これなら皆で食べられるしね。じゃあ、今度こそ行こう」

再びシユウがレジへと向かう。レヴィはそんなシユウの後ろ姿をしばらく見つめ、花が咲いたような笑顔を浮かべた。

Side : Levi

買い物袋を持ってレヴィはシユウの後を歩く。シユウの手にも買い物袋がある。自分も両方とも持つと言ったのだが、シユウはそれを断固として聞き入れなかった。せめて半分は持つ、と。

——変なところで頑固だよな。

シユウなりに気を遣ってくれているのだろうことは分かる。でなければお駄賃代わりのチョコレートなど買わないだろう。レジの時、シユウは他の商品とチョコレートの会計を分けていた。チョコレートはシユウの財布からだ。それを見ていたのがレジの奥だったこともあり、レヴィには止めることができなかった。

家族なんだから気を遣わなくてもいいのに、と思う一方で、それがシユウのいいところかな、とも思う。レヴィは買い物袋からチョコレートの一つ取り出す。実はこつそりと小さな板チョコもかごに入れていた。それを見たシユウは苦笑していたが、シユウが買うなら入れなかったのに、とは思う。

レヴィは板チョコの包装紙をはがすと、それを適当なサイズに割る。

「はい、シユウ」

「ん？ ああ、ありがとう」

差し出されたチョコの欠片を受け取って、シユウが口に放り込む。ゆつくりと食べるシユウの横顔を見つめながら、レヴィも板チョコを口に入れる。ほどよい甘さが口に広がる。その甘さに頬を緩めながら、レヴィは目の前を歩く背中を見つめた。

シユウの背中では決して大きなものではない。シユウと喧嘩などしたことはないが、したとしても間違いなく自分が勝ってしまうだろう。ただ、それでもいいとは思っている。レヴィはシユウのことが好きだし、他の家族も同様に思っているはずだ。いつの間にかシユウがいて当たり前前の生活になっているのだから。仕事以外で暴れられる機会は少ないが、それでもレヴィは今の生活が気に入っていた。

不意にシユウが振り返る。レヴィを見て、笑顔を向けてくれる。レヴィに元気を与えてくれる笑顔だ。

「レヴィ、どうしたの？」

笑顔に笑顔を返すレヴィ。何でもないと前置きして、

「ご飯が楽しみだなんて思ってただけだよ。さ、早く帰ろう！」

レヴィが走り出す。すぐにシユウを追い抜く。背後からシユウの慌てたような声。

——うん。これでいい。これがいい。

レヴィは心の底から楽しげな笑い声を上げながら、シユウと走って行った。

Side: Hero

「つ、疲れた……」

何故か途中から走り始めたレヴィを追って、シユウも全力で走った。マンションにたどり着いた頃にはシユウは荒い息をしていたのだが、レヴィは平然としていたものだ。もつと体力つけた方がいいよ、と悪戯っぽく言われ、まじめに取り組むべきか、とも思っている。

「お帰りなさい。……何かあったのですか？」

疲れ果てた様子で玄関にたどり着いたシユウを見たシユテルが怪訝そうに眉をひそめる。そしてリビングへと視線を移す。先に上がったレヴィへと何かしらの疑惑を向けているのかもしれない。シユウは何でもないと手を振った。

「ちよつと体力不足を痛感しただけ。それだけだよ」

「ならばいいのですが……」

シユテルは未だ納得のいつていない表情だったが、これ以上詮索するつもりもないのだろう。シユウとレヴィが持ち帰った買い物袋を両手に持つと、運んでおきますと告げてキッチンへと向かってしまった。平然とした足取りで、だ。

「……体力と、力もか。先は長いなあ……」

シユウは小さくため息をつくとき、シユテルを追ってキッチンへと向かった。

キッチンではすでに酢飯の準備が終えられていた。大きなボウル二つに良い匂いのあるご飯がたっぷり入っている。シユテルへと視線を移すと、具材の準備を始めていた。手際よく魚をさばっている。器用なものだ。

「シユウ。具材を巻くのは任せる。今は少し休んでいろ」

キッチンの奥で卵焼きを焼いているディアーチエが言ってくる。シユウは少し考えた後、そうするよ、とリビングへと向かった。

リビングのテーブルにはすでに先ほど購入したチョコレートが広げられていた。レヴィとユーリがそれに手を伸ばしている。

「シユウ。お帰りなさい」

ユーリにただいま、と返事をしてシユウは自分の席へ。こたつに入って一息つく。

「二人とも。ちゃんとシユテルとディアーチエの分をおいておきなよ」

一応そう言っておくと、すぐに二人が頷いた。

「もちろんだよ」

「大丈夫です。ちゃんと先に分けています」

よく見れば、チョココレートの小袋は五等分されていた。ならいいかと、シユウもチョコレートに手を伸ばした。

しばらくして、ディアーチエがリビングに入ってくる。その手にはカップが三つあり、そのうち二つをユーリとレヴィに配る。シユウへはカップの代わりに視線が送られてきた。

「具材の準備は終わったぞ。巻きは任せた」

そう言つて、ディアーチエはカップを傾けながらチョコレートに手を伸ばす。シユウは小さく頷くと、キッチンへと向かった。

キッチンではシユテルが具材を並べているところだった。テーブルに酢飯のボウルがあり、その側に大きな海苔と七種類の具材が用意されている。シユテルはシユウを見ると、こちらへ、と隣を示す。

「では始めましょうか」

シユテルの隣に立ったシユウは、シユテルと一緒に巻き寿司を巻き始めた。



作る数は五つだ。さほど難しいわけでもないので時間もかからない。数分ほどでその作業も終わった。シユテルが最初に一つだけ一緒に作り、残り四つは全てシユウが巻いた。

「大丈夫かな？ 変じやないかな？」

巻き終わったものを何度も見直し、見比べながらシユウが不安そうに聞く。シユテルはシユウの横から同じように見比べ、やがてすぐに頷いた。大丈夫です、と。

「それにしても、巻くのはやりたいとのことでしたが、何かあったのですか？」

実は今回の恵方巻きは、手作りなら自分が巻きたいとシユテルとデイアーチエに頼んでいた。たが特に理由があつたわけではない。ただ、少しでも関わっておきたかつた、それだけの理由だ。さすがにそんな説明はできないので、シユウは笑って誤魔化した。

「鬼は外！」

「福は内！」

レヴィとユーリの元気な声が響く。シユウたち三人はその姿を見守りながら、二人の後について行く。恵方巻きを作り終えた後は、この豆まきとなつていた。レヴィとユーリはすぐに豆を準備し、リビングからまき始めている。二人の声が大きいで近所迷惑にならないかと不安に思ったが、デイアーチエ曰く念のため簡易的な結界を展開しているとのことだった。

全ての部屋へと豆をまき終わり、次にシユウの部屋へと向かう。シユウは別にいいよと断つたが、レヴィとユーリが残念そうな表情をしたのでお願いすることにした。

今度はシユウの部屋で元気な声が響く。だがそれもすぐに終わる。リビングとキッチンで豆まきが終わってしまうためだ。他にもいくつか部屋はあるのだが、使わないし掃除が面倒だからと物置としてすら使っておらず、扉は常に閉ざされている。

豆まきを終えた後は年の数だけ豆を食べる。豆まきで余った豆をテーブルの中央に置き、それぞれの目の前に小皿を並べる。すぐにレヴィが手を伸ばし、しかし一粒も取らずに手を止めた。

「ボクたちって何粒食べればいいの？」

レヴィの当然の疑問。無論シユウに答えられるはずもなく、隣のシユテルへと視線をやると、シユテルは黙って首を振っただけだった。シユテルもやはり分からないらしい。

「気にする必要はないだろう。シユウと同じ数でいい」

そう言ったのはデイアーチェだ。そのデイアーチェの意見に従い、シユテルたちはシユウの年の数だけ豆を食べた。

豆の後は恵方巻きだ。シユウたちは恵方巻きを、今年の恵方へと体を向けて黙って食べていく。ゆつたりと流れる静かな時間。それぞれが食べる音しか聞こえない。

——うん。おいしい。

シユウは一人、満足していた。さすがはシユテルとデイアーチェだ、と。シユウたちの恵方巻きに使われた具材は七種類。卵焼きにいくら、サーモン、穴子、かんぴょう、きゅうり、桜でんぶだ。

ゆつくりと味わい、食べ終わる。ふと周囲を見ると、どうやらシユウが一番最後のようだった。他の四人は食べ終わった後もシユウのために静かに待っていてくれたらしい。シユウが申し訳なさそうに頬をかく。

「おいしかった！ これなら毎日でも食べたいかも！」

レヴィが幸せそうな笑顔で言つて、そうだなとデイアーチェが頷く。

「だがな、レヴィ。毎日となると、カレーを食べられなくなるがそれでも良いか？」

「ごめん今のはなしたまにだから美味しいよね！」

「撤回が早いです」

三人のやり取りを聞きながら、シユウも自然と笑みをこぼした。

「シユウ。どうでしたか？」

シユテルの声。隣を見ると、シユテルがお茶を飲みながらシユウを横目で見ている。シユウはしっかりと頷いて答える。

「うん。美味しかったよ、本当に」

「そうですか。ならば良いのです。……私が巻いたものをお渡ししたので、少し気になっただけです」

「……へ？」

それは初耳だった。シユテルと一緒に巻いたのだが、巻いた後はシユテルに任せていたのでそこまでは知らなかったのだ。五つとも混ぜて適当に配ったと思っていたので、シユテルの言葉にシユウは目を丸くした。

「そっか、シユテルが巻いてくれたやつだったんだ……」

ちよつと嬉しい。シユウが照れくさそうに笑いながら小声でつぶやく。シユテルはそれをしっかりと聞き取ったのか、ほのかに頬を赤くしてそっぽを向いていた。

S i d e : L e v i

デザート代わりに残りの豆をつまみながら、レヴィはシユテルとシユウの様子を見ていた。今までも二人は仲が良かったが、最近はさらに仲が良くなつたと感じている。レヴィにとつては大好きなシユテルを取られたと思う部分もあるが、シユウも大切な家族だ。この二人が仲良く幸せそうにしているなら文句などない。

レヴィが締まりの無い笑顔を浮かべると、ユーリが怪訝そうに眉をひそめていた。首を傾げて聞いてくる。

「レヴィ。どうかしました？」

「え？ えへへ、何でもないよ？」

シュテルとシユウの様子を眺めながら、レヴィはさらにもう一粒、豆を口に入れてしつかりと嘯みしめた。

## バレンタイン

「シユウ！　お願いがありますー！」

ある日の休日。朝食を終えて自分の部屋に戻っていたシユウを、ユーリが訪ねてきた。そして発された言葉がこれである。シユウはしばらくユーリを見つめ、やがて言った。

「うん。いいよ」

「私と一緒に……。つて、え？　内容聞かないんですか？」

まさか内容を言う前に頷かれるとは思っていなかったのだろう、訪ねてきたユーリが困惑していた。シユウはそんなユーリへと笑顔を向ける。

「ユーリなら無理難題は言ってこないだろうから。それで、何を？」

「えつとですね……」

恥ずかしそうにしながらも説明を始めるユーリ。シユウはそれを聞きながら手早くお茶の用意をしてユーリに出してやる。それに気づいたユーリが、礼を言いながらお茶を受け取った。そしてまた話の再開。

ユーリ曰く、チョコレートを使ったお菓子を作りたいとのことだった。理由は家族皆に配るためだそうだ。シユテルかディアーチェの方が適任じゃないかな、と言うと、ユーリは二人には頼めません、と首を振った。

「どうして?」

「二人もお菓子を作る準備があるでしょうから……」

はて、とシユウは首を傾げる。どうして三人は突然お菓子を作ろうとしているのかと。そう言えばレヴィも今日は大人しく大きめの本を読んでいた。思い出してみれば、お菓子か何かの本だった気がする。ということとは四人全員、ということか。

なんだか自分だけ仲間はずれみたいだな、と寂しげに眉尻を下げると、ユーリが慌てて手を振った。

「ち、違いますよ! シユウに隠れて、とかそんなんじゃないですから!」

「そう? ならいいけど、でもどうして……」

問いかけて、ユーリが頬を染めてそっぽを向いた。シユウがさらに首を傾げ、何か行事でもあったかなとカレンダーを見る。今は二月。そう言えばクラスの皆は十四日のことで色々話をしていた。

二月十四日。さすがのシユウもすぐに思い当たる。バレンタインだ。シユウは大きく目を見開き、顔を背けた。道理で四人とも突然お菓子作りなどするわけだ。

「ま、まあ事情は大体分かったよ。……ところでユーリの贈る相手は？」

バレンタインにお菓子を作るのだ。当然上げたい相手がいるのだろう。どこかで仲良くなった男の子でもいるのかと思っただが、ユーリはきよんとしていた。何を聞いているのかと言いたげに。

「家族皆にですよ？ もちろんシユウの分もですよ！」

「あ、うん。ありがと。……そっちな」

好きな人上げる、ではなく親しい人やお世話になった人上げるためのものらしい。シユウは納得したように頷いて、それと同時に何故か安堵した。

「僕はシユテルやディアーチエほど料理が上手なわけじゃないんだけど……。それでもよければ、手伝うよ」

「はい！ お願います！」

ユーリが真剣な表情で、しっかりと頭を下げた。

Side: Yuri

まずは二人で簡単な話し合いを行い、作るお菓子の方向性を決める。料理が得意でないユーリのために、簡単に作れて見栄えのいいもの、ということになった。そこからさらに具体的な案をシユウが出してくれる。



「これなら簡単でかわいいと思うけど」

シユウが菓子作りの本からあるページを指し示す。そこに映っている写真には、小さなカップにコーンフレークが少量盛られ、それをチョコレートで固めたものが映っている。

「これでお願います」

「うん。じゃあ買い出しに行こう」

シユウと共にマンションを出て最寄りのスーパーへと向かう。シユウがかごとを持って、ユーリは必要な材料を選んでいく。シユウは最低限必要なもの以外は口出しせず、自分に任せてくれていた。それが少しだけ嬉しい。

かごに入れたものはコーンフレークと溶かすための大きなチョコレート、それにお弁当によく使う小さな銀カップだ。シユウから指定されていないが、チューブ入りの練乳とカラー砂糖というのも入れておいた。

「あ、忘れるところでした。三人とも今日は用事があるらしく家を空けるそうです。お昼ご飯はどうしましょう?」

「急だね……。ここでお弁当でも買っていこう」

総菜コーナーへと向かい、二人で弁当を選ぶ。ユーリがハンバーグの入った弁当を選ぶと、シユウも同じもので、とのことだったので二つ入れた。三人がいつ帰ってくるか

は分からないので、おやつ用にお菓子もいくつか入れていく。

レジで会計を済ませ、二人はまっすぐにマンションへと戻った。すぐにお菓子作りを始める。といっても作業は単純で、小さな鍋でチョコレートを溶かすだけだ。シユウが見守る中、ユーリはチョコレートを溶かしながら銀カップにコーンフレークを少量入れていく。一先ずは六個ほど。チョコレートがしつかり溶けたところでその銀カップにチョコレートを流し入れる。

「終わりました！」

「うん。大丈夫そうだね」

「じゃあ残りも作っちゃいますね」

「え？ あ、うん。もう作るの？ まだ先だよ？」

「十四日までの日曜日は今日で終わりですから……。日曜日でないとシユウと一緒に作れませんし」

これぐらいなら一人で作れると思うけど、とシユウは苦笑したが、分かったと頷いてくれた。再びシユウに見守ってもらいながら作業を再開する。そして出来上がった数は三十個だ。思った以上に量が多くなってしまったことに二人で苦笑いしつつ、チョコレートのを冷ましている間に昼食を済ませてしまうことにした。

昼食後に冷えたチョコレートのをさらに冷蔵庫に入れ、固まるまで待つ。あとはトツピ

ングをするだけだ。

「ありがとうございます、シユウ」

「いや、まあ本当に簡単なものになっちゃったけどね……」

シユウが申し訳なさそうに苦笑する。十分です、とユーリは笑った。

夕方になっても三人はまだ帰ってこなかった。シユウと一緒にリビングでクッキーを食べる。テレビをつけてはいるが、それ以外はとても静かな時間だ。

ユーリはぼんやりとテレビを見ているシユウを見る。時折欠伸をしながら眠たそうにしている。

最近シユテルと親密になつていることを考え、ユーリは微笑んだ。シユテルに笑顔が増えてきたことは一緒に暮らしていればよく分かる。基本的には無表情なのは変わらないが、表情の変化が少し分かりやすくなったと思う。きつとシユウの影響だろう。

今となつてはシユウは家族であり、シユウのいない生活は考えられない。シユウは自分が戦えないことを気にしている節があるが、それでいいと思う。自分たちの帰る場所でいてほしいと。もつとも、そんなことを言っても本人は納得しないだろうが。

視線を感じたのか、シユウがユーリを見る。いつもの優しい笑顔でユーリへとほほえみかけてくれる。それに安心感を覚え、思わずユーリも笑みをこぼした。

「ユーリ。全部食べちゃうよ?」

「え？ あ、待つてください！ ひどいです！」

シユウとお菓子の取り合いを始めながら、ユーリはこんな生活がいつまでも続けばいいのに、と願っていた。

S i d e : S t e r n

少し時を遡り。朝食を済ませたシユテルは家族に帰りが遅くなることを告げた後、高町家を訪ねていた。今はキッチンの前に、なのはと並んで立っている。二人ともエプロン姿だ。

「ではよろしくお願いします、なのは」

「うん。私の方こそよろしくね」

バレンタインのためのお菓子作り。なのはにキッチンを借りたいと相談したところ、桃子にも伝えてくれたようで二人そろって快諾してくれた。ついだというところもあり、お互いにお菓子作りを手伝おう、ということになっている。

「シユテルは誰に上げるの？ やっぱり……シユウ君？」

チヨコレートを溶かしながらなのはが聞いてくる。シユテルはなのはを一瞥して頷く。

「もちろん全員分作りますが。ナノハもやはり家族や友人に、ですか？」

「うん。そんなところ」

そうですか、とシユテルが頷いて会話が終わってしまふ。ただお互いに目の前の菓子に集中しているため自然と終わっただけでもある。しばらくの間は、協力しながらのお菓子作りが続いた。

夕方。シユテルは冷蔵庫から銀色のトレイを取り出す。それをテーブルに置くと、なのはが歓声を上げた。

「シユテル、すごい！」

トレイの中にあるのはチョコレート。ただししっかりと成形されて、二匹の子猫がじゃれついたものになっている。シユテルは一つを手にとつてしばらく眺め、出来映えを確認してまた頷く。悪くない仕上がりに。

隣を見ると、なのはも自分のものを作り終えたようだ。小さなチョコレートケーキが一つだけ。今回はお試しということらしく、本番は前日に桃子と作るらしい。

「美味しそうにできていますね」

「そう？　ありがとう」

なのはが嬉しそうに嗤いながら、丁寧な箱に入れてさらにラッピングまでしていく。そのことを不思議に思いながらも、シユテルも自分のチョコレートを手際よく詰めて、綺麗な紙で包んだ。

「ナノハ。今日はありがとうございました」

なのはに向き直り、頭を下げる。なのはは慌てたように手を振った。

「気にしなくていいよ！ 私もいろいろ手伝ってもらえたし」

あとこれ、となのはがラッピングした箱を手渡してきた。シュテルが首を傾げると、なのはが少し恥ずかしそうにしつつ言う。

「バレンティンまではもう学校だから、会えるか分からないと思つて……。ちよつと早いけど」

今のうちに、ということらしい。シュテルは少し驚きつつも、箱をしつかりと受け取り、本当にいいのですか、と念のため聞いておく。なのはは苦笑しつつ頷いてくれた。

「うん。もちろんだよ！ ただできれば……あとで感想を教えてほしいかな？」

「ええ、もちろんです。お約束します。……では私からも」

先ほど包んだばかりのチョココレートの箱をなのはに差し出す。なのは少し驚いたようだった。

「い、いいの……？ みんなに渡す分だよね？」

「大丈夫です。もともと貴方にも渡すつもりだったので」

シュテルがそう言うと、なのはが少し頬を赤くした。戸惑いながらもシュテルから箱を受け取り、照れくさそうに笑う。

「ありがとう。大事に食べるね」

「はい。お口に合えばいいのですが」

ではこれで、とシユテルが頭を下げてキツチンを出て行く。もちろんケーキの箱も忘れない。家から出る前に玄関まで来てくれたなにももう一度頭を下げ、シユテルは帰路についた。

もう一個、こつそりと作っていたチョコレートに気づかれていたようでもあるが、それを見たなのはが楽しげに笑っていたようだが、きつと気にする必要はないのだろう。

Side: Hero

十四日。シユウは自分の目の前の光景を他人事のように眺めていた。テーブルには様々な種類のチョコレートが並べられ、なかなかの量になっている。ユーリがシユウと共に作ったコーンフレークのチョコ、ディアーチエはやての案を取り入れたチョコレートケーキ、レヴィはフェイトと一緒に作ったというチョコクッキー、そしてシユテルの猫の形のチョコレート。

「……晩飯だね……」

思わずシユウが苦笑を漏らすと、他の四人も苦笑いしていた。予想しておくべきだった。

たまにはいいだろう、というデイアーチエの許可が下りてその日の晩ご飯代わりに皆でチョコレートを食べる。このチョコは、あのチョコはと皆がとても楽しそうだ。シユウは皆の笑顔を見ながら、猫のチョコレートを口に入れた。

夕食を終え、自室に戻る。普段はこの後は一人で読書でもしてあとは寝るだけなのだが、今日はシユテルも一緒に来ていた。どうかしたのと聞いても曖昧な返事が返ってくるだけだ。不思議に思いながらもリビングにたどり着いたところで、

「シユウ。最後にこれを」

手渡されたのは小さな赤い箱。開けていいのかと視線で問いかけて、シユテルが頷くのを確認してから箱を開ける。中に入っていたのは、先ほどとは違う形の猫のチョコレートだ。じゃれ合っている姿ではなく、二匹が寄り添って眠っているチョコレート。

「いいの……?」

思わずそんなことを聞いてしまう。シユテルはもちろんですと頷いた。シユウのためにも用意しましたから、と。

「それでは、私はこれで」

これを渡すためにここまで来たのだろう。シユテルはそう言って頭を下げると、部屋を出て行こうとする。思わず、シユウはその手を取っていた。

「シユウ?」



「あ、えっと……。せつかくだし、ゆつくりしていつてよ」

この誘い方はないな、と自分でも思う。ただ混乱している頭ではこれが精一杯だ。頭の中では、シユテルからのチョコ、僕のために、その言葉がずっと渦巻いている。思考が働かない。シユテルはそんなシユウを少し訝しげに見つめていたが、やがて薄く微笑んだ。

「分かりました。ご一緒しましょう」

それを聞いたシユウは、安堵のため息をつき、次いで顔を赤くしながらも笑顔になった。

S i d e : Y u r i

ユーリはディアーチェと共に片付けをしながら玄関の方へと何度か振り返っていた。先ほど、シユウとシユテルが一緒に出て行ったところだ。ディアーチェはそんなユーリを見て、困ったように苦笑する。

「気になるか？」

「少しだけ……」

正直にそう答えると、我もだ、とディアーチェが頷いた。

「まあ今の二人なら心配あるまい。うまくやっているだろう」

デイアーチェの言葉にユーリは同意して頷いた。その点はもちろん心配していない。ただ、今頃何をしているのかと少し気になっているだけだ。

　　あの二人が仲良くしている間は、シユウは自分たちの家族でいてくれるだろう。ユーリは二人のことを気に掛けながら、これからも続くであろう平穏な日々を思いを馳せていた。

## 雛祭り

「大きな荷物だな」

三月のある日。シユウの部屋を訪れていたディアーチエの言葉だ。ディアーチエが見ているものは、リビングに置かれている大きな段ボール箱。先日、両親から送られてきたものだ。必要なければ着払いで送り返しなさい、という手紙もあった。

「何が入っているのだ？」

「雛人形。分かる？」

「うむ。しかし、なぜだ？ シユウは男であろうが」

女の子が暮らす家ならまだ分かるが、シユウは男だ。なぜシユウの家へと送ってきたのか分からない。ディアーチエが眉をひそめていると、シユウは苦笑して言う。

「それはまあ……。多分、みんなと一緒にいることが多いからじゃないかな」

「む……」

シユウが多くの時間をディアーチエたちと過ごしていることは両親も知っている。だからこそ、両親は使わなくなった雛人形を送ってきたのかもしれない。あの家の女の子、つまりはシユウの妹も今はこちらに住んでいるため、実家ではまず飾らないのだろ

う。なら妹宛に送ればいいのには思うが、妹もよくシユウの家を訪ねてくるためシユウの家の方が都合がいいと判断したのだろう。

だが、シユウの方も送られてきても邪魔なだけだ。スペースを多く取るため、飾ろうとも思えない。それ以前に飾り方を知らないというのものもあるのだが。

「なるほどな、雛人形か」

誰も興味など持たないだろう、そう思っていたのだが、ディアーチエは興味深く箱を見ている。予想外の反応にシユウは少し驚きつつも、笑顔で問いかけた。

「興味あるの？ 見たい？」

「いや……。だがユーリが喜びそうではあるな」

なるほど、とシユウは頷く。確かに飾っていれば、ユーリは特に喜ぶかもしれない。なら飾ってみるのも悪くはないだろう。

「ディアーチエ。手伝って」

「うむ、分かった」

さすがにリビングで飾るのは邪魔なため、シユウは空室を使うことにし、まずは段ボール箱を使っていない部屋へと運ぶことから始まった。

シユテルとレヴィが仕事に向かうのを見届けてから、ディアーチエはシユウの部屋を訪れていた。ちなみにユーリはうたた寝をしている。あれはしばらく起きないだろう。シユウの部屋で見つけたのが雛人形で、今はそれらの飾り付けを行っていた。

「これが説明書、だね。えつと……」

二人で説明書を見ながら少しずつ組み立てていく。ディアーチエにとつては実物を初めて見るものなのでなかなか難しい。頼りになるはずのシユウも組み立ては初めてなのか、何度も説明書を読み返しては唸っていた。

——これは時間がかかりそうだな。

自宅で昼寝をしているユーリのことが気にかかったが、念のためここに来ている旨の書き置きはしてある。一先ず目の前の作業に集中することにした。

どれほど時間が過ぎただろうか。ようやく組み立てと飾り付けが終わった頃、空腹感に驚いた。作業に集中するあまり昼食時を逃してしまっていたらしい。時計を確認してみると、短針が二を指している。ユーリはまだ起きていないのだろうか。

「完成、で良いな？」

「うん。大丈夫だと思う」

「では少し遅くなってしまったが昼食にしよう。ユーリを呼んでくる」

今からではあまり凝ったものは作れない。冷凍庫に何かあったかと考えながらディ

アーチエは部屋を出ようとして、すぐに振り返った。

「シユウ。昼食は……」

どこで食べる、と聞こうとしたが、すぐにディアーチエは口を閉じた。シユウは組み立てられた雛人形たちを見て、懐かしいものを見るかのように目を細めている。昔のことを思い出しているのかもしれない。邪魔をするのも無粋だろうと考え、ディアーチエは静かに部屋の扉を閉じた。

自宅のリビングに戻ると、ユーリはまだ眠っていた。机に突っ伏して整った寝息を立てている。その様子に苦笑しながらディアーチエはユーリの肩を揺らした。

「ユーリ。遅くなったが昼食にするぞ」

ユーリがゆっくりと目を開け、ディアーチエを認めると柔らかな笑顔を浮かべる。ディアーチエは苦笑を漏らしながらキツチンへ。冷凍庫から袋詰めされたピラフを三袋取り出す。少し考えて、冷凍ハンバーグも出すことにした。

電子レンジで解凍しながら、ディアーチエはシユウのことを思い出す。遠いものを見るように目を細めていたシユウを。

どのような理由があるとしても、シユウの最近までの暮らしは決して恵まれていたものではなかった。それ故に、時折まだ平和だったのだらう昔を思い出している節がある。シユウの心のより所なのかもしれない。

ユーリやレヴィ、特にシュテルはシュウのことを気に入っているようだ。もちろん自分もシュウのことは良く思っている。シュウも庇護すべき家族だと思っている。それ故に、支えてやりたいとも。

「まあ……。我は手助けしかできんか」

シュウはシュテルと一緒にいる時が一番安らいだ表情を見せる。ならば自分はこの二人を支えることに徹することが最善だろう。ディアーチエは温まったピラフを皿に移しながら、小さく頷いた。

未だ船をこいでいるユーリを連れて、シュウのリビングへ。シュウがいなかったのでもユーリを先に座らせ、ピラフの皿を置いておく。雛人形の部屋をのぞき見ると、シュウはまだそれを見つめていた。

「シュウ」

呼びかけると、すぐに反応があった。振り返り、笑顔を見せる。

「なに？」

「用意ができた。さっさと食べてしまえ」

「用意って……。ああ、そっか。お昼ご飯」

気づいていなかったのか、ディアーチエは呆れたようにため息をついた。シュウへと短く告げる。冷めるぞ、と。

「うん。今行く」

シユウが立ち上がったのを確認して、ディアーチェは満足げに頷いた。

Side: Hero

昼食後。シユウはディアーチェとユーリと共に買い物を買ったものは今日の夕食と、そして雛あられ。雛あられを見たユーリが、何ですかそれと不思議そうに首を傾げていたが、あとのお楽しみ、と笑顔を送る。

やがてシユテルとレヴィが帰ってきた。二人ともに怪我がないようで一先ず安心する。

「王様！ 今日の晩ご飯は？」

「まあ待て、レヴィ。それよりもぬらに見せたいものがある」

ディアーチェが楽しげな笑みを浮かべ、シユウへと目配せしてくる。シユウも笑みを返し、三人を自宅のあの部屋へと案内する。シユテル、レヴィ、ユーリの三人は怪訝そうにしながらもシユウの後に続いてくれた。

そして部屋に入った三人は、驚きで目を丸くした。

「これは……雛人形、ですか？」

「うん。実家から送られてきたんだ。どう？」



「なんかすごいー！」

瞳を輝かせるレヴィ。なんかって何だろうとシユウは思わず苦笑してしまう。

「すごいです！ いつの間に作ったんですか？」

聞いてくるのはユーリだ。シユウがディアーチェエへと視線を送り、言う。

「ユーリが寝ている間に、ね。ディアーチェエが、ユーリが喜びそうだって手伝ってくれたよ」

「な！ シユウ！」

話を振られると思っていなかったのだろう、ディアーチェエが慌てる。そんなディアーチェエへユーリが嬉しそうに、

「ありがとうございます、ディアーチェエ！」

「う、うむ……」

ディアーチェエは顔を背け、小さな返事をした。顔が赤くなっているのだが、それは何も言わないでおく。

「じゃあ見るものも見たし、ディアーチェエ、晩ご飯にしようよ」

「ああ……そうだな」

ディアーチェエが夕食の準備のために退室する。シユテルが手伝うためにそれを追い、シユウもそれに続こうとして、

「せっかくだからここで食べようよ！」

レヴィの声にシユウはぴたりと動き止めた。

雛人形が飾られた部屋に大きめのちやぶ台が運び込まれる。夕食はディアーチエが作ったちらし寿司だ。ちやぶ台の中央に大きな皿に山盛りにされ、それぞれ自分たちの皿に好きな量を移していく。

「うん。さすがディアーチエ。美味しい」

「そうか」

シユウに言われたディアーチエの返事は短い、その表情はどこか嬉しそうでもあった。

ちらし寿司の後は、雛あられを大きな皿に入れ、皆でつまみながら雑談に花を咲かせた。今日の仕事の話や雛人形の準備の話など。部屋は違うがいつも通りの夕食後の風景だ。皆が話を続ける中、シユウはそれには加わらずぼんやりと雛人形を眺めていた。

それは片付けの時になっても変わらない。皆が食器等を片付けている間も片付け終わってからも、シユウはずっと考え事を続けていた。思い出すのはまた実家にいた頃のことだ。何も知らずに平和に暮らしていた頃だ。

「シユウ。どうかしましたか？」

背後から声を掛けられ、シユウは驚いて振り向いた。シユテルがわずかに眉尻を下げ

てシユウを見つめている。シユウは少し言葉に詰まったが、やがて力なく微笑んだ。

「何でも無いよ。ちよつと昔を思い出していただけ」

「そうですか」

それ以上シユテルは何も言わない。シユウが話したくないことを聞こうとしないですべてくれる。それがとてもありがたい。シユテルは何も言わず、シユウの隣に座った。湯気の立つココアのカップを差し出してくれる。

「ああ、ありがとう」

受け取り、それに口を付ける。体が暖まる。

「この雛人形は、文花のものなんだ」

シユウの言葉をシユテルは黙って聞く。シユウも返事を求めているわけではないので、淡々と話を続ける。

「文花が両親におねだりして買ってもらったものなんだけどね。イメージと違ったらしくて、雛人形が怖いって泣き出して……。結局一度飾っただけで、押し入れの奥深くにしまわれたよ」

さすがにあの両親もショックだったろうなと思う。わがままな妹だな、と。もつとも、その妹の泣き声にもらい泣きした自分が言えるものではないが。雛人形を見て泣き始めた兄妹にさぞかし慌てたことだろうと思う。

今となってはもう、この雛人形の前でそんな光景が広がることはないだろう。そのことを少しだけ寂しく思う。

「この雛人形も、もうちよつとちゃんと飾ってあげられたら良かったのにね」

そんなことをつぶやくと、シユテルがそうですねと頷いた。

「ならこれから毎年飾りましょう」

「へ？」

「準備が面倒なのでしたら、手伝いますよ」

シユテルの言葉に、シユウはしばらく啞然としていたが、やがて顔を真っ赤にした。そうだね、とシユテルから顔を背けて言う。この子は自分が言っている言葉の意味を考えているのだろうか。

「どうかしましたか？」

「い、いや！ 何でもないよ！」

慌ててそう言いながら、雛人形に視線を戻した。

これから毎年。ずっとシユテルたちと一緒にいられば、それも叶うのかもしれない。

ずっと一緒にいられば。

「毎年使うなら、ちゃんと丁寧にしまわないとね」

「そうですね。私も覚えておきたいので教えていただけますか？」  
「うん。もちろん」

隣のシュテルの体温を感じながら、シュウは静かに微笑んだ。

Side : Dear ch e

部屋の扉にもたれかかり、ディアーチェは一人ため息をついた。扉から背を離し、自宅へと戻る。もうしばらく戻らないだろうし、先に風呂を済ませておくか、と。

「我にできることは、まあ……。手助け程度だな」

家臣の安寧を守るのも王の務めだ、とディアーチェは笑う。自分たちは、あの二人はこれでいい、と。滅多に見せない優しい笑みを浮かべながら、ディアーチェは静かにその場を後にした。

## ホワイトデー

「ご教授お願いします」

八神家のリビング。現在そこにいるのは四人の子供。なのはにフェイト、はやて、そしてシユウだ。少女三人がソファに並んで座り、その向かい側で少年がたった一人で深々と頭を下げている。その光景は少々情けないものがある。

「そ、そんなに頭を下げないでよ！　そこまでしなくても、協力するつもりだったから！」

慌てたように言うのはなのはだ。フェイトも勢いよく頷いている。

「そうだよ。私たちがよければ手伝うから」

「そやで。だからそんな申し訳なきような顔せんといてや。な？」

最後にはやてがそう言うのと、シユウがようやく頭を上げた。安心したような表情をして、良かった、と和らげる。自分一人ではどうしようかと思っていた。

「じゃあ、早速」

なのはが笑顔で言っ立ち上がる。それにフェイトが続き、はやての車椅子を押す。

「始めよう」

三月十四日。ホワイトデー。チョコのお返しをする日だ。シユウもシユテルたちにお返しをしないといけないとは思っていたのだが、良い案が出ずにこの日を迎えてしまった。店売りで済ますのはまずいと考え、なのはたちに頼み込んだというわけだ。事情を聞いたなのは快諾してくれ、さらにはフェイトやはやてにも声をかけてくれた。その結果として、八神家に呼び出されて今に至る。

結論としては、シユウがある程度の料理はできると聞いて、何かしらお菓子を作ろうということになった。

「一応希望を聞いとこか」

キツチンまで来たところではやてが振り向いて聞いてくる。シユウは少し考え、答えた。

「美味しいもの?」

「曖昧すぎるよ。もうちよつと具体的に」

「えつと……。ある程度簡単なもの、かな。数が作れるように」

なるほど、と女の子三人が相談を始める。当事者のはずのシユウは蚊帳の外だ。助けを求めた時点で当然ではあるのだが。

「あ、それともう一つ」

シユウが思い出したかのように口を開くと、なのはたちがシユウを見てくる。シユウ

は三対の視線から逃れるように視線を逸らし、言う。

「二つは少しがんばりたい。できればで」

「二つ? 誰に上げるの?」

一つだけ、と聞いてなのはが眉をひそめた。シユウが苦笑する。今更それを聞くのか、と。声には出さなかったが伝わったのだろう、なのははすぐに顔を赤くすると、ごめん、と顔を背けた。

「それじゃあ、始めよか」

はやてに促され、シユウもキッチンに立った。

Side: Nanoha

なのはたちが見守る前で、シユウは調理を続けていた。簡単に作れるものはすでに調理を終えている。今は、少し手の込んだもの、だ。作り方だけを教え、あとは間違っただけだ。

「シユウはうまくやってるみたいだね」

ジュースを飲みながらフェイトがつぶやく。それにはやても頷いた。

「たまに王様に聞くけど、みんなと仲良くやってるらしいで。ユーリも懐いてるとか」

「そうなんだ。レヴィはあまり他の子のことを話してくれないから」



正確に言えば、レヴィは雑談よりも体を動かす方が好きならしく、たまに会ってもそういうことを聞く前に疲れるまで遊ぶことになるらしい。聞かれれば答えてくれるのだろうが、楽しそうな笑顔を見るとそれを中断させてまで聞くことはできない、とのことだった。

逆にディアーチェはたまにはやてを訪ねているらしいが、ほとんどが雑談や料理といったことで終わるらしい。それ故にはやてが彼女たちの事情に一番詳しいと言える。「シユテルからは何か聞いてる？」

問いかけてきたフェイトに、なのはは一度だけ頷いた。

「うん。ただシユテルも自分から話してくれることって少ないから……。でも、シユウ君といると落ち着く、とは聞いているよ」

なのはを訪ねてくるのはシユテルだ。ただなのはとシユテルの場合は、頻繁に模擬戦を行っている。その前後や合間に少し聞くだけだ。だが、その短い会話からでもシユテルがシユウのことを気に入っていることはよく分かる。シユウのことを話すシユテルの表情は、いつもの無表情ながら柔らかい雰囲気をもとうためだ。

補足をしてあげば、もちろんシユテルと一日雑談に花を咲かせることもあれば、一緒にお菓子作りをしたりなどもしている。だがやはり模擬戦の割合の方が高いのだが。

それにしても、とはやてが言っ、なのはは親友へと顔を向ける。はやてが照れたよ

うに頬をかきながら言った。

「想いを告げたようだって聞いた時は、驚いたなあ……」

なのはとフェイトが神妙な面持ちで同意して頷いた。なのはとフェイトは「ディアール」チエから聞いたはやてに教えてもらったのだが、本当に驚いたものだ。それと同時に嬉しくも思ったが。

「今の生活が続くといいんだけど……」

そう思うが、シユウやシユテルたちはどう思っているのだろう。この先はどうするつもりなのだろうか。今はまだ、先のことは分からないままだ。

調理をしているシユウへと視線を戻す。レシピを見ながら調理を進めている。そのシユウを見つめながら、なのはは心の中でつぶやいた。

——みんなを……。シユテルをよろしくね、シユウ君。

Side: Hero

八神家で作ったものを丁寧にビニール袋に入れ、三人に何度も礼を言いながら帰路に着いた。その時にこの三人にもお返しを渡しておくのも忘れない。バレンタインの日にシユテルたちを経由してもらっていたためだ。

自宅にたどり着いたシユウは一先ず自分の部屋に向かい、ビニール袋をリビングに置

く。ビニール袋の底に入れていた小さな箱を取り出すと、それを冷蔵庫に入れてシュテルたちの部屋へと向かった。

「あ、シュウ。お帰りなさい」

リビングに入ると、ユーリが笑顔で出迎えてくれる。リビングにはユーリ一人きりだった。

「ただいま。ディアーチェは？」

シュテルとレヴィは仕事が入っていたはずだが、ディアーチェは違ったはずだ。ディアーチェの姿を探してキッチンの方を見るが、キッチンの明かりは消されていた。買い物かな、と首を傾げていると、

「シュウ。入れんのだが」

背後からの声。驚いて振り返ると、ディアーチェがスーパーの袋を提げて立っていた。やはり買い物に行っていたらしい。ユーリがいるのに一人で買い物なんて珍しい、と思っていると、シュウの表情からそれを読み取ったのだろう、ディアーチェは苦笑した。

「うぬがいつ帰ってくるか分からなかったからな。ユーリには留守番を頼んでおいた。ユーリ、ほれ」

ディアーチェが小袋サイズのグミを手渡す。目を輝かせてそれを受け取るユーリ。

留守番をしてもらったお礼、といったところか。

「シユテルから念話があった。あと一時間もせずに帰るそうだ」

「そつか。じゃあのんびり待つてようかな」

そうしておれ、とディアーチエはキッチンへと向かう。夕食の準備でもするのだろう。シユウはそれを見送つてから自分の席に座つた。

それからしばらくして、シユテルとレヴィが帰つてきた。シユテルは平然とした様子で夕食の準備を手伝い始めるのだが、レヴィは疲れ切つたようにリビングのテーブルに突つ伏した。実際に声でも、疲れた、とこぼしている。

「今日は大変だったの?」

「……書類嫌い……」

「……ああ……」

その一言で理解した。何かしらの事務処理を手伝っていたのだろう。確かにシユテルなら黙々と処理するイメージがあるが、レヴィには向いていないように思う。

「お疲れ様」

ねぎらいをこめてそう言うのと、レヴィの頬がわずかに緩んだ。

「……夕食にするが、いいか?」

キッチンから顔を出したディアーチエがそう聞いてくる。それを聞いた瞬間、レヴィ

は勢いよく体を起こした。

「ごはんー！」

「……良きそうだな」

呆れたようなため息をつきながらも、ディアーチエは笑っていた。

リビングのテーブルに夕食が並ぶ。ミートソースのドリアだった。ディアーチエ曰く、昨日のうちに仕込んで置いたらしい。五人でそれを全て平らげる。いつもより少し少なめの量だ。

全員の皿が空になったところで、ディアーチエが立ち上がった。

「さて。デザートの間だ」

そう言つてディアーチエがキッチンから持ってきたのはジャムを使ったクッキーだ。いちごやブルーベリーなど様々なジャムが使われているようで、色鮮やかになっている。

「ちなみにジャムを作ったのはユーリだ」

「私たち二人から、です！」

早速シユウが一口に入れ、続いてシユテルとレヴィも頬張る。しつかりと味わつて、素直に感想を告げる。美味しい、と。それを聞いたユーリは嬉しそうに破顔した。

「さすが王様！ ユーリもすごい！ あれだね、共同作業だね！」

「妙な言い方をするなたわけ！」

ディアーチエが顔を真っ赤にして叫び、どうして怒られるの、とレヴィは困惑してしまふ。その様子がおかしくて、シユウは思わず嘔き出してしまった。我に返ったディアーチエが咳払いして、シユテルとレヴィへと目配せする。

「私からはこちらを」

シユテルが用意したものは湯気の立つカップだ。それぞれの目の前に一つずつ差し出されたそれには、温かいマシユマロの入ったミルク。ほう、とディアーチエが感心したような声を漏らした。

「なるほど。見た目も素晴らしい」

「光栄です」

「ボクはこれ！」

シユテルが礼をした横で、レヴィが箱を差し出してくる。中に入っているのは大量のあめだ。よく見れば、一つ一つ形が違う。どれもが歪な形をしていた。

「もしかして、手作り？」

「うん。オリジナルと一緒に作ってみたんだ。失敗しちゃったけどね」

後半はどこか悲しげな表情になってしまっていた。シユウたちはそれを一口含む。味付けはシンプルで、自然な甘さが口に広がる。見た目とは違い、なかなか美味しい。

「初めてでこれなら大したものだ。菓子作りの中でも難しいものだぞ」

「ええ、本当に。がんばりましたね、レヴィ」

ディアーチェとシユテルに続けて褒められ、レヴィは一瞬ぼかんと呆けた後、すぐに嬉しそうに頬を綻ばせた。そうかな、と照れたように顔を赤くしている。あまり見ない表情でとても新鮮だ。

「次があれば、今度は一緒に作りましょうか」

「うん！」

シユテルの誘いにレヴィは嬉しそうに頷いた。

「それじゃ、最後に僕だね」

一番最後というのは避けたかったが、仕方がないと諦めつつシユウも持参したものを差し出した。袋に入っているのはカップに入ったマシユマロでチョコレートがかかっている。

わずかに驚きを見せる四人。気にしなくとも良かったのだが、とディアーチェは苦笑している。そして、誰も手を着けない。もしかして見た目からだめかな、とシユウが不安に思い始めていると、ディアーチェがため息をついた。

「シユテル。はよ食べる。我らが食べられん」

「そうだよ、シユテるん。早く早く」

レヴィにも急かされ、シユテルはどうしてかと首を傾げていた。シユテルとしては、王が食べてから、とでも思っていたのだろう。その王であるディアーチェに促されたので、シユテルが最初に口に入れた。

「なるほど。シンプルですが、それ故に美味しいですね」

「そう？ それなら良かった」

安堵のため息をつくシユウ。ディアーチェが満足そうに頷いて、全員が食べ始めた。

食事後。ユーリはリビングで、食べ過ぎましたと横になっており、レヴィは幸せそうな表情をしながらテーブルに突っ伏している。ディアーチェは片付けのためにキッチンに行っていた。その直前に、あとの家事は引き受ける、とシユテルに言っていたのを聞いている。

シユテルは不思議そうにしながらも、ではお言葉に甘えますと頷いていた。今はシユウの隣で本を読んでいる。

「あのさ、シユテル」

声をかけると、シユテルが顔を上げた。何でしょうか、と首を傾げてくる。

「ちよつと一緒に来てもらってもいいい？」

「構いませんが……。どうかしましたか？」

いいから、とシユテルの手を引いてシユウは自分の部屋へと向かう。シユテルは怪訝



そうにしながらも着いてきてくれていた。

シユウの部屋のリビングにたどり着き、シユウはシユテルを座らせる。ちよつと待たせて、と言い残してキッチンへ。冷蔵庫に入れていた小さな箱を取り出して、ついどとばかりにパックのジューズも持って戻る。それは？ と聞いてくるシユテルに返事をせずに、今度は小皿とフォークを二組用意して、シユテルと自分の前に置いた。それからようやく、小箱を開けて中身を取り出した。

小箱に入れていたのは、小さめのガトーショコラだ。それを見たシユテルが目を丸くし、その反応にシユウは嬉しそうに微笑んだ。あらかじめ半分に切っておいたガトーショコラをシユテルの皿に載せる。

「はい。シユテルの分」

シユテルはそれをまじまじと見つめている。形悪いよね、と自嘲気味に笑うと、シユテルはそんなことはありませんと首を振った。

「シユテルからも別でチョコをもらったからね。それのお返し、ということだ」

「なるほど……。気にしなくても良かったのですが」

「細かいことは気にせずに、食べてみてよ」

シユウに促され、シユテルはフォークを手に取った。シユウが見守る中、シユテルが一口目を食べる。ゆっくりと咀嚼して、呑み込んだ。

「ど、どうかな……?」

緊張しながら聞く。シユテルはシユウを見て、

「手作り、なのですか?」

「うん。なのはたちに教えてもらいながら、だったけど……」

口に合わなかったのかな、と内心で落胆しかけていると、シユテルがゆつくりと優雅しげに微笑んだ。

「とても美味しいですよ。ありがとうございます、シユウ」

その笑顔を見て、シユウは内心で安堵する。シユウも笑顔を返して、良かった、と言いながら自分の分を食べ始めた。

ももとのサイズが小さかったこともあり、二人ともすぐに食べ終わった。ジュースを飲みながら、二人きりでのんびりと過ごす。静かな、時間。

「シユウ」

呼ばれて、シユウはシユテルを見る。シユテルとしつかりと目が合う。

「ありがとうございます」

シユウは目を丸くして、すぐに苦笑する。律儀だな、と。

「でもまだまだ下手だからさ……。今度、一緒に作ろうね」

「はい。是非とも」

そしてまた無言。お互いが飲み物を飲む音だけが静かに響く。心地の良い静かな時間だ。その時間の中で、二人はそつと体を寄せ合った。どちらからともなく、自然と。二人同時に顔を見合わせ、照れたような笑みを交換する。わずかに頬を赤くしたシユテルを見て、かわいいな、と思ってしまった。

この時間が続きますように。そんなことを心から望みながら、シユウはそつとシユテルに口づけした。

その日のキスは、とても甘い味がした。

## 第一話

「久しぶりに来たけど、やっぱりすごいなあ」

周囲の光景を見て、シユウはほつりとつぶやいた。現在、シユウがいるのはアースラのブリッジだ。今は緊急時でもなければ航行しているわけでもないの、数人の職員が働いているだけとなっている。

なぜシユウがここを訪れたかという、それは今日の前にいる人物に会うためだった。

「ようこそ。お久しぶりね」

リンデイが笑顔でシユウを出迎えてくれた。

リンデイの部屋、和室のような部屋にシユウは案内された。シユウとリンデイの二人だけで、他には誰も居ない。

リンデイへの連絡、アースラへの送迎をしてくれたシユテルも別件の仕事へと向かっている。リンデイとの話の後はシユテルを待つてから帰る予定だ。

「私に話があるそうだけど、何かしら」

そう言いながらお茶菓子を出してくれる。シユウは礼を言うが、今はまだそれには手

を着けなかった。

「えつと……。他の人に聞いてもいいことなんでしょうけど、一番信頼できるのはやっぱりリンデイさんかなと思って。ちよつとだけ相談です」

「あら、ありがとう。それで？」

「シユテルたちと一緒にいるためには、どうすればいいですか？」

リンデイが一瞬目を丸くし、そしてすぐに困惑の色を示す。質問の意図が分からない、といった様子だ。それをすぐに察して、シユウは慌てて言い直した。

「えつと……。シユテルたちは魔導師で、これから魔法を使い続けると思います。でも、僕が側にいたら、僕の存在で彼女たちを縛つちやうような気がして……。僕は魔法が使えない一般人ですから」

妙なものが体にありますけど、とシユウが苦笑する。そのシユウの目の前で、リンデイはなるほど、と一つ頷いた。シユウの言いたいことを理解してくれたらしい。リンデイはシユウの目を見て、言う。

「一緒にいるなら魔導師であるシユテルさんたちの力になりたい、そういうことかしら」  
「はい。そうです」

シユウは魔法のことに関しては無知に等しい。シユテルたちの役に立ちたいとは思っても、自分に何ができるかすら分からない。シユテルたちに聞いても、自分たちの

ことは気にしないようにと言われるだけだ。実際にシュテルに言ってみたことがあったのだが、やはり気にするなと言われただけだった。

それなら、とシュウは思う。シュテルたちに知られないように自分のできることを探そう、と。それを示せれば、彼女たちの隣、とまではいかなくても少し後ろぐらいなら歩けるかもしれない。

リンディは、なるほどねと考え始める。それを見て、やはりこの人に相談して良かったと思った。魔法と少し関わっただけのシュウのために真剣に考えてくれている。

「シュテルさんと一緒に生活できないといけないわけだから、オペレーターとかはだめね……。あとは……。デバイスマスター、とか？」

「えつと……。何ですかそれ？」

「デバイスを設計したりメンテナンスしたり、まあデバイス全般に関わる仕事、と思ってもらったらいと思うわ」

デバイス、と聞いてシュウはシュテルの杖やレヴィの鎌を思い出す。確かあれらがデバイスと呼ばれるものだったはずだ。あれらにメンテナンスが必要だとは知らなかった。確かにそれができれば、彼女たちの役に立てるかもしれない。

「興味があれば資料を持ってきてあげるけど」

「是非！ お願ひします！」

「ふふ。それだけやる気があれば大丈夫かしらね。じゃあ手配しておくから」

この後も仕事があるから、とリンディとはそこで別れた。それが昼前のことだ。シユテルが戻ってくるまでは暇なのでシユウは食堂でのんびりと過ごすことにした。休憩の職員と話をしたり、昼寝をしたりしながら過ごす。時折デバイスマスターのことについて聞いてみたが、とても難しい資格だと聞くことができた。

夕方になり、シユテルが戻ってくる。食堂まで迎えに来てくれたのだが、リンディも一緒だった。

「では帰りましょうか、シユウ」

「うん」

シユテルに促され、シユウは立ち上がる。そのまま食堂を出ようとして、

「はい、これ」

シユテルから見えないようにリンディから封筒を差し出された。困惑しながら受け取り、中身を確認する。何冊かの本と資格についての資料。シユウが驚きに目を瞠ると、リンディはどこか楽しげに笑っていた。

「本格的に勉強をするつもりがあるのなら、協力するから。いつでも言いなさい」

それじゃあ、またね。リンディがそう言っただけでシユウの肩を叩き、休憩室の奥へと向かっていく。シユウはその背中を、呆然としたまま見送っていた。

夕食を終え、自宅に戻ったシユウは早速リンディから受け取った封筒の中身を取り出した。中に入っているのはデバイスマスターが実際に行う業務内容を網羅した本や、その資格のための問題集。さらには資格の概要についての資料など。昼前に話したところだというのに、これほど早く用意してもらえとは思っていなかった。改めて礼を言う必要がある。

とりあえずシユウは、それらのもの全てに目を通すことにした。

S i d e : S t e r n

翌日。朝食の時間になってもシユウは現れなかった。寝坊でもしたのでだろうと王が笑い、シユテルへと様子を見に行くようにと告げる。断る理由もないので、すぐにシユウの部屋を訪ねる。シユウから預かっている合鍵で扉を開け、リビングへと向かう。

「……何をしているのですか?」

そこにいたのは、テーブルに突っ伏しているシユウ。彼の体の下には何かの本がある。まるで慌てて隠したように、シユウは引きつった笑みでシユテルを見ていた。

「べ、別に何でもありませんよ? シユテルこそどうしたの?」

「朝食に呼びに来ました」

「へ……?」



シユウが間拔けな表情を見せ、時計を見る。そして目を大きく見開いた。どうやら本当に気がついていかなかったらしい。手元の本にでも熱中していたのだろうか。

「そんなにおもしろい本なのですか？ よければ私にも……」

「いや！ そういった本じゃないから！ 教材だから！ 気にしないで！」

慌てふためくシユウに、シユテルは訝しげに眉をひそめる。誰がどう見ても怪しいと思える態度だが、シユテルは詮索せずのため息をつくだけに留めた。シユウも人の子だ。隠したいことの一つや二つはあるだろう。少々寂しくも感じるが、それは仕方がない。

「では王たちが待っていますので、急いでくださいね」

「うん。すぐに行くよ」

シユテルでは、ときびすを返すと、後ろ髪を引かれる思いをしながらもその場を後にした。

「おもしろいけど難しすぎるよ……」

シユウのその声は聞こえないことにして。

S i d e : H e r o

「なのは。ちよつといいかな？」

朝のホームルームの前。シユウはなのはたちの集まりへと声をかけた。なのはたち全員が驚いたような反応を見せる。それもそのはずで、シユウから彼女たちに積極的に声をかけることはしてこなかったためだ。

「珍しいね。どうしたの？」

なのはが笑顔で聞いてくる。シユウは周囲を見て、なのはたち以外に誰も会話を聞いていないことを確認して言った。

「あとでアースラに連れて行ってもらえないかな？ リンデイさんに会いたいんだ」

「私は構わないけど……。シユテルは？」

シユテルと一緒にに行けばいいのでは、と考えたのだろうか、なのはがかわいらしく首を傾げて聞いてくる。ここには言っておいてもいいかなと判断して、シユウは簡単な経緯を説明した。なのはたちだけでなく、話を聞いていたアリサとすずかも驚いていた。

「デバイスマスターの勉強……。そっか、シユウはその道を選んだんだね」

そう口を開いたのはフェイトだ。感心したように何度か頷いている。

「なんや難しいってよく聞くなあ……。がんばってな、シユウ君。応援するで」

「うん。ありがとう」

それじゃあまた放課後に、そう言い残してシユウは自分の席へと戻っていった。

授業が終わり、放課後。シユウは一度だけ自宅に戻り、シユテルたちの部屋へと向かう。今日はリビングに全員揃っていた。

「ちよつと友達と遊んでくるね」

そう言うのと全員が驚き、そのことにシユウは思わず笑みが引きつった。そんな意外なのかと思うのと同時に、確かにこんな言葉は初めて言ったな、と気づいてしまう。自分の交友関係の少なさに気持ちが滅入りそうになるが、今は関係のないことなので一先ず忘れることにした。

驚きから最初に立ち直ったのはシユテルだ。珍しいですね、とつぶやき、続ける。

「お気を付けて。いつ頃戻りますか？」

「ちよつとお話してくるだけだから、二時間ぐらいかな？」

「分かりました。では夕食もそれぐらいの時間に出来上がるようにしておきます」

ありがとう、と礼を言うのと、シユテルは黙って首を振った。気にしなくていい、と。

「それじゃあ行つてきます」

そう言つて、部屋を後にする。そのシユウの背中へと、

「お気を付けて。リンディ艦長によりしくお伝えください」

「……………」

敵わないな、とシユウは心の中だけで苦笑した。

## Side : Kouji

「なるほどなあ……」

真夜中の学校の屋上。コウはフェンスにもたれかかり、目の前のモノから話を聞いていた。

それは、小さな黒い玉だった。特定の形を持たず、周囲の景色と同化して姿を隠す。コウは詳しく知らないが、魔法の一種らしい。サーチャーに近いものだと言ったことはあるが、興味もないので聞いていない。

これは、ずっとシユウの部屋にいる。ここに本体がいる今も、これの欠片がほとんど時間をシユウと共に過ごしている。もっとも、魔力に精通した者、夜天の守護騎士やマテリアルたちに見つかればさすがに気づかれる可能性もあるが、そこはうまく隠れているようだ。

今、これの報告によりシユウが何をしようとしているかの見当がついた。デバイスマスターを目指している、と。がんばるな、と他人事のように思ってしまう。彼の親友を名乗る者として、応援したいものだ。

だが、彼の上に立つ者は良しとしないだろう。彼が魔法の世界に出てくることを望まない。それ故に、このことを知れば実力行使に及ぶ可能性がある。

「ご苦労さん。戻ってええで」

黒い玉がひらひらと揺れて、そして姿を消した。シユウの部屋へと戻ったのだろう。それを見送ったコウは、疲れたようにため息をついた。どうしたものか、と。

「まあ、今回も特に変わりなし、でええやろ」

つぶやき、笑う。全て教える必要はないだろう。

自分の上は、まだシユウが孤独な生活を送っているものだと思っている。毎日を適当に過ごしていると思っっているだろう。そんなシユウを彼らは必要としていない。シユウに弱みができることを望んでいる。シユウが自発的にその力を使うために。

だからこそ、コウは口を閉ざす。自分の存在意義を自己否定することになったとしても。たった一人の親友のために。

「だからがんばれ、親友」

コウは笑いながらそう言って、その場を後にした。

そしてそれを無感情に見つめる一人の人間。その人間も黒い玉から報告を聞き、そして言う。少女特有の高い声で、たった一言。

——裏切り者め。

## 第二話

アースラの休憩室。シユウはその隅の席を借りて、リンディに用意してもらった教材を開いていた。デバイスマスターの資格のための教材、ではない。無論そのための教材であることに違はないのだが。

シユウは魔法の知識が根本的に足りていない。そんなシユウがいきなりデバイスマスターの資格の勉強などできるはずもなく、そのための教材を開いても書いてある語句の意味すら理解できなかつた。故に今は、基礎中の基礎から学んでいる。

基礎といっても簡単なものでもない。この教材の全てを理解できるようにするだけでも一年はかかりそうだ。シユテルたちの力になれるのはいつになることか、見当もつかない。だが、それでも途中で投げ出すことはないだろう、とは思う。明確な目的があるのだから。

「ふう……。疲れた……」

シユウは教材から目を離し、ぐつと伸びをする。ここに来てからすでに三時間が経っている。そろそろ帰らなければシユテルたちが不審がるかも知れない。

今日は休日だ。シュテルたちには友達と遊びに行くと言って出かけている。実際のところはここで勉強をしているのだが、送迎はなのはやフェイト、はやての誰かにしてもらっているのだから嘘というわけでもないだろう。ただ、それでも嘘をつくことに後ろめたさはあるが。

そろそろ帰ろうかな、とシュウは荷物を片付ける。携帯電話を取りだして一緒に来たのはに連絡を取ろうとして、

「あれ？ お兄ちゃん」

その声にシュウはわずかに目を見開いた。どうしてここに、と思いながら声のした方向、背後へと振り返る。妹の文花がそこにいた。

「お兄ちゃんがいるなんて珍しいね。どうしたの？」

「ちよつと勉強をね。シュテルたちには知られたくないからここで……」

「へえ……。何の勉強？」

文花が興味深そうに、机の上に広がっている教材を見る。一つ一つ確認していき、やがて文花が得心したように頷いた。

「デバイスマスターになりたいの？」

「その通りだけど……。よく分かったね」

「実家にある教材も多いから、何となく」

へえ、とシユウは頷いた。実家に同じものがあるのなら、そこから答えが導き出されるのも頷ける。それでもよく覚えてるなあ、と感心していたところで、

——ちよつと待て。

聞き捨てならないことを聞いた。

「え？ 家に……実家に同じものがあるの？」

「あるけど……。それがどうしたの？」

文花は、何を今更と首を傾げている。シユウの啞然とした表情をしばらく見つめ、文花はため息をついた。

「お父さんとお母さんは研究者だよ」

「うん」

「お母さんはデバイス関係の方に特化してるの。もちろんデバイスマスターの資格もある。だから教材ももちろんあるよ」

初耳だった。シユウが両親の魔法関係のことで知っているのは、ロストロギアについて調べていたことぐらいだ。デバイスの方面にも詳しいとは知らなかった。

「お母さんに教えてもらったら？ きつと喜ぶよ」

文花のそんな言葉。シユウは苦虫を噛み潰したような表情になる。両親とは今でもあまり連絡を取っていない。今までが今までだけに、簡単に許すことはできないため



だ。そんなシユウの心情を理解しているのだろう、文花は小さく肩をすくめただけだった。

「まあ私も人のこと言えないから、お兄ちゃんにも何も言わない。でも、利用できるものは利用した方がいいと思うよ」

文花の笑顔。何か悪いことを考えているような表情だ。文花は、じゃあ行くねと手を上げるときびすを返した。シユウが慌てて呼び止める。

「ちよつと待つて、文花」

「なに？」

文花がすぐに振り返る。その文花へと言う。

「文花はどうしてここに？」

「ちよつと呼び出しを受けて……。そ、それじゃあー！」

この話題になった途端、文花はかなり慌て始めた。聞かれたくなかった、見られたいなかつた、そんな表情と慌て方だった。急いで立ち去っていく文花を、シユウは怪訝そうに眉をひそめながらも黙って見送る。どうかしたのかな、とは思うがシユウに手伝えることはおそらくないだろう。

シユウは携帯電話を取り出すと、番号の入力を始めた。

Side: Humika

シユウと別れた後、文花はアースラの小部屋にたどり着いた。ノックをして中に入る。そこにいたのは、リンディとクロノだ。文花はしつかりと一礼してから中に入り、二人の対面に座る。

「急に呼び出してごめんなさいね、文花さん」

「いえ。大丈夫です」

今朝方、リンディたちから連絡があり、アースラに来てほしいと呼び出しを受けた。内容は単純で、依頼されていたことが終わったからだ、と。

文花がリンディとクロノに依頼したこと。それはデバイスの解析だ。自分が使っていた鎌のデバイス。その詳細な情報を調べてもらっていた。文花の依頼ではあるが、リンディとクロノにも調べさせてほしいと頼まれていたことでもある。

文花が使っていた鎌のデバイスは、文花の両親が用意したものではない。ある日突然、文花の机にあつたものだ。そのデバイスと一緒に置かれていたメモ用紙には、たった一言、これで目的を果たすといい、という簡潔な言葉だけが残されていた。最初は当然不審に思っていたものだが、そのデバイスを手に取ると不思議とその感情は消え失せてしまった。

デバイスが暴走した一件以降、そのデバイスは管理局に、というよりはリンディ個人

に預けられている。そこから、口の硬い技術者に解析を依頼してもらっていたのだ。

「それで、どうでしたか？」

文花がおそろおそろといった様子で聞く。リンディは少しの間だけ文花の目を見た後、やがて口を開いた。

「必要な情報だけを伝えるわね。あのデバイスはインテリジェントデバイスで間違いのないのだけど、設定されてある人工知能は異常なものでした」

「異常？」

「簡単に言ってしまうえば、主を乗っ取る意思があり、実際に体のコントロールを奪うような術式も組み込まれていたんだ。覚えがあるだろう」

クロノの言葉に文花は頷く。実際に文花は体のコントロールを奪われた。自分一人ではどうにもできなくなったのだ。あの場に兄やシュテルがいなければ、どうなっていたか分からない。

「もう一つ、なぜか本来の所有者の名前も記録されていたわ。ただ、まるで見つけてくださいと言っているように記録されていたのだけど……」

リンディがクロノへと視線を投げかけ、クロノは頷いて一枚の紙を取り出した。解析結果でも書かれているのだろう、文字や数値が書かれているのが透けて見える。やがてクロノが口を開いた。

「本来の所有者は東江幸司。心当たりは？」

その名前を聞いた瞬間、文花は目を大きく見開き絶句してしまった。

S i d e : S t e r n

シユウがどこかへと出かけた後、シユテルは王に許可を取り、翠屋に来ていた。目的は桃子から料理の技術を習うことだ。ここ最近、仕事もなくシユウも自宅にいない時は、翠屋で勉強をさせてもらっている。

「どうでしょうか」

シユテルが桃子へと試作したケーキを差し出す。桃子はそれを一口食べ、感嘆のため息を漏らした。

「ほとんど完璧。すごいわ、シユテルちゃん」

「光栄です」

丁寧に頭を下げるシユテル。それを見た桃子が苦笑して、でも、と続ける。

「まだ改善するべきところもあるかな。例えば……」

桃子の指導を受け、またケーキを試作し、そしてまた指導を受ける。その繰り返しだ。ここに来るたびにそのやり取りを何度も繰り返している。

ちなみに、桃子は試作のケーキを一口しか食べない。残りは捨てる、というわけでは

なく、

「シユテルちゃんの試作ですか！ 食べたいです！」

最近よく来るためか、ここの従業員と少し話すようにはなっている。誰もがシユテルを歓迎してくれている。さらにシユテルがケーキを試作していると聞いてからは、小さなケーキを皆で取り合っているほどだ。

今回のケーキもいつの間にか従業員の人が持つて行つてしまつていた。

「もう一度、お願いできますか」

シユテルが聞いて、桃子は笑顔で頷いた。

「もちろん」

シユテルたち四人は、現在ある計画を立て、それぞれが行動を起こし、準備をしている。シユテルのケーキ作りもその一つであり、他の三人もそれぞれ動いていた。計画の目的は単純、これからの生活のためだ。魔法に頼らない生活、それが目的である。もちろん魔法を捨てるようなことはしないが、どこかの誰かに自分を追い詰めるような思考をさせないためでもある。

シユテルは次のケーキを焼きながら、王たちとの会話を思い出す。シユテルからの相談に三人とも驚きながらも協力してくれている。そのことをとても嬉しく思う。だからこそ、発端である自分もつとがんばらなければならない。

そこまで考えたところで、人影が隣に立った。見ると、デイアーチエがそこにいた。「どうだ？」

王の短い問いかけ。シユテルは黙って頷く。

「概ね順調です」

「うむ。では我も見てもらうとするか」

そう言いながら、王もケーキ作りを始める。王も桃子からの指導を受けている一人だ。少しでも近づけるように。そんなことを考えながら、二人はケーキ作りに没頭した。

S i d e : K o u j i

「みんながんばるなあ」

夜。学校の屋上でコウは欠伸をかみ殺しながらつぶやいた。黒い塊から今日の監視データを受け取っているところだ。それらを見て、コウは楽しそうに笑う。

「シユウとシユテルさんはお互いに一言言ってみればいいと思うんやけど……。まあ、俺には関係ないことか」

二人は行動こそ違うが、その目的は単純でほぼ一致していた。それがとてもおかしく思う。代わりに教えてやろうとも思えないが。続けてコウは最後のデータも見て、そし

て凍り付いた。慌てたようにまた視線を上げ、ゆっくりとデータを確認する。間違いない、と。

「なんで……。どこでばれた……。？」

そのデータには、アースラの一部職員が自分を探していることが書かれていた。確かに文花を担当しているモノからのデータだ。ということは、文花からの何らかの情報だろうか。文花にも分かるようなことはしていないはずなのだが。

「ん……。？ デバイス？」

そう言えば、と思い出す。文花のデバイスのことを。暴走してしまったデバイスのこと。

あのデバイスは、何だったのだろうか。

少なくとも自分は知らないものだ。いずれ調べておく必要があるだろう。そう考え、一先ず身を隠すために一度ここを離れようと立ち上がったところで、誰かの冷静な声が届いてきた。

「悪いけど、貴方は用済み」

誰かの声。コウの目の前で、黒い塊がその声のもとへと帰って行く。コウが驚いて声の主を見て、

「な……。っ！」

驚きで固まってしまふ。どうして、いつから、という疑問が頭の中で渦を巻く。しかし声の主はそれを待つことはせず、黒い塊へと指示を飛ばした。

「やりなさい」

黒い塊が形状を変え、小さな槍となる。そしてその槍は、呆然としているコウの体へと突き刺さった。苦悶のうめき声をもらし、その場に倒れるコウ。声の主はすぐにきびすを返すと、その場から姿を消した。

後に残されたコウから、声が漏れ出る。なぜ、どうして、と。

「なんで……音奈が……？」

やがて、コウはその瞼を閉じて、意識を手放した。



## 第三話

「これで全部、かな」

シユウの部屋に段ボール箱が三箱運び込まれた。持ってきたのは男女二人組。シユウの両親だ。シユウは封を開けて中を見て、頼んでおいた教材であることを確認する。両親へと顔を向けて、言った。

「うん。ありがとう。助かったよ」

教材のことを忙しいであろうリンディに頼むのは申し訳ないと思つていたところだ。その点、両親なら遠慮無く頼むことができる。無論思うところはあつたが、背に腹は代えられない。

「分からないことがあればいつでも答えるから」

母親の言葉に、シユウは曖昧な笑顔を返すだけだった。

両親が帰つた後、シユウは荷物を使い部屋に運び入れた。普段使つていない部屋だった。今では魔法の教材や資料などが詰め込まれ、シユウの勉強部屋として機能するようになっていた。実際にここで勉強することも多いため、小さなちゃぶ台まで用意

したほどだ。

この模様替え、といつても教材の段ボールを詰め込んだだけだが、それは数日前から一気に行われたものだ。そのため、まだまだ整理もできておらずシユウ自身何がどこにあるのか理解できていない。今日もシユウは目的の教材を探して段ボールを漁ろうとして、

「……ん？」

それが、視界に入った。ただの錯覚、または見間違いかゴミだろうと考え作業に戻ろうとするが、どうしても気にしなってしまう。シユウは手を止めると、先ほど視界に入ったものを見ようと部屋の隅を見る。そしてそれは、すぐに見つかった。

影の中にあるので分かりにくくはあったが、それは黒いボールのようなものだった。持ち込んだ覚えのないそれが、部屋の隅に無造作に置かれている。

「……なにあれ」

レヴィかユーリ、もしかしたら文花が持ち込んだのか、一瞬その考えもあったが、即座に自分で否定した。ここはつい最近まで一切使用されていなかった部屋で、鍵がかけられたままだった。わざわざあの三人が入ろうとするとは思えない。

首を傾げながらも、シユウはそれへと手を伸ばす。その途端、黒い玉はシユウの目の前で浮かび上がった。ぎよつとして後退るシユウの目の前で、黒い玉がゆつくりと透け

始める。直感で捕まえないといけなさと感じてシユウが手を伸ばすが、間に合わないことはすぐに分かった。

そうシユウが諦めかけた時、頭に聞こえてくる声があった。

『いい加減目障りだね』

女の声だ。その声の直後、黒い玉は突然光の鎖に縛られた。シユテルたちが使ったものを見たことがあるが、バインド、というものだったはずだ。誰が、と周囲を見渡しても誰かがいるはずもなく、シユウは自分の右手を見つめた。小さく首を振って、黒い玉へと近づく。今度は消えることはなかった。

黒い玉を両手で包み込むように持ったまま、シユウは考える。これからどうしよう、と。魔法に詳しくない自分に名案が浮かぶわけもない。少し間途方に暮れ、隣人を頼ろうかなと考える。だが不意に思い出したことがあった。以前、クロノから緊急の時は連絡するようにと電話番号らしきものを受け取っていたのだ。これは緊急だと言えるだろう。この程度でと怒られるかもしれないが。

シユウは早速携帯電話の電話帳機能を開く。登録件数は二十もないのですぐに見つかった。とりあえず電話をかける。忙しいとは思うのですがすぐに出来ないかもしれない、と思っていたが、わずかに二コールで繋がった。

『シユウか！ どうした！』

かなり切羽詰まった声だ。電話をかけたシユウが逆に驚いてしまう。まさかここのでの反応を示されるとも思っていなかった。

「え、えつと……。ちよつと聞きたいことがあつて……」

『え？ あ、そうか……。いや、すまない。気にしないでくれ』

クロノが苦笑する気配が伝わってくる。シユウはそのことを不思議に思うが、とりあえずは気にしないことにした。

それでどうした、と言うクロノに、シユウは簡単な状況説明を行った。全てを聞き終えたクロノの反応は、無し。しばらく無言の時間が流れ、シユウがおそろおそろといった様子で名前を呼ぶ。

「クロノ……？」

それで我に返ったのか、相手が驚く気配が伝わってきた。

『すまない。すぐに迎えに行く。それを見せてもらつてもいいか？』

「あ、うん。もちろん。むしろ僕から頼みたいぐらいだし」

では後ほど、と通話が終わる。シユウは携帯電話をしまうと、何か様子がおかしかったなとしきりに首を傾げていた。

しばらくして自宅にやってきたクロノに案内され、シユウはアースラの休憩室に来ていた。休憩室の隅の席に座り、対面に座る人物を見る。リンディとクロノが神妙な面持

ちで座っており、もう一人、なぜか文花もこの場にいた。心配そうな瞳をしきりにシウウへと送ってくる。

「えつと……。どうして文花がここに？」

「お兄ちゃんから緊急の連絡がきたって聞いて、つい……」

文花が眉尻を下げて、申し訳なきそうに言った。心配してくれるのは嬉しいが、文花まで来るとは思っていなかったのでシウウは内心でかなり驚いていた。そしてすぐに何となくだが察することもできた。自分の知らないところでまた何か起こっているのか、と。

「貴方から預かった黒い玉は、今調べてもらっているところです」

そう切り出したのはリンデイだ。そちらを見ると、今までにないほど真剣な表情で自分を見つめていた。リンデイが続ける。

「その結果が出るまでに、伝えておかなければいけないことがあります」

そう前置きして聞かされたことは、文花が持っていたデバイスのことだった。デバイスの意思、体に乗っ取る術式などは、まあそれぐらいあるだろうとは思っていたことではある。誰が何の目的で、かは分からないまでも。だが、その後に聞いたことは全く予想していないものだった。

「デバイスに記録されていた所有者の名前は東江幸司。知っているわね？」

リンディの言葉にシユウは大きく目を見開いた。なぜここで親友の名前が出てくるのか。シユウが絶句したまま固まっていると、それを見かねたのかクロノが補足してくれる。

「この登録情報だが、まるで調べた人間に見つけてくださいと言わんばかりに分かりやすく明記されていたらしい。だから東江幸司が本当の持ち主なのかは実際には分からない。ただ、それでも」

——魔法の関係者であることは間違いないはずだ。

クロノの言葉に、シユウは黙ってうつむいた。誰かが一般人であるコウの名前を使つたのでは、と言おうともしたが、それはないとも思う。シユウと文花を狙った誰かが、たまたまただの生徒の名前を使った、などとは考えられない。シユウと親しい人を選んだとしても、シユウは交友関係は少ないながらも他にも友人はいる。たまたまコウが選ばれた、とは考えにくい。もちろんその可能性もあるのだが、コウが魔法の関係者と思つた方がシユウにとつてもしつくりくるものがある。

こればかりは推測をいくらしても仕方がない。そう判断して、シユウは携帯電話を取りだした。怪訝そうな表情を見せる三人に言う。

「じゃあ確かめよう。コウに電話してみるよ」

「な……………」

待て、と止める間もなくシユウが短縮番号を押して電話をかけてしまった。呆然と凍り付く三人をぼんやりと眺めながら、シユウはコウの明るい声が届くのを待つ。しかし、いつまで待ってもコール音が続くだけだった。

——なんだ……？

もちろん、本来なら不思議に思うことでもない。ただ用事があった、それだけのはずだ。しかしどうしてか、シユウの心を焦燥感が支配する。今すぐ彼の無事を確認するべきだと、シユウの心が叫んでいるようだった。

シユウは一度電話を切ると、出ない、と短く報告した。安堵する三人の前で、シユウは今度は学校に電話をかける。再び驚く三人を無視して相手を待つと、すぐに電話が繋がった。相手はシユウの担任だ。コウに電話が繋がらない、何か知らないかと口早に聞く。本来なら気にしすぎだと一蹴されるところなのだろうが、担任はわずかに驚いた気配を伝えてきた。そして、

「……………」

担任から聞いた言葉にシユウが絶句して目を見開いた。その反応に目の前の三人が眉をひそめるが、シユウは気にしていられない。礼を言って電話を切ると、クロノに叫ぶように言った。

「クロノ！ 病院に送って！ あとシャマルさんを貸して！」

「え？ あ、ああ……。連絡してみよう」

シユウの剣幕に押され、クロノは頷くしかなかった。

担任から聞いた話を簡単に纏めると、早朝、コウが学校の屋上で倒れているのが発見された。コウは腹部から血を流し、己の血だまりの中にいたそうだ。当然救急車が呼ばれ運ばれたが、現在も意識は戻っていない。曰く、未だに生きているのが不思議な状態、とのことだった。

「まるで狙ったかのような展開ね……」

シユウからその報告を聞いて、リンディは顔をしかめていた。そしてすぐに心の中で否定する。これは自分たちの責任だろう、と。どういった方法が取られていたかは分からないが、相手側には自分たちの動きが筒抜けだったのだろう。秘密裏にコウの搜索を始めたのだが、どうやらそれが相手に伝わり、コウを始末しようとした、と考えるべきか。

「一体これは、どういう状況なの……？」

推測するにはあまりに情報が少なすぎる。シユウを狙っていることは間違いないのだろうが、一体いつから、誰が、どんな手段を用いているのか、全てが分からない。リンディは小さくため息をつく、ブリッジのいすにもたれかかった。とりあえずはシユウに同行したクロノからの報告を待とう、と。



病院の一室。固く閉ざされた白い部屋、そのベッドにコウが横たわっていた。医者のお話を盗み聞いた話では、手を尽くした、もうできることはない、とのことだった。

現在、この部屋の周囲に人はいない。というより、この空間に人がいない。クロノがコウごと結界を張ったためだ。当然人の目がある場所だからとクロノはさすがに渋っていたが、シユウがしつこく食い下がると嘆息しながらも結界を張ってくれた。

はやてに連絡をして、そして急遽ここに来たシヤマルが治癒魔法を展開している。シヤマルの額からは汗が浮かび、その表情は悲壯一色。それだけで治癒魔法ですらどうしようもないと察しがつく。

「お兄ちゃん……」

文花の心配そうな声。シユウは瞼を閉じると、小さくため息をついた。

——なんて無力なんだ。

この親友は自分のために色々と動いてくれていた。どこまでが演技だったかは分からないが、そんなことはシユウには関係ない。コウには、直接言うことはないが、多大な恩を受けているを感じている。いつか恩返しをしたい、と。だが自分にはその親友を救うことすらできない。

——いや。

すぐにシユウは首を振った。あるじゃないか、と。今、ここに、自分がいるではない

か。

シユウはその場に座り込み、コウの手を強く握った。目を閉じ、強く念じる。相手はもちろんコウではなく、シユテルから聞いたことのある存在、自分の中、ギフトッドに宿る魂だ。

——お願いだ……。コウを助けて……。

誰も何も言わない。静かな静寂がその場を支配している。それでも、同じことを繰り返し何度も念じ、願っていると、誰かが小さくため息をつく気配が、周囲からではなく自分の心から聞こえてきた。

『生きているなら、まあ治療するぐらいはできるさ。でもね、自分で何をしようとしているか分かっているのかい?』

シユウにとつては初めて聞く声。しかも自分の中から聞こえてくる声に不思議な感覚を覚えてしまう。だが不快なものではなく、むしろ安心感すら覚えるものだった。その声に応えるために、シユウは再び心の中で言う。

——もう普通の生活には戻れない。コウのこともある。分かっている。それでも僕は、友達を見捨てることなんてできない。

『嫌になるほどまっすぐだね。誰に似たんだか……。まあ、今回はあたらしが引き起こしたことだ。手を貸してあげるよ。ただもう一つだけ忠告だ』

そこで声は一泊間を置いて、

『この願いを叶えたら、シユウの魔力がほとんど失われる。また、何かを引き寄せるよ』  
——気をつける。シユテルにちやんと、言う。

シユウの答えに、声は忍び笑いを漏らした。じゃあやるか、と柔らかい声音で言ってくれる。そして、自分の中から温かいものがあふれ出てきた。

『まあ、問題はすぐに会えるかどうか、だけどね』

その声は、シユウには届かなかった。

重体の患者が消えたことで大騒ぎになっている病院を後にして、シユウたちはアースラに戻っていた。医務室ではコウが眠っている。念のため精密検査をすることになっていた。

「自分でギフトテッドを制御できるようになったのか？」

コウの顔を見つめるシユウの背後、クロノがそう問うてくる。シユウは振り返ると、小さく首を振った。

「まさか。たまたま、応えてくれただけだよ」

「そうか」

それきり無言。静寂がその場を支配する。シユウが気まわず感じてコウへと視線を戻す。

コウと目が合った。

「あ……。目が覚めた？」

シユウが微笑んで聞くと、コウはしばらくシユウを見つめた後、おもむろに右手を腹部へと押し当てて。おそらく傷の有無を確認したのだろう、傷が消えていることを確認すると、コウは大きく目を見開いた。

「傷は、治したよ。それでコウ、聞きたいことがあるんだ」

「……あとや」

コウの掠れた声が耳に届く。シユウが首を傾げると、コウは突然体を起こすとシユウの胸ぐらを掴んだ。驚いたクロノが止めに入ろうとするが、シユウがそれを手で制する。

「シユウ。シユテルさんはどこや」

「えつと……。お仕事のはずだけど」

「今すぐ呼び戻せ！ 今すぐや！」

やはり魔法のことを知っている、と思うと同時に、何をこんなに慌てているのだろうかとも思う。慌て方が尋常ではない。傷が治っているといっても、体力までは戻っていないはずなのに。シユウがコウの剣幕に戸惑っていると、医務室のドアが開いた。そして駆け込んできたのは、ユーリだ。

「シュウ！ 大変です！」

シュウが振り返りユーリを見る。その表情は、今までにないほど慌て、怯え、恐怖しているもの。初めて見るその表情に、シュウは嫌な予感を覚えてしまう。

そして、嫌な予感というものは良くも悪くも裏切らない。

「シュテルが……捕まっちゃいました……」

そのユーリの報告に、クロノが驚きで目を瞠り、コウが遅かったかと肩を落とし、そしてシュウは言葉の意味が理解できず呆然と立ち尽くした。

## 第四話

アースラのブリッジ。そこにシュウの知る魔法の関係者が全員集まっていた。マテリアルルのはもちろん、なのはやフェイト、はやて、ヴォルケンリッターもいる。シュテルのことを聞いて駆付けられてくれたようだ。

そしてもう一人、コウがいすに座らされてぼんやりとしていた。特に何かをするわけでもなく、集まっている面々を興味深そうに眺めている。シュウがそんなコウの様子を観察していると、リンデイが口を開いた。

「初めまして、東江幸司君。私のことは知っていたりするのかしら」  
「アースラ艦長、リンデイ・ハラオウンやろ。もちろん知ってるよ」

すらすらと応えるコウ。リンデイは真剣な表情で頷き、続ける。

「まず君のことを聞きたいところなんだけど、他に問題ができたわ。貴方はどこまで知っているの？」

シュテル救出に向かう前に得られる情報があれば、と思つての問いだろう。コウもその意図を正しく察して、しかし首を横に振った。そして短く、知らない、と口にする。教

えない、ではなく知らない、だ。コウが嘘をついている様子もないので、今回の件については本当に知らないだろう。

残念そうな表情を見せるリンディに、しかしコウは続けて言った。

「でもまあ、これだけは分かる。今行っても無駄やで」

S i d e : S t e r n

シユテルは薄暗い部屋に監禁されていた。監禁といっても縄で縛られたりなど動きを封じることがはされていない。ただ単純に、この部屋に閉じ込められているだけだ。だが自力で脱出することはできないだろう。

この部屋には誰の魔法かは分からないが、初めて見る類いの魔法がかけられている。この部屋を結界が囲んでいるのだが、その結界が通常のものとは違うのだ。結界は二層構造となっており、層の間には魔法を無力化する空間があるらしい。一度砲撃魔法を撃つてみたが、一層目は破壊できても二層目にたどり着くことができなかった。

——せめて貫通できれば……。

そんなことを考えたが、シユテルはすぐに首を振った。自分の力で貫通できるものなら、相手はまずデバイスを置いていったりはしないだろう。デバイスを置いていったのは、シユテルの魔法ではどうすることもできないと理解させるためか。

シユテルは小さくため息をついて、その場に座り込んだ。無論諦めるつもりはない。現在の手札で脱出する術を考える。思考の海に沈もうとしたところで、シユテルは外からの足音に顔を上げた。部屋の扉が開かれ、人が入ってくる。見覚えのある顔に、シユテルはわずかに目を瞠った。そこにいたのは、以前シユウと共に翠屋を訪れた少女だ。確か、音奈といった名前だったか。なぜここに、と思っていると、音奈が薄く嗤う。

「こんにちは、シユテルさん。私のこと、覚えてる？」

音奈からの問いに、シユテルは静かに頷いた。忘れたくても忘れられない。

「以前、シユウと一緒に翠屋に来ていましたね。まさか魔法の関係者とは思いませんでした」

「ふふ。無事に隠し通せたみたいで良かったよ」

音奈は楽しげに微笑むと、ゆっくりとシユテルへと近づいてくる。シユテルがデバイスを向けると、音奈はすぐに立ち止まった。

「私を捕まえてどうするつもりですか？」

デバイスを下げてシユテルが聞く。その行動に音奈が少し驚きながらも、質問には答えてくれる。

「貴方には、紫天の書には用はないよ。私に必要なのは、ギフトッドだけ」

そう前置きして、音奈は教えてくれた。管理局の上層の人間がギフトッドを欲してい



ること。願いを叶えてもらうためにはシユウに自発的に叶えてもらわなければならぬ。それ故に、シユウの弱みとなり得るシユテルたちに目を付けた、言うなれば、捕らえられたシユテルはシユウを動かすための鍵のようなものなのだろう。

「だから大人しくしてね。大丈夫、悪いようにはしないから」

音奈はそう言つて微笑むと、きびすを返した。そのまま部屋を後にする。シユテルはその背へと今一度デバイスを向けるが、

「……………」

一瞬シユウの悲しげな表情が頭をよぎり、力なくデバイスを下ろした。

Side: Hero

「二層の結界に、層の間は魔法の無効化、か」

ディアーチェのつぶやきに、コウが頷いた。

「そや。ただ完全な無効化やなくて、魔法を急速に消してしまう空間、やな」

それは厄介だな、とディアーチェは難しい表情をする。シユウも何となくだが理解することが出来る。魔導師が攻めたとしてもシユテルを助けることは難しく、一般人でも魔導師の相手にすらならない。

「ユーリの力ならどう？」

レヴィが聞いて、しかしダイアーチエは首を振った。

「確かにユーリなら、とは思うが、逆に出力が大きすぎる。助けるべき相手も巻き込むだろう」

「そっか、とレヴィが項垂れる。そのレヴィへとさらに言う。

「それ以前に、まず我々は敵がどこにいるのかも分からないのだが」

「あ……」

シユウは彼女たちの話し合いを黙って聞いている。

現在、ブリッジのメンバーは二つに別れていた。一つは、シユテル救出のためのメンバーだ。そしてもう一つは、リンデイとコウのグループ。コウの素性や相手の目的を知るために、コウへと質問が続けられていた。

「つまり黒幕は管理局の上層部の人間、と?」

「そう。俺らはその人が雇っている人間に、さらに雇われている人間、やな。だから俺や音奈をいくら尋問してもその人にはたどり着かれへん」

そんなコウを見ながら、シユウは器用だなと思う。コウはリンデイからの質問に答えつつ、ダイアーチエたちの質問にもしつかりと答えていた。両方の話を聞いているということだろう。シユウはダイアーチエたちの方へと意識を向けながら、コウの話も軽く聞くように努めるのが精一杯だ。ただ、どちらの話にもシユウが加わることができない

ので、双方を理解するだけなら何とかかなりそうではある。

コウ曰く。黒幕が雇っている科学者が、シユウの両親がギフトテッドについて調べていることを知り、その身边を調べてシユウに目星をつけたそうだ。そしてシユウの転校先に先回りしてコウを送り込んだ。そして何らかの魔法による黒い玉を預かり、ずっとシユウを監視していたらしい。シユウに生きる目的ができ、弱みが出てくるまで。

「……じゃあどうして報告しなかったの？　僕がシユテルと知り合ったのって、一年近くも前だけど」

コウがそこまで話したところで、シユウが声をかけた。コウはシユウと視線を合わせると、気まずそうに目を逸らす。

「情が移った、は変かもしれないけど……。俺はシユウを友達やと思ってる。友達を売ることなんてでけへん。せやから、俺一人が胸の内黙っておけばいいと思ってたんや」  
それすらあちらさんはお見通しやってみたみたいやけど、とコウが苦笑する。シユウは、そっか、と淡く微笑んだ。

「僕もコウのことは大切な友達だと思ってるよ。今までも、もちろんこれからも」  
「……はは。ありがとな」

コウが顔を伏せ、シユウはコウから視線を逸らした。あまり見られてほしくないだろう、と思つたためだ。見てしまえば、シユウも反応に困ってしまうからだ。……涙な

ど。

コウが落ち着いたところで質問が再開される。コウの身元に関してだった。聞くところによると、コウは孤児で、雇い主である科学者に拾われたそうだ。そこで様々なことを仕込まれていたらしい。そんなこともしてるんだ、と思わず漏らすと、もちろん禁止事項に決まっているだろう、とクロノがため息をついていた。

「俺と同じ人に拾われてるなら、音奈も似たり寄つたりの境遇やろうな。俺は音奈を見たことがなかったけど。いや、俺が覚えてないだけかな」

俺が話せるところはこの程度、とコウが言い終わる。シユウはそこで意識をディアーチエたちに戻した。こちらの問題は単純だが、難しい。

二層の結界をどうするか。救出そのものの方法は。それ以前に場所は。と、なかなか多い。

「場所に関してはいずれ分かるだろうな」

そうディアーチエが漏らすと、どういうこと？ とはやてが首を傾げる。

「目的がシユウの力であり、弱みを握ることなら、いずれ向こうから連絡を入れてくるだろう、だが、それを待っていては手遅れになるやもしれん」

「一度駆体を放棄するというのは？」

「あれは我らの負担も大きい。それに脱出そのものはできんだろう」

どうして？ とシユウが首を傾げると、デアーチエがコウへと指を指す。コウがわずかに驚いて身をすくませる。

「こやつのお話を信じるなら、結界の層の間では魔法が、魔力が消えてしまいうらしい。駆体を放棄して脱出しようとしても、消滅の危険性がある」

「じゃあやつぱり、私たちが助けられないといけないんだね」

なのはの言葉に、デアーチエは重々しく頷いた。しかし方法が、と話が戻ってしまふ。

シユウはしばらくそれを聞いていたが、どうやら解決方法は簡単には出ないらしい。躊躇いを覚えたが、今回ぐらいは助けてもらおうと再び心の中で念じた。

『あたしに何を期待してるんだい？ 今回は助けられないよ』

すぐに返答があった。自分の中から聞こえる声に苦笑して、シユウは言う。

——そんなこと言わずに。協力してください。

『今回解決して、次はどうするんだい？ 黒幕を捕まえることはできないんだらう？』

捕まえられたとしても、あんたがいる限りあの娘たちは確実に巻き込まれるよ』

巻き込まれる、と聞いてシユウは胸が苦しくなった。

今回のことは、全て自分が原因だ。シユテルは自分と親しくしていたからこそ巻き込まれた。自分が一人で生き続けていれば、こんなことにはならなかつたはずだ。そこま

で考えて、シユウは首を振った。

——選択の時は過去のことだ。今は今の最善を尽くす。

『いい心がけだ。でも繰り返されるって言ってるんだよ』

心の中の声が苛立ちを隠さずに、静かに告げる。だからこそシユウは、言った。自分の計画を。

『……本気かい？』

——最終手段、だけど。

『まったたく……。仕方のない子だね』

楽しげに笑う心の中の声。どうやら納得してもらえたらしい。シユウは小さく、ごめん、とだけ告げた。

『何を謝っているのやら。じゃあ早速済ませてしまおうかね。始めようか』

声は楽しくてたまらないといった様子だ。シユウも思わず笑みをこぼし、始めよう、とつぶやいた。

「シユウ……？」

目を開けたシユウを、レヴィが戸惑いながら呼ぶ。シユウはレヴィを見ると、どうしたの？ と首を傾げた。よく見ると、レヴィの周りにいる皆が驚きからか目を丸くしている。

「それは……なに？」

フエイトの声だ。何のことかと首を傾げて、自分の体を見て、すぐに得心がいった。淡い光がシユウを包み込んでいた。そして同時に流れ込んでくる膨大な知識。管理局が有する技術力すら超えた、滅びた世界の知識だ。シユウはそれに思考を傾けながら、悲しげに目を伏せた。

最初の願い。それは、データベースの知識、そしてカートリッジの知識が欲しいというものだ。シユウが望んだものが、望んだ以上のものが流れ込んでくる。情報量を考えると一度に覚えられるはずのないものだが、不思議と最初から知っていたような、そんな感覚を覚える。

——本来なら……自分の力で覚えなかったことなだけど……。

今はもう、そんなことは言っていられない。自分の欲などどうでもいい。シユテルを助けることが最優先だ。

やがて光が収まり、知識の吸収も終わった。あまりに膨大な知識にシユウは思わずため息をこぼす。これが終わったら、可能な限り忘れてしまふべきものだろう。

「シユウ、大丈夫か？」

「説明してほしいところやけど……。無理したらあかんぞ？」

デИАーチエとはやての言葉に、シユウは笑顔で頷いた。

——さあ、始めよう。

「ユーリ。ちよつといいかな」

シユウが呼ぶと、ユーリが困惑しながらも頷いて自分の方にやってくる。ありがとう、と礼を言つて、次はディアーチエとレヴィも呼んだ。やはり二人とも困惑しながらも来てくれる。それだけ信頼してくれているのだろう。今はそれが、純粹に嬉しい。

「シユウ。何をするんですか？」

ユーリがかわいらしく小首を傾げる。シユウはそんなユーリへと不敵な笑みを浮かべた。

「シユテルを助ける。そのための道具を作る。手伝つて」

それを聞いた三人が、その場にいた全員が、ぽかんと口を開けていた。

S i d e : H u m i k a

貸し与えられた一室で、シユウは作業を進めていた。手伝うのはレヴィにディアーチエ、ユーリだ。文花はそれを、部屋の隅で見守っていた。リンデイとクロノ、なのは、フェイト、はやても静かに見守っている。全員が驚愕に目を見開いていた。

シユウは迷いなく手を動かし、一つのカートリッジを作っている。そのカートリッジはリンデイやクロノですら知らない技術で作っているようで、曰く現在のカートリッジ



よりも膨大な魔力を込めることができるらしい。そんなことを聞いたが、その方面に明るくない文花にはよく分からなかった。

カートリッジに込められるのは手伝っている三人の魔力だ。ゆつくりと、かつ膨大な量の魔力を込めていつている。

「すごい魔力ね……。一体何発分のカートリッジになるのかしら」

「想像もできませんね……」

リンディとクロノがつぶやく。それほどなのか、と文花は感心するばかりだ。

やがて作業が終わったのか、シユウたち四人が動きを止めた。そしてシユウが、作り終えたカートリッジをつまみ、手のひらに載せる。文花たちの視線に気がつく、シユウが無邪気な笑みを浮かべて自慢げにそれを見せてくれた。

赤い色の弾丸だった。シンプルな弾丸で、文字などは刻まれていない。先ほどまで見ていたものが間違いないのなら、この小さな弾丸にあの三人の魔力が込められているということだろう。あまりに強力で、あまりに危険なカートリッジだ。

「それをどこで使うの？」

なのはが聞いて、シユウは悪戯っぽく笑う。そして、弾丸を自身のポケットに入れた。それを見て怪訝な表情を見せる面々にシユウは告げる。

「ちよつとシユテルに会ってくるよ」

とびきりの笑顔で、まるで遊びに行くかのような気楽なものだった。

## 第五話

——それじゃあお願い。

『ああ』

皆が呆然としている前で、シユウが静かに目を閉じる。そして、何の前触れもなく、忽然とシユウの姿が消失した。

Side: Stern

油断をしていたわけではない。ただ、まさかこんな大規模なことをされるとは思っ  
てはいなかった。

今回受けた仕事は、ある無人世界の調査だ。そこには誰も住んでおらず、動物すらほとんどのいないとされている世界。それなのに、最近になって魔力が検出されるようになったそうだ。そのためシユテルを含む魔導師数名で調査をすることになった。

五人一組で調査を進めた結果は、特に異常なし。検出された魔力というものが何なのかも分からなかったが、一先ず報告に戻ろう、という頃になって、それは突然起こった。

唐突に、一人が撃墜された。体を打ち抜かれ、墜ちていく仲間。慌ててそれを別の誰かが助けようとして、その人間も撃たれた。どこから撃たれたかも分からない狙撃に、場が混乱してしまう。だがシユテルは冷静に弾の軌道を分析し、そちらへと杖を向けた。何も見えないが、何かしらのステルスの可能性を考慮して砲撃魔法を撃とうとしたところで、

「お前がシユテルだな？」

背後からの声。ゆっくりと浮かび上がる大勢の魔導師。その全員が、シユテルへと杖を向けていた。

「共に来てもらおう」

抵抗しても無駄だと悟り、シユテルはため息をついて手を上げた。

捕まった時のことを思い出し、シユテルは考える。やはりあれは待ち伏せされていたと見るべきだろう。自分があの世界に行くことを知っていた誰かによって。

——違いますね。

そもそもこの依頼が仕組まれていたのかもしれない。この依頼は全てのメンバーが名指しで指名されていたらしい。ならば、この依頼を出すことのできる人物、ということか。そこまで考えたところで、シユテルは小さく首を振った。今考えるべきことはそれではない、と。

シユテルは正面の壁を見る。小さくない穴があいた壁。シユテルの砲撃魔法によるものだ。物は試しとカートリッジを一つ消費して砲撃魔法を撃つたのだが、壁に穴を空けることはできても結界は一切破壊できなかった。結界が損傷した形跡もないので、今のシユテルの魔法では脱出は難しいだろう。

やはり犯人グループとの交渉か、とも思うが、音奈が訪れたきりここには誰も来ていない。交渉をする機会すら与えられなかった。あちらもシユテルの意図など把握しているのだろう。独力での脱出は難しいと見るべきだ。

シユテルは肩を落とすと、その場に座り込んだ。今頃王たちはどうしているだろうかと考える。自分の現状はすでに把握されているはずだ。助けようとしてくれているだろうか。

家族の顔を思い浮かべようとして、真っ先に思い浮かんだのはシユウの笑顔だった。そのことに内心で驚き、思わず苦笑してしまう。その記憶に寄り添い、シユテルは小さく声を漏らす。

「シユウ……」

会いたい。帰りたい。そう強く思う。だが、自分ではどうすることもできない。彼に心配をかけるわけにはいかないと思っても、今となってはどうしようもない。

「シユウ……」

もう一度、名前を呼ぶ。大切な名前を、呼びかけるように。助けを求めるかのように。だが返事があることなど当然期待していない。

だから。

「呼んだ？」

頭上からその声が降ってきた時は、自分の正気を真つ先に疑ってしまった。

Side: Hero

転移した場所は狭い部屋だった。コンクリートのようなもので四方を固められた部屋で、何もない殺風景な部屋だ。テーブルもなければいすもない。家具の一つもない部屋。目につくのは、背後の扉と壁に空いた穴ぐらいか。

だからこそ、視線を少し巡らせばすぐに探している少女を見つけることができた。床にうずくまり、うつむいてしまっている少女。初めて見る弱々しい姿に、シユウは心の底から驚いた。すぐにシユテルへと駆け寄り、

「シユウ……」

シユテルの声。自分を呼ぶ、弱々しい声。シユウはシユテルの前で立ち止まると、柔らかに微笑んだ。

「呼んだ？」

そう声をかけた瞬間、シユテルが勢いよく顔を上げる。シユウを見て、ただただ啞然としていた。

「シユテル。無事で良かった」

そう言つて、身をかがめる。未だに呆然としているシユテルを、そつと抱きしめた。

「会いたかつたよ、シユテル」

「……シユウ……」

シユテルのか細い声。シユテルの手が、シユウの背に回される。シユテルの体温をしつかりと感じている間に、シユテルが言った。

「シユウ。どうしてここに？」

「え、立ち直り早いよ。もうちよつとこう、感動の再会、とか」

引きつった笑みを浮かべるシユウに、シユテルは首を傾げた。何を言っているのか、と。

「貴方に会えて嬉しくは思いますが、まずは脱出しなければ」

「……はい、正論です。その通りです」

もつと熱い抱擁とか、そんなものを期待していたシユウは一人で肩を落とす。心の中で誰かが無遠慮に爆笑している気配が伝わってくるが、それは無視してもいいだろう。

「シユウはどうやってここに来たのですか？」

そのシュテルの問いに、シユウは今までの経緯を簡単に説明した。コウのこと、音奈のこと、そしてギフトッドに願ったことなど。シュテルは黙って全てを聞き終え、なるほどと頷いた。

「貴方が願ったことは、つまり……」

「うん。シュテルのところに行きたい。ただそれだけ」

「そんな単純な願いで、境界すら無視してここに来れたわけですか……」

自分でも本当にこんな側まで転移できるとは思っていなかったので、内心ではかなり驚いている。危険視されるのも無理からぬ話だ、と。

「脱出もお願いできるのでしようか？」

シュテルが聞いて、シユウは悲しげに首を振った。

「ごめん。さすがにもう無理だって。転移の魔力なんて残ってないらしい」

「そう、ですか」

シュテルは肩を落とす。そんなシュテルを見て、シユウはシュテルの手を取った。シュテルの手に、持参したカートリッジを渡す。シュテルが握らされた赤い弾丸を見て、怪訝そうに眉をひそめた。

「これは……？」

「うん。ダイアーチェとレヴィ、それにユーリの魔力をありったけ詰め込んだカート



リッジ。ギフトッド特製カートリッジだ！」

胸を張って自信満々に言う。これを一番見てもらいたかったのは、実はシユテルだ。嬉しそうに言ったシユウに、シユテルはしかし戸惑いを見せた。

「普通のカートリッジ、ではありませんね。どうやってこれを？」

「うん。デバイスとカートリッジの知識をもらって、それで作ったんだよ」

結構難しかった、とシユウが頬をかきながら言う。シユテルは受け取った弾丸をしばらく見つめ、赤いですね、と短い感想を漏らす。シユウは目を逸らし、

「色はなんでもよかったんだけど……。せつかくだから、シユテルのイメージで作ってみた」

「………そうですか」

それきりお互いに黙り込む。妙な沈黙で、シユウは気恥ずかしさすら覚えていた。しばらくそんな空気を味わったところで、耐えかねたシユウが口を開く。

「そ、それじゃあ！ それなら多分この結界も破壊できると思うから……！」

「そうですね。試してみましよう」

シユテルの声はいつも通りだったが、どこか安堵のようなものを感じた。シユテルがルシフェリオンへ赤い弾丸を装填、ロードし、同時に魔法も展開する。

「………っ！」

シユテルが大きく目を見開いた。その反応に不安を覚えるシユウだが、シユテルに腕を掴まれ引つ張り寄せられる。戸惑うシユウへと、短く一言。

「側にいてください。おそらくですが、かなり危険なことになると思います」

「了解……」

照れも何もなく真顔で言われると、さすがにシユウも本当に危ないのかと察しがついた。シユテルの背後に回り、その体を支えるように寄り添う。

「集え明星。全てを焼き消す焰となれ……」

目の前で魔法陣が展開される。赤色だった魔法陣は、すぐに様々な色が混ざり始めた。魔法陣の前に巨大な光の球が形成され、それも赤や青、紫、黒など変色を続けている。感嘆のため息をつきながらそれを見ていたが、ふとシユテルを見ると、真剣な表情で汗を一筋垂らしていた。

「シユテル。大丈夫？」

シユテルが無言で頷く。シユウは少し考え、シユテルを支えるためにシユテルと一緒に杖を掴んだ。驚くシユテルに、短く告げる。

「一緒にいるから。少しでも、手伝うから」

シユテルが目を細め、ありがとうございます、と口を動かした。

その時だった。部屋の扉が勢いよく開き、少女が駆け込んでくる。シユウの知ってい

る顔だ。

「一体何を……！ 西崎君、あなたいつの間に！」

音奈がシユウに気づき、驚愕に目を見開く。シユウはそんな音奈に、悪戯っぽく笑いかけた。

「今さっき。あと音奈さん、これだけ言っておくよ」

「なに！」

「ざまあみろ」

その言葉の直後、音奈の叫び声やシユテルの苦笑をかき消して、閃光が爆発した。

「これはまた……派手にやったわね……」

眼前に広がるのは瓦礫の山。アースラ所属の魔導師たちが瓦礫の山の下敷きになっている人を救助、拘束していく。シユウとシユテルはその様子を、瓦礫の真ん中で眺めていた。いつの間にかリンデイが側まで来ていて、先の一言はリンデイのものだ。

「貴方たちは、無事？」

リンデイが心配そうに聞いてくれる。シユウは頷いて言う。

「死にかけました」

「でしようね……」

苦笑して、リンデイが手を振り始めた。何事かとリンデイの見る方向を見やれば、

ディアーチエたちがこちらへと走ってきていた。

「無事か！ シュテル！ シュウ！」

ディアーチエの第一声がそれだった。シュウとシュテルは顔を見合わせ、二人で笑う。怪訝な表情をするディアーチエに、シュテルが言った。

「無事ですよ、ディアーチエ。ご心配をおかけしました」

「そ、そうか……。いや、心配などしれおらんがな。うむ、無事ならば、いい」

わずかに顔を赤くしながらディアーチエがそっぽを向く。素直やないなあ、と後ろのはやてがからかい始め、ディアーチエがはやてへと怒鳴り始める。

すぐにレヴィやユーリたちも来て、シュテルとの再会を喜び始めた。

そして、

「……………」

全員が一齐に反応し、防護魔法を展開する。結果として何重にもかけられたプロテクションによって、突如飛来した黒い槍は弾かれた。全員が同じ方向へ杖を構え、相手を見据える。そこにいたのは、音奈だった。自身の周囲に黒い球体をいくつも従え、シュウを静かに睨み付けている。

シュウも見覚えがある黒い球。シュウの部屋にあった黒い球は、どうやら音奈の魔法だったらしい。

「諦めないよ……。絶対に、諦めない……」

音奈の言葉。全員が音奈の言動を警戒している中、シユウはただ一人眉をひそめていた。何をこんなに焦っているのだろうか、と。ここで向かってくるよりも一度逃げた方がいいのでは、と。

「音奈」

音奈のさらに向こうからの声。コウがのんびりとした足取りで歩いてくる。音奈はコウの姿を認めると幽霊でも見たかのような表情をしたが、すぐに何かを理解したのかまたシユウを睨み付けてきた。

そんな音奈の様子にコウは笑う。やっぱりか、と。

「音奈、お前、報告したな？ あのマットに」

「……………」

「どうせあのマットのことやから、条件が揃っているならさっさと奪え、今すぐだ、とかそんな無茶なことを言ったんやろうな」

音奈が顔を伏せ、小さく頷いた。それを見てコウがやれやれと首を振る。未だに状況が飲み込めない一同へと、コウが口を開いた。

「俺らの雇い主はちよつとあれな人でな。有能な人間以外はいらんって考える人や。失敗した人間を面倒見るなんて、あいつはせえへん」

俺も殺されかけたやろ？ とコウが笑い、シユウは反応に困って曖昧に頷いただけだった。

「だからまあ、失敗は許されへん。だから音奈は、今ここでギフトッドを手に入れる必要がある。自分の命のためにも、な」

そっか、とシユウは納得する。どうにも計画がその場の勢いであつたような気がしたが、事実主犯である音奈が焦っていたらしい。さすがにかわいそうだと思つてしまふが、

「シユウ。気にする必要はない。あちらの事情であつて、君が身を投げ出す必要はないぞ」

そう言ったのはクロノだ。音奈へと向き直り、言う。

「捜査に強力してくれるなら、君たちの身の安全は保証しよう。さすがに無罪放免とはいかないが、善処はする。だから……」

「無駄やな」

「無駄ね」

クロノの言葉を遮って、コウと音奈が同時に言った。クロノが顔をしかめるが、二人ともそんなことは一切気にしていないようだ。

「言うたやろ？ 俺らの雇い主の雇い主は管理局の上層部やて」

「理由をつけられて引き渡されるのが目に見えるね」

音奈が言うのと、そうやでな、とコウが笑う。音奈もうつつすらと微笑を浮かべた。ただそれは、全てを諦めた者の表情だ。

「まあ、もう……。負けたことは分かっている。投降します」

音奈が黒い球体を消して手を上げる。クロノが、念のためだと言ってバインドをかけたようにして、

「だめだ」

シユウの一言がそれを止めた。訝しげに眉をひそめ、クロノがシユウを見る。シユウは静かにコウと音奈を見据えていた。二人が困惑の色を見せる。

「やっぱり僕の……。ギフテッドのせい、なんだよね」

シユウの一言にコウと音奈が言葉を詰まらせる。目を逸らしはするが、否定はしてこない。シユウは、そうだよねと一人で何度も頷いていた。

「シユウ？」

シユテルの気遣うような声に、シユウは言った。

「やっぱり、ギフテッドは消える必要がある。だから、やっぱり消しちゃおう」

その一言に、その場にいる全員が息を呑んだ。

付近一帯から人の気配がしなくなる。無人世界に残されたのは、シユウとシユテル、

レヴィ、ディアーチエ、ユーリのみだ。他の人にはこれからすることを伝え、アースラへと一時的に戻ってもらっている。もしこの世界を超えて被害が出るようなら、それを処理してもらわなければならない。

シユテルたちはシユウを囲むようにして立っている。それぞれがデバイスを持ち、臨戦態勢となっていた。ただ、相手は人ではないのだが。

「シユウ。本当にやるのですね？」

シユテルが聞いて、シユウが頷く。

「うん。もちろん」

「分かりました。貴方の意思に従いましょう」

「ありがとう」

礼を言うと、シユテルが小さく手を振ってくる。周囲を見ると、他の三人も手を振っていた。いい出会いに恵まれたことに感謝しつつ、シユウは目を閉じる。始めるよ、と四人に告げて、心の中で念じる。

——じゃあ、お願いします。

『はいはい。任せておきな。あんたらもそつちはがんばりなよ』

声が面倒くさそうに言った直後、シユウが、ギフテッドが魔力の吸収を始める。最後の願いを叶えるために。必要な魔力はあまりにも多く、そしてやはりこの世界へと魔力



の塊が飛来し始めた。

それを見たシユテルたちが行動を開始、飛来してくるものが魔力を帯びただけのただの物体ならシユウへの軌道から少し逸らし、ロストログアなら魔力の吸収が済んだところで即座に封印する。これを繰り返すだけだ。ただし、いつ終わるのかが分からない。シユウはその間何もできず、四人の奮闘を見守ることしかできない。

シユウが願ったことは、単純なものだ。

『全ての世界からギフトッドに関する記録の抹消』

『全ての世界の人々から、ギフトッドに関する記憶の抹消。ただし親しい人は除く』

『コウと音奈の経歴の抹消。地球での生まれとする』

この三つだ。三つ目はともかく、前者二つが世界規模であるため要する魔力も膨大になる。故に必要な魔力の吸収のためにこうした方法を取っている。

シユウは四人の行動をぼんやりと眺めながら、心の中で言う。

——色々と無茶を言っごめんなさい。本当にありがとう。

それを聞くと、声は呆れたようなため息をついた。なら初めから頼むな、と。

『まあ、気にする必要はないさ。でも今回が最初で最後だからね』

——うん。分かっている。

『あたしも、この願いを見届けたらちよつとばかり眠るよ』

だから起こすなよ、と言われ、シユウは苦笑しながら頷いた。約束する、と答えると、声は満足そうに頷いたようだった。気配でしか分からないが。

さらに時間が流れる。時計がないので時間の感覚はないが、かなりの時間が経過したはずだ。時折、シユテルたちはなのはたちと交代して休憩しつつ、シユウの護衛を続けてくれている。シユテルたちの何回目かの休憩が終わったところで、声が届いた。

『こんなもんで十分だ』

その言葉を最後に、突然周囲が静かになった。見ると、もうこの近辺に飛来するものがなくなっているようだ。シユテルたちが戸惑いを見せながらこちらへと振り返っている。

『じゃあ、始めるよ。いいね?』

——うん。お願いします。

『はいよ』

シユウの体から、魔力のようなものがふわりと広がり始めた。不可視のものなので感じることはできないが、それは一気にこの世界を覆い、そして別の世界へと広がっていく。これが終わる頃には、シユウの願いは叶えられているのだろう。

——まだ、起きてる?

シユウが問いかけると、声が返答する。ただ、どこか眠たげな声だ。

『ああ、起きてるよ……』

——シユテルから聞いたんだけど、精神世界、みたいなのがあるんだよね。デバイスのこと、直接教わりたかったよ。……母さん。

声息を呑む心配が伝わってきた。しばらく沈黙が流れ、やがて声が忍び笑いを漏らす。眠たげで楽しげな、そんな笑い声だ。

『あなたにはもう十分教えたさ。やり方は不本意極まりないが、まあ仕方ない。あとはがんばんなよ』

——うん。ありがとう。

『気にするな。あと、あなたの今の両親を大切にしなね』

それを聞いたシユウが、善処するよ、と答える。だがもう、声は返ってこなかった。そのことに寂しさを覚えながらも、シユウは顔を上げる。

「シユウ。終わりましたか?」

いつの間にか目の前にいたシユテルに、シユウは頷いた。

「うん。終わったよ」

もうギフトッドを知る者は、シユウと親しい者を除いて誰もいない。知る術もない。それでいい、と思う。本来なら、もっと早くにこうするべきだったのだから。

「では、シユウ。手を」

シユテルに促され、シユウは手を差し出す。握られた手から魔力を受け取り、シユウは薄く微笑んだ。

「ありがとう。じゃあ、帰ろうか」

「はい。そうですね」

シユウはシユテルたちと、破壊の爪痕が生々しく残る無人世界を後にした。

その日を境に、様々な世界のいくつかの書物から空白のページが生まれた。そのページに何が記載されていたのか思い出せる者はなく、知識として知っていた者も突然生まれた記憶の空白に混乱してしまう。だが、数日もすれば、なぜか自然とそれはそういったものだった、と認識され、忘れ去られていった。

S i d e : P a s t

パストはゆつたりと闇の中を漂っていた。心地よい微睡みの中、息子たちの様子を守る。いつものように起床して、学校へ行き、そして帰ってシユテルたちとの夕食を楽しむ。そんな日々を、パストは穏やかな笑みを持って見守り続ける。

「さて、それじゃあ……眠るとしよう」

パストはつぶやき、深い眠りへと落ちていく。あの子の平穩のために、ギフトドの力を封じる楔となろう。いつかまた、新たな願いが届けられるまで。願わくば、それまであの子たちが平和に、平穩に、ただただ静かに暮らせますように。

だからおやすみ、私のかわいいギフト。

## エピローグ

桜が舞い散る季節。そこはちよつとしたお祭りだった。大きな桜の木の下に、これもまた大きなビニールシートを広げ、知り合いたちが騒いでいる。誰もが笑顔で、とても楽しそうだ。ここはシュウのマンションの側にある公園だ。皆で花見をすることになり、ここに集まっている。

「シュウ、どないしたん？」

声をかけてきたのは、コウだ。少し離れたところには音奈もいて、こちらの様子をうかがっていた。

「いや、楽しそうだなって。コウたちは今の生活には慣れた？」

「ああ。シュウのおかげでな」

現在、コウと音奈は西崎家の養子となつている。シュウの両親は二人を喜んで迎え入れていた。我が親ながら心が広すぎると思う。もう少し、自分に対してもそれができなかったのかと思うほどには。

そんなことを思っているシュウも、今は両親と少し歩み寄っている。パストの言葉があったためでもあるが、きつとパストは、今の両親と不仲のままなのを心配していたの

だと思う。

「お兄ちゃん、何してるの?」

コウの奥、文花が怪訝そうに眉をひそめる。そんな文花に、音奈が言う。

「邪魔しちゃだめだよ」

「何が……。あ、はい。分かりました」

音奈の言葉に首を傾げた文花だったが、シユウの背後を見て得心したように頷いた。コウもすぐに、じゃあまたな、ときびすを返してしまう。シユウ一人わけが分からないままだ。

文花は現在、シユテルと、さらになのはからも魔法を教わっている。管理局に入局するつもりはないらしいが、嘱託魔導師としてなら悪くないかも、とのことだった。文花にとって自由に動き回れるのは魔法を使っている時だけなので、魔法を使えるようなところで働きたいのだろう。シユウは文花の足を見て、静かに顔を伏せた。

「シユウ。ここにいましたか」

背後からの声。振り返ると、シユテルがそこにいた。

「こちら準備が整いましたよ」

そう言つて歩き始めるシユテルに従い、シユウも歩く。そしてたどり着くのは、小さな桜の木の下だ。小さなビニールシートが敷かれ、そこにはディアーチェとレヴィ、

ユーリがいた。

「遅いよ、シユウ！」

ごめんごめん、と笑いながらシユウはシートに上がった。いつもの夕食と同じような順番で座る。五人の中央には、様々な弁当箱が並んでいた。

「今回は上手に焼けました！」

そう言つてユーリが弁当箱を差し出してくる。その中には、こんがりと美味しそうに焼けているハンバーグがあつた。たつぷりとケチャップもかけられている。シユウはそれを一切れもらい、口に入れた。

「うん。すごく美味しい。がんばったね、ユーリ」

「はい！ がんばりました！」

褒められて嬉しそうなユーリ。その笑顔を見ると、こちらにも幸福感に包まれる。

次はボクだ、とレヴィが差し出してくるのはカレーだ。弁当箱に、と思いながらも一口耐え、シユウは目を丸くした。

「冷めても美味しいものだね……」

「でしょ！ もつと食べてもつと食べて！」

興奮してスプーンを突き出すレヴィを苦笑しつつ宥める。いつものことながら、やはりレヴィは今日も元気だ。



「さて、私の番だ」

そんなレヴィを無視してディアーチエが言う。そして差し出された弁当箱には、オムライス。まだ温かく、どうやら先ほど作ってきたところらしい。冷めぬうちに食せ、と促され、シユウはオムライスにスプーンを入れる。半熟卵がとろりとご飯にかかって、とても美味しそうだ。

「うん……。すごく美味しい。いや本当に。さすがディアーチエ」

「まあ、これぐらいは当然だ」

そう言いながらも、ディアーチエは顔を赤くしてそっぽを向いた。どこか胸をなで下ろしているようにも見える。

「では最後に私ですな」

シユテルが差し出してきたのは、ホールのショートケーキだ。それを五等分に切り分け、全員に配る。レヴィとユウリが歓声を上げ、その反応にディアーチエが呆れてしまっている。

どうぞ、とシユテルに促され、シユウは一口食べてみる。桃子に習っているだけあり翠屋に近い味となっているが、シユテル独自の工夫もあるのかしつかりと区別のできる味だ。

「うん……。全く問題ないね。さすがシユテル。ところでおかわりは？」

「いや待てシユウ。さすがにないだろう」

「こちらに」

「あるのか！」

「ディアーチエがシユウへと苦言を呈し、シユテルが平然と二ホール目を取り出してディアーチエが今度は驚く。その様子がおかしくて、シユウも柔らかく笑っていた。

「じゃあ、僕だ」

シユウがシユテル、ディアーチエ、レヴィにあるものを渡す。それは、預かっていたデバイスだ。三人はそれを簡単に調べ、満足そうに頷いた。

「これ以上ないほどに素晴らしい仕上がりです。問題ありませんね」

シユテルの言葉に、シユウは静かに頷いた。

シユウは願いによって与えられた知識のうち、管理局の技術を超えない程度を使っている。明らかにオーバーテクノロジーの知識は可能な限り忘れるようにしていた。無論完全に忘れることなどできず、たまにそれを見たリンディとクロノに注意されている。

「では、計画に関しては技術面では大丈夫だな」

「ディアーチエの言葉に、その場にいる全員が頷いた。シユテルが引き継いで続ける。

「ではあとは、シユウの卒業を待つだけです」

「あはは……。がんばるよ」

飛び級のような制度はないのでしつかりと勉強を続けるしかないが、どうせなら後味よく卒業したい。その気持ちを込めて言うと、四人はがんばれ、と応援してくれた。

「ではあちら側に戻りますか」

シユテルが大きいシートの方を見る。相変わらずの騒ぎ方だ。

「あ、その前に」

立ち上がるうとした四人をシユウが引き留め、四人が首を傾げる。シユウは小さな箱を取り出すと、それをシート中央に置いた。箱を開け、中身を取り出す。ペンダントが四つだ。

「これ、お守り代わりに」

それらのペンダントを四人に渡す。ダイヤーチェには月、レヴィには雷、ユーリには太陽、そしてシユテルには星がそれぞれ象られた宝石が装飾されている。四人はそれに少し驚き、そして互いに顔を見合わせた。

「これは？」

代表してシユテルが聞いてくる。シユウは照れくさそうにしながらも答えた。

「まあ、プレゼント、みたいなものだよ。半年以上前に両親に頼んで、作ってもらったんだ」

本当はもつと早く渡すつもりだったが、出来上がったのがつい先日だった。だが、この場で渡せて良かったとも思える。

「ありがとうございます、シユウ。大切にしますね」

シユテルの柔らかい微笑みを見て、渡して良かったと心から思えた。

そして五人は大きな桜の木へ向かう。シユウたちに気づいたなのはたちが、大きく手を振ってくれていた。その温かい輪の中へと、シユウたちは遠慮がちに入っていた。

そして月日は流れ。

ミッドチルダの郊外に、知る人ぞ知る喫茶店がある。その喫茶店は表通りに面しておらず、入り組んだ道を通らなければたどり着けないので立地条件はとても悪い。だがそれでも、その喫茶店の味を求めてやってくる人は多い。

その喫茶店の建物は周囲と違い、地球という世界の建物を模して造られている。落ちていた外観で、客からの評判も上々とのことだ。そしてその喫茶店の前には立て看板があり、他の喫茶店ではあり得ない張り紙がされていた。

『魔法のお仕事、請け負います。お気軽に店員までお声かけください』

『デバイスの修理及びメンテナンスを請け負います。ご用の肩は店主まで』

その二枚の張り紙の下には、それぞれの予定も書き込まれている。

喫茶店の中に入ると、最初に出迎えてくれるのは二人の少女だ。

「いらつしやいませー!」

「い、いらつしやいませー!」

明るく元気な青い髪の少女と、少し恥ずかしそうにしながらもがんばっていることがよく分かる金髪の少女。二人に案内されて席に着くと、そこからは厨房を見ることもできた。中で調理をしているのは、銀髪の少女だ。手際よく料理を作っている。本来ならもう一人いるのだが、どうやら今は厨房を離れているようだ。

店の奥、隅の席を見ると、黒髪の少年がなにやら雑多な道具を広げて座っていた。初めてここに来る人は、この少年が店主だとは思えないだろう。そしてその少年の隣には、もう一人の料理人、茶髪の少女。休憩中なのか、少年の隣で静かにコーヒーを飲んでいた。

「レヴィ、次の注文は!」

厨房から声が響く。レヴィと呼ばれた青い髪の少女が答える。

「えつと……。なんだっけ、ユーリ」

「注文待ち、です。ディアーチェ、少しゆっくりしておいてください」

ユーリと呼ばれた金髪の少女が言って、ディアーチェと呼ばれた銀髪の少女が、そうかと声を返していた。

「よし、できた！」

店の奥から少年の明るい声。デバイスだろうものを持ち、とても嬉しそうにしている。

「お疲れ様です、シユウ」

「うん。ありがとう、シユテル」

シユウと呼ばれた少年が、シユテルと呼ばれた茶髪の少女からコーヒーを受け取って飲む。少女が使っていたカップなのだが何も気にしていない二人を見ていると、こちらが恥ずかしくなってしまうそうだ。

少年少女五人だけで経営される小さな喫茶店。訪れた人は皆口をそろえる。味も良く、雰囲気も良く、居心地の良い店だ、と。

その店の名称は、表の立て看板に控えめながらもしっかりと書かれている。

喫茶店翠屋ミッドチルダ支店『ギフテッド』

## chapter 00

## 邂逅（前編）

「スバル、現在位置は？」

「…………ごめん…………」

「…………はあ…………」

表の通りから外れた入り組んだ道。二人の少女がそこで呆然と立ち尽くしていた。一人はスバル・ナカジマ。時空管理局機動六課に所属している魔導師だ。もう一人はティアナ・ランスター。こちらもスバルと同じく、時空管理局機動六課所属の魔導師である。

二人は休日を利用してドライブに出かけていたのだが、スバルが郊外の裏路地に興味を示し、たまにはいいかとティアナもそれに付き合った。二人で少し歩いて分かったことは、あまりにも複雑な地形でたやすく迷える構造になっていたということだ。

早い話が、迷子である。

「どうしようティア…………」

「落ち着きなさい。とりあえずは来た道に戻れば…………」

「……どこから来たっけ？」

スバルがぼつりとつぶやいて、ティアナが絶句した。周囲を見回してみる。今自分たちがいる場所は狭い十字路だ。どこから来たかなどすぐに分かる。

と、思っていたのだが。

「……どうしてどこを見ても同じ景色なのよ……」

小さな違いは確かにあれど、周囲の建物はほとんど同じ構造だ。少し見ただけでは、どの道がどこに繋がっているのか皆目見当もつかない。来た道に戻る、という選択肢も早々に潰されてしまった。

打つ手がなくなり、茫然自失とする二人。そんな二人へと、掛けられる声があった。

「どうかしましたか？」

平坦ながらも女性の声だ。二人は嬉しそうに声の主を見て、次の瞬間にぼかんと口を開けてしまった。二人に見つめられた声の主は、怪訝そうに眉をひそめている。

「なのはさん？ どうしてここに……。あれ、でも髪型が……」

「え？ あれ？ どうして？」

二人が混乱していると、自分たちの隊長によく似た目の前の女性は、二人の言葉で何事かを察したのか、なるほどと小さく頷いた。二人へと会釈をしてくる。

「初めまして、と申しておきましょう。私はシュテルです。ナノハとは知り合いではあ



りますが、別人ですよ」

その言葉に二人は驚くとともに納得もする。世の中にはよく似た顔の人が三人いるとどこかの世界で聞いたこともある。こういったこともあるのだらう、と。少し無理矢理だが、実際に目の前にいるのだから仕方がない。

「それで、どうしましたか？」

シユテルと名乗った女性に簡単な経緯を説明する。するとシユテルはわずかに呆れたようなため息をつき、

「事情は理解しました。表の通りまででよろしければ、ご案内しましょう」

そう言つて、シユテルはきびすを返して歩き始めた。スバルとティアナは顔を見合わせたが、すぐにその背中を追つた。

そして気づけば、二人は表の通りまで戻つてきていた。安堵して胸をなで下ろす二人に、シユテルの声が届く。

「確かに送り届けましたよ。では、さらばです」

その声に慌てて二人が振り返ると、シユテルはもう裏路地の奥へと歩いて行くところだった。

「あの！ ありがとうございます！」

スバルが慌ててお礼を言つて、ティアナがしっかりと頭を下げる。その言葉を受けて

振り返ったシュテルは、いえ、と小さく首を振った。

「困った時はお互い様です。……ああ、あと。ナノハによくお伝えください」

そう言つて、今度こそ振り返らずにシュテルは裏路地の闇の中へと姿を消した。

翌日。朝の訓練の前、朝食の席で、スバルとティアナは昨日のことを幼い同僚に聞かせていた。同じ席に座るその同僚は二人、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ。スバルたちと同じ、機動六課所属の魔導師である。

「そんなにそっくりだったんですか？」

エリオの言葉にスバルがすぐに頷いた。

「髪型とか雰囲気とかは違つたけど、本当によく似てた！　ね、ティアア！」

「ええ。一見しただけじゃ分からないぐらいに」

へえ、と反応したのはキャロだ。そんなこともあるんですね、と驚いた様子を見せている。

「別れ際になのはさんによろしくつて言つていたから、知り合いみたいではあるんだけど……」

「私がどうかした？」

「いえ、ですから……。つて、えええ！」

スバルが振り返ると、優しく微笑むなのがそこにいた。すでに朝食を食べ終えてい

るのだろう、その手には何も持っていない。なのはの両隣には、フェイトとはやてもいい。

「お、おはようございます！」

四人が慌てて立ち上がり、挨拶をする。おはよう、と自分たちの隊長は朗らかに返してくれた。

「話を盗み聞きするつもりはなかったんだけど……。二人はなのは隊長によく似た子と会ったんだね？」

そう聞くのはフェイトだ。緊張した面持ちで、はい、と頷く。

「そっか。シユテルは元氣そうだった？」

「はい、道に迷っていたところを案内していただいて……。つて、え？」

あまりに自然に、フェイトの口からシユテルの名前が出てきた。そのことにスバルたち四人が驚いている前で、隊長三人は楽しげに会話を進めていく。

「そっか。最近はずいぶんと顔を出せてないから、そろそろまた行きたいね」

「うん。レヴィはどうしてるかな？」

「王様やユーリもちゃんと元氣にしとるやろか」

シユテルの名前の他に、知らない名前や王様という仰々しいものまで出てきている。一体どんな人たちでどういった関係なのだろうと四人が困惑していると、なのはがそう

だ、と手を叩いた。とても楽しげな、どこか悪戯っぽく笑う珍しい笑顔だ。

「いい機会だから、みんなにも紹介しておこうかな。デバイスのことでも頼りになるし」  
「あ、そうだね。それがいいかも」

「ええなあ。それじゃあ休みを調整するな。ちよつとここが空いてまうけど、シグナムたちに任せておけば大丈夫やろ」

どンドンと話が進んでいる。急展開に話に割つては入れないが、どうやらシユテルという人を正式に紹介してくれることになったらしい。啞然としたままの四人へと、はやてが笑顔を向けた。

「四人とも、ちよつと悪いんやけど、この日は空けといてな」

そう言われて指定された日を四人が覚えたところで、じゃあそろそろ行こうか、というフェイトの言葉で話は半ば強制的に終わることになった。今ここで詳しく教えてくれるつもりはないらしい。いずれ分かることかと四人は一先ず諦め、先導する隊長たちのあとについて行った。

一週間後。隊長三人を交えた七人は、隊長たちの案内のもとスバルとティアナが道に迷った裏道にたどり着いていた。昼前だというのに不気味なほど薄暗い通りへと、なのはたちは気にせず歩いて行ってしまふ。スバルとティアナも、顔を引きつらせているエリオとキャラ口を促して、裏道へと入っていった。

何度も曲がり、方向感覚がすっかり分からなくなり、それでもまだまだ歩き……。やがてたどり着いたのは、周囲の建物とは違った雰囲気を持つ建物だった。見覚えがある気がして四人が首を傾げていると、隊長たちの言葉ですぐに思い出すことができた。

「やっぱりここに来るとちよつと落ち着くね」

「なのはは特にだろうね。地球の翠屋と似通った建物だし」

「味も翠屋そのものが多いしなあ」

なるほど、と四人は納得した。以前地球を訪問した時に訪れた翠屋という喫茶店の建物だ。なのはの実家が経営する喫茶店なのだが、こんなところで見るとはさすがに思わなかった。気になって看板を見て、すぐに目を丸くした。

喫茶店翠屋ミッドチルダ支店『ギフトッド』

地球にはではなく、なぜミッドチルダに支店があるのか。困惑している四人へと、なのはが振り返って笑顔で言う。

「それじゃあ、入ろうか」

隊長たちに促され、四人は先にその喫茶店に入れられた。からんからんと鳴る鈴の音と、その直後の、

「いらっしやいませー！」

元氣な女性の声。その声を聞いて、四人は思わず振り返ってフェイトの顔を見た。

「……私じゃないよ？」

どこか笑いを堪えているような表情だ。珍しいものを見たと思いつつも声の主を探して正面へと向き直り、

「え……。ええええ！」

思わず声を上げて驚いた。

「うわ！ びっくりした！ なに？ どうしたの？」

そこにいたのは、エプロン姿のフェイトだ。ただし髪の色や雰囲気はまるで違う。

「ふえ、フェイトさんが……二人……？」

きよとんと目の前の女性が首を傾げ、そしてすぐに四人の背後にいる隊長たちに気がつき、表情を輝かせた。手を上げて、挨拶。

「おいつす！ 久しぶりだね、オリジナル！」

「うん。こんにちは、レヴィ。相変わらず元気そうだね」

「なになに？ 今日はどうしたの？ この子たち誰？ もしかしてこの前言った教え子ってこの子たち？」

矢継ぎ早に繰り出されるレヴィと呼ばれた女性の質問にフェイトが思わず苦笑いする。そうだよ、とフェイトが返事をする、レヴィはへえ、とスバルたちに視線を向けた。

「ほら、みんな。挨拶」

フエイトに促されて、呆けていた四人ははつと我に返った。姿勢を正し、

「時空か……」

「あ、役職とか階級とかいららないよ」

レヴィに言葉を遮られ言葉に詰まるスバル。すぐに意味を理解し、名前だけを告げる。ティアナたちも同様に名前だけを告げると、レヴィは満足そうに頷いた。

「ボクはレヴィ。強くてすごくてかっこいい、レヴィ・ザ・スラツシャーとはボクのことだ！」

レヴィの自己紹介に戸惑う四人。後ろの隊長たちから苦笑する気配が伝わってくる。いつものことなのだろうか。

「あの……。聞いても、いいですか？」

キャラの遠慮がちな声に、レヴィはにこやかに、いいよ、と応じる。

「レヴィさんとフエイトさんって……」

だが、最後まで言葉を出すことはできなかつた。途中で店の奥から誰かが駆けてくる音が聞こえてきたためだ。一同がそちらへと視線を向けると、出てきたのは二人だった。

「やかましいぞレヴィ！ 静かにせんか！」

「……………」

声を出した方、はやてによく似た女性を見て、四人は内心で驚きつつも声には出さなかつた。なのは、フェイトときたのだからはやてのそっくりさんもいるのでは、とある程度の予想がついていたためでもある。

「苦労してそうだね、ディアーチエ……」

「王様も元氣そうやな」

ディアーチエと呼ばれた女性が怪訝そうに眉をひそめ、自分たちを見てくる。最後にはやてへと目をとめ、視線を逸らして大きな舌打ちをした。

「子鴉か。何しに来た」

「ひどいわあ、王様。そんなに冷たいとあたし、泣いてまうで？」

「黙れ子鴉。貴様のそんな言葉に騙されは……」

「……………」

「ま、待て！ 本当に泣きそうになるやつがあるか！ ええい、やりにくい奴だ……！」

横柄な態度から一転、慌て始めるディアーチエと、どこか悪戯が成功したような表情を見せるはやて。ディアーチエの態度から仲が悪いのかと思つたが、どうやらその逆らしい。はやての表情に気づいたのだろう、ディアーチエはすぐに顔を大きくしかめてみせた。



「お久しぶりです。その子たちが皆さんの教え子さんですか？」

その声はディアーチェの隣、優しげに微笑む少女からだ。レヴィやディアーチェよりも体格が少し小さい。この少女は自分たちが知っている誰とも似ていない。

「そうだよ、ユーリ。紹介はシユテルが揃ってからと思ってるんだけど……」

なのはからユーリと呼ばれた少女は、興味深そうにスバルたちを観察する。スバルたちと目が合うと、顔を赤らめながら一礼した。

「ユーリ・エーベルヴァインです。えっと、なのはさん。シユテルならそこにいますよ」  
ユーリが指し示す先、店の奥へと視線を向ける。最奥のテーブル席には何か工具のようなものが大量に置かれ、そしてその席に二人分の人影があった。一人は本へと視線を落とすシユテルで、もう一人は隊長たちと同じ年ぐらいの男性だ。全員の視線に気づいて、シユテルが顔を上げた。

シユテルと視線が合い、なのはが声をかけようと口を開く。だがすぐにシユテルが人差し指を口の前に立てたので口を閉じた。シユテルは一度頷き、隣の男を一瞥して、席を立つ。こちらへと歩いてきてから、ようやく口を開いた。

「お久しぶりですね、ナノハ。お元氣そうで何よりです」

「うん、久しぶり。シユテルも元氣そうで良かった。……取り込み中だったかな？」

なのはが男の方を見て言うと、シユテルは小さく首を振った。じきに終わります、と

シユテルが言った直後、

「できた！」

男の方から小さな歓声上がる。その声を聞いたシユテルはすぐに振り向き、男へと声を掛けた。

「終わりましたか？ シユウ」

シユウと呼ばれた男が満面の笑顔を向けてくる。頷いて、そしてすぐに自分たちに気がついた。

「あ、ごめん。お客様が来てるんだね。すぐに片付けるよ」

「落ち着いてください、シユウ。ナノハたちですよ」

「へ？ ……ああ、ほんとだ」

シユウは席を立ち、テーブルの上の道具を片付けていく。側に置いてあつた大きめの木箱に丁寧にを入れていき、片付け終えてからこちらへと歩いてきた。久しぶり、となのはたちに言つてから。すぐに自分たちにも視線を向けてくる。

「初めまして、だね。僕は西崎秀一。シユウ、と呼ばれてるよ」

よければそう呼んでね、とシユウが屈託のない笑顔を見せてくれる。

「それじゃあ、改めて紹介するね。この子たちは私たちの部隊に所属してる……」

「スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスタールです」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです」

四人が名乗り、次いで目の前の体長たちに似た人たちが自己紹介してくれる。

「ディアーチェだ」

「さつきも言ったけど、レヴィイだよ！」

「ユーリです。私も先ほど名乗っちゃっていますけど」

三人が名乗り、そして空白。全員の視線が残り二人に注がれる。シユテルはいつもの無表情だが、シユウの方は少し困惑しているようだった。

「え、あれ？ シユテルは名乗らないの？」

「ここは先に店長から、と思いましたが……。まあいいでしょう。シユテルです」

シユテルが名乗ったのを聞いて、シユウは安堵のため息をついた。

「さつきも言ったけど、シユウでいいからね」

そう言つて、シユウはおもむろに出入り口のドアへと向かった。どうしたのかとその動きを追えば、外へと出て行ってしまう。突然何が、と驚いていると、すぐにシユウが戻ってきた。

「とりあえず臨時休業ということにしておいたから」

「ええ！ さすがにそれはまずいんじゃない……！」

そう声を上げたのはなのはだ。だがシユウは、別にいいよと笑い飛ばす。今日は君たちの貸し切りだ、と。

「店長がそう言っていますので、お気になさらずに。さて、ご注文をどうぞ」

いつの間を持つてきたのか、シユテルとディーアーチエがエプロンを着用していた。どうやらこの二人は厨房担当らしい。じゃあお言葉に甘えて、となのはたちは側のテーブルからメニュー表を取ってきて開く。スバルたちはその様子を唾然として見ていたが、フェイトに、見ないの？ と声を掛けられて我に返った。

「あ、あの！ 聞きたいことが……！」

スバルのその言葉に、しかしシユテルは首を振った。

「私たちのことを、ですね。少々長い話になりますので、先に昼食の用意をしてしまします」

「そういうことだ。さっさと選べ」

腕を組み、自分たちを睨み付けながらもメニュー表を差し出してくるディーアーチエ。ティアナが恐縮しながらもそれを受け取った。

「シユテルん！ ボクはカレーがいい！」

「あ、じゃあ私はハンバーグで！」

「分かっています。ハンバーグカレーを用意しましょう」

そう言つて厨房へと消えていく。すでに隊長たちも注文を決めたようで、ディアーチエに何かを伝えていた。これは早く決めなければならぬだろう。四人が慌ててメニュー表に視線を落とし、ページを捲つていく。

「今日も平和で何より」

そんな光景を眺めながらのシユウの一言は、なぜかとても感慨に満ちていた。

## 邂逅（後編）

シユウたちが経営する喫茶店のテーブルのいくつかは正方形をしている。正方形のテーブルは簡単に移動させることができ、今のようにいくつか並べて大きなテーブルとして使うこともできる。

正方形のテーブルを四つ並べ、片側にシユウたちが座り、もう片側になのはたちが座る。なのは誰かを迎えに行くとは出かけてしまっているので、向かい側に座るのはなはを除いた管理局のメンバーだ。

シユテルとディアーチエが作った昼食を皆で食べながら、シユテルは自分たちのことを語っていた。シユウに気を遣つてか、ギフトッドに関することにはまだ触れていない。

「碎けえぬ闇事件、ですか。そんな事件があつたんですね」

スバルがそんな感想を漏らし、どこか納得したような表情をしているティアナが頷いた。

「それで隊長たちと似通った姿なんですね。皆さんも魔導師なんですか？」

「はい。嘱託魔導師として時折活動しています」

「まあほとんどはここにいるがな。そちらで働くためには店を閉めなければならんからな」

シュテルとディアーチエは厨房担当だ。どちらか一人でも欠けると料理の提供が遅れてしまう。接客担当のレヴィとユーリが欠けた場合でも、今度はそちらの仕事に遅れが出てしまう。そのため、囑託魔導師として活動する時は休業にしている。

「シユウさんも……えつと、魔導師なんですか？」

そう問いかけてきたのはキャロだ。シュテルたちの表情が硬くなり、シユウは困ったような笑みを浮かべてしまう。どこまで答えるべきか、と。

「僕は魔導師じゃないよ。デバイスマスター。裏方でみんなのサポートをするだけ」

当たり障りのない答えを返し、そして、すぐに真剣な表情になった。

「フェイト。はやて。この子たちは、口は堅い？」

スバルたちが首を傾げる横で、フェイトとはやてはしつかりと頷いた。フェイトも真剣な表情になり、言う。

「そうでないと、ここには連れて来ないよ。この子たちは大丈夫」

分かった、とシユウが頷いて、改めてスバルたちへと向き直る。困惑の表情を見せる四人へと、シユウは静かに告げる。

「ここからは、絶対に他言無用だよ」

そうしてシュウが語るのには、自分の出自。記録から抹消されたロストロギア、ギフテッドのことだ。シュウの話聞きながら、四人は驚きで目を瞠っていた。

実はこうして自分のことを話すのは、ミッドチルダに移住して初めてのことだ。というのも、自分の存在を隠すなら相手が誰であろうと言うべきことではないと考えている。知る人が増えれば、その分だけ悪意を持つ誰かに伝わってしまう可能性がある。それ故に、ここに来てからは一度たりとも触れていなかったことだ。

だが、なのはたちが連れてきたということとは、この四人は口が堅いと信じていいのだろうか。少なくとも、他人の秘密を他で言ったりはしないはず。それならば、話してもいいだろう。最も、今回が特例であり今後やはり誰かに言う予定はない。

全てを聞き終えた四人は、一言も発せずに黙り込んでいた。その四人の視線を受けながら、シュウは小さくため息をつく。久しぶりに長話をしたので疲れてしまった。

「シュウ。お茶をどうぞで」

「うん。ありがとう」

シュテルから冷たいお茶で満たされたコップを受け取り、乾いたのどを潤す。そうしている間に、最初に口を開いたのはティアナだった。

「ギフテッド……。そんなロストロギアがあつたんですね。驚きました」

「うん。まあ知らなくて当然だよ。記録からも記憶からも抹消されたからね。なのはや



リンディさんたちが他言していなければ、知ってる人は本当に限られるよ」

無論、誰かが他言しているなどとは思っていない。なのはたちもリンディたちも、信用に値する人物だ。だからこそ、なのはたちが信用している教え子たちも信用することができる。

「まあ、別にだから何だって話なんだけどね。何かに関わることもないし、忘れていいよ」

そんなシユウの言葉に、スバルたちは苦笑を漏らしただけだった。

「戻ったよ」

なのはが喫茶店に戻ってきた時には、すでに一通りの話を終えた後だった。皆で雑談に花を咲かせている。シユテルから念話での連絡が回っているのか、なのははシユウをちらりと見ただけでそれ以上は何も言ってこなかった。ただ、優しく笑っただけだ。

シユウもなのはに笑顔を返し、そしてすぐに気がついた。なのはの傍らにいる少女に。明るい金髪に左右で違う瞳の色。シユウが視線でなのはに問いかけると、頷いて紹介してくれる。

「この子がヴィヴィオ。シユテルから聞いてないかな？」

なるほど、とシユウは納得する。視線をシユテルへと向けると、シユテルも興味深そうにヴィヴィオのことを見つめていた。対するヴィヴィオも、目を丸くしてシユテルの

ことを見つめている。

「なのはママと同じお顔……？」

ヴィヴィオのそんなつぶやきが聞こえてくる。それを聞いたシユテルは無表情に席を立つと、ゆつくりとヴィヴィオへと近づいていく。ヴィヴィオが驚いて身をすくませるが、なのはに背中を押されてシユテルと向かい合うことになっていた。

「あ、あの……」

「初めまして、です。貴方のことはナノハから聞いています」

シユテルが身をかがめ、ヴィヴィオへと視線を合わせる。柔らかい声で、言う。

「私はシユテルです。貴方のママとは、そうですね……。友人、です」

それを聞いたなのはが一瞬だけ驚きを見せ、すぐに嬉しそうな表情になった。それが分かるのだろう、シユテルはなのはと視線を合わせようとはしない。少し恥ずかしかったのかもしれない。

「なのはママのお友達？」

「はい。そうです。よろしくお願いします、ヴィヴィオ」

シユテルがそつと手を差し出すと、ヴィヴィオはおずおずといった様子でその手を握った。

少し前にあった大きな事件。自分たちは関わらなかつたが、その事件の経緯とその後

についてはなのはたちから聞いていた。なのはがヴィヴィオという少女を養子として引き取ったことも。その報告を受けたシユテルは、珍しく澁面を浮かべていたようだ。そのしばらく後に、あの子の将来が心配です、と小声で漏らしていたのだが、シユウは聞こえていないことにした。

ヴィヴィオを交えて、雑談は続く。レヴィとディーアーチエを見た時もヴィヴィオはとも驚いていた。

さらに時間が流れ、日が少し傾き始めた頃。喫茶店のドアが勢いよく開かれた。大きな音を立てて開かれたドアには一人の少女。車椅子に乗った少女は、何事かを叫ぼうとして口を開き、そしてそのままの姿勢で動きを止めた。なのはたちを視認して、驚きで固まってしまっている。

「あれ？ 文花ちゃん？」

なのはの声で我に返ったのか、文花ははっとするとその場で姿勢を正した。

「お久しぶりです、なのはさん！」

「うん。久しぶりだね。元気そうで良かったよ」

「なのはさんも」

突然の闖入者と親しげに話す隊長を見て、スバルたちの四人は不思議そうにしていた。いや、一人だけ別の表情を浮かべている。ティアナだけは、何かを思い出そうとし

ているようだ。そしてすぐに、あ、と短い声を漏らした。

「もしかして、西崎文花さん……？ 囑託魔導師の……」

「うん、そうだけど……。どちら様？」

ティアナの小声を文花はしつかりと聞き取った。声の主のティアナを見て、わずかにだが警戒の色を浮かべている。それに気づいたなのはが苦笑して、

「そんなに警戒しないで、文花ちゃん。この子たちは私の部隊の子たちだから」

「機動六課、でしたっけ？ なのはさんの教え子さんですね。失礼しました」

その場で頭を下げる文花。ティアナが慌てて手を振って、こちらこそごめんなさい、とお互いに謝っている。

「文花のこと、知ってるんだね」

シユウが漏らした言葉に、隣のシユテルが少し呆れたようにため息をついた。

「何度か雑誌をお渡ししたでしょう。囑託魔導師では最も有名な一人になっていますよ」

「有名？ なんで？」

「最近何かと話題のナノハの一番弟子、ですから」

「そんなこと名乗った覚えはないんだけどね……」

「……原因は私だよね……」

なのはの言葉に文花は言葉を濁した。どうやら事実らしい。

後ほど聞いた話では、取材の一つでたまたま文花の話題が出たらしい。その時に余計なことを言ってしまったそう。私が魔法を教えた最初の子ですね、と。それ以来、文花にも取材の依頼が入るようになってしまったそう。

「でもどうして文花さんがここに？　なのはさんに呼ばれたんですか？」

そう聞いたのはスバルだ。その表情はどこか嬉しそうにも見える。問われた文花は、シユウを指さして言った。

「妹が兄の家に来たらだめ？」

「え……。あ、そう言えば西崎って……」

スバルたち四人の視線がシユウへと注がれる。シユウは複雑そうにしながら頷くだけで肯定とした。

「ところでお兄ちゃん。デバイス届けてくれるって言ってなかった？」

「……あ」

シユウは背後の、奥のテーブルへと振り返る。なのはたちが来るまで作業していたテーブルだ。そこに無造作に置かれているデバイスがある。文花もその視線に気づき、すぐにデバイスに気づいて、大きなため息をついた。

「（ま、ま）めん……」

「まあ、いいよ。メンテナンスを依頼した私が取りに来るのが本来は正しいし」

最初はもともと文花が取りに来る予定だったのだが、車椅子だと不便だろうというところでシユウが持つて行くと申し出ていたのだ。シユウはデバイスを回収すると、それを文花に渡した。

「メンテナンスついでに調整もしておいたから。次の仕事の前に確認してね」

「うん。ありがとう、お兄ちゃん」

にこやかに言う文花。その笑顔を見て、シユウの頬も自然と緩む。

「それじゃあ私はこれで。皆さんごゆっくり」

車椅子を反転させて、文花はさつきと店を出て行ってしまった。他の皆に挨拶する暇も与えない。スバルが残念そうな声を漏らし、ティアナが首を傾げた。

「どうしたのよ、スバル」

「もうちよつと話してみたかったなって……」

「じゃあ今度文花ちゃんと訓練する時はスバルたちも呼ぶね」

なのはの言葉に、スバルが瞳を輝かせた。いいんですか、と興奮して聞いてくるスバルに、なのはは笑いをかみ殺しながら頷いた。

街が夕焼けで赤く染まり始めた頃。もうこんな時間やね、とはやてが切り出して、談笑していた皆がはやてを見る。はやては全員を順番に見て、最後になのはへと頷きかけ

る。それを受けたなのはシュテルへと視線を送り、そしてシュテルは自分のデバイスを取り出すことで返事とした。

シュテルの行動の意味を察して、デイアーチエは呆れながら、レヴィは嬉しそうにやはりデバイスを取り出した。きよとんとしているスバルたちへと、なのはが言う。

「デバイスは持つてきてるかな？」

「あ、はい。もちろんです」

「うん。それじゃあ、シュテルたちの胸を借りようね」

悪戯っぽく笑うなのはに、スバルたちの表情が引きつった。その表情を見れば分かる、とても嫌な予感を覚えているのだろう、と。そしてその予感は的中することになる。

「模擬戦、しようか」

近場の施設の訓練室。相対するのはシュテルたちマテリアルズの三人と、スバルたちの四人だ。それを少し離れて見守るのはシユウやなのはたち。ヴィヴィオも同席しており、喫茶店を出る時におやつ代わりです、とシュテルから渡されていた小さなホットケーキを幸せそうに食べている。

「美味しいですか？」

遠くから聞いてきたシュテルに、元氣よく、美味しい、と返事をするヴィヴィオ。それを聞いたシュテルは、いつもの無表情だが口の端が少しだけ持ち上がった。

ユーリも観戦組で、こちらは少し不満そうだ。

「さすがにユーリまで一緒に参加したらあの子たちがかわいそうだから。ね？」

シユウがそう言いながらユーリのご機嫌を取る。こちらを心配そうに見る三人へと、大丈夫だから、と手を振った。

「うむ……。では始めるとするか」

ディアーチエの言葉に、緊張した面持ちの四人が、よろしくお願いします、と頭を下げた。

隊長たちに似ているからといって実力も近いということはないだろう。そんなことを心の片隅で少しだけ期待していた四人は、その考えを開始数分で激しく後悔していた。隊長たちに負けず劣らず強く、その上この三人、遠慮も手加減も何もない。一時間もすれば、四人は地に伏して荒い息ははいていた。

もう終わり？ と残念そうに言うレヴィに四人の表情が思わず強ばる。黙って見守っていたなのはが苦笑しながら声をかけてくれたのはその時だ。

「はい、みんなお疲れ様。今日の反省点は次の訓練から活かしていくから、そのつもりでね」

よろよると立ち上がりながらスバルたちが頷く。なのはも満足そうに頷くと、シユテ



ルたちへと向き直った。

「シユテル。ディーチェ。レヴィ。今日はありがとう。本当に……」

「終わっていませんよ」

「え？」

なのはが言葉を遮られ、きよとんと間の抜けた表情を見せる。シユテルはそんなのはへと、まっすぐに杖を向けた。

「せっかくなのです。一戦、交えましょう」

シユテルの声は、どこか楽しげですらある。そんなシユテルを見てしまうと、なのも断ることができないのだろう、困ったような笑みを浮かべながらもレイジングハートを展開する。

「シユテルんばっかりずるい！ ボクももつとやりたい！」

「じゃあツーマンセルでどうかな」

フエイトの言葉に、さすがオリジナル、とレヴィは嬉しそうだ。それに待ったをかけるのがディーアーチェ。

「よさぬか、レヴィ。せっかくの機会だ、シユテルに譲ってやれ」

「王様はやらへんの？ ならあたしの不戦勝やね」

「……なんだと？」

ディアーチエの瞳に闘志の炎が燃え上がる。そしていつの間にか出来上がったスリーマンセルだが、なのはたち三人とも参加するとなると、最後の一人も当然納得がでない。

「私だつて参加したいです！」

「まあそうなるな。当然ユーリはこちら側だ」

ディアーチエがユーリを手招きすると、ユーリは子供のように喜んでディアーチエの隣へと走って行つた。

「いやちよつと待つて！ 人数が合わない以前に、戦力バランスが悪いと思うんやけど！」

「ではその雛鳥どもももう一度参加だ。そちらの方が人数が多くなるが、構わんぞ」  
「人数の問題じゃなくてやな……！」

はやてが言葉を連ねるが、ディアーチエは全ての言葉を見殺しで一蹴した。やがて諦めたのか、はやてがため息をつく。仕方ないか、と。

「あの……。ユーリさんって、そんなにすごいんですか？」

ティアナが小声でなのはに問いかけると、なのははティアナたちを順番に見て、そして最後に視線を逸らした。

「……がんばろうね」

「…………え？」

隊長たちが滅多に見せない態度の意味を、四人はすぐに知ることになる。

「上には上がいる、なんてものじゃないよあれは……」

「ちよつと…………トラウマになりそう……」

喫茶店で、スバルとティアナはテーブルに突っ伏していた。隣のテーブルではエリオとキヤロも同じように疲れ果ててダウンしている。

ユーリの力は圧倒的だった。理不尽とも思える力。昔の話とは言え、暴走していたユーリを止めたというのだから、隊長たちはやはりすごいと思う。隊長たちは、皆で協力してやつとだった、と笑っていたが。

後から聞いた話では、ユーリの力を、自分たちが束になっても敵わない、とヴォルケンリッターの誰かが評したこともあるそうだ。規格外とはこのことだろう。

「みんな、お待たせ！」

喫茶店の奥、厨房から出てくるのはエプロン姿のなのはを初めとする隊長たちと、シユテルたちだ。その手に持ったお盆には、できたての料理の数々。

模擬戦の後、シユテルたちに喫茶店の客としてではなく、友人として改めて招かれていた。夕食をご馳走します、と。そういうことならと隊長たちも手伝うことになり、今

に至る。スバルたちも当初は手伝おうとしたのだが、招かれた側は大人しくしていろとのお達しにより待機させられていた。

夕食を食べ終えた頃にはすでに太陽はすっかりと沈んでしまっていた。帰り支度をするスバルたちへ声がかけられる。

「これ、あげる」

シユウだった。渡されたのは小さなカード。黒いカードで、墨に小さく店名が書かれている。

「わ、ありがとうございます！ 会員カード、ですか？」

この喫茶店にもあるのかと感心していたが、シユウは首を振って否定した。

「まあそれに近いけど。僕個人用。ちゃんと本人がそのカードを持ってきてくれたら、デバイスのメンテナンス、無料で引き受けるから」

曰く、先ほどの模擬戦のさいに魔力データを収拾したらしい。その魔力データとカードのデータを照合させて本人確認を行うのだとか。

「まあ、管理局に所属している君たちにはあまり必要ないかもしれないけど……。機会があれば、ということまで」

「分かりました……。ありがとうございます」

スバルたちがしつかりと頷くと、シユウは満足そうに微笑んだ。

「ではまたいずれ」

「みんな、まったねー！」

「気をつけて帰るのだぞ」

「またのご来店、お待ちしております！」

「また来てね、おやすみ」

シユテル、レヴィ、ディアーチエ、ユーリ、そしてシユウが出入り口で手を振る。スバルたちもそれに手を振って、それぞれの家路についていった。

全員の姿が見えなくなるまで見送って、五人はゆっくりと息を吐いた。店内へと戻り、扉を閉める。そして全員の表情が真剣なものとなった。

「うぬら、分かっておるな？」

ディアーチエの声に全員が頷く。これから始まるのは先の模擬戦の反省会……ではない。それはまた時間の空いた時だ。ディアーチエも最後に頷き、そしてシユウへと視線を向けた。

「では、店長。ここからはうぬの仕事だ」

「そのままディアーチエが仕切ればいいのに……」

妙なところで律儀だな、と苦笑しつつも、すぐに表情を引き締めた。

「ディアーチェとシユテルは明日の料理の仕込み。レヴィとユーリは食材もろもろの買い出しだ。僕もまだ引き受けてるデバイスのメンテナンスが残ってるから、それを先に終わらせる。それぞれ終わり次第、お店の片付けと掃除」

「はい。分かりました」

「うむ。心得た」

「りょうかい！」

「がんばります！」

四人それぞれの返事を聞いて、シユウは頷きを一つ、そして最後に言う。

「じゃあ、よろしくね。がんばろう！」

そしてそれぞれが自分の仕事へと向かう。明日の日常のために、今日の日常の最後の仕上げへと。その表情は、引き締められたものだったが、誰もが生き生きとしていた。

## 出立（前編）

マンションの自室、書斎。書斎といつても周囲が本棚、中央にテーブルがあるだけの部屋。その部屋はいつも様々な機械や工具が散乱している。その部屋の中央、テーブルにはシユウがいて、テーブルに突っ伏して眠っていた。

シユウの服装は学生服だ。自身の学校のもので、一週間後には卒業式が控えている。シユウが抱えるロストロギア、ギフテッドの小さな騒動から時は流れ、もうすぐ中学校を卒業することになる。

シユウが眠る書斎の扉がゆっくりと開かれる。そこから顔をのぞかせるのはシユテルだ。シユウの姿を認め、部屋の惨状を見て、ため息をついた。部屋の中に入り、シユウを起こさないようにそつと扉を閉める。散らばった機具を静かに片付け始めた。平時なら二、三日で元に戻るのどわざわぎ片付けたりはしないのだが、今日は特別である。十分ほど続けたところで、シユウの体がわずかに身じろいだ。シユテルが動きを止め、そちらを見やる。シユテルが見守る中、シユウが体を起こし、ぼんやりとする。少して目が覚めてきたのか、シユテルを見つけると、気の緩んだ笑顔を見せた。

「おはよう、シユテル」

「おはようございます、シユウ」

シユテルが挨拶を返すと、シユウはまだ寝ぼけ眼だったがどこか嬉しそうに微笑んだ。ゆっくりと伸びをして、そして大きな欠伸をする。そんなシユウへと、シユテルは少し呆れながらも告げた。

「昨日も遅かったのですか？」

「ん……。まあ、ちよつとだけ」

少し目を逸らしながら答えるシユウ。シユテルは目を細めながら、しかしそれ以上は追求しなかった。

テーブルで寝てしまっている場合の多くは、深夜遅くまで起きている時だ。シユテルを初め、家族全員がそのことは知っているのだが、自分たちに心配かけさせまいとしてくれているシユウの意を汲み、何も言わないことにしている。ただそれでも、心配はしてしまうのだが。

「はい。シユテル」

「ありがとうございます」

シユウが差し出してきたものをシユテルは受け取る。渡されたのはルシフェリオンだ。シユウが夜遅くまで起きている原因が自分たちのデバイスのメンテナンスということも、あまり強く言えない理由の一つでもある。



「いつも本当にありがたいのですが、無理だけはしないでください」

「うん。大丈夫。僕も好きでやってることだからね」

くあ、と欠伸をしつつ答える。そんなシユウを心配そうに見ていたが、シユテルはすぐに用件を思い出した。ここに来た一番の理由だ。

「ところでシユウ」

「ん？」

「時間は大丈夫なのですか？」

この部屋に窓はない。本来はあるのだが、念のためということでも本棚で塞いでしまっている。そのため、この部屋で時間を知るためには日の光は使えず、時計だけとなる。この部屋の時計は、入り口の扉の真上にあり、シユウの視線がそれを捉えた。シユウの表情が引きつっていく。

「シユウ。着替えはリビングに用意してあります。朝食もバターのトーストを用意しておきました」

シユテルの言葉を聞くや否や、シユウは書斎を飛び出した。シユウの足音はまっすぐリビングへと消えていく。

現在の時刻は午前八時。そして今日は平日であり、当然学校もある。

「懲りない方ですね」

そう言いつつも、シユテルはどこかおかしそうに、少しだけ微笑んでいた。

シユテルがリビングに戻ると、ちょうどシユウが着替え終わったところだった。トーストをかじりながら玄関に向かうので、シユテルもそちらへと向かう。靴を履くシユウを黙って見守っていると、シユウがシユテルへと視線を向けてきた。

「ありがとう、シユテル。行ってくるね」

「いつてらっしゃい、シユウ。お気を付けて」

シユテルがそう言うと、シユウは嬉しそうに笑う。そしてすぐに部屋を出て行った。

シユウを見送った後、シユテルはディアーチェへと念話を送る。終わりました、と。ディアーチェからの返答は、少し待て、というものだった。シユテルは了解の意を送ると、リビングの掃除でもしようかと足を向けた。

シユウの通う学校は大学までのエスカレーター式だ。そのため、世間の受験シーズンなどとは違い、平常通りに授業がある。しかしながら、そのエスカレーターから外れる者もいる。別の高校へ受験する者や、諸々の事情などで就職する者など、理由は様々だ。そしてシユウもその外れる者で、シユウの場合は就職になる。

シユウの進路は就職で決まっているため、担任の教師が色々と便宜を図ってくれていた。ホームルームまでは自分のクラスにいるが、その後はシユウは経済、経営の勉強な

ど一部の教師に教わっていたりしている。それ故にある程度時間も自分で決めさせてもらっている。建前上は就職先の研修のため、と。実際はその時々によって違うのだが。

その日もシユウは昼休みを待たずに下校する予定だ。今日は少々特別な日でもあり、それが今から待ち遠しい。経済に詳しい教師から授業を受けながら、シユウは顔がにやつくの止められなかった。

「すまぬ、待たせたな」

そう言ってリビングに入ってくるのは、王であるデИАーチエだ。バリアジャケットを身にまとっているところから、どうやら囑託魔導師としての仕事を終えてまっすぐに来てくれたらしい。

「いえ。すみません、デИАーチエ。わざわざ迎えに来ていただいて」

そう言いながら立ち上がり、コーヒーでも淹れますね、とキッチンへと向かう。戸棚にあるのは残りわずかとなったインスタントコーヒーだ。あることの準備のためにミッドチルダにすることが多くなったため、もうこの部屋には最低限のものしか置いていない。

コーヒーを淹れてリビングに戻り、デИАーチエに差し出す。デИАーチエは黙って

受け取り、それを一口飲んだ。すぐに苦笑を漏らし、言う。

「仕方がないとは分かっているが、インスタントではこの程度になるか」

「もう少し物を置いておくべきでしたね」

「一週間程度で引越すのだ。ちようどいいと思うべきだろう」

そんな会話を交わしながら二人でコーヒーを飲みつつ、一息つく。ゆつくりと時間をかけて飲み干し、時間が流れるのを待つ。

「ところでシユテルよ。掃除はどこまで済んでおる？」

「ほぼ終わっています。あとは、この部屋は私たちの私物を片付けるだけですし、シユウの部屋も書齋を残すのみです」

もつともその書齋が問題ですが、とシユテルが目を伏せ、そうであろうなどディアーチエも顔をしかめた。

近日中にシユテルたちはミッドチルダへと引越すことになっている。シユテルの魔力を受け取らなければならないシユウもだ。そのためそれぞれ部屋の掃除と片付けを行っているのだが、どうしてもシユウの仕事場となっている書齋だけは手つかずのままになっていた。

「引き払う前日にでも一気にやっってしまうのがいいだろうな……。その時はユーリとレヴィも連れてこよう」

「そうですね。お願いします」

その言葉でこの話題を終えたところで、ドアが開かれる音がした。二人でリビングの入り口へと振り返る。顔を出したのは、シユウだ。走ってきたのだろう、息を切らしている。

「ただいま！ ごめん、待たせたかな」

「いや、大丈夫だ。気にするな」

飲み終えたカップをテーブルに置き、シユテルとディアーチエが立ち上がる。では行くか、とディアーチエが手を差し出し、シユテルがそれを取る。もう片方の手で、シユウへと手を差し出した。

「では、参りましょう。シユウ」

シユウが笑顔で、シユテルの手を取った。

五人が選んだ道。それは喫茶店の経営だ。ただあまり目立ちたくない五人は、表通りから外れてあまり人目につかない土地を購入した。そこから新築で、翠屋と同じ外観の建物を建てている。翠屋の看板を借りるということでそうしたのだが、士郎と桃子は気にしなくて良かったのにと苦笑を隠しきれずにいた。ちなみに、土地代や建築代などは以前より積み立ててきた貯蓄で支払い終えている。

シユウはミッドチルダには未だにほとんど来たことがない。土地を決める時と建物の建築中に一度、その二回だけだ。休日を利用して訪れたのだが、二回とも土地の周辺を見て回ったりなどしたただけなので、都市部の中心などには足を踏み入れていなかった。

シユテルたちに案内され、シユウは表通りから外れた裏路地へと入る。入り組んだ道を通り抜け、やがてその場所にたどり着いた。

建物と建物の間に、他とは違った造りの、翠屋と同じ外観の建物。シユウたちが経営することになる喫茶店だ。その喫茶店は周囲の建物とは違い、入り口の前に少し広めのスペースがある。今はまだ何もないスペースだが、いずれはここにテーブルなども用意しよう、ということになっている。

「おお……。なんだか感慨深いね」

「ええ。そうですね」

シユウのつぶやきに、シユテルも頷いた。早くしろ、とディアーチェに促され、二人は店内へと入る。店内の一階も翠屋とほぼ同じ造りで、カウンターの奥、厨房のさらに奥に二階に上がる階段があるらしい。一階部分にはすでにテーブルやいすなどが運び込まれ、準備さえ整えればいつでも営業を開始できる。

「いらっしやいませー！」

そう元氣な声で三人を出迎えるのは、翠屋のエプロンを着たレヴィだ。その隣には、恥ずかしそうにしているユーリもいる。シユウは、へえ、と吐息を漏らした。

「久しぶり、レヴィ、ユーリ。似合ってるよ」

「ほんとに？ ちよつと嬉しいかも」

「ありがとうございます、シユウ」

レヴィが笑顔で言つて、ユーリははにかみながらもそう言う。

「一階はあとでゆっくり見るといいだろう。先に二階と三階を見て、部屋決めをするぞ」

「ダイアーチエの言葉に、シユウとシユテルは頷いた。」

二階と三階は五人の居住スペースだ。一階の奥の階段を上がるとまっすぐに延びる廊下があり、その左右に個室が四部屋ずつ、合計八部屋用意されている。そのうち三つが風呂場や客間などで利用され、空いているのは五部屋。そのどれを誰が使うか決めるのが今回の目的だ。

ちなみに三階は共用スペースで、大きな部屋が二つ用意されている。皆でゆっくりくつろぐための部屋だ。地下室も二部屋あり、そこは物置などになる予定だ。

「シユウは希望とかがありますか？」

ユーリがそう聞いてきて、シユウが頷いて言つた。

「シユテルの隣がいいかな」

「……………」

シユテル以外の三人が、複雑そうな、苦笑と微笑が入り交じった表情を見せる。シユテルはいつも以上に無表情だ。

「うぬら二人は同じ部屋でいいのではないか……う？」

思わずディアーチェがそう聞いて、

「私物が多くなると僕がすごく申し訳なくなる」

「そ、そうか……」

ディアーチェはそれきり黙り込み、しばらく沈黙が支配する。しばらくして、シユテルの、そろそろ決めましょうという言葉に促され、部屋決めが始まった。

夜。調理器具などを試すことも兼ね、シユテルとディアーチェが一階の調理場で料理をしている。シユウとレヴィ、ユーリはテーブルで雑談をしていた。二人から聞くのは、ここでの生活についてだ。今のところは特に変わりはない、という内容だった。

「お待たせしました」

シユウとディアーチェが厨房から出てくる。運ばれてきたのはそれぞれ違う料理で、レヴィにはカレーライス、ユーリにはハンバーグ、シユウには唐揚げだった。シユテルとディアーチェは、それぞれエビフライとオムライスだ。

「デザートもありますよ」



そう言うシュテルが持つてくるのは、ショートケーキとモンブランだ。

「厨房はどうだったの？」

「とても使いやすい内装でした。中の機器類なども良いものです。さすがはディアーチエ」

「厳選したからな。まあ、その分費用はかかったが、問題のない範囲だ」

腕を組んで自慢げに言うディアーチエ。故に、と続ける。

「申請も終わつておるからな。明日からでも営業できるぞ？ ……引越しが終わつて

いない以上、やらぬがな」

「つまりは僕待ち、だね」

どうやら四人ともシュウの引越しが終わるまでは営業開始を待つてくれるらしい。それもそのはずで、日常生活の私物こそ少ないが、書齋に詰め込まれているデバイス関係の工具、機器類は結構な量だ。営業中にそれらを持ち込むことはできないだろう。

いや、それ以前に。

「……部屋に入りきるかな……」

シュウの部屋の書齋はこの部屋よりも広い。その書齋で物があふれかえりつつあるのだ。新しい部屋に入りきらなければ、いくつか処分も考えなければならぬだろう。

もつたいないけど仕方ないか。そう考え、頭の中で不用なものを選び始めたのだが、シユテルの大丈夫ですよ、という言葉で思考を止めた。

「地下室が二部屋あることは言いましたね」

「うん。倉庫だよ。保存できる材料とか雑貨類とか、収納するためのものだって」

「二部屋はその通りだが、もう一部屋は違う」

そう引き継いだのはディアーチエだ。

「もう一部屋はうぬの作業場だ。好きに使い」

「え……？ いいの？」

「必要ないと言われても部屋が余るだけです。遠慮しないでください」

「そうそう！ シユウにはデバイスのことについてお世話になってるしね。だから遠慮しなくていいの！」

レヴィが笑顔で締めくくり、他の三人もその通りだと頷いてくれる。シユウは申し訳ないと思いつつも、四人の厚意に甘えることにした。彼女たちのデバイスは常に最良に保とう、心の中で誓いながら。

その日は人数分用意されていた寝袋で、三階にて就寝することになった。

レヴィとユーリは今日も準備や片付けなどで忙しかったらしく、寝袋に潜ってすぐに整った寝息を立て始めた。シユテルとディアーチエはシユウの卒業式の日程を考慮し

て、今後の予定を相談している。シユウも一応それに参加はしているが、ほとんど聞いているだけとなっていた。

「うぬの希望はないのか？ 両親に挨拶などもせぬつもりか？」

「ディアーチェにそう聞かれ、シユウは少し考える。未だにほとんど会わないのだが、今まで世話になっているのだ、やはり挨拶ぐらいは必要だろう。」

「じゃあ、卒業式のあと、二日ほど欲しいかな。文花とも少し話しておきたいし」「うむ。了解した」

「シユテルたちは、誰かと会ったりしないの？ なのはとかはやてとか」  
「予定表を修正していたシユテルが顔を上げる。何かを考える素振りを見せ、そして首を傾げた。」

「ナノハたちもいずれミッドチルダへと引越してくる予定ですが」  
「……ああ、そうでした」

「なのはたちは管理局で働くらしいので頻繁に会うということとはできないだろうが、会おうと思えばいつでも会えるだろう。わざわざ別れを言う必要もない。しかし何も言わずに行くというのも、シユテルと仲の良いのがかわいそうだろうと思つて」と、

「ですが、そうですね。あなたが両親と会っている間に、私もナノハや桃子さんたちに

会っておきましょう」

シユテルがそう言ったのを聞いて、シユウは自然と笑顔になった。きつとなのはたちも喜ぶだろう、と。

「ではシユウの卒業式の翌日は各々好きに過ごすことにするか。我も……不本意ではあるが、子鴉どもに挨拶ぐらいしてやろう」

デイアーチェの言葉を聞いて、シユウは思わず苦笑していた。口ではこう言うデイアーチェだが、はやてのことを気に掛けていることはよく知っている。最後まで素直じゃないな、と思ってしまう。

「では、明日に備えて休みましょう」

「そうだな。では明かりを消すぞ」

「うん。おやすみ、シユテル。デイアーチェ」

三人がそれぞれ寝袋に潜り込んでいく。

開店前の喫茶店。窓から漏れ出るわずかな光が消えて一日が終わる。明日の朝日を待つて、五人の住人は眠りに落ちた。

## 出立（シュテル）

シュテルは、珍しくどこか緊張した面持ちで立ち、目の前の人の言葉を待っていた。シュテルの目の前にいるのは、いすに座った高町桃子だ。八等分にされたケーキの一つを、桃子はゆっくりと口に運ぶ。

「いかがでしょうか」

シュテルの言葉に、桃子は笑顔を浮かべた。

「ええ、すごく美味しいわ。十分合格点」

その言葉に、シュテルは安堵の吐息を漏らした。切り分けた残りのケーキが、店のケースへと並べられていく。本日限り、数量限定と書かれたポップ広告もつけられた。

「定期的に戻ってくるの？」

シュテルと共に食器を片付けながら桃子が聞く。

「はい。一ヶ月に一度は戻ってくるつもりではありません。まだまだ教わっていないことも多いので」

「もう十分教えたつもりなのだけども……。でも、そうね。お互いに教え会って切磋琢磨

磨みましょうか」

桃子の申し出に、よろしくお願いしますとシユテルは頭を下げた。

開店した翠屋を後にして、シユテルは町中を歩く。桃子には手伝いますと申し出たのだが、他のところにも挨拶してきなさい、と半ば追い出されるように送り出されてしまった。慣れ親しんだ海鳴の街を歩きながら、シユテルはどうしようかと考える。

商店街やご近所など、軽い付き合い程度の場所へはすでに家族総出で挨拶を済ませている。シユテルたちが引つ越して遠くへ行くと聞くと、多くの人が驚き、別れを惜しんでくれていた。ずいぶんとこの町とも深い付き合いをしていたものだ、と思う

「ああ、そう言えばあそこがまだでしたね」

行き先を決めて、シユテルはそちらへと足を向けた。

しばらく歩き、そしてたどり着いたのは小さな書店。ここだけはまだ挨拶を済ませないなかつた。

「失礼します」

そう言つて中に入る。初めて来た時から、品揃えを除いて何一つ変わらない書店。温もりすら感じる店内に、シユテルはわずかに頬を緩めた。並べられた本を見ながら、シユテルは奥へと進んでいく。

——懐かしいですね……。

ここはシュウと初めて会った書店だ。もし自分があの時、この書店に立ち寄ってなければシュウと出会うこともなく、それ以前に本を探していなければまずここに立ち寄る機会すらなかっただろう。もしそうなってれば、シュウの中のロストログアを自分たちが封印していたかもしれない。

「事実は小説よりも奇なり、とはよく言ったものだ」

その声へと顔を向ければ、楽しげに笑う初老の男と目が合った。ここの店主で、シュテルのことをにこやかに見つめている。

「いらつしやい。商店街の連中から聞いてるよ。挨拶に来てくれないかと思っていた」「すみません。遅くなつてしまつて……」

「いやいや、来てくれただけで十分だよ。今更話し込むこともないしね」

男はそう言いながら、カウンターの下、おそらく棚になつていたのであろう場所から本を一冊取り出した。古い本のようなだが、丁寧に扱われているようで状態は良い。それをシュテルへと差し出してきた。

「もう本を勧めるのも最後になりそうだからね。とつておきだ」

「ありがとうございます。……とても古い本そうですね」

受け取つて中身に軽く目を通す。どうやら日本を舞台にしたファンタジー小説のようだ。

平凡な少年が魔女と出会い、魔法の世界へと旅立っていく、という内容だった。シユテルは大きく目を見開くと、男を見る。男はただ楽しげに笑うだけだ。

「君たちと会えて良かったよ。この街に立ち寄ることがあればまた顔を出してくれ」  
そう言う男の表情からは、何も読み取れなかった。

その日の晩は自宅のマンションに戻った。このマンションで寝起きするのは、シユテルはこれが最後だ。そう思うと感慨深いものがある。だからといって特別なことをするわけでもなく、普段通りに過ごしてはいるが。違うことと言えば、夕食の席にシユウがないことぐらいだ。

シユウは現在、アパートの方に戻っている。シユウにも思うところがあるのだろう、四人で相談して邪魔をしないことにしていた。

翌朝。シユテルはディアーチェと共に朝食の準備をして、ラップをかけて食卓に並べておく。二人で満足そうに頷く。

「では王。私は先に」

「うむ。我はユーリとレヴィと出るとする。気にせず行ってこい」

王の言葉に、シユテルはありがとうございます、と頭を下げた。食卓をもう一度見て、少し名残惜しく感じている自分の感情に内心で驚く。今までの生活を思い出すと、自然と笑みがこぼれた。



隣から笑いを堪える声が聞こえ、シュテルはディアーチエへと振り返る。どうかしましたか、と。

「いや、なに。ずいぶんと変わったものだと思っただけだ」

「変わった……ですか？」

「うむ。最近のうぬは以前よりも笑顔が多くなった」

もつとも、常の無表情と見分けがつきにくい笑顔の方が多いが、とディアーチエが付け加える。そうでしょうか、と首を傾げながらも、そうかもしれませぬとすぐに頷いた。

「ですがそれは王も同じでしょう。よく笑っています」

「そうか？ ……そうかもしれんな」

二人揃って食卓を見やり、同時に笑みをこぼした。目覚めた頃からでは考えられないことだ。

「それでは」

「うむ。気をつけてな」

ディアーチエの見送りを受け、シュテルは自宅を後にした。

向かった先は、高町家だ。今日一日はなのはと過ごすことになっている。

インターホンを押すと、すぐになのはが顔を出した。シュテルの姿を認め、満面の笑

顔を浮かべてくる。おはよう、と嬉しそうに告げてくるのはに、シユテルもおはようございます、と返しておいた。

「早く来すぎましたか」

「そんなことないよ。大丈夫」

ちよつと待つてね、となのはが室内へと戻つていき、そしてすぐに出てきた。シユテルの隣に並び、言う。

「じゃあまずは、せっかくなので」

「模擬戦といきましょうか」

二人は顔を見合わせ、なのはは照れくさそうに笑い、シユテルも淡く微笑んだ。

模擬戦を終えた頃には、昼を少し過ぎていた。海鳴市のデパートで昼食代わりにデザートを食べ歩きをして、その後はショッピングを楽しむ。声を出しての会話ではこのお店の服がかわいい、あそこのデザートが美味しい、といった女の子らしいものだったが、それと同時に進行される念話では、

『やはりあの場面、フェイントよりも真正面から撃つべきでしたね』

『うん。でもフェイントもびつくりしたよ。あんな方法もあるんだね』

先の模擬戦での反省会だ。模擬戦は三回行い、一勝一敗一分けという結果に終わっている。お互いに忙しくなる前に明確な決着を、と密かに思っていたのだが、それは叶わ

なかった。だが、それでもいいとも思う。いずれまた戦えばいい、と。

シヨップイングの後は最近話題の映画を見て、それが終わると夕日が沈もうとしている時間になっていた。今日は高町家で一泊することになっているので、二人で帰路につく。

「あれ？ シュウ君だ」

帰路の途中、公園のブランコへと視線を向けるなのは。シュテルもその姿を確認して、思わず眉をひそめていた。

ブランコに腰掛けるシュウは、両手で顔を覆い、天を仰いで静止していた。微動だにしないので少々怖くなってくる。

「すみません、なのは。少しだけ」

「うん。大丈夫」

行つてらっしゃい、となのはに見送られ、シュテルはシュウの元へと走った。

側まで来て気づいたが、シュウは何事かをつぶやいていた。あまりに小さな声で聞き取れることはできなかったが、どうにも少し危ない人に見えてしまう。

「シュウ」

名前を呼んでみるが、反応はない。小さくため息をついて、シュウの肩を軽く叩く。そうしてやっと、シュウが反応を示した。顔を覆っていた手に隙間ができ、そこから

シユテルの顔を確認して、

「うひゃあ!」

奇声を発しながら後ろに倒れてしまった。あまりにも突然の反応だったので、シユテルは何もできずに呆然としてしまっていた。

「……シユウ?」

倒れたシユウに歩み寄ると、シユウが短く一言。

「……恥ずかしすぎて死にたいです……」

「落ち着いてください。どうかしたのですか」

シユテルが手を差し出すと、シユウはその手をしばし見て、その手を取らずに視線を明後日の方向へ投げた。シユテルが首を傾げると、

「……聞いている? 聞こえた?」

「何の話かが分かりませんので、聞いていないと思います。独り言のことなら聞こえていません」

そう正直に答えると、シユウはゆっくりと息を吐き出した。ほっと安堵するかのよう

に。  
「うん。何でもないんだ。忘れて」

そう言いながら、シユウはシユテルの手を取った。ありがと、とシユウが立ち上がる。

「こんなところで一人でどうかしましたか？ フミカと一緒にだつたのでは？」

「文花は晩ご飯の支度中。邪魔になりそうだから散歩してるところだよ」

「なるほど……。ところで」

シュウがここに来た経緯は理解した。だが、次はそれ以上に気になることができてい  
る。シュテルはシュウの横顔を観察しながら、問うた。

「なぜ目を合わせないのですか？」

う、とシュウの声が漏れ聞こえる。無言でシュウの返答を待っていると、やがてシュ  
ウはおそるおそるといった様子でシュテルの方へと顔を向けた。一つのことを除いて、  
いつも通りのシュウの顔だ。

その一つというのが、顔が真っ赤になっていること。

「シュウ……。大丈夫ですか？ 体調が悪いのなら家に……」

「いや大丈夫何でも無いただちよつといろいろ考えちゃっただけで！」

そこまで息継ぎなしで、慌てたように答えてくる。シュテルが、何を？ と更に問い  
かけると、シュウは気まずそうにまた視線を逸らした。

「いや、本当にちよつと……。いろいろ聞いて、ね。今はレヴィに言われたことが……」  
シュテルが片眉を持ち上げる。ふむ、と少し考えるように視線を下げ、分かりました  
と頷いた。

「レヴィはあとできつく叱っておきます」

「いや違うよ！ 嫌なことを言われたわけじゃなくてね！ ただその……。結婚とか……」

最後は声が小さすぎて聞き取れなかった。やがてシユウが首を振る。何でも無い、と。

「気にしすぎはよくないね……。ごめんね、シユテル。心配かけて」

「いえ……。何かありましたらいつでもどうぞ」

「うん……。ありがとう」

照れくさそうに笑うシユウを見て、シユテルは満足そうに頷いて。そして、

「お気になさらずに。貴方に元気がないと、私も調子が狂いますので」

そう言いながら、淡く微笑んだ。

「もぅいいの？」

シユテルがなのはの元に戻ると、なのはが心配そうに聞いてきた。シユテルは一つ頷き、大丈夫ですと答える。念のため振り返ってみたが、シユウはすでに帰宅したようだった。

「私たちも行きましようか、ナノハ」

「うん。そうだね」

そうして二人も、高町家への帰路についた。

高町家では、豪華な夕食をご馳走してもらった。桃子曰く、シユテルの門出を祝つて、だそうだ。それほどのことでもないだろうとは思いつつも、シユテルは桃子の料理に舌鼓を打った。

「ミッドチルダだっけ？　そこに引越すんだよね」

夕食中、そう聞いてきたのはなのはの姉、美由希だ。そうです、とシユテルが頷くと、美由希がしみじみとした様子で言う。

「そっかあ……。寂しくなるね。妹が増えたみたいで嬉しかったのに」

「はは、そうだな。こうして食べる夕食も最後かもしれないと思うと、それだけで寂しいと思えるよ」

「全くだ。最初は驚いたものだが、今となっては可愛い娘の一人だからなあ……」

恭也、士郎と続く。士郎の言葉は尻すぼみに、やがて目頭を押さえてうつむいてしまった。

「本当に……寂しく……」

「あなた……」

桃子が士郎の背を撫でる。恭也と美由希が思わず苦笑している。それを見て、いつの間にか自分は高町家の一員として認められていたのかと驚きながらも、胸が温かくなる

のを感じていた。

夕食後、なのはと共に風呂に入り、なのはの部屋で思い出話に花を咲かせた。出会った頃のことや、数多くやってきた模擬戦、共に挑んできた事件のことなど。

「貴方が墜ちたと聞いた時は、さすがに肝を冷やしたものです」

「にやはは……。あの時のことも、すつごく感謝してるよ？　ずつとりハビリに付き合ってくれたし……」

「さて、何の話でしょうか。覚えていませんね」

とほけるシュテルに、なのははまたまた、と笑顔を浮かべる。

数年前、なのはは異世界での任務からの帰還中に襲撃にあい、大けがを負った。二度と空を飛べないだろう、と言われたほどだったが、必死のリハビリにより魔導師として復帰できた。シュテルはそのリハビリに、ほぼ毎日付き合っていた。

「シュテルがいなかったら、途中で挫折しちやってたかも……。だから、本当に感謝してるんだよ」

「あのような形で好敵手を失ってしまうことが不本意だっただけです。それだけですよ」

それが本当でも、私にとってはやっぱり恩人なんだよ。なのはのつぶやきのようなささやき声を、シュテルはあえて聞こえていないふりをした。



思い出話も終えたところで、就寝することになった。なのは強い希望により、なのはと同じベッドにで眠ることになっている。

「仕方のない方ですね」

「にやはは。ごめんね？」

「謝るなら戻っていいですか？」

「それはだーめ」

ベッドから出ようとしたシュテルの腕をなのはが捕まえる。シュテルはやれやれと首を振って、ベッドの中へと戻った。

「シュテルはあつたかいねえ……」

「そうですか」

寄り添ってくるなのはに小さくため息を漏らしながらも、シュテルはなのはの頭を撫でてやる。なのはは驚いたようにびくりと体を震わせたが、すぐに幸せそうな笑顔を浮かべ、その身を預けてくる。警戒が一切ない姿。さほど悪い気はしないので、シュテルはなのはが眠るまで彼女の頭を撫で続けた。

翌日。朝食を終えてリビングでしばらく寛いだ後、シュテルは高町家の玄関に立つた。今日は休日の最後の日で、シユウと約束がある。シユウが以前暮らしていたアパートでの待ち合わせで、そろそろ出発しなければならぬ。

身支度を調べて靴を履く。見送りに来たなのはと一緒に玄関を、高町家を出る。なのは以外の皆は仕事や学校、訓練などで家を空けていた。

「それではナノハ、お世話になりました」

「うん……」

なのはの表情は浮かない。今朝からずっとこの調子だ。気晴らしに一緒に朝食を作ったりもしたが、結局いつもの調子に戻ることはなかった。

「どうかしましたか、ナノハ」

「何でも……ないよ……?」

「……………」

せめてもう少し隠す努力をするべきだ、と思うが、その言葉は小さな吐息として無音で吐き出した。

「もう二度と会えなくなるわけではありません。ナノハもいずれはミッドチルダで暮らすのでしょ」

「……………うん。そのつもり、ではあるんだけど……。ちゃんとまた、会えるかなって…………」

この言葉にシユテルはわずかに驚いた。なのはが言おうとしていることは分かる。管理局は決して安全な職場ではない。むしろなのはが選んだ道は常に危険が伴うものであり、シユテル自身も囑託魔導師として働く時は安全な任務ばかりではない。いつ、

どこで、誰がいなくなっても、不思議ではない世界だ。

つまりは、弱音。なのはがここまでではつきりと弱音を口にするのは本当に珍しい。無表情が常のシュテルが目を丸くするほど驚く程度には。

「貴方らしくもない」

シュテルが小さく首を振る。そうだよ、と眉尻を下げてそのまま笑うのはに、シュテルはそつと手を差し出した。彼女の頬に触れて、告げる。

「貴方なら大丈夫ですよ。あなたの力量は私が保証します。だから自信を持ってください」

「うん……。ありがとう、シュテル」

ようやくなのはが薄く微笑む。いつもの笑顔ではなかったが、さすがにそこまで求めるのも酷だろう。シュテルは小さく頷くと、なのはから距離を取った。

「次はミッドチルダでお会いしましょう。その時は、そうですね。サービスしますよ」

「え？ 奢ってくれないの？」

「……ふむ。考えておきましょう」

冗談だよ、と笑うのはと、分かっていますと無表情に答えるシュテル。なのはが楽しげに、シュテルは薄く笑う。

「ではナノハ。次にお会いする時まで、貴方の道が勝利に彩られますように」

なのはが目を瞞るのを見て、シユテルは満足そうに頷き、きびすを返した。

今の言葉は、なのはと最初に出会った時、別れ際に送った言葉だ。なのはが覚えてい  
るかどうかは分からなかったが、今の反応から察するに覚えていたのだろう。少しだけ  
気恥ずかしさを覚えてしまうが、それを心地よくも感じる。

「シユテル！ 元気でね！ 絶対に会いに行くから！」

「期待しないで待っておきます。無理はしないように」

それでは、さらばです。

そう言い残し、シユテルは足早にその場を立ち去る。これ以上ここに留まると、自分  
まで辛くなってしまう。そう、感じてしまっている。

なのはが自分たちの店に来られる時間はしばらくは作れないだろう。頻繁に顔を合  
わせていただけに、それが少しだけ寂しく思う。そう感じてしまっている自分に驚きも  
する。

「またいずれ……。その時は私の自信作をご馳走しましょう」

小さな声でつぶやいて、その時のことを思い描く。

高町家を後にして、思い人の元へと向かいながら、シユテルはどこか楽しげに笑って  
いた。

## 出立（レヴィ）

『子供を人質に取るとは！ ゆるさん！』

『ふはは！ 何とでも言うがいいわ！』

デパートの屋上、大きめのステージで今話題の特撮ヒーローと悪の怪人が向かい合っていた。小さな男の子が怪人に捕まっており、男の子は涙目でヒーローを見つめている。あまりに純粋な瞳に、ヒーローと怪人の中の人が心の中でごめんよと謝っていることは誰も知らない。

レヴィはそれを集団の最後列で見ていた。隣にはユーリもいて、二人で瞳を輝かせている。ヒーローと怪人が変わっても展開はほとんど同じなのでこの後の話も予想がつくのだが、それでもヒーローが活躍する様はとても格好いい。二人はそのショーを、飽きることなく最後まで見続けていた。

ショーの後、レヴィとユーリはメモを片手に食品売場に来ていた。メモはデイアーチエから渡されているもので、そこには買い出しの内容が書かれている。売場の位置まで丁寧に説明されているので、迷わずに食品売場を歩いて行く。それほど時間もかから

ずに買い物は終わり、二人はまっすぐに自宅のマンションへと戻った。

「やつぱりかっこいいね！　また見たい！」

リビングでレヴィが弾んだ声で言う。レヴィはまっすぐにテレビへと向かうと、電源をつけて目的のチャンネルに合わせた。画面に映るのは、先ほどショーで見たヒーローが主役の特撮だ。オープニングテーマが流れ初め、二人揃って歌う。

「でももう見られないのが残念ですね」

オープニングが終わり、ユーリが沈んだ声でそう漏らす。レヴィはそのことを忘れていたのか、一瞬ぼかんと間の抜けた表情をした後、ほんとだ、とうつぶわいてしまった。途端に重たくなった空気に、隣のキッチンで料理をしていたディアーチェが苦笑した。

「あちらにも同じような特撮ぐらいはあるだろう。だからそう気を落とすな」

「違うんだよ王様！　このヒーローだからかっこいいんだよ！」

「そうです！　ディアーチェは何も分かっています！」

二人の反論にディアーチェは苦笑を濃くする。それを何度言うつもりだ、と。

ずつと放映し続ける特撮などほとんど存在しない。一つの番組が終わり新しいものが始まるたびに、レヴィとユーリは一時的に落ち込み、そして次のヒーローに夢中になる。そのため今の落ち込みも一時的なものだろう、とディアーチェは心配していない。

「ところ今日の夕食だが、ハンバーグカレーでいいな？」

「カレー！　もちろんだよ王様！」

「ハンバーグですか！　大好きですディアーチェ！」

夕食のメニューだけで先の落ち込みが嘘のようだ。その二人の様子に笑みをこぼし、ディアーチェは料理に取りかかった。

食卓にディアーチェ特製のハンバーグカレーが並べられる。その頃になって翠屋に出かけていたシュテルが戻ってきた。その手には一冊の本が抱えられている。

「あれ、シュテルん。新しい本も買ってきたの？」

「いえ、面白い物ですよ。夕食後にでも読もうかと」

シュテルは本を部屋の隅に置く。そこには引越し先へと持つて行く荷物が纏められている。量は少なく、大きめのかばんが一つあれば十分収まる量だ。シュテルはキッチンに向かうと、ディアーチェに料理を手伝えなかったことを詫びていた。

二人も食卓につき、揃って手を合わせる。そしてすぐに一口頬張った。

「うん！　やっぱり王様のカレーが一番だよ！」

「む……。そうか」

ディアーチェがそう言ってそっぽを向く。いつもまっすぐに言いおつて、とディアーチェはつぶやいていたのだが、レヴィはカレーに夢中で聞き取れず、それを聞いたシュ

テルとユーリが苦笑していた。

夕食後はいつも通りにテレビを見て過ごし、少し早めに就寝した。

翌朝。レヴィとユーリが起きた時、すでにシユテルは出かけた後だった。なのはと共に過ごすらしい。食卓にはシユテルが用意してくれている朝食が並んでいた。おにぎりとお味噌汁だ。

「レヴィ。いつ行くのだ？」

味噌汁をすすりながらディアーチェが聞いてくる。レヴィは味噌汁とご飯を混ぜながら、少し考える。シユテルがなのはと約束しているように、レヴィもオリジナルであるフェイトと約束をしている。ただそう言えば時間を決めてはいなかった。

——でも……。なんだか楽しそうにしてたなあ……。

フェイトの顔を思い出す。フェイトの誘いを受けた時の嬉しそうな笑顔。それを見ていると、どうしてか自分も嬉しくなった。

「ご飯食べたら、でもいい？」

「我に聞くな。好きにするといい」

ありがと、とレヴィはねこまんまを急いで食べ始めた。

朝食を食べ終え、ディアーチェとユーリに手を振って自宅を後にする。フェイトの家に遊びに行くといつもカレーが出てくるので、それがとても楽しみだ。レヴィ好みの味



を覚えたのか、フェイトの作るカレーはディアーチエのそれに匹敵するほどだと思っている。昨晚もカレーだったが、カレーなら毎日食べられる。

鼻歌を歌いながらフェイトの家へと向かう。行き交う人がレヴィを見て微笑ましいと笑顔を浮かべるが、レヴィはそれには気づかない。もつとも、気づいたところでやることもないのだろうが。

しばらく歩いて、ようやくフェイトに家にたどり着いた。インターホンを押すと、すぐにフェイトが出てくる。

「おいつす！ オリジナル！」

「うん。いらっしやい、レヴィ」

レヴィの元気な挨拶に、フェイトが柔らかな笑顔を浮かべた。

「うん！ 美味しい！ さすがオリジナル！」

「あはは。ありがとう」

リビングでレヴィがカレーに舌鼓を打つ。レヴィの向かい側にフェイトは座り、その様子を微笑みながら見守っていた。フェイトの隣に座るアルフは苦笑するだけだ。

「いつも思うけど、本当に子供だねえ。フェイトとは大違いだ」

「私もまだまだ子供だよ？」

「いや、少なくともこいつほどじゃないと思うけどね」

そうかな、とフェイトが首を傾げる。あまり意識したことがない。

「レヴィ。晩ご飯は何がいい？」

今日は、シユテルはなのはの家で泊まると聞いている。レヴィもここに泊まる予定だ。好きなものを作ってあげようと思って問いかけると、

「カレー！」

「ま、また？ 他にはないの？ 何でもいいよ？」

さすがに二食連続はどうだろうかと思い、聞き直してみる。むう、とレヴィは少し考えると、じゃあ、と前置きして、

「ご飯じゃなくてナンのカレー！」

「……カレーからは離れないんだね」

フェイトは苦笑しつつも、買い物計画を組み立て始めた。その隣ではアルフが呆れたような表情をしていた。

昼過ぎ。レヴィはフェイトに連れられて最寄りのスーパーを訪れた。フェイトと共にカレーの材料を選んでいく。

「ねえねえオリジナル！ これとか美味しそう！」

「だめだよレヴィ。お菓子は一つまで」

「ぶー」

レヴィが頬を膨らませ、フェイトが仕方ないなあ、と困ったように笑う。レヴィが持つていたお菓子をその手に取ると、そのまま買ひ物かごに入れた。レヴィが驚いて目を丸くする。

「あれ？ いいの？」

「うん。今日は特別だよ」

「わあい！ さすがオリジナル！ ありがとう！」

甘やかせずぎかな、と思ひもするが、こうして一緒に買ひ物をするのは、少なくとも海鳴市では最後だろう。少しぐらいの我が儘なら聞いてあげようとも思える。

スーパーをゆつくり回っていると、目の前から見知った二人組がこちらへとやって来ていた。レヴィもすぐに気がつき、嬉しそうな表情をする。相手の二人もこちらに氣づいて、意外そうな表情をした。

「こんなところで会うとは思わなかつたよ。こんにちは、フェイト」

笑顔でそう言うのは、シュウ。シュウが押す車椅子に座る文花も、こんにちはと頭を下げる。

「シュウ、ボクには？」

「いつも会つてるからいいかなと思つただけだ。こんにちは、レヴィ」

そう言つてシュウがレヴィの頭を撫でると、レヴィが嬉しそうに相好を崩した。

「二人も晩ご飯のお買い物？」

フェイトが聞いて、文花が頷いて答える。

「はい。せっかくだからお兄ちゃんの好きなものを作ろうと思っただけ……」

最後に言葉を濁し、背後のシユウを睨むように振り返る。フェイトが困惑していると、レヴィが得心したように手を叩いた。首を傾げるフェイトにレヴィが説明する。

「シユウには好きなものがないんだ！」

「ちよつとレヴィ、それだと僕がとても嫌な奴に聞こえるんだけど」

きよとんとするレヴィにシユウがため息をついた。その一連の流れでフェイトは理解する。つまりシユウは、レヴィにとつてのカレーのような、一番好きな料理、というものがないのだろう。

「作る側にとつては何でもいいが一番困るんです……」

「あ、あはは……」

文花の、シユウに負けず劣らずのため息には苦笑を漏らすしかない。レヴィの好物が分かりやすく良かったと少し思ってしまう。

「ところでレヴィ。さつきディアーチェと会ったよ」

「王様に？」

レヴィが目丸くする。王様は今日は何をするんだっけ、と腕を組んで考え始めた。

すぐに思い出したのだらう、手を叩き、

「ユーリと一緒に出かけだった！」

「うん。はやてと一緒にいたよ。ちよつと喫茶店のことで聞いていないことをいきなり言われて、すごく驚いた……」

「……何があるの？」

複雑そうなシユウの表情が気になり、フェイトがレヴィに問いかける。だがレヴィも首を傾げ、知らない、と首を振る。レヴィに知らされていないのか、単純にそれと気づいていないのか、どちらかは分からないが。

「王様が聞きにくいことがあるって言ってたけど、それは違うような気もするし……」

「え？ なに？ その言い方、すごく気になるんだけど」

途端にシユウが不安げに聞いてくる。レヴィは一度頷いて、真顔で言った。

「シユウってシユテるんといつ結婚するの？」

レヴィのその一言でもたらされた反応は、三者三様、そして劇的だった。

シユウが一瞬唾然とした後、見る見るうちに顔を赤くし、いやそれはちよつとなんというか、としどろもどろになっている。文花はそんな兄の様子を興味深そうに、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべて観察し、フェイトは顔を真っ赤にして、しかしやはり興味があるのかシユウの反応をじつと見ていた。

「ところで結婚って何するの?」

「あ、知らないのか! いや何だろうね! 分からないなあ!」

ちよつと外に出るよ、とシユウが慌てたようにその場を走り去る。逃げたな、とフェイトと文花は笑っていた。

「文花。車椅子は私が押すから、一緒に買い物する?」

「あ、はい。じゃあお願いします」

文花の車椅子の後ろに回り、押し始める。レヴィは、どうしたんだろう、とずつと首を傾げていた。

——悪気が一切ないっていうのが、レヴィの怖いところかな……。

レヴィを手招きしながら、フェイトは苦笑していた。

夕食後。レヴィはフェイトお手製のナンを大喜びで食べてくれていた。焼きすぎたかな、と思えた量だったのだが、レヴィはそれを苦も無く平らげてしまっている。むしろお代わりを要求されたほどだ。さすがに材料がなかったためにパックのご飯で我慢してもらったが。

ごちそうさまでした、と手を合わせ、二人で片付けを始める。洗い物をしながら、フェイトはレヴィの家族の話をずつと聞いていた。レヴィが家族の話をする時は、とても楽しそうに、自慢げに話してくれる。皆のことが好きだということがよく分かる。

「そう言えばオリジナルの家族の話聞いたことがないような……。せつかくだから教えてよ」

そうレヴィにせがまれて、フェイトは少し考える。フェイトにとつて、レヴィは妹のような存在だと言える。話しても問題ないだろう。他言無用だと言えば、レヴィはきつと守ってくれるはずだ。

「そうだね。じゃあ長くなるから、寝る時にでもいいかな？」

「いいよ！　じゃあお風呂だ！」

「え、レヴィ、ちよつと待って！」

早く話が聞きたいのか、レヴィがバスルームへと駆けていく。フェイトも慌ててそれを追った。

「……ほんと、ガキンチョだね」

アルフは一人、リビングでテレビを見ながらそんなことをつぶやいた。少しだけ、フェイトに構ってもらえないことを寂しく思いながら。

フェイトの部屋のベッドに、フェイトとレヴィは一緒に横になっている。最初はフェイトがベッドを譲ろうとしていたのだが、

「ええ！　オリジナルも一緒に寝ようよ！」

レヴィのその一言により今の状態になった。そして今は、フェイトの家族のことを話

し終えたところだ。

「ふうん……。オリジナルにも色々あったんだね」

「あはは……」

ジュエルシードを巡つての事件を説明したが、その一言で片付けられてしまった。レヴィにとつては資料などで知っていることが多かったため当然なのかもしれないが。

「じゃあオリジナルのお姉ちゃんとは会えないのか。残念」

「うん……。私も会ってみたかったんだけど、ね」

フェイトはアリシアのことは記憶でしか知らない。実際に会ったことなど一度もない。一度ぐらいは会つて話をしてみたかっと思つたが、アリシアが死ななければ自分は生まれなかつただろう。そう思うと、複雑な心境になつてしまう。

「よおし、オリジナル！ 今日ボクがお姉ちゃんだ！ 好きだけ甘えてもいいぞ！」  
レヴィのそんな言葉にフェイトは目を見開き、次いで微笑んだ。レヴィの頭を撫でる。

「ありがとう、レヴィ」

「えへへー、もつと撫でて……つて、違うよ！ 甘えてつて言ってるんだよ！ でももつと撫でて！」

「うん。なでなで」



えへへ、とだらしく相好を崩すレヴィ。やっぱり姉というよりは妹かな、とフェイトは思いながら、レヴィの嬉しそうな笑顔を飽きずに見つめ続けていた。

翌日。

フェイトはレヴィを見送るために玄関まで来ていた。ちなみに朝食が昨日の残りのカレーだったことは言うまでもないだろう。

「それじゃ、元気でね、オリジナル」

レヴィが元氣よく手を振る。彼女はこれから自分たちの部屋の片付けの仕上げをするそう。手伝おうかとも思っていたが、レヴィにそれはだめ、と拒否されてしまっている。家族の大事なものもあるから、だそう。

「レヴィも元氣でね。こっちも落ち着いたらお店に行くから」

「うん！ その時はボクの手料理を、ご馳走してあげよう！」

「……料理できたの？」

「……次に会う時までになんぼる」

「えつと……。た、楽しみにしてるね？」

顔を逸らして答えるレヴィにフェイトは反応に困ってしまう。レヴィは一度しっかりと頷くと、

「だからオリジナル、ちゃんと店に来るんだぞ！ 待つてるからな！」

「……っ。うん。絶対に行くから……」

レヴィなりの激励なのだろう。フェイトは嬉しそうに微笑み、そして、

「じゃ、またね！ フェイト！」

レヴィの最後の言葉に、フェイトが目を丸くして絶句した。その間にレヴィは走り去ってしまう。ようやく立ち直った時には、すでにレヴィの姿は見えなくなっていた。

「……名前……呼んでくれた……」

そのことが嬉しくて、フェイトの頬は自然と緩んでいた。

「さてと！ 今日も一日がんばろう！」

楽しみに鼻歌を歌いながら、レヴィは歩く。ふと振り返り、フェイトの住まいを見て、

「元気でね、フェイト」

とびきりの笑顔でそう言った。

## 出立（ディアーチエ）

シユテルとレヴィがなのはとフェイトの家へと向かってから。ディアーチエとユーリは二人だけで洗い物をしていた。それほど多くのもがあるわけではないので、それとすぐに終わる。洗い物を終えて、それらの食器を新聞紙で包んで段ボール箱に入れる。しっかりと封をして、部屋の隅に置いた。

一段落して、ディアーチエはキツチンとリビングをゆっくりと見回す。ユーリも同じように部屋を見て、寂しくなりましたね、と小さくつぶやいた。

「うむ。もうすぐ引き払う故に当然なのだが、少し寂しくも感じるな」  
「はい。たくさんの思い出が詰まっていますから……」

できることなら、ここも手放したくはない。ユーリはそう思っているのだろう。ディアーチエも未練がないと言えば嘘になるが、残しておいても意味がないのもまた事実だ。使わないもののために維持費を払い続けるわけにもいかない。金銭面ではまだ余裕はあるが、この先がどうなるか分からないのだから。

ユーリもそれが分かっているのだろう、寂しそうにしてはいるが、残しておきたいと

は口にしない。ユーリが言えば、ディアーチエがどうかしようとする可能性が高いためだ。ただ、せめて、と思うことはある。手放す前に、綺麗にしていこう、と。

ユーリのその提案にディアーチエが賛同し、昨日は午前中は部屋の掃除をして過ごした。それでもまだ少し時間が余ったので、残りは図書館で静かに読書をしていた。掃除以外はいつもと変わらない一日だったが、それでも充実していたと自信を持っている。

「さて、では我々も行くのでしょうか」

「はい」

シユテルやレヴィと同じく、ディアーチエもはやてに招待されている。ただディアーチエはあまり乗り気ではなかったが、断ろうとしているディアーチエを見たはやてが、とても悲しげに自分を見つめてきていた。それ故にどうにも断れなくなり、ユーリも同行していいのならと行くことになっている。

「まったく、なぜ我がわざわざ出向かねばならんのだ……」

文句を言いながら靴を履くディアーチエ。そんなディアーチエを見て、ユーリは忍び笑いを漏らした。どうした、と聞くと、ユーリが笑顔で答える。

「ディアーチエは口では色々言いますが、はやてさんととても仲が良いですよね」

「は……? いや待て、なぜそうなる!」

「でももつと素直にならないと、はやてさんの方が嫌っちゃいますよ?」

そんなことを言いながら、靴を掃き終えたユーリがディアーチエの横を通り過ぎる。だから違うと言っているだろうに、とディアーチエも慌てながらそれを追った。

はやての家へと向かいながら、ディアーチエは途中の公園の時計で時間を確認する。十一時過ぎ。お昼ご飯までに来て欲しいと言われていたが、十分間に合うだろう。

「あ、王様!」

そう思っていたのだが、聞こえてきた声にディアーチエはため息をついた。進行方向から聞こえてくる声で、そちらへと視線を向けるとはやてが手を振っていた。なぜここに、と思うが、すぐにその答えを予想する。おそらくは、

「お昼ご飯ができたからなあ。迎えに来たで」

「ああ、そうであろうな……」

ディアーチエがやれやれと首を振る。こんなことならもう少し早く出れば良かった、と。

「なぜ道中まで貴様と行動を共にしなければならんのだ」

「ええ、ひどいわ、王様。あたしは王様と会えるのが楽しみやったのに」

「我は会いたく……。ええい、そんな顔をするな!」

悲しげに顔を伏せるはやてにディアーチエが叫ぶ。いつものやり取りなので当然は

やての意図にも気づいているのだが、なぜか演技と分かつていても見たくはないと思つてしまう。

「王様はあまあまですねえ」

「ですねえ」

背後からの声の一つ増えていた。頭を抱えたくなる衝動を堪えながら振り返ると、ユーリの隣にはいつの間にか小さな人影が増えている。リインフォースの名を受け継いだはやてのユニゾンデバイスだ。

「外に出るな、リイン。何も知らぬ者に見られるだろう」

そう苦言を呈すると、リインと呼ばれた子は残念です、と気落ちしながら返事をして、はやての元へと戻っていく。彼女の服の中へとその姿を隠した。

「もう少し注意させろ、子鴉」

「あはは、ごめんな？　でもリインも久しぶりに王様たちに会えて嬉しいんやと思うよ？」

それは何となくだが理解できる。特にユーリはリインと仲が良い。ディアーチエが仕事などで出かけユーリが留守番をする時など、よく八神家へ、リインに会いに行つていと聞いている。もつとも、同じようにリインも家にいれば、の時だけだが。

ただ、最近は引つ越しなどの準備で会いに行けていないとも聞いていた。それ故に久

しぶりに会えてお互いに嬉しいのだろう。邪魔をするのは無粋だと思うが、せめて誰にも見られない家まで我慢してほしいと思う。

ただ単純に、あまりおもしろくない、と感じてしまうためかもしれないが。

「じゃあ、行こか」

はやてがそう言うのと、もう一つの声が届くのは同時だった。

「あれ？ ディアーチエにユーリ。はやても一緒だなんて珍しいね」

声の主を求めて公園へと視線を投げる。公園の入り口にシュウが立っていた。

「シュウか。どうしたのだ？」

ディアーチエが聞いて、シュウが答える。

「散歩、だよ。文花の邪魔にならないように。ちなみにお昼ご飯作ってくれてます」

「ふむ。そうか」

昼食の予定がないなら作りに行くのも悪くない、と思ったのだが、どうやら心配する必要はなかったらしい。早めに戻って一緒にいてやれ、と言うと、シュウは少し考える素振りを見せ、やがてしつかりと頷いた。

「次はいつ二人で過ごせるかは分からないしね。じゃあ戻るよ」

そう言つて、きびすを返すシュウ。その背中へと、ディアーチエは思い出したかのよう

「ああ、そうだ。事後承諾になるが、言っておくことがある」  
「ん？」

「事業開始の書類だがな、店の責任者、つまりは店長にはうぬの名前を書いておいた」  
シユウの動きがびたりと止まる。はやても初耳だったのだろう、目を丸くして驚いていた。

「な、なんで僕が店長？ デイアーチエじゃないの？」

シユウのその問いにデイアーチエが首を振った。薄く苦笑の色をにじませ、言う。

「我は料理を作らなければならんのでな。それに、うぬは経営の勉強をしていると言っていたであろう。適任だ」

それはそうかもしれないけど、とシユウの笑みが引きつっていく。デイアーチエはそんなシユウから視線を逸らし、はやてを促して歩き始める。

「よろしく頼むぞ、店長」

デイアーチエが悪戯っぽく笑いながら言うと、シユウは目を瞠り、やがて、まあいいかと頷いていた。

「シユウ君が店長さんかあ」

八神家のキッチンにて、はやてが昼食を作りながらそう口を開いた。デイアーチエは



リビングで本を読みながらそれを聞く。返事はしない。

一方的に世話になるのは不本意だからとディアーチエは手伝おうとしたのだが、はやてがそれを拒否した。晩ご飯の時にお願いします、と。

「シユウが経営……でしたっけ。それを勉強してゐるって聞いた時から実は決まっています」

はやてに答えるのは、ディアーチエの隣に座るユーリだ。ユーリの目の前にはリインがいて、こちらも二人で本を読んでいた。

「へえ……。じゃあ早めに教えてあげたら良かったのに。ミッドチルダと日本やとやっぱり細かいところで違うやろうし」

「それは考えたが、シユテルと相談して学校が終わってからと決めたのだ。こちらの勉強にまで時間を使って学生生活に悔いを残してもらっては困るのでな」

「なるほどなあ。さすが王様、優しいな！ そんな王様にご褒美のあめ玉や！」

「いるか阿呆！」

「あ、私は欲しいです」

「む……。よこせ子鴉」

はやてに怒鳴っていたディアーチエだったが、ユーリの言葉ですぐに表情を改めた。はやてが笑い出しそうになるのを堪えながら、あめが入ったかごをディアーチエに渡

す。それを受け取り、目の前のテーブルに置いた。

ユーリが瞳を輝かせ、ディアーチエとはやてを交互に見る。はやてが、遠慮せんといてな、と言い、ディアーチエが頷くのを見て、ユーリは嬉しそうに飴へと手を伸ばした。「でももうすぐこつちも出来上がるから、あまり食べ過ぎんようにな？」

「はい！　もちろんです！」

ユーリの笑顔を見て、はやてが目を細める。遠くを見るような、懐かしい思い出を思い出すかのように。ディアーチエはそのはやての表情を見て、何も言わずに本へと視線を落とした。

ラインフォース。ラインの先代は数年前に旅立った。そのラインフォースともユーリは仲が良かったようで、やはり八神家へとよく遊びに行っていたそうだ。ユーリの笑顔は、ラインフォースのことを思い出させるのかもしれない。

「子鴉」

ディアーチエが呼ぶと、はやてがはつと我に返った。照れくさそうに苦笑してキッチンへと戻っていく。

そんなはやての背中をディアーチエが少しだけ気遣わしげに見ていたのだが、そのことには誰も気づかなかった。

「ただいまー！」

玄関から元気な声が届く。駆けてくる足音に続いて顔を覗かせた相手に、ユーリは笑顔で言う。

「おかえりなさい」

「ただいま！ そっか、今日はユーリが来る日か」

声の主、ヴィータが得心したように頷く。彼女に続いて、シグナムとシャマル、ザファイラもリビングへと入ってきた。ザファイラは狼の姿だ。三人とも挨拶を交わす。

「ユーリちゃん、はやてちゃんは？」

シャマルが聞いて、ユーリがキッチンへと視線を向けた。

「ディアーチェとご飯を作っていますよ」

「え……。あの二人が？ 一緒に？」

信じられない、といった様子ヴィータに、ユーリは思わず苦笑してしまった。ヴィータの反応は正しく、一緒に料理を作るといふことは今までにほとんどなかったはずだ。

「一緒にといっても、二人で分担しているだけみたいで……」

「貴様！ それは作りすぎだろうが！ 何を考えているのだ何を！」

「あははははは！」

「笑い事かああ！」

突然響き渡るディアーチェの怒声とはやての笑い声。ユーリとリインが顔を見合わせて笑い合い、ヴィータが驚きで目を丸くする。シグナムはやれやれと首を振り、シャルは困ったような笑顔を見せる。ザフィーラは、ため息。

「でもまあ、いつも通りだよな」

ヴィータが言つて、シグナムもそうだな、と頷いた。

「でもこのままじゃ心配ね。ちよつと手伝つてくるわ」

「いやそれはいいと思う！」

「そうだシャル！ 疲れているだろう、まあ座つて休め！」

キッチンへと向かおうとしたシャルを慌てて止める守護騎士たち。ザフィーラまでがシャルの通り道を塞ぐほどだ。息の合ったコンビネーションである。

「この光景もいつも通りですよね」

「あはは、そうですね」

ユーリとリインはそう言つて笑い合つた。

食卓に豪華な料理が並ぶ。テーブルの中央に並ぶ五枚の大皿には五種類のおかずがそれぞれ盛り盛られているのだが、中でも目を引くのは中央の大皿。唐揚げがこれでもかと

いうほどに盛られ、ちよつとした山になっていた。どうやらこれが、ディアーチェが作りすぎだと怒っていたものらしい。

「喜べ。ギガウまの唐揚げが山になっているぞ？」

ディアーチェが発する珍しい皮肉にヴィータの表情が引きつる。ディアーチェの隣、はやては楽しそうな笑顔でヴィータを見つめている。シグナムたちは誰も視線を合わせようとせず、食器の準備を黙々とこなしていた。

「たくさん食べられますねー」

「食べられますねー」

ユーリとリインが柔らかい笑顔で嬉しそうに言う。その二人に毒気を抜かれたのか、ディアーチェは力なくため息をついた。食器の準備を終えて全員が食卓についてから、「これだけ人数がいれば……何とかなるだろう……」

小さな声でそうつぶやいた。

——なぜこうなる？

心の中でディアーチェは自問する。答えは決まっている。自分に甘さが残っているからだ。

夕食はいつも通りはやてと料理の批評を交わし合った。はやては料理の腕に關して

は確かだ。お互いに学べるところがあると思つてゐる。口には出さないが、それに関し  
てははやてを信頼していた。

夕食までいい。デИАーチエは思う。問題はなぜ自分がここにゐるかだ、と。

「よし、準備完了や！ さて、寝よか？」

デИАーチエへと笑顔を向けてくるはやて。デИАーチエはそれを一瞥して、不愉快  
そうにそつぽを向く。それでもはやては楽しそうに笑つてくる。

夕食後。デИАーチエとユーリは八神家の空き室に泊まることになっており、いざそ  
の部屋に向かうところではやてが言い出した。

「王様！ せっかくやし一緒に寝よ？」

無論その言葉に対する返答は、断るといふ短いものだ。ユーリを一人にするわけにも  
いかない、という思いもあったのだが、

「じゃありん。今日は私と一緒に寝ませんか？」

「はい、もちろんですよ！」

さらりと決まつたユーリとリンの就寝。デИАーチエが言葉を失い、はやては笑み  
を深くする。

「王様。一緒に寝よ？」

「だ、誰が貴様となど寝るか！ 我は一人で寝る！」

「ええ！ そんなさみしいこと言わんと！ なあ、お願いやから、ね？」

「誰が！ 貴様となど！ 一緒に！ 寝るか！」

一語ずつ言葉を句切り、はつきりと言つてやる。そしてあてがわれた部屋に向かおうとしたディアーチェの背へと、はやての悲しげな声が届けられた。

「最後の機会やろうから、と思つてたんやけどなあ……。やつぱり、あかんか……」

ぴたり、とディアーチェの動きが止まる。ふつとディアーチェが笑みをこぼす。何度も使われた手だ。未だ騙されるほど自分は馬鹿ではない。

「もうその手には乗るか。大人しく一人で……」

振り返りながらのディアーチェの言葉は、途中で途切れてしまった。はやてを見て、動きを完全に停止、思考も止まっている。

いつもの雰囲気はなく、悲しげに顔を伏せたまま、無理強いはあかんよな、とつぶやいてきびすを返すはやて。いつもの元気さはなく、とぼとぼと一人で歩いて行く。泣きそうな、とは言わないが、それでも本当に悲しげな姿。

久しく見るその姿に、ディアーチェは絶句する。このようなはやての姿を見たのは、ただの一度だけ。ラインフォースが旅立った日だけだ。

ディアーチェはとても長いため息をつく、寝室へと足を向ける。そして、  
「早くしろ」

「え……？」

「我らも明日はやることがある。早めに休みたい。だから早くしろと言った」

ぶつきらぼうにそう告げて、はやてを追い抜いて彼女の寝室へ。はやては一瞬呆けた後、満面の笑顔を浮かべた。とても嬉しそうに、自分の寝室へと向かう。

「やつぱり王様、大好きやー！」

「ええい、抱きつくな阿呆！」

ディアーチェの叫びは空しく部屋に響いただけだった。

「優しいですねー。ユーリさんがちよつと羨ましいです」

二人が消えていき、未だに騒がしい寝室の扉を見つめながらリインが笑う。ユーリもその扉を優しい笑みで見つめながら、頷いた。

「私たちの自慢の、優しい王様ですから」

——まったく、なぜ我がこやつとなど……。

ベッドの中で、ディアーチェは心の中のため息をついた。隣でははやてが整った寝息を立てている。それを見て、かつて一度だけ見た姿を思い出し、最後ぐらいは良いかと考えを改めた。



ディアーチエは思い出す。リインが生まれる前。リインフォースが旅立つ日のことを。笑顔で見送って欲しいというリインフォースの言葉を受け、はやては彼女が消えるその時まで、ずっと笑顔だった。もつとも、最後は泣き笑いに近いものになっていたが。消えた後、少し一人にしてほしいとはやては一人で自宅へと戻った。何となく一人にするのは愚策だと思い、ディアーチエは黙ってその後を追う。そして見たのは、リビングで泣き続ける、見たこともない姿だった。

かける言葉が見つからないディアーチエは、黙ってキッチンに入り、ホットココアを二人分入れてから戻る。テーブルに突っ伏して嗚咽をもらすはやてに、置いておくぞと一言言つて、そして彼女の隣に座った。

そこから先は何もしていないし、何も言っていない。それが正解だったのかは今でも分からない。ただ、長い時間泣き続けたはやてがようやく顔を上げた時、とても照れくさそうな笑みを浮かべていて安堵したものだ。

「ありがとな、王様。隣にいてくれて」

「貴様のためではない。ここに用事があったただけだ」

少しでも心配したなどは絶対に言えない。ディアーチエはそう答えると、はやてから視線を逸らした。はやては、それでもありがとな、とやはり笑っていた。

「なあ、王様。起きとるっ」

記憶を辿っていたディアーチエは、隣からの声で我に返った。そちらへと顔を向けると、自分を見るはやてと目が合った。

「なあ、王様。聞きたいんやけどな?」

「何だ」

「やつぱり管理局に入るつもりはないんやでな?」

ディアーチエは小さくため息をつく。はやてから何度も聞かれたことであり、それに対して自分は同じことを答えている。つまりは、

「阿呆か貴様は。管理局に入って我らに何の利点が……」

「隣に王様がいてくれたら、安心やから」

ディアーチエが目を睨り、口を閉ざした。何を言っているのだ、と。はやては真剣な表情で続ける。

「あたしはまだまだ世間知らずや。だから、一人やと不安で……」

「騎士共がいるだろう」

「うん。でもみんな、王様ほどはつきりとは言ってくれへんからな……。王様なら、間違つたら無理矢理にでも引き戻してくれるやろ?」

だから、一緒に来てくれへんか?

はやてのその言葉を真正面から受け止め、ディアーチエは小さく嘆息した。どうやら

はやてはずっとこれを言いたかったらしい。

「もちろん、マテリアルのみんななそろって来てくれてもええよ〜!」

まるで引き抜きだな、とディアーチエは内心で苦笑する。そして、言った。

「管理局と関わる気はない。我らは誰にも縛られたくはないのでな。我らを縛っていいのは、我らだけだ」

「ん……。そつか。そうやでな」

変なこと言つてごめん、とはやては照れくさそうに笑う。じゃあおやすみ、と今度こそはやては瞳を閉じた。程なくしてから隣から整った寝息が聞こえ始める。

ディアーチエははやての寝顔を一瞥すると、自分も瞼を閉じた。

——もう少し、言い方があったか……?」

心の中でそんなことを考えながら。

翌日。朝食を済ませ、ディアーチエとユーリは八神家を出る。見送りははやてとリインだ。騎士たちは管理局での仕事のためにすでに家を出ている。はやてもこの後すぐに行かなければならないらしい。

「無理に見送りなどせんでも良いだろうに」

「あはは。そんな寂しいこと言わんといてや」

「ディアアーチエの言葉を聞いてはやてが笑う。その二人の側では、絶対に来てくさいね。約束、ですよ？」

「はい！ もちろん行きますよ！」

ユーリとリインが手を取り合つて仲よさそうに話をしていた。それを微笑ましく思いつながらぬ、ディアアーチエはユーリを促す。行くか、と。

「はい。行きましよう、ディアアーチエ」

名残惜しそうにしながらもユーリがディアアーチエの側へ。手を振るはやてとリインに見送られながら、ディアアーチエたちは八神家を後にする。

「……ああ、そうだ。子鴉」

途中でディアアーチエが振り返り、はやてが首を傾げた。

「昨日のことだが……」

「え……？ あ、ああ！ 忘れてええよ！ むしろ忘れて！」

慌てたように手を振るはやてに、なら言うなという言葉は心の中で留めた。その代わりに、一晩考えた末の言葉をはやてに告げる。

「我らは管理局に関わるつもりはない。だが、まあ……」

そこまで言いかけて、少し気恥ずかしく感じてディアアーチエはそっぽを向いた。その先にユーリの笑顔があつて、赤くなりつつある顔を見られないようにさらに顔を背け

る。

「貴様らの頼みなら、少しぐらいなら手を貸してやらんでも、ない」

「え……。王様、それって……」

唾然とした様子でつぶやくはやてへ、ディアーチエは顔だけ振り返り、

「だからたまには顔を出すといい。はやて」

そう言い終えると、足早に歩き出す。今までのことがあるだけにとても恥ずかしい。はやての顔を見ないようにして急いでその場を離れていく。そのすぐ後ろを歩くユーリは、嬉しそうに微笑んでいた。

「あはは……。どうせやったら、もっとはつきり言ってくれたらええのになあ」

ディアーチエたちが見えなくなるまで見送ってから、はやては家の中へと戻る。そろそろ準備をしなければならぬだろう。そのはやての背中を追ってくるのは、リインだ。

「はやてちゃん。泣いているのですか？」

おずおずといった様子で問いかけてくるリインに振り返り。

「大丈夫や、リイン。嬉しかっただけやから……」

泣き笑いの表情を浮かべながら、そう答えた。

## 出立（後編）

「それじゃあ皆、高校生になってもがんばるんだぞ。もちろん就職する子たちもだ」

担任教師は笑顔でそう言うと、いつもの終礼の挨拶をして教室を出て行った。シユウは自分の席でその教師を見送り、彼が出て行く直前に頭を下げた。

今、シユウがいるのは自分のクラスの教室だ。先ほど卒業式が終わったところで、学校生活最後のホームルームもたった今終わった。この学校に通うほとんどの学生はそのまま高校にエスカレーター式に上がるので、よくある涙の卒業式とはなっていない。シユウを含むごく一部の生徒は高校には行かずに就職するので、数少ない例外には感慨深いものはあるが。

シユウは今までの学校生活の思い出を振り返り、目を閉じて懐かしい記憶に浸る。しばらくそうしていると、誰かがシユウの肩を叩いた。我に返ったシユウが振り返ると、そこにいたのは同じクラスの友人だ。優しく明るい少年で、クラス委員長も務める人気者。ただし少々お節介な面もある。それでもそれを含めて、シユウはこの友人が好きだったりもする。

「シユウ。これからみんなでカラオケに行くけど、来るかい？」

「ごめん、ちょっと用事が……」

「そうなのかい？ 君の送別会も兼ねようと思つていたから、是非とも来てほしかったんだけど……」

それを聞いたシユウは申し訳ない気持ちになつてしまふ。普段、彼が率先してカラオケなど外の遊びを主催することは少ない。もしかすると、シユウのためにと計画してくれているのかもしれない。そう思うと行くべきかとも思うが、用事があるのも事実だ。今日と明日は文花と兄妹水入らずで過ごすと決めている。

「あかん、あかんで委員長！」

委員長の肩を掴んで誰かが叫ぶ。シユウは彼を認識した瞬間、困つたように微笑する。

コウが意地悪そうな笑みを浮かべて、そこにいた。その笑みを見て確信する。余計なことを言うだろうな、と。そしてその予感は的中した。

「シユウはな！ これから愛しい彼女とデートなんや！」

委員長が驚きで目を丸くし、その会話を聞いていた周囲の生徒が息を呑む。それらの視線が一斉にシユウを捉え、シユウは困つたように頬をかいた。

「シユウ！ どういうことだ！」

「彼女、だと……？ 裏切りものめ！」

「西崎……。信じていたのに……」

その騒ぎからクラス中の視線を浴び、シユウの彼女のことを瞬く間にクラス中に広まり、非難の言葉が浴びせられる。もちろん、純粋な悪意の言葉はさすがにないが。

——なんだこれ。

そう思わずにはいられない。誰か収拾を付けてくれないかなとも思うが、こういう時に頼りになる親友は、逆にこの騒ぎのきっかけを作った張本人だ。当てにならない。委員長もどうしたものかと困り果てている。

引きつった笑みを浮かべながら、シユウはすぐに解決策を思いついた。簡単なことだ、仕返しすればいい。

「彼女、かどうかは分からないけど、親しい女の子がいる！」

シユウの清々しいまでの開き直りに、クラス中から戸惑いの声上がる。羨ましそうな声も多数含まれているが。

「言い訳はしないけどね。でも、コウにだけは言われたくないな」

シユウがゆつくりと笑顔を浮かべた。目の前のコウが首を傾げ、そしてすぐに、やばい、と顔面蒼白になる。クラス中の視線が、今度はコウに突き刺さった。

「ねえ、コウ。……人の妹に手を出しておいて、どの口が言うのかな？」

東江幸司、ただいま西崎文花と交際中。



「ちよ、シユウ！ それはさすがに……！」

「まさかコウ、シユウの妹さんに手を出したのかい……？」

委員長の、信じられない、と驚愕の視線を向けられ、たじろぐコウ。そして非難の声はコウへと向けられる。

「お前、よりにもよってクラスメイトの妹とか！」

「それはない！ それだけはない！」

「この獣め！ テメエは地獄に落ちろ！」

「そこまで言うかつ？」

ぎやあぎやあど騒ぎ続けるクラスメイトたち。無論、本当に怒っているものなど一人もない。誰もがそれを理解している。シユウはその騒ぎを見ながら目を細め、このクラスで良かった、と心の底から思った。カラオケに行けば本当に楽しいのだろうが、文花との約束は破りたくはない。

「委員長。デートとかはコウの冗談だけど、文花と約束してるんだ。就職で遠くに住むことになってなかなか会えなくなるから、今日と明日は文花と過ごすって」

「ああ、なるほど……。それは邪魔できないね」

委員長は朗らかに笑うと、シユウの背を叩いた。

「元気でね、シユウ。文花ちゃんによろしく」

「うん。元気でね、委員長。楽しかったよ」

シユウは笑顔でそう言つて手を振ると、教室を後にした。

お世話になつた学校を後にして、シユウが向かつた先は、以前住んでいたアパートだ。未だに契約されたままの自分の部屋に入る。もうほとんどここには戻つてきていないというのに、掃除はしつかりとされていた。

「お帰り、お兄ちゃん」

その部屋の中央で、文花が笑顔でシユウを出迎えた。

「ただいま、文花」

シユウも笑顔を浮かべ、部屋の中に入る。部屋の中に荷物はほとんどなく、今では中央にテーブルと座布団があるだけだ。他のものは撤去、または処分済みである。

「文花、今日の予定は？」

今日と明日は文花に付き合う。その時に何をするかは文花に任せるつもりだった。文花は指をあとに当て、少し考えるような仕草をした後、答える。

「今日は特にない、かな？ のんびりしようよ」

文花の返答に、シユウは苦笑する。それでいいの？ と。文花も照れくさそうにしながらも、いいの、と頷いた。

「じゃあ夜までのんびりとお喋りしようか」

「うんー！」

文花の嬉しそうな表情に、シユウも頬を綻ばせた。

結局、その日は本当に夜まで他愛ない話をして、一日を終わらせてしまった。

翌日。その日も文花の希望は普段通りの一日だった。

「本当にそんなのでいいの？ 買い物でも映画でも、何でも付き合うよ？」

「いいの。今日一日お兄ちゃんを独り占めできるだけで満足だから」

「そう……？ なら、いいんだけど」

いまいち文花の考えが分からない。ただ、それでも。文花がそれでいいと言うのなら、自分はそれに付き合うまでだ。今日ぐらいは普通の兄妹らしく過ごそうと心に誓った。

夕食の買い物や散歩には出かけたが、やはり一日文花と話をしていくことの方が多かった。今までの思い出話に始まり、今後の予定の話などをする。夜はそれに加えて、今日シユテルたちと会って言われたことも語った。

「へえ、お兄ちゃんが店長さん……」

「うん。いつの間にかそうなつてたみたい」

「……お店、潰しちゃうだめだよ？」

「僕を何だと思ってるんだ」

シユウが懨然とした態度でそう言うと、文花は忍び笑いを漏らす。まったく、とつぶやきながらも、シユウはすぐに笑顔に戻った。

「レヴィさんが言っていたこと、私も気になるかな」

唐突な話題転換。シユウが怪訝そうに眉をひそめ、何だっけ、と首を傾げる。

「シユテルお姉ちゃんといっ結婚するの？」

「……………」

シユウの動きが止まった。表情すら眉一つ動かさない。まさか、文花からも聞かれるとは思わなかった。

「お兄ちゃん？」

「いや、うん……。結婚、か……」

正直なところ、考えたこともなかった。いつも一緒にいることが普通過ぎて、それ以上を求めようとも思っていなかった。ただ、隣にいてくれるだけでシユウは幸せな気持ちになれる。だが、それはあくまでシユウの感情だ。

シユテルはどう思っているのだろうか。そう考え始めたことを察したのか、文花が肩をすくめて言う。

「シユテルお姉ちゃんがどう思ってるか、でしょ。多分お兄ちゃんと同じじゃないかな」  
それを聞いたシユウは、それなら嬉しいなどだらしなく笑う。文花が呆れたようにた

め息をついて、

「二人がそれでいいなら、私も何も言わないけど」

その口調はどこか不満そうにも聞こえた気がした。

夜。シユウは文花の希望で同じ布団に入っていた。最後に、昔みたいに一緒に寝たい、と。最後に一緒に寝たのは海鳴市に来る前なので、まさか覚えているとは思わなかった。

「文花は明日どうするの？」

小声でそう問うてみる。答えがなければ、つまりもう眠っていれば明日聞けばいいかと思っていたのだが、文花は体を動かすとシユウの目を見て、答えた。

「明日はディアーチェさんたちを手伝って、部屋の片付け。その後時間が余れば、なのはこちらに指導してもらおうかなって」

「部屋の片付け、か……。ごめん、終わってなくて」

「気にしなくていいよ。あ、でもその代わり、デバイスのメンテナンスまたしてね」

「もちろん、いつでも」

そこまで会話を交わして、言葉が途切れる。今日一日のほとんどを会話に当てていたので布団の中でまで話すことなどあるわけもなく。それでも少し名残惜しく感じながらも、シユウは目を閉じた。

そしてしばらくして、片手が握られる。シユウが目を開けると、こちらをじつと見てくる文花と目が合った。

「えつと……。文花？」

戸惑いながら名前を呼ぶ。文花は何も言わずシユウを見つめ続けていたが、やがて笑顔になって、何でも無いよと布団に潜り込んだ。

翌日。シユウは自室で一人きりでぼんやりとしていた。文花は、邪魔したくないからと朝早くに出て行ってしまった。がんばってね、という去り際の言葉がまだ耳に残っている。最後の最後まで、自分は妹に心配をかけているらしい。

「どうにも、うまくいかないものだなあ……」

ため息交じりにそうつぶやくと、

「何かありましたか？」

そんな声が真後ろから掛けられ、シユウは跳び上がるほど驚いた。慌てて振り返ると、シユテルが無表情にこちらを見つめていた。その手にはコンビニの袋がある。

「えつと……。最後まで妹に迷惑かけっぱなしで情けないな、て思ってたというか……」  
誤魔化せばいいのに思わず本当のことが口から出てしまう。それを聞いたシユテルは、どこか不思議そうに首を傾げて、何を今更、と短く返事をしてくれる。

「うん。まあ……。今更、だよね」

それもそうだ、とシユウは苦笑。シユテルとのことを始め、再会してから今まで文花には心配ばかりかけている。シユテルの言う通り、今更気にするのではないだろう。

「でも最後ぐらい、もう少し頼られたかったけどね」

シユウが寂しげにそうつぶやくと、シユテルは呆れたようなため息をついた。

「十分頼られているように見えていましたが……」

気づかないのも今更ですね、とシユテルがコンビニの袋を差し出してきた。

シユテルがコンビニで買ってきたおにぎりを食べて簡単な朝食を済ませ、二人はシユテルの転移魔法である場所へと転移する。転移した場所は、薄暗い部屋だ。小さな部屋で、家具もなければ窓すらもない。万が一にも誰かに見られないようにしているような部屋で、事実そのための部屋でもある。

「何年ぶりの実家かな」

シユウが複雑そうな表情でそうつぶやいた。

ここはシユウの実家、西崎家。この部屋は両親がミッドチルダ等に向かう際に転移魔法を使う部屋だ。それ以外の用途はないため、必要最低限のスペースしかなく、地球の人に見られるわけにもいかないために窓すらもない、というわけだ。

シユウが部屋に唯一ある木製の簡素な扉を開けると、真っ直ぐな廊下に出た。シユテルが部屋から出たところでシユウは扉を閉める。ちなみに扉には、物置、と書かれてい

た。

「おかえり、シユウ。いらつしやい、シユテルさん」

声がして、シユウは正面へと向き直る。そこに立っていたのは、シユウの母親であるさくらだ。エプロン姿のさくらは、柔らかな笑顔を浮かべている。

「お父さんならリビングにいるわ。案内は、必要？」

「いらぬ。それぐらいは覚えてるよ」

あらず、とさくらは少しだけ残念そうな表情を浮かべ、それじゃあまた後で、と行つてしまった。あの方向はキッチンだ。何かを作っているのだろうか。

「シユウ。大丈夫ですか？」

隣からの声。シユウは何が、と聞こうとして、すぐにそれに気がついた。手が抑えようもなく震えていることに。実感はないが、心の奥底でまだこの家に対する恐怖心が残っているのかもしれない。情けない、とため息をつく、と、震えている手を温かいものが包み込んだ。シユテルの、手だ。

シユウは一瞬だけ驚き、すぐにその温もりに身を委ねる。しばらくそうしてから、よし、とシユウは頷いた。

「もう大丈夫。行こう」

「はい。行きましょう」



シユウは頷くと、リビングを指して歩き始めた。

中央にテーブルとソファ、隅にテレビと小さな本棚。それがこの家のリビングだ。シユウの父親、ケインはソファに座り、つまらなさそうな表情でバラエティ番組を見ていた。シユウが部屋に入るとすぐに気づき、ぎこちないながらも笑顔になる。

「よく来たね、シユウ。シユテルさんも、いらっしやい」

まあ座りなさい、という父の言葉に従い、シユウはケインの対面に座った。シユテルはその隣だ。ケインは満足そうに頷くと、リモコンでテレビを消した。

さて、とケインがシユウに向き直り、シユウは思わず居住まいを正した。心に染みつけた恐怖心はなかなか取れないものだ。それを理解しているケインは、どこか悲しげに微笑んだ。

「……………めん」

シユウが謝り、ケインは首を振る。

「私たちの傲慢さが招いた自業自得、だ。シユウが気にすることじゃないよ」

それを聞いたシユウは、それでもと頭を下げた。

両親に対する遺恨が消えたわけではない。だがそれでも、両親から受けた恩もやはり大きい。特にミッドチルダへの引越しや店の準備など、シユウたちができないことのがかなり多くを両親が負担してくれていた。二人とも少しでも罪滅ぼしになるならと

笑っていたが、やはりその点に関しては感謝している。

「まあそれはともかく……。明日発つんだね？」

あからさまな話題転換に思わず苦笑してしまう。ただシユウとしてもあの話を続けることは避けたかったため、それに乗ることにした。

「うん。今はディアーチエたちが最後の片付けをしてくれているところ」

「そうか。じゃあ早めに帰らないといけないね」

晩ご飯を食べたら帰るよ、とシユウが肯定すると、ケインはあからさまに残念そうな表情を浮かべた。

「無理を言っちゃだめよ、ケイン」

さくらがリビングに入ってきて、手に持った盆のコップをテーブルに置いていく。シユウとシユテルにはオレンジジュース、両親二人はブラックコーヒーだ。シユウとシユテルは礼を言つて、コップに口を付けた。

「ここに来てくれただけでも喜ばないと」

「ああ、それは分かっているんだけどね……」

項垂れるケインをさくらが慰める。それを見ると、少しだけ罪悪感を覚えてしまう。そのシユウの気持ちを察したのだろう、さくらが気にしないように、と微笑して手を振っていた。

「部屋の場所は覚えてる？」

さくらの問いかけに、シユウは、多分と頷いた。今日ここに来た目的は両親に挨拶をすることの他にもう一つある。かつての自分の部屋の整理だ。この家を出た頃は魔法のことなど何一つ知らなかったので大したものを持つていなかったのだが、念のために確認しておきたい。

未だに目頭を押さえている父に苦笑しつつ、シユウは席を立つた。シユテルと共に二階に向かう。この家の二階は三部屋しかなく、一つが物置、一つが妹、文花の部屋、そしてもう一つがシユウの部屋だ。子供二人が家を出て、もうほとんど使われていなかったはずだ。

——コウと音奈も、一階で生活してららしいからなあ……。

西崎家の養子となっているコウと音奈は、両親に遠慮してか自分の部屋を持つとうとしていない。二人の寝室はあるらしいが、それも同じ部屋にベッドを二つ並べているだけの、本当に寝るためだけの部屋だそうだ。

シユウが自分の部屋を片付けようと思ったのは、この部屋が開けば二人が一部屋ずつ使えるようになるかもしれない、と思つてのことでもある。

シユウは部屋の扉を開け、思わず苦笑してしまった。シユウの背後からのぞき見たシユテルも、反応に困つたかのように言葉を失つている。

部屋には、子供用の勉強机と小さな本棚、そしてベッドしかなかった。あつて当たり前のおもちゃなどは一個たりと見つからない。どうやらシユウは、幼少の時からさほど変わっていないらしい。

「誰かが片付けた、などは？」

シユテルが聞いて、シユウが首を振った。

「僕が出て行った後は、何かを捨てたりとかはしてないらしいよ。それに……。そう言えば、おもちゃとかで遊んだ覚えはあまりない気がする」

そう答えながら、シユウは勉強机に近づいた。引き出しを開け、中に入っているノートを見る。学校の授業で使っていたノートで、ひらがなでさんすう、と書かれていた。懐かしくなつて思わず目頭が熱くなる。シユウはノートを引き出しにしまい、別の引き出しを見る。

につき、があつた。

「……ああ……。そう言えば、あつたなあ……」

遠いものを見るかのように目を細め、緩慢とした動作でにつきを開く。そして、すぐに閉じた。幼少の日記なので詳しく覚えていないのだが、あまり気分の良い内容ではなかつたはずだ。特に、後半は。

あとでシユテルと一緒に見ようかな、と思ひながら他の引き出しも漁る。勉強関連の

ノートやちよつとした小さなおもちゃ、ルービツクキューブといったもの、以外は何もなかった。

もういいか、と扉へと振り返ると、扉の前で立ったままのシユテルがこちらを静かに見つめていた。シユウが首を傾げ、言う。

「どうしたの？」

「いえ。人の部屋なので私ができることがないだけです」

今更気にしなくていいのに、と苦笑しながらシユウは部屋を出た。

両親との夕食は、さくらの手料理だった。肉じゃがと味噌汁という和風なもので、これらの調理の間、さくらとシユテルは共に台所に立っていた。仕方なく、待っている間は父親と二人きりになる。

「コウと音奈は？」

「文花のところまで一泊するらしいよ」

それを聞いたシユウが思わず頬を引きつらせた。コウはいい。コウは口ではいろいろ言うが、間違いを犯すような男ではない。だが、音奈はどうだろうか。

付き合っている二人の間に放り込まれた音奈の心中やいかに。

「……がんばれ、音奈……」

きつと音奈は氣を遣つたのだろう。それ故に、心の底から申し訳なく思うが。

しばらくして、食卓に白ご飯、肉じゃが、味噌汁が並ぶ。さらにはなぜかクリームシチュー。和洋が統一されていない。

「うん。美味しい」

シユウが素直に感想を述べると、さくらは嬉しそうに微笑んだ。

「また食べたくなったらシユテルさんに言うのよ」

どうして、と隣のシユテルを見ると、シユテルはこちらを一瞥して答えてくれる。

「作り方を教わりました。西崎家に代々伝わる味付け、だとか」

「そ、そうなんだ……」

それでシユテルを台所に連れて行ったのか、と妙に納得してしまった。

夕食後、両親に別れを告げて、シユウとシユテルはマンションに戻ってきた。ケインが妙に名残惜しそうにしていたのが印象的だ。また顔を出す、と言うとそれだけで喜んでいた。

近くのコンビニで二人分の弁当を買い、マンションのシユウの部屋へ。シユウの私物はすでになく、元々あつた備品などが残されているのみだ。ダイアーチェの気遣いだろう、寝袋が二つだけ残されていた。

ダイアーチェたちは一足先に店の方に移っている。シユウたちも明日の早朝にここを発ち、さらに翌日にシユウの両親とリンデイが解約の手続きをすることになってい

る。

「ここで寝るのも最後だね」

「ええ……。そうですね」

コンビニで温めてもらった弁当を床に置き、二人は言葉少なく食べていく。二人が食べる音だけが聞こえる、静かな時間。やがて二人とも食べ終わったところで、シュテルがコンビニの袋からペットボトルのお茶を取り出した。紙コップに注いで、シュウへと渡してくる。

「ありがとう」

「いえ」

二人そろってお茶を飲み、一息つく。もう何もすることがない。

「ああ、そう言えば……。持ち帰ってきたのは、ノート一冊ですか」

シュテルが思い出したように聞いて、シュウは頷いた。につきを取り出して、ぱらぱらとページを捲る。

「海鳴に来る前に書いてた日記だね。例の事故までは書いてたんだ。その後は、いつの間にか書かなくなってた」

読む？ とシュウが差し出すと、シュテルは小さく首を振った。そんな無礼なことはいけません、と。気にしなくていいのに、とシュウは肩をすくめながら、ノートを開いて

読んでいく。読んでいくと当時のことが思い出され、少し懐かしい。

前半は日々のことを拙い文字で綴るだけの微笑ましいものだ。だが、後半になると。

——今日も化け物と言われた。

——れんくんとけんかした。

——みよちゃんに気持ち悪いと言われた。

暗い内容が増えていく。シユウの周囲で異変が起き始めた頃、だろう。心の奥底に閉まった記憶があふれ出してくる。よせばいいのに、読むことをやめられない。

一人、また一人とシユウの周囲から人が離れていく。その恐怖は、幼い心には耐えられないものだった。当時は味方してくれていた家族がいなければ、自分はとつくに壊れていたかもしれない。

その家族も、演技とはいえ自分から離れたわけだが。思えばあの時、自分は一度壊れているのかもしれない。でなければ、幼い子供が一人暮らするなど耐えられるはずがないだろう。その時のことを思い出し、気持ちが暗くなつていく。体の全身が冷たくなつていく。

不意に、手に温かいものが触れた。見ると、シユテルが真剣な眼差しでシユウを見つめていた。

「シユウ。大丈夫ですか？」



シユテルが聞いて、シユウは目を細め、しつかりと頷いた。  
「そうですか」

いつの間に離していたのだろう、床に落ちたにつきをシユテルが拾い上げ、開いていたページに視線が落とされる。するとシユテルは眉を寄せ、すぐにつきを閉じた。

「シユウ」

シユウが虚ろな目をシユテルに向ける。

「この先何があろうとも、私たちは貴方から離れません。だから、泣かないでください」  
シユテルの言葉に、シユウがわずかに驚いて目元を拭う。本当に涙が流れていたことに再度驚き、恥ずかしくて顔を真っ赤にしてしまう。

「この先何があろうとも、私たちは貴方の味方です。私は、ずっと貴方の側にいますよ」  
シユテルの言葉の温もりに、シユウは目を閉じて身を委ねる。自分は一人じゃないと実感できる。そう思うと、自然と頬が緩んでしまった。

「そろそろ休みませうか。明日からは店の準備がありますし」

「うん。そうだね」

何かを誤魔化すように、シユテルが顔を逸らして寝袋を広げ始めた。その顔は、ほんの少しだけだが赤くなっていたような気がする。自分の妄想からくる錯覚かもしれないが。

「ねえ、シユテル」

「は、」

「一緒に寝ても、いい？」

シユテルの動きがびたりと止まる。ゆっくりとシユウへと向き直り、シユウの顔をまじまじと見つめてくる。シユウがシユテルの言葉を静かに待つと、やがてシユテルが小さくため息をついた。分かりました、と。

二人で同じ寝袋に潜り、身を寄せ合って目を閉じる。シユテルの温もりが感じられ、顔が熱くなってしまう。

目を開け、シユテルを見る。すでに目を閉じ、整った寝息を立てているようだ。

「もう寝てる、よね？」

返事はない。シユウも目を閉じ、微睡みに身を委ねる。

「シユテル……」

シユウが小さな声を出す。聞こえていなくてもいい、言っておきたい。

「僕の隣に、ちゃんといてね……」

そしてシユウは、眠りへと落ちた。

シユウが眠りに落ちてしばくして、シユテルが目を開ける。シユウの寝顔を至近距離

で見て、妙な気恥ずかしさを覚えてしまう。自分らしくないと思いつつも、悪い気はしない。

「貴方がそれを望むのなら」

シユテルが答える。歌うように。

「私はずっと貴方の隣に。貴方と一緒に歩みます」

そしてシユテルは、淡く微笑み、自身も心地よい微睡みに身を任せた。

翌日早朝。

シユウとシユテルは少ない私物を持って部屋を後にする。部屋を出て、ドアを閉めようとして、

「……………」

二人は思い出の詰まった部屋をしばらく眺め、どちらともなくつぶやいた。

「お世話になりました。今まで、ありがとう」

そしてドアが閉じられる。

誰もいなくなった部屋で、朝焼けの光だけが部屋を包む。朝の光は二人がいた部屋を、優しく温めていた。

## 銭湯

シユウたちが住まうマンション。自分たちの部屋の浴室に五人は集まっていた。それぞれが浮かべる表情は、困惑や苦笑など、あまりいいものではない。その理由は単純なものだ。

「お湯、出ませんね……」

ユーリがつぶやいた言葉に、出ないねー、とレヴィが脳天気な声で返す。その反応にダイアーチエは冷ややかな視線を向けるが、レヴィは気づいていない。

「シユウ。そちらはどうでしたか？」

シユテルがそう問う。シユウの部屋の風呂のことだろう。そちらが無事ならまだ良かったのだが、しかしシユウは申し訳なさそうに首を振った。そうか、とダイアーチエがため息をつく。

「仕方がありませんね」

シユテルはそう言うと、一人その場を後にした。ダイアーチエがすぐに何かを察したようで、仕方がないな、とダイアーチエも浴室を出て行く。残されたシユウはどうしよ

うかとしばらく困惑していたが、自分と同じようにきよとんとしているレヴィとユーリを残そうとも思えず、その場で待っていることにした。

そして、さほど時間を置かずに戻ってきたシユテルとデイアーチエの手には、着替えなどを含めたお風呂セット。なるほど、確かに仕方ないね、とシユウも得心して、着替えを取りに自分の部屋へと向かう。

「シユテル。ちなみにどこの？」

「最寄りですね。修理がいつ終わるか分かりませんが、数日通う可能性もあります。近場の方が良いでしょう」

未だによく分かっていないらしいレヴィとユーリに、デイアーチエが告げる。銭湯へ行くぞ、と。それを聞いた途端、二人が嬉しそうな歓声を上げた。

準備を終えて、すぐに銭湯に向かう、ということには残念ながらならなかった。実際には、修理の手続きなどで少し時間を取られてしまっている。後ほど聞いた話では、シユウたちの部屋だけでなく、その階の全室でトラブルが起きていたらしい。

その詳細に関して五人ともそれほど興味がなかったため、修理を依頼した後は気にせず銭湯に向かった。

シユウたちのマンションから最寄りの銭湯までは、歩いて二十分ほど。遠いとは言わないが、自宅の風呂が使えるればわざわざ来ようとも思えない、そんな距離だ。故にこ

に来るのは初めてだったりする。大きくはないが小さいとも言えない、そんな規模の銭湯だ。

入り口から入ってすぐに広めに造られたホールに出る。その奥にカウンターがあり、何人かの店員が利用者と会話をしている。周囲を見てみると、利用者はそれなりに多いようだ。

カウンターで利用料を支払い、シユウとシユテルたちはその場で別れることになる。

「それでは、シユウ。またここに集合でよろしいですね？」

「うん。もちろん」

風呂の後の集合場所を決めて、シユウは風呂へと向かった。

脱衣所で衣服を脱ぎ、浴室に向かう。親子連れの利用者が多いのか、親子らしき組み合わせが何人もいた。その様子を見て、シユウはまぶしいものを見るかのように目を細め、わずかに表情を曇らせる。少しだけ、羨ましい、という感情が芽生えてしまう。もつとも、今となっては両親を拒絶しているのはシユウ自身だ。羨ましい、と思うのは何か違う気がする。

——言えば、一緒に来てくれるのかな。

父親の顔を思い出し、シユウは苦笑した。今更イメージできないな、と。

体を洗って、浴槽へと向かう。子供一人というのが珍しいのか何度か視線を感じたが、特に声を掛けられることはなかった。浴槽の隅に浸かり、ゆつくりと息を吐き出す。少し熱めのお湯だが、とても気持ちがいい。

油断していると寝てしまいそうだと、思いながら、シユウは軽く首を振った。本当に寝てしまうとシユテルたちを長時間待たせてしまうことになる。適度に切り上げてさっさと上がろう、と心に決めて、

「……………」

それが、視界に入った。浴槽の側、出入り口とは反対側にある小さな扉。その脇には、露天風呂、と書かれた張り紙がある。せつかくだし見ていこう、とシユウは露天風呂へと向かった。

露天風呂には他の利用客がいなかった。ほとんどシユウの貸し切りだ。そのことを不思議に思いながら、シユウは湯船に浸かる。上方へと視線をやると、明るい月といくつかの星を確認できた。山の旅館などで見る夜空とは違いあまり星は見えないが、それでも湯船に浸かりながら夜空を見られるというのは、なかなかいいものだと思う。

露天風呂の周囲は高い柵で囲まれていて、外部から露天風呂がのぞけないように工夫がされている。ただそれでも、ここは街の中だ。もしかすると、他の利用客は誰かに見られるかもしれないという可能性を嫌ってあまり来ないのかもしれない。

そんなことを考えていると、扉を開く音が聞こえてきた。誰か来たのかと思うと同時に、疑問も出てくる。音のした方向が、自分が入ってきた方向より少しずれているような……。

「あー！ シュウだー！」

自分の名を呼ぶ声にシュウが目を大きく見開く。つい先ほどまで聞いていた声で、表情を引きつらせながらそちらを見やる。案の定、そこにいたのは、家族とも言える四人だった。

「な、なんで……?」

シュウが何とかそれだけ言葉を紡ぐ。その意味が分からずに、ディアーチエとレヴィ、ユーリが首を傾げる。だがシユテルはその意味を正確にくみ取ったらしく、短い答えを口にした。

「混浴ですよ、(´▽´)」

今度こそシュウの表情が凍り付いた。そんな注意書きがあつただろうか。

そんなシュウを放置して、四人が湯船に浸かってくる。全員、混浴という点を配慮したのか、体にタオルをしっかりと巻いている。

レヴィが空を見て、あまり見えないね、とつぶやくと、残念ですとシユテルがつぶやいた。



「まあ、仕方あるまい」

ディアーチエはそう言うのと、ゆっくりと息を吐いてリラックスする。その横で、シユテルも一息ついていた。シユウとは少し距離を取っている。本人たちはあまり気にしないはずだが、どうやらシユウに気を遣ってくれたらしい。そのことに少し申し訳なきを感じていると、背中から誰かに抱きつかれた。

「シユウ、捕獲!」

レヴィだ。いつの間に背後に回り込んでいたのか、全く気がつかなかった。レヴィの体温が直に感じられ、顔が赤くなってくる。

「れ、レヴィ! ちょっと離れて……」

シユウがそう言っても、いやだ、とレヴィは楽しそうに拒否してしまう。シユウはすぐに言葉を続ける。

「い、いやでも、体が密着してて、その、なんというかね……!」

恥ずかしそうなシユウの言葉。レヴィは少し考え、そしてぽんと手を叩いた。

「シユウ! あれだよあれ!」

「な、なに?」

「……当てるのよ」

レヴィの言葉を聞いた四人が示した反応は、少しずつ違うものだった。ユーリはよく

意味が分からなかったのか首を傾げ、ディアーチエはどこで覚えたのだ、と呆れながら立ち上がる。シユテルもディアーチエと同じようにため息をついて、そしてやはり立ち上がった。

シユウはどう反応を返していいのか分からず、苦笑い。

「えつと……。レヴィ。どこで覚えたの？」

「ん？ お昼のテレビでやってた……。えつと……。ドラマつてやつ？」

なるほど、とシユウは頷いた。おそらく先の言葉ははつきりと意味を理解して言ったものではないのだろう。レヴィらしいとも言える。

「レヴィ」

いつの間にかディアーチエもすぐ側まで来ていた。正確にはレヴィの隣だ。そのレヴィの腕を掴んで、立ち上がらせる。戸惑うレヴィへと、ディアーチエは無表情に告げた。

「来い」

短い、王の一言。だがそれだけでレヴィはディアーチエを怒らせてしまっていることを察したらしい。素直に、はい、と頷いた。

「ではな、シユウ。我らのことは気にせず、ゆっくり温まるのだぞ」

そう言つて、ディアーチエとレヴィが女湯の方の扉へと歩いて行く。ユーリも慌てて

それを追っていく。

「お騒がせしました。また後ほど」

シユテルが最後にそう言って、シユウへと小さく頭を下げた。そしてそのまままきびすを返し、歩いて行こうとする。そのシユテルの腕を、シユウが掴んだ。

「シユウ？ どうかしましたか？」

わずかに戸惑いの色を混ぜて、シユテルが問うてくる。シユウ自身無意識の行動だったので、特に用事があつたわけでもない。シユウはしばらく悩んだ末に、

「その……。せつかくだから、もう少し一緒に、とか……」

最後の方は尻すぼみになり、自分ですらあまり聞き取れなかった。おそるおそるとシユテルの顔をうかがい見る。シユテルはいつもの無表情でシユウを見つめていたが、気のせいかな、少しだけ頬が赤くなっているような気もする。

やがてシユテルは、少しだけなら、と頷いてくれた。

浴槽の隅で、シユウとシユテルは並んで座っていた。並んでも言っても、二人の間にはわずかに距離がある。さすがに少し恥ずかしいという思いからだ。

二人は無言で、静かに夜空を眺めていた。やはりあまり星は見えないが、それでも飽きることなく二人の視線は夜空に向いている。聞こえてくるのは水の音だけで、とても静かな夜だ。

「誰も来ないね」

シユウがちらりと男湯と女湯へと続く扉を見る。ディアーチエたちが出て行つてからは、一度も開いていない。貸し切り状態となつているため、少しでも気が良い。

「やつぱり僕は、静かにのんびり入る方がいいな……」

シユウにとつて、風呂は一人で入るものだ。それは今も変わらない。そのためこういった大衆浴場はあまり好きではない、というのが本音だ。それを聞いたシユテルがどこか寂しそうな、気遣うような表情をするが、シユウはそれには気づかない。頬をだらしなく緩めて、続ける。

「でも、たまにはこういうのも悪くないよね……。今度は友達も誘つて来てみたいかな」  
シユテルがかすかに安堵の吐息を漏らす。それには気づいたシユウが首を傾げると、シユテルは何でもありません、と首を振った。

「シユテルと一緒に入ることなんて滅多にないから、そういう意味でもまた来たいかな」  
そんなことをシユウがつぶやく。するとシユテルはわずかに目を開き、やがてそつぽを向いた。そのまま立ち上がり、浴槽を出て行く。

「シユウ。そろそろ出ましよう。ディアーチエたちを待たせてしまいます」

「あ、うん。そうだね」

余計なことを言つたか、と少しだけ反省しつつ、シユウも男湯へと続く扉へと向かう。

もう一方の扉の前で、シユテルがかすかに頬を染めてうつつむいていることに、最後まで気づかなかつた。

「二本！ 二本買いたい！ お願い王様！」

「今回だけ！ 今回だけですから！」

「だめだ！ 絶対に、だめだ！」

売店の前で騒ぐ三人。三人の側には牛乳が冷やされた冷蔵ケース。

「だって、決められないよ！ コーヒー牛乳とフルーツ牛乳どっちかなんて！」

「そうです、デИАーチエ！ せっかくここまで来たんですから！」

「むう……。だが、だめだ！ そもそも今日は財布を持ってるのはシユテルだ！」

どうやらレヴィとユーリが、デИАーチエに牛乳を買ってもらおうと強請っているらしい。シユウがその様子を遠目から微笑ましく見つめていると、少し遅れてシユテルも更衣室から出てきて、シユウの隣に並んだ。同じ光景を見て、少しだけ呆れたようにため息をつく。

「公衆の面前で何をやっているのですか」

そう言いながら、シユテルが三人へと歩いて行く。それに気づいたレヴィが、

「シユテル！ 牛乳買って！ コーヒーとフルーツ！」

早くもおねだりを始め、ユーリも期待のこもった眼差しで見つめてくる。どうしたも

のかとディアーチェへと視線を向けると、任せる、と口の動きだけで伝えてきた。「シユウ」

唐突に呼ばれ、少しだけ驚きながらも返事をする。

「飲みますか？」

シユテルの短い問い。なるほど、とすぐにその問いの意図を察して、シユウは頷いた。「うん。ちよつとのぼせちやつたから、二本飲みたいんだけど、だめかな」

果たしてシユテルの望んだ答えだったのだろうか、どこか満足そうに頷くと、シユテルはレヴィとユーリに向き直った。

「では一人二本まで許可します。それ以上は、買いません」

レヴィとユーリはぱつと顔を輝かせると、嬉しそうに牛乳を冷蔵ケースから取る。ディアーチェは、やれやれと首を振りながらも、口元は笑っていた。普通の牛乳を一本だけ取る。

シユウとシユテルは、それぞれコーヒー牛乳とフルーツ牛乳を取った。そのまま会計に向かおうとして、シユテルが足を止めてシユウを見る。

「シユウ。よろしいのですか？」

結局一本しか取っていないことを言っているのだろう。シユウは肩をすくめて、答えた。

「二本はちよつと量が多いから。その代わり、あとでシユテルの牛乳もちよつとだけ欲しいかな?」

「分かりました。では私も、貴方のものから少し頂きます」

平然とした様子でそんな会話を交わす二人。

その様子を見守っていたダイアーチエは、顔を耳まで真っ赤にして、少しだけ呆れを含ませながらも満足そうに微笑んでいた。

## 誕生日

ある冬の日。昼食後ののんびりとした時間。五人はリビングで、思い思いにその時間を過ごしていた。

ディアーチェはホットコーヒーを飲みながら読書をしている。表紙やそのタイトルから察するに、ミステリー小説のようだ。時折本から視線を外し、家族の様子を確認しているのは流石といったところか。

シユテルは図書館で借りてきた本を側に置き、編み物をしていた。数日前から始めているもので、時間があれば少しずつ進めている。先日、何を作っているのかシユウが聞いたところ、秘密です、という言葉が返ってきた。

シユウはレヴィとユーリと一緒に、テレビのバラエティ番組を見ていた。番組では、今日の誕生日さんを祝おう、というありきたり企画物をしているところだ。今日が誕生日の一般人のもとへ、有名芸能人が特大のケーキとプレゼントを持って行く、というもの。単純だが、それ故に分かりやすい。

「誕生日って、生まれた日のことだよ。みんなお祝いするの？」



そんなことを聞いてきたのはレヴィだ。シユウが頷いて答える。

「みんな、とは限らないけど、お祝いする人が多いと思うよ。誕生日会、なんてことをしたりもするし」

「へえ！ どんなの？」

「みんなでケーキを食べたり、誕生日の人にプレゼントを渡したり、かな？」

この辺りはシユウの経験談ではなく、人から聞いた話や本などで得た知識だ。シユウ自身、誕生日会というものに参加したことはない。クラスメイトの誕生日会に誘われたこともあるが、プレゼントを用意することができないので、いつも遠慮していた。

「いいなあ、楽しそう！」

レヴィの表情が輝き、隣で聞いていたユーリも、おもしろそうですね、と無邪気な笑顔を浮かべる。こんな顔を見ると、いつかやってあげたいなと思ってしまう。

「ねえ、ディアーチェ。みんなの誕生日って、いつ？」

「知らん」

「あ、うん……。ごめんね」

ディアーチェの短い言葉に、シユウは申し訳なさそうに頭を下げた。どうやら聞いてはいけないことだったらしい。するとディアーチェがわずかに驚き、慌てたように言う。

「いや、待て！ 誤解されているようだから言っておくが、本当に知らないのだ！ 我ら  
はもともとこことは違う世界での生まれであり、さらには正確な日付など全く覚えてい  
ないのだ。別に怒っているわけでは、ないからな？」

それを聞いたシユウは、安堵のため息をついた。嫌われなくて良かった、と。それを見  
ていたデイアーチェも、小さく吐息する。

「じゃあ、何か記念日を作って、そこで誕生日会をしようか」

「おー！ 楽しみ！」

レヴィが屈託無く笑い、ユーリもいつにしましうか、と楽しげに話す。二人での会  
話を始めたことで、シユウはテレビに視線を戻し、デイアーチェも読書へと戻った。

だが、その次の瞬間には全員が動きを止めることになる。

そう言えば、といった様子でユーリがシユウへと視線を向けた。

「ところでシユウの誕生日っていつですか？」

「ん？ 明日だよ」

え、と聞いた本人であるユーリが固まり、へ、と珍しくレヴィも動きを止めた。デイ  
アーチェは驚愕のあまり彼女にしては珍しく口を半開きにし、シユテルもやはり彼女に  
しては珍しく、完全に動きを止めて目を見開いていた。もつとも、シユテルの様子は  
シユウからは見えていないのだが。

「あ……」

ディアーチェが言葉を絞り出す。首を傾げるシユウへと、ディアーチェの叫び声が降り注いだ。

「阿呆か貴様！」

「うわ！ びっくりした！」

あまりの大声にシユウが身をのけぞらせる。そんなことはお構いなしにとディアーチェが言葉を続ける。

「なぜだ！ なぜもつと早く言わなかった！」

「え、いや……。聞かれなかったから……」

「ああ、そうだな、確かに聞かなかった！ だが、それでも言ってくれても良いだろう！」  
シユウが困ったような苦笑を浮かべ、少しだけ言いにくそうに音を出さずに口を動かしていたが、やがて、無理だよと首を振った。怪訝な表情を浮かべるディアーチェに、告げる。

「だって、聞かれるまで忘れていたから」

「……………」

ディアーチェは完全に沈黙すると、やがてソファへと深く体を沈めた。天を仰ぎ、手で目を覆って深々とため息をつく。疲れ果てたような、そんなため息だ。

「ああ、そうだな……。うぬらしい……」

つい最近まではシユウ自身が誕生日とは無縁の生活を送っていたのだ。祝いも何もしない誕生日なら、忘れてしまっても仕方がないのかもしれない。

「少し出かけてくる。夕食までには戻る」

ディアーチェはそう言つて立ち上がると、足早に部屋を出て行つてしまった。後に残された四人のうち、シユウが困惑したような表情を浮かべる。もしかして怒らせてしまったかな、と。

「シユウが気にすることではありません。私が気がつくべきでした」

シユテルの声に振り返ると、シユテルも編み物を中断して立ち上がり、外出の準備をしていた。いつの間にか、レヴィとユーリも準備を終えている。

「シユウ。貴方も外出するなら、戸締まりをお願いします」

「うん……。予定はないけど……」

「ではゆつくり寛いでください。部屋のものには自由に使つていただいて構いませんので」

それでは、行つてきます。

シユテルが小さく頭を下げて、部屋を出て行く。レヴィとユーリもそれに続き、シユウだけが一人取り残されてしまった。

「何が何やら……」

シユウは不思議そうにつぶやきながら、再びテレビへと視線を戻す。いつの間にか、今日の占いへとコーナーが変わっていた。

Side:Dearche

ディアーチエは家を出ると、真つ直ぐにある場所へと向かっていた。あまり気乗りはしないが、こういつた時は役に立つ。それぐらいの評価はしているつもりだ。そうしてディアーチエがたどり着いたのは、八神家だった。

門の前で足を止め、しばらくその建物を睨み続ける。やがて小さく深呼吸すると、八神家の扉を開けた。

「子鴉！ 邪魔するぞー！」

大声でそう告げる。すると、リビングの方からはやてが顔を出した。ディアーチエの姿を認めて、嬉しそうに破顔する。

「いらつしやい、王様！ 突然やね？」

「問題があるか？」

「ううん。ないよ」

柔和な笑みを浮かべながら、はやてはディアーチエをリビングへと通した。今日は八

神家の面々も休みだったのか、ヴォルケンリッターも全員がリビングに集まっている。ディアーチエを見ると、それぞれが挨拶を送ってきた。ディアーチエは手を上げることので返事をして、はやてへと向き直った。

「子鴉。話がある」

「うん？ 料理勝負か？ いつでも受けて立つで」

「楽しみがある」  
「楽しもうなはやてへと、しかしディアーチエは首を振った。今回は全く別の用事だ。」

その短い言葉に、はやての瞳が驚愕で見開かれ、はやての家族たちも絶句する。実は何かあるのではと思わず訝しんでしまっているはやてへと、ディアーチエは続ける。

「明日、シユウの誕生日だそうさ。そのことを先ほど知ったところでな、何の準備もしていない」

「え……。知らなかった……」

「ああ……。本人に聞いたが、誕生日会、だったか？ そういったものにもほとんど参加したことがないそうさ。だから、できれば……」

「うんうん。シユウ君のために誕生日会をしてあげたい、てことやね」

「はつきり言うな！ だが、まあ、そうさ。だが我らはいまいち誕生日会というものから。だからこそ貴様に手伝ってほしいのだ」

頼む。ディアーチエが頭を下げ、はやてがさらに衝撃を受けたように言葉を失ってしまふ。

あのディアーチエが、自分に対して頭を下げている。これは、初めてのことだった。それだけディアーチエは真剣なのだろう。はやてはしっかりと頷いた。

「任せて、王様。最高の誕生日会をしよう！」

はやての力強い言葉に、ディアーチエは頷き、そしてとても小さな声で、ありがとう、とつぶやいた。はやてだけはその声を聞き取ることができたが、あえて聞こえないふりをした。

S i d e : L e v i

レヴィとユーリはアースラを訪れていた。真つ直ぐにブリッジへと向かい、目的の人物を探す。レヴィはフェイト、ユーリはリンディだ。ブリッジをぐるりと見回すと、艦長席で何かを話しているフェイトとリンディを見つけることができた。

「いた！ オリジナル！」

「え？ レヴィ？」

フェイトが驚いて振り返り、隣にいたリンディも眉をひそめる。地球の拠点に遊びにくることはあるが、アースラまでフェイトを訪ねてきたことは初めてだ。

「どうしたの?」

レヴィが側まで来るのを待つてから、フェイトが優しく問いかける。リンデイと仕事上の話をしていただけだが、わざわざアースラまで自分を探しに来るほどだ。何か事情があるのだろう。リンデイもそう思ったのか、何も言わずにレヴィの言葉を待つていた。

「えつとね! 明日シユウの誕生日らしいんだけど実は何もしらなくて用意してなくても何かしてあげたいけど何も思い浮かばなくてそれでオリジナルに聞こうと思って!」

「と、とりあえず落ち着こう? はい、深呼吸」

フェイトに促されてレヴィが深呼吸する。その間に、

「明日、シユウの誕生日なんです。それで何かしてあげたいんですけど、そういう日に何をするのか分からなくて……。何をすればシユウは喜ぶでしょう?」

ユーリの説明。レヴィのものより分かりやすい。なるほど、とフェイトとリンデイが頷いた。

「シユウ、明日誕生日なんだ。言ってくれば良かったのに……」

「でもあの子らしいわね。この世界の誕生日のお祝いの仕方はあまり詳しくないのだけど……」

そう言いながらフェイトとリンデイが少し考える。誕生日会の準備そのものはシユ



テルやディアーチエがするだろう。レヴィたちも手伝うだろうが、それとは別に何かをしたらしい。

先に案を思いついたのは、フェイトだった。

「少し前に行った友達誕生日会のものだけど、歌とか、どうかな？」

「歌？　どんな？」

「誕生日の歌。それぐらいなら教えてあげられるけど……」

言いながら、フェイトはリンデイの顔をうかがう。そのリンデイは少し困ったような苦笑を浮かべていた。今はまだ、仕事の途中だ。ここで放り出すことはできない。それでもリンデイも思うところがあるのか、仕方がないわね、と頷いた。

「レヴィさん。ユーリさん。フェイトはまだ仕事の途中なの。だから今すぐに教えてあげることはできないわ」

「ええ……。どうしても？」

残念そうなレヴィの声に、しかしリンデイは微笑んで言う。

「レヴィさんとユーリさんがフェイトの仕事を手伝ってくれたら、その分早く終わるわね？」

その言葉の意図をすぐに察し、レヴィとユーリが勢いよく手を上げた。

「よしオ리지ナル！　手伝ってあげよう！　だから早く教えてー！」

「がんばります！ 急ぎましょう！」

二人のその勢いに、フェイトは驚きつつもどこか嬉しそうに頷いた。

Side : Stern

「飾り付けはこんなところだけど、参考になった？」

「はい、とても。ありがとうございます」

シユテルは翠屋のキッチンにて、桃子と厨房に立っていた。二人の目の前にはホールケーキ。誕生日用に仕上げられたもので、桃子がわざわざ作ってくれたものだ。

数時間前、マンシヨンを出たシユテルは真つ直ぐに翠屋を訪ねていた。店を手伝っていたのはと挨拶を交わし、シユテルから事情を聞いたのはがすぐに桃子に繋いでくれた。昼食時を過ぎて店も落ち着いていたために、こうして桃子から誕生日ケーキの作り方を直接教わっている。

「すみません、実際に作っていただいて」

作られたケーキを丁寧に箱に詰める桃子にシユテルが言うと、桃子は、気にしなくていいわよ、と笑顔で応じる。ケーキの箱を冷蔵庫に入れながら、

「いつもお手伝いしてもらっているわけだし。そうだ、よければ明日、誕生日ケーキを作ってあげるけど、どう？ もちろんこっちもお金とか気にしなくてもいいわよ」

桃子のその申し出はとてもありがたいものだ。内心で感謝しつつ、しかしシユテルは首を振った。

「いえ、自分で作りたいたいと思います」

「ふふ、そうね。私もその方がいいと思うわ」

桃子もシユテルの返答を予想していたのだろう、それ以上何も言うことはなかった。

「今日はありがとうございます。また手が必要な時はいつでもお呼びください。最優先で予定に入れます」

「そうね。その時はお願いするわね」

桃子が小さな袋にてきぱきといろいろな物を詰めていく。そしてそれをシユテルへと差し出した。怪訝そうに眉をひそめながらもシユテルが受け取ると、桃子が続ける。

「誕生日用の飾り付け一式。少し多めに入れておいたけど、もつと必要ならいつでも言つてね。それと、私の予定よりも、貴方の大切な人の予定を優先するように」

桃子が悪戯つぼく笑うと、シユテルはわずかに目を見開き、次いで口元を少しだけ緩めた。そうします、と短く答える。

「ありがとうございます。では、失礼します」

桃子に丁寧に頭を下げて、その場を後にした。

翠屋を出て少し歩いたところで、後方から誰かが走ってくる音が聞こえてきた。すぐ

に誰かを察して、立ち止まって振り返る。なのはが息を切らして走ってくるころだった。

「良かった！ 追いついた……！」

なのはの言葉にシュテルが首を傾げる。何か用事ですか、と。それを聞いたなのはが少しだけ頬を膨らませた。

「用事はないけど、友達と一緒に歩きたいと思ったたら、だめ？」

「いえ……。そうですね。ご一緒しましょうか」

なのはの言葉に、シュテルは無表情に頷いた。それを聞いたなのはが嬉しそうにシュテルの隣を歩く。

「明日、シュウ君の誕生日なんだね」

「はい。そのようです。私たちも先ほど知ったところですが」

「もつと早く言ってくれば良かったのにね……。でもシュウ君のことだから、自分でも忘れてたんだらうなあ……」

「そうだと思います。シュウですから」

二人は顔を見合わせると、なのははおかしそうに笑い、シュテルもわずかにだが笑みを漏らした。

「誕生日プレゼントは決まってるの？」

「さて、どうでしょう」

シユテルの返答をどのように解釈したのか、なのはは、そつかと頷いた。続いて小さな声で、じゃあお買い物はしなくていいか、と聞こえてくる。おそらく、シユテルが何もう意できていなければ一緒に買いに行つてくれるつもりだったのだろう。なのはの氣遣いに内心で感謝する。そして思う。得がたい友人を持てたものだ、と。

「それじゃあ……で！ 私ははやてちゃんの家に行つてくるから！」

「はい。ありがとうございませす、なのは」

「私は何もしてないけど……。何かあつたら言つてね！ それじゃあ、また後で！」

そう言い残し、なのはが走り去つていく。その後ろ姿を見送りながら、シユテルは小さく首を傾げた。

——また後で？

Side: Hero

薄暗い部屋の中。シユウは心地よい微睡みに身を任せていた。シユテルたちが出かけた後、さすがに彼女たちの部屋に居続けるのもどうかと思ひ、自分の部屋に戻つてゐる。することもないし昼寝でもしよう、とリビングの電気を消して、シユウはテーブルに突つ伏してうとうととしていた。

そのシユウを起こしたのは、物音だ。扉の鍵が開けられ、誰かが中に入ってくる。シユウが欠伸をしながら体を起こしたちようどその時に、見慣れた少女が入ってきた。

「おかえり、シユテル」

シユウがどこか嬉しそうに笑つて言うと、シユテルの表情が一瞬だけだが引きつったように見えた。どうしたのだらう、と首を傾げるシユウへと、シユテルが言う。

「すみません、シユウ。少し用事ができてしまいました……。明日の夕方まで、帰ることができなくなりました」

「ん……。長いね。大丈夫？」

「ええ、危険なことはありません。大丈夫ですよ」

シユテルはそう言いながら、シユウの隣に静かに座る。じつとシユウの瞳を見つめてくる。

「シユウ」

真剣な声音。思わずシユウは居住まいを正した。

「ご飯は大丈夫ですか？」

真顔で聞いてくるのがそれか、と内心で苦笑しつつ、心配されても仕方がないかとも思う。シユウは冷蔵庫と財布の中身を思い出し、しつかり領いた。

「うん。大丈夫」

「そうですか。それなら良いのです。では、そろそろ行きますね」

立ち上がるうとしたシユテルの手を、シユウが掴んだ。シユテルが少し驚きながらシユウを見る。そのシユテルの目を見て、シユウは眉尻を下げながらも微笑んだ。

「行つてらっしゃい、シユテル。気をつけてね」

その言葉に何を思ったのだろう。シユテルは何かを堪えるように目を閉じ、やがてしつかりと頷いた。

「はい。行つてきます、シユウ」

シユテルが出て行くのを見送つて、シユウは再びテーブルに突つ伏した。シユテルたちがいないなら、もう少し、ご飯の準備までは寝ていよう。そう考え、目を閉じる。

——でもやっぱり寂しいなあ。

そんなことを思いながら、再び微睡みに身を任せた。

故に気づかなかつた。隣の部屋で、

「ええか？ 今回のミツシヨンは時間との勝負や。大丈夫やな？」

「もちろんです、我が主」

「王様は料理に集中してええからな。しつかり美味しいもの、作つてあげてな」

「うむ。そちらは任せるぞ」

「レヴィとユーリは私と一緒に練習、だよ。結界を張るから屋上に行こう」  
「うん！」

「はい！」

「シユテル、それは間に合いそうなの？」

「間に合わせてみせます。……ですが、何かあれば、協力をお願いします」

「うん！ それまでにはやてちゃんたちを手伝っておくね」

そんな会話が交わされて、何かしらの準備が大急ぎで進められていた。

翌日。シユウは朝食をコンビニのパンで済ませ、昼食を冷凍のピラフで済ませた。買い物に出かける際になぜか隣の部屋、シユテルたちの部屋が気になったが、とりあえずは気にしないことにして買い物を済ませ、自宅でのんびりと過ごしている。

昼寝と読書で時間を潰し、気づけば太陽は西へと傾いていた。シユテルたちは未だに帰ってきていない、らしい。シユウはどこか寂しげに小さくため息をつくときつと疲れて帰ってくるであろう四人のために、腕によりをかけて夕食を作ろうと立ち上がる。何を作ろうかと考え始めたところで、勢いよく扉の開く音が響いた。

シユウが体を大きく震わせ、戸惑いがちに部屋の入り口へと振り返る。誰かが姿を見せる前に、



「静かに開けられんのか!」

「ごめんなさい!」

聞き慣れた少女たちの声。ディアーチエとレヴィだ。シユウは苦笑しつつも、嬉しそうに玄関へと向かう。そこにいたのは、ディアーチエとレヴィ。それにシユテルとユリもいた。

「おかえり。今から晩ご飯を作ろうと思っていたところだったよ」

それを聞いた少女たちがわずかに目を見開き、次いで安堵のため息をつく。シユウが困惑していると、シユテルが手を差し出してきた。

「間に合ったようで何よりです。シユウ、迎えに来ました」

「えっと……。迎えて、どこかに行くの?」

「来ていただければ分かりますよ」

少女たちが、どこか悪戯っぽく笑う。いつも無表情なシユテルですら、どこかうつすらと微笑んでいた。

いまいち事情が分からないながらも、シユウは四人に促されて部屋を出る。そして案内されたのは、隣のシユテルたちの部屋だ。シユウは首を傾げながらも、シユテルたちの後に続く。そしていつも通りリビングに通されて、

「シユウくん、誕生日おめでとう!」

突然の大勢の声に、シユウは目を丸くした。

リビングは様々な飾り付けがされており、部屋の中央のテーブルには大きなケーキと豪華な料理の数々。そのテーブルの周囲には、なのはやフェイト、はやてたち。皆が笑顔でシユウを見ていた。

「えつと……。なにこれ？」

未だに状況が掴めていないシユウに、なのはが言う。

「シユウ君、今日が誕生日なんだよね？」

「あ、うん。よく知ってるね」

「だからね。誕生日会だよ」

「へえ……。誰の？」

「もちろんシユウ君の」

シユウの動きが止まる。ゆっくりと振り返る先にはシユテルたちがいて、四人共が頷いた。

「そういうことです。お誕生日おめでとございます、シユウ」

シユウはしばらく放心したままだったが、やがて、

「あ、ありが、とう……。？」

どうにかそれだけの言葉を絞り出した。

その後は、シユウにとって全てが新鮮な体験だった。

ケーキのろうそくの火を吹き消したのは今よりもっと幼かった頃以来だし、まず大勢の友人が集まって祝福してくれることそのものが初めてだ。自分のために集まってくれたと聞いた時は、本当に泣きそうになってしまった。

シユテルたちは昨日からずっと準備をしていたらしい。ディアーチエは一日かけて今並んでいる豪華な料理の準備をし、はやてたちはこの部屋の飾り付けを家族総出で行っていたそうだ。レヴィとユーリ、フェイトは、歌の練習。その歌は、先ほど聞かせてもらった。よくある誕生日の歌だったのだが、一生懸命歌う二人に自然と笑みがこぼれてしまった。

なのははやてたちの手伝いをしつつ、シユテルに頼まればそちらの手伝い、だつたらしい。ケーキ作りを手伝っただけだけど、と言っていたが。

そしてシユテルは、誕生日ケーキの作成。無論シユウ好みの味にしてくれている。そして、もう一つは……。

大勢で遊び、食べて、騒いで。気づけばとつぷりと日が暮れていた。どうやら全員、今日はここに泊まっていくらしい。食べ終わったお皿などは八神家が片付けている。最初は自分の家だからとディアーチエたちが片付けようとしていたが、はやて曰く、「シユウの家族が側におらんとあかんやろ？ あたしたちでやつとくから、王様たちは

のんびりしておけばええよ」

とのことで、シユウたちはリビングで余った料理をつつきながらのんびりと過ごしていた。隣のキッチンからは洗い物や、はやてたちの談笑の声が聞こえてくる。

「まったく、妙な気の遣い方をしておつて……」

デイアーチエはそんなことを言いながらも、その表情は穏やかなものだった。

さらにしばらく過ぎ、レヴィとユーリが眠気から船をこぎ始めた頃。デイアーチエは二人を連れて寝室に向かった。ついでに子鴉たちの様子を見てくる、と言い残して。すでに洗い物の音はしなくなっている、デイアーチエからあてがわれた部屋に集まっているのだろう。

つまり、リビングに残されたのはシユウとシユテルの二人だけだ。二人は同じソファに並んで座り、静かにのんびりとお茶を飲んでいた。しばらくそんな時間が流れたところで、シユテルが、今のうちですね、と立ち上がる。首を傾げるシユウの目の前で、シユテルは部屋の隅に丁寧に置かれていた紙袋を取ると、それをシユウに差し出してきた。「誕生日プレゼント、というものです」

シユウが驚きで目を丸くする。よく見れば、シユテルの頬はわずかながら朱に染まっていた。そんなシユテルの表情に感想を抱く余裕は、今のシユウにはない。シユテルから紙袋を受け取ると、おそろおそろといった様子で口を開いた。

「開けても……いいい？」

「はい」

許可を得たので紙袋に手を入れ、中のものを丁寧に取り出す。それは、マフラーだった。少し長めの、暖かそうなグレーのマフラーだ。

「わあ……。いいの？ もらっちゃっても」

「もちろんです。そのために作りましたし」

シユテルの後半の声は、少し小声になっていた。それでもしつかり聞き取ったシユウは、最近シユテルが何をしていたのかを思い出す。編み物をしていた姿を。

「もしかして、これ……。シユテルの、手作り？」

「そうなりますね。まだ慣れていないので少し歪なところもありますが……」

「そんなことないよ！ すごくいなあ……」

シユテルからの手作りのマフラー。そう考えただけで、自然と頬がにやけてしまう。シユウはそのマフラーをそっと抱くと、笑顔で言った。

「ありがとう。シユテル」

「いえ。喜んでもらえたのなら、作った甲斐があつたというものです」

そう言つてそっぽを向くシユテルの頬は、彼女には珍しく真っ赤だった。そんなシユテルの反応が新鮮で、そしてとても魅力的で。再びシユウの隣に座ったシユテルの手を

そつと握ると、驚いたように目を丸くするシュテルと目が合った。

「本当にありがとう」

「いえ、その……。どういたしまして」

シュテルが言葉に詰まるのもまた珍しい。シユウは楽しげに笑うと、そつとシュテルへと身を寄せる。シュテルはまた驚いたように体を震わせたが、しかし離れるようなことはせず、シュテルもシユウへと身を寄せてきた。

「うん……。僕は幸せ者だね。みんなに祝ってもらえて、好きな人からプレゼントまでもらって」

シュテルは無反応。ただ、頬を染めるだけ。

その後はしばらく静かな時間を楽しんでいたが、やがて二人は顔を見合わせると、揃って照れくさそうに笑い合った。

翌日。残りの片付けを終えて、なのはやフェイト、はやてたちは帰って行った。

シユウたちはそれを見送った後、いつも通りの一日を過ごし始める。リビングで皆でのおんぴりと過ごす一日を。今日もそうなることだろうと思っていたのだが、

「ああ、そうだ。渡すものがあつたのだ」

ディアーチェが読んでいた本を閉じ、リビングを出て行く。何事だろうと思いながら

もしばらく待っていると、すぐにディアーチェが戻ってきた。その手には、小さな長方形の紙片が二枚。ディアーチェはそれを、シユウに手渡してきた。

「商店街の福引きで当たったのでな。我は興味がない。行つてくるといい」

渡されたものは、商店街にある映画館の無料券だった。作品名は書かれていないので、どうやら何にでも使えるらしい。期限は、今日までだ。

「ぎりぎりだね」

「ああ。さつさど行つてくるといい」

言い終えると、ディアーチェは自分の席に座り。読書を再開する。レヴィとユーリに視線を向けると、彼女たちもテレビの特撮に夢中なようだった。

「シユテル。一緒に行かない？」

シユウが聞いて、シユテルが答える。

「はい。一緒しましょう」

二人はそれぞれ身支度を調えると、玄関へと向かう。

シユウの首元に巻かれる温かそうなグレーのマフラー。それを見たディアーチェが満足そうに微笑んでいたのだが、シユウはそんなことには気づかない。

「それじゃあ、行こうか」

「はい」

シュウとシュテルはどちらからともなく手を繋ぐと、賑やかな街の中へと出かけていった。



## 模擬戦

リビングで朝食を取りながら、シユウはシユテルたちの会話に耳を傾けていた。今日の予定を相談するもので、どうやら今日は全員予定があるらしい。仕事ではなく、なのはたちと約束があるそうだ。

予定が決まっているのに何の相談を、と思うが、どうやらシユウをどうするか、というこららしい。

「二人でのんびり過ごすよ?」

というシユウの意見は、相談の最初で却下となっている。シユテルとデイアーチェがその言葉を聞いた瞬間、無言でシユウを見てきたので、何でもありません、とそれ以降は発言していない。

—— 気に掛けてくれるのは嬉しいんだけど、何だろう。情けない……。

内心で少し落ち込みながら、ジャムを塗ったトーストをかじる。のんびりと待っていると、やがてシユテルが視線をこちらに向けてきた。

「シユウ」

呼ばれたシユウが小首を傾げる。シユテルが続ける。

「リンディ艦長から許可をいただきました。アースラに行きませんか？」

シユテルの提案に、シユウは内心で驚きながらも、二つ返事で了承した。

シユウの中には特殊なロストログアが存在する。だがその記録は抹消しているため、管理局でもシユウは、巻き込まれたただの一般人、という扱いになっている。そのためアースラに、予定もないのに訪れるのはあまり感心できないと思うのだが、そう考えているのはシユウだけのようないきがするのは何故だろう。

シユテルたちと共にアースラを訪れたシユウは、そのままある部屋へと案内された。とても広い部屋で、すでに先客が何人もいる。なのはやフェイト、はやて、ヴォルケンリッターの面々、など。今回は人が多いなど不思議に思っていると、シユウたちに気づいたのはとフェイト、はやてがこちらへと駆け寄ってきた。

「みんな！ こんにちは！」

なのはが元氣よく挨拶し、シユテルもいつもより柔らかい無表情で淡々と返事を返す。レヴィは元氣よく、ユーリは丁寧な挨拶をする。デイアーチエはそっぽを向いたまままだ。

「王様。無視はひどくないか？」

「貴様と交わす言葉はない」

「……………」

「ぐっ……。そんな目で見るな！ ええい、分かった！ こんにちは！ これでいいか！」

「やっぱり王様、大好きやー！」

「寄ってくるな阿呆！」

「この二人はいつも通りだ。」

「それで、シユテル。みんな揃ってるけど、何しに来たの？」

「ダイアーチェたちから視線を外してシユテルに問うと、なのはが少し驚いたような表情を見せた。シユウが首を傾げると、なのははシユテルを戸惑いがちに見る。」

「言ってなかったんだね」

「遅れないことを優先しましたので。説明はここでもできるでしょう」

シユテルがシユウへと向き直る。改まったその態度にシユウが身を硬くするのを見て、シユテルはうつすらと苦笑を浮かべた。

「シユウ。貴方を参加させるつもりはありませんので、その点をご安心ください」

いきなり仲間はそれを宣言されてシユウが内心で落ち込む。それを知ってか知らずか、シユテルは続ける。

「模擬戦をします」

仲間はずれ万歳。思わず安堵のため息が漏れた。

お互いの技術向上を目的とした、集団線を想定した模擬戦闘訓練。これが本日のテーマらしい。そんなお題目が掲げられているが、ようは皆戦いたいだけだろう、と思ってしまう。皆がどう思っているか、本当のところは知らないが。

シユウはシユテルと共に、集団から少し離れた場所にいる。二人で静かに、今回のルールが決まっていくところを眺めている。

「模擬戦かあ。見るのは初めてだ」

「個人戦などはよくしてありますが、模擬戦の見学はシユウにとって得る物は少ないでしょう」

「だから呼ばなかった、と。今回は誰もいなくなるから、かな？ 別に一人でも、大丈夫だよ」

そこまで自分は子供っぽいのか、それとも頼りないのか。そう思い少し気分を沈ませていると、違いますよとシユテルが首を振る。シユウの目を真っ直ぐに見つめ、

「単純に、私たちが不安なんです。貴方が何かに巻き込まれないか」

「ん……。そうそうないと思うけど。ギフトッドの情報はもうほとんどないんだし」  
「私たちの方で、ですよ」

シユテルの言葉にシユウが首を傾げ、すぐにそっか、と得心したように頷いた。

シユテルたちは囑託魔導師として時折働いている。当然何度か荒事も経験しているらしく、それに関わっていた者の逆恨みにシユウが巻き込まれることを懸念しているのだろう。シユウは魔法の知識はそれなりに得ているが、戦闘となると無力に等しい。シユテルたちの心配は当然と言える。

「ありがとう、シユテル。あとで皆にも改めてお礼を言うよ」

「私たちが原因のことですから、お気になさらずに」

そんな言葉を交わしていると、ルールの相談をしていたなのがこちらへと手を振ってきた。どうやら終わったらしい。シユテルはなのはに頷きかけると、それでは、とシユウに言う。

「観戦室への行き方は大丈夫ですね？」

「うん。もちろん」

データを収集、纏めるための部屋でもある。今はそこにリンディやエイミイもいるとこのことで、この後はその部屋へと向かうことになっている。

「では行つてきます」

「うん。がんばつてね、シユテル」

シユテルは小さく頷くと、皆が集まるところへと飛んでいく。シユウはそれを途中まで見送つてから、きびすを返した。出入り口へとのおんびりとした足取りで向かう。

ふと、シユウは足を止めた。どんな戦いをするのだろうかと少しだけ興味を持ち、振り返る。幾人かの人数に別れ、相對している友人たち。皆が特徴的な衣服に身を包んでいる。あれがバリアジャケット、というものだろう。

「へえ……。いいなあ。僕も魔法が使えたら良かったのに」

戦いたい、とは思わないが、魔法使いに興味がないと言えば嘘になる。それに、クロノが身にまとうバリアジャケットはなかなか格好いい。少しだけ羨ましく思う。

「まあ、無い物ねだりだよ。そろそろ行こう」

苦笑して、きびすを返す。

こういつた感想は、せめて観戦室で言うべきだったとシユウはすぐに後悔した。

『結界展開完了！ いつでもいいよ！』

どこからか響くエイミーの声。そう言えばいつの間にか、周囲の色が少し変わっているような気がする。そして、すぐに気づいた。ここはすでに結界の中だと。

「どうやら僕は存在感が薄いらしいね。ふふ、新たな発見だよ」

出入り口の扉はびくともしない。安全性のために締め切られているのだろうか。そしてしばらくして、轟音が響き始めた。どうやら模擬戦が始まったらしい。

「あつはっは。どうしようこれ」

シユウは乾いた笑いをその顔に貼り付け、顔面蒼白になっていた。

その頃の観戦室。結界を張り終えて、エイミイはデータの収集を開始する。その後ろには、遅れてやって来たリンデイが立つ。リンデイは、間に合ったわね、と小さく安堵のため息を漏らし、そしてすぐに、え、と間拔けな声を漏らした。

「艦長、お疲れ様です。どうかしました?」

エイミイが不思議そうに聞いて、リンデイが訓練室の一角を指さす。その先を見たエイミイもそれに気づき、見る見るうちに顔が青くなっていく。

「ちよつと待ってみんな! すと……」

慌ててエイミイが叫ぶが、すぐに戦闘が始まり、轟音で声がかき消されてしまった。

非殺傷設定。そうだ、これがあるから死にはしないだろう。そう自分に言い聞かせるシユウの真横を、魔力弾が打ち抜いていく。シユウの顔面、すぐ横を。そして背後の置物が粉碎され、その欠片がシユウの頬を薄く切った。わずかに流れる、血。

「あはは。見ろ。僕がゴミのようだ」

先日見たアニメ映画を思い出しながら、シユウは笑った。

「あはは」

笑った。

「あつはつはつはつは！」

そして走った。笑いながら。そして泣きながら。

「わりと本気で誰か助けて切実に！」

そんなことを叫びながら。

それに気づいたのは偶然だった。

何の気なしに振り返った先。シユウはちゃんと観戦室に向かっていているだろうかと振り返った先。それを見て、シユテルの表情が凍り付いた。シユテルには珍しいことに、表情を青くしていく。そしてすぐに、行動に移した。持ち場を離れ、全力で出入り口の側へと向かう。

『シユテル！ どうした！』

ダイアーチェの念話。だが今はそれに返事をする時間すら惜しい。なぜなら、どこかの三人娘と自分たちの盟主が、強大な魔法の準備をしているのだから。

「シユウ！」

シユテルが呼ぶと、必死に魔法の流れ弾から逃げているシユウが足を止めて振り返った。虚ろな目でシユテルを見つめてくる。内心で焦りを感じながらシユテルはシユウの側に下りると、すぐにプロテクションをかけてシユウを保護した。



「どうしよう、シユテル!」

シユウの声に、何かあったのかと不安に襲われる。

「遺書! 書き忘れた!」

何かはあった。シユウの心が壊れた、そんな意味で。

「シユウ! しつかりしてください!」

大声で呼びかける。何度か続けると、シユウが何度か瞬きをして、瞳に光が戻ってくる。シユテルの顔を認識したのか、すぐに泣きそうな表情になった。

「シユテル……」

「はい」

「怖かった……。本当に本気で怖かった……。死ぬかと思った……」

「ごめんなさい。ごめんなさい、シユウ。もう大丈夫です」

瞳に涙をためるシユウをそっと抱きしめながら、シユテルは周囲を確認する。障害物として設置されている大きめの岩などが点在している場所だ。おそらく観戦室からはこれらの影響でシユウの姿を確認できなかったのだろう。せめて退室まで一緒にいるべきだったと後悔するが、今は無事にシユウを連れ出すのが先だ。

そんなシユウは落ち着いたのか、シユテルから離れると、顔を真っ赤にしていた。

「シユウ。落ち着きましたか?」

「うん……。ごめん、シユテル……」

謝るべきは私たちです、と言おうとしたところで、大きな魔力反応を背後に感じた。シユウが表情を引きつらせ、シユテルもすぐに察しがつく。

「全力全開！」

なのはの勇ましいかけ声が、今はとても恨めしい。

「シユテル……」

シユウの不安げな声に、シユテルは大丈夫ですと頷きかける。

「全身全霊をとじて、守ります」

魔力反応へと体を向け、デバイスを構える。

「女の子に守ってもらって……。なんかもう、情けなくて泣きそうだけど、お願いしませ……」

シユウのその言葉の直後。光が爆発した。

「ごめんなきさいー！」

訓練室を出たすぐの廊下で、シユウは缶ジュースを飲んでた。そのシユウの目の前には、頭を下げる友人知人。誰もが申し訳なきような表情をしている。特にクロノやエイミーは激しい自己嫌悪に襲われているらしく、とても苦しそうな表情をしていた。

あの後、シユテルの結界はなのはたちの魔法に耐えきった。そのすぐ後にシユテルが全員へと、シユテルには珍しい大声で念話を飛ばし、シユウが取り残されていることを連絡。慌てて模擬戦は中断され、今に至る。

ちなみにシユウが飲んでいるジュースはクロノが買ってきたものだ。

「ふふ。本気で死を覚悟したね。貴重な体験だったよ」

遠くを見るような目で言うシユウに、全員が言葉を失ってしまふ。何と声をかければいいのか分からない、といった様子だ。そんな中で、リンデイが前へと進み出てきた。

「本当にごめんなさい、シユウ君。本来なら私たちが気づかないといけなかったのに……。とても怖い思いをさせてしまつて、ごめんなさい」

そう深々と頭を下げてくる。艦長という立場の人から頭を下げられたことにシユウは戸惑いを覚え、やがて小さくため息をついた。居心地悪い、と。

「もういいですよ。ジュースももらつたし」

「いや、それでいいのか……？ 詫びの品にもなっていないんだ。他に何かないのか？」

「じゃあ、美味しいご飯が食べたいです」

シユウがそう言うのと、クロノは呆気にとられたように口を開けていたが、やがて小さく苦笑を浮かべた。しつかりと頷いて、言う。

「君らしいな……。分かった。できる限りの手配をしておくよ」

「期待してます」

クロノがもう一度謝罪を言って、その場を後にする。他のメンバーもそれぞれしっかりとシユウに頭を下げ、その場を後にしていった。こんなことがあった直後だからだろうか、さすがにそのまま訓練室に戻る人はいないようだ。

やがてその場に残されたのは、シユウとシユテルたちだ。

「シユウ。すまなかつた。我らがもう少し気を配っておけば……」

「ごめんね、シユウ……」

「ごめんなさい……」

ディアーチェ、レヴィ、ユーリがそれぞれそう口にする。家族が意気消沈している姿をあまり見たくないシユウは、努めて笑顔で、

「本当に気にしなくていいから。それより、晩ご飯を楽しみにしようよ。クロノが奢ってくれるみたいだから」

気楽な調子のシユウに、ディアーチェたちが安堵のため息を漏らす。

そろそろ行こう、とシユウがジュースを飲み終えて、五人は移動を開始する。休憩室に全員が集まっているようなので、そちらに向かうことにした。

「シユウ」

歩きながら、シユテルが声をかけてくる。シユウが、どうしたの、と首を傾げると、

「本当にすみませんでした」

「気にしなくていいよ。それよりも、ありがとう。守ってくれて」

情けなくてごめん。シユウがそう口にするのと、シユテルは珍しく驚いたように目を瞠った。何を言っているのですか、と首を振る。

「人には得手不得手があります。今回は私が得手とすることだっただけです。デバイスのメンテナンスはいつもお願いしているわけです」

「うん……。そう、だね」

「ここで自己嫌悪しても仕方がないと考え、シユウは頷いて思考を放棄する。いつか自分も、シユテルを守るようになりたい。そんなことを思いながら。」

「……そう言えば、シユテルのあんな声は初めて聞いたなあ。すごい慌てていたようだな……」

「忘れてください。今すぐに」

シユテルが顔を背ける。その顔は、心なしか少し赤い。シユウはその横顔を見ながら、たまにはこんな日もいいか、と微笑んでいた。

もちろん巻き込まれないことが前提、ではある。

## 妄想

ベッドに横たわる少年と少女。少年、シユウは緊張した面持ちで隣の少女を見やる。少女、シユテルはシユウと目が合うと、ほのかに頬を染めて、艶めかしい声でシユウの名を呼ぶ。その声に、シユウは思わず生唾を呑み込んだ。

シユウはシユテルをそつど抱き寄せ、その首元に……。

「うわあああ！」

シユウは大声を出して飛び起きた。荒い息をつきつつも、必死に周囲の状況を確認する。部屋は薄暗いが、見覚えのある部屋だ。

シユテルの、部屋だ。

先ほどまでの夢を瞬時に思い出し、現実と夢との区別が曖昧になる。激しく頭を振つて、落ち着け、さっきのは夢だと何度も自分に言い聞かせる。

なんて夢を見たものだろうか。正に悪夢だ。

——ん？ 悪夢か？

夢をゆっくり思い出す。夢の中でのシユテルの姿。その姿を思い出し、思わず頬が緩

みそうになり、

「シユウ。どうかしましたか?」

隣からのシユテルの声。ぎよつとしつつ隣を見れば、シユテルが自分を気遣わしそうに見つめている。そして再び夢をリフレイン。顔を真っ赤にしてしまう。

「シユウ? 体調でも悪いのですか?」

そつと伸ばされてくるシユテルの手。シユウはそれを黙って見ていたが、自分に届きそうになったところではつと我に返り、

「うわあああ!」

思わずその場を逃げ出した。後に残されたシユテルは、状況が理解できずにただただ呆然としていた。

翌日。従業員の二名が囑託魔導師としての仕事に出ているため、喫茶店は臨時休業。休みとなった三人のうち、二人が閑散とした店内に残っている。普段は客が使うテーブルの一つを使い、向かい合って座っていた。

残るもう一人、ユーリは買い物に行っている。帰ってくるまでまだ一時間はあるはずだ。故に言うべきは、今。

「そんな夢を見たんだよ! 僕はあれかな、変態かな!」

シユウがそんな言葉を吐き出す。その先にいるのは、

「その、なんだ……。それを我に言われても、な……」  
顔を真っ赤にしたディアーチエがいた。

何が言いたいのだ、こやつは。それがディアーチエの率直な感想だ。仕事に向かうシユテルとレヴィ、そして買い物に向かったユーリを見送った後、ディアーチエは店内でのんびりと読書をしようとコーヒーを用意した。そのうちシユウも来るだろうと予想して、二人分。その予想通りにシユウが来たのだが、そのシユウから発せられた言葉は予想外のものだった。

曰く、相談がある、とのこと。そう言えば今朝方はシユテルと余所余所しくしていたが、それに関することだろうか。自分が解決できることなら相談に乗ってやろうと身構えたディアーチエに放たれた言葉は、シユウの夢の話だった。

——何だそれは。のろけか。これがのろけというものなのか。

頬を引きつらせながらそう思っていた。二人は幼い頃から恋仲と呼べる関係になっていたのだから、今更実際にそんなことがあっても不思議ではない。さすがに言葉にされると恥ずかしいものはあるが。

だが、とディアーチエは思い直す。そう言えばこの二人に関しては、テレビやドラマ、小説でよくある『そういつたこと』をしている気配がない。せいぜいが、二人で図書館



や映画館に出かけていたり、買い物に行ったりなどちよつとしたデートをするぐらいだ。今も昔も、それ以上の話を聞いたことがない。

それ故に、シユウは夢の中であつてもそういつたものを見たのが衝撃だったのだろう。そして思つたのだろう、自分はシユテルをそんな目で見ている変態なのかと。

「シユウ。うぬは今年で幾つになる？」

「へ？ えつと……。二十歳だね」

「至つて健全だ。むしろ遅いぐらいだ。気にするな」

話は以上だ、と言わんばかりにディアーチェは本を広げた。シユウは驚きで一瞬固まっていたが、すぐに慌てたように口を開く。

「いや、そんな適当なこと言わないでよ……！」

「と、言われてもな……」

このような取り乱し方をするシユウは滅多に見ない。珍しいこともあるものだと言つて苦笑しつつ、それならばとディアーチェが少し考えて、言う。

「我也男の悩みなど分らない。他の誰かを頼るべきだろう。例えば……。クロノ・ハラオウンなどどうだ？」

言つたものの、これはないなどディアーチェはすぐに首を振つた。彼は立場的に、自分の知人の中で最も多忙な人間の一人だ。そんなことはシユウも分かっているはずで

あり、それは無理だと言ってくると思つて、何か代わりの案をと再び考え始める。だが、

「分かった！ 行つてくる！」

次の瞬間には、シュウは喫茶店を飛び出していった。

「……は？」

後に残されたのは、呆然とするディアーチエだけだった。

友人からの突然の連絡。しかも、至急相談したいことがあると言われれば、クロノも流石に心配になってしまう。部下たちに簡単に説明して、自分にしかできない仕事を急ぎで終わらせ、他の仕事は別の者に担当してもらおう。本来ならこんなことをすれば良い顔などされないもののだが、そこはクロノの人望か、部下たちは皆、たまには息抜きも必要ですと笑顔で引き受けてくれた。

そしてシュウの元へと駆けつけて、話を聞いて。

「帰つていいか？」

「ひょー！」

クロノは頭痛を堪えるようにこめかみを押さえ、大きなため息をついた。多くの仲間迷惑をかけて駆けつけてみれば、相談内容はのろけ話に近いもの。部下たちに合わせ

る顔がない。

「シユウ。君のその夢はおかしなところはない。気にする必要はないと思う」

「むう……。ディアーチエにも言われたけど、納得いかない……。」

「いや待て。ちよつと待て。誰に相談しているんだ君は！」

クロノの狼狽した声に、シユウは不思議そうに首を傾げた。ディアーチエにだけど、と平然と答えるシユウに、クロノは頭が痛くなつてくる思いだ。男同士ならともかく、女性にそんなことを相談するとは。

「とにかく、これ以上僕から言うことは何もない。納得できないなら、ユーノにでも聞いてみたらどうだ？」

「ん……。よし、そうしてみよう！」

言うが早い、シユウは挨拶もそこそこに駆けだした。無限書庫へと向かったのだろう。クロノは小さくため息をつく、空いた時間で何をしようかと考える。

「二応、様子を見に行くか」

クロノは一つ頷くと、その場を後にした。

ふと、歩きながら思う。

——そう言えば、ユーノは今日、なのはと会うと言っていたような……。？

「かくかくしかじかでこうなんだけど、どうしよう!」

「わーわー! こんなところで言うことじゃないよ! 落ち着こう!」

「そ、そうだよシユウ君! とりあえず落ち着いて! ね!」

たまたま休みだったユーノに連絡を入れ、指定された飲食店へとシユウが向かうと、なぜかなのはもそこにいた。しかしそんなことを気にする余裕もなく、シユウはユーノに駆け寄ると、ことのあらましを説明した。してしまつた。大声で。

ユーノとなのはが顔を真っ赤にしながら、とりあえずとシユウをいすに座らせる。自分たちの水をシユウに差し出して、少しでも落ち着いてもらおうとする。その意図を察したわけではないだろうが、シユウは水を二杯とも飲むと、ゆっくりと息を吐いた。

「ふう……。ありがとう」

「落ち着いた?」

「落ち着きました」

シユウは一度だけ頷き、店員を呼んでコーヒ―を注文する。その様子を見ていたなのはとユーノが、どこか安堵したような表情を見せていた。二人もシユウの向かい側へと並んで座つた。

「それにしても、びっくりしたよ。いきなりあんな……。えつと……」

「なのは、無理に言わなくてもいいと思うよ……」

「そ、そうだよね」

言葉にしにくそうにしているなのはへとユーノが言つて、なのはは引きつった笑みで頷いた。二人はそろつたため息をつくつと、シユウへと視線を投げてくる。シユウは店員が持つてきたコーヒーを一口飲み、一瞬だけ動きを止め、そして何も言わずに飲み続けている。

見られていることに気づいたシユウが首を傾げると、二人はまた大きなため息をついた。

「えつと……。シユウ。ちよつと言いくいけど、はつきり言つておくよ」

ユーノの言葉に、シユウが緊張した面持ちになる。そんなシユウへと、ユーノは言つた。

「気にしすぎだよ。それ以上は、正直言いようがないかな」

「クロノにも言われたけど、納得できないよ！ 初めてだよあんな夢！」

なおも言い募るシユウへと、どうしたものかとユーノは困つたように苦笑する。ユーノがちらりとなのはを見れば、なのはの笑顔は困惑で引きつっていた。

「いつそのこと、シユテルに直接聞いてみたら？」

無論これは本心で言つたわけではない。きつと、そんなこと聞けるわけがない、と返すはずだと思つてのことだ。だがユーノのその予想は見事に外れてしまった。

「そっか、それが手っ取り早いか！」

そして直後に駆け出すシユウ。もちろんお金置いていくことは忘れない。ぽかんと間の抜けた表情をした二人が取り残される。

「……つて、ちよつと待つてシユウ！」

慌ててユーノが立ち上がり、続いてなのはも立ち上がる。

「ユーノ君、お会計は私がしておくから、シユウ君を追つて！」

「分かった！」

そんな短い会話を交わして、ユーノは急いでシユウを追った。

「ただいま戻りました」

シユテルは喫茶店に戻ると、少しばかり珍しい来客者にわずかに目を細めた。テーブルで向かい合つて座っているのは、ディアーチエとクロノだ。クロノはシユテルに気がつくくと、片手を上げて挨拶をしてくる。

「久しぶりだね」

「はい。お久しぶりですね。今日はどういったご用件で？」

「いや、その……」

クロノとディアーチエが視線を交わし、二人揃つて困つたような苦笑を見せる。何か

問題でもあったのだろうかと首を傾げていると、

「ただいまー！」

背後からの声。シュテルが振り返ると、シュウが息を切らして立っていた。シュテルが少し驚き、そしてディアーチェとクロノがなぜか目を大きく見開いている。少しだけ焦りの感情が見えるのは気のせいだろうか。

「おかえりなさい、シュウ。出かけていたのですか？」

「うん、ちよつとね。それでね、シュテル。聞きたいことがあるんだ」

「はい、何でしょうか」

ディアーチェとクロノが席を立つ。身振り手振りでシュウによせ、やめろと指示を出す。だがシュウはそれには気づかずに、言った。

昨夜の夢を。それに混乱している自分の心境を。全て、言ってしまった。

「ああ……」

「遅かった……」

店の外からはユーノとなのはの声。どうやらシュウを追いかけてきたらしい。

そしてシュテルは、

「……………」

目を大きく見開き、そして頬を赤く染めていた。

どうかして場を繕わなければ。シユウから相談を受けた四人が瞬時にそう考え、高速で頭を回転させる。どうすれば穩便に済ませられるかと。だが、最初に口を開いたのはシユテルだった。

「シユウ」

「うん」

「昨夜は眠れたのですか？」

「いや全く！」

「でしようね」

シユテルが苦笑。どうやら一人で納得しているようだが、シユテル以外には、シユウも含めて訳が分からない。首を傾げているシユウの耳元へとシユテルは顔を寄せ、

「おやすみなさい」

シユウにしか聞こえない声で、優しく告げた。

何かしらの魔力が込められていたのか、シユテルの声を聞いたシユウはその場で眠りに落ちた。力の抜けたシユウの体をシユテルが受け止め、慣れた様子で二階へと運んでいく。しばらく待つと、シユテルはすぐに戻ってきた。

「えっと……。シユテル。その、聞いても、いいかな……。？」



なのはの遠慮がちな声にシユテルは頷いた。

「デバイス関連の仕事が立て込んでいまして、昨日まで一週間近く、ほとんど寝ていないようでした。今回のこれは、その影響でしょうね。寝不足で意識そのものが朦朧としていたのだと思います」

「つまりは、正気じゃなかった、と?」

そのクロノの言葉に、シユテルはまた頷いた。その場に居合わせた一人一人に視線を向け、そしてシユテルは頭を下げた。

「おそらく次起きた時は何も覚えていないと思いますので、シユウの代わりに謝罪します。ご迷惑をおかけして、すみませんでした」

「迷惑だなんて思っていないよ。ただ、その……。びつくりはしたけど……」  
なのはは苦笑しながらも、でも気にしてないから、と付け加えた。

一件落着き、と見てよさそうだ。そう判断したディアーチェは、さて、と立ち上がり伸びをする。わざわざシユウの、家族のためにここまで来た三人に、

「詫び、というわけではないが……。せつかく来たのだ、何か食べていくといい。メニューから適当に選べ」

そう言うのと、ディアーチェは厨房へと向かう。注文が決まればシユテルが伝えに来てくれるだろう。そう考えて、ディアーチェは先に調理の準備を始めていく。

「デイアーチエ」

不意にかけられる声。振り向いた先にはシユテルがいた。

「ありがとうございます」

シユテルのその言葉に、デイアーチエは気にするなと手を振った。

日も暮れて、夕食も終わり。

「おはよう、すっかり熟睡しちゃったよ。……あれ？ みんな揃って何してるの？」

欠伸をしながらのシユウの言葉に、その場にいる全員が苦笑とともにため息をついた。

## 悪夢

ぼたり、と液体が落ちる音。次いで誰かが倒れる音がして、少年は振り返った。少年の目に映ったのは、親しい少女の姿、親しい少女の、血だまりに沈む姿。

「あ……」

少年はふらふらと少女に近づき、その手を取る。まだ温もりはあるが、おそらくすぐに失われてしまうだろう。なぜ、と自問して、何が、と心の底から返答があった。

なぜ、こうなった。これは何だ。少年が心の中で問いかけ、そして奥底から返答がある。

お前がここにいたからだ。足を引つ張ったからだ。

ぴくり、と少女の体がわずかに動き、少女が少しだけ顔を上げる。少女の視線が少年を捉え、そして淡く、優しく微笑んだ。

無事、ですね。ああ、良かった……。

少女は言い終えると再び倒れ伏し、そして二度と動くことはなかった。

そして気づけば、少年は喫茶店の中にいた。

いつもの喫茶店。元気な少女が接客をして、リーダー格の少女が厨房で料理をしてい

る。少し内気なもう一人の少女は、一生懸命に料理を運んでいるところだ。

いつもの光景。だがこの中に、もう一人、本来いるべきはずの少女がいない。

一人、いなくなつた。

そして気づけば、シユウは荒野に立っていた。目の前で倒れているのは、先ほど元気よく働いていた少女。なぜこうなつた、やはり自分がいたからだ。

そしてまた一人いなくなり、気づけばもう一人も失われ、最後の一人は待つていてください、必ず方法があるはずです、と少年の前から姿を消した。

そして少年は一人になつた。薄暗く、静かな店内。ぼつんと一人残された、使えないロストロギアだけを抱えた少年。少年は長い間茫然自失としていたが、出入り口からの物音で我に返つた。そしてそれを見る。

最後の一人の息絶えた姿。

「うわあああ！」

そこで、目が覚めた。荒い息をつきつつ、シユウは周囲を確認する。見慣れた、自分の部屋だ。だが安心できない。できるはずもない。この部屋に、シユウは一人だ。

ふらふらと立ち上がり、扉へと向かおうとしたところで、

その扉が開いた。

そして見るのは、血まみれの少女……ではなく。

「シユウ、どうかしましたか?」

心配そうにこちらを見つめるシユテルがそこにいた。

確かに、そこにいた。

「シユテル……」

「はい」

シユウと呼ばれ、シユテルが首をかしげる。シユウはそんなシユテルへと覚束ない足取りで近寄り、そしてその体を抱きしめた。

「シユウ?」

戸惑いの声をかけてくるシユテル。それでもシユウは何も言わずに、シユテルの体を強く抱きしめる。

ああ、温かい……。

シユテルは首をかしげながらも、そっとシユウの背に腕を回し、頭を優しく撫でてくれた。

先日、なのはが重傷を負って入院したとフェイトとはやてから連絡が届いた。顔などを見られないようにして病院へと向かったシユウとシユテルは、それを見て絶句したものだ。

なのはが日頃の訓練を含め、無茶をしていたことは知っている。いずれしつぺ返しが

あるだろうとシユテルなどはなのにはよく注意していたものだ。だがそれでも、生死の境をさまよするような怪我を負うなど想像もしていなかった。

隣に立つシユテルは、だからあれほど言ったのです、とつぶやきながら、拳を握りしめていた。小さく震えるシユテルの手を、シユウは黙って握っていた。

シユウは。心配すると同時に、別のことを考えていた。

いずれシユテルもこのような怪我を負うのではないかと。

シユテルたちは囑託魔道士だ。その時の仕事によつては、当然ながら危険なものもある。シユテルたちはおくびにも出さないが、命のやりとりも何度かあつたはずだ。いつ大怪我を負つても、いや、死んでしまつてもおかしくはない。

なのはを見守りながら、シユウはそんなことを考えている自分に嫌悪感を抱く。友人が苦しんでいるというのに、自分は何を考えているのか。

「早く良くなるといいね……」

「そうですね……」

二人は言葉少なく、静かになのはを見守っていた。

「シユウ、落ち着きましたか？」

シユテルの声に、シユウは顔を上げた。心配そうにしているシユテルへと、シユウは力なく微笑んだ。

「うん。大丈夫。ごめんね、シユテル」

そう言つて、シユウはシユテルから体を離す。さすがに少し恥ずかしい。そのまま距離を開けようとして、

「……………」

病院のなのはの姿を思い出した。思い出してしまった。シユテルを見て、いけないとは思いつつも泣きそうな表情を浮かべてしまう。

「シユテル、ごめん、もうちよつとだけ……」

「構いませんが……」

もう一度シユテルの体を抱きしめる。シユテルの体温をしつかりと感じることが出来る。大丈夫だ、間違いなく生きている。それでも離れることができずにしばらくそうしていると、やがてシユテルが口を開いた。

「間違っていたらすみません。病院のことを思い出しているのですか？」

凶星をつかれたシユウが大きく体を震わし、対するシユテルは薄く苦笑を浮かべた。

それきり静かになる。シユウは何も言わず、シユテルも口を開かない。ただ、何度も優しく背を撫でてくれる。大丈夫だというように。それがとても心地よく、いつまでもそうしてほしいと思つてしまう。

どれほどそうしていただろうか。やがて、そろそろ寝ましようか、とシユテルが言つ

て、シユウは頷いた。そつとシユテルから離れる。名残惜しいと思つてゐるのが伝わつたのか、シユテルはしばらくシユウを見つめ、仕方ないですね、と嘆息した。

「一緒に寝ましようか」

え、とシユウが勢いよく顔を上げる。シユテルの顔をまじまじと見つめると、暗がりの中とはいえ、ほんのりと赤くなつてゐるのが見て取れた。

「いえ、無理にとは言いません。むしろ忘れてください。では私は戻ります」

慌てたようにシユテルがきびすを返そうとして、そのシユテルの手首を思わず掴んでいた。少し驚いたように振り返るシユテルへと、シユウが言う。

「いいの……?」

シユテルがわずかに目を見開き、そして、淡く微笑んだ。

「はい。もちろんです」

シユウのベッドへと二人で潜り込む。シユテルの手を握りながら、シユウは目を閉じて、

今度は夢を思い出した。血に染まつた夢を。

勢いよく体を起こすシユウ。自然と荒くなる息。どうかしましたか、と気遣わしげに聞いてくるシユテルへと、シユウは逡巡しながらも、夢の内容を語つた。

「ああ、なるほど。それで……」



得心したように頷くシユテル。シユウはそんなシユテルの顔をまともに見ることができない。たかが夢ごときと幻滅されてはいないだろうか、と不安になってしまう。

「シユウ」

呼ばれてシユウが振り返る。シユテルはいつもの無表情で、ベッドをぼんぼんと叩いていた。

「とりあえずは横になりましょう。でないといつまでも眠れませんよ」

横になつても眠れないけど、と思いつながら、シユウは大人しく寝転んだ。布団をかぶり、目を閉じる。そしてまた夢の光景が眼前に広がるうとしたところで。

シユテルがシユウを抱きしめた。

「シユテル……？」

思わずシユウの声が震えてしまう。シユテルはそれに答えずに、シユウの頭を優しく撫でる。

「確かに私たちは、たまにとはいえ危険な場面に遭遇することもあります」

シユウが息を呑み、ですが、とシユテルは続ける。

「私たちが貴方を一人にすることはありません。誰も、貴方の前からいなくなりません。だから安心してください」

何の根拠もない言葉。先のことなど分からない上での、シユテルの言葉。それでも、

シユウはシユテルの声を、言葉聞いて、なぜかとても安心できた。シユウもシユテルの背に手を回し、小さく頷いた。

「ありがとう、シユテル……」

シユテルはもう何も言わない。ただ静かに優しく、シユウを撫でてくれる。それがとても心地よくて、いつしかシユウは温かい夢の中へと眠りに落ちていた。

翌日。朝食の席にて。

「ねえねえ、シユウ」

レヴィが元氣よくシユウを呼ぶ。呼ばれたシユウは口の中の白米を嚙下してレヴィへと顔を向ける。

「なに?」

「昨夜はお楽しみだったの?」

「ぶふっ!」

口の中のものを少しはき出して大きくむせたのは、ディアーチエだ。シユテルから差し出されたコップを受け取り、中の水を一気に飲み干す。コップを渡したシユテルの表情は、無。眉一つ動かされていないことが、余計に怖い。

シユウは口を半開きにして完全に硬直していた。残りの一人、ユーリは意味が分かつ

ていないのかぼかんとしている。

最初に動いたのはディアーチエだ。水を飲み干して一息ついたディアーチエはおもむろに立ち上がると、レヴィの真後ろに立った。そしてレヴィの頭を掴み、締め上げる。

「いた！ 痛い痛い！ 痛いよ王様！」

「黙れ阿呆！ どこでそんなことを覚えてきた！ 来い！」

「なんでー！」

そのままずると引きずられていくレヴィ。ディアーチエはユーリに目配せすると、そのまま部屋を後にした。ディアーチエの視線の意図を察したユーリが、ちよつと心配なので見てきます、と続いて出て行った。

後に残されたのは、無表情に食事続けるシユテルと、未だに硬直したままのシユウ。シユテルはそんなシユウを一瞥すると、小さな声で言った。

「冷めてしまいますよ」

「あ、うん。そうだね」

すぐに再起動。シユウも食事を再開する。数分ほど二人とも無言で食事をつけたところ、シユテルが口を開いた。

「まあ、確かに不注意が過ぎました」

「あ、うん……。そうだね」

「次は気をつけましょう」

「あ、あはは……」

シユテルの淡々とした声に、シユウは乾いた笑みしか返せなかった。

S i d e : S t e r n

あまり認知されていないのか、立地条件が悪いのか、それとも両方か、あるいは別の理由か。ともかく、シユウたちの喫茶店を訪れる客は少ない。料理担当のシユテルか、デイアーチエ、接客担当のレヴィかユーリ、片方ずつ店にいれば十分に回せるほどだ。

故に、長い休憩時間が与えられることもある。

「シユテル。夜まではとりあえず大丈夫であろう。見舞いにも行つてくるといい」

デイアーチエが言つて、シユテルは礼を言つて喫茶店を出た。シユウを誘うと、少し悩んでいたようだがやはり一緒に来てくれた。

二人でなのはの見舞いに行く。少しだけ言葉を交わし、シユテルはそのままなのはリハビリへとついて行く。もちろんシユウも同行。

リハビリは専用の大きな部屋があり、そこでは何人もの患者がリハビリをしていた。

「やっぱり大変、だよな?」

シユウが聞いて、なのはが苦笑する。

「うん。やつぱりすごく辛いよ」

「逃げたくない？」

「逃げたくないって言えば嘘になるだろうけど……。でも、諦めないから」

行つてきます、となのはは笑顔で言う、担当の看護師の元へと向かった。二人はそれを見送つて、一度部屋を後にする。ここからしばらくの間はなのはリハビリに専念することになる。ここにおいても邪魔にしなければならないだろう。

「少し出かけましょうか」

シユテルがそう提案すると、シユウは神妙な面持ちで、そうだねと頷いた。

病院を後にした二人は近くの喫茶店へと向かった。自分の店があるのとは思わなくもないが、他店を見ておくのも悪くはない。

喫茶店へと向かう間、シユウはずつと何かを考えて込んでいた。何を考えているのか少し気にはなるが、昨夜のような悲壮な表情はしていない。ならばわざわざ聞くことでもないだろう。そう判断して、シユテルは黙って歩いていく。

——何を考えているのか察しはつきませんが。

ちらりと背後を振り返ると、こちらを見つめるシユウと目が合った。

「あのさ、シユテル……」

おずおずといった様子でシユウが口を開く。そんなシユウへと、シユテルは首を振つ

た。

「必要ありません」

「まだ何も言っていないよ?」

「聞かなくても分かります。ギフテッドの力を使ってナノハを治療できないか、では?」  
シユウは一瞬目を見開き、次いで凶星だったのだろう、眉尻を下げた。

「ナノハならこの程度の試練は乗り越えられます。それに、この先同じようなことがないとも言い切れません。きりがありませんよ」

「うん……。でもやっぱり、友達が苦しんでいる姿は、あまり見たくないなって……」  
「気にしすぎですよ。それに、きつとあの子も望みません」

なのはもギフテッドのことは知っている。ギフテッドの存在を隠すために、その力を使わないようにしていることも。もしもシユウがその力を使えば、きつと余計に病むだろう。

最も、それ以前にパストが眠ったままなので自由に使えるものではないのだが。

「じゃあ……。なのはが退院したら、お祝いに僕たちのお店に招待しよう。それなら、どう?」

「そうですね。そうしましょうか」

それならなのはも喜ぶだろう。フェイトやはやてに協力してもらおうのも悪くない。

まだリハビリは始まったところなので時間はある。なのはが喜ぶような計画を練るとしよう。

シユウとそんなこと会話しながら、シユテルたちは歩く。

それまでは。時間さえあれば元気づけに来てあげよう。そう決めた。

夜。昨日の今日で悪いかな、と思いつつもシユウはシユテルの部屋の前に立っていた。つい先ほど、就寝前にシユテルに言われている。

今日も眠れなければ一緒に寝てあげます、と。

その時は大丈夫だと言ったが、ベッドに入るとやはり昨夜の夢を思い出して眠れず、結局ここに訪れていた。だが本当に入ってもいいのかと不安になってしまい、入れずにいる。しばらくそこで رفتたり来たりしていると、

「何をしているんですか……」

シユテルの部屋の扉が開き、呆れたような表情をしているシユテルが出てきた。驚きながらシユウが照れ笑いを浮かべると、

「どうだい」

シユテルに促されて、シユウは彼女の部屋に入った。

シユテルのベッドに、本人と一緒に横になる。すぐにシユテルの手がシユウの頬に触

れた。

「ではお休みなさい、シユウ」

シユテルの優しいげな声音に、シユウもおやすみ、と返す。目を閉じても、あの夢の光景は映らなかつた。

今日はよく眠れそうだ。



## サンタクロース

「明日は楽しいクリスマス！ イエイ！」

「イエイ！ です！」

リビングでレヴィとユーリの楽しそうな歌声が響く。ディアーチエがいるならやまましい、と怒ることだろう。ではそのディアーチエはいないのかというと、

「……………」

隣のキッチンで、難しい表情をしていた。その側にはシュテルがいて、こちらはいつもの無表情。だがその瞳はどこか自分たちの王を気遣うような色を帯びている。そして当然のようにシユウもいて、こちらはどうしたものかと苦笑い。

二人の歌声がさらに届く。

「クリスマスにはサンタクロース！」

「プレゼントですね！ 何がもらえるんでしょう？」

それを聞いたディアーチエが頭を抱え、シュテルが小さくため息をつき、シユウの笑みは引きつったものになった。

事の起こりは一時間前。

彼女たちにとってクリスマスは、少し豪華なケーキを食べて、普段は食べないご馳走を食べる、というイメージだった。そんな彼女たちは、テレビの子供向け番組を見た。その番組に取り上げられた題材が、サンタクロース。

サンタクロースについては、ディアーチェとシユテルは当然ながら知っている。この世界の、この国の大人たちは不思議なことをしているという程度の認識だった。だがそうは言ってられなくなってしまった。

「王様！ サンタクロースだって！ ボクたちのところにも来るかな！」  
「来ますか？」

瞳を輝かせるレヴィとユーリがいた。期待の籠もったきらきらとした瞳。それを見たディアーチェは思わず頷いていた。もちろんだ、と。それがいけなかった。

「ユーリ！ サンタさん来るって！ サンタさん！」  
「何がもらえるんでしょう！ 楽しみです！」

喜色満面。なるほど、とディアーチェは頷いた。この世界の大人たちの気持ちがよく分かった、と。そして思う。やってしまった、と。別段彼女たちの経済事情が悪いわけではもちろんない。理由は単純だ。

「明日が楽しみですね！」

ただただ時間がなかった。

現在夜八時。急げば何かしら買うことはできるだろう。だがしつかり選ぶことはできない。そんなものを渡したいとは思えず、しかし解決策が浮かぶわけでもなく、こうして意味の無い時間だけが流れていく。

「むう……」

頭を抱えて唸るディアーチエと、いつの間にかチラシをかき集めてきて遅くまで営業している店を探しているシュテル。シュウはそんな二人の様子をしばらく見つめていたが、やがて仕方がないかと諦めた。今回の計画は白紙にしよう、と。

「ディアーチエ」

シュウに呼ばれて、ディアーチエが顔を上げる。

「一時間ほど待ってもらえる？ 僕がなんとかするよ」

「できるのか……？？」

「まあ任せてよ」

にやりと不適に笑い、シュウはその場を後にした。

一時間後。サンタクロースは早く寝ないと来ない、とするテレビの影響か、レヴィとユーリはその時間にはベッドに入っていた。ディアーチエとシュテルはリビングに場所を移している。

「お待たせ」

シユウがリビングに入ってきた。勢いよく顔を上げるディアーチェが見たものは、普段とは違う格好をしたシユウだ。その姿は暖かそうな赤い服に帽子という、よくあるサントクロースのものであった。そしてその手には、大きな白い袋。

「何だそれは？」

「サントクロース。まずは二人に」

シユウが白い袋から綺麗に包装された紙箱を取り出し、それをディアーチェとシユテルに渡す。二人は驚いたような表情をしながらも、それを受け取った。

「本当なら二人も寝た後に行動したかったんだけどね」

シユウが笑いながらそう言ったのを聞いて、元々の計画を察することができた。どうやらシユウは全員が寝静まった後、それぞれの部屋へ忍び込んでプレゼントを置こうと思っていたらしい。

「というわけで、ディアーチェに預けるよ」

白い袋がディアーチェに渡される。それを受け取ったディアーチェは、少し困惑したような表情をしていた。シユウを見て、白い袋を見て、何度か視線を往復させて、やがてぼつりと言葉をこぼす。

「いいのか？」

「うん。問題ないよ」

そうか、とディアーチエは頷いて、頭を下げた。感謝の言葉を口にする、シユウは笑って手を振っていた。

## Side: Stern

プレゼントを持ったまま、シユテルはプレゼントに視線を落としていた。シユウへと視線を向けると、どこか楽しそうに笑う顔が映る。シユテルが口を開こうとして、

「中身はまだ見ないでね。明日、一芝居打ってほしいから」

すぐに閉じた。どうやらシユテルたちにもサンタクロースが来たということにしておきたいらしい。しかしシユテルはシユウへと怪訝そうな目を向ける。

「貴方だけが貰っていないとなると、レヴィとユーリが不審に思いませんか？」

「え？ ああ、確かに……。まあ、適当にごまかすよ」

どうやら何も考えていなかったらしい。シユテルは小さくため息をつく、その場を少し離れる。自室に隠しているあるものを取り出して、リビングに戻ってそれをシユウに渡した。

「どうぞで」

「え？ あ、ありがとう……。？」

困惑しつつも受け取るシユウへと、シユテルが続ける。

「今晚、貴方の部屋に置きに行こうと思つていたものです」

それを聞いてシユウも察したようだ。どうやら同じことを考えていたらしい。その事實に、二人そろつて小さく笑う。

「ありがとう、シユテル」

「いえ」

二人は並んで座り、ディアーチェが戻ってくるまで静かな時間を過ごす。ただディアーチェはなかなか戻つてこずに、結局そのまま二人とも眠つてしまった。

ようやく戻つてきたディアーチェは二人を見て、呆れたようにため息をつきながらも仕方がない奴らだと笑つていた。

Side : Dear che

翌日。ディアーチェが目を覚ますと、枕元に小さな箱があつた。不思議に思つて、側のテーブルを見る。シユウからのプレゼントもそこに確かにある。怪訝そうに眉をひそめながらリビングに向かうと、リビングにいた二人が朝の挨拶をしてきた。その二人の目の前のテーブルには、見憶えのない小さな箱。

「ねえ、ディアーチェ。これ……」

「いや、我も知らん。同じものがあつた」

三人そろって首を傾げる。まさか、とまだ来ていない二人の可能性を考えるが、

「プレゼントが二個も来た!」

「来ました!」

嬉しそうにリビングに飛び込んできた二人から、やはり違うらしいということが分かる。一体誰が、と三人で首を傾げたが、すぐにその日の準備に追われてそれは忘れてしまふことになった。

S i d e : P a s t

ゆらりゆらりと闇の中で揺れながら、パストは表の様子を見ながら満足そうに笑っていた。

この世界のクリスマスのことを知ったのは何年前だったか。当時は関係ないと思っていたが、今年はせっかくだからと我が子とその家族にプレゼントを贈ることにした。わざわざこのためだけに長い眠りから少しだけ起きて、シュテルからまじめに受け取っているのだろう魔力を影響のない程度拝借して、己の力を使った。

自分の魔力の痕跡は消した。我が子たちは自分が今も眠っていると思っている。きつと自分の仕業だとは気づかないだろう。ちよつとした完全犯罪をした気分になつてにやにやと笑う。そうしていると、

『もしかしたらパストだったりして』

そんな我が子の声が聞こえ、笑みが凍り付いた。口調から冗談の類いだと分かるが、なぜか時折妙に鋭い時がある。怖い怖い、とパストは楽しそうに笑うと、一人で満足した。パストは再び闇の中へと沈み、眠りに落ちた。

その後、シュテルとデイアーチエ、シユウからその話を聞いたリンデイが、彼女たちの身辺を知る者がいるかもしれないと仮定して捜索が行われ、ちよつとした騒ぎになったりもしたのだが、パストにとっては至極どうでもいい話である。



## 体験入学（前編）

ある日の朝。シユウは学校で、いつも通り机に突っ伏して眠っていた。シユウが登校してからホームルームまではまだそれなりの時間がある。最近はや更かしも増えているのでこの時間は貴重だ。無論熟睡しているわけではないので、担任が来るといつもうぐに起きられるようにはしている。

やがてチャイムが鳴り、担任が教室へと入ってくる。なぜかいつもより教室が静かなことに内心で首を傾げながら目を開け、あくびをしながら前を見る。そして、凍り付いた。

担任の隣に並んで立つ三人の少女。シユウがよく知る三人で、顔立ちだけならクラスメイトたちもよく知っているだろう。その証拠に、クラスメイトたちは何度も目の前の三人となのはたちを見比べていた。

担任はどこかおかしそうに笑いながら、静かに、と手を上げる。そして言った。

「今日から一週間、新しいお友達がこの教室で皆さんと勉強することになりました。それでは、自己紹介をどうぞ」

担任のその言葉で三人の少女が一步前に入る。

「ディアーチエだ。よろしく頼む」

まずはディアーチエがそう言つて、小さく頭を下げた。ディアーチエも頭を下げるんだなと少し場違いな感想をシュウが抱いている間に、次の少女へ。

「レヴィだよ！ よつろしくー！」

元氣よく手を上げる。どこに行つてもレヴィは変わらないと思つてみると、

「頭ぐらい下げんか！」

ディアーチエが一喝して、レヴィが慌てて頭を下げる。その様子を見て、クラスメイトたちは呆氣にとられていた。関係性が分からなければ当然だろうか。そして最後の一人。

「シュテルです。よろしくお願いします」

丁寧にしっかりと頭を下げるシュテル。そのシュテルと、目が合った。さすがにこの場で声を出して挨拶する、という選択肢は取れず、シュウは笑顔を見せることで挨拶とすると、シュテルもそれを察したのか微かに微笑んで見せた。

それにしても、どうして三人がこの学校にいるのだろうか。経緯を知らないシュウは、ずっと首を傾げていた。

数日前。シュテルたちはなのはたちとの模擬線を終え、アースラの食堂で軽食を取つ

ていた。その場での雑談の一つで、学校の話題が上がった。

「帰ったら学校の宿題もしないと……」

「今週の宿題はちよつと量が多かったよね。私も帰ったらやらないと……」

フェイトとなのはの言葉に反応したのはレヴィだ。フォークをくわえたまま、

「宿題つてなに？」

「学校で出される課題ですよ、レヴィ」

「ふうん……。学校つてどんなところ？」

興味を引かれたらしいレヴィに、シユテルが学校の説明をする。もつともシユテルの説明は、この世界の文章などから得た知識によるもので、実際に体験したものではない。特になのはたちが通う学校は私立であり、公立とはまた少し違った所がある。シユテルの説明の合間に、なのはとフェイトがその辺りを補足した。

全てを聞き終えたレヴィは瞳を輝かせていた。こうなると、次の言葉は予想できる。

「楽しそう！ 行つてみたい！」

「だめだ」

「ダイアーチエが即答。ええ、と不満そうな声を出すレヴィへ、ダイアーチエがため息交じりに言う。

「この世界に我らの戸籍はない。当然ながら、学校に通うこともできない」

「学校に通うぐらいならどうにかなるわよ?」

まだ言葉が続けようとしていたディアーチエがわずかに目を見開き、怪訝そうに眉をひそめた。声の主、リンディへと視線を向ける。

「学校に通いたいの?」

リンディの問いかけに、レヴィが期待に満ちた眼差しで勢いよく頷いた。リンディが頷きを返し、ディアーチエとシユテルへと視線を向ける。その視線の意味を察して、二人が口を開いた。

「ナノハたちが学んでいる場所には少し興味がありません」

「見聞を広めるという意味では、悪くはないな」

二人のその言葉に、リンディは満足そうに微笑んだ。

「もちろんユーリさんも行くわね?」

「はい! 大丈夫ですか?」

「もちろん。それじゃあ、準備をしておくわね」

リンディが笑顔で言つて、席を立てて部屋を出て行く。リンディが立ち去つた後は、なのはたちの学校がどういったところなのかという話題になった。

「シユウ君にも教えてあげないといけないね」

ふとなのはがそう言つて、シユテルも頷く。それに異を唱えたのは、レヴィだ。

「ええ！ せっかくだから内緒にしようよ！ びつくりさせよう！」

「おお、ええなあそれ！ あたしはレヴィに賛成や！」

はやてが嬉々として言う。なのはたちがシュテルの顔色をうかがうと、特に反対することもなかったのでシユウには内緒、ということになった。

そんな経緯を知らないシユウは、教室の前に立つ三人を見て、嬉しそうな、しかしどこか困惑しているような複雑な表情になっていた。それでも短い間とはいえ一緒に学校生活を送れるというのは魅力的である。シユウは三人の来訪を歓迎することにした。

授業まではシュテルたちへの質問を、ということになった。すぐにクラスメイトたちが手を上げ、担任が無作為に一人を選ぶ。その一人が真つ先に聞いたことは、

「高町さんたちとうり二つだけど、双子？ 家族？」

全員が気になっていたことだろう、皆が聞き漏らすまいと静かになる。シュテルたちは顔を見合わせると、シュテルが一步前に出た。どうやらシュテルが代表して答えるということになったらしい。

「友人ではありませんが、血は繋がっていません」

「ええ！ でも本当にすごく似てる……」

「似た顔の人が三人いるといいますし、ただの偶然ですよ」

シユウの知らないことではあるが、これはあらかじめシユテルたちとなのはたこの間で決められたことでもある。少々苦しいかもしれないが、一週間だけだ。これで押し通すことにした。それに、まるきり嘘というわけでもない。

質問した生徒は、そんなものなのかな、と無理矢理納得したらしい。それ以上は何も言わず、席に座った。

その後も何度か質問をされて、シユテルが無難な答えを出していく。そして授業直前の時間になって、担任が手を叩いた。

「はい。ここまでにしておきましょう。他にも聞きたいことがある人は休み時間にね。それじゃあ、シユテルさんたちの席だけど……。三人とも、高町さんたちとはお友達なのよね？」

高町たち、というのはなのは、フェイト、はやてのことを言っているのだろう。シユテルたちが頷くと、それじゃあ、と担任が続ける。

「親しい子が隣にいた方が安心よね」

そして教室の後ろに置かれていた三組の机といすが移動させられる。シユテルはなのは、レヴィはフェイト、デイアーチエははやての隣の席となった。

いつの間に机とか用意していたんだろう、と思うシユウだが、後から聞くと最初からあったらしい。そのため、転校生が来るのではないかと朝から期待されていたそうだ。

シュテルたちを迎えたなのはたちがそれぞれ嬉しそうな表情を浮かべていたが、対する三人のうちの一人、ディアーチエだけはとても渋い表情をしていた。

何事もなく授業が終わり、休憩時間。シュテルたちはクラスメイトたちに囲まれている。先の時間では足りなかったようで、まだまだ質問責めにされている。シュウはそんな三人の様子を、自分の席からぼんやりと眺めていた。

もうそろそろ、我がクラスのリーダーが鶴の一声を発するはずだ。

「いい加減にしなさい！ 三人とも困っているでしょー！」

声の方を見ると、アリサが腰に手を当て眉尻を上げていた。予想通りの展開に、シュウは思わず苦笑する。アリサの指示の元、クラスメイトたちは一列に並び、今度は順番に質問を重ねていく。

ふとアリサと目が合った。シュウを見たアリサが真っ直ぐにこちらへと歩いてくる。シュウがきよとんと呆けていると。アリサが目の前で立ち止まった。

「シュウ」

「な、なにかな？」

心なしか、アリサの声に怒気ははらんでいる気がする。

「ここはあんたが助ける場面でしょ。家族が助けなくてどうするのよ」

「ああ、うん……。アリサが言うかなって」

「あんたね……」

「それに、アリサならともかく、僕が急に言うとはシユテルたちとの関係を聞かれるんじゃないかな？　できれば一緒に暮らしていることは内緒にしたいし」

一緒に暮らしていることを知られるとシユウはもちろん、シユテルたちにも迷惑がかかるだろう。血の繋がりのない赤の他人がほとんど一緒に暮らしている状態なのだ。妙な誤解を招く恐れがある。

言葉にしなかったその意図を察したのだろう、気にしすぎだと思っただけ、と言いなながらも、一応は納得したのかアリサがその場を立ち去ろうとする。だが、続いて聞こえてきた言葉に足を止めた。

「住んでる場所？　よくわかんない。シユウと一緒に住んでるから、シユウなら分かるよー！」

レヴィの元気な声に、教室が静まりかえった。そして一斉に、クラスメイトたちがシユウへと振り返る。思わず頬が引きつってしまふ。

「シユウ……」

「な、なにかな？」

「がんばりなさい」

同情と憐憫を多分に含んだ視線を向けられ、シユウは力なく肩を落とした。



その後はシユウに対しての質問責めが始まる、というところになって、次の授業のチャイムが鳴った。助かった、と思いつつも、次の休み時間に先延ばしにされているだけだとすぐに思い至り、頭を抱えてしまう。ちらりとレヴィの方を見ると、こちらを申し訳なさそうに見る視線と目が合った。一応反省はしているようなので、これ以上何かを言う必要はないだろう。

シユウはチャイムが鳴る直前に、シユテルとデアーチエが眼光鋭くレヴィを睨んでいたことに気づいている。おそらくあの短い時間の間に、念話が交わされていただろう。

後から聞いた話ではあるが、シユウの予想通りに念話は交わされており、シユテルとデアーチエからかなり怒られたらしい。さらにはなのはたちからも苦言を呈されたとか。

授業が終わり、休み時間。案の定、シユウはクラスメイトたちに囲まれた。

「シユウ！ どういうことだ！ 一緒に住んでるって！」

「何か事情があるのよね！ ねえ、どんな？ 教えて！」

男子からは罵倒に近い詰問、女子かはこの状況をどこか楽しんでいるような質問。シユウはそれらにどう答えようかと必死に考えていると、

「私が説明します」

助け船を出したのは、シユテルだった。一齐にシユテルへと振り返るクラスメイトたち。

「こちらへと引つ越してきた際にシユウには近辺を案内してもらいました。その縁もありまして、私たちの親からシユウへと依頼されたのです」

「依頼？」

「はい。私たちの親は仕事上家にいないことが多いので、できれば様子を見にきてほしい、と頼んだそうです。私たちにとつては心外ですが」

最後の部分をあえて強調するシユテル。クラスメイトたちはシユテルの説明で、一先ずは納得したらしい。数人は訝しげな視線をしていたが、過半数が納得した以上、これ以上何も言うつもりはないようだった。

それでもレヴィは、という声はまだあつたので、レヴィの言葉の綾です、と押し通していた。

そこで休み時間は終わってしまった。

次の休み時間もシユテルたちはクラスメイトたちに囲まれていた。今日一日は落ち着くことはないだろう。せつかくだから少し話をしておきたいと思つていたシユウだったが、帰つてからでいいかと自分を納得させた。

そして次の休み時間。昼休み。

一緒に食べようと誘われているシュテルたちを横目で確認して、シュウは弁当を取り出した。できれば一緒に、とは思ったが、どうやらそれも難しそうだ。だが、

「すみません、ナノハと約束をしているので」

シュテルの発言に、クラスメイトたちが残念そうな声を上げる。その間にシュウの隣に立つ一人の少女。

「シュウ君。お手紙、だよ」

見ると、さすががそこに立っていた。渡されたのはノートの切れ端で、そこにはシュテルの字があった。書かれている文章は短いもので、視聴覚教室で待っています、というもの。シュテルたちの方を振り返ると、三人とそれぞれ視線が合い、三人ともに小さく頷いて教室を出て行った。

「私たちは屋上の方に行くから。もちろんなのはちゃんも」

どうやら気を遣ってくれたらしい。シュウはそれじゃあ、と手を振るすずかたちに心の中で頭を下げて、シュウも教室を後にした。

視聴覚教室に入ると、いつかの運動会の時と同様、結界の中に入っていた。そこで待っていたのはシュテルたちで、シュウの姿を認めた瞬間、レヴィが勢いよく頭を下げた。

「いめんなさいー」

休み時間の発言のことだろうとすぐに思い至り、苦笑しつつも、大丈夫だよと伝える。レヴィは安堵のため息をついた。

「でもびっくりしたよ。何も聞いてなかったから」

「うぬの驚く顔を見てやろうと思つてな」

「一応、今までの経緯を話しておきましようか」

お弁当を食べながら、ということになり、教室の机に弁当を広げてそれぞれ食べ始める。その間にシユテルたちからアースラでのことを聞いた。

「あれ？ それじゃあ、ユーリは……？」

「ユーリならもうすぐ来るよ」

え、とシユウが首を傾げていると、結界の中に一人入ってきた。三人の反応からそれに気づき、振り返ると、ユーリが側に立っていた。

「すみません、遅くなりました！」

笑顔でそう言つて、ダイアーチェの隣に座る。弁当箱を広げながら、シユウを見て首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「あ、いや……。どこにいたの？」

シユウの質問の意図が分からずきよんとしていたユーリだったが、すぐに理解して

苦笑を浮かべた。

「私は別のクラスなんです。さすがに四人全員同じクラスとはいかなくて……」

「三人同じクラス、というだけでもかなり無理をしていたきました」

それはそうだろう、とは思う。同じタイミングで同じクラスに三人、とは本来なら考えられない。他のクラスにも振り分けられて当然だったはずだ。リンデイがどういった方法を取ったのか、少し気になるところだ。

さらに聞けば、ユーリだけ別のクラスと聞いたディアーチェはユーリと同じクラスにしてももらえるように頼みに行ったらしい。すでに決められてしまっていたために変更はできなかつたらしいが。

「ユーリのクラスはどこ？」

興味本位で聞いたシユウへと告げられたクラスに、シユウは納得して頷いた。意図的か偶然かは分からないが、意図的ならリンデイあたりの配慮だろう。ユーリが入ったクラスは、シユウの友人、コウと音奈がいるクラスだ。あの二人ならユーリのフォローをしてくれるだろう。

「期間は一週間だけ？」

「はい。今の仕事を辞めるわけにはいきませんので」

シユテルの言う仕事は囑託魔導師のことだろう。これからの目的を考えると、確かに

辞めるわけにはいかない。シユウのつては頼つてばかりで申し訳ないところではある。

だがとりあえずは一週間は学校に通うらしい。弁当を食べ終わったシユウは、四人に微笑み、

「それじゃあ一週間、よろしくお願いします」

シユウの言葉に、四人がそれぞれ頷いてくれる。

——これから一週間、楽しくなりそうだ。

そう思い、これからの学校生活に思いを馳せた。

## 体験入学（中編）

午前五時。それがシユテルの起床時間だ。目覚ましが鳴る前に目を覚ましたシユテルは、念のためにセツトしてある目覚まし時計のスイッチを切る。ちなみにセツトされている時間は五時半。今のところこの目覚まし時計が仕事をしたことはない。

シユテルはベッドから出て、顔を洗う。朝食の準備のためにキッチンに向かうと、すでにダイアーチエが材料を前に腕を組んで唸っていた。

「おはようございます、王」

「ん？ ああ。おはよう」

簡単に挨拶を交わし、ダイアーチエはシユテルの隣を横切つて部屋を出て行く。

シユテルとダイアーチエの起床時間はほぼ同じだ。洗面台は一つしかないのど、どちらかが顔を洗っている間に片方が朝食と弁当の献立を考える、という取り決めをした。この役割は一日ごとに交代している。

キッチンに並べられた材料の側には、今日の献立が書かれたメモ用紙がある。シユテルはそれを手に取ると、早速調理を始めた。

午前六時半。微かに目覚まし時計の音が聞こえてくる。それから少ししてキッチンに入ってくるのは、眠たそうな目をこするユーリだ。おはようございます、と間延びした声で言うユーリにディアーチエが一瞬だけ表情を崩す。

「ああ、おはよう、ユーリ。すまぬが顔を洗ったらレヴィを起こしてきてくれぬか？」

「はい、分かりました」

すぐにユーリは洗面台へと向かっていく。ちなみに聞こえてきた目覚まし時計の音は二つなのだが、レヴィが目覚まし時計だけで起きてくることは少ない。必ず誰かが起こしに行っている。

ユーリとレヴィがリビングに入り、テレビを見始める頃。玄関の鍵が開けられて一人の少年が入ってくる。もちろんシユウで、おはよう、と全員に挨拶してからキッチンへ。

「お茶でいいかな？」

「はい。お願いします」

シユウは挨拶の後、全員分の飲み物を用意する。そこだけがシユウに割り振られている朝の仕事で、終わった後は自分の席で待機だ。

全員が揃ったところで朝食がリビングのテーブルに並べられる。今日のメニューは焼き魚に白いご飯、お味噌汁、そしてたくあん。和風のメニューだ。

「いただきます」



ディアーチェが手を合わせ、シユテルたちも続く。ここまでが朝食の流れだ。

この後、普段なら七時半にシユウは学校へと向かい、四人は洗い物や洗濯などの家事全般を終えた後に今日の予定の確認となる。だが今日は、今日から一週間はいつもと違う流れだ。

食器などを流しに置いて、全員が自分の部屋へと戻る。シユウは大人しくリビングで待機。程なくして戻ってきたシユテルたちは、全員がシユウの学校の制服姿だ。

「行きましようか、シユウ。……どうしました？」

シユテルが声をかけるまで、シユウはぼんやりと四人のことを眺めていた。シユテルに声をかけられて、うん、と頷きを一つ。そして一言。

「似合ってる。みんなかわいい」

それを聞いた全員の動きが少し固まる。その反応にシユウが首を傾げると、シユテルが小さく首を振った。

「ほら、行きますよ、シユウ」

「うん。了解」

シユテルに促されて、玄関へと向かうシユウ。その後が続くシユテル。後に残された三人は、

「慣れておるな」

「さすがですね」

「王様、かわいいだつて！　かわいい！」

少し顔を赤くしながら苦笑するディアーチェとユーリ、そして素直に嬉しそうにしているレヴィも二人を追つて家を出た。

S i d e : S t e r n

「と、と」までが朝の流れです」

シユテルが言う先、なのはがへえ、と少し顔を赤らめて相づちを打った。

朝のホームルーム前。シユテルはなのはたちのグループと一緒にいる。レヴィはサッカーをするという男の子たちについて行き、ディアーチェは一人クラスが違うユーリと一緒にいる。シユウは自分の席でうたた寝をしている。なのはに聞いた話では、いつものことらしい。

「意外……つて言うるとシユウに悪いかもしれないけど、シユウもそんなこと言うんだね」  
「ええなあ、好きな人からかわいいつて言ってもらえるなんて、ちよつと羨ましいわ」

フエイトとはやてが言つて、そういうものですか、とシユテルが返す。その反応にすずかが首を傾げた。

「シユテルちゃんは嬉しくないの？」

問われ、考える。今までそれほど気にしなかったことだ。今までどう感じたかを思い出し、なるほどと一人頷いた。

「嬉しい、のでしょうね。今まで気にしたこともありませんでした」

「あやふやね。まあ正直、あんたたちらしいわ」

アリスの言葉に、なのはたちが同意するように頷いた。

今日は昨日と違い、クラスメイトに囲まれるということはなかった。

最初の授業が終わり、休憩時間。何人かのクラスメイトに話しかけられ、当たり障りのない返事をしていく。シユウの方を見てみると、目が合った。シユウは一瞬だけ目を丸くした後、小さく手を振ってくる、シユテルが小さく頷くことでその返事をする、シユウは嬉しそうな笑みを浮かべ、机に突っ伏してしまった。

さらに次の休み時間では、どこかで見覚えのある女子生徒が話しかけてきた。相手もシユテルのことをどこかで見たことがあるらしく、どこで会ったかと二人で考える。それに助け船を出したのはなのはだ。

「翠屋じゃないかな？ シユテルには時々手伝ってもらってるから」

「あ、そうかも！ シユテルさんも翠屋を手伝ってるんだね」

「シユテルはすごいんだよ、シユテルが作るお菓子もおいしいって評判で」

なのはがなぜか自慢げにそう話し、女子生徒たちの瞳が輝く。食べてみたい、作り方

を教えて、と何人かに頼まれ、いずれ機会があれば、と約束してしまうことになった。

昼休み。今日はなのはたちと一緒に食べることになった。シユウを誘ってみるが、こちらは文花から誘われているらしい。シユテルたちが来ていることを知って、何があったのか聞きたがっているようだ。

「僕も昨日知ったばかりだから僕に聞かれても、とは思うんだけどね……。だから僕のことには気にしないでね」

そう言つて教室を出て行くシユウを見送つて、シユテルもなのはたちと共に屋上に向かった。

「人気者ね、シユテル」

にやにやといたずらっぽく笑いながらアリスが言つて、シユテルは肩をすくめた。三回目の休憩では男子生徒にも話しかけられており、昼食と一緒に誘われている。約束がありますので、と断つてはいるが。

「転校生だからでしょう。物珍しき以上のものはないと思いますが」

「そんなことないと思うけど……」

なのはが不満そうにそう言うが、それ以上は何も言つてこなかった。

「さて、と。こうやってゆっくり話せる機会なんてそうそうないし、シユテル、あんたの……と教えなさい」

「構いませんよ。何を聞きたいんですか？」

そこからは、アリサやすずかが、シユテルがどういった生活をしているか聞いたり、他のマテリアルズのことを聞いたりといった時間になった。シユテルも家族のことを聞かれて悪い気はしないので、素直に答えていく。なのはの友人なら誰にも口を割らないだろうと判断して、隠すこともしなかった。

予鈴が聞こえて、シユテルたちは慌てて弁当箱を片付けて教室へと戻る。その途中、「聞いたことは他の誰にも言わないから安心しなさい」

アリサにそう話しかけられ、シユテルは少し目を見開き、ありがとうございますと返事をする。

「お礼はいいわよ。あ、そうだ。今度一緒に遊びに行かない？ もちろんみんな一緒に」  
「そう、ですね。デイアーチェたちに聞いておきます」

そう答えながら、シユテルはわずかに微笑んだ。

Side:Levi

少し時間は戻り、朝の登校時。

「おっはよー！」

レヴィが教室の扉を開けて元気よく挨拶すると、多くのクラスメイトたちが挨拶を返

してくれた。そのことが何となく嬉しくて、自然と頬が緩んでしまう。ふと視線を向けた先、レヴィが入ってきた扉とは違う方から教室を出ようとしている男子生徒たちを見かけた。その手にはサッカーボール。

レヴィは瞳を輝かせ、そのグループへと近づいていく。

「サッカー、だっけ。やるの?」

レヴィがそう聞くと、グループの一人が顔を向けた。

「ああ。今からな」

「おおー。ボクも混ぜて!」

それを聞いた男子生徒が戸惑い、周囲の友人へと視線を向ける。誰もが困惑したような表情を浮かべていた。

「だめ……?」

少し不安になりながら、聞く。誰もが少し考えていたようだったが、やがて、まあいいかとつぶやいた。

「いいよ。一緒にやろう!」

「ありがとう!」

ぱつと顔を輝かせたレヴィに、男子生徒たちがわずかに顔を赤くして、それをごまかすように教室を出て行く。レヴィはそれには気づかず、嬉しそうにしながらそれにつ

いて行った。

朝の時間で、レヴィはクラスメイトから、特に男子生徒から一躍有名になった。サッカーで活躍できたことが大きかったらしい。最初こそルールをはつきりとは知らないため少しばかり迷惑をかけたが、覚えてからは持ち前の運動神経で大活躍だ。それを見たり聞いたりしたクラスメイトたちからも関心を寄せられている。

だが教室に戻ってきたレヴィはそんなことはどうでもいいらしく、すぐにシユウへと駆け寄って先ほどのサッカーの話をする。男子からは嫉妬の視線を、女子からはどこか微笑ましいものを見るよう視線を向けられ、シユウの心中は穏やかではなかった。それにもレヴィは気づいていなかったようだが。

休憩時間ではクラブからの勧誘の嵐だった。クラブというものがどういふものか分からないレヴィはとりあえず一通り話を聞いていたが、全て聞き終えて全クラブに共通していることを理由に、言う。

「放課後もやるの？　じゃあ、やらない。みんなと一緒に帰るから」

それを聞いてもまだ諦められない幾人かが粘り強く説得していたが、この点はレヴィも譲ることができないらしく、頑として聞き入れなかった。

昼休み。この時間もサッカーをすると聞いていたレヴィは大急ぎで弁当を食べ終え、今朝と同じグループと一緒に校庭に出る。そこで待ち構えていたのは別のクラスの男

子生徒たち。険悪な雰囲気、ではもちろんなく、むしろ彼らはレヴィを見るとわずかに驚いた様子を見せてすぐに微笑んだ。

「その子が噂の転入生の女の子、か。俺たちも今朝のサッカーを見ていたけど、すごかつたな」

相手がそう言つて、レヴィに笑顔を向ける。

「今日はよろしく。がっかりさせないようにがんばるよ」

どういふことか分からないレヴィは、しかしとりあえずは頷いてよろしく、と返しておいた。

その後、これから隣のクラスと短い時間ながらも試合をすると聞いた。試合、と聞いてレヴィが顔を輝かせる。そんなレヴィへ頼もしいなとみんなが言いながら、作戦を細かく聞いた。

そして始まった試合はかなりの接戦になった。さすがにチーム戦となると、レヴィも身体能力にものを言わせることができない。相手の一点リードで、もうすぐ予鈴が鳴ろうかというところで、

「レヴィ」

校舎の方から声がかけられる。見ると、デИАーチエとユーリの二人がコートの側に立っていた。



「あれ？ 王様、どうしたの？」

「レヴィがここで試合をしていると聞いたからな。時にレヴィよ」

「うん」

「貴様、このまま負けるつもりではあるまいな？」

「ディアーチェの目が細められる。レヴィがびくりと体を震わし、でも、と言葉を続ける。」

「みんなすごいから、今のままじゃ……」

「ならば許可してやる。さっさと終わらせてこい」

レヴィが勢いよく顔を上げ、輝かせる。いいの、と問いかけるレヴィに、ディアーチェは頷きだけを返した。そのやり取りの意味が分からずに首を傾げる仲間たちのもとへと、レヴィは戻る。その表情は、とても楽しそうで、嬉しそうで、そして背筋が寒くなる笑みだった。

そして予鈴が鳴った。

「あつはつは！ やっぱりボク最強！」

たった五分で逆転されて呆然とする相手チーム。何もしていないにも関わらず逆転してしまつて、やはり呆然とする仲間たち。レヴィはその全員へと明るい声で言った。

「楽しかったよ、ありがとう！ じゃ、ボクは先に戻るよ！」

そして意気揚々と校舎へと戻ろうとしたところで。

「やり過ぎだ阿呆！」

「あいた！」

ディアーチエに怒られて涙目になっていた。

マテリアルズで最初に決められていたことがある。ただでさえなのはたちと同じ姿で目立つのだから、せめて他のことでは極力目立たないことにしよう、というものだ。レヴィには体育などで本気を出すなどという指示が与えられていた、とのことだった。

Side : Dear che

再び時間を戻し、登校時。

「では我はユーリを送ってくる」

教室に入るシュテルたちへとそう告げて、ディアーチエはユーリと共に隣のクラスに向かう。ユーリは嬉しそうにしながらも、

「私一人でも大丈夫ですよ？」

一応そう言ってみるが、ディアーチエはだめだと首を振った。

「ディアーチエ。ありがとうございます」

断つても自分を心配してくれているディアーチエはついてくるだろう、そう察して素

直に礼を言うと、ディアーチエはわずかに頬を染めて目をそらした。

「我がそうしたいだけだ」

「はい、分かっています。それでもありがとうございます」

ディアーチエが苦り切った表情を見せる。レヴィはそれには気づかないふりをして、自分の教室の扉を開けた。

ユーリが入ってきたことで、クラス中の視線が一斉にユーリを捉える。ただそれは悪意のこもったものではなく、好意的なものだった。それを示すかのように、側の女子生徒が明るい声音で言った。

「おはよう、ユーリ」

「はい。おはようございます」

その後も、自分の席につくまでは何度も挨拶をされた。誰もが好意的で、明るく優しい。ユーリも挨拶をしてもらえるのが嬉しいのか、始終笑顔でそれに応じていた。

——なるほど、確かに要らぬ心配だったな。

ユーリと席にたどり着き、ディアーチエはそう結論づけた。もう少しここでユーリと話してから教室に向かおう、と思っっていると、

「あの、あなたがディアーチエさん？」

遠慮がちなその声に振り返ると、最初に挨拶をした女子生徒が側に来ていた。ディ

アーチエが警戒心を隠すことなく、訝しげに相手を観察する。ユーリが慌てて言った。  
「ディアーチエ。このクラスのは、私の最初の友達です」

「……ああ、そうか」

ディアーチエが頬を緩ませる。ユーリが友と認めている者なら邪険にするわけにもいくまい。自分のことはユーリから聞いただけだろう。ディアーチエはその少女へと素直に手を差し出した。

「ディアーチエだ」

「あ、えつと……。よろしくお願いします」

相手もその手を握り、しっかりと頭を下げた。

王様。なるほど、王様だ。

周囲からそんな声が聞こえてくるが、ディアーチエは一切気にしない。ユーリへと向き直り、少しかだけ寂しげに言う。

「我はいない方がいいか？」

「え？ そんなことないですよ！ 一緒にいてください」

ユーリに手を握られ、そうか、とディアーチエは安堵のため息を漏らした。

周囲からの視線が微笑ましく温かいものになっていたのだが、二人はそれには気づかなかった。

昼休み。授業が終わると同時にディアーチエは席を立つと、シユテルとレヴィへと目配せをする。すぐに、行つてらっしゃい、という内容の念話が返つてきた。ディアーチエも行つてくる、と念話で返し、隣の教室へと向かった。

ユーリの席には女子が三人集まっていた。四つ繋げられた机にはそれぞれの弁当箱が並んでいる。ユーリと目が合うと、満面の笑顔で出迎えてくれた。

「すまぬ。待たせたか？」

授業が終わつてすぐに来たつもりだったのだが。少しだけ申し訳なく思いながらユーリの元へと向かう。すぐにユーリと、そして女子三人が首を振った。

「こっちの授業が十分早く終わったの。だから気にしなくていいわ」

そう答えたのは三人のうちの一人。朝に声をかけてきた者だ。朝の間にずいぶんと打ち解けることができた。他の二人は見覚えはないが、おそらくこの者の友人だろう。

誰かが用意してくれていたのか、ユーリの隣に空いている席があつたのでディアーチエはそこに座つた。自分の弁当箱も机に置く。

「いただきます」

誰かが言つて、ディアーチエとユーリもそれに続いた。

今日のユーリの弁当箱はいつもと違い、少し大きめのものだ。様々な種類のおかずが入っている。ユーリから頼まれ、ディアーチエが用意したものだ。その時は理由を聞いて

ていなかったのだが、この場でそれを知ることができた。

「えつと……。本当にもらつていいの？」

「はい！ そのために作つてもらいましたから！」

ユーリの言葉を受けて、おずおずといった様子でユーリの弁当箱からおかずをいくつか取る三人。それを見て、なるほどとディアーチェは頷いた。ユーリはこの三人とは昨日から仲良くなつていたのだろう。ユーリの弁当を見て、誰かがおいしそうとでも言ったのか。ユーリはディアーチェが褒められると自分のことのように喜んでくれる。気を良くしたユーリが、みんなの分も頼んでみると言ったのかもしれない。

おかずを口に運ぶ三人を、ユーリが緊張の面持ちで見守る。家族以外からの評価に興味がないディアーチェは、さっさと自分の弁当を食べ始めた。ただそれでも少しは気になるもので、横目で反応を窺つてはいたが。

それぞれがおかずを食べて。のみ込んだ後の第一声は、

「美味しい！」

というものだった。

「なにこれ！ すごく美味しい！ すっごくいい！」

友人からの絶賛に、ユーリは少し得意げだ。

「ディアーチェの料理は世界一ですから！」

さすがにそれは無いと思うが、と思いつつも、ディアーチェは何も言わない。ただどうしても表情が緩んでしまうが。

「これ、ディアーチェさんが作ったの？」

その問いにディアーチェは視線だけを向け、そうだと頷く。すると三人とも驚いたように目を丸くして、すごい！ とすぐに破顔した。

「ディアーチェさん！ 今度料理教えてよ！」

「我がが？ 悪いが……」

断ろうとしたところで、ユーリと目が合った。何かを期待するような眼差しで、思わず言葉に詰まってしまふ。ディアーチェは内心で、仕方がないなと苦笑した。

「我らも普段は別のことをしていることが多い。それで都合のつく日があれば、引き受けよう」

「本当？ ありがとう！」

嬉しそうな三人の笑顔。ユーリも念話で、ありがとうごさいますと伝えてくる。

——まあ、悪くはないな。

学校というものに通うにあたって不安がなかったわけではない。しかし実際に通ってみれば、悪くはないと思えるものだった。

## 体験入学（後編）

「今日もここで食べていいの？」

自分の席で自身の弁当を食べていた文花は、少し呆れたような表情をしながら目の前の人物に問うた。文花の目の前に座るシユウは、少し目を逸らして口ごもる。

「いや、せっかくみんな学校に来てるんだし……。新しい友達が増えた方がいいかなって……」

「それはそうかもしれないけど、お弁当ぐらい一緒に食べればいいじゃん」  
「いや、まあ……。分かつてはいるんだけどね……」

シユテルたちに友達が増えればいいと思ってるのは本当だが、しかしもう一つ、大きな理由もある。はつきり言ってしまうえば、学校ではシユウはシユテルたちを避けていた。その理由は単純に、学校での距離感が分からない、というものだ。さすがに家にいる時と同じように接するのは良くないだろうと思いい、かといってどのように接すればいいのかも分からず、今の状況に陥っている。

そんなシユウの考えも分かっているのだろう、文花はやれやれと首を振って、ぼつり



とこぼした。

「シユテルお姉ちゃんたち、すごく人気だよ」

「え……？」

「シユテルお姉ちゃんはクールで格好良い。男の子だけでなく女の子にも憧れてる人は多いよ。レヴィさんは明るく元気で、男の子たちとよく一緒に遊ぶから自然と惹かれてる人も多いつて話だし……。ユーリさんは守つてあげたい子、て見られてる。ディアーチェさんは最初はつきあいくいって思われてたみたいだけど、ユーリさんと一緒にいて気にかけているのを見て人気<sup>が</sup>急上昇」

お箸をゆらゆらさせながら、言い続ける。シユウはそれを黙つて聞いている。文花は、その上、とさらに続ける。

「四人とも美少女！ 人気が出ないわけがないよ！」

なにやら熱い力説に変わつてしまつていた気がするが、それらの言葉には概ね同意できる。やはり見ている人は見ているものだ。

「まあ、なのはさんたちがすでに人気だったから、こうなることは分かつてたけど」

おかずを口に入れながら、一人で納得して何度も頷く文花。シユウは、へえ、と驚きの声を漏らしていた。

「なのはたちって人気なんだ」

「どうして私より長くこの学校にいるお兄ちゃんが知らないかな……？」

呆れたように文花はため息をついた。シユウは、どうしただろうね、と苦笑する。理由は分かる。はつきり言つて、そういう話題に興味がなかったためだ。シユテルたちと会おう前のシユウは、まだまだ自分の生活で精一杯だった。

「とにかく！ このままだとみんな取られちゃうよ！ いいの？」

ふむ、とシユウは腕を組んで考える。わずかな思考の後、シユウは頷いた。

「それはないと思う」

文花が怪訝そうに眉をひそめ、シユウが続ける。

「シユテルとレヴィは王様第一。ディアーチエはユーリ、ユーリはディアーチエが第一。

ここに割つて入るのはなかなか難しいよ。少なくとも一週間じや絶対に無理だ」

「お兄ちゃんの前例があるけど」

「僕だつてシユテルの一番になれたとは思つてないよ。僕にとっては一番だけど」

「はいはい、ごちそうさまでした」

文花は口を尖らせると、そつぽを向いた。それを微笑ましく思いながら、シユウは弁当を食べ進めていく。シユテルとディアーチエの合作である弁当は、やはり美味しい。しばらくそのまま無言で食べ進めていると、文花が視線をこちらへと向けてきた。

「お兄ちゃん」

「ん？」

改めて呼ばれて、シユウは首を傾げた。

「お兄ちゃんの気持ちは分かるけど、シユテルお姉ちゃんを避けちゃだめだよ。きつと楽しみにしてたはずだから。……表情からは分からないけど」

最後の一言にシユウは苦笑する。だが真剣に頷いた。

教室に戻り、シユウは自分の席に座る。ちらりとシユテルの席へと目をやると、なのはたちのグループの他、別のグループのクラスメイトも交えて何かを話している。人気者だな、と改めて思う。

文花に言われずとも、このままではいけないとは思いつつも、せつかく学校に来ているのだから、もう少し話してみたいとも思う。できれば一緒に弁当を食べたい。そんなことを考えていると、シユテルと目が合った。

「……………」

思わずシユウは目を逸らす。いけないとは思いつつも、どう反応すればいいのか分からないかった。

Side : Stern

『してシユテルよ。シユウの様子はどうか？』

授業中、そんな念話がディアーチエから届く。シユテルは授業をしつかりと聞きながら、それに返事をする。

『変わらず、ですね。相変わらず目を合わせようともしてくれません』

『むう……。やはり黙って来たのが悪かったか？ 怒らせてしまったか……？』

『でも家ではいつも通りだよ？ そんなに怒ってはいないんじゃないかな？』

そう言ったのはレヴィだ。シユテルもそれに同意する。だが、なおさらシユウが自分を、自分たちを避ける理由が分からない。

『やっぱり晩ご飯の時に聞いてみます？』

ユーリの言葉に首を振るのはディアーチエだ。

『家では普通にしておるのだ。わざわざ蒸し返すこともあるまい。それに、できればこちらから気づいてやりたいところではある』

『さすが王様！ 尽くすタイプだ！』

『やかましい。シユテル、何かいい案はあるか？』

話を振られたシユテルは今一度考える。このクラスの来た直後、シユウは驚いた顔をしていたが、決して怒っているわけでもなかった。むしろ自分の勘違いでなければ、喜んでくれていたようにも思える。

『原因が分からない以上、もう少し様子見としておきましょう』

シユテルの言葉に、三人は仕方がないかと頷いた。

S i d e : H e r o

「ねえ、シユウ君」

放課後。帰り支度をしていると背後から顔をかけられた。見ると、なのはが真剣な面持ちでこちらを見ていた。

「どうしたの？」

「ちよつと聞きたいことがあつて……」

「分かった。移動しよう」

周囲からいくつかの視線を感じるのでシユウがそう提案すると、なのはは素直に頷いた。二人で教室を後にして、屋上へと向かう。昼休みと違い、人影はかなり少ない。それでも念のため隅の方まで行つてから、シユウはなのはへと向き直つた。

「それで、なに？」

「うん。どうして学校だとシユテルたちを避けてるの？ 家では普通なんだよね？」

ああ、なのはが聞いてくるのか。シユテルたちが直接聞いてくると思つていたシユウは、少しだけ驚き、次いでどこか複雑そうな表情を浮かべた。それを見たなのはが、慌てたように言う。

「シユテルたちから聞いてほしいって言われたわけじゃないよ？ 私が気になっただけだから」

「うん、分かつてる。大丈夫」

どう答えたものかと少し考え、ここで嘘を言っても仕方がないだろうと判断して正直に話すことにした。どうせ取るに足らない、くだらない理由だ。

「僕とは一緒にいない方がいいかなって。それでちよつと避けてる」

「どうしてそう思うの？」

「最初の日に騒がれちゃったからね。あんまり仲良くしているのを見られたら、また何か言われるかもしれないから。僕が言われるならいいけど、シユテルたちがそれで不快な思いをするのは嫌だなって」

おそらくシユテルたちは気にしないでいいと言うだろうし、実際に気にしないでらう。それでも、もし誰かに何かを言われているところを見てしまったら、自分がとても嫌な気持ちになる。つまりはただただ自分の問題なのだ。

なのはは、そっか、と頷いた。

「ありがとう、シユウ君。話してくれて」

「まあ別に隠しているわけでもないしね」

二人は小さく笑い合い、その場を後にした。

Side:Stern

『そんなことを言ってたよ』

なのはからの念話に、シユテルは少しだけ波面になっていた。

なのはにシユウから理由を聞いてきたと言われた時は少し反応に困ってしまったが、シユテルたちを知る者は誰もが何かあったのかと心配していたそうだ。その結果、なのはが代表して一先ずシユウから聞いてみる、ということになったらしい。知らずのうちにとはいえこんなことで心配をかけてしまったことに申し訳なく思いながらも、なのはからシユウの理由を聞く。

そして、大きなため息をついた。

『ありがとうございます、ナノハ』

『ごめんね。余計なことだったかなとは思ってたんだけど……』

『いえ、助かりましたよ』

なのはとの念話を終えて、シユテルはリビングを見る。普段通りにテレビを見ているシユウがいて、一緒にテレビを見ているレヴィとユーリはシユウのその様子に安堵している。シユテルはひとまずダイアーチエにだけ、念話で先の話伝えておいた。

突然のシユテルの念話にダイアーチエは驚きながらも、全てを聞き終えた後は少しば

かり憤慨しているようだった。

『今更我らがそんなことを気にすると思っているのか、あの阿呆は』

『落ち着いてください。私たちが気にするかというより、シユウが気にするということです。シユウの気持ちの問題なのでしよう』

『むう……。そう言われると、怒るに怒れない……。』

ダイアーチェの言葉に、シユテルは同意する。自分たちのこともやはり気にかけているのだから、シユウ自身の気持ちの問題なら自分たちは何も言えない。言ってくれなかったことを少し寂しく思うが、それも自分たちに心配させまいとしてのことだろう。

『して、どうする？ シユテル』

その問いに対するシユテルの答えは、即答だった。

『シユウには悪いですが、実力行使といきましょう』

Side: Hero

昼休み。今日もシユウは妹のところへと行こうとして席を立て、その直後に肩に手を置かれた。

「どこへ行くつもりだ？」

ダイアーチェだ。なぜだろう、その声はとても怖い。シユウはゆつくりと振り返る



と、その場にいる三人へと引きつった笑みを浮かべた。

「えつと……。文花のところへ、行こうかなって……」

「文花なら今日は友達と一緒に食べるって言ってたよ」

レヴィの言葉にシユウは目を見開き、そしてなのはへと振り返る。なのはは微笑しつつ、手を合わせていた。

なのはを見たものの、彼女を責めるつもりはない。口止めはあえてしなかったのだから。むしろシユテルたちに伝えてほしいと思っていたぐらいだ。もつとも、その結果こうして捕まることになるとは思わなかったが。

レヴィの話も真実なのだろう。そして導かれる結論。文花も一枚噛んでいる。今の自分にどうやら味方はいないらしい。

いつの間にかクラス中の視線が自分たちに突き刺さっている。シユウは冷や汗を流すが、シユテルたちはどこ吹く風といった様子だ。三人でシユウの手や腕を掴み、引きずるようにして歩いて行く。

「さあ、行きましょう」

シユテルが言つて、シユウは観念したように項垂れた。

屋上の一角を五人で使い、弁当を広げる。シユウはシユテルとディアーチェに挟まれる形で座らされた。目の前にはレヴィとユーリがいて、背にはフェンス。逃げ場はな

い。

「さて、シユウ」

シユテルが口を開いて、シユウがびくりと体を震わせた。それを見て取ったシユテルが、うつすらと苦笑する。

「心配しなくとも、私たちは怒っているわけではありません。貴方が私たちのことを考えて避けていたことは聞いています。ですが……」

「我らに対して気を遣いすぎだ、たわけ。今更我らがそんなことを気にするとも思っていたのか？」

シユテルとディアーチェの言葉に、シユウは曖昧な笑みを浮かべた。大人しく答える。

「思つてはないけど、せつかく学校に来たんだから、少しでも不快なことは避けてほしくて」

「私たちのことに気を遣つてくれるのは嬉しいですけど、でも家族ですよ？ 避けられる方が、悲しいです」

「そうそう！ 普段通りにしようよ」

ユーリとレヴィが言つて、シユウが少し目を丸くする。次に、そうか、と頷いた。申し訳なさそうに眉尻を下げて、頭を深々と下げる。そのシユウの行動に、今度はシユテ

ルたちが驚いた。

「ごめん。そうだよね、避けられるのは嫌だよね」

ユーリから言われて、すぐに想像した。シユテルからずっと避けられたらどう思うかを。おそらく自分なら数日はシヨックで凹んでしまう。

「分かってくれたなら、いいのです」

さて、お弁当にしましょう。シユテルがそう言ったところで、この話は終わりとなった。

その後は、シユウも遠慮はしないようになった。といっても、授業の合間の休憩時間は普段と変わらない。ただ、昼食の時間は、シユウはシユテルたちと一緒に食べるようになった。シユテルたちも他のクラスメイトに誘われることがあるため、必ず全員が揃うということはなかったが。

周りからの反応は、特に何もなかった。初日のシユテルからの説明で、登校前からシユテルたちと知り合いになっていたのだから当然だろう、と思われているのだろう。詳しくは分からないが、何もなければそれに越したことはない。

そうしてシユテルたちの学校生活は特に問題なく過ぎていき、あつという間に一週間は終わってしまった。

最後の日の放課後。シユテルたちはクラスメイトたちに囲まれて、別れを惜しまれて

いた。その様子を、シユウは黙って見守る。たくさんの友達ができていたようで、シユウにとっても嬉しく思う。

一通り話し終えたのか、クラスメイトたちが順次帰宅していく。誰もがシユテルたちに、にこやかに手を振っていた。やがて教室に残されたのは、シユウとシユテルたち、そしてなのはたちだ。

「お疲れ様、シユテル」

なのはが声をかけると、シユテルは無表情に肩をすくめただけだった。

なのはしばらくシユテルとたちとシユウのことを何度か順番に見ていたが、すぐに少しだけ残念そうに眉尻を下げた。だがすぐに笑顔になり、さてと、と立ち上がる。

「先に帰るね」

「はい。お疲れ様でした」

なのはたちが元気よく手を振りながら教室を後にする。そして残ったのは、いつものメンバーだ。だが四人は何も言わず、静かに待つ。程なくして教室の扉が開かれ、ユリが駆け込んできた。

「すみません、遅くなりました！」

五人揃ったところで、全員立ち上がる。帰ろうか、と五人が教室を出ようとして、

「……………」

シユテルは教室を一度だけ振り返った。しばらく夕日に照らされる教室を眺めて、きびすを返した。

買い物物に行ってくる、とディアーチェはユーリとレヴィと共にスーパーに向かった。シユウとシユテルは二人で家路を歩く。急ぐ必要はないので、のんびりと。

「シユテル。学校、どうだった？」

シユウが聞いて、シユテルが無表情に答える。

「悪くはなありませんでした。いえ、それなりに楽しめました」

そっか、とシユウは嬉しそうに微笑む。

帰り道は、シユテルたちがシユウの見ていないところでどういったことをしていたのか聞いた。淡々と語るシユテルはやはり無表情だが、声音は柔らかい。機嫌が良さそうだ。シユウも自分の事のように嬉しく思う。

やがてマンションにたどり着き、自分たちが住む部屋へとエレベーターで上る。

「そう言えば、その制服はどうするの？」

シユテルたちの服装は、当然ながら学校の制服だ。シユテルは自分の服を見て、少し黙る。どうやらシユテルたちも何も聞いていないらしい。

「返す必要があれば、何か言ってくるでしょう」

そう結論つけて、それまではタンスにでもしまっておくことになった。

「そっか。良かった」

「何がですか？」

「うん。かわいいから」

え、とシユテルの足が止まる。立ち止まったシユテルへとシユウは振り返り、笑顔で言った。

「ずっと言う機会がなかったけど。似合ってる。かわいい」

シユテルが目を見開き、すぐに顔を背けた。その顔はほんのりと朱に染まっている。シユテルは咳払いをして、足早にシユウを追い越した。

「……ありがとうございます」

すれ違いざまに、そんな言葉を残しながら。

シユウはシユテルの後ろ姿を眺めながら、幸せそうに微笑んだ。

——うん。来てもらって良かった。

一週間の出来事を振り返りながら、シユウはそう思っていた。

## バリアジャケット

マンションのリビング。夕食を食べながら、シユウはある映像を眺めていた。シユウが見る映像は、昼頃行われたという模擬戦だ。なのはとシユテルが何か大砲のようなものを撃ち合っている。

「魔法って何だっけ」

「……………」

この世界の書物に触れ、この世界で考えられている一般的な魔法というものを臆気ながら理解しているシユテルとデイアーチェは、そつと目を逸らした。確かに、この世界での物語にある魔法とシユテルたちの魔法は全くの別物と思えてしまう。

レヴィとユーリは意味が分かっていないようで、不思議そうに首を傾げていた。

シユウはその後は何も言わず、そして映像を見終える。少しだけ遠い目をしているシユウに何を言えいいのか分からず、シユテルは静かにその様子を見守る。やがてシユウはシユテルへと顔を向けると、ぽつりと言葉を漏らした。

「バリアジャケットが見たい」

シユウはパストから与えられた知識で、シユテルたちの魔法については実際のところ  
はかなりの知識がある。デバイスに関しては管理局の誰であろうと到達していかないほ  
どのものだ。それでもそれは知識だけであり、実際に見たことはほとんどないだろう。  
バリアジャケットもそのうちの一つだ。むしろデバイスに関しては自分で作ればい  
いのだが、そうはいかないバリアジャケットはじっくりと見る機会はなかったはずだ。  
「見たいのですか？」

シユテルが聞いて、シユウが頷く。

「うん。見たい。……だめ？」

少し考え、まあそれぐらいなら、とシユテルは了承した。

「ふむ……。シユテルのものが見られれば、十分か？」

ディアーチエが聞いて、シユウが少し考える素振りを見せた。しかしすぐに頷いて、  
ディアーチエへと言う。

「うん。でも今度、お願いするかも」

「まあ、いつでも言うといい。減るものでもないからな。いつでも見せてやろう」

ディアーチエも快諾して、食器を片付け始める。大した目的があるわけでもないのに  
引き受けるあたり、ディアーチエもずいぶんとシユウには甘いものだ。気を許している  
証拠とも言えるのかもしれない。



「今やるなら別室でな」

洗い物を始めるディアーチェの言葉に従い、シユテルはシユウと共に場所を変えることにした。

そして移動した先は、当然のことながらシユウの部屋だ。誰の迷惑にもならないので都合がいい。物が少ないので、万一何かあったとしても被害が少なくてすむ。

「それでは、いきますよ」

「うん」

期待が籠もった眼差しで見つめられ、シユテルは少し気恥ずかしさを覚えて目を逸らした。そのままシフェリオンを起動させ、バリアジャケットを展開する。いつもの、なのはと色違いの黒いバリアジャケットに身を包み、シユテルはシユウへと視線を移した。

「いかがですか?」

じつとこちらを見つめるシユウ。シユテルが怪訝そうに眉をひそめていると、

「うん。かわいい」

「は……?」

「すぐかわいい」

真正面から言われ、シユテルは一瞬何を言われたのか分からずに固まってしまう。や

がてシユウの言葉を理解して、頬が赤くなるのを感じて慌ててそっぽを向いた。

「そうですか。ありがとうございます」

とにかくそれだけ言つて、そしてすぐにバリアジャケットを戻そうとして、

「触つていい?」

再び固まるシユテル。頬を引きつらせながらも、構いませんよ、と頷く。それを確認したシユウがおそろのおそろと手を伸ばして、シユテルのバリアジャケットに触れる。へえ、とシユウが驚きの声を漏らした。

「普通の服とあまり変わらないんだね」

「まあ……。そうですね」

着ている身としては色々違うところもあるのだが、魔法を使えないシユウにとつては変わらないものだろう。シユウはしばらくシユテルの服に関心を示していたが、やがてふとシユテルへと顔を向けた。

「……………」

無言で自分を見つめてくるシユウ。

「シユウ? どうかしましたか?」

シユテルがそう聞くのと、

「てい」

シユウの小さなかけ声が放たれたのは同時で。

シユウに抱きしめられていた。

「……………」

声を漏らしそうになるのを堪えて、シユテルはシユウへと意識を向ける。拒絶の意思を示さないのは、シユウの体がわずかに震えていたからだ。

「シユウ……………」

少し不安を感じながらシユウを呼ぶ。シユウがわずかに身じろぎをして、そしてぽつりと言葉を漏らした。

「あまり、危ないことはしないでね……………」

シユウの言葉に、シユテルは目を見開いた。シユウが続ける。

「非殺傷設定とかは知ってるよ。でもそれは模擬戦の話だよ。実際は……………そんなもの、相手は使ってくれないよね」

シユテルは少し迷いながらも、しっかりと頷いた。ここで嘘やごまかしは逆効果にしかならないことはすぐに分かる。シユウはその返事を受けて、さらに言葉を続ける。

「僕は、シユテルを守ることができない。デバイスのメンテナンスとかカートリッジとか、それしか力になることはできない。それが、やっぱり悔しい」

シユテルを抱きしめる腕に力が込められる。シユテルはそのシユウの背を撫でなが

ら、気づかなかった自分を恥じていた。

今までも何度か模擬戦の映像を見せている。もしかすると、シユウはそのたびに自分の身を案じてくれていたのかもしれない。心配して、不安になっていたのかもしれない。そのことに全く気づかなかった、気づけなかったことに、軽い自己嫌悪すら覚える。

「大丈夫ですよ」

シユウの背を撫でながら、シユテルはシユウを安心させるために言葉を紡ぐ。

「私も自分一人で何でもできるとは思っていません。無理だと判断した時は迷わず撤退します。ですから、そんなに心配しないでください」

シユテルがそう言うと、シユウは小さく頷いた。小さく安堵の吐息を漏らし、しかしシユウが自分を離さないことに首を傾げる。

「その……。シユウ。そろそろ離していただけませんか？」

「やだ」

シユウが顔を上げる。その顔にあるのは、いたずらっぽいシユウの笑顔。

「なんだか新鮮だから。それに、かわいいって言ったのは本当だよ」

そう言って、また自分を抱きしめてくる。シユテルは少し困惑していた。シユウの行動に、ではない。

それほど嫌とは思っていないどころか、むしろ少し嬉しいとすら思っている自分に、

だ。

「もう少しだけですよ……」

ようやくとその言葉を絞り出したシユテルと、

「うん。ありがと」

嬉しそうに礼を言ってくるシユウ。

シユテルは今日何度目か分からないため息をつきながらも、微笑を浮かべていた。

——たまにはこんな日も悪くはないですね。

そんなことを思っていた。

## パスト

暗い闇の中、ゆらゆらと意識だけが浮かぶ。上も下も何も無い、そんな空間を、パストはただ流されていた。

パストは眠る。眠り続ける。古い記憶の夢を見ながら。

「所長！」

部下と呼ばれ、女は手元の資料から顔を上げた。そこにいたのは自分の部下であり、夫でもある少し年下の男だ。女は男に対して苦笑いしつつ、言う。

「二人きりなんだから所長はやめてほしいね。名前で呼んでおくれよ」

「二人きりとはいえここは研究所ですよ。帰ってからののお楽しみということですよ。残念」

女はそう言いながら、資料に視線を戻してしまふ。それを見た男が慌てた。

「いや、ちよつと待って！ 用事があつてきたから！」

「ん？ あ、そうだね。当然だね」

いくら夫婦とはいえ、仕事中にただ会うだけといったことはしない。それなのに、少し会話をして満足して終わらせようとすると自分に呆れてしまう。結婚するまでは仕事一筋だったのが悪かったのかも知れない。それまでは、ずっと何かに追い詰められているかのように仕事をしていた。

男が、これを見てほしいと一枚の紙を差し出してきた。それを受け取り、それに記載されたデータを見る。軽く目を通して眉をひそめ、次いでしっかりと、途中の計算式を含めて確認する。そして大きく目を見開いた。

「なんだい、こりゃあ……」

そこに記載されていたのは、複雑な魔法陣とそれに関する計算式、それがもたらす効果。そしてそれを踏まえた上での、新たな魔道具。その魔道具は、今までの常識を一変するものだった。

「おもしろいだろうか？」

「おもしろいけど、これは……。まずいね……」

「ああ、非常にまずい」

あくまで紙の上での計算だ。机上の空論もいいところだ。だがもしも実際に作ることでできれば、どのようなことをもたらすのか。メリットよりもデメリットの方が遙かに大きい。女はそれを想像して、顔を青ざめさせてしまう。

「これは、忘れるべきだね。研究所で作ることはできないよ」

まず第一に、この国と隣国で行われている戦争はさらに過激なものとなるだろう。今回の戦争は、お互いの土地を、食料を求めたものではない。ただ信仰の違いからくるものなので、この魔道具がもたらす恩恵とは何ら関係がない。

男もそれを承知しているので、重々しく頷いた。そして、  
「だから、僕たちで作らないか？」

女は正気を疑うような目で男を見て、そして、いいねと笑った。個人で作ってあとは隠してしまえばいい、そう考えて。このデータが間違いないか確認したかったのもある。

今思えば。この時からすでに女は少しおかしくなり始めていたのだろう。

そして一年後。仕事の合間合間で作られた魔道具は完成する。その魔道具は、パストと名付けられた。

ギフトエツドの試作品は、こうして作られた。

パストはとても有用な魔道具だった。

魔力さえ与えれば、多くの願いを叶えてくれる。さすがに無から有を生み出すことはできないが、それでも重たい病に苦しむ人を完治させたり、水不足の時には雨を降らせ



たり、それとは逆にあまりに雨が続いた時は雨雲を消してしまったりと、何でもできた。ただし必要な魔力も膨大だった。雨を降らせるだけでも十人以上の一流の魔導師が必要で、病を治すとなると百人以上の魔導師の魔力が必要だった。当然ながら、パストを作った夫婦にそれだけの魔力があるはずもない。

研究所の地下には、巨大な魔力タンクがある。電池のように魔力を貯めることができるので、毎日誰かが魔力を補充している。計算ではこのタンクで千人分もの魔力を貯めることができるらしい。夫婦はこの魔力を使っていた。実験によく使用されるもので、適当な案件をでっち上げている。今のところはまだ疑われてすらいない。

「本当にすごいものを作ったものだね。さすがはあたしの旦那だよ」

「よしてくれ。僕は構想だけだ。机上の空論を現実のものとしたのは君の手腕だよ。僕だけだと絶対にできなかつた」

自宅で、夫婦はテーブルに置かれたパストを見つめながら、お互いに褒め合つた。机に置かれたパストは、今はきれいな赤い玉となっている。大きさは拳二つ分程度だ。これほど小さなものが、様々な願いを叶えてくれるのだから驚きである。

二人が自分たちの最高傑作を見つめっていると、家の扉が強く叩かれた。二人は驚いて飛び上がり、すぐにパストを戸棚の奥へと突っ込む。夫がそうしている間に、女は客人を出迎えるために家の扉を開けた。

そこにいたのは、黒い鎧を身につけた兵士だった。確か、それなりの地位にいる兵士だったはずだ。なぜここに。まさかパストを知られたのか、と警戒していると、兵士が姿勢を直し、言った。

「お二人に異動命令が出ております。これが命令書です」

兵士が差し出してきた紙は、確かに正式な命令書だった。それに女が怪訝そう言う。

「異動、かい？ だけどあたしは、この間子供を産んだところなんだけど……」

つい一ヶ月ほど前に、女は息子を出産したところだ。本来なら子供を産んで数年は仕事を休めるはずなのだが、そんな自分に異動命令がきた。訝しげにしていると、兵士が言葉を続ける。

「異動先での住居は用意されます。また、給金も三倍出すそうです。是非とも、戻ってきてほしいと」

女は魔法研究所の所長で、その役職は大国であるこの国でもわずか五人しかいない。そのうちの一人を遊ばせておくことはできない、ということだろう。女は仕方がないとため息をつくとき、兵士へと言った。

「分かりました。準備します」

そして二人が向かったのは、最前線からほど近い町。夫婦はその町外れにある小さ

な建物を与えられた。小さいといつても二階建てで地下室ありと二人で暮らすには大きすぎる家だったが。

「研究を続けながら、魔法だけが人を治療する。それでいいんだね？」

「はい。よろしくお願いします」

案内役の兵士がそう言つて、部屋を出て行く。夫婦は顔を見合わせると、ため息をつきながら研究を始めた。最前線とはいえ、この国は強い。故に危険はないだろう。そう考へて。

実際、一ヶ月の間は静かなものだった。多くの兵士が戦争へと向かったが、ほとんどの者は帰ってくる。誰もが思った。もう勝利は目前だろうと。

しかしそれは、異動して一ヶ月経つたところで、最悪の形で覆された。

「ぜん、めつ……?」

新居で研究を続けていると、一人の兵士が転がり込んできた。そして告げられたのは、数日前にこの町を出た大部隊が壊滅したということ。生き残りは、いないようだ。

「すぐにここから離れてください! 早く!」

兵士が二人を急かす。優秀な研究者をこんなところで失うわけにはいかない、優先的に逃がしてくれるらしい。ならば最初から連れてくるなとも思うが、国にも何らかの都合があつたのだろう。それを責めはすまい。

夫婦が慌てて逃げ出す準備を始めたところで、

「ぎゃあー！」

扉の方から先ほどの兵士の悲鳴が聞こえた。振り返ると、胸から血を流して倒れていく先ほどの兵士の姿。そしてその奥には、槍を持った他国の兵士。

「急げー！」

夫に急かされ、女は奥の部屋へと急ぐ。その部屋で寝ている我が子を抱きかかえ、裏口へと向かおうとしたところで。

背中から、温かいものがぶちまけられた。

おそるおそる背後を振り返る。

夫の首から、槍の先端が伸びていた。

「かひゅ、ひゅー……！」

夫が何かを言おうとして口を動かすが、言葉にならない息が漏れるだけで形にならない。そのうちに、夫の目から光が失われた。

逃げろ、と言いたかったのだろう。それは分かる。それほど長い期間夫婦として暮らしたわけではないが、何を言おうとしたかぐらいは、分かる。それでも体は動かない。息子を抱いたまま、目の前の敵兵を呆然と見つめていた。

「……………」

敵兵は何も言わない。黙って自分と息子を見比べた後、構えた。

「ひっ……」

息子を強く抱きしめる。そして槍が突き出される。そして槍は貫いた。

赤子の体を。

「は……う？」

女が間の抜けた声を出す。女の手から赤子が引き抜かれ、そして敵兵は槍に刺さった赤子を見ると、

「……汚ねえな」

槍を振った。

「あ」

べちやり、と赤子が床にうち捨てられる。

「ああ」

赤子の体から、少くない血が流れていく。

「ああああああ！」

女は敵兵へと体当たりした。予想外の行動に、敵兵が驚いてたたらを踏む。その間に女は赤子に駆け寄り、抱き寄せる。

致命傷、だった。

「……………」

女は虚ろな瞳で敵兵を見据える。敵兵はおもしろくなさそうに鼻を鳴らすと、再び槍を構えた。

——憎い。殺したい。

そう、強く思う。

愛する人を殺され。愛しい我が子を奪われ。そして相手が目の前に。それ以外何を望もうか。

幸か不幸か、ころん、と足下に何かが転がってきた。

パスト、だった。

「はは……………」

もしかすると。自分は今この時、このためだけにこれを作ったのかもしれない。そうとしか思えなかった。女はパストを握りしめると、ただ一言、念じた。

「死ね」

その瞬間、体から魔力が奪われる。根こそぎ奪われるかと思つたが、パストはまず側の死体から、夫から魔力を根こそぎ奪い去つた。そして次に自分の魔力を奪つていき、そしてわずかな量だけを残して、パストは起動した。

そして、男の体が消滅した。

あの後。女は残った力を振り絞り、一縷の希望にすがり我が子に魔法をかけた。するとどうやら間に合ったようで、我が子の体から小さな白い、もやのようなものが出てくる。女はそれをさらに魔法を使って、小さな玉の中に保存した。

我が子の、魂だ。

そこまで終えて、女は気を失った。

気がつけば、女は首都の病院にいた。どうやら誰かが自分のことを助け出し、ここまで運び込んでくれたらしい。病室のテレビが、最前線にある町が敵の手に落ちたと報道していた。

くだらない。どうでもいい。

女が視線を側のテーブルへと投げる。そこには、小さな白い玉と、赤い玉。魂の保存の魔法はそれなりに知られているものなので、愛する我が子のためにその魔法を使ったのだろうと誰かが察したのか、柔らかいタオルに、落ちないように配慮された上で丁寧に置かれていた。赤い玉も同じような魔法の何かだと思われたのか、白い玉の隣に置かれている。

パストはそれらを優しげに見つめ。

そして、小さな声で、嗤った。

女自身には外傷がないため、一週間ほどで退院した。国の人間からいくつか質問を受けた後は、自宅に閉じこもった。そして、そこから多くの物を取り寄せ始めた。

大量の機材に研究資料。蓄えていた財産をほとんど使い、彼女の家は最高の研究施設へと作り替えられた。地下室には最新式の魔力タンク。これさえあれば、一万人分の魔力を蓄えることができる、らしい。女は毎日誰かを雇い、タンクに魔力を蓄えていく。

そして女は研究に没頭するようになった。  
望むことはただ一つ。可愛い我が子の蘇生だけ。

パストを使えば、可能性はある。だがあれでは、どれほどの魔力が必要か分からない。もつと魔力効率を良くしたものが求められた。もともとパストそのものが偶然の産物に近いものだ。そう簡単にできるとは思えなかったが、それでも女は諦めなかった。

そうして十年もの月日が流れ。未だに戦争は続いている。それどころか、より激しくなっているらしい。らしいというのは、女は家から出ないためそういつたことが分からないためだ。

そして、女の目の前には、透き通るような蒼い玉。女はそれを愛おしそうに撫でた。パストの改良型であり、これ以上は望めないと女が認めるもの。



女はそれを、ギフテッド、と名付けた。

魔力タンクの魔力を使い、ギフテッドへと魔力を与え、その力を使う。ギフテッドもパストと同じく無から有を生み出すことができなかつたが、その代わりにギフテッドそのものが体を構成する。そして我が子の魂を取り込み、小さな赤子の姿となつた。

その赤子は、元が魔道具とは分らないほど人間らしかつた。日々しつかりと成長する様を見て、女は満足げに嗤っていた。

それから五年は平穏な時が流れた、死んだという記録が残されている我が子を外に出すわけにもいかず、一日中その子と遊ぶ日々。幸いながら、蓄えには余裕がある。施設の充実で一時はほぼ使い切つたが、国から雇われている研究者の職は失つていなかつたように、今でも毎月給与が振り込まれていた。ただそれも、いつまで続くかは分からな  
いが。

その五年の間に、女も少しずつ生気を取り戻していった。ギフテッドを作っている間は死んだような目だつたが、ようやく正氣に戻りつつある。ようやく、安心できるようになった。

だがそれは再び、壊された。

ある嵐の日。雷の音が聞こえてくるたびに我が子が泣いて、女はあやすように抱きしめていた。

「大丈夫。大丈夫だから。少しは落ち着きなさい」

女がそう言っても、子供は泣き止まない。母の体にしがみつき、ずっと泣いている。女は困ったように、だが穏やかに笑っていた。

女が子供をあやしていると、家の扉が勢いよく開かれた。雨風と共に国の兵士たちが入ってきて、瞬く間に自分たちが包囲される。女が目を白黒させている間に、その中の一人が声を上げた。

「作ったものを出してもらおう」

その男は、この国の將軍だった。なぜこんな人間が、と固まっていると、男が苛立たしげに続ける。

「近隣住民から連絡があった。死んだはずの貴様の子供がいると。貴様のことだ、死者を生き返らせる魔道具でも作ったのだろう？ 今すぐ出せ。我らが有効利用してやる」

なんだそれは、と思うが、すぐに女は思い至った。ギフトッドのことだろう、と。死者を生き返らせることはさすがにできないのだが、我が子で誤解されたいらしい。

「いや、そんなものはないよ。あたしが作ったのは、魔力によつて願いを叶える魔道具だ。さすがに死者は無理だ」

男がわずかに驚き、口元を歪めて獰猛な笑みを見せる。すぐに悟った。余計なことを言ってしまった、と。

「素晴らしい。ならばすぐにそれを出せ。それさえあれば、我が国は勝てる」

頭に血が上る。ふざけるな、と言いたくなる。だが女は気持ちを落ち着かせるよゆに深呼吸をして、言う。

「悪いけど、もうないよ。一つだけだから」

「一つだけ、か。まさかそれが、魔道具そのものなのか？」

男が指で指し示すのは、我が子だ。子供が怯えて女にすがりつき、女は男を睨み付けた。

「関係、ない」

「はは。その反応で十分だ。そうか、仕方がないな」

男が背を向ける。どうやら諦めてくれるらしい。ならば最初から言えば良かった、と安堵のため息をついたところで。

ごとりと、と音が鳴った。え、と視線を下げる。我が子の首が、あった。

前を見る。將軍が立っている。手には赤い液体で濡れた剣。

「これなら、文句はあるまい？」

男が酷薄な笑みを浮かべ、女は口を開こうとして、

今度は、女の首が落ちた。

「遺恨は残さず、だ」

男の声が、微かに聞こえた。  
なんだこれは、と女は思う。

一度目は敵国に家族を奪われた。だが、これは戦争だ。それも仕方がない。無論納得できないが、他にもいくらでも自分のような人はいる。

だが、今回は何だ。なぜ本来味方であるはずのこの国の兵士に殺されなければならぬ。自分たちが何をした。静かに暮らしていただけではないか。

薄れ行く意識の中、女の目は將軍を名乗った男を捉えていた。男は自分の体が抱きしめていた我が子へと手を伸ばす。その顔には、期待に満ちた不快な瞳。

ああ、そうか。女は、声なく啜う。静かに啜う。

人は欲深な生き物だ。願いを叶えるものがあるなら、それに縋りたくなるのは当たり前だ。女がギフトテッドを作ったように。だからこれは、仕方のないことだ。

——ふざけるな。

女は啜う。心で啜う。

そんな生き物がいていいのか、と。いていいはずがない、と。ならば答えは簡単だ。そうとも、最初からそうすれば良かったのだ。

気づけば。女は再び歪み、人でなくなっていた。

——こんなくそつたれな世界、消えてしまえばいいのに。

女が心の中でそう願ひ、そしてギフトッドはそれに呼応した。母の、最期の願ひを叶えるために。

「なん……」

男の声は途中で止まった。男の体が消滅している。男の周囲が、消滅していく。蒼い玉を中心にして、世界が無へと帰していく。ゆつくりと、ゆつくりと。

全ての人間に恐怖を与え、断罪するために。

女は満足げに嗤い、そして意識を手放す。

二度と目を覚ますことはなかった。

世界が消滅していく。一つの世界の終わりの時だ。もつともそれは、ある意味人為的な終わり方ではあったが。

「全軍、放てー！」

誰かの叫び声が響き、あらゆる魔法が世界の消滅へと向かって放たれる。何に向かつて放てばいいのかわからないが、とにかく有と無の境目へと放ち続ける。だがそれらも、消滅していった。

「くそー！ なんなんだこれは！」

誰かが叫び、耐えられなくなった人間が逃げていく。戦争を続けていた二国の連合軍

は、瞬く間に瓦解した。

「はは……。皮肉なものだな。手を取り合えたきっかけが、世界の消滅など」

最初で最後の連合軍の任務は、失敗になった。

「大丈夫。すぐに終わるわ」

ある家で。夫婦は子供たちを集め、抱きしめていた。もう目と鼻の先まで境目は迫っている。多くの人ができるだけ遠くへと逃げていようだ。

だが、逃げたところでどうなるというのか。

これはこの世界が消えるまで止まらない。そんな確信があった。

「きつとすぐに終わるからね」

「そうだと。ああ、そうだ。言葉遊びでもしようか」

夫が努めて明るく言う。だがその体は小刻みに震えていた。

言葉遊びを始める夫と子供たち。もちろん妻もそれにつきあう。全員が目閉じて、それに興じる。目を開けると、目の前の恐怖に気が狂うから。

そして、彼らは意識を刈り取られた。

痛みも苦しみもない、穏やかな消滅だった。

最後に残された場所は、小さな丘だった。そこには木造の小屋があり、残された人々が集まっていた。人数にして、十人ほど。戦争をしていた二国の王と、それを守る騎士

たちだ。彼らは最後まで逃げ続け、そしてここにたどり着いていた。

終わりの時は近い。四方が消滅の境界に囲まれており、もうどこにも逃げ場はない。

「これが、戦争を続けた罰というものか……」

王の一人が自嘲する。もう一人の王は、ただただ憤慨していた。

「何故だ！ 何故わしがこの様な目に遭わなければならん！」

その二人を守護する騎士たちも、もう何も言わなくなっていた。静かに、裁きの時を待っている。

「まあ落ち着け。もうどうにもならんのだ。どれ、最後に一杯、どうだ？」

その言葉に呼応して、騎士の一人が小屋の隅にある木箱から瓶を一本取り出した。安物の酒だ。グラスも人数分ある。彼はグラスに酒を注いで、その場の全員に配っている。

「ふん……」

憤慨していた王もそれを受け取り、その場に座った、酒を飲むとして、しかし途中でもう一人の王へと振り返る。

「どうした？」

見られていることに気づいて首を傾げると、

「貴様と最後に話せて、まあ、良かった」

にやり、と意地の悪い笑みを浮かべた。そして酒をあおる。

「ふ……。そうだな。このようなことになる前に、話せれば良かったがな」

そしてその場にいる全員が酒を飲み。

世界は消滅した。

パストはその一部始終を見守っていた。自分を作った作り主の代わりに、その結末を見届けた。

「嫌になるね……」

小さくため息をつく。せつかく芽生えた感情が、ずいぶんと煩わしい。

あの時、ギフトッドが暴走した時。パストは、作り主たる女を助けようとした。だがすでに女は事切れており、パストの能力ではどうしようもない状態だった。せめてもの慰めとして、彼女の記憶と意識データをコピーして、自らに融合させた。

それが、今のパストだ。作り主の皮をかぶった紛い物。作り主は、もういない。

「ん……………」

蒼い玉が自分の周りを巡る。申し訳なきように。悲しげに。パストは辛そうに顔を歪めたが、すぐに優しげに微笑んだ。

「あんたが気にすることじゃないよ。仕方がなかったのさ。あの人すら、気づかなかつ



たからね」

作り主は、パストとギフテツドのことを分かっていなかった。

パストは、成功作に近い。必要な魔力こそ多いが、願いを制御して叶えることができず。パストにはうつつすらとだが意識があった。自我が、あった。故に制御が可能だった。だが、作り主はパストの自我には気づかなかつた。

彼女が死に瀕した時、彼女の手元へと自らを転移させて飛んだ時に、できれば気づいてほしかったものだ。

ギフテツドは、失敗作に近い。必要な魔力が少ない代わりに、あらゆる願いを極端に叶えてしまう。パストのように自我があれば良かったのだが、ギフテツドにはなかった。そのため制御できずに、その力を暴走させた。

今は微かな自我がある。作り主の子の魂だ。だが幼くして死んだ魂故に、希薄な自我だ。すぐにまた我を失い、暴走するだろう。作り主は、気づかなかつた。

「まったく、どうしてこうなったのかね……」

作り主は、ただ平穏を望んだだけだ。息子との生活を望んだだけだ。その結果が、これだ。

「あんまりじゃないか……」

当たり前前の幸せを望んだだけなのに、作り主は味方であるはずの自国の騎士に殺され

た。人の欲望に、殺された。確かに作り主は歪み始めていたが。それは息子との生活で改善されつつあったのに。

「ああ、くそ。ちくしょう……」

せめて、自分にもっと力があれば。ギフトッドが羨ましい。

パストは自らの周りをゆらゆらと浮かぶ蒼い玉を見つめる。作り主の息子の魂が宿った、彼女の忘れ形見。

作り主は、息子との生活を望み、息子の幸せを願っていた。ならば、自分はそれに応えよう。

「任せておくれ。この子はあたしが、ちゃんと面倒を見るよ」

パストはギフトッドを招き寄せ、そして自らその中へと入っていった。パストにとつての自我となるべく、彼を制御するために。彼の行く末を見守るために。そして彼を、導くために。

「いつになるかは分からないけど……。この子が幸せを掴むまで、あたしがちゃんと導くよ」

パストを己に取り込むギフトッド。この時初めて、ギフトッドという魔道具は完成した。

——ギフトッド。あんたに最後の命令だ。

ギフトテッドの中でパストは導く。彼の母として。

——これからみんなの願いを叶えにいこう。小さな願いを叶えにいこう。二度とこんなことが起こらないように。あんたはあたしの命令によつて願いを叶え続けていくんだ。

自分に全ての罪を被せて。

——だからこれは、お前のせいじゃないよ。

パストは導く。生まれ故郷を振り切るように。振り切らせるために。

——振り返らずに。さあ、おいで。あたしのかわいいギフトテッド。

後に残されたものは、何も無い。消滅した世界の名残が、虚数空間が広がるだけだ。それは、昔の話。最初の魔法の世界の、誰にも知られることなく消滅した世界の話。

パストが意識を覚醒させる。ずいぶんと長い時間を眠っていたようだ。もつとも、存在していた時間から考えると瞬きの時間にも満たないが。

周囲を確認する。喫茶店、だろうか。隣には、この子が想いを寄せる少女の姿。すっかり大人の女性になっている。どうやら、本当に年単位で眠っていたらしい。

『あれ?』

声が聞こえる。心の中に響く声。

『もしかして、起きてる?』

ギフテッドの声。ギフテッドに宿る作り主の子の声だ。

『ああ。今起きたよ』

返事をする、作り主の子、今ではシユウと呼ばれている少年が作業の手を止めた。どうやらデバイスのメンテナンスをしていたらしい。

「シユテル。パストが起きたから、ちょっとお話してくるよ」

隣の少女、シユテルが少しだけ目を見開いた。どうやら驚いているらしい。すぐに、分かりましたと頷いた。

シユウはいすにもたれると、目を閉じた。

『久しぶりだね、パスト。えっと……。お母さん』

『……。ああ、久しぶり。シユウ』

本当は、母ではない。作り主はすでに死に、ここにいるのは彼女の皮をかぶった別の魔道具だ。だが、それは最後まで黙っておこうと思う。

『シユウ。暇ならいいんだけどさ。今までのこと、教えてくれるかい?』

『うん。もちろん』

そしてシユウから今までのことを聞いた。喫茶店を開くためにがんばったこと、ミッ

ドトルダに引越した事、そしてシユテルのこと。今までの生活を、聞いた。

『こんなところ、かな?』

『……………』

『お母さん?』

長かった。本当に長かった。数千年、数万年もの時間を旅して。ようやくこの場所に立っている。何度、諦めかけたことか。そのたびに作り主の顔を思い出したものだ。

『シユウ』

『ん?』

『幸せかい?』

パストの問いに、シユウが少し黙る。突然何を、と思っているのだろう。だがすぐにシユウから嬉しそうな感情が伝わってきた。

『すぐく幸せだよ』

その声を聞いて。パストは、静かに涙した。ようやく、報われた。彼女の願いが、ようやく叶った。この場に作り主はいない。彼女に、彼の笑顔を見せることができない。それがとても残念に思えるが、それでも、ようやく報われた。

『それを聞いて、安心したよ』

『そう?』

『ああ。それじゃあ、もう少し眠るよ』

そう告げると、シユウは少し驚いたようだった。だがすぐに、静かに言ってくれる。

『うん。おやすみ、お母さん』

『ああ……』

彼女の願いは叶った。あとは、この子次第だ。この先どうなるかは分からないが、あとはこの子に任せよう。それまでは、自分はまた眠るとしよう。故に今言うべきことは、決まっている。

『おやすみ。あたしの可愛い、ギフトेटド』

そしてまた眠るために意識を手放そうとして。

目の前に、作り主が立っていた。穏やかな笑顔を浮かべ、優しげな瞳でパストを見つめていた。

「あ……」

思わず涙があふれてくる。ただの、幻だ。そう思っても、涙が止まらない。

目の前の彼女が、静かに告げる。

「ありがとう、パスト。お疲れ様……」

そして、消えた。消えてしまった。

「ああ……」

パストは静かにまぶたを閉じた。幸福感に浸りながら。ただの幻だったのかもしれないが、パストにとっては満足だった。

それは夢か現か幻か……。

## ギフテッド

夢を見ていた。

古い、古い記憶の夢。

まったく憶えない、けれど自分の記憶だと分かる夢。

——ああ、そうか……。

夢を見ながら、シユウは理解した。この記憶が、ギフテッドのものであることに。シユウがシユウとして生まれる前、ギフテッドとして存在していた頃の記憶だろう。

夢はまるで早送りしているかのように、映像があつという間に流れていく。それでも、本来は自分の記憶であるためか、その流れていく映像を見るだけで、その時のことを瞬時に思い出すことができた。

例えば、この映像。目の前に立つのは甲冑を着た人間。彼が口を動かす。シユウは知らないはずなのに、思い出すことができる。不思議な感覚だ。確かこの人間は、これから勝てない戦争に向かうところだった。彼の願いは家族に対する伝言で、ギフテッドは人間の言葉を記録してそのまま家族へと届けたはずだ。

例えば、あの映像。五歳前後の幼い子供が、小さな動物の亡骸を抱えて泣いていた。



この子の願いは単純で、生き返らせてほしい、というものだった。自分には叶えることのできない願い。そう伝えると、その子は大声で泣いた。その時は仕方なく、この子の両親を呼びに行った。両親は戸惑いながらも、事情を聞いて礼を言ってくれた。何に對する礼かは分からなかった。

そして、目の前の映像。雪の中、泣き続ける夫婦。シユウの今の両親だ。

そうだ。今なら思い出せる。ギフテッドは、ずっと昔の、人だったころの両親を思い出していたはずだ。そして、この夫婦の願いを叶えたいと思ったはずだ。

———そうか、こんなことを考えていたのか。

当時は夫婦が笑顔になることを望んだ。ただ、それだけだ。それだけだったはずなのに、今となってはそんな夫婦を、両親を気にもせず好き勝手している。当時のギフテッドが今のシユウを見れば、何を思うだろうか。今となっては、分からない。

多くのことを思い出せた。多くの記憶を見ることができた。気が遠くなるほど長い時間を旅してきた記憶。懐かしいと思うこともできるが、こんなことをしていたのかと他人事として捉えてしまう。

シユウがぼんやりと記憶を見ていると、不意に、視界が白い光に包まれた。

目を開ける。喫茶店の自分の部屋だ。シユウはあくびをしつつ体を起こし、ぐつと伸びをした。何か、夢を見ていたような気がするのだが、いまいち思い出せない。少しで

も思い出せないかと唸っていると、ドアがノックされた。

「シユウ。起きていますか？」

「あ、うん。起きてるよ」

シユウはすぐにドアへと向かい、開ける。シユテルがいつもの無表情でそこにいた。

「おはようございます、シユウ」

「うん。おはよう、シユテル。すぐに着替えてくるよ」

「はい。お待ちしています」

シユウはもう一度ドアを閉め、大急ぎで着替えを済ませます。外行きの私服に着替えて、部屋から出た。

「ディアーチェたちは？」

「朝食の用意をしています。もうすぐできあがるはずですよ」

「うあ……。寝坊しちゃったか。ごめん」

申し訳なさそうに謝ると、シユテルが、違いますよと首を振った。

「シユウはいつも通りに起きています。私たちが、というよりはレヴィが早起きをしただけです」

「あー……。なるほど」

レヴィが早起きをするのは珍しいが、きっとそれだけ今日が楽しみだったのだろう。

今日を企画した張本人としては、嬉しい限りだ。シユウが嬉しそうに笑っていると、シユテルもわずかに微笑んだ。

今日はシユウの提案で、ちよつとしたパーティを開くことになっている。その準備のために喫茶店も、囑託魔導師としての仕事も休んでいる。招待客が集まる夜までに準備を終わらせなければならぬ。

朝食後、食後のコーヒーやジュースをそれぞれ飲む。しばらくそんなのんびりとした時間を過ごしていると、ディアーチエが咳払いをした。すぐに全員がコップを置いて、ディアーチエの方へと姿勢を正す。

ディアーチエはその様子に満足そうに頷いてから、しかしすぐに不機嫌そうに眉をひそめた。

「うぬの役目なのだがな、店長殿」

ディアーチエの冷やかな視線からシユウが目を逸らす、ディアーチエは小さくため息をつきつつも、仕方がないやつだと苦笑した。

「今日の予定だが、昨晩話したことから変更はない。準備の間に何かあれば、すぐに我がシユウにまで連絡すること。他、何かあるか？」

全員の沈黙、つまりは何もないという答えに頷きを返し、では、とディアーチエがシユウへと視線をやる。シユウは少し困ったような表情をしながらも、とりあえず立ち上

がった。

「えつと……。みんなを僕のがままに付き合わせて……」

「謝るなよ」

「ごめん、と言いかけたシユウが固まり、困ったような表情を浮かべる。少し間を置いてから、言い直す。

「僕のがままに付き合ってくれてありがとう。今日は一日大変だと思うけど、よろしくお願いします」

そう言って、しっかりと頭を下げる。結局頭を下げるのか、とみんなが笑っていた。

その後、もう少しの間だけのんびりとした時間を過ごし、そしてそれぞれが動き出した。

Side:Levi

今日のレヴィの仕事は食材の買い出しだ。朝から必要になるものは昨日のうちに購入してあるのだが、今日で間に合うものはまだ買っていない。できるだけ鮮度のいいものを使いたい、というのが理由にある。

レヴィは身支度を調べると、意気揚々と出かけていった。向かう先は、デИАーチエとシユテルが懇意にしている市場だ。ほとんどの競りは終わっているが、レヴィには関

係がない。ここには協力者がいる。

鼻歌を歌いながら機嫌良く歩いていると、

「あれ、レヴィ?」

「ん?」

声をかけられ、振り返る。私服姿のフェイトがそこにいた。

「おいつす! 元気が、オリジナル?」

「うん。元気だよ。えっと、こんにち……」

「おいつす!」

「お、おいつす……」

フェイトが少し恥ずかしそうにレヴィと同じ返事をしてくれたことに、レヴィは少し嬉しくなる。渋々といった様子だが、オリジナルはこういったことでもレヴィに合わせしてくれるので好きだ。時折誘われて一緒に出かけるが、それも時間を忘れるほど楽しい。

「今日は分かってるよね?」

レヴィが聞いて、フェイトが笑いながら頷いた。もちろん、と。

「じゃあ遅刻しないように! ボクは買物に行ってくるよ!」

そう言って立ち去ろうとしたレヴィに、フェイトがおずおずといった様子で問うた。

「私も一緒に行つていいかな？」

フェイトを伴つたレヴィが訪れた場所は、大小の建物が並ぶ一角だ。朝にはここであらゆる場所で競りが行われている。レヴィは目利きなどはできないので、その光景は一度だけ見たことがあるだけだ。

本来の仕入れの担当は、シユテルとディーアーチエだ。ただこの二人に關しても目利きにそれほど詳しいわけではなく、信頼できる者に任せている。毎朝誰かがその者の店へと取りに行くという形になっていた。

「……だよ」

そう言つてレヴィが示す建物は、市場の側にある小さな商店だった。店の看板には店名と、新鮮な魚や果物あります、という短い言葉だけ。すでに店は開いているようだが、客は少ない。

「えつと……。確か……。ここは趣味のお店らしいんだけど、お店の人の目利きは確か。ちよつとした経緯で知り合つて、時折ご飯をご馳走する代わりに仕入れを代行してもらつてるんだって」

「へえ……。いつの間にそんな知り合いができたの？」

「うん。コウ」

「え……。？」

「だから、コウ」

啞然とするフェイトを置き去りにして、レヴィは店の玄関をくぐる。

店内の陳列棚には、野菜や果物、魚など様々なものが並べられていた。最寄りの市場だけでは全て仕入れることなどできるはずのない品揃えだ。不思議そうになっているフェイトへと、レヴィが教える。

「毎朝、文花がコウを連れて飛び回ってるって」

「ああ……。えつと……。そう、なんだ……。それで……」

フェイトの視線は店の奥へと向けられている。そこに誰かいるのかレヴィは知っているし、何を思っているのかもさすがに分かる。レヴィは奥に向かうと、

「やつほー！」

「ん？ ああ、もうそんな時間かあ……」

コウが虚ろな目をレヴィへと向ける。この時間のコウは、いつも疲れ果てている。文花の魔法を駆使して朝から世界を飛び回っているのだから当然だろう。

「大丈夫？ いつも以上に疲れて見えるよ？」

「ふふ……。パーティのことで文花がすごい張り切ってたなあ……。いつも以上にあちこち飛び回って吟味してたんだよ……。選ぶの、俺やけどな……」

「えつと……。ご苦労様です……？」

フェイトが引きつった笑みでそう言うと、コウはようやくフェイトに気づいたように、少し目を丸くした。だがすぐに無気力な瞳に戻り、軽く手を振る。

「いつものことやから」

そしておもむろに立ち上がると、店の奥へと引つ込んだ。待つこと数分、小さなデバイスを持ったコウが出てくる。

「ほら、レヴィ」

「うん。ありがとう！」

「おう。まいどあり」

金銭のやり取りは、ない。いつも月末にまとめて支払われている。この辺りは信用取引だ。

レヴィはそのデバイスを持って、また後でね、と声をかけて店を出た。

「そのデバイスに？」

問いかけてきたフェイトへと、レヴィが頷く。

「うん。全部入ってるよ。シユウがこのためだけに作った特製デバイス、だって」

「へえ……。そんなもの、作ってたんだね……」

魔法を使うためのデバイスではないとはいえ、決して安価なものではないはずだ。ましてや特製というからには、シユウだけが持つ知識も使われているのだろう。売ればい



くらになるだろうか。それを仕入れのためだけに作り、使うとは贅沢なものだ。

「さすがは、シユウだね」

微苦笑しつつフェイトがそう言って、

「シユウはすごいんだよ。それにシユテるんも……」

突然始まる家族自慢。フェイトは優しく微笑みながら、レヴィの話聞いていた。

Side:Dearche

「一先ずはこれでいいだろう」

ディアーチェは大きな鍋に蓋をして、満足そうに頷いた。真後ろで作業しているシユテルへと振り返り、言う。

「ではそろそろ行ってくる」

「はい。お気をつけて」

振り返らずのシユテルの言葉。いつもなら律儀に振り返って頭まで下げてくるが、今日は目の前のことに集中していた。何をつくっているのかと盗み見てみれば、手を魔法で温めながら飴細工を作っていた。器用なものだ。

邪魔をしないために、ディアーチェは静かに厨房を後にする。フロアに戻ると、シユウとユーリが携帯ゲームに興じていた。地球に遊びに行った時に貰ったものだ。

「ユーリ。そろそろ行くこうと思うが、どうする?」

「あ、行きます! 待つてください!」

ユーリがシユウへと目配せして、シユウは笑いながら頷いた。二人そろって携帯ゲームの電源を切る。ユーリは足下の荷物を持つと、席を立った。

「行つてらっしゃい。気をつけてね」

手を振るシユウにユーリが嬉しそうに、はいと返事をする。そのユーリを連れて、ダイアーチェは玄関へと向かう。

「すまぬが留守番は任せたぞ」

「うん。了解だよ」

シユウの見送りを受けながら、ダイアーチェとユーリは喫茶店を後にした。

ダイアーチェが向かう先は、時空管理局の側の飲食店だ。ユーリと共に軽い食事をしながら人待つ。コーヒーをすすりながら、わずかに眉をしかめた。

「うまいな……」

距離があるため自分たちの店の競合店ではないが、自分たちの店よりも優れているものだ。何度か丁寧に飲み、味をしっかりと覚える。また時間のある時にでも改善しなければならぬ。時間をかけて飲み干して、隣を見る。ユーリは目の前のオレンジジュースをじっと見つめていた。

「ディアーチェ。飲んでみてください」

見られていることに気づいたユーリが、オレンジジュースのコップを差し出してくる。怪訝そうにしながらもコップを受け取り、中の液体を少し飲む。

「む……」

こちらでも自分たちの店よりも美味しく感じられる。ディアーチェはそれもしつかりと覚えた。

「王様！ お待たせ！」

出入り口の方から声がする。見ると、待ち人が、はやてがこちらへと歩いてきた。管理局の制服に身を包んでいる。手には封筒。その封筒の大きさから、あまり多くはないようだな、と予想をつける。

はやてはディアーチェたちの向かい側に座った。やってきた従業員にコーヒーを頼み、去ったところで封筒を差し出してくる。

「ごめんな。がんばったんやけど……」

「気にするな。これが終われば後は大丈夫だな？」

「うん。それはもちろん」

はやての返事にディアーチェは頷くと、封筒の中の資料を取り出す。ざっと目を通して、ユーリにも渡した。書かれていた内容ははやての仕事のもので、管理局の外でも

きるものだ。ユーリもすぐに読み終えて、ディアーチエへと返してきた。

従業員がコーヒーを持ってきて、はやてが礼を言つて受け取る。そしてすぐに、それを急いで飲み干した。

「王様、ごめんな？」

「どちらかといえばシユウからの依頼だ」

はやてをパーティに誘うと、仕事が多くて間に合うか分らないというものだった。それを聞いたシユウがディアーチエたちに協力を依頼。シユウからの依頼ならとディアーチエは引き受けた形だ。

「現場への根回しはもうやってるから、大丈夫だと思うよ。もし何かあったら、いつでも連絡してな」

「ああ」

ディアーチエは頷くと、封筒に資料を戻してはやてへと返す。

「手伝う代わりに、遅れるなよ。子鴉」

「うん。それは任せて」

はやての返事にディアーチエは満足そうに頷くと、ディアーチエはすぐに店を後にした。

「ユーリ。一応我だけでも十分終わらせることができるものだが、どうする？」

移動中、ディアーチエが隣のユーリに聞く。ユーリは一瞬きよんとした後、無然とした表情で言った。

「帰ります、と言うと思つています?」

「いや……。思つていない」

いつものやり取りにディアーチエが苦笑すると、ユーリは満足そうに頷いた。ディアーチエの手を取り、嬉しそうに笑う。

「私はディアーチエのものです! ディアーチエは私のものです! 離れませんよ?」

「そ、そういう恥ずかしいことを真顔で言うな! そんな目で見るな!」

視線から逃げるように歩みを早めるディアーチエ。だが手を繋いでいるので当然ながらユーリもそれについて行くことになる。それに気づいていないのは、恥ずかしさからくる混乱故だろう。そんなディアーチエの様子を見て、ユーリはくすくすと笑い声を漏らす。

少し歩いたところで、ようやく気持ちちが落ち着いてきたのだろう。ディアーチエは立ち止まると、その場で深呼吸した。ユーリへと向き直り、言う。

「ユーリ。あまり軽率な発言はな……」

「ディアーチエは私たちの優しい王様です」

「だ、誰が優しいか!」

「そんなディアーチエが、私は大好きですよ。」

ディアーチエの動きが完全に止まる。顔は真っ赤になり、何度か口を開閉させているが言葉は出てきていない。たつぷり五分近くそんな状態が続いた後、ディアーチエはきびすを返した。

「行くぞ……」

「はい」

少しづつきらぼうになっているディアーチエの言葉に、ユーリは笑顔で返事をした。

Side : Stern

「ふう……。何とか形になりましたね」

シユテルは大きなことをやり遂げたかのように、大仰に頷いた。彼女の目の前には、数々の料理やデザートが並ぶ。シユテルはそれらを冷蔵庫などに持つて行き、手洗いをしてフロアに戻った。

テーブルの一つで、シユウはうたた寝をしていた。その様子にシユテルは薄く苦笑を浮かべながら、シユウの向かい側に腰掛ける。

シユテルの担当の仕事はこれで一先ず終わりだ。あとは下拵えで終わっている料理を作り終えるだけで、これはもう少し後の時間になることになる。それまでは少し休憩

だ。

「シユウ。起きていますか？」

呼びかけるが、返事はない。シユテルは時計を見て、まだもう少し時間に余裕があることを確認する。その後にシユウへと視線を戻し、

「仕方がないですね……。あと三十分だけですよ」

どこか優しい声音で、そう言った。

今日のシユウに仕事はない。せいぜい後片付けをするぐらいだろう。これには理由があり、ここ一週間、シユウはずっとデバイスの仕事にかかり切りだった。タイミング悪く、知り合いの多くから一斉に依頼されたのが原因だ。それを聞いた家族全員が、当日のシユウの仕事はなしにしようということに決まった。

昨夜も遅くまで仕事をしていたらしい。かなり遅い時間になって部屋に戻っていく音を聞いている。そのがんばりもあって、どうやらデバイスの仕事は終わっているようだが。その疲れがあるのだろう、ユーリとデИАーチエを見送った後はずっと静かだったが、眠っていたらしい。

特に何をするでもなくシユウの寝顔を見つめていると、気づけば三十分が経っていた。自分は何をしていたのかと少しだけ自己嫌悪して、シユウの体を揺する。

「シユウ。起きてください。昼食にしましょう」

シユウがゆつくりとまぶたを開く。胡乱げな瞳でシユテルの姿を捉え、ぼんやりとした声が発せられた。

「ああ……。うん……。うん……」

その反応にシユテルは眉をひそめた。大丈夫かと少しだけ不安になり、シユウの横へと移動する。かがみ込んで座っているシユウと視線を合わせた。

「シユウ……?」

呼びかける。シユウが身じろぎをして、シユテルへと視線を向けてくる。まだ意識がはっきりしないのか、ぼんやりとした様子でシユテルを見ている。そして、

「きやつ……!」

シユウの体がぐらりと揺れて、シユテルへと覆い被さってきた。思わず出てきた自分のかわいらしい悲鳴に赤面し、誰も聞いていなくて良かったと安堵する。改めてシユウの顔をうかがい見ると、整った寝息を立てていた。

「まったくと……」

シユテルはため息をつき、シユウの頭を撫でる。

「シユウ。起きてください。そろそろ昼食にしないと」

そう静かに言うのと、

「お邪魔します。シユテル、い、る……?」



客が入ってきてシユテルたちの姿を確認したのが、同時だった。

シユテルが目を見開き、完全に硬直する。

客も、なのはも動きを止め、そしてすぐに顔を真っ赤にした。

「えっと、その……。お邪魔、だった……。？」

「何を勘違いしているんですか……。いえ、して当然とは思いますが」

シユテルの疲れたようなため息が、ゆっくりと吐き出された。

ようやく目を覚ましたシユウと、先ほど訪れたなのはにコーヒーを出して、次に昼食を用意する。用意と言っても、昨日の残り物を温めるだけだ。それほど時間はかからない。

「ナノハ。昼食はまだですね？」

「うん。ごめんね？」

「いつものことです」

ディアーチエ作の炒飯を温め、パーティの準備のついでに作っていたケーキも用意する。それらをテーブルに並べると、どこからかお腹の音があった。シユテルとなのはが揃ってシユウを見る。対するシユウは一瞬だけ無然とした表情を浮かべ、

「失礼な！ まるで僕の腹の音みたいに！」

そして目を逸らした。

「僕だけど……」

シユテルが吐息を漏らし、なのはは笑う。シユウも恥ずかしそうに頭をかいた。全員がテーブルにつき、手を合わせる。いただきます、と言って食べ始めた。

「うん！ 美味しい！」

「それは良かったです。ディアーチエに伝えておきます」

なのはの素直な感想を受け、シユテルが我が事のように喜ぶ。二人の様子を見守っているシユウも嬉しそうな笑顔だ。

「さて、ナノハ。予定より早い時間ですが、何かありましたか？」

シユテルが聞いて、なのはが首を振る。

「特に何も。ただ今日と明日は休みをもらえたから、せつかくだからシユテルたちを手伝おうかなって」

「そうですか。気にしなくても良かったのですが……」

言いながら、シユテルは少し考える。計画通りに準備は進んでいるので余裕はあるが、せつかくの厚意を無下にするともないだろう。この後も順調に進むとは限らない。そこまで考えて、シユテルはなにはへと向き直った。

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えさせていただきます」

シユテルがそう言うと、なのはは安堵のため息をついて笑顔になった。

Side: Hero

昼食後、シユウは食後のコーヒーを飲みながら、のんびりとくつろいでいた。本来なら自分も今日は準備を手伝う予定だったが、シユテルたちから必要ないと言われていた。気を遣わせてしまったという自覚はあるが、体力的にも限界だったので甘えさせてもらった。

ぼんやりしていると、喫茶店の扉が開かれる。最初に帰ってきたのはレヴィだ。

「たっだいまー!」

レヴィの元気な声に、シユウは笑いながら、おかえりと返す。レヴィは嬉しそうにしながら、店の奥へと駆けていった。

レヴィと一緒に入ってきた人物にも片手を上げる。フェイトは少しばかり困惑していたようだったが、シユウの挨拶を受けてこちらへと歩いてきた。

「こんにちは、シユウ。お邪魔します」

シユウの側に腰掛けるフェイト。レヴィから聞いたのか、すぐになのはが戻ってきた。その手には、コーヒーが満たされたカップが二つ。なのははフェイトに笑いかけると、彼女の前にカップの一つを置いた。もう一つはシユウの前。お代わりらしい。

「なのは、やっぱり……」

「うん。ちよつとお手伝い」

なのはが照れたように言つて、フェイトが納得したように、やっぱり、と笑つた。コーヒーに口をつけて、一息つく。

「私もこれを飲み終えたら手伝うよ」

「いいの？　ありがとう」

その後、フェイトはすぐに飲み終わり、手伝いへと行つてしまつた。

再び一人残されるシユウ。コーヒーを飲みながら、次の来客を待つ。

しばらくして、ディアーチェとユーリが戻つてきた。奥から聞こえてくる声が四人分なので少し訝しんでいたようだったが、シユウからなのはとフェイトが来ていると聞くと、むしろ納得したようだった。

「我も仕上げをするとしようか」

「はい！　手伝います！」

ディアーチェとレヴィも奥へと消えて、シユウはまた一人残された。

一人残されてしまったシユウは、また一人で待つことになる。だが今回は、すぐに次の来客があつた。

「あ、お兄ちゃん」

声のした方を見てみると、車椅子に乗つた文花と、それを押すコウがいた。二人は

まっすぐにこちらへと向かつてくる。

「早かったね」

「うん。ちよつとだけ急いじやった」

照れたように笑う文花と、少しだけ疲れたような表情のコウ。シユウはそんな二人を見て、

「文花。あんまりコウにわがまま言いすぎたら、だめだよ？」

「あはは、分かつてるよ。あ、コウ。コーヒーお願い」

この妹様は人の話を聞いているのだろうか。シユウが思わず苦笑する前で、了解と言いながらコウが厨房へと向かう。コウがシユウの隣を通る時に、シユウは小さな声で謝罪した。

「ごめん。わがままな妹で」

「まあ、いつものことやし、遠慮されるよかましや」

だから気にするな、とコウは笑いながら手を振って、厨房へと向かつていった。

コウが戻ってきた後は三人で思い出話に花を咲かせる。幼少の頃や、これまでのこと。色々とあつたが、今となつてはいい思い出だ。そうして話している間に準備はほとんど終わったらしく、シユテルたちが戻ってきた。テーブルを繋げて、簡易的な長テーブルを作る。そして運ばれてくる料理の数々。シユテルたちが並べている間に、

「遅くなったけど、間に合うたかな？」

はやても到着。一応私服には着替えているが、その表情は疲労が色濃く見える。それでもなのはたちが手伝っているのを見て、はやては荷物を置くとそれに合流した。

料理を並び終え、全員が席に着いた。今ここにいるのは、幼なじみとも言える気の置けないメンバーだけだ。

「簡易的なものですけど、結界も張りました」

結界の担当はユーリだ。音漏れを防ぐためだけが目的で、これで遠慮無くどんな話題でも出すことができる。

「それじゃあ……。何度目かは忘れたけど。集まってくれてありがとう。今日はゆっくりして行ってね」

シユウがそう言つて、ジュースで満たされたグラスを持つ。全員が自分のグラスを持って、

「乾杯！」

シユウの言葉を、全員が繰り返した。

この集まりは、幼なじみ全員にこの店を見つけられてからは、定期的に開かれている。特に大した意味はなく、今までの報告の場のようなものだ。いつの間にかなのはたちの所属が変わっていたり、文花の魔導師ランクが上がっていたりと、開くたびに誰かが話

題を提供してくれる。シユウの密かな楽しみだ。

一時間ほど、シユウはなのはや文花たちの話を聞いていた。はやてがもうすぐ部隊長になるらしい。起動六課、というそうだ。これから発足する部隊で、今後はそれ関係の仕事で忙しくなるらしく、集まりには参加できない可能性が高くなるとのことだった。

なのはたちも同じ部隊になるらしく、やはり忙しくなるそうだ。

「そっか、ちよつと寂しくなるね。この集まり、楽しみにしてたんだけど」

シユウが寂しげに言うと、なのはたちは驚いた顔をして、すぐに慌てたように言った。「ずっと忙しいってわけでもないから。だからまた、みんなで集まろう?」

「うん。その時はみんなの後輩も紹介してね」

「もちろん」

一時間ほど話をしたところで、シユウは断りを入れて席を離れた。玄関から表に出て、夜の少し冷たい空気を吸い込む。夜風が心地よい。

シユウは携帯電話を取り出すと、番号を押して耳に当てた。三度ほどのコールの後、相手が電話に出る。

「シユウか。どうかしたかい?」

父親のケインだ。少し緊張しているような気配が伝わってくる。シユウは少し苦笑しつつも、口を開いた。

「特に用事はないんだけどね。久しぶりに話でもしておこうかなって」

「珍しいな……。少し待ってくれ」

ケインのその言葉の後、何度かボタンが押される音が聞こえる。シユウが言われた通りに待っていると、今度は母のさくらの声が聞こえてきた。二人ともが話せる状態にしたらしい。

「シユウ。元気？」

「元気だよ。文花とコウも元気。二人ともうまくやつてるみたい」

「ふむ、そうか。……コウには今度帰ってくるように言っておきなさい。もう一度殴らせろと」

またケインの声だ。その声にはわずかながら険が混じる。

「一応コウも義理とはいえ息子なのに？ でも分かった。言っておく。僕の方もよろしく」

「ああ、任せろ」

シユウが意地の悪い笑顔を浮かべ、ケインも低い声で笑う。二人そろって低い笑い声だ。さくらが呆れたようにため息をついている。シユテルがここにいれば、さくらと同じようにやはり呆れたことだろう。未だわだかまりがあるとはいえ、文花に対する過保護はシユウもケインも似たり寄ったりだ。



ひとしきり笑った後で、シユウは一度咳払いをした。ケインとさくららが居住まいを正す気配が伝わってくる。

「昨日、ちよつと夢を見たんだ」

シユウの突然の話に、二人が首を傾げたようだ。シユウが続ける。

「ギフテッドとしての僕が、父さんと母さんの願いを叶える夢だった」

多分夢というよりは記憶、とシユウが告げると、二人が息を呑む。構わずにシユウは続ける。

「あの時の僕は、純粹に父さんと母さんの願いを叶えようとしていたみたいだよ」

あの時は二人の笑顔を望んでいたはずだ。それなのに今となつては、二人とは顔を合わせることすら少なくなっている。シユウはそれを、少しだけ申し訳なく思っていた。シユウがそう思っていることを察したのだろう、ケインとさくらが苦笑した。

「シユウ」

ケインの声。シユウがなに、と返す。

「私たちは許されなかったことをした。だからシユウが気に病むことはないよ」

「そうよ。それにね、私たちは、シユウと文花が幸せにしていればそれで満足だから」

シユウは少し目を見開き、やがて、そっか、と目を細めた。どこの世界でも、親は子の幸せを願うものらしい。自分にもいつか、分かる時がくるだろうか。

「今度、店に来てよ。歓迎するから」

二人が驚く気配が伝わり、シユウは、そう言えば二人を招待したことはなかったと思ひ出した。出入り禁止にしたわけではなかったが、二人も遠慮していたのだろう。

ケインとさくらが嬉しそうに、

「ああ、近いうちに寄らせてもらおうよ」

シユウは、待つてるよと柔らかに微笑んだ。

電話を切つて、小さくため息をつく。少し体が冷えてしまっているが、すぐに戻る気にはなれなかった。もう少しだけここにしよう、そう思っていると、頬に温かいものが触れた。驚いて振り返る。シユテルが湯気の立つカップを持っていた。

どうぞ、と差し出されたカップを受け取る。ホットミルクだった。

「ご両親、ですか」

「うん。今度、店に来てつて言つておいた」

「そうですか」

感情のこもつていない声だ。シユウがシユテルの表情を盗み見ると、それでも少し柔らかない雰囲気を感じる事ができた。シユテルもシユウと両親の関係については何か思うところがあつたのは知つている。心配をかけていることも。これで少しぐらひは安心してもらえただろうか。

シユテルがシユウの隣に立つ。けれど何も言わず、ただそこにいるだけだ。それがとてもありがたい。シユウは頬を緩ませ、しかしやはりシユウも何も言わず、静かな時間を二人で過ごす。

夜空を見る。地球のものとは少し違う夜空だ。

ふと、シユウは思う。パストは、どう思っているだろう、と。かつての自分が叶えようとした願いを他でもないシユウ自身が捨てている。今の現状を、どう思っているのだろうか。

「シユウ、どうかしましたか?」

不安になったことが表情に出ていたのか、シユテルが気遣わしげに聞いてくる。シユウは隠すことでもないので、夢のことから両親との会話、そしてパストがどう思っているのかという不安の全てを話した。

聞き終えたシユテルは、少し考えるような素振りを見せた後、

「大丈夫だと思えますよ」

「そう、かな?」

「はい。パストは貴方にギフテッドとしての生を望んでいるわけではないはずです。貴方の幸福を誰よりも願っているのは、おそらくですが他でもないパストですから」

パストと直接顔を合わせたからこそその言葉なのだろう。シユウはそれを、自然と受け

取ることができた。安堵に息を吐き、薄く微笑む。それならいいかな、と小さな声で言う。シユテルは頷いただけでそれ以上は何も言わなかった。

「幸福、かあ……。僕にとつては、今の生活で十分だけどね」

「そうですか？」

「うん。たまにちよつとした刺激があるけど、それも含めて、ね」

喫茶店で静かに平和に過ごす。シユウは今の生活を気に入っているし、満喫している。だが時折だが、シユテルたちの囑託魔導師の仕事関係やなのはたちの管理局絡みのことなど、ちよつとした事件に巻き込まれることもある。それでも、それらを含めて、シユウは今が十分過ぎるほど幸せだと感じている。

「それに、シユテルが側にいてくれるしね」

そんなことを言つてだらしない笑みを浮かべる。シユテルはわずかに目を見開き、すぐに顔を逸らした。そんな反応も可愛いなと思つてしていると、

「平然とそんなことを言わないでください……」

シユテルの小さな声。そんな返し方をされたのは初めてだったので、これにはシユウが驚いた。

「で、でも嘘じゃないよ？ 本当だからね？」

「そう分かっているからこそ、ですよ。私もそれなりに、恥ずかしいとは思いますが」

ほのかに頬を朱に染めての言葉。シユウが完全に凍り付いていると、シユテルは一度だけ咳払いをした。忘れてください、と店内へと戻ろうとして。そんなシユテルの手を、シユウは反射的に掴んでいた。

「何でしょうか？」

「えっと、その……」

しばしの逡巡の後、思い切って言う。

「ぎゅっとして、いい？」

「……………」

完全な無言。シユテルの冷めた目が心に痛い。何でもないです、と言おうとして。

「いいですよ」

そっと、シユテルが両手を広げる。まさか許可が下りるとも思っていなかったので再び固まり、だがすぐにシユテルの気が変わる前に、彼女の体を抱きしめた。

ぎゅっ。

「えへへ……」

シユウが幸せそうに笑い、

「……………」

その反応を聞いたからか、シユテルも少しだけ恥ずかしそうにしながらも微笑んだ。

「シユテル」

「はい」

「好きだよ。大好き」

「ですから……。そういうことを平然と言わないでください……」

どうしようかな、といたずらっぽく笑い、シユテルが小さくため息をつく。シユテルが体を離そうとするので、逃がすまいとさらに強く抱きしめた。

「あ、あの……。シユウ……？」

シユテルには珍しく、困惑と恥じらいを多分ににじませた声。

「もうちよつと」

「仕方がありませんね……」

シユテルも抱きしめ返してくれる。それがとても嬉しくて、心地よい。

「私も、貴方のことが好きですよ」

そんなことを耳元で囁いてくる。シユウが嬉しくも恥ずかしさで顔を赤くすると、言った張本人であるシユテルも真つ赤になっていた。

そんなシユテルと目が合い、しばらく見つめ合い。

そして、どちらからともなく、そつと唇を合わせた。

ギフテッドは願いを叶え、特別な贈り物を多くの人々に与えてきた。それは、シユウにとつても同じことだ。

シユウの願いは叶えられ、シユテルたちという特別な贈り物を得た。

今の自分は、誰よりも幸福の中にいると思える。

シユテルの温もりを確かめながら、シユウはそんなことを思っていた。

絶対に、この温もりを手放さない。

そう心に誓いながら。